

闊歩するは天使

四ヶ谷波浪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

誰もが天使だと認める姿の少年は本物の守護天使だった。清く、慈悲深く、人間のこゝとをあいし、護る姿はまさしく理想の天使さま。その柔らかな物腰の少年の心は……ある人間の少女にべたぼれであった。

ラスボスをぶん殴る原作沿い。

※この勘違いモノは「偶然」で勘違いされる勘違いものではなく、「外見」と「内面」のギャップを勘違いの焦点と置いている話です。

ピックアップでも同じものを連載しています。あちらでは章ごとに投稿していますので

こちらが先行投稿です。

目次

天使編

1 話 大胆不敵

2 話 非理解

3 話 喜劇

ウオル口編

4 話 序

5 話 崇拜

6 話 急加速

7 話 豪胆不敵

8 話 急先鋒

9 話 哀悼

10 話 翼

1

7

14

21

31

43

50

57

64

73

1 話 遺跡

1 2 話 切迫感

1 3 話 日進月歩

1 4 話 懐古心

1 5 話 決断

1 6 話 始

閑話 幼気

セントシユタイン編

1 7 話 再出発

1 8 話 到着早速

1 9 話 不嘔吐

2 0 話 狂信

2 1 話 試

83

89

97

105

111

119

127

134

141

148

157

165

	2 2 話	待機	172
	2 3 話	黒騎士	178
	閑話	翼落天使	186
	ルディアノ編		
	2 4 話	廃墟城	192
	2 5 話	対峙	198
	閑話	死	205
	2 6 話	魔女	210
	2 7 話	紫転機	215
	2 8 話	貧血気味	222
	閑話	呼込中	229
	2 9 話	停止	235
	ベクセリア編		
	3 0 話	澱	243
	3 1 話	考察	250
	3 2 話	天使達	258
	3 3 話	悲哀厄災	268
	3 4 話	手遅病	275
	閑話	原点	282
	3 5 話	転	289
	3 6 話	帰還	296
	ドラマ編		
	3 7 話	帰郷前	303
	3 8 話	擦違天使	310
	3 9 話	涙天使	318
	4 0 話	啓示	326

閑話 導業	428
51話 奪	419
50話 愚計	410
49話 浅知恵	403
48話 雛鳥親鳥	392
47話 墮落浜	384
ツオ編	
46話 鮮血	375
45話 叱	368
44話 変貌	361
43話 信仰心	353
42話 不願	344
41話 白	332

サンマロウ編	
60話 像	527
59話 脅威	519
58話 彫刻町	509
57話 似非人間	500
56話 茶転機	492
55話 誤解	486
54話 霊	476
53話 船便	469
船着き場〜カラコタ橋〜石の町編	
52話 魂父子	461
閑話 天界日常	449
閑話 子天使	437

6 9 話	傷	643
グビアナ編		
閑話	休息	635
閑話	祝福呪	616
6 8 話	順風満帆	607
6 7 話	宿靈魂	599
6 6 話	相違	591
6 5 話	進	583
6 4 話	訪問	574
閑話	慕師弟	564
6 3 話	山雨風楼	556
6 2 話	偽友人	545
6 1 話	不安	536

7 8 話	和解	777
7 7 話	恋	769
7 6 話	懇願	761
閑話	成天使	749
7 5 話	遠水近火	741
7 4 話	無理解	729
7 3 話	捕獲	721
7 2 話	騎	712
閑話	擦違	703
閑話	幼天使	681
7 1 話	加虐趣味	673
7 0 話	聖騎士	663
閑話	汚濁	651

79話 過凶行

カルバド編

80話 流星天使

81話 確率論

82話 靴下

83話 奇

84話 演技

85話 希望的

86話 疑惑確信

87話 鎮魂歌

88話 作戦

785

792

801

810

818

826

832

840

848

857

天使編

1話 大胆不敵

知る人ぞ知る、星空の守り人。そう謳われる存在はかつて……天使と呼ばれていた。姿は人には見えず、影でこっそりと人々を助け、そして悲願を期して星空に帰っていった……それが天使。

しかし中にはその身を人間として現世に残り、今度は人間達と力を合わせて世界の安寧をもたらした天使……人物がいるという。噂にはイザヤールという名前がよく挙がるが。

イザヤール本人にもし問うことが出来ればそれは違うと言われることだろう。真の守り人とは……灰色の天使と呼ばれた存在だと。そして彼は今日も愛しき人を守り、世界を守り、人の身になってもなお……自分と違って……最初から最期まで心を天使であり続ける。そういう存在なのだと言われてしまう。

そしてもしも貴方が幸運で、灰色の天使と出会うことが出来たなら。貴方は間違いない。天使の存在を疑うことがなくなるだろう。灰色の天使の麗しき瞳にその身を映すことを恥じるかもしれない。

天使と紛う、ではなく本物の天使。黒い瞳には慈愛が、唇には愛が、その手には劍が。天使故に性別なんてわかりそうもないが、彼でもかつては人を愛したらしい。それでもなお今は平等に愛を与え、時折見せる悲愴すらも美しさのスパイスであり、彼の前ではかの墮天使すら我を忘れた、とまで言われている。

彼の手には女神の言葉を綴ったとされる古い時代の手記があり、敬虔なる下僕である彼はその言葉に従って今日も劍を振るい、かつての師と秩序を守るのであった。

彼の名前はアーミアス。天使であると一度も公言したことのない、だが誰もが彼の正体を疑わなかったという……英雄であり、守り人である。

そして天使の身でありながらある人を愛した……そんな存在である。

……

「……」

仏頂面で空を飛ぶ、俺。我ながら背中に翼、頭に光輪がなかったら到底天使に見えないだろうと思ってる。髪の毛なんてホコリみたいな色だぜ、笑つちまう。いつそ師匠みたいにハゲにするのもテかもしれないが、それをやったら今度はこのブサイクが露見するのでやってない。

脳内リツカたんべろべろしてて

なにしろ忙しなくて睡眠不足だからな。隈もできれば目つきも最悪、唇もガサガサだぜ。この天使フェイスが台無し……って前から顔面蒼白って感じのブスマンだが。

シシヨー！ 眉毛太い男前分けてくれ——っ！ ……天使だから性別なんて気にするなつて言われそうだな。クソツタレ。

たしかにその通りだが。なにしろナニがあらうとナニができない生物として失格、遺伝子を残すという意味ではウイルスにも劣るのが天使だからな！ 人間大好きな俺は泣いた。俺も人間になりてえ！ 人間の中で人間と過ごしたい！ そしたらフラれるかもしれないがリツカたんに愛を叫べるし、何より存在を認めてもらえる！

人間になつたらあれだろ、天使としての嗜みとやらで清らかたれと微笑みを浮かべて手を広げる宗教から抜けられるんだろやつてらんねえーッ！ 人助けは崇高なもんじゃねえよ、やりたくてやつて感謝見返り求めんなつての！ ちなみに俺は星のオーラと友達だけど？ 人間好きだからな、気づいたら星のオーラが頭に刺さつてんだぜ、それぐらいがプロだぜ。

あ——人間になつたら結婚しよ、天使の悲願つて人間になることだから、少なくとも俺は！ 麗しのリツカたん……たぶん歳は百歳ぐらい下……みたいな可愛い天使っ子と結婚して子供三人の幼い頃の夢は、去年師匠が赤ん坊天使抱えてた時点で潰つぶえたからな。

おっ隠し子ですかつて聞こうとしたら新たな天使が神より遣わされた、だと。木の下に置き去りつてまじかよ！

神様マジ適当だなおい！ 二人いたら双子とかほんと適当だな！ つまり師匠は俺の兄貴かよまじねえーわ！ ハゲが伝染るわ！

つうことは俺のブサイクは誰を恨めばいいんだチクシヨウ！ 同世代天使が皆顔逸らすレベル！ おんにやのこはみーんな俺と話したがないし野郎どもは色白つてだけで女扱い軟弱扱い。おいおいテメーのほうが天使らしい金髪蒼眼天パだろうがチクシヨ————ッ！ 性別不詳野郎め。あん？ 俺に言われたくない？ ハッ黙れ。モヤシは自覚してるからな！

あ——、憤りが止まらねえ。もうこのアーミアス様が全力でリツカたんペロリストになって星のオーラガンガン貢がせるしかねーわ。貢がせるけど俺が一生幸せに平穩にしてもらうしかねーわ。リツカたんまじ天使に敬虔、俺がそれでも馬鹿にはされないのは星のオーラ回収率の高さだろうな、頭が下がる！

おっと——？ リツカたんとジジイが魔物に襲われそうだけけしからん！ 俺がスライムときゆうりごとき滅してやらア、天罰食らえや！ リツカたんにタツチするとか絶対許さん！

「守護天使アーミアスよ、ひとりりで挑もうとするなっ！」

「ですが師匠、村人が……ッ」

ええい邪魔するなハゲ！ リツカたんに何かあつたら俺もう癒しがなくなつて死ん

じまう！ 青いおかつぱの天使ぞ？ 彼女こそ天使ぞ？ 天使界にはラフェットさんみたいな母性の塊みたいないいおつぱいな方はいらっしやるけど見た目同世代の健全系女子はいねえだろ師匠マジ見る目ねえな!!! へへ……母性のお零れとして頑張ったわねと抱きしめてもらった時のふにつは忘れない。

え、違う？ ふたりに倒せばいいって？ ヘッ、リツカたんを守るのは俺だけで十分！ ……じゃないですありがたいとうございます師匠。実はさつきも村人守つて魔物と戦つてたらきゆうりに脇腹刺されて割と血が止まらないっていう。天使なのに失血死とか笑えねえ——ッ！ リツカたん守つたら天使界で光あれエ！ してもらおつかな。あれ肩こりに効くんだよな。

いざゆかん！

あつ今の俺の表情痛みをこらえて立ち向かうっていう男前じゃね？

スライムとヘチマをぶつ倒したらリツカたんから星のオーラをゲット。そんな気はなかつたが棚ボタだよな、これ。あ——、綺麗だ。リツカたんの清浄な心が伝わつてきてもつと守らなきゃって思えるな。ふふん、俺はウォルロ村の住人はニートでも守る天使様だからな、もつとキリキリ頑張るか！

……って師匠？ 俺ひつつかんでどこいくんですか師匠——ッ？ このハゲ触んなセクハラア——ッ！

光あれではなくハゲ師匠のホイミでがつつり治されて説教バリバリとかマジないわー……。俺そんな時間があったらウォルロでお婆ちゃん荷物をもとなく軽くしたいんだが！ あのお婆ちゃん子供のととき可愛かったよな、リツカさんの次ぐらいに！

2話 非理解

ふふん、聞いてくれ。さつきもウオル口村に行つて人間たちの幸せな生活を少しばかり覗かせてもらいながらちよこちよこ手伝いしてたんだがな、とうとう俺は偉業を成し遂げたぜエ!

今までは出来るつてもだいたい生きてる人間に対しての地味な手伝いとか失せ物探しばかりだったんだが、この度俺は一人成仏させました——ッ! フウ! 天使らしくね? いくら万年顔面蒼白ホコリ野郎でも天使じゃね? 純白の翼と儂げな雰囲気は……つてやかましいわ! 儂げじゃなくてこれは天使共と話すのがだるいから話しかけんオラなオーラだ!

あいつら天使らしすぎな。もう少し欲望に生きてもいいと思うんだが。あ、でもこれ禁句だから言ったら天使界的に殺されつぞ? 二度と人間界に行けない可能性が高いぜ。何故かつてまあ……俺いろいろやらかしてゐるからなあ。そのひとつ、俺の黒歴史を説明しよう!

俺の年齢なんてもう数えてないから分かりやしないんだが、あれは確か……初めて人間になりたいと思つた時だな。だから年齢一桁か二桁の天使生初っ端だな。

あの時……俺は初めてイザヤール師匠と出会ったんだ。俺は感動したね、天使もムキになれるって初めて知ったしな。なによりハゲでも天使なんだなっていうのも感動モノだ。天使に姿の決まりはない、くすんだ色の俺でも天使でいいんだって。しかも上級天使で弟子を取らないことで名高い癖に俺を一目見て弟子にすると決めただと。だがそんなことよりも感動したのは……。

『……』がウオル口村。私の守護する村だ。アーミアス、お前はこの者達のひ孫ぐらいを見守ることになる』

初めて見た人間たちだったね。ああ感動したね、天使界に目をキラキラさせている存在がない訳じゃないが、生き生きと心の純朴さを彼らは魅せてくれたからな。それから俺は天使と人間の違いを天使界で師匠を質問攻めにして知ったんだぜ？ 勤勉だろうか？ 熱心だろ？ 今は俺の方が詳しいかもな。なにしろ俺は天使界一の人間好きだからな！

師匠曰く、天使と人間の外見的な違いは翼と光輪があるかないか。心は生の営みを大切にするか、女神のご意思を尊重するかの違いで何よりも違うのは寿命だと。人間に姿が見えないのは光輪による力かもしれないとか偉そうに言ってたが。

でもってそのジャマな光輪をブチ壊したくても手がスカスカ通り過ぎるから触れもしねえ。なら翼はどうだ？ って思ってた。ああ、若気の至りだよ。今では俺も馬鹿な

ことを考えたもんだよなって思うんだが。翼がなきや愛しの人間達に会うことも出来ないのに、俺はあの夜……師匠の部屋からナイフかなにかを拝借して思いつきり左翼をちぎろうとしたんだよな。

めちやくちや痛かったが、人間になれるんなら今でも安いと思うぜ？ だが血はぼたぼた垂れるわ、目の前は霞んでくるわで最悪だったな。なかなか根本からぶち切ることが出来ねえって足りない頭で理解した俺は今度はむしろとした。そんでちよつとブチブチしたぐらいで貧血でぶつ倒れ、気づいたら師匠のおっそろしいハゲが目の前でピカピカしてたってわけだ。

『見習い天使アーミアス！ お前は一体何をしようとしたのかね？』

穏やかなって言い難い師匠の低い声がすっげー怖かったのは覚えてる。近くに他の上級天使も控えてて暇なんだろうって思ったな、確か。だが人間になりたいとか言ってみろ、閉鎖的な天使界で監禁か軟禁されて二度と人間に会えなくなったらどうする。俺ならリツカたん不足で枯死だな。

ってことを当時リツカたんのひいひいひい婆さんじゃねえかって思ってる故ナツミたんにあわーい恋心を抱いていた俺は瞬時に考えた。天才じゃねえーかと思うんだが、師匠のでっかくてわさわさした翼が綺麗だったから自分のはどうなってるのか見てみたかったとかまた生えてくるものだと思つたとか言つて難を逃れたって訳だ。

ま、信じてもらえなかったがお咎めはナシって訳。チョロすぎ。天使ってそういうところ天使だから騙されるんじゃないやね、簡単によ。

そのせいで左翼は未だにボロボロ。飛べるからいいんだがな。背中にもナイフの跡が残ってるが厨二病の名残だと思つてなるべく見ないことで心の傷を刺激しないようにしている。やるなら人間界で空の彼方から大岩に背中をぶつけてすり潰しとくんだつたな。それじゃあ光輪が消えないからやらないが。飛べなくて見えないとか最悪じゃねえか。

光輪が消えるならなんだつていいよな。ほんと、握りつぶせるものなら潰してえ。潰して翼をもいだら旅人のふりしてリツカたんの宿屋に泊まりてえ。俺、今日もリツカたんに迫る仕事しないニードとかいうニードに天罰食らわせながらリツカた人をずっと見てるのに、リツカたんは俺に気づかないんだぜ。辛すぎ。

俺もニートみたいにリツカたんに名前呼ばれてえな！ でもな、守護天使でよかつたぜ。リツカたんは俺の名前だけは知ってるんだからな。

ほら、リツカたんが手を組みながら「守護天使アーミアス様」って言うだろ？ 俺大興奮。リツカたんの唇と閉じられた目元ガン見しながら顔がにやけてるの抑えられねえんだが、仕方ないだろ？

さーて。このリツカたんの家の三軒隣の主人のひいじいさんからもらった星のオー

ラとリツカたんからの三つ、その他十ぐらいを捧げるとするか。あつ師匠チワーツス。今日も見習い天使のちっせえ翼じゃ帰れない天使界に風の補助してください！ あざっす！

「……ウオル口村の守護天使アーミアス」

「はい？」

「……ふむ、長いな。これからもアーミアスと呼ばせてもらおうとしよう」

「はい、師匠」

なんかこのハゲ別のこと言いたかつたんじゃね？　なんで口籠もつて別の事言ったんだ？　つてか師匠真面目だよな、ホント。そろそろ帰ること以外はひとり出来るのにまだ見守ってる。やっぱり守護天使だったから見守るのが癖になつてんじゃね？　これが職業病かよ、クウ——ツ、師匠のくせにかっこいいじゃねえか！

……

「リツカ……」

風に揺れる髪をそのままに、今日も我が弟子アーミアスは精力的に守護天使の役割を果たしていた。なんと誰の力を借りずに成仏までさせてしまうとは、本格的な独り立ちや見習いでなくなる日も近いことだろう。

この、人間に恋慕を抱えていることさえなければ。

リツカというのは宿屋の娘、真面目かつ敬虔な良い娘だ。今日もそれは変わらない。だから普通の村人よりも私情を挟み、気になるぐらいはまだ許容できた。もちろんアミアスが抱いていながら自覚していない感情はその程度ではないらしく、今日も村人を一通り見やつてから彼女の仕事場の近くでそわそわと落ち着きがない。

アミアスは百二十七年前、自分の翼を切り落とそうとしたことで天使界では有名だ。今なおその傷跡は深く、ボロボロの翼は人目を引く。だがあの再来がないことからまあ大丈夫だろうとオムイ長老からのお言葉を頂き、見逃しているのだが。

普段表情を変えようともしないアミアスはリツカの前だけでは笑う。どんな天使よりも天使らしい相貌に相まって絵画のような空間となっている。キューピットとしての役割を奇しくも果たすことならまだあるのが天使。だが本人がそうなるとは……そこまで考えて思い出されるのは我が師匠のことだろう。

アミアスは聡明だ。天使として人間を見守り、助ける姿に打算はない。どうやってそんなに星のオーラを集められるのかと訪ねた子供の天使に対しても、やりたいことをやっているだけだと答えていたことから良く分かる。

だから、彼が天使として間違つた道を歩まないように私も見守るだけだ。

……ほぼ毎回天使を馬鹿にする若者の頭を一発殴っていくことぐらいしか見習いらしいところがないのは困つたものだが。

「リツカ、また会いましょう」

リツカが祖父に笑いかけた笑顔に向かってアーミアスは言う。勿論私たちの姿を認識できない彼女は何事も無かったように生きている。アーミアスはそれを全く気にせず、に笑いかけて、彼女からの星のオーラをぎゅっと握るのを私だけは知っていた。

「師匠、帰りましょう」

「ああ」

翼をはためかせるアーミアスを見るのはそれで最後になるとは私は思いもしなかったのだ。そして翼も光輪も失って一人人間界に投げ出されたアーミアスのことをほかの天使は気の毒がった。だが、私は、私と長老とラフェットは……アーミアスが夢を叶えたことを、知っていたから……。

知っていたからこそ、天使でいるよりもさらに天使らしく人々の安寧を守る姿に安心して、私は一度死んだのだろうか。

3話 喜劇

……

ああ戻られた。今天使界に降り立った二人の天使は長老に次ぐ有名人物であられる。一際目立つ大きな翼を持つのが上級天使イザヤール様。その実力は素晴らしいと姿しか見たことがない私でも、ひしひしと伝わってくる天使の力によってはつきりとわかるのです。長老オムイ様以外はイザヤール様に理を使うことすらできないようなお方です。

もう一人はその弟子、ウォル口村の守護天使アーミアス様です。まだ私と同じく見習いの身ですが、実力は確かです。星のオーラを数百と集め、その美しい顔には天使から見ても天使らしく、神々しいとしか言えません。長い睫毛の一本一本を神がその手で吟味されお創りになられたに違いないのです。

時折憂いに満ちた表情をされますが、それはもう絵画よりも美しい世界ですよ、お見せしたいぐらいです。笑うことすらありませんが人間を見守っている時には微笑まれます。正しく天使、天使となるべく天より遣わされた存在と評判です。

今日も彼女、いえ彼でしたっけ……天使らしさは性別不詳という状況ですが、体の周

りに星のオーラを纏わせ、翼を小さく折りたたんで歩かれる姿は見習い天使の希望の星ですね。アーミアス様のようになりたいと願う天使は多いのです。早く師匠の守護する場所の守護天使になりたい者が多い見習い天使ですが、見事信頼を勝ち取り、実力をつけたのは、最近ではアーミアス様しかいらつしやいません。

それからこれは皆様思っていることですが、あの雪のような白い肌も桜色の唇も黒曜石のような瞳もすべて完成されきっているのにその左の翼だけは大きな傷跡が目立ち、ボロボロになっている……しかもそれをしたのがアーミアス様自身である、という噂がアーミアス様の神秘性を際立たせているのです。その傷は背中にまで及んでいるとか。

その事件は私が生まれる前のことでしたから、噂でしか知らないのです。諸説ありまして、勿論、私のような存在や噂好きの見習い天使ごとき、とてもとてもご本人に聞くことなんかできませんからどれが本当かわかりません。

けれど、噂はいっぱいありますよ。私の生まれた三日後^{道わされた}に天より遣わされたミツチエルなんてアーミアス様が自分の翼がなくても飛べると確信なさったからだとして強く主張していますし、私は実は彼の翼は彼によって痛めつけられたのではなく悪しき存在との戦いか誰かを守るために傷ついたものだと思っています。アーミアス様なら新たな翼が生えてくるだろうと言った姉妹弟子ルリの言葉には賛成しますけどね。

だいたいそういう意見と翼を捨てるという決断によって人間たちをもっと守ろうと

いう決意の表れだったという話が多いですね。いずれにせよ、私たちには伺い知れないような深い理由があったのでは、と。

だから、分らないなりにあの翼はまるで勲章のように見習い天使には思われています。もつともアーミアス様自身は翼自体を疎まれているとこのことで飛ぶ時以外は折りたたんでいらつしやいます。

おそらく、天使は空を飛びますから天使界でなければ歩きもしません。そのことが人間を誰よりも慈しんでいらつしやるアーミアス様には人間の気持ちになつて親身ではないとお考えなのでしょう。例えいくらその身を呈して人間たちを守つても存在すら信じられない時があるとしても、なんと素晴らしい方なのか。

ああ、アーミアス様が私の前を通り過ぎました。しかもふわわりと羽根が一枚抜けて目の前に落ちました。天使の羽根が一枚抜けるなんて髪の毛が抜けるぐらい普通のことです。でも私たち見習い天使にとっては、上級天使様やアーミアス様の羽根に価値があるのです。

ふふ、私のものですよ、これ。ああやつぱり……今年三枚目のこの羽根もふわふわしてて私のものとは全然違います。アーミアス様の御髪おぐしはさらさらとしていらつしやいます。羽根はふわふわなんです。この羽根に肖あやかつて私も早く守護天使になりたいのでアーミアス様の羽根は大事にお守りにさせていただきますことにしましょう。

あつ……イヤール様の羽根も一枚落ちましたね。私はなんて幸運なんでしょう。これで羽飾りを作つてルリに自慢してやりましょう。

勿論、こういつた事は公然のことですよ。髪の毛でこれをやったらちよつと気持ち悪いと思いますが……オムイ様の髪の毛でやったら特にお叱りを受けそうですが……羽飾りを作りたくて誰かの抜けた羽根を集めるなんて見習い天使はみんなやっています。自分の翼から羽根を筆り取るのが一番早いのは分かっているんですが、痛いですしね。それなら不要なもので有効活用したほうがいいだろうとの事で。

この前なんか女の上級天使様の羽根を拾っていたら首飾りにしていたアーミア様
の羽飾りを褒められたんですよ。師匠以外の上級天使様とお話するのはとても緊張
しましたが、そんなものなのです。

ああ、今日もアーミア様は女神像の如く……いえ、目の前で呼吸していらつしやる
んですから石像より遥かに美しかったです。私ももつと修行して人間界で善行を重ねれば
あんなふうになれるんでしょうか。

おふたりが去り、私は少し外の空気が吸いたくて外に出ました。間違つても師匠や翼
の大きい上級天使様なしに人間界にこんななんて思いませんが、踏み外したら大変なこ
とになりますね。強風が吹いたら注意することにしましょう……。

キヤツ

そう思った瞬間、強く一陣の風が駆け抜けました。何が起こったのか分からず、近くの天使の力を借りて立ち上がり、さらに空の高みを見つめると……あれは、金の光の筋。……ああ、もしかして、天使の悲願が叶うのですか？　なんて、神々しい。

アーミアス様の星のオーラが奇跡を生む……あなんてことでしょう。当たり前のことですが、やはり選ばれし方だったのでしょね。この羽根は神のところに行くんですからますますなくしちゃいけません。大事に懐に入れておきましょう。不思議な音とともに金の光が天使界に近づき……そして。

衝撃。

突如紫の邪悪な光に天使界は貫かれ、私は、なんとか落ちずには済んだものの……ええ、忘れられないものを見ることになりました。

ええ、件の^{くだん}、アーミアス様です。

強風に巻き上げられたらしく、外に出ていた何人かの天使がなす術もなく落ちていくのを、外で必死に男の天使と岩に捕まっていた私は目撃することになるのですが……その中に、アーミアス様がいらっしやったのを、私は見てしまったのです。

キラキラと天使の力を放出しながら輝き、しかし流石のアーミアス様でも邪悪な光の中では本来の力を発揮する事はできなかつたのでしよう。彼も落ちていきましました。ですが、彼の表情は、いつでも動かない岩のように、不変の事実のように変わらなかつた

表情は……微笑んでいたのです。

あの瞬間の時、アーミアス様の隣にいらつしやった憔悴しきつたイザヤール様が、後でこう仰られていました。

アーミアス様は人間を愛していたと。翼も光輪も彼には不要なものであつたのだと。だから、アーミアス様は助けようとしたイザヤール様の手を取ることもなく……落ちていったのかもしれないと。

ハツと思つてアーミアス様の抜け落ちた羽根を取り出してみればそれは彼の御髪と同じように灰色になつていて……それをイザヤール様にお見せしますと、少し目を見開かれ、少しだけ希望を取り戻したように……アーミアス様は生きていると仰られました。

そして、その羽根の色を見るに恐らくは天使の力の大半を失っている。

アーミアス様。どうかご無事で、アーミアス様。アーミアス様に翼がなくとも、光輪がなくとも、貴方は一番天使なのです。私たち見習い天使よりも、もしかしたら上級天使様よりも、天使として遣わされた天使なのです。

お慕い申し上げておりました。一度もお話することすら叶いませんでした。ですが、私は祈っております。アーミアス様のご無事と、貴方の幸せを。

ああ、あの日の微笑みを、アーミアス様は今も浮かべていらつしやるのでしょうか。

• ⋮ ⋮ ⋮
 ⋮ ⋮ ⋮
 ⋮ ⋮ ⋮
 ⋮ ⋮ ⋮

ウォル口編

4話 序

あの大地震の直後のこと。ウォル口の滝壺に「誰か」が落ちてきたのを私は目撃した。盛大な水しぶきのあと、荒れ狂った水が落ち着いてくる時、岸になんとか流れ着いてぐったりとした人影が私には見えただ。それを見て近づくな、なんて誰かが言う。関係ない、あの人、怪我してるみたいじゃない！

止めるニードを振り切り近寄れば、その顔は髪の毛に隠れて見えなかったけれど、かすかに肩が上下しているのを見て生きてるって確信した。

なんとかその腕をつかみ、水から引き上げて、その華奢な人の顔を、確認する……と。
「……天使様……？」

痛みで苦悶に満ちた表情。ずたずたに裂けた肌。それでもその人……ううん、その天使様の美しさは少しも損なわれていなくて。その呼吸が早く浅いと気づいた時にはもう、周りの人達は天使様に釘付けだった。誰も動けないくらい魅了されていた、みたいで。

「なにみんな突っ立ってるの！ 天使様、怪我してるんだよ！ 誰か手伝ってッ！」

あの大地震ではこの村も結構酷い被害を受けたんだよ。あちこちいろんなものが落ちてきて瓦礫が崩れ落ちたり、セントシユタイン城へ向かう道は瓦礫によつて塞がれてしまつたり。村の入口のアーチだつて傾いていたらしいし。雷の音もすごかつた。

でも私たちの村で起こつた一番大きい事はそんな、なんとかなる事じゃないと思う。あの日、地震と同時に滝壺に落ちてきた、灰色の髪の毛の天使様。神父様によると見た目以上で酷い怪我を負つていて、背中では傷がないところを探すが難しかつたし、全身くまなく傷だらけだし、手足も、骨が折れていないのが不思議だつたほどのダメージだらしい。

何よりも私たちは、滝壺で倒れていた彼……だよね……を見た時、本当に、本当にびっくりしたんだ。私たち、天使様だつてすぐ分かつたから。その顔は想像よりもさらに整つていて、性別なんて見ただけじゃ分からなくて……怪我を確かめる時に男の人だつてわかつた……肌は白くて、消えてしまふそうなくらい儂い。

天使様だと知らせるみたいにキラキラと、彼の周りには光の粒子が集まつていたけど

それはすぐに消えてしまったつけ。神父様は怪我が酷いからだろうって仰っていたけれど。

ああ、彼はどんな方なんだろう。私は彼を家で介抱することにしたんだけど、村人がみんな彼を見ようと押し寄せるのを止めるのに大変。あのニードですらあの時、彼を見て押し黙ってたぐらいなもの。それから一度も守護天使アーミアス様の存在を馬鹿にしたりなんてしなくなつた。

彼はあれから一週間も目覚めていないのだけど、いつも天使様がいらつしやつて頭を撫でてくれるって言つてた子が悲しそうに今日も来ないって言つているし、村のおじいさんもおばあさんもなんとなく幼い時から見守つて下さつてる存在がいなくて寂しそう。

私だつて薄々分かるんだよ、ほとんど毎日感じていた懐かしい雰囲気がないって。ニードは天使様を馬鹿にする度原因不明の痛みに襲われてたらしいけど……ねえそれ天罰じゃない？今は馬鹿にしないから分からないらしいけれど。

みんな分かつてる。目覚めない彼こそウォル口村の守護天使アーミアス様だつてこと。アーミアス様はあの地震できつと天の世界から落ちてしまつて、こんな怪我を負つたからなんだつて。大地震のせいで天界にも影響があつた……つてことは相当酷かつたよね、本当に。

いつもなら守護天使アーミアス様にお祈りするのだけど、お祈りしたいことがアーミアス様についてだから……神様にお祈りしようかな。

神様、アーミアス様の怪我が早く治って、お目覚めになるように、お力を貸してください。アーミアス様の怪我は深く、神父様のホイミもあんまり効かないんです。お願いします。

目の前で深い眠りについているアーミアス様は、まだ目覚めそうになかった。包帯やガーゼをたくさんあてがわれた痛々しい姿で、静かに眠っていた。

……

目覚めたら目の前にリツカたんがいて口から心臓が飛び出すかと思ったし、うっかりお星様になるところだったぜ危ない危ない。知ってるか？ 天使って死んだらマジで星になるらしいぜ！ やつべえ。

ていうか全身激痛！ つか痛いなんてもんじゃないわ！ でも俺ってば好きな子には一途だからリツカたんの前で無様に痛がってたら格好がつかないだろ？ ふっふっふ、普段無表情な俺はやれば出来る子、やってやった！ これで平気そうだろ！ 痛みに耐えてしぜーんに無造作に起き上がったぜ、誰か褒めてくれ！

……なんで人間界にいるんだ？ とは思ったけどな。そういや突風で天使界から落ちたんだった。やつべえ。不幸中の幸いは勝手知ったるウォル口村に落ちたことだよ

な、師匠！ 弟子はここです！ タクシープリーズ！ ちょっと飛べそうにないから恥ずいけど抱っこで！ 当たり前だがおんぶは勘弁！

「気がついた？」

待つて。待て、まあ待て、俺。リツカたんの手前表情に痛みを出さず、黙って起き上がったのはいい。ダサいところを見せずに済んだ。リツカたんが目の前にいるのもいい。それはわかった。わかったぜ、目覚めにリツカたん癖になりそうってのもわかった。ぺろぺろりん。

なんでリツカたん俺のこと見えてんの？ 起き上がっちゃダメじゃないって優しく俺のことベッドに寝かしてくれてんの？ やっぱりお星様になるしかないわ、俺の天使生最高だったぜ……。

「……ありがとう、ごさいます……」

でもな、でもなリツカたん！ めっちゃ全身痛いんだわ、どこ触られても幸せだけど激痛なんだわ！ くっそ痛い！ やばい！ リツカたんタッチの幸せの前にシヨック死しそう！ 痛みによるシヨック死で死ぬ天使って何だ、クツソダセエ！ 絶対死ぬか！

てか……天使なのになんで見えてんの？ これ俺の願い叶っちゃってるくない？ もしかして、悲願叶った？ ヒューッ！ 女神様サイコー！ 俺の願いを叶えてくれた

のか、神様ありがとう！ もう少し穏便に叶えて欲しかったけど目の前にリツカたんがいるしこの際生きてるからいいぜ！ ヒューツ！ マイゴッドは天使かよ！

……天使は俺だった！

「今神父様を呼んでくるわ、待っててアーミアス様！」

リツカたんが俺に話しかけてるなんてサイコーツ！ つて、……ん？ なんかおかしくね？ 体に違和感があるんだが。

「おお、アーミアス様が目覚められたとは本当なのかリツカ！」

「ええ、でもまだ……おじいちゃん！ 神父様以外通しちやだめよ！」

「分かっておる」

……なーんで俺、リツカたん姿見えてるんだろうって思ったら光輪なくなってるからなのか。どうやっても触れもしないし握り潰せなかったブツだけでも、なるほどな……あれだけの衝撃を受ければ光輪もパーンと壊れるよな、早く試せばよかったかな。

ついでに人外認定の翼もパラシユートなし無抵抗落下で燃え尽きたみたいで背中が痛すぎるけど大成功だな！ 翼を巻るどころか、切り取るどころか、空気の摩擦で挟りとったんだからな！ これで残ってたら切り落とすところだった！ 見られたら引かれてただろ、セーフセーフ。

これではない旅人として事故ったんです！　って主張して、からのチマチマとわかりやすいお手伝いやアピールして仲を深めて……告白ッ！　ってのが流れじやないのか?!　リツカたん今日も愛してる！　一番好きだ！　人間愛してるけどリツカたんペロペロして今を生きてるぐらい好き！　ペロペロする舌が足りない！　俺はリツカたんのエプロンになりたい！

ていうのが今一瞬で考えた我ながら天才的なプランなのによ……俺、身バレしてるくないか！　起き抜けだぞ、アーミアスって名乗った覚えないぞ、やばい！　計画台無し！

なのに、なんでリツカたんのおじいちゃん感極まって泣いてんの、今の俺天使には見えないよな、翼も光輪もなければ力もなさげ！　つまりはただのホコリ男だし！　なんでだ！　スペックに顔面蒼白を足すぐらいしか出来んのもよっ！

「おお、大丈夫ですかアーミアス様。今すぐリツカが回復魔法の使い手をお呼びしますからな」

「ありがとうございます。……どうして、俺がアーミアスだと分かったんですか……?」

これ。これが一番聞きたい。この二人は好意的でよかったけどさつきリツカたんが神父様以外通すなって言ってたよな、それって俺……もしかして狩られる対象?!　天使は殺すって？　高く売れそうってか?!　翼ねえぞ！　証拠ねえぞ！

やばくね、オシメしてるときから、というか結構前の先祖から知ってる可愛く愛しい人間たちに殺されてしまうのか？ それはやめて欲しいぞ。まだリツカたん成分が足りてない。死にきれないから！

「そのお顔を見ればすぐに分かりますじゃ。元氣になられたらぜひ村人たちにお姿を見せてください。皆、アーミアス様のことを心配して押しかけようとしているんですぞ」

……普通人間に天使ってバレたらやばいよな。異物は排除が人間の生體だしな。でもバレてるならもうどうしようもないよな。天使に見えないブサイクでもバレるって事は……俺がもつとイケメン天使なハゲ師匠の毛アリバージョンならリツカたんから熱烈な告白をもらえたかもしれないってことだよな。

くっそ！ 俺がブサイクなばっかりに！ ホコリ男で天使バレって、もつと天使天使してるやつならもつと！ くそ！ くそ！ 俺の顔をアップグレードすることはどこでできるんだ！ 教えろ！ 教えろ下さい！

「……ええ、帰ることが出来るようになるまでは……そうですね、動けるようになればまた、この姿でも守護天使の役割を果たさないといけませんね」

「おお……ありがたいお言葉」

なにが?! 守護天使なら当たり前のことじゃね?! まじでなんなの？ 天使同士じゃわからないけど天使ってオート天使ありがた公言機能でもついてんの？ 天使の言

葉って翻訳されて全部ありがたくなんの?! やばい、神の世界に行って神様か女神様に会える日が来たらこれはやばいぞ! って苦言を申し立てる必要があるな! よし! 覚えておこう! すぐ忘れるかもだが!

まずは異変で村がどうなってるからパトロールと掃除だ! 俺愛用の掃除道具は教会の裏手に隠してあるからさっさと行きたい! フンツ! 痛みに負けずに起き上がるッ!

「う、動いてはなりません、そのお怪我では……ッ」

「この村……を、守る、のが、俺の……使命です……」

ええい! 俺はリツカたんとおしやべりするためならこの世界を平和にするって決めてるんだ村の慈善活動は俺の仕事! あの木の下とかそろそろ枯葉まみれだろ俺に掃除をさせてくれ! じーさん、頼む!

「おじいちゃん、どうしたのっ!」

「アーミアス様が、」

「……リツカ」

あ、やばい。リツカたんのキュートすぎる顔とごしやつと無様に床に伏してる姿勢だとスカートの中身が見えそうで見えなくて下からのアングルも可愛くてもう、やばい、昇天する。

やっぱりちよつと休憩してからでいいっすかね、へへ。ヘタレでごめんねリツカたん
……俺やっぱ無理、四肢がもげそうなぐらい痛いのはちよつと無理。

「アーミアス様ッ」

ありがとうリツカたん。いい夢見れそう。ぱんつは見えなかったけど、いいアングル
だった。

5話 崇拜

太陽が出る少し前。つまりは人間たちにとつてはどうかは知らないが俺にとつてはいつも起きる時間。で、今日は目覚めたら真つ先に家から出る。勿論リツカたんと同じさんを起こさないように静かにな。それから傷が治りかけて痒いのを我慢しながらこそこそ歩いていき、滝壺で水をすくい、一口水を飲む。よし、チャージ完了。

天使つていうのはすごいんだぜ？ 人間は毎日食つて飲んで温かくして寝なきや死ぬだろ？ 天使つていうのはメチャクチャ燃費が良くてな、大して飲み食いする必要は無い。

全くなしだの場合にもよるが半月ぐらいで繭まゆになつちまうけどな。それは所謂省エネモードつてやつだ。あとは少し眠ればもう何の問題もない。人間の生活スタイルに合わせてたら腕がもげかけてても一日で治りそうだけ。……実際に治るとは言つてないがな！

あー、でも汚い水、特に悪意に汚染されたものにはある意味人間より弱いから、ウオル口村の水が世界でも稀に見る名水でホント良かった。怪我してる時に瘴気に耐えろつてのは勘弁して欲しいしな。髪の毛が真つ黒に染まつちまう。

いろいろと悪意の溜まりやすい人間界で、人里で、天使界並みの清らかさ、天使に対する明らかな癒し効果つてすごくない？ さすがはウォル口村。俺の愛する土地。

で、昨日リツカさんに教会裏の掃除道具は没収されてしまったからなー……うーん、今はこっそり家宅侵入からの肩出して寝てる人間にババツと布団をかけるとかもできないうし、何しようか。

俺の像の前に行つてみるかな。あそこ、たまにお供え物があるんだぜ？ 食い物とか花とか酒とか。まだ師匠が守護天使だった頃、まだ幼気な俺は師匠にお供え物の酒を見せられながら「墮落の根源」つて教えられたっけなあ。懐かしいぜ。

前はよくまんじゅうとか菓子とか拝借して食べてたけど今はダメだろう。

つかお供え泥棒みたいじゃねえか、ビジュアル的に。供えられた本人だが。直接渡してくれるなら今でも歓迎したいけどなあ。

つってもリツカさんのご飯が彩り素晴らしく栄養バランスバツチリの上にはほつぺたが天界にブツ飛びそうなほど美味しくて腹が減ることすらめつたにないが。悔しいが天使は小食だから、リツカさんのご飯もあまり食べられないのである。無念。

ちなみに天使的にはこっそり食べるのは食べるところを見られなきやセーフだがお裾分けとかのつもりで持ち帰りはNGらしいぜ。食べ物空に上がっていくのは見られたら確かにヤベエもんな……。

食べてるのが見られるのは年間二人ぐらい目撃されてな、毎回長老にクソほど怒られてるの見るな。俺はその程度のことでするわけねえのでリツカたんのお供えは皆勤で食ってた。

でもな、持ち帰りNGに反発してリツカたんのお供え物の花を前に一つぐらいは押し花にしても……って師匠にごねたら許されたけどな！　これが日頃の態度の成果じゃね？　そのために素で喋ったら不敬どころじゃねーから誰にでも敬語とか俺まじ頑張ってるぜ。

……あーっ！　その押し花の葉、天使界に置きっぱなしじゃねーか！　それだけ取りに帰りにえ……。あとは……まあ他の天使もいるし俺ひとりぐらい抜けたっていいだろ、もう星のオーラ集めなくてよさそうだしよ。くっそ。本物のリツカたんがいなかったら脚力だけで天使界に帰還するところだったぜ。

……うおー……この像何度見ても似てねえー。萎えた。俺こんな顔じゃねえし。ついでに言うなら師匠も似てねえわ。すべての天使がこんな優しそうな慈愛に満ちた顔立ちな訳がないだろ！　師匠を見るよ、武道家だろあれは！　俺はリツカたんの前なら優しそうな顔ぐらいいくらでもやるけどな！　ほーらにつこりにつこり。うげ、滝壺に映った自分がキモすぎる。やめとこ。

「おつ、アーミアスじゃねえか」

「……ニード」

……こんな朝っぱらからニード参上か。今日も暇してんのか？ 早起きは結構なことだが、相変わらずニードはニードだなあ、せめて魔物退治でもしたらどうだ。馬小屋を所持してるオッサンの手伝いはどうだ？ 掃除でもいいぞ？ やつてみると体を動かすのは楽しいし、誰かがこれで少しでもいい気分になると思ったらな、ますますやる気が出るぞ。

「ほんと、アーミアスってその守護天使像に似てねえよなあ？」

「そう、ですね。ほかの場所の天使像も天使に、恐らくは似てないでしょう」

「お、おう」

マジで何しに来たニード？ 俺はお前と違って朝っぱらから勤勉意欲のある天使に絡むほど暇じゃないんだが。もしかして像に似てないって言うことだけ言いに来たのか？

馬鹿め、それは名前は守護天使に合わせられるが像の造形は初期から一緒だぜ？ 多分似てるとしたら最初のウォル口村の守護天使に似てるんだろ。ま、ニードなんかにわざわざ言つてやるまでもない。せめて働け若者。労働力は大事だぞ。財産だぞ。

にしても……昨日掃除したし、流石に綺麗だし……うー、これはどうしようもないな。外に出て魔物を狩ってくるか？ でも村から離れることで心優しいリツカたんが

心配するのは困るしな……。

実のところ大体の傷自体は結構治ってきてるんだが、背中のはちつとも治ってなくてな、あんまり激しい運動はしたくねえ。

元々あるべき器官が丸々ないのは、天使のちよつと強い回復力でも塞がりにくいかな。筆りかけの傷が百年消えないぐらいだしな。あと足もなかなか治んねえな。毎日歩く度傷が開いて治りそうもねえから自力でホイミ覚えたら一気に直してやろうと思ってる。

つか聞いて驚け。俺、旅芸人扱いらしいぜ。人間には誰しも「職業」が設定されてるだろ？ リツカたんは魔法使いだろ？俺が人間ならこの衣装、ほかの街でなら旅芸人としてなら誤魔化せつかないとか考えてたら俺、職業「天使」から「旅芸人」になつてたわ。

訳が分からん。天使やめたんじゃね、これ？ つーても他にいい服があるなら着替えたいんだが。守備力低いし、目立つ。

「……」

「……おい、アーミアス」

「なんででしょう？」

考え込んでいたのに邪魔すんな。つてかまだいたのかニート。取り巻きが後ろでま

ごまごしてんぞ気を使ってやれや。そいつ、実は構ってちゃん気質なの知ってたか？

だがわざわざでめえに話すことは無いぞ、このリツカたんを好きなくせに好きな女の子をいじめたくなって意地悪して反発した挙句ニートなニート野郎が。俺はテメーがカーチャンのおっぱい吸つてるときから知ってたぞ、やんのかコラ。

なんて言わないがな、話すのがめんどくさくなってきた。あー、太陽が出てきて眩しいな。目がしばしばする。天使界から見ると日の出もいいが、人間界からの日の出も良いもんだな。こつちの方が世界が始まる感じがして好きだ。

「…………ツ、昼になったら俺の家の裏に来て、分かったな！」

「…………はあ」

なんか言い捨てて去っていったんだが！ なんだあいつ！ しかもその尻拭いは取り巻きにさせんのかよ！ クズか！ 天罰しほくぞ！

「ど、どうもすみませんアーミアス様。ですが行ってやってく、くださいっス」

「わかりました。それから…………俺に敬語なんていりませんよ」

「まさか、守護天使様に、そんな…………」

「みんなリツカみたいにしてくれたらいいんです。様付けなんて、俺には合いませんから」

まじ、これ！

リツカさんとニード以外総敬語ってなんだよ。だいたい俺は守護天使ではあるが、敬われたって仕方ないだろ？　ここそプライバシーを覗き見してたんだしよ。あとこの人たち少しは疑え。見た目は天使じゃなくて人間と一緒にだろ？　服装が人間らしくないのは認めるが。しかも俺さ……。

「俺は、灰色ですからね」

「っ、いえ、アーミアス様は天使様ですよ」

「……………、もう、俺は翼も光輪もないので」

この色、ホコリみたいでコンプレックスなんだよ！　俺も金髪とか栗毛が良かったー！　いつそ黒なら汚れないし、天使の力を隠しているみたいでかっこよかったのによ、覚醒した時にぶわわわって金髪になりそうじゃね？　ホント灰色ってなんだ、中途半端一番良くねえわ！

てかなんなのこれ、女神の力って何なの、それとも神の力なのか？　自分の下僕であろうと人間に見下されては……みたいなのか？　そんなプライドよりも魔物をなんとかしてやれよ！　ずっと死傷者出るんだぞ！

やってらんねーからちよつと睨んでプイ、だ。あ、道具屋が開店してる。ちよつくら手伝ってくるか。

……だがその後、思いの外怪我で体力が落ちているのに気づかなかったマヌケな俺は

足の怪我も相まってぶっ倒れてリツカたんの家に救急搬送お姫様抱っこされた。怪我に障らないようにだとしても屈辱の極み……ッ！

何故か、胸騒ぎがした。ガバツと起き上がり、時計を見れば……なんだ、まだ朝の四時だ。もう一度寝るには目が冴えすぎていて仕方なく俺は着替える。ついでにあいつも誘っておくか。村の入口の番もそろそろ交代のはずだから。

そして特に考えることなく……なんとなく滝壺の方へくだらねえ事喋りながら、歩いていた。朝っていうのは清々しいな、たまには早起きもいいかもなんて思いながら。

だが、日が出る前の薄暗い世界には既に光がさしていた。

自らと同じ名前の像の前で深刻そうな顔をして立っているのは……この前の地震でこの滝壺に落ちてきた男、アーミアスだ。うちの村の守護天使サマと同じ名前っていうのは如何にもお人好しなリツカを騙したんじゃないのかと密かに疑っている。

だが俺は何も言えない。というかそもそも彼をアーミアスだと言ったのはリツカだったからだ。寝ている間に勝手に天使扱いされ、あのキラキラした押し強い目で名前を問われてアーミアスだと答えるしかなかったのかもしれない。そうだとしたら哀れすぎて何も言えるわけがない。

……それから、俺は……これは誰にも言っていないことだが、ヤツが本物の守護天使

アーミアスだとしてもおかしくない、と密かに思っているからだ。

あの日、ヤツは死んでいてもおかしくないほどの大怪我をして滝壺に落ちてきた。

この村でいろいろやって生まれ育った俺にはわかる。あの滝の上から落ちたぐらいじやできる怪我ではないってことぐらいはな。リツカを手伝ってあいつを運び、濡れた服を脱がせた時にもいろいろ考えさせられることがあった。

あいつの着ている変な服には、背中に最初から作られた裂け目がある。それもちよほど翼の位置に、だ。服を脱がせ始めたら男とわかり、そこから俺が着替えさせたんだが、……神父様すら顔を顰めた背中の傷は翼を無理やりそげ落とした傷だと言われれば納得の傷だったし、なによりも、……あの顔は人間のものじゃないだろう。それを疑う事は俺にもできなかつた。

人間にも綺麗な人がいくらでもいるだろうが、正しくあいつの顔は人外の美。睨まればどんな人でも竦み、ひれ伏すしかないようなものだ。心から無意識に畏怖しつつ、慕ってしまう……魔性ではないが、どうも惹き付けられる、そんな美だ。リツカに笑いかける時の顔は天使の笑みこの村のうるさいババア共を一気に黙らせ、周りの目を奪うぐらいだ。

だからあいつが魔物だとしても、天使だとしても驚かない。とりあえず人間ではないだろうとは思ってる。だからこそ怪しいからいろいろ探りを入れているんだがな。

「おつ、アーミアスじゃねえか」

「……ニード」

とりあえず話しかけなきゃいけないな。声を聞いただけで振り返るまでもなく俺の名前がわかるっていうのは……客商売の旅芸人ならまあ出来ると思うが、普通の人間が出来るか、と言われれば相当記憶力がないと無理、だな。って、わざわざ証拠見つけてどうするんだ。怪しいところを探さねえといけない。

アーミアスはこつちを向くと、訝しげに首をかしげた。人外の美をモロにくらつて声が震えそうになるのを必死に抑えた。圧倒される雰囲気。なのに、母親のように安心して、どこか懐かしくて……幼い時に頭を優しく撫でた風のように、なんて思ってしまった。何故なんだ。

会ったこともない、見覚えもない、そんなアーミアスの真つ黒の目にいつも見守られていたように錯覚するのは、何故だ。俺がバカやつてる時に頭をぼかぼか殴っていったのはこいつじゃないのか。

「ほんと、アーミアスってその守護天使像に似てねえよなあ？」

「そう、ですね。ほかの場所の天使像も天使に、恐らくは似てないんでしょう」

「お、おう」

カマをかければ少し目を伏せられ、ようやく俺は息をつけるようになる。だが声色に変化はなく……だあああつ！ 認めるのは尺に触るが、とりあえずこいつは守護天使サ

マダとしてだ！ 仮定だ、仮定！

コツチを見たままぼんやりとしているように見えるアーミアスに、俺の計画を手伝って貰わなきゃならないんだ！ それが先決、コイツの正体はあとだ、とりあえず少し戦えればそれでいいからな。

「……」

「……おい、アーミアス」

「なんででしょう?」

考えを見透かされていたのか。アーミアスは目を細めた。キラキラとヤツの背の滝が朝日に照らされて煌めき、神々しいまでの雰囲気はさらに増していく。

——俺に何をさせるつもりですか？

そう、問われたように錯覚する。否、これは聞かれたんだろう。そしてヤツは拒否しない。俺のことをそんな目で見ながらも、親が子供を見るような目を、している。慈しんで、いとおしそうに。俺なんていつつも天使を否定することばかり言っていたし、当然聞いていたはずなのだ。

「……ッ、昼になったら俺の家の裏に來い、分かったな!」

「……はあ」

ため息だ。ため息を吐かれた。……耐えきれずにその場から走り去り、家に駆け戻

る。

……自室の扉を閉めれば頭の中には慈しみを込められたようなあの目が浮かんでくる。きっと、来るだろう。多分、来るだろう。

自信はない。だがなんとなく、来てくれる気がした。

・
・
・

6話 急加速

朝日に透き通るアーミアス様の髪は、……柔らかい灰色から銀色に変わり、神々しく輝いていて……息をするのを思わず、忘れていた。これが彼の真の姿かと、平素より一層美しい姿が目には焼き付く。こちらに視線を移したアーミアス様の漆黒の瞳も朝日を受ければ星のように無数の光を宿し、煌めいていた。

……そうだ、アーミアス様に失礼なことを言ったニードさんのこと、謝らないといけないっスね……。

「ど、どうもすみませんアーミアス様。ですが行ってやって、くださいっス」
「わかりました。それから……俺に敬語なんていりませんよ」

そんな神々しい姿で言われても、誰がはい分かりましたなんて言えるんスか。彼の瞬きでその睫毛に視線が釘付けになるのが止まらないのに、そんなこと。

「まさか、守護天使様に、そんな……」

「みんなリツカみたいにしてくれたらいいんです。様付けなんて、俺には合いませんから」

本当にそう思っているようにアーミア様はおっしゃられたっすが、リツカみたいに……って。あの子みたいに友達みたいに接せってことなんスか？あんなの、無理に決まってるっスよ！

返事が出来ないまましていると、ふっと、星を宿していた瞳が暗く、淀むように、色をなくされたっス。

「俺は、灰色ですからね」

そんな目をして欲しくないから必死に否定するしかなかったっス。今まさに銀色に輝いている姿を見て、誰が彼を貶めたんだろうと疑問に思うぐらいなのに！

「っ、いえ、アーミア様は天使様ですよ」

「……………、もう、俺は翼も光輪もないので」

……それを言われれば、もうそれ以上言えることはなくなってしまうっス……。確かにアーミア様に翼も光輪も、ない。ニードさんはぼそと削ぎ落とされたみたいだっておっしゃってたから、あの地震のせいで失ってしまったってこと、なんすかね。空の彼方から落ちてきて生きているのはさすがとしか言いようがないっスけど、彼にとつて大事な大事な翼を失ったのは、慰めようもないことじゃないスか……。ことに人間からなんて、とてもじゃないっス。

それでもさらに話そうとすればアーミア様は軽くこちらを見て、目を細められる。

背筋が冷たくなって……目にはキラキラしたあの光はまだなく、それどころか睨まれて
いるような気がして……。

だから彼が表情には出さずに、でも辛そうに少し足を引きずりながら道具屋の方に歩
いていつてしまうのを止めることだつてできなかったんっすよ……。

……

「アーミアス様、無茶しないでよ……」

「リツカ……様付けは……やめてください……」

疎外感を感じるんです、なんて言いながら道具屋を手伝っている最中に倒れて外から
運び込まれ、ベッドに寝かされたアーミアス様は、どことなく不服そう。みんなアーミ
アス様が表情を変えるなんて見たこともないなんて言い始めてるけどそんなことない
のになあ。よく微笑むし、よく……悲しそうにしてる。あ、でもね、嬉しそうなことも
多いよ。

私のご飯を初めて食べた時は本当に幸せそうに笑ってたんだもの。見とれたのは勿
論だけど、あんまり美味しそうに食べるから私も嬉しくなっちゃった。あまりたくさん
は食べられないんですってすごく悲しそうにしてたぐらい。食べる量がそもそも違う
みたいで、でも誰よりも美味しそうに食べるんだよ、アーミアス様って。

天使様はご飯を食べないのって聞いたたらそんな事はないって言ってたけど、天界には

想像も出来ないぐらい美味しいものがありそうだなって思うんだけどそんなこともないのかな。それともなんだろう……それは人間の食べ物とは違うのかもしれないなあ。珍しいのかもね。

アーミアス様の、ちよつと悲しそうな顔を見ていたら様付けされるのは本当に嫌なんだなって分かって私はどもりながら、聞いてみた。

「じゃ、じゃあアーミアスって呼べばいいの、アーミアス様」

「……言ってるそばからそれ、矛盾してますよね、リツカ」

「あははっ！ 確かにそうね！」

あ、ほらやつぱりアーミアス様、じゃなくてアーミアスはよく笑うじゃない。形のいいピンクの唇にふわって笑顔を乗せるの。あんまり顔を動かさないけど……顔にまだ大きなガーゼを当ててるからかもしれないけど……とろけるように、笑うんだ。見ているだけでこつちまで笑顔になるの、その表情。

それにさ、私、アーミアス様の笑顔って心がほかほかして好きだなあ。

……………。なんか恥ずかしいこと考えちゃったな。

さて、と。アーミアスは足の怪我が開いちゃったみたいだから薬草を買ってこよう。でも昼からは行くところがあるんだって言い張るから今だけでも安静にしてみらわないかね。

ゆるゆると瞼を閉じたアーミアスは、疲れてしまったのかあつという間に寝息を立てていて、それでも……眠る私たちの天使様のお顔に痛々しいガーゼが当てられていようと、首に包帯が巻かれていようと、目の前で息をつくのも無礼じゃないかって思ってしまうような雰囲気はあまり和らがない。

なのにね、人間をずっと見守っている遥かに年上のアーミアスが、安らかに眠っている時はちよつとあどけないの。子供っぽく見えちゃうの。幾ら大人の姿じゃないからってアーミアス様はおじいちゃんより年上なのにな。えへへ、これを知ってるのはおじいちゃんと私だけなんだよ。

「おやすみなさい、アーミアス」

アーミアスの眠る部屋を出れば、少し寂しくなる。

何故かって、いつもひとりになると誰かが見守っているような気配がしていたから。軽やかな翼の音、優しい声が聞こえたような気がしていたの。それはアーミアス様だつてことしかわからなかったから、いつも安心していたし、天使様は神様と同じように万能なんだろうって勝手に思ってた。

想像よりもずっと綺麗だったアーミアスは、怪我をしてもなお守護天使の役割を果たそうとまだ歩けもしない時から外に行こうとしていたよね。必死に止めても、アーミアスも必死だった。優しい優しい天使様を止めるのは大変だったなあ。

だから私、分かったの。天使様は万能じゃなくて、万能ってことよりも……とても優しい心を持った方々なんだって。そして心が強い方々なんだって。

アーミアス、アーミアス様。本当は天に帰りたいんだよね。私、聞いちゃったの。アーミアス様が誰かを呼ぶ声を。何かを探してるみたいだし、置いてきてしまつてんでしよう、大切な何かを。天界にはアーミアス様と同じ天使様が沢山いるはず。その誰かがアーミアス様にとつて大切なんだよね？

アーミアス様はウォル口村の守護天使だから、翼も光輪も失つてもここから離れられないって責任を感じてしまつて帰る手段を、他の天使様を探すことが出来なくなつてしまつてるんだよね。

アーミアス様に居てもらつたら私、とつても幸せだよ。でも私はアーミアス様が悲しそうな顔をしているのは嫌なの。

峠の道、崩れちゃつてるから今はどうにも出来ないけど、あそこが開通したらアーミアス様が旅立つても大丈夫なようにしておかないとね。

……本当は、本当はね、アーミアス様。アーミアス様が優しく笑つてここにいてくれるのが、一番嬉しいの。でも、それじゃあ、駄目なの。私たちがいつも守つてくれたアーミアス様に恩返しをしなくっちゃ。

道具屋に行く途中、犬がくーんつて鳴きながら近づいてきた。しつぽが垂れ下がって

元気がない。なんとなく、俯いてて……。そういえば、アーミアスはよく犬の頭を撫でていたっけ。この子、きつと心配しているんだ。

「大丈夫だよ、アーミアス様はちよつと疲れただけだから、ね」

そう言つて頭をぼふつと撫でた時、犬は納得したのか満足げに私の家の方に行つちやつた。あれは……。アーミアス待ちなのかな。

犬にもアーミアス様は好かれてるんだね。あの犬、もしかしたら、翼のあるアーミアス様も見えていたのかも。ほら、動物には不思議な力があるつて言うじゃない。あの地震の前も妙にそわそわしてたし、もしかしたら。

まあ、これはただの想像なんだけど。

7話 豪胆不敵

見習い天使の優等生アーミアスだぜ！俺の自慢は遅刻や違反をしたことがないってことだ！ま、翼切り刻み事件でかなり上級天使の頭かつたい奴らに目エ付けられたからな、大人しくすること早百数十年、だぜ！

まー、それがなくても大人しくしてたけどな。天使界屈指のイケメンと美女に逆らう勇氣はちよつとないわー。マジモンの天使だぜ、上級天使。まだ見習い天使はなりきり天使って感じるもんな。

見た目だがマジで子供。全然オーラが違う。その点俺の師匠は親しみやすいハゲだからな、配慮に尊敬するわ。あの翼、すっげえモサモサしてるけどあれが力の象徴なんだぜ！つまり今の俺は天使としてはカスに等しい！だからなんだ！リツカたんがいる方が大事に決まってる。

つてことで優等生でちよつと真面目な俺は熟睡してもばつちりばつちり昼前に起きたぜ！

たとえニートだろうと、リツカたん大好きな俺から見たら敵なニートでもウォル口村の人間、俺の大事な可愛い可愛い守護対象の人間には違いないからな。まあ鉄拳……も

とい天罰は積極的に食らわせたいところだが。俺がやったら天罰でいいよな、な！
ハゲ師匠もいねーし俺の勝手！

てか取りに行きたい物があるから師匠早く迎えに来てくれねえ？ パツと行って
パツとウオル口に帰りたいが。流石にパラシュートなし落下はもう勘弁だが。

「……リツカ」

「あら、もうアーミアス大丈夫なの？」

「ええ。ちよつと行ってきますね」

「気をつけてね、また倒れたり、怪我しないでよ？」

「大丈夫ですよ」

あー、あー、あああああつ！ リツカたんとお喋りいいいいいい！！！！

思わず荒ぶるぜ、最高。やばい。それしかねえ。でもおくびにも出さずに喋り方とか
俺クールじゃね？ 感情をあまり見せずに、でも安心させるように微笑むかつこよくな

い？ 駄目か？

……駄目だな。そういうのは匂い立つようなイケメンじゃなきやダメなんだよなー。
シシヨーツ！ 顔面だけ交換してくれツ！ この際師匠の男前があればホコリぐらい
なんとかかなるぜ！

あー、こんな俺にもリツカたん優しい。すげえ可愛い。可愛いけど普通に接してて

くれてる。ありがたいが普通だ。普通のリツカたんとか超可愛いけど普通だ。俺を意識してくれそうにない。やつば顔がダメだと何をやってもダサイからな、クソツタレ。

リツカたんって俺より純真無垢な完璧天使だから、オムイ様が蒸発レベルの天使だから！ うつは笑顔が目にしみるうううううっ！ 眩しすぎてリツカたんの前でにやけたけどリツカたんは楽しそうね、なんて勘違いしてるううう!!! リツカたんまじ……純粋……可愛い……。ニードなんてほつといてここにいたい……。

だがしかし、誠実な俺は来いと言われたらホイホイ行つてやるぐらいにはニートの更生に燃えている。

ついでにあいつの腐った根性叩き直してリツカたんが楽できるように馬車馬のようにな働かせてえ……。俺も働くけどな！今までと違つて堂々と手伝えるからそれとなくやるような微妙な手伝いじゃねえ。最高。やつば光輪なんて無用の長物だったんだな。ケツ、早めに壊せれば良かったのによ。

ま、そんなこたアどうでもいい。

村をてくてく歩いて村長の家に向かつてるだけでもたくさんの人間たちが話しかけてくれる。さつきは大丈夫だったかつて聞いてくれる。クウーッ！ 天使より天使かよ、いい人ばっかりか！ほんと俺ウオル口村大好きだわ。

天使どもは俺が何してても、疲労困憊へ口へ口でも無関心だぜ？ 野郎はそこそこ絡

んでくるけどな！ ……主に師匠。べ、別にぼっちちゃうわ！ 天使どもより俺は人間と居たかった、それだけだ！

俺の話せる知り合いなんて師匠を抜いたら……上級天使の何人かと……無邪気な子どもの天使が何人か。うん、友だちはいないな！ だからなんだ！

ない愛想振り絞って対応しているといつも頭を撫でてから帰ることにしている子供がいた。……なんか期待の眼差しだな。俺天使だけど翼がないと飛べねえし、せいぜい幽霊や人ならざる存在……妖精とかしか見えねえよ？ いいのか？ しかもここに來てから見たのは幽霊ひとりになんかピンクの光だけだぞ？

つうことで出来ることといえば頭を撫でてやる事だけだ。ほら大きくなれよ、健康に育てよ、本物の天使からの加護だぞー。……効くかわからんけどな。多分意味は無い。

「やっぱり、アーミア様はアーミア様だー」

「……？」

おう。ごめんな、おにーちゃんそれ理解出来ないんだわ。で、誰が誰だつて？

「すみませんアーミア様。この子はアーミア様に頭を撫でてもらつて本物か確かめるつて言つて聞かなくて……疑うなんて本当に失礼なことを」

「いえ、怪しいのは俺の方ですからね。……ぼうや、俺のことを覚えていてくれたんですか？」

子供特有の大きくてきらきらした瞳が俺に向いてるのって新鮮だぜ。だが不純な俺は溶けそう。てか覚えてたのかよ。折角風にまぎれてぼんぼんって感じにやっつたのに。しょうがないなー、高い高いしてやろうか？ って、今はダメだ。背中^の傷が開いちまう。ごめんなー。

なんかリツカさんの家からついてくる犬^のつころを従えて村長宅に到着。

おつ、いたいたニート。今日もリーゼントだっせエな！ よう元気？ 風邪ひいてない？ 怪我不いか？ ニートにも神のご加護がありますように！

「来たのか」

来たのかっっておま。呼んだのはニートだろうが！ 何意外そうにしてからにやけてんだ……？ 怖っ。

「ええ、呼んだでしよう？」

ポーカーフェイスのレベルが高い俺でも声がやれやれって感じになるのは止められねえな。ニードのメンタルは強靱な合金らしいからその程度でビビらないからこそ出来ることだ。俺は人間に不快感を与えたくないからな！ ただしニートは天罰^{しほく}！

「とりあえずここじや駄目だ。家に入つて中で大人が話し合いをしてるんだが……それを盗み聞きするのを手伝つて欲しいんだ」

「盗み聞き、ですか？」

言わないって事は聞かせらんねえ話ってことだろ？ ニートのくせに何イキってんだこいつ。……そういうの、嫌いじゃないけどな。いいぜ。聞いた結果やる事は口でもないことではなさそうだしよ。

「ああ。じゃ、入るぞ」

俺が止めねえって分かったからか最高に悪そうな顔して……おいニート。悪いことじゃなさそうだから加担してるだけだからな？ 調子に乗ったら分かってるだろうな？

玄関先で息を殺して中で話してる大人の話盗み聞きする。ふむふむ……あー、あの道土砂崩れしてんのか。翼があつたら余裕だがそういうわけにはいかんよな。だからリツカさんの宿屋にお客がいなかったんだな。人が来れねえならそりやな。リツカさんの宿屋世界一だもんな。

……何ニードお前こっち見てんだ？ あ？ なんとか出来ねえか見に行くだど？

自然災害には人間も天使も勝てねえよ、大量に連れていかなきゃな。時間が解決するぞ？ セントシユタインが威信をかけてやってくれっだろ？

ハアーツ！ 聞いてねえな！ 聞けよ！

こいつ俺の話聞く気がねえ。仕方ねえな……ホント仕方ないやつだ。俺がついていつてやるよ。まだあまり動き回れねえがニード一人で村の外の魔物と戦うとなりや

俺が休まらねえ。あの地震の後凶暴化してるみたいだから最悪死ぬだろ。守護天使が黙ってねえよ。

……。なんかそういうこともあるかと銅の剣を装備してきてよかつたぜ。さーてニード。お前から言っただからにはそれなりに腕に自信はあるんだろうな？ 怪我人より弱いなら話になんねえぞ？

ま、安心しろ。俺はこれでもウオル口村の守護天使だ。この身に代えても守ってやるから安心しろよ。まあ怪我の保証はしないがな。そこまでお人好しじゃねえーし、ゴージャに腹を刺されてホイミ沙汰の俺が怪我がひどい状態でそこまで立ち回れるかつつたら無理だからな。ともかく薬草を買い込んでから行くか。

ちやーんと守ってやらねえとな、お前も可愛い神の子だ。

・

・

・

・

8話 急先鋒

先陣切って魔物に横薙ぎ一閃を加えるアーミアスの姿は俺のようなただの村人ではなく、戦い慣れた様子までもをひしひしと伝えてくる。やつは村でも売ってるような何の変哲もない銅の剣を装備していたが、強者に得物は関係ないと言外に言われているみたいだった。

剣を振るう事に旅芸人が着いていそうなひらひらの服が揺れる。天使の衣装だと思ってみてみればなるほど、重力を感じさせない鳥のような衣装だ。それがこいつの一挙一動でびらびら動く。

そういえば朝のあの後、アーミアスが倒れたとか誰かが言っていたような気がするが……。その割には足取りはしつかりしているし、あの大怪我から一週間と少ししか経っていないのにそんな様子は微塵もない。天使といえども流星にあの酷い怪我は治って

いないらしいのにも関わらず、だ。

魔物を倒し、ひと段落つく事に膝をついて弔う姿やちらりとこちらを見て怪我を確かめる姿を見ていれば、話そうと思つていても……もはや神々しさに圧倒されて何も言えなくなっている。

こいつは毎回ではないものの、なるべく倒すのを一太刀で終わらせるためか、銅の剣はたいてい魔物共の体を真つ二つにしている、その度に飛び散る血が早くも灰色の髪を真つ赤に染めていた。甘んじて受け止めているように俺には見えた。受け止めることで生から開放してやるのだと言われているみたいにだ。

血を浴びるなんていう行為。普通、狂氣的にも見えるはずなのに、天使の相貌はそれすらも神聖なものに魅せるのは流石としか言いようがないな。剣を振るう姿は断罪にも裁きにも見えるのに……アミアスの表情は解き放つてやろうとばかりの慈愛にすら取れる。

天使の慈悲を受けた魔物共も死ぬ時はどうも安らかに見えて俺の手で死んだ奴ら……声なき断絶魔の悲鳴をあげて死んだスライムが哀れに見えて仕方がない。あつちの手によつてトドメを刺されればせめて浮かばれただろうに、と。

つか……天使だろうが魔物には襲われるみたいだな。というよりも天使だからこそ魔物に襲われるのだろうか。そして浄化してやる、と。明らかに敵意をむきだしにして

襲ってくる凄まじい形相のモーモンを切り捨てつつ、……そんなに真摯に弔えるものなのか……天使という奴らは。なんて奴らなんだ。

「そんな魔物共倒したらほっときやいだろ」

何回目か分からないが、アーミアスがまた死んだモーモンの前で膝をつくのを見かねて言えば、アーミアスはいっそ辛そうにこう、返したのだ。

「次の生では共に歩んでいく者達ですよ。見送らなければなりません」

……天使サマはそもそもその考え方から違うらしいな。そうこうしている間にも魔物共はこつちの都合なんざ考えることなく襲ってきたり、逃げたりだ。ちよつと油断して一撃を食らいそうになればアーミアスが斬り捨てて難を逃れ、アーミアスが代わりにダメージを受け……。

…………。自己犠牲が激しいのか？ 天使ってやつは。リツカも起き上がれもしないうちから外で使命を全うしようとしていたとかなんとか言ってたしな……。酷い怪我ではないみたいだが元々怪我をしているせいで茶色の上着にじんわり血が滲んできている。目撃したのをバレないようにさり気なく隠されても、もう遅い。

「おいアーミアス。今何隠した」

「……」

「怪我したんだろ、俺のかわりに。……無茶したら俺がリツカに怒られるからそんな事

しなくていい」

「……ニード、俺はやりたくてやっているんですよ?」

夜の闇より深く濃い目が俺を咎めるように射抜く。咎めているのは俺の方だということに、居心地が悪い。ようやくと着いた峠の道内部は魔物が出ないと知っているからか、魔物から逃れるように引つ張りこまれ、目に射止められて逸らすことも出来ない俺にアーミアスは事もなげに言うのだ。

そしてそれで俺が諦めないと見ると溜め息を吐いてシャツを捲りあげ、葉草をぺたりと傷口に貼る。ちらりと治りかけの傷が、なまつ白い腹にも無数にあるのを目の当たりにしながら……連れてきた人選、というか天使選間違えたなと思う。

これなら一人の方が良かったのでは、とも。だがそれはアーミアスが代わりに受けた怪我をすべて自分で負っているということだ。それに耐えられた自信が無い。本当にこいつは……ウォル口村の守護天使の名前は伊達じゃないな。

「……あれ」

俺の視線から逃れるようにふいと気まずそうに顔を逸らしたアーミアス。その視線は木が何かになぎ倒された場所に釘付けになっていた。……不自然な倒れ方をしてるが、ただそれだけの場所。何も無い。妙な空間だけがそこにある。

「おい、どうしたアーミアス?」

「……あそこ、なにか見えませんか」

「木が倒れてるだけだろ」

「そう、ですか」

否定しようがなおもその「何もないとこ」に近づいていこうとするアーミアスの顔に表情は、全くない。それどころか目にも何の感情も浮かんでいない。……天使でも倒れている、わけでもなさそうだな。むしろ操られているみたいで不気味すぎる。

漆黒の中に穏やかな星を宿した目が、虚空を見つめて、釘付けになつて。それが、俺たち人間を見ていないのが、どうも苛立つて。

「何もねえから、それより土砂崩れはこつちだぜ？」

「……そうですね」

無理やりぐいっと腕を引つ張ればやつとアーミアスはこつちを見た。少し不機嫌そうにも見えるが引いてはくれた、らしい。それでもなおもその場所を見ようとするのにさらに苛立つて無理やり引つ張れば、諦めたのか大人しくついてきた。

……天使にしか見えない何かがあるみたいだな。幽霊か？ 天使なら死者を見れそうだし。それなら幽霊がいると素直に言いそうだが。

結局真相はわからないが、ともかくアーミアスの興味は目の前の土砂崩れにちゃんと変わったらしい。……俺達で少しはなんとか出来るか、と思つてたんだが……これはど

うにもなんねえな。二人じや下手に岩や砂を動かしただけで巻き込まれてもおかしくない。……無駄足だったか。

「ちつどうしようもねえな」

「難しいですね……」

天使サマとはいえどもどうにもならないらしく、腕を組んで土砂を見つめる。と、その時だ。

「……ーい！ おーい！ そっちに誰かいるのか！」

「お、おうー！」

少し向こうから男の声。耳をすませてみれば何人かいるのかセントシュタイン側は騒がしい。

「こちらはセントシュタイン兵！ この土砂崩れはこちら側で何とかするから、ウォル口村は心配しなくていいぞ！」

「そうか！ 村長に伝えておく！」

「それから、ルイーダという女性がそちらに向かっているようだ！ よろしく頼むぞ！」

「おうー！」

……。話、終わっちまったな。兵士が出たとなるとこつちができる事は本当になくなっちまった。名乗ろうと思ったがアーミアスが余計な事は言うなとばかりにこつち

を見てやがるから言えもしない。さっさと帰るかとばかりに踵を返したアーミアス。何を思ったか肩を掴んできた。

ルイーダとは誰だ、と考える暇もなく。

「もう無為に戦う必要はありませんね。帰りはキメラの翼でいいでしょう。捕まってください」

……捕まってください、じゃないだろ。言うが早いか翼を放り投げ、青い光に包まれていたんだから。

この後俺は親父にもリツカにもほかの大人にも怒られることになる。峠の道が開通すればわざわざ危険な目にあつて聞きにいかなくても分かつただろうとも、あの戦闘でアーミアスが背中中の傷が開いていたんだとも。あの時の視線は痛みをこらえていたのか、と少し合点もいった。

・
・
・
・
・

9話 哀悼

オラオラオラオラオラアッ！ 俺の邪魔をする魔物は死ねエ！ そしてその魔物としての生はそれで全うしたことになるんだから来世で会おうぜてめえら！ 今はずっと死ねエ！ オラオラそこのきゆうり！ そっちのゴーヤ！ 縦切りは面倒臭いから横切りで安らかに死にやがれ！ オラオラアッ！ 痛みはねえぞ、即死だからな！

俺が使ってるのはなまくら同然の銅の剣だが、勢いよくぶった斬れば切れ味なぞ関係ない。その代わり返り血とかすごいがな。さつきから俺の髪の毛がべたべただ。ニードが引いていないのは純粹にありがたい。

斬られると分からないのか、それでも向かってくる無謀で愚かで哀れなスライムを一刀でこの世から解放してやる。ズバツと下から切り上げれば体が二つに泣き別れて寸法だ。

哀れな魔物達は一応、天使界では死ねば悪しき心を浄化されて平和に再び生きられるのだ、と教えられたからな。死んだこともないし、嘘か本当か分からない事はもう試すつきやないだろ？ それに心なしか死ぬ時こいつら解放された顔してるくね？ 安らかに見えるのは都合よく解釈しているだけなのか？

後は後ろから付いてくるニードが怪我しないことだけ気をつけてだな、怪我しそうな俺が颯爽と割って入って守護してだな、その他もろもろの問題を全部無視して突撃だぜ！ 峠の道とやらはそこそこ、つか歩けば遠いからよお！ 二度と翼なんて要らないが、あつた方が便利ではあつたと思うレベルだ、クソ面倒い。微妙になんか遠い。

……俺が何でこんな脳筋戦法とつてるかを説明しよう。俺は戦闘とか諍いに対しては、実に天使らしく好きじゃないから当然、戦闘が好きとかそういうことはない。やりたくてやつてるんじゃないやねえ。ただ外に出たら当然のことだが、早く着くために走つてるわけだよな？

もうそれだけで既に背中の中の傷が開いたっほいんだわ！ やつべえ！ クソ痛い！ 包帯まいてたが血が滲んでないか心配だぜ！ 幸い初日程じゃないがな！ つうことで早く行つて帰りたい。ホント、それだけだぜ……このペースだと腹の傷も開きそうだが。せつかく治りかけてきたところだが、まあ村人を守るならその程度安いしな……。こいつ何回庇わせれば気が済むんだ……？

だが俺にとつての朗報もある。あと少してホイミが覚えられそうなんだ。……これはここに来る前からな。前々からいけそうではあつた。俺が例え旅芸人扱いだとしてもあと少しには変わりねえし。

とつと覚えて帰ったら寝て魔力を回復してこの煩わしい怪我ともオサラバ。さつ

さと癒したいもんだ。傷跡は残りそうだがなあ……歴戦の戦士っぼくてかつこいと
思える年齢でもないから消せるもんなら消したいが。

だからモーモンよオ！ 俺の糧になりやがれ！ そんで幸せに生まれ変われ！
せめて一撃で葬ってやるからな。オラオラッ！ 痛くないだろ！ せめて苦痛はないよ
うに。

ッ……………ごめんな。

……俺がこの手で切り裂いて死んだモーモン。どことなく穏やかな死に顔。師匠が
倒したモンスターもみんなこんな顔をして死んでいった。

何故か周りに天使だとバレル補正があるというなら、倒した魔物が次は狂暴に人間や
天使を見るなり襲いかかる存在ではなく穏やかに過ごす何かになる補正があつて欲し
いと祈るのは当然だよな。

膝をついて祈る。どうか、どうか、次の世では笑っていられますように。天使だから
祈れば神に少しは届く、と信じてえ。人間よりは届きそうじゃね？ 数の少なさに優
先して聞いてくれそうじゃね？

何度も何度も殺す事に膝をつく。祈る事に魔物の死体にそつと触れるとそれらは青
い光になって空気に溶けていく。ふわふわと暫く俺の周りを漂った光は空へ昇ってい
く。そして、青空に吸い込まれていくんだ。俺にとっては二度と帰りたくもない天使界

の方へ、さらなる高みへ。

青いそれは綺麗なのに、見ているとどうにも悲しくて、しかも傷が痛むものだから俺はすごい形相だろう。だから、どうした。ニードに見られて滅るもんでもない。悼む心を押さえつける必要はないんだぜ？正直に、想う時は想えばいい。

だが、心も体も痛い。

ああ、出来るものなら、命を奪いたくは……。

いや。これはリツカを、人間を守るためには必要なこと。そう心に決めて今までやってきたじゃないか。守護天使たる者、魔物を撃退して人間達の生活を平和で円滑にしながらはいけない。そうしたい。だから師匠のエッグい剣のシゴキに耐えて、だが魔物を殺した感覚が消えなくて、吐きそうで泣きそうな時、ラフエツトさんに抱きしめられた事もあった。

見習いで一番俺が頑張ったから、一番俺が最初に辛い目にあつた、らしいぜ。辛くないかないって答えたが。辛いのは俺ではない。死んだ魔物だろ？手が震えて、眠れなくて、だが見習い共には弱音なんて吐けねえだろ？

俺はあの時な……一番守護天使に近い見習いだつたからな。みんなの期待が重かつた。投げ出せないし、何より今も人間が魔物に殺されていると思えば剣を捨てることも、守護天使を諦めることも出来やしない。

あの時は、たしか、ナツミの子供、お転婆なエンカが魔物に襲われそうだったんだよな。助けられて良かった。あの笑顔が曇らなくてよかった。

これだから天使は最高だ、人間を守ってナンボ、それって守ることだけ考えてりやいんだぜ？ 人間になりたい俺でも人間になつたら守つてばかりじゃなく自分も守らなきゃいけないよなって集中出来なくなる。それは困る。俺は人間が好きだからな。こんな時は天使でよかつたって思うからマジ俺現金。

……ニードが俺が祈る理由を分からないとかいう顔をして質問してくる。センチメンタルな今は丁寧に答えてやるか。

別に人間のお前が分かつてくれるなんて思つてないんだ。お前達は、人間達は……天使と違つて生を営み、命を繋げていく。魔物もそうだ。だから、天から湧いてくる俺達には、気持ちかわからないし……お前達も理解出来ないだろう。使命だけを胸に生きるのが真つ当な天使だからな。愛なんてダメらしいぜ？ 博愛じゃないとダメ、らしいぜ？ クソ食らえ。

ちなみにな、子を残せもしない天使にはそういう欲は欠片もないんだぜ？ いだけもしないし、多分リツカたんのぱんつみてもテンションが上がるだけで、本当に上がるだけで、俺の最高の思い出になるだけだ。……そのくせ神は俺達に「あいするところ」だけは与えていきやつた。

全くもって解せないが、だから俺は人間が大好きでいられるんだぜ？

ほら、ニード。また余所見してるから俺が庇ってやって怪我を拡大しているんだろ
うが前を見やがれ！ クソ痛いだろうが!!! 守るのもいいが早く帰ってえ……。

おうおう、やつと着いた峠の道、さて入るか……。うわ、腹辺りに食らった傷が服に
滲んで気持ち悪……。俺の精神衛生上良くないから見えないようにしてみただけなの
に、またニードが突つかかる。いいからお前は黙ってるよ。あん？ 傷？ 薬草貼りや
あ満足か？ ……これでいいのか？

あー、自分のわがままに付き合ってもらってるっていう意識がねえなこいつ。ま、
さつきでホイミ覚えたからウインウインではあるんだがな？ それとこれとは話が別。
守護が使命の俺がパラデイン真つ青なぐらい庇ってやったのも当然のこととして……。

あ？ なんだこりや。

さて問題の土砂崩れはどれだと思つた途端目に飛び込んで来たのは……あの、例の大
異変で天使界に顔を出したはいいものの雷に貫かれて俺と一緒に人間界に落つこちた
やつじゃないか。名前は知らん。

……乗り物、みたいだな？ こっち向きに開けてみると言わんばかりに扉みたいなの
がある。ここから開けて入ればこいつが空へ飛んだりするのか？ ……気になるな。

またニードがなんか言ってるぞ。……おう、お前には見えないか。ならやつぱり俺が

リツカさんの葉を取りに帰るために来てくれた迎えなんじゃね？これ。なんつー……
何でもありかよ?!

あーあー、さいですか。土砂崩れが先つすか。分かっている、俺は守護天使だから自分のことより人間達のほうが大事なんだぜ？俺もそっちの方が重要事項だと思うしな？

さあて土砂崩れを……ってこりや何とかならねえわ。イオナズンを使える魔法使いでも連れてこい。吹っ飛ばして、んで被害を拡大してくれるだろうよ。魔法すら使えないただの人間と魔力のない手負いの天使にはどうにも何ねえぞ。帰ろうぜ？

からの、土砂の向こうからの伝言を聞いた俺達。それを胸に歩いて帰る気のアホを引っ掴んで俺はキメラの翼でウォル口に帰ったんだが……体中傷が開いたり新たに出来たりと治ってきたのも散々なことになっていた。おかげでリツカさんに怒られるわ、さっさとベッドにぶち込まれるわだ。

だがリツカさんのお粥が神がかったから問題なし。人間界って幸せの塊じゃねえの？

・
・
・
・
・

深夜。人も犬も寝静まったウオル口村。聞こえてくるのは滝の音、風がそよぎ木の揺れる音。揺れる木々も眠っているのだろうか、外の魔物達も眠っているのだろうか。月明かりすらぼんやりとしたそんな夜。

さくり、さくりと草を踏むゆつくりとした足音が聞こえてくる。

足音は滝の前で止まり、桶で清らかな水が汲み上げられた。すると今度はざばりざばりと水をなにかに……汲み上げる本人にかけ続ける音が留めなく続く。

月夜の下、水に濡れていればその本人が気にしている灰色はよく目立った。黒になりきれず、白にもなりきれない濁った色は少し濃く見え、一層彼を「灰色の天使」だと知らしめるごとく、淡く、そこにある。

「……なさい」と

水を体にかけているのは清めのつもりなのだろうか、禊みそぎなのだろうか。彼は一度浴びる事に何かを呟いているようだった。

「いめんなさい」と

見開かれた目は罪悪感だけを宿し、その感情すら自分は抱いてはいけないのだと洗流す。その声は「哀」を堪えるように震えて。

月に雲がかかり、彼の姿もぼやけていく。

「ごめんなさい」

優しい天使は魔の生命をも悼む。

黒い眼はまなこふいと天を仰ぐ。人になりたかった天使は、空に答えを求めたかった。自分が命を奪った者達は本当に幸せになれるのだろうか。ただ苦しんだだけではないのかと。

「師匠……」

白い手が空を掻き、虚しく下ろされる。

「迎えに来てください……」

・
・
・
・
・

10話 翼

怪我がない、つまり歩く度にぴりぴりしないってのはいいねえ。これでより一層村の美化活動に励めるってもんだぜ。ついでに天使の服はびらびらしてて掃除の邪魔だから布の服を買ったぜ。スライムを倒して得た金で。シンプルな服は動きやすくいいな。俺みたいな地味色野郎には良く似合うのもポイント高いぜ。

ついでにオート天使バレ機能がオフになっていることを願う。こつそり動きたいんだよ俺は。

うーん、いいねえ。煩わしくなくて動きやすい。守備力が心許ないから皮の鎧も買ったし、外に出る時はそつちを着ればいいだろ。武器を買う金はなかったが、まあ……本職そつちじゃねえし。怪我はもう勘弁して欲しいからな。本当に、痛いもんは痛いんだからな！

おつ、閃いたぞ。天使界に帰ったら大切な物を引き払って、どう止められてもまた地上へダイブして帰ってくるつもりなんだが。

俺でも多分、ダーマ神殿とやらに行けば職業変えられるんだよな？ 天使が旅芸人になるならいけるよな？ もっと誰かを守りやすい職業がないかちよつと詳しい人に面談し

てみたいぜ。ダーマの神官って職業診断してくれるんだろ？

旅芸人より守りがマシなのがあるはずだし。パラディンとか良くねえ？ パーティメンバーの壁になれる仁王立ちってすごくねえ？ パーティ守れるなら誰だって守れるよな？ 博愛の欠片もない俺がなりたがってるのはお笑いかもしれないがよ。俺のは偏愛じゃねーか。鼻根は自覚してるぜ、できるならみんな守りたいが。

てかパーティ組む前提で考えてるけど、セントシユタインとかの都会で人集めして誰にも見向きにされなかつたら悲しすぎるな。

考え事しながら掃除するのはちよつと前に戻ったみたいでなんだかんだ落ち着くな。リツカたんがやつと返してくれた箒であちこちさつきか掃いてたら、村人たちはなかなか恐縮極まれりって顔なんだが。守護天使って本来地味なこういうことをメインにやってるもんだからさ、本職だから気にすんなって何回言わせるんだ？

それと天使の服はハイネック暑いしタイツダサイしかつたるいから今日はお休みなだけなんだ、動きやすいから布の服着てるだけだからな。ブーツ蒸れるから皮の靴なんだからな。なんでみんな服の話に触れるんだ、そつとしておいてくれ。

あとちよつとしたら掃除も終わるし、それが終わったら何でも雑用を言ってくれたらいいんだぜ？ おう、みんな失せ物はないか？ 健康で幸せか？ 病気は効きそうな薬草をとってくることしかできないが、怪我に関してはホイミを覚えたから、今日から俺

でも即時対処できるぜ！ 子どものお守りとかでもじゃんじゃん言うてくれよな！

姿が見えると要求をみんなに直に聞けてほんと便利だぜ。神様ありがとう、俺の邪魔な翼をもいであげて！ 出来るならもっと早くにダイブを勧めてほしかったぜ！ 翼を捨てるには翼を使わずに空を飛べばいいなんて思いつきもしなかったからな！

よつ、元気なおばあちゃん、形見の指輪、ちゃんと持ってるか？ うんうん、それはよかつた。貴女に神のご加護ありますように！ 九十まで生きたあんたのばあちゃんみたいに長生きしてくれよな！

おおそつちのぼうや、ニードに天罰は今は無理だぜ。めちやくちやあいつ、親父さんに怒られてつからな。今日はそうじゃない？ ん？ なんだ？ お手伝い？ ……お前気が利いて可愛いなあ。でも俺の仕事はあとちよつとで終わるから大丈夫だぜ？ ほら大きくなれよ、ほらほら高い高いしてやろうか？ 要らない？ 抱っこで十分？

……俺そんなに貧弱に見えるか？

シスター、もうすぐ掃除が終わるから教会の周りはピッカピカだぜ。外で祈るのも、太陽を浴びて風を感じるなんて自然の息吹を感じれていいことだよな、俺も一緒に祈ろうか？ ……断られた。

……要らないってか……ん？ なんで俺に祈るんだ?! ただの天使だぞ、天にいらつしやるのは神だから！ 天使は厳密には天使界にいるから天までは届いてないから！

おい、ちよつと!

だああああああつ! ちゃんと見守ってるから本人に言ってくるのはやめてくれ! 恥ずかしい!

あとおばあちゃんに手渡しでお供えもの、というかお布施? もらったらどつちかかっていうと孫扱いされてるみたいでおもしれええええ!!! 何この感覚! このおばあちゃんの若い姿も知ってるのに、俺がおばあちゃんに孫らしいことされてるってやばいぞこれ! ん……これは……? 安全お守り……? ……不甲斐ない天使でごめん!

「……アーミアス様、じゃなかった、アーミアスっ!」

んん? 今度は……おお、リツカたんだ、どうしたんだ?

リツカたんを前にしたらポーカーフェイスが一気に崩れてニヤついてしまうキモさで悪いが、通報しないでくれ、な? な? リツカたん太陽のもとだと可愛さフルスロツトルで吐血しそうだぜ!

「あの、お願いがあるの。後で来てくれるかな?」

「勿論。俺に何でも言ってください」

リツカたんのお願い?! やばい、やばいぞ、俺の全身全霊をもってして叶えるしかない、俺が叶える! 俺が! 誰にも譲らないからな! お願いがあるのって言う時の

リツカたん可愛すぎな！ ちよつと迷った感じに視線をさ迷わせたリツカたん！

心のアルバムに今ジュツと焼き付いたぜ！ リツカたんまじ可愛い！ あーその、それだよ！ 健気が全開！ 俺の心にぶっすりくる！ 刺さった！ 今刺さったからな！ 一万六千九百七十二本目の俺の心のリツカたん大好きゾーンが！ 本日三十二本目じゃね？ やばくね？ 今日サービス多めじゃね？

これは早く行くつきやないとリツカたんが家に着くまでに掃除を高速で終わらせた俺はリツカたん追いかけて駆け出した。すぐに追いついてよ、そのまま並んで帰るとかやばくね？ まじこれ遠目から見たらリツカたん俺、付き合ってるみたいじゃね？ 俺が師匠みたいな濃い眉イケメンだったら既にゴールインしてるくね？

……ちくしよう！ほんと横からのリツカたんも可愛いなあ、お疲れ様って労わってくれるリツカたん可愛すぎて目から血の涙が出そうだぜ！ここで謙遜……というか当たり前だし……する俺。なんつーか、なんつーか、リツカたん可愛すぎて俺が最高に空気っていうこの空間最高、リツカたん引き立てて眩しいぜ！

ちなみに朝から掃除に忙しかった俺は天使像に大量の花が供えられていたことに気づかず、あとで村人たちの優しさにほっこりすることになった。これだからやめられな
いぜ、守護天使。

・
・
・

「天気、いいですね」

「ええとても。日差しが心地いいですよ、アーミアス様」

「はい。掃除日和ですし」

すっかりご自身の魔法で怪我が治ったアーミアス様。包帯やガーゼを当てている姿に見慣れてしまい、何も隠されることなく晒されたお顔は新鮮で、そのせいかいつもよりさらに美しく、ぎごちなかった表情も少し柔らかく見えて眩しい程です。恐れ多い。

なのに隣に立っている今、幼い頃から一緒にいたような懐かしい感覚があり、いつまでも隣にいたいとまで思えてしまいます。心に染みとおるように。

いつもの服ではなく、誰でも着ているようなただの布の服をお召しになったアーミアス様。誰もがあの鳥のように軽やかな服のアーミアス様に見慣れていますから、それとなく聞きます。でも返ってくる答えはいつも同じく、掃除しやすいから布の服を買ったと。そして掃除はいつもしていることなのです、と穏やかに答えられる。

ああ、アーミアス様が見えない頃。優しい風が落ち葉を集めているのを私は不思議に思っておりました。それはアーミアス様だったのですね。すっかり疲れてため息をついた時、励ますように肩を叩いたのもきつとアーミアス様なんでしょうね。

「おばあちゃん、形見の指輪はありますか？」

「ええ、ちゃんとありますよ。アーミアス様、あの時はありがとうございました」

「いいえ。思い出を守るのも俺達の務めですから」

すつと一礼したアーミアス様は、晴れやかに言いました。神々しく、とても優しい声で。

「貴女に神のご加護ありますように」

神の使いその人に言われたおばあちゃんは、嬉しそうに帰っていかれました。彼女、長生きできそうですね、とアーミアス様は嬉しそうに言い、おそらく私たちを何代も前から見守つてくださっているアーミアス様にはおばあちゃんのおばあちゃんすら知っているのでしょうか……天使様のお墨付きがあるとなればおばあちゃんも喜ぶでしょうね、後で伝えないと。

また掃除を再開したアーミアス様に、今度は小さな男の子が近寄ります。アーミアス様を見上げてキラキラした目で、あんなに懐いた様子で。どこことなく穏やかなお顔になったアーミアス様はぼんぼんと男の子の頭を撫でてやり、何か言つてやっているようです。そして華奢で、見た目だけは私よりも幼い姿だというのにひよいとその子を抱き上げて。

アーミアス様の周りには今日も人が集います。村を守護する天使様にみんな夢中なのです。例えばアーミアス様がリツカの前だけ、あんなにも笑顔になるのだとしても……誰から見てもアーミアス様が気に入っているのはただ一人だとしても、みんなも彼に惹

かれるのです。

かく言う私だってそうですよ。彼のボーイソプラノの声をただ聞いているだけで幸せを感じますし、心の底から私たち人間とは違って善道を行く彼に羨望を感じます。

天使様というのは、こうも聖なる存在なのかと……今もあのニードは叱られているようですが、自分の身を危険に晒しただけでなく、アーミア様が守ってくださいたから無傷だったこと、つまり昨日の時点では傷が癒えていなかったのに無理をさせてしまったことを叱られているのです。怪我をしていてきつと、歩くだけでも辛い状況でアーミア様は守る、そんなお方なのです。

身を呈して私たちを守る守護天使様。一体彼は、どうして守ってくださいなのでしょう？ 天から遣わされた、と彼は言います。私は人間ですから天使様のご意思を図る事はできません。でも、私はその立場だとしても……と恐れ多くも考えても、こうも守れるのでしょうか、疑問でしかありません。

あら、リツカが来ました。途端に、優しくも表情に乏しいアーミア様のお顔はばあつと華やぎます。アーミア様は本当に、最初から……そうです、彼が目覚める前から、私たちがアーミア様を見ることが出来るよりも前からリツカは天使様に愛されているのです。

今から考えればリツカの周りに悪いことが特に起きなかったのはそうでしょう。

ウオル口村はとても平和なところですが、それを考えても、です。

不遜で迷惑な客はリツカが追い出すまでもなくこの村から出ていかざるを得ないことになっていましたし、リツカの宿屋の周りはゴミ一つ落ちていないことがありません。ほかの場所も気づけば綺麗になっていることがありましたが、リツカの家と宿だけは別格です。そもそも木の葉一枚寄りつけないのです。

信心深いリツカだからこそ天使様の存在を敏感に感じ取れ、愛されていたとも考えているのですが……やはり、彼の感情はリツカには、リツカにだけは惜しげもなく晒されるのです。それが羨ましくもありますが、私があんなに優しい人になれるかといいますとやはり無理でしょうから、そういうことでしよう。

「あの、お願いがあるの。後で来てくれるかな？」

「勿論。俺に何でも言うてください」

ああ、アーミアス様、幸せそう。テキパキと掃き掃除を終わらせたアーミアス様はこちらにもまだ明るい笑顔の消えぬ美しい顔を向け、一礼すると箒を持ったまま走って追いかけて行ってしまいました。とてもいいものが見えました。

少し前まではたまに、リツカがこのまま天に連れていってしまわれるのでは、とも危惧していました。リツカは昔と違って体は元気になりましたが、天使様の愛を受けては……です。ですがそういうことはないでしょう。アーミアス様は留めて下さるでしょう。

リツカに追いつき、共に並んで歩き始めたアーミアス様の後ろ姿には当然、純白の翼はありません。失ってしまったそれに悲しまれることも何故か、ありません。

ですが私の目には天使様の背には光の大きな翼があり、リツカを包み込むように守っているように見えるのです。

・
・
・

11話 遺跡

頭にきゅつとおろしたての青いバンダナを巻く。これでホコリ色の髪色をマシンにカバー出来る。なおかついざって時のための包帯の布、確保って訳だぜ。守備力はそもそも期待してないしな。所詮は魔力の箆っていいない布切れだし。

にしても俺、ルーイダさん、という女の人の様子が心配だ、見に行ってくれと言ったリツカさんの頼みを聞くべくこうして俺は単身外へ出る準備をしているんだが……皮の鎧にバンダナ、皮の靴、ないよりマシなクソダサ天使のタイツ。こんな装備でビジュアル的に大丈夫なのか？ と思いつつも浮きに浮いてる服装に銅の剣を装備して外へ向かおうとしたらみんなから差し入れ薬草が降り注ぐ。

……ちよ、そんなに沢山！ 薬草、こんなに貰っていい値段じゃないんだぜ！ 俺がリツカさんの頼みを聞いているのは人間の生活を円滑に安寧にするという守護天使の役

目をただこなしでいるだけで、下心はあると認めてもだ、リツカたんには俺が寝込んでた時の薬草やら包帯やら、果ては寢床、からの飯まで用意してもらってたんだぜ!!

俺が天使じゃなくて人間でもこれぐらいのお礼をして当然だろ、だからそこまで頼りなく思わなくても達成してくるからよ! しかも一昨日と違って万全だぜ?!

……だが前科持ちの不甲斐ない俺が何を言ってもつつかえせなかつた薬草を袋に突っ込み、村の入り口ではニードの取り巻きのなんとも言えない顔に見送られ、俺はウオル口村を後にした。

ひいふうみい……何個あるんだこれ。愛が重いぞ草なのに。だが、これで、怪我ひとつなく帰ってこられるな。怪我は痛いだけじゃない。誰だつてしない方がいい。優しいあの子を傷つけてしまうからな。だからこそ守るんだが、守る相手がいないうちはそれこそ全力で心配の種を潰さないと。

レベルも上がったし、怪我も治つたしもう苦戦はないだろうと身構えてたら魔物が近寄ってこなかつた幸運。ありがたく神のご加護だと思ふことにしよう。

・
・
・

キサゴナ遺跡。昔はここをウオル口村の人間たちはセントシユタインへの通り道にしていたつてやつだな。おう、知ってるぞ。ただここから向こうは管轄外で遺跡自体に入ったことはないから「知っている」なんてマジで存在だけなんだがな。

魔物もうじゃうじゃいるしな……聖水でも撒いて姿を隠すか？だが金が足りなかったから聖水は一個しかねえんだよ。つか買った時の視線が痛かった。天使が聖水を買うなんて……つてな。

言わせてもらおうと天使はそのままの姿でも魔物には見えてるし、天使の聖なる力と聖水の認識障害は全然別の力だからな？トヘロスやステルスが使えない以上、円滑に魔物の巣窟を歩き回るためには聖水を使つたつて普通だろうが……と正直にきつく言えないのがやややへタレの俺だ。人間の夢を優しく見守るのも天使の勤め。夢は壊さないで曖昧な顔をしておく。

……つうことは俺はずつと清らかじゃないとダメなのか？

というところでもないぜ。てか普通に大丈夫だ。既にリツカたんの前でしよつぱなから無様にぶつ倒れてるし、三日目に大勢の前ですつ転んだし、俺はある程度のダサさは既にバレてるからな。地味ブサイク顔とかも全開だしな。だからあまり気にすべきことじゃない。天使たれと清らかに、なんて俺には無理に決まつてるし、ちようどいい。つか師匠みたいなハゲでさえもたまに間違えるんだぞ？俺の呼び名とか、タイミングとかな。だから天使は完璧じゃない、この話は終わりだ！

ほんとこの遺跡探索が終わったら迎えに来てくれ師匠。いつもいつもリツカたと俺の時間を邪魔してきたのに今回はいないのは悪意を感じるぜ。ハッ、もしかして、俺

を氣遣つて……？　ないわー、ないない。それぐらい空気を読めるなら師匠、髪生やしてるわ。

つかハゲの髪事情なんざいいんだよ。せつかくキサゴナに来たんだがなーんかな。魔物じゃない氣配がするぜ。これがルイーダさんなのか？　あまりにも近い。見に来なくてよかつたんじゃないか？

とか思つてたんだがな。入り口が見事に閉ざされてやがる。まあ当然っちゃ当然なんだが。開けつぱなしだとたまにニードみたいな血氣盛んな勘違い野郎が冒険とか洒落込んで突撃、準備もろくにしてねえから魔物に殺されアボン、とかありえるだろ？　笑い話にもなんねえだろ？　先を見越してちやーンと閉鎖する時に封印してくれてたんだな。まあ今は困るんだが。

ウオル口側は閉鎖されててもセントシユタイン側は開いてるかもしれねえだろ？　そこまで確証はねえぞ？　封印のルイーダさんがいるということになるからな、最悪だ。さあーて、どうやったら解けるのか？

……封印したのは天使じゃなさそうだな、人間がやったみたいだ。この石をなんとかできそうにもないし……。

「?!」

つめてえ！　思わず叫びかけたわ！　首筋をヒヤツとした感覚が撫でていったみた

いだけ、気色悪いな。……なんだ幽霊かよ。オツサン、成仏してねえみたいだな。なあ、リツカたんのお父さん。娘さんを俺にください。

冗談はさておき。なーんにもなんにも言つてこない親父さんは滑るように歩いていく。ついて来いってことだよな。未来の息子がお父上に逆らうはずもなく、俺は素直について行つたぜ。

うーん、お父上とリツカたんは似てないな。当然かもなあ、リツカたんは母親似なんだから。

お父上のファインプレーのおかげでボタンをポチツとした俺。とつとと洞窟の奥に向かうとするか……んなわけないだろ。

幽霊のまま、ということは何かしらの未練があるってことなんだぜ？ 未練を何とかして解き放つということをしなけりやこの世をさ迷いっばなし。なのに天使ぐらいにしか見えないというなんとも哀れな亡霊だ。しかも放置したら下手したら魔物になっちまう。

だから幽霊は速やかに成仏させねえといけねえ。

つていねえ！ 逃げたのか、それとも扉が開くのを見届けてどっか行つちまつただけなのか?!

クソツ。俺じゃダメなのかも……。だが俺は諦めんで、娘さんは俺が守る！ だか

ら成仏！

決意を胸にずんずん進んでいけば魔物がどことなく怯えて道を開けてくれる。この奴らはなんて優しい奴らなんだ、こんな魔物ばかりだったら世界も平和になるだろうに！

それに報いるためにもはやく幽霊親父とつ捕まえねえとな。……あれ？
冗談みたいなことを考えつつ俺は遺跡の奥へ奥へと進んだ。

・
・
・

1 2 話 切迫感

.

.

.

……ほんと、油断してたわ……。

峠の道が土砂崩れで通れなかった私は、宿王の娘リツカを勧誘するために、キサゴナ遺跡という古いルートを通ってウォル口村へ向かっていたのだけど。

やっぱり何分古い遺跡で、あの地震ではあちこち崩れていたって訳よ。そして運悪く落石で足を挟まれちゃって、このザマよ。

それに最悪なことに、さつきここら一帯ではボスとも言える規格外の強さの魔物を見ちゃったから、いくら私に腕の覚えがあっても……動けない状態でここにあいつが来たらもう絶体絶命なの。遠くの方から地響きが聞こえてくるから戦々恐々。

足自体の傷は大したことなくて、本当に挟まれてるだけっていうのが不幸中の幸い、かしら……。でも抜けない限り動けないんじゃないの。

試行錯誤しながらも、だんだん地響きが近付いてくるのがはつきりわかって焦ってしまふ。そしてもし音を立てたりなんかしたら、あいつが気づいてやってくるかもしれない。静かに岩をのけるなんてことを手早くやらないと……。

そんな焦る私を助けたのは……見た目だけは幼さも残る少年だったわ。その幼さを文字通り頼りないと思う事はなく、そういうもののだと納得できる容姿。薄暗い遺跡の中でも燦然と輝くオーラ。真面目そうで、星星の光を宿した瞳は私を見ると探し物を見つけた子供のように輝いたの。

私には、彼が人ではないってすぐ分かったわ。いいえ、誰だつてその事は分かるでしょうけど。人ではないけれど、当然魔物でもない。清浄なオーラは魔の者とは相れない。そうね、ぴったり来る言葉なら天使、でしょうね……。まさか本当にいるなんて思いもしなかったのに。

彼はそう高級な装備はしていなかったわ、でも彼は手練だとすぐわかるの。身のこなしが羽のように軽やかだったから。

そして、彼はあいつの存在に気づいているみたいで小声で言ったわ。

「貴方がルイーダさんですか？」

「え、ええ」

「無事ですわね、よかった。今足を解放しますから……」

そうやって、天使の君が岩を持ち上げようとした時。

あいつが、来たの。

手練でも苦戦しそうな巨体を見て危険もわかったでしょうから逃げると言ったのに、彼はなんとすることも無いように剣を抜き、私に向かってこう言ったわ。

「人が危険にさらされているのに、俺が放っておける訳がないですよ」

使命に帯びたように……いいえ、たくさんの人を見てきた私にはわかる。彼は心底そう思っているのだと。星の瞳に輝くのは底知れない意志。それを当然と思う善の心。そして、母親のように私を見る目は……日常の中ふと感じることのある不思議な感覚に似ていて、なのにそれよりずっと優しかったわ。

そして、彼は強かったの。

……

俺はちゃんとしてリツカさんの親父さんに挨拶することが目標じゃないだろと思いついてだな、さっさと遺跡搜索を本格化していた。あちこち魔物がいるが積極的に向かってこない限り放置だ。たまに向かってくるが数回斬ればなんてことは無いヤツら。受けるダメージは薬草で回復、完璧じゃね？

……ん？ 目標確認！ おーっ！ ルイーダさんも綺麗な青い髪だなあ、これはこ

れは、リツカさんに早く会いてえ！ じゃなくてすっげえ巨乳美人。谷間がよく見え

るってほんと、眼福眼福。でもって彼女結構ピンチじゃね？ 近くに魔物いるよな、強いヤツ！ 早く助けて脱出しないと俺もやべー。

だからよ、よつこら助けようとしたら嫌な予感の中してなんかデカイヤツ出てくるし！ クソツタレ、先に倒すしかないとかマジないわー、普通小心者の俺みたいなのはスルーして出たくね？ こんなでかいやつに向かつてこられたらタダでさえあの大異変で脆くなつた遺跡が一発アボンしそうじゃね？ つか崩れたらアイツもろとも埋まりそうじゃね？ それは勘弁！ 圧死した天使とかやめろ！ 師匠が破門しかねないぜ！

つかコイツに踏み潰されたらよ、見た目通り軟弱つてわけじゃない俺でも見た目度通り、無様にべちやつと潰れそうじゃね？ やばくね？ でかくね？ ほんとねえわー、デカイだけでこんな脅威とか。いやまあ、絶対俺より力あるヤツだからデカイだけ、じゃないだろうが！

戦いたくないわこんなヤツと！ どうやってこんなやつ倒すんだほんと！ こつちの攻撃手段はほぼ剣で殴るだけなのに、クソが。

だが俺、これでもれつきとした天使なもんで。

天使らしからぬ天使つて自覚はあるぜ、だがまあ人間を天使界一愛してる天使なんだぜ！ 自負してるからな！ つまり人間を見捨てられつか。逃げて！ つて必死に言

われてもお断り！　せめてべっぴんさんの盾になってから死ぬ！　人間を守ってとか本望だからな？　リツカたんを守るのは超本望だが！

でもって人間をなんとしても守るのはさ、俺のポリシーだから！　人間はウオル口村出身じゃなくても、在住じゃなくても俺が守る！　守護天使以前に俺は天使ぞ？

あとさ、こんなきらきらした美人死んだら世界の損害だし！

いかにも硬そうな皮を持つ……でかいヤツ。名前は知らん。向かってきたら思わず斬りつけたんだが、あんまり効いてなくね？　やばくね？　でも……ダメージは通った！　これで勝てる！

幸いルーダさんではなく、斬りつけてきた俺しか見えていないヤツはあつちではなくこつちに突進してきた。まあ俺は避け……られてねえけどな！　腹にもろに喰らってクソ痛い、まあ死ぬほどじゃねえ。

むしろこつちのダメージの瞬間にボコってやったからアイツの体からも血がにじみ出てるぜ。効いてる効いてる、でもってクソ怒ってる！　オラオラこつちだこつちだ、単細胞！

つーかこちとら村人たちの好意の薬草にホイミがあるんだぜ？　狂暴ででかいだけのやつに負けるわけがねえだろ！　オラオラ！

それよりあいつが飛び跳ねて落ちてきたガレキが体を打つ度、痛みより遺跡が心配に

なってくるんだが。つか、頭の皮が切れて目に血がかかって見た目やばくね？ レディにやばいもの見せてる俺、万死に値しそう。

ヒットアンドアウェイを心がけてド突いてんのにはヒットアンドダメージを繰り返して、クソ苦い薬草をいちいち貼っていられなくて貪りつつ突き刺したり切り裂いたり連続。手が痛くなつてもお構い無しで、無駄に体力があるらしいな、なかなか倒れてくねえ。マジねーわ！

俺って戦闘専門じゃないんだぜ？ そういふのは見た目からも師匠みたいな稀有なムキムキ天使の役割じゃね？ 俺は地味に日常生活に密着した助けをするタイプじゃね？ 掃除とか、失せ物探しとか、成仏とかが専門だから！

天使の中でも俺、戦士じゃねーから、マジで！ クソ、時間的に苦戦しすぎだからダメ行ったら戦士になるか！ 腕力がもつと欲しいぜ。

戦い始めて数十分だろうか、体内時計が狂ってるから本当の所はわからないが、そんなもん。

近くの柱がミシミシ言ってきたからここもうダメかもしんねえと、反撃覚悟でデカイヤツを串刺しにしてみたらやっ倒せたわ。マジ長すぎ。ぶつすり突き刺したから引き抜くの苦労して、死んだこいつの体に触れて勿論、祈る。

……すげー苦戦するぐらいお前強かったからさ、次はその力、みんなが幸せになれる

ように振るおうぜ、な？

そいつもほかの魔物と同じように青い光になって空気に溶けたのを確認して、ルイーダさんの方を見れば……ん？ 抜け出せてるじゃねえか、良かった良かった。

「ありがとう、助かったわ」

「ご無事でなによりです」

見た目は無事、だよな？ 実は無事じゃないとかないよな？ 怪我は……見えるところにはなさそうだ。足をかばってる様子もないし、ほんと良かった良かった。じゃー、ウォルロまで護衛しようか？ なんか護衛いらなくらいこの人強そうだが。俺より強くね？ 足挟まれてなかったらアイツに勝てるよな、絶対。

上下関係にあるクソほど厳しい天使の俺にはわかるぜ。戦闘力なら間違いなく俺の方が弱いわ。くう、もつと強くなりてえもんだな！

んー、まあいいや、そんなこと。強くは今からでもなれる、だろ？ 誰かを守るには弱くちやどうにもなんねえがな、それ以上に大事なものは想いだからな。あとさっきのデカイの以外は俺でも余裕だから護衛はできるだろ。

つうことですつげー美人のルイーダさんを連れて、ニードの時とは段違いの丁寧さで俺はウォルロ村に帰還した。

ついでに目に垂れてきた血はきっちり拭き取っておいたが、髪の毛が固まった血でバ

リバリになっているのはごまかせなくてリツカたんに心配されてしまい、絶対戦士になつて怪我を笑い飛ばせるようになるかと誓つたりもしたぜ。

ほんと俺、なよつちいなあ。

・
・
・

13話 日進月歩

・
・
・
ただいまウォルロ！ ただいま非戦闘地帯！ 大勢の人がおかえりと言ってくれ
から間違はなくウォルロ村の人たちは天使よりも優しい存在。俺が今認定した。何回
でも認定する。ここが第二の故郷つてやつじゃね？ まあ守護対象の地を守護天使が
大切に思うのは当たり前だが！

ルイーダさんはリツカさんに用があるみたいだからこのまま家の方に案内を……つ
て今の時間リツカたん宿屋の方にいたわ。土砂崩れで塞がれていようが、宿屋の掃除ど
ころか受付まで欠かさないリツカたんやばくね？ やばいから俺もつと手伝いたい。

手伝つて手伝いまくつてリツカたんはずつと居てくれる？ つて言ってもらいたい。
従業員に俺はなりたくない。ご飯少しと寝るところを貸してもらえたら給料もいらぬ燃
費の良さだからどうよ？ 雑務には定評があるぜ！ ちなみにご利益はない！

言わなくてもいるけどな。嫌がられない限りいるけどな！ もう少ししたら一旦、帰
る方法を探すためにここを離れる、つもりだが。あの変なドア気になるし。ハゲ師匠の
タクシーが駄目ならセントシユタインの守護天使に助けを求めりゃいいだろ。

俺以外の守護天使は見習いじゃないから翼がでかいしなんとかなるだろ？ ……セントシユタインの天使も俺と同じことになってたらどうしようか。もつと向こうの村の守護天使に……以下ループってやつだな。

……本当は離れるの嫌に決まってるんだろ！ でも荷物があるから仕方ないだろ！ リツカたん成長日記が天使界に置きっぱなんだよ！ それを見られたらリツカたんのプライバシーが問題だろ！ あとあれは俺の大事な宝物だからな！ 大切にいつまでも懐に入れておきたいんだよ。本物の方が可愛いけどよ。それとこれはまた違うだろ？

とか色々考えつつ到着したリツカたん自慢の宿屋の扉を開ける。そこにいたのは勿論、清潔なエプロンにオレンジのバンドナ、青いおかつぱ、ぼっちりした目、ほっそりしてるけど働き者でとっても真面目で天使に敬虔なパーフェクト可愛い麗しの存在リツカたん。

今日もさいっこうに可愛いぜ！ 仕事モードのキリツとリツカたんを心に永久保存！ 心のアルバムにジユツと焼き付けリツカたんぺろぺろ！

だがぼっちりした目が見た途端、釣り上がったのに俺は後ずさったが。もしか俺のブサイクレベル上がったのか？ と疑ったがそこじゃなかった。

「アーミアス、怪我してるじゃない！」

「……はい？」

「髪の毛、血がついてるの！ 大丈夫？ 貰った薬草使い果たしちゃったの？」

「あ、違いますリツカ。怪我は治ってますよ。血を洗ってないだけです」

「……そう。あー、心配したんだからね！ 私のわがままでまたアーミアスき、アーミアスがあんな怪我したらって……。おかえりなさい！」

聞いたか？ リツカたん俺の心配してくれたんだぜ？ しかもおかえりなさい、だぜ？ やばいぞ。優しいなんてもんじゃやない。彼女が女神様なんだろ。俺リツカたん信仰するわ。あ、翼をもいでくれた神様もすごいと思うぜ。だがやはり大正義はリツカたん！

ペろ！

「ただいま帰りました」

めっちゃやにやけながら返事するの超幸せ。

こんなに優しくして急いでこっちに来て心配してくれて俺にその曇りのない眼を向けているいろんな表情を見せてくれるリツカたんこそ最強！ もう心打ち抜かれてやばい、動けねえ。

にやにやなんてレベルを通り越して顔がすごいことになってるが流石はリツカたん、目をそらしたりしないぞ！ リツカたんの目に不審者が映ってると思うと胸が痛い。今はこの幸せを……。

「あらあら、ちよつと私、お邪魔みただけどお話ししかしら」

あつやべ。ルイーダさんのこと忘れてたわ。なんていうかこの大人の妖艶な雰囲気を持つルイーダさん、間違いなく俺より年下の人間なのはわかるのに「さん」付けしないと落ち着かない不思議な雰囲気があるな。今更だが。

ルイーダさんはなんとなく微笑ましいものを見て優しい顔をしている感じだが、今の俺のどこが……あ、リツカたんだ。リツカたんが心配してるの微笑ましいの極みだわ。ルイーダさんよくわかってるな！ 握手したい！ ちよつと美人の手に触れたいのもある！ 下心やべーぞ。

でも俺さりげなく警戒してるリツカたんを庇うようにしてるから無理だな。もちろん警戒つっても何この人？ みたいな警戒だから俺まじ立ってるだけ！ ……俺邪魔かもしれないねえ。

「今の間に宿の中を見せてもらったのよ。小さいけど掃除が行き届いていて清潔で……」

あざーす。もちろん普段はリツカたんがやってるんだから素地はリツカたんだし、リツカたんがママに掃除してるからこんな素晴らしい宿なんだぜ？ 床の板が飴色になってるだろ？ ベッドの下にホコリがないだろ？ 壁が変色してないだろ？ 全部リツカたんだから。

「感じもいいし、とつてもいい宿ね」

「なんたつてリツカたんの宿は世界一だからな！ 清潔感は勿論、居心地よくて料理も美味しい！ 最高の宿屋だぜ！」

「はあ、ありがとうございます」

「ああ謙虚なリツカたん！ なのに困惑したりリツカたん！ ぺろぺろ！ ぺろぺろぺろ！」

「私は貴方をスカウトしに来たの。この様子なら大事そうね」

「スカウト？」

「ええ。今セントシユタインの宿屋に人がいなくてね。宿王の娘の貴方ならと思ったのだけど、やっぱり素敵な宿屋だし……どう？ 街で宿屋を営むつもりはないかしら。私は貴方が伝説の宿王を超えることが出来るつて確信したわ」

「すごいな流石はリツカたん！ すごいぞ！ でもつてマジこれどうすんの？」

「リツカたん……。リツカたんが引き受けたとしたら……リツカたんのいないウォル口村……。リツカたんのいないウォル口村……。リツカたんのいないウォル口村……。天使の理よりやばくね……」

「でもつて俺は空気だから、話に入っちゃいけないから無言で聞いているだけなんだが。リツカたんはそれを聞くとびつくりした顔をした後、俯いてしまった。」

「うーん……。ルーダさん、難しいぜこれ。リツカたんにはな、じいさんがいるから簡

単に村を離れられねえんだぜ？ それに親父さんが残してくれた宿屋をほっぽり出せねえんだぜ？ リツカたんは優しいから特にな？

「……無理です。私にはそんな……」

「沢山人を見てきた私が言うのよ？ 貴方なら大丈夫よ」

「買いかぶって貰われると困ります。……それにお父さんが宿王だったなんて信じられないし……」

「……、そうね、すぐに返事を聞くのは無理そうね。あとで、お返事を聞かせてもらえるかしら」

おお、ルーイダさんは引き際もいらしい。そのままこの宿に泊まるらしく、久しぶりにリツカたんの宿屋にはお客さんが入った。これルーイダさん、余計に勧誘したくなるやつだよな？ リツカたんの接客最高だし。

……じゃー、俺は髪の毛洗ったら村のパトロールでもすつか。お客さんが入ったらもう俺に手を出せることはねえしな。せいぜい外の掃除ぐらいだが綺麗なものだ。さっきまでリツカたんが掃除したんだろう。

それにしても……リツカたんがウオル口村を出ることがありえる、とか……今まで考えたことなかったぜ。今、他にも村から出ようと考える若者がいないわけじゃないぜ。実際今まで行った人もいる。それも何人もだ。やっぱり田舎だしな。

なのになんてか俺はリツカたんだとずっと、ずーっとウォル口村にいて信じてたんだよなあ。リツカたんはウォル口村にいる、ウォル口村にはリツカたんがいるもんだって。

……ああ、大好きなリツカたんも俺たちを置いて成長していく。

今は同じ年ぐらいの見た目のリツカたん、きつと目を離れたらすぐに大人の美しい女性になって、どこぞの野郎と結婚するかもしれないし……ナツミたんみたいに孫も……やめよう。

俺はずっと見守ってきたんだからそんなこと、今更だ。人は成長するんだぜ、天使よりもずっと早く。生きる時がそもそも違うんだから。俺たちもな、心も体も成長するが、ずっとずっとゆっくりだ。俺が師匠ぐらいのタツパになる頃には……あと何百年か、かかることだろう。

俺たちにとって人間の成長が早いのは当たり前なんだから、喜んでもうこうやって悲しんじや駄目なんだぜ。

嬉しいと思わなきゃな。リツカたんが、小さくて体の弱かったリツカたんがこんなに大きくなって、元気で、働いてて、すごいところからスカウトが来た。素晴らしいことじゃないか。リツカたんが認められてるってのは、誇らしいじゃないか。

なのに、なんで俺、寂しいんだろうなあ……。

•
•
•
•

14話 懐古心

「神のご加護が、貴方の次の生をも安らかなになりますよう……」

純白の翼がふわりふわりと羽ばたき、眩いばかりに真っ白い手を差し出して淡く微笑む天使様。守護天使様の前で清浄な光に解かされていきながらも安らかな顔をした老人の幽霊が嬉しそうに彼の手をとる。

清い心の持ち主。職業柄沢山の人間を見てきた私には何人も心当たりがある。だが彼は間違いなく別格だな、と感じつつもその場を離れた。

彼は見た目からもわかるように人間ではなく、天使様なのだ。優しいのも当然と思われたが、時折目にするもう一人の天使様よりこの守護天使様の方が清らかな天使らしいと思ってしまうのはきつと失礼なことなのだろう。

未練を持つ私が優しい優しい天使様と話してしまつたら、私も成仏しそうで怖かつ

た。しばらくは近づけそうにない。……まだ、向こうには、私には、行けない。そう思っていたから。

ああ、娘のリツカと同じくらいの年の少年にしか見えない天使様は、今日もふわふわと空を舞い、人々の生活をそれとなく助けては幸せそうにうつすらと笑うのだろう。

その助けられる人間側にいた私は、どれだけ助けられてきただろう。なのに、最後は人知れずその手を拒んでいるなんておかしいものだ。

今日も転びそうな老婆を支え、魔物の脅威から誰かを守り、悪戯な風を装い村の掃除をするのが、人々を見守る天使様の正体。私たちが想像しているよりもずっと幼く美しく、身を挺す優しさを持ち、誰にでも手を差しのべる慈悲深い姿は……私にはやはり眩しすぎた。

彼はどうしてカリツカの周りに飛んでいることが多いのだけど、その時は特にご機嫌の様子だから少し誇らしくあったりするのだけだ。

……私、ロベルトが死んでからもう何年も経つ。死人でありながら現世にとどまっているのは未練を捨てきれないのか、私は今日も天使様に見つかからないようにウォル口村をぼんやりと眺めているしかない。

幸いなことに娘は今日も、風邪すらひかず、大きな怪我もすることなく、明るく元気に笑っている。それが嬉しくて、嬉しいのだから未練なんてないだろうと思うのに。だ

が私がこうしている時点でのトロフィーは忘れられないのだろうな。

灰色の髪をした天使様が、今日もリツカに挨拶した。ああ、今日はもう帰られるのだろう、天使様の世界へ。また来ますと寂しそうな彼が、大人の姿をした天使に誘いざなわれて空へ帰っていったのを私は隠れつつもそつと見守っていた。

天使様と違ってこつそり何かをすることも出来ない……そもそもものに触れることは出来ない……私は、あの場所とリツカを行き来することに無情感を覚えてセントシュタインにふらりと向かっていた。

私が結局捨てた宿は、今どうなっているのだろう。それを知れたら天へ昇れるかもしれないな、と考えたりして。

結局、今は宿が開店すらしていないのを知り、私は失意のあまりどうせ魔物にも見られないのだからとのんびりと遠回りに古い遺跡からウオル口村に帰っていったのだ。

途中で起きた大きな地震で、よもや天使様が降ってくるなんて……死人の私ですら思わなかったのだから、誰も想像できなかつただろう。

……

天使様の降臨から少し。ずっと私たちを見守ってきた天使様が村人たちの中で幸せそうに過ごしている姿も見慣れてきた。特に……やっぱりかの天使様はうちの娘のことが気になるらしく、神々しいまでの笑顔がいつにもまして光り輝いている。

……父親としては少しばかり複雑だが、相手は何分、天使様。天へ連れて行ってしまふつもりは毛頭ないらしく、またあれは恋愛とも違う愛する感情、こちらからなにか言う事は恐れ多くて出来そうもないから良かった、と言うべきだろう。

そういえば遺跡で封印の解き方を導いた時、彼が私を見て微笑んだのは……私のこと誰だかやはり分かっておられるのだろう。だがやはり、あの時も私は逃げてしまった。

そして、さらに月日が過ぎた、草木をも眠る真夜中のこと。

滝の音だけが聞こえるウォル口村の一軒の家から静かに出てきたアーミアス様は、数日ぶりにひらひらとした天使の服を着ていらつしやつた。満月の夜である今日は思いの外明るく、彼は空を見上げながら目を少し細める。今までは真夜中は特に気づかれないうようにしていたが、まあ、もういいだろう。

リツカに私の夢、いや……リツカとて宿屋の主として、あの夢に等しいものがあるだろう。どうか、私のことで少しは後押しになつて欲しい。どうか、好きなように生きて欲しい。そう祈るばかりに私は、彼が私に気づくのを待っていた。

ああ、星の宿つた黒い瞳に本物の星空が映り込み、えもいえぬ美しさを醸し出している。不思議な煌めきを持つ瞳の持ち主は容姿の通り天使なのだから、私だつて見えるのだ。ほら、こちらを見て、首をかしげる。私が逃げないことに疑問を持たれているのか

もしれない。

そして彼は重力を感じさせないほど軽い足取りで村の中を闊歩し、こちらへまっすぐ向かってきた。誰もいない人間の営みの場に不釣り合いな天使が、あの時とは違って、彼は「歩いて」横断してきた。それが、仕方ないとわかつていても少し寂しい。

あの翼を見ることがもうないのは、見たことがある者にとつては大きな損失としか思えないだろう。純白でいかにもやわからそうな翼。どうしてか左翼がぼろぼろになっていたけれど、それが逆に引き立てていたのを思い出す。あれが、彼の完璧とも言える容姿に翼が欠けている。やはり意識すると寂しいものだ。

……だが翼よりも美しく、失われることのない、であろう彼の瞳には、私の青く光を帯びた姿形、ふわふわと地面に付いたり離れたりと落ち着かぬ様子、顔に浮かぶ不安げな表情……そういったものがすべて見えているのだ。久しぶりのまつすぐ私を見る視線に、緊張して身震いする。

整いすぎた天使の相貌は死人にも強烈だった。相手がただの人間なら緊張なんてしないだろうけれど、彼と話すと思えば緊張ぐらいだれでもする。遠目から見ればかりだった相手なのだし。

……彼の星の瞳は、やはり、どこまでも優しい。

「……」

麗しい顔に、だけど何の表情も浮かべずに、天使様は手を伸ばす。その手から逃れるように私はするりするりと歩いていく。それを、追い抜かそうともせず追いかけて来て下さる。きつと意図も分かれてるだろう。

もしかしたら、トロフィーを埋めた時も……私を見ていらつしやつたのかもしれないのだ。このキラキラした目に男の夢の跡の残滓が映っていたのかもかもしれない……出来れば見ていなかったと思いたい。親愛なる守護天使様にも見られたくない事はあるものだ。

『……………アレ、が……………』

久しぶりに、本当に久しぶりに低く呟くように言えば、声がかすれてしまった。けどアーミア様は心得たようにひとつ頷かれる。良かった。伝わった。

満足して私は彼の前から退散することにする。輝かしいトロフィーも、封印を解かれるその瞬間を見るのはやはり恥ずかしいものだ。

あとで、腹をくくって彼と話そう。そう決めた。

丁寧に掘り起こされたトロフィーをそつと彼は清い水で洗う。その背を遠く見つめながら、私は若き日の夢に想いを馳せていた……。

・
・
・

15話 決断

「少し、お話しませんか」

耳が痛いほどの静寂の中、不意に甘やかに高く、なおかつ優しげな声が私に向けられた。彼の羽のように軽やかな足音は、考え事をしていた私には届かなかったらしい。

覚悟をまだ決めていない中、恐る恐る振り返ってみれば、やっぱりそこにいたのは守護天使様で、彼はあの茂みの下から掘り起こしたらしい私のトロフィーを手に真摯な瞳をまつすぐ向けていた。

相変わらず、思わず救いを求めてすがりつきたくなるようなお姿だな、と思う。娘ほどの年齢の外見だろうと、天使様は天使様なのだ。気後れするほど美しい顔、瞬きすら心を奪いかねない神の芸術が目の前にあっても、天使様を見ると安心してしまふのだ。翼を生やして空を舞う姿を見ていなかった村人たちですら天使様だと信じるほどのお方なのだから。感じる雰囲気から穏やかで、善なる心と一心に思う気持ちがあひひしと伝わってくる、そういうお方がアーミアス様なのだ。

「……ロベルトさん。貴方がこんなに長い間さ迷っているなんて、知りませんでしたよ」

彼は酷く悲しそうに唇を歪め、私の方へまっすぐ歩いてくる。そりやそうだろう、私は彼からひたすら逃げていた。私としてもいつまでもこの世に縋り付いているのは良くないだろうとうすうす気づいていたけれど、どうも臆病で逃げてしまった。

『いやあ、お恥ずかしい限りで。アーミアス様直々にこうやって引導を引き渡して貰えると思うとうれしいですよ』

「……俺は死者を成仏させる力を持つてはおりません。貴方の未練を晴らす手伝いをするだけです」

『アハハ。そのトロフィーが未練の塊なんです。だからもう……』

「俺には、あなたが苦しんでいるように見えるのですが……」

星を宿したように光を宿した瞳に私の姿が薄ぼんやりと映っている。誰かの目に映ることがこんなに嬉しいことだなんて、久しぶりに感じることに。何もかも見透かしているのだろうか、彼はそつと私にトロフィーを差し出した。

刻まれた文字は昔のまま、見ているともう存在しない心臓が高鳴るような錯覚すらある。私の夢が目の前でキラリと輝いた。

『ああ懐かしいなあ。そのトロフィー、貰った時は本当に嬉しかった。宿を世界一に出来たことも、認められたことも……何もかも』

土に埋もれたままの姿ではなく、天使様直々に軽く磨かれて金色に輝くそれに手を伸

ばす。勿論、私には触れることなんてできない。何の感触もなくトロフィーはすり抜け、天使様の手すらすり抜けた。何も感じないのに、触れた手は温かいような気がするの、アーミアス様だからだろう。

「……」

『それ、どうするんですか？』

「明日の朝、リツカに見せようと思ひまして。彼女の道に光があるならば示さねばと」

『……光』

「私の目には、ロベルトさん……貴方のウォル口村での生活は未練はあつても、後悔は」
『ええ、ありませんよ』

矛盾した言葉に困つたようなアーミアス様。でも正しくそうとしか言い表せないのだから的を射た表現でしょう。

母親に似て病弱だったリツカをきれいな水のここで育て、こうして健康で丈夫に育つた。そのことがとても嬉しくて、ここに来てよかつたと心底思っているのだ。母親のよいうに娘までも夭折ようせつしてしまふかもしれないと考えていたことがむしろ懐かしく思い出されるほどに。

だが、捨てたわけではなく、ましてや犠牲になつたわけでもない私の道は閉ざされた。そのことが心の奥底のしこりとなつているのなら……こうしてさ迷っているのも当然

なのだ。

「リツカが進む道を決めます。断ろうと、受けようと、尊い選択が明日です」

『見ているというわけですか？』

「そうですね。それがロベルトさんにとって、見守るといふ大切なことなのです」

安心してください、と天使様の言葉は続く。

「少しだけ後押しすることが俺にはできません。彼女の選択を見守っていてくださいね」

私の未練は大切そうに天使様の腕の中に収められ、窓から差し込む月明かりにきらきら輝いていた。

彼が静かに立ち去った後、そつとのぞき込んでみたリツカの寝顔は私の知っているリツカよりもずっとずっと大人に成長していたのだ。

娘の寝顔を見ながら流れもしない涙が、存在もしない体の中を波打っている気がした。もし、都合よく、リツカが私と同じ夢を追うならば。間違いなく私にもう未練はないと、そう感じた。

.....

「おはようございます、リツカ。おはようございます、お爺さん」

朝早くから家の外で何か……多分、掃除とか……をしていたらしいアーミアスが帰ってきた。ここ数日は見なかった天使様の服を着ていて、それがやっぱり当たり前だけ

似合ってるものだからいつにもまして眩しい。ひらひら揺れる裾がアーミアスの動きすべてを風みたいに軽く見せるんだよ。

それにアーミアスは桜色の唇を綻ばせてにつこり笑うから心臓にも悪いんだ。彼はよく笑うのだけど、それに慣れる日は本当に来ないんじゃないかなって思うぐらい。花の舞い散る背景が見えるぐらい笑顔が輝いているし。

「おはよう、アーミアス」

「おおおはようございます、天使さ……おつとうつかり。アーミアスさ、様」

「……無理しなくてもいいですよ」

いろんな人になるべく天使様と呼ばれたくないのだと言ったアーミアス。それを叶えた人はなかなかないみたいで今日も苦笑が顔に浮かんでいた。おじいちゃん以外にもこうなっちゃったんだろうって簡単に想像できる。

それから朝ご飯を並べるのを手伝ってもらい、席についてからもこんなふうに穏やかに話すのはとっても幸せ。気後れするぐらい綺麗なのに隣にいと安心するアーミアスをいつまでも独占しちや、村のみんなに悪いなって思うけどこの立場は譲ってあげたくなかった。

アーミアスは自分がいてもご利益はないとか言っていたのだけど、そういう問題ではないと思う。喋っているのが楽しいんだし、むしろ見てるだけでも楽しい。それから商

売繁盛のご利益は間違いなくあると思うし。看板娘……ううん、看板天使として。お客さんは今、ルーイダさんしかいないけどね。

朝ご飯を食べながら、今日も幸せオーラを撒き散らしながらこの上なく美味しそうにご飯を食べるアーミアスをチラチラ見る。眼福つて多分これのことだよ、ね？

私の作った朝ごはんだけど、彼が食べると作った私ですらとんでもないご馳走に見えるぐらい美味しそうに食べるんだもの、作り手としての幸せまで噛み締められるんだ。

小さいシンプルなパンをちぎって一口、とつてもゆっくり味わうように咀嚼しているだけなのに彼はすぐく幸せそう。おかずの卵料理も一口一口すぐく丁寧に口に運んでいて、ちよつと焦げちやつた切れ端がだんだん申し訳なくなってくる。

アーミアスが来てから私の料理はそういう小さな失敗がどんどん減っていつているのだけど、彼は気づいているんだろうか。恥ずかしいから気づかないでいて欲しいけど。

「今日も美味しいです、リツカ」

「そっ？よかった」

その言葉にアーミアスは全身全霊を込めてるんじゃないかって思うぐらいいつも力を込めている気がする。それからアーミアスはスープをひとさじひとさじ香りまで楽しんで口に入れて……つて、私はさつきから見すぎだよね。

これじゃあアーミアスが食べにくいじゃない。急いで目をそらせば、おじいちゃんまでニコニコしていてもとっても恥ずかしくなっちゃった。

「あの、リツカ。食後にちよつと見せたいものがあるんです。少しだけ時間いいですか？」

私の気持ちを知って知らずか、アーミアスはとっても真面目な顔でスプーンを置き、私をまっすぐ見ていたものだから……本当にこの綺麗な天使様は、すつごく周りのことが見えているように見えてないんじゃないかって勝手に心配してしまう。

私が勝手に耳を赤くしていたのに気づかなくてくれたのは嬉しかったけど……。

その後律儀にも片付けも手伝ってくれたアーミアス。彼がその後部屋から持つてきた金色のトロフィーは……知りもしなかったお父さんの過去を教えてください、私の人生の分岐点であり始まりの象徴になる。

私のせいで夢を諦めたお父さんを、私の体が丈夫な理由も知って。アーミアスが決断した私を見て微笑んで、ちよつと寂しそうにしていた理由はわからなかった。でも、何も無い方向へ優しい微笑みを向けていたから……そこにいたのはお父さんだったのかもしれないと、聞けはしなかったけど思ってるんだ。

あと、ルーダさんに決意を伝えた帰り、何故かアーミアスがニードと向き合ってたにやら話しているようだった。アーミアスの顔は見えなかったけど、ニードの顔がやた

らと引きつっていたから不思議だったなって。
・
・
・

16話 始

うう、リツカたんがウオル口村から巢立つて出ていく日が来るなんて……。しかもこんなに早いなんて……。ううつ、涙が止まらない……。無論、俺の心の中で。目の前でなよなよしている上に薄い顔したホコリ男がむせび泣いてたらキモさでこの感動が吹き飛ばからポーカーフェイスすつげえ頑張ってる。誰か褒めて。

ただ、子供に気づかれるぐらい落ち込んでるのはもう許してくれ……。俺はまだまだヒョッコなんだ。しかも今日から俺もウオル口村から出て帰る方法探すってカミングアウトしちまつたら……。そりやあもうすげえどんちゃん騒ぎで。ってか、慌てすぎだろみんな。

そうも信心深いのは結構なことだが見習いのペーパーにそこまでしてくれるのか？ マジいい人すぎかよ。愛しすぎるぜ。見送りを盛大にしてくれるのは結構嬉しいが、ここまできると恐縮してきたぜ……。

だってまた葉草降り注いだし。俺の実力に対する信頼のなさが好意善意でしかないのに心に突き刺さるってやばくね？ 心が痛いぜ！ 丁重に断ったら袋に押し込まれ

たんだぜ！ 押し強すぎだろうが！ ありがとよ！

みんなに囲まれて、なんつーか、不思議な気分だぜ。メインはリツカたんだろ？ つて俺が何度も言わなきゃいけないレベル。師匠が信仰の基盤をがちり築き、俺がめちやくちや頑張ったおかげで守護天使への好感度振り切れてるみたいだなあ……。その信仰の対象の実態がこんなやつでほんと申し訳ねえ！

だから場の雰囲気を書き乱さないように真顔で頑張るぜ！ 俺は空気の読める天使だからな！ だが……そろそろ涙腺がやばくなってきたが。だがなあ、舐めんよ、俺の顔の鉄仮面を！ リツカたん見てるからすーぐにやけそうになるがな！

てかマジ俺のこたア今回どうでもよくね？ 問題はリツカたんじゃね？ 何時ものバンドナにエプロン姿なのにリツカたんめちやくちや眩しいんだぜ。ぴかぴか輝いてるだけじゃなく割増で可愛いとか流石はリツカたん！ 希望と緊張の表情やべえ、リツカたん専用俺の心のアルバムが埋まっていくぞおお……これは、ぺろい！ ぺろっぺろだ！

ちなみにもう、準備は終わってる。ロベルトさんのトロフィーを大切に仕舞い込み、荷物も全部まとめたリツカたん。今は昨日半ば脅してリツカたんの大事な宿を継がせたニードと話してるのを俺はちよつと離れて見ていた。

脅して、というのもしまだニードしたいからって継がなかったらどうなるかわかつ

てるだろうな？ 天罰なめんなよ？ とか敬語で言った結果だ。天使らしからぬ行為過ぎてやばい。やばいが相手はニート、更生させるためなら何だつてしようという俺なりの愛情だ。

断つたらローキック食らわせるつもりだったから一発で受けてくれて良かったぜほんと。イメージダウンはこの仕事NGだからな。セーフセーフ。案外素直なやつで助かった。更生の余地があつて一安心だぜ。働けニート。

ちなみにリツカさんのセントシユタインまでの道のりは、俺より遥かに手練のルイーダさんが護衛をするならもうマジめちやくちや安心だ。セントシユタインの方の魔物はここらよりすこーしばかり強いらしいが、ルイーダさんなら大丈夫だろうって分かるぜ。遅れをとるわけねえわ。あの人レベル二桁あるだろ？ 俺は未だ一桁だ。そういうこと。

もちろん俺がリツカたんを送って行きたいのはやまやまなんだがな！ だが……先にあの謎の扉のついた物体へ行かなきゃいけない気がしてな。胸騒ぎつてやつがやばいんだ。リツカたんを何より優先したい俺がこうなつちまうつてことはよ、天使としての本能がなにか訴えてるのかもしれない。流石に無視はできねえよ。

つーかただでさえなーんも言つてないのにオート天使バレしたんだからな！ そろそろ敬われるのも恥ずかしくて限界だぜ！ 敬語とかやめてくれ！ リツカたんどこ

ろかニードまで癒しになるとかやめてくれよ！

天使界に戻れたら文献ひっくり返してバレねえ方法探すからな！ 俺以外に光輪ぶつ飛んだ天使なんてエルギオスとかいう師匠の師匠しか知らんが！ あると信じ
てえ！

へへ、あの話はタブーってやつだろ。俺、たまたま盗み聞きして知ってるんだからな。昔過ぎて内容まで詳しくは覚えてないんだが。ま、タブーだからこの例は参考にならないんだが。つか聞いてたのバレたらクソ怒られそう。聞けるわけねえわ。

とりあえず、この持て余しタイムに俺は守護天使として出来る限りの加護をリツカたんにあげた。勿論俺にそんな能力はねえ。はつきりあるってわかってる天使らしい能力は幽霊とかが見えることぐらいだからな。

だからやったのは全力でリツカたんの可愛くて健気な姿を目に焼き付けながら絶対リツカたんを安全にするんだぞ大地の精霊よ！ みたいな念を送っただけだ。つまり祈っただけ。頼りなさ過ぎて泣けてくるぜ……しよぼすぎる天使だわ、俺。

おい、キモい言うな。意味無いか言うな。俺が一番わかってるわそんなこと。リツカたん可愛い！ 可愛いは正義！ 魔物はリツカたん見ると魅了されてでろでろになりますように！ 俺もでろでろだわ！ だからこそ少しでも助けになりたかった！ 無理だった！ 辛いぞ！

うう、リツカたんに付いていきたい、ほんとリツカたんだと外で護衛しながら都会へ……とかデートみたいじゃねえかまじで。俺も行ってえなあ、行ってえなあ……。クツソ。里帰りは俺にご用命を！ お願いリツカたん！ 俺使つて！ いくらでも使つて！

「じゃあ、みんな、行つてきます！」

リツカたんがみんなに手を振るのを涙なしに見れるものか。とうとう涙ぐんでバレたくなえから瞬きして涙を押さえ込み、リツカたんをじつと見る。大きくなつたなあ、なんて考えが頭をかすめる。

すると何故かリツカたんは俺の方を見て、声に出さずに口を動かした。……メッセー
ジか？

『あ、り、が、と』

うおお！ リツカたん！ 好き！

……見たか？ なあ見たか？ やばくね？ リツカたんありがとうと言つてもらうのは星のオーラの数だけ聞いてきた俺だがよ、今の恋人がやる常套手段みたいな口パク伝達のありがとの破壊力やばくね？ まじやばくね？ 別格じゃね？ やつべ、リツカたん可愛いペるペる！ 一生大好きリツカたん！ 好きすぎて顔からいろんなものが出そう！

やばすぎ、もう最高かよ！ このノリで俺も行ってきました！

ああお婆ちゃん、俺大丈夫だから心配しないでくれよ。ぼうやも泣かないでくれ、戻ったらまた来るからよ。村長に肩を叩かれ、ニードに何故か睨まれ、シスターと長々別れの挨拶をしたり。

行こうとしたのによ、長々引き止められちまった。ああ俺愛されてんなあ。これだから……この人たち、大好きなんだよ。

最近よお、ますますそう思うね。マジ最高、これだから守護天使は最高なんだぜ！

寂しくてたまらないが、俺は後ろ髪を引かれる思いをしながらウォル口村から踏み出した。振り返らずに。すぐに帰りたいからな！ 振り返る暇があつたら一秒でも早くウォル口に戻るだろ？

・
・
・
・
・

襲いかかってくるモーモンを数匹天に送ったのはともあれ、概ね平和に着いた峠の道。おお、あのやべえ土砂崩れもすっかり綺麗に撤去されたみたいでなによりだぜ。

で、相変わらず意味ありげに鎮座してるのがこのなんかわけのわからんやつだ。さー

て、扉が開くかなー？

「……ちよつと待ったーッツツ！」

手が金属製っぽい扉に触れたか触れないかぐらいだったか。その瞬間俺の頭に高速でぶつかってきたなんか。地味にいいところに入ったようで頭を抑えるほどいてえ。まじないわー。犯人誰だよ。女の子っぽい声だったが。女の子はリツカたんしか興味ねえから！

「あんた見えてるよね？ 天の方舟見えてるくね？」

なーんて言いながら犯人と思しき小さめのピンクの光がぴかぴか光りながら俺の周りを旋回。……これは妖精か、このサイズは。一応初めて見るが……クソやかましいやつだなこいつ。

ん？人間より反応が雑だつて？そりやそうだろう。俺は人間大好きな天使だが、妖精が困ってるわけでもなくただ喧しいだけなら心底どうでもいいわ。あとうるさいのは嫌いだ。

「……この物体のことなら見えてますが」

「んー、やつぱり？」

ぼぶん。なんて可愛らしい音を立てて光は俺の前で正体を表した。……その瞬間俺が抱いた感想は……何こいつケバツ……リツカたんの清純さを見習えや！ というあ

まりにも酷いものだったから黙っておいた。要らない事は黙っておいた方がいいって
もんだぜ？

彼女はそんな化粧しなくても素地は可愛いだろうに……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
う世にも珍しい存在。それを見て一気に俺の目が死んだのが分かった。やばい。やば
いとしか言えない。関わりたくないやつだ。関わらざるを得ないのが辛い。

「あたしはサンデイ！ とりあえずハネなし天使サマは入って入って！」

……妖精にまで一発バレしてるのは、まあ今更ということ片付けるとしてだ。
まあ、妖精だしな。

つーかなんでこいつ小さいくせにこんなに力があるんだ?! めちやくちやに押し込
まれて俺は謎の物体の中に放り出され、つんのめって転びそうになるのを必死で留める
ハメになった。

散々かよ！ 押し強い女の子は好きだが強引なイミフ妖精は願い下げだゴラァ！

・
・
・

閑話 幼気

うつつ伏せで寝てたらほっぺたに布の跡がつくのやだなー。でも仰向けで寝たら翼が寝違えちやうからそれもやだなー。寝るの、いつそめんどくさいから寝なくても良くない？ 寝てもさ、三時間ぐらい寝たら充分じゃないの？ 人間つてもつと寝るけど天使は寝なくてもいいもんねーっ！

ししよーが子供はたくさん寝なさいって言うから寝てるけどさ、子供は子供でももう三十歳だぞっ。明日には人間界に行けるんだぞっ。始めて行く下界、楽しみだなあ……。初めて見るもの、ドキドキ、そんなのがいっぱいありそう！

ぼく、前からいろんなことに興味があつてさ。だからいろいろんなこと試しちゃう。今は人間のこと気がなつてて、だからいっぱい勉強してたらイザヤールさまがししよーになつてくれたんだ！

それでさ、みんなにびつくりされちゃったんだよ！イザヤールさまってそんなにすごい天使なんだねえ……。すごいことは分かっていたけどここまでびつくりされたらぼくまでびつくりしちゃうよ！

だから期待に応えたくてもつともつと張り切ったら同い年の中でもぶつちぎりに早く下界に行けることになったんだよね！日頃の努力は大事だぞつ。でもここで笑ってたら嫌味みたいだからすまし顔してるんだ。これが大変でさ！気を抜いたらここにこしそうだもん！

早く天使のお仕事したいなあ。人間とお友達になりたいなあ。向こうはこつちを見れないけどさ、それでも手助けしてたらちよつとは見えるようにならないかなあ。

そんなこんなで寝てる場合じゃなかったんだよ！気づいたら寝てたけど！うう、ヨダレの跡、ついてない？大丈夫かなあ。でももう一回寝なきやいけないんだよなあ……はあ。

てつぺんの木にもまだ行けないびよびよ天使に出来ることを探そうかな。ししよーとの勉強は午後からだし。ししよーの頭で遊んでみたいなあ、遊んでくれないかなあ。ししよーってお父さんみたいじゃない？遊んでくれないかなー。

あ！階段がなんだかホコリっぽい！お掃除しないと！ホコリは掃除しないと
なって、自分で二百七十日ぼくより先輩って名乗った天使が言ってたぞ、ぼくの髪の毛

掴みながら。なんかあいつ、この前ししよーと話してるの見てから見ないけどどこ行っちゃったんだろー。

ホコリって汚いし、吸い込んだらいけないから掃除しなきゃって、当たり前なのにねえ。でもなー髪の毛ゴシゴシ洗っても変わらず灰色だからダメかも。染み込んでるんじゃないの。ししよーも灰色だったのかな？ もしかしたらまだらかも？ だから頭つるつるなのかな？

煩惱退散！ つて感じだよ、ししよーって。あ、煩惱といえね、ぼく、天使が悪魔になる話を読んだこともあるんだよ！ 人間にもいい人と悪い人がいて、悪い人に気づけなかった天使がだんだん自分も悪魔になった話とか！

それとか人間を好きになりすぎた天使がね、自分を見てくれないって嫉妬で悪魔になったりね！ 悪魔になったら魔物だから倒して来世でお友達や仲間にならないといけないのになー。もったいないね、今なりたいのに。

でもこれってお話なんだよ。悪魔になった天使なんて本当はいないの。大人がぼくたちを脅かしてるんだって、誰かが言ってた。

うーん、でも、天使の癖に天使を虐めた天使がいたらしいけど、そんなのいるのかなあ？ なんか、謹慎処分されてお外禁止コースって言ってたよ。怖いなあ、外行けなくなっちゃうじゃん。

にしても天使界にいるのに悪意に染まるって、あるのかなあ？ 嫉妬はどこでも生まれるからありえるってししよーが言ってたけど……すごい人はすぐくない？ かつこいいじゃん！ ぼくもししよーみたいに尊敬される天使になりたいし！

さっさかさっさかお掃除したらラフェットさまがお疲れ様って頭を撫でてくれた。ホコリがついてしまいますって言ったらさ、ついてないわって仰ったんだ。

……あれ？ じゃあ……多分、あの先輩は潔癖症だったんだなあ……。天使がホコリとかないもんねえ。この色は汚く見えるだけで別にぼくが汚れてるとかそんな訳ないよねえ、勘違いしてごめんなさい、先輩。

よーし、今度は外で花の水やりをやるうかな！ ぼくが水をやらなきゃ枯れちゃうんだよ、みんな水が勝手に降ってるでも思ってるらしいけど、違うよ！ ぼくが緑活化動してるんだからね！

せかせかしようろで水を運ぶ。うー、天使界はなんだかんだ広いからさ、外に行くのに面倒がつて飛んだら空気が薄くて落ちちゃうんだよねえ、なんて思いつつ翼をばっさばっさ。飛んでるんじゃないよ、翼に空気を通しておくとふわふわになるんだよ！ お手入れだよ！

大人の天使はみーんなにこにこしながら雨でも降らせるのかって言ってるけど、だから違うって！ 花にとってはぼくが雨って意味ならあってるけどさ！ 納得がいかな

いぞ！

水やりをしてるちっちゃい虹がとーっても綺麗。それを見るためにやってるのが半分くらい。残り半分はもちろん、水を浴びてきらきら輝く花が綺麗だからに決まってるじゃないか！

あ、そうだ。ししよーに人間たちに明日、お花をあげてもいいか聞かなきゃ。

ししよー！ ししよー！ どこですかーっ！

・
・
・

最近の天使界には天使がいる。……別に哲学じゃなくてね。

天使にもいろいろいるから、見た目がごっつい天使もいれば、普通の人間に翼を生やしたような天使いるし、天使らしい天使ももちろんいるの。

話題の天使は天使らしい天使ってこと。まだまだ生まれてまもない天使なんだけど、これが本当に天使で天使で天使なの。

くりつくりのきらきらした目、幼児特有のぷにぷにしたほっぺた、もちもちすべすべの肌、さらさらの髪、桃色の唇。見た目だけでも十二分に天使なのに、あの子ったらそれに加えて中身まで天使天使してるから天使界に天使が舞い降りたに違いないわよね！

上級天使になってはや数百年、こんなにひよっこ天使が可愛いなんて思ったの初めて

なのよ！ だから弟子にしようと思つたらイザヤールが弟子にしちやつて……なによ、すました顔してアンタやるじゃない。

ああ……ししよー！ ししよー！ とつるっぱげの後ろをついてまわる天使が可愛い……一生懸命敬語であれこれ尋ねたり、掃除して回つて褒められたり、花の水やりを頑張つてくれたりしてゐるあの子がかわいい……。

可愛すぎて、もう天使すぎるせいかな、変な気を起こした天使があの子を虐めたレベルなのよ。好きな子を虐めたいって訳が分からない。天使だから性別はないし……とか言つてたけど、アンタ、前科もちよね。見た目だけは幼い古株が！

今度はオムイ様の慈悲もなく、あえなく軟禁処分されたやつ悲鳴つて聞いても心が動かないわー、ほんと。天使らしくないけどね、私のそんなところ。

うふふー、あの子に私もししよーつて呼ばれたいわあ……。そしたら髪の毛にリボン結んでやるのね。きつと似合うわよね、ねえイザヤール。

「……アーミアスは男だが」

「え？」

「人間も天使も幼い頃はなかなか区別がつきにくいから仕方ないことだ」

「嘘おとおおおつ」

びくつと目の前で肩を震わせたアーミアスちゃん……アーミアスくん。名前がなんで

そんなにかっこいい感じなのかしら、と思つていたら……男の子だったのね。

「ぼ、ぼく……」

「あ、ああごめんねアーミアスくん」

シヨックを受けたのかアーミアスくんが目の前でふるふる震えてる。それも可愛いんだけど、もうやつぱり天使すぎないかしら？

すると何故かアーミアスくん、キリツとした顔つきでこっちを見てきて可愛いの。

「俺になります！ 紛らわしくないように！」

「ノオオオオオッ！」

そんな悲しい事件の次の日、何を思つたか翼をもぎ取ろうとしたアーミアスくんには滝のように涙したり、どんどん可愛いよりも綺麗になつていつて遠い雲の上の天使となつてしまったアーミアスくんに話しかけることが出来なかつたり、彼の天使っぷりが行動に現れて天使らしくなつていつて私の方が憧れたりといろいろあつたの。

ええ、いろいろ。あなたは人間だから私が星になつてもアーミアスくんに会えるのよねえ、羨ましいわ。

・
・
・

セントシユタイン編

17話 再出発

「つていうかー、あんたのことずつと見てたけどお」

つんのめつて転びそうだった俺のことを気にせずケバい妖精が俺をビシツと指さした。人間も天使も指さされて気分がいいもんじゃねーぞ。

「ハネなしだけど天使つてバレてんじゃん？ 超ウケる。あんたつてウォル口村の守護天使サマつてやつなの？」

そこまでバレてる？ 今更だが……はあ……ねえわ……妖精相手でもだんだん天使の無駄機能に疲れてくるわ……オートバレつてプライバシーの欠片もねえつてことだろ？ マジねえわー。せつかく翼も光輪も失えたんだから、たまには人間扱いされて嬉しくなりたい。

精いっぱい抗議の目をしていると、ピンク色の光を撒き散らしながらサンデイはくるつと一回転して見せた。おお、これはすごい。翼を持つてた身としては一回転が如何にバランスが大事であるかを理解しているつもりだ。下手くそならそのまま地面にびたーんと落ちてしまう。こいつ、……こんななりしてなかなかやるな。

てか返事の催促かよ。

「………そうです、けど」

「んー、なら間違いないかつたワケね。あんたをここに入れたら少しは変わるかと思つたんだケド」

てかそんな適当な理由で俺を無理やり突っ込んだのこよ。それで、うまいこといくか普通？ 俺つて見習いだからその程度の力しかねえし、こんな状態だし、無理じゃね？

つか地味にここ、揺れてる気が……うおっ！

ガタタタタッ！

「?!」

突然、その微かだった揺れは激しくなり、内部が謎にビカビカ光り出す。妖精は奇声をあげて興奮しているみたいだが……これ、俺のパワーがなんとかなつてて作用したつてことでもいいのか？ いいんだよな？ 光輪も翼もなくても天使のパワーは失われなもののなのか……オートバレするぐらいだからなあ。

だがそれもぷつんと音が聞こえるかのように急になくなり、内部は暗くなるしすつかり元にもどつちまった。なんだよ、足りねえつてか？ ダメだしされたようで気分が悪いぜ……天使の力なんて要らないが。むしろ捨て去つた方が俺にとつては好都合、だから喜べばいいのか嘆けばいいのかって感じでかなり微妙だ。

それにしてもこの中、見たこともない内装だ。金色に光つてた時見えただけでもかなり変だったが、暗くてもはつきりわかる。この世のものじゃないみたいだ。もちろん天使界には到底ないデザインだしな。

……神の国から迎えに来る乗り物の中身なんだから、これが神の趣味ってわけか？

じゃあ、この、ケバい妖精は？ つかなんで妖精がここにいるんだ？ 言っちゃ悪いが普通は妖精は神聖さなら天使の下になっちゃまう。なんで神の国からのやつに関わってるんだろ？ ケバいし。

「萎えるわあ、ハネなしならダメってことなのかな天の方舟ちゃんってば。まあこんなイケメンに会えたからよしってことにしようかなー」

うーん、いろいろ加味して考えても奇抜だ。神様の事はそこそこ崇めてもいいと思ってるからな……人間も天使も神の作品だから。神の子だろ、みんな。

だがそのある意味俺の親父様の趣味ってのはなかなかどうして……み、未来的なんだろうか。俺には理解出来ないぞ。センスが謎すぎる。もつと落ち着いた雰囲気かと普通は思うくね？

「あんた聞いてる？」

「あ、ああすみません」

ずいっと目の前に小さい顔が突きつけられて仰け反りそうになる。

……今のはマジで聞いてなかった。なんかすまねえ。

「つか、ハネなしのアンタ、名前は？ アタシはさつきも言ったけどサンディね」

……軽つ。それで酷つ。いやまて、よく考えろ。今まで天使扱いされまくった俺はある意味こういう対応の方に飢えている。ほら、いたたまれなくなつていつも以上に張り切るとか、こんな扱いならねえし。見ようによつてはこのサンディとやら、いい妖精じゃねえか。

おー、そう考えてみればかなり気が楽だぞ。話してて一番楽しいのはもちろんリツカたんだが、気楽なのはこいつかも。長い天使生の中でも。天使はたいがい頭がガチガチで師匠以外はまともに話せねえし。人間には向こうからアレだったし。

こういう相手、人間が……良かったなあ……。

「アーミアスといいますよ、サンディ」

「へー。確かにニンゲンがあんたのことそう呼んでたよーな？ ま、いつか」

聞いたいてまあいつかはないだろ。

それで目の前でなにやら考えているのかサンディはふわふわ飛んでいたが、ぼんと手を打つてまた俺をビシツと指さす。だからやめろそれ。

「天の方舟うごかないしー、だからアンタ、さつきの女の子追いかけなさいよ。あつちにもっと大きいニンゲンの住処あるんでしょ？ 星のオーラとか集めてる天使がパワー

不足なら、アンタ人助けでもして星のオーラを集めるのよ。そしたらほかの天使が迎えに来てくれるかもしれないしー」

「星のオーラ？ ……まだあつたんですか？ あの異変から見かけていないのですが……」

星のオーラって……まだあつたのかよ！ 俺、力が弱まったからか、まったく星のオーラすら見えなくなつて……うわああ、もしかしなくてもリツカたんからの星のオーラとかも全部スルーしてたのか？ うわああ、俺の物にしたかつた！ 捧げるなんてとんでもない！ 畜生！ チクシヨウ！

てか、マジ？ それがマジならこの妖精有能じゃね？ ちょっとというとおりにしてみた方がいい気がしてきたかも。確かにセントシユタインの守護天使もあの異変で降りるの嫌がつてるかもしれないねえし。それなら星のオーラを大量に撒いた方がいいわな？
名案。こいつ有能。

……ただし天使界の方から人間界の星のオーラは見えないんだが。一度でも来たら目印になるってぐらいしかなないぞ。何もしてないのに星のオーラが散らばつてて変だな、ぐらいだ。だが、天使に対しての目印としては最強だろう。

しかも善行を積みながら出来る。最高かよ！

「あるじゃん。今もあんたの周りくるくる回つて鬱陶しいぐらい。あんた天使なのに

見えないの? ……大丈夫なの?」

「……………さあ」

俺の周り回ってんの? え、手を動かしてもなーんも感じないんだが。なあなあ、リツカさんの星のオーラはひときわきらきらしていてリツカたんっ! って感じなんだがどれか分かるか? ……って聞いてみたい。

俺はわかるが普通は見ても星のオーラの判別は難しい。サイズからこれはどういうレベルのことをしたんだってことはみんなわかるけどな。

「なんでハネも輪っかもないの? まさか無くしたとか?」

「俺は、天使界から落ちてしまったんで、燃え尽きてしまったのかと思ってますが……」
「なにそれ超ウケル」

うわ酷くね! こいつ酷くね?! 俺がもし翼を失って、迎えにも来てくれない薄情な師匠に絶望してる天使だったら再起不能になっちゃうよな! 俺がたまま翼をどうにかしてプチ切りたかった天使だったからいいもの!

ひとしきりケラケラ笑ったサンデイは俺をまた無理やり方舟から押し出すと、セントシユタインの方向を向かせてきた。物理的に強引なやつ……ケバいのはともかくこれぐらい雑に扱われる方が安心するから、まあ……怒るほどでもないか。

びつくりすることに俺、このギャル妖精がそこそこ気に入ってしまったらしい。ケバ

いけど、直視できないわけじゃないし……何より、まあ頑張りなさいと言いつつ懐に消えたサンデイは、リツカたんと同じく俺から目をそらしたりもしなかった女の子だ。

18話 到着早速

道中、おばけきのこやらスライムベスやら見習い悪魔なんぞが邪魔なんぞが邪魔してきたが、まあなんとかなった。やつと気づいたんだが、相当向こうの頭に血が上っていない限りは睨めば退いてくれるらしい。魔物たちと俺との実力差はそこまであると思わないが……退いてくれるならそれでいい。

だからまだ日の高いうちにセントシユタインに来たのはなかなかいい滑り出しだ。

……うーん、来てみたはいいが、天使らしき人影……なんとも妙な表現だが……はいねえな。そもそも俺はセントシユタインの守護天使の顔は知ってるんだが、名前は知らん。その程度の付き合いかない。像もパツと見てわかるところにはないしな。

しかもその天使、交友関係の狭い俺が広いセントシユタインについて愚痴を吐いてたのを知っているレベルの……やる気のあまりない天使だ。……考えておいてなんだが期待できそうにないな。異変にビビって降りる気が失せて何年か来ることは無い、と見ていいだろう。世界樹に星のオーラを捧げる必要も無いしな……つてこの説明何回目だ。

……んん？ 突然俺のリツカたんレーダーが反応して……そうか！ 俺、追いついた

んだな！ ウオル口村以外にいるリツカたん！ 新鮮なリツカたん！ どこ？ どこに……いた！ もじもじして緊張してルイーダさんの後ろにいるリツカたん！

ウオル口村にはない、大きな建物を見てちよつとびつくりしちやつたらしい！ 可愛いな！ 可愛いな！ 握りしめた手が緊張してふるふる……はっはっは、俺ぐらいになるとこのぐらい離れていてもリツカたんの一挙一動がバツチりわかるんだぜ！

リツカたんは幸いにも俺の熱視線に気づかずにルイーダさんと一言二言喋ると中に入つていった。うう、追いかけたいが……流石にストーカーみたいなのに見える状態でやって引かれたら立ち直れない。ここは引くか……？

うう、後で……後でねリツカたん……。

「面白そーじゃん。知らない仲じゃないんだし見てこうよ」

サンディツ！ ケバいとか考えててすまんっ！

ナイス背中押し！ お前さんいいやつだな！ 手のひらくるくるだぜ！ パタパタときらきらしいピンク色の羽をはためかせてリツカたんの後を追った姿はもう、リツカたんペロリストの俺には勇者にしか見えねえ！

よーし、じんわり勇気が湧いてきた、ヘタレてる場合でもないな、リツカたんの華々しい門出にちよつと顔を出して怒られても……怒られても悔いはないぞ！ 緊張リツカたんペろペろするため！ 俺は！ 行く！

とはいえ見知らぬ人間がいるであろう所だからな、リツカたんでも不安かもしれないだろ！ 宿屋を営んでたりツカたんはちよつとやそつとで人見知りなんてしないが！
ま、まあ俺が見に行きたいだけだし？ 今更だし？ 俺がリツカたんの周りであろうちよろしてるなんて普通のことだし？

覚悟を決めて飛び込んだ宿屋の中ではなんかリツカたんが小娘とか言われていて、ちよつとムカつとした。だからみみちい仕返しに心の中でリツカたんが小娘ならあんたはおばさんだなと呟いたが、俺の年齢を考えると愛しい人間たちは皆孫よりも歳が離れているんだからただのブーメランになってしまったぜ。

……ジジイでも見た目が若けりやリツカたんチャンスあるか？ ワンチャンあるか？
ダメか？ 天使としてはまだまだ若いぞ。天使のジジイことオムイ様は数千歳とも一万年とも呼ばれるお方！ それに比べて俺は二百年も生きてない！ よっしやまだまだ若いぞ！

なんてリツカたんを今日も今日とてガン見していると、周りにはリツカたんのすんばらしい才能と世界一の健気さ、さいつこうにペロい可愛らしさに気づいたのかひれ伏していた。俺もひれ伏したい。リツカたんの下のアングルから見たい。

だが空気を読んで何もなかった！ 今度階段の下からリツカたんに話しかけるんだ……ここデカいし二階ぐらいあるだろ……そんで、リツカたんがとたとたとつと降

りてくる……リツカたんが俺に話しかける……妄想甚だしいが、それだけでたぎつてきたぞリツカたん!

「あら? アーミアスくんじゃない」

「あ! 早速来てくれたんだね!」

おつ、流石に影を薄くしてたつもりなんだがバレたか。リツカたんの笑顔はセントシユタインでもまったたく変わらず俺の心を揺さぶってくるぜ……。隣にナイスバディなルイーダさんがいても俺の目線はリツカたんを釘付けしてわけだ。ただし敢えて言うならナイスおっばい。

ただし天使なので何故かテンションが上がる以外になーんもないのがなあ。三大欲求は二つしかない、というわけだ。だがナイスおっばい。

もちろんリツカたんという大正義の前にすればなんだって霞む。ぶつちやけキラキラ光つてた世界樹よりリツカたんの笑顔の方が眩しいな。求心される感じがやばいぞ。

俺、最近リツカたんに出会うために天から遣わされた気がしてきたんだが!

「まだ来たばかりで準備できてないの。せっかく来てくれたんだけど……」

「あらリツカ、アーミアスくんはそういうつもりで来たんじゃないわよ。……ねえ、ちよっと協力してくれるつもりはないかしら?」

「勿論、何だつて言つてください」

今、俺何も考えずに返事したぞ。リツカさんと協力しか聞いてなかった。リツカさんのお手伝い？ マジで？ ウオル口村でならいくらでも手伝えたし変じやないだろうがここで従業員でもないのになんかしてたら目立つだろうと思つてたんだが。

ルイーダさん、その話もつと詳しく。

だつてよお！ リツカさんのお手伝いをするだろ、リツカさんが喜ぶだろ、俺嬉しい。または、リツカさんが俺の好感度を上げてくれる。俺嬉しい。あとリツカさんの隣にいる、だろ？ 俺、最高の気分になるぜ！

「気合は十分みたいね」

「ちよつとアーミアス！ 帰るつて言つてたじやない、探さなきやいけないんでしょ？ 私の手伝いをしてる場合じやないんじや……」

「俺の方が、やりたくてお願いしたいぐらいなんです……」

ああ謙虚で健気なリツカさん！ 俺なんて馬車馬のようにこき使つてくれていいのによ！ リツカさん優しい！ だが残念だったな！ 俺は離れないぞ！

リツカさん！ リツカさん！ 俺を掃除でも呼び込みにも何でも使つてくれ！

荷物運び？ 案内？ ドアマン？ 何でもやるからさ！ リツカさんの為になるならば！ 鼻根にうるさい師匠がいない今、俺はやりたい放題したいんだからな！

「ほら、彼もそう言ってるじゃない。もちろん暇な時だけでいいのよ。ほらリツカ、アーミアスくんには人を惹きつける何かがあると思わない？」

「そ、それはわかりますけど……」

引きつけるオーラ？

……もしかして惹き付ける、か？ ないわー、ないない。ウオル口村での話をしてるならあの村の信仰心がすごかったただだから！ 俺が天使だったからああだっただけ！ だが！ リツカさんの役に立つ可能性があるなら別になんだっていい、出来ることならやる主義だからな！

「あのね、あなたには呼び込みを手伝って欲しいの。旅の邪魔にならない程度で構わないし。リツカの手伝い、やってくれてくれるでしょ？」

「ええ、もちろんです。なんならすぐにでも」

「……気が早いのはいいけれど、流石に今日は無理よ」

お、おう。そこらの人間を根こそぎ連れてこようかと思ったがダメか。何、リツカさんは最強に可愛いだけじゃなく、宿屋の腕は超一流！ホコリ男の宣伝でもじゃんじゃん人が集まるさ、明日朝イチ手伝おうか？ダメか。

こういうのはすぐ行くとリツカさんが気にしてしまうから何日か開けてから行くべき、だな。そしたら気分転換ですと言っておけばリツカさんは気を遣わない！俺はハッ

ピーー！……呼び込みつてリツカさんの隣にいれないだろうが些細……でもないが、まあ、リツカさんに益があるならいくらでもやるしな！

とか考えていたら準備のため追い出され、すごすご街を歩く羽目になった。

……ん、防具屋だな。何にせよ魔物と戦う羽目にはなるだろうし、いっちょ揃えるか……。

リツカさんの笑顔を思い出しつつリツカたん口スで俺はテンションがすこぶる低かった。

……

19話 不噓吐

. . . .

. . . .

. . . .

「だから！ おれが黒騎士を倒すって言うてるだろ！」

「おいおいマティカ、お前が弱虫なのはみんな知ってることだが、同じくらい泣き虫で有名な癖に僧侶がついてきてくれるのか？ 路地裏育ちのくせに」

「関係ないだろ！ そ、僧侶がいなくなつておれが一人で倒せばいいことだろ！ とつとと稽古着を売つてくれよ！」

「はいはい。天使を信じていることといい、どつかお前残念だよ」
「うるさい！」

あーもームカつく！ みんなおれを泣き虫弱虫つてからかうし、だーれもおれのことを認めちゃくれないし、黒騎士だつておれにかかればイチコロなのにだーれもついてきてくれやしない！

見下す奴らを見返したくて修行だつて頑張つたし、働いてセントシユタインで一番恰好いい鉄の爪を買つたんだ。あとはこのおろしたての稽古着を着ればおれは無敵！……ただ武道家だからホイミの一つも使えねーんだよな。魔法つて難しくてよくわからない。

薬草を買い込むつても限界があるし、僧侶がいるパーティに潜り込むか、僧侶を勧誘したいところなんだけど……ルイーダさんがいくらおれのことを認めてくれていてもだーれも雇つてくれもしないし応じてもくれない。

流石に……こうやって啖呵切つたはいいけど一人じゃ無理……。

真新しい生地腕に通しながらどうしたものかと考えていたら、いつからいたのか目の前を通つた、灰色の人に視線が移つた。

さらさらつて、髪の毛が女みたいに揺れたのに目を奪われる。だけど多分、男だと思つた。肌、雪みたいに真っ白だ。まるで日に晒されたことがないみたいだ。弱そうなのに、弱そうだととは思わない。……おれ、変な事考えてるなあ。

ちよつと年上に見えるし、年下にも見える。年齢まで若いつてこと以外よくわからないし、性別も曖昧つて感じだ。

「すみません、鎖帷子の試着いいですか？」

「あ、あぁいいぞ」

インナーをそのままに皮の鎧だけを外してきせてもらっている姿をぼんやり眺めていたら、彼？ は視線に気づいたのかこつちをチラツと見た。……うわあ、まつげなっ
がいな。やっぱり女かもしれない。おれの信じる天使様もきつとこんな感じに中性的
なんだろうなあ。

……目の中に、きらきら、たくさんの星みたいな光が浮かんでる。天使様って、やつ
ぱりこんな感じなのかもなあ……セントシユタインの守護天使様ってどんな方なんだ
ろう。そんなことを考えさせるぐらい、俺の中の想像の天使様を写し撮ったみたいな容
姿だ、この人。当たり前だけど、翼もわっかもないけれど。

今この場で生えてきても違和感がない。

「あの、さっきの話聞いてしまっていてすみません。俺は旅人なんです……セント
シユタインでは黒騎士って有名なんですか？」

うお……声高い。でも男だった。今、はつきり俺って言った。不思議だな……声変わ
りしてないぞ、この人。なのになおととおれより背の高いその人は鎖帷子の具合を確認
しているみたいだったが、おれの方をちゃんと気にかけていた。

弱虫、泣き虫、意気地無し。いくらでもからかわれてきたおれ。普通に話しかけられ
るなんて久しぶりだなあ。見下されないで、物腰が丁寧な人。この人も噂を聞いて変
わってしまうだろうけど。

どーせ泣き虫は言い訳できませんよーっだ。誰が弱虫だ。誰が意気地無しなんだ。俺の筋肉が見えないの!? 見えない?! ……着痩せしてるんだよ!

「旅人なら知らないよね。セントシュタインの姫様をさらおうとした悪いヤツなんだ。討伐依頼が王様直々に出されててさ」

「……なるほど」

「だからおれが倒したらみんなハッピーってわけなんだ。おにーさんもし興味があつて腕が立つなら雇ってくれよお」

一応宣伝だけしておいてさつきと彼の視線から逃れた。まっすぐ見た彼の顔がそりやあもうこれ以上ない! ってやっぱりくらい整っていて直視しているのが申し訳なくなつたからだ。髪の毛ぼつさぼさだし、こうなるならちよつとは直してこればよかつた。

……あーあ、あの時みたいに奇跡が起きないかな、誰かに雇われて黒騎士に挑みたいんだ! いやいやあの奇跡は天使様のお陰だし。お願いします、守護天使様! おれを助けてくれよ! って、むちゃぶりか。

半ば黒騎士討伐の依頼書を横目に睨み、今日もおれはルイーダさんに名前を登録してもらつて、もう疲れたから宿屋で休むことにした。

なんかいつもと違って可愛い女の子が宿をやつていてセントシュタイン始まつたな。

……なんか寒気したんだけどなんだろう。というか、女の子って言ってもおれより年上のおねーさんって感じた。さっきの人と同じくらい、かな？

宿屋でだべっていたらたまーにおれの噂をなーんも知らない人が呼び出してくれる。そして……町人にぶち壊されるんだけど。まー、なんとかなるなる、もう少ししたら誰が止めようつてもおれ、名乗り出ることにしてるし。

弱虫泣き虫意気地無し。返上できるようにしたいな……。

そんなことを考えながら昼寝してたら、ルーダさんにおれ、呼ばれたんだ。

目の前にいたのは、あの天使みたいな少年と、からかつてくる奴ら。この人もあいつらと同類だったかと、ひどく失望した。

その割には星の瞳が澄み切っていて悲しくなった。

……

「よお、マティカ。お前もこの人に呼ばれたんだぞ」

「いえ、試しに呼ばせていただいただけなので正式に決めた訳ではありませんよ」

馴れ馴れしいなこの僧侶。つか僧侶？全然僧侶っぽくない。人助けになるかと思つて……というよりもリツカたんにかっこいいところ見せたくて……黒騎士討伐！ つて洒落こもうとしたはいいが、なーんだかな。

防具屋で出会った武道家少年はなかなか体つきや身のこなしを見る限り強そうだし、

なんか気は弱そうだが優しい目をしているし不満はないんだが……いかんせん、僧侶と魔法使いのペアから感じられる不浄の気配にイライラするな。

実力もしよばい感じだし……お試し、もう切ろう。そうしよう。マティカ少年だけ残してチェンジで。

戦いに関して変な優しさ出したりしないぜ。使えないなら置いてかないと死んじまうだろ。それは嫌だ。明らかにマティカがこいつらみたいな奴らにとやかく言われて来たのがわかって、だ。一緒に目に物言わせてやろうぜ。俺そういうの大好きなんだ。

余計なお世話ならすまんがな。まー、黒騎士倒すのはやる気満々みたいだし問題はないだろ。ちゃんと金だして雇うんだし。

「まあ、せいぜい盾にでもなれよ。お前の大好きな天使様な雇い主を守れるなんていいご身分だろ?」

「あ、やつぱりチェンジでお願いします」

「オレたちには魔法があるし、お前のちつぽけな脳みそはそんなことも理解出来ねえーみたいだしよお」

「マティカだけ残してもらえますかね、ルーダさん」

いやはや耳でも悪いのか。周りも見えていないのか。典型的な小物臭のするやつら

はなんか話したまま引きずられていったのだが、まあどうでもいいや。

「つーか天使様とかまーた言われてたけど……。今のはあれだな、聞かなかった。オーバレ機能なんてないからな。」

「そうそう、俺って天使だからさ、基本的には人間は守ってやるし基本的には好きだぜ？ 誰かを貶すようなやつは真つ平ごめん。その点ウオル口村っていいぞ。ニードってだいぶ可愛いやつだからな。あいつ、悪口はいわねえから。ちよつと仕事への意欲がなだけで。それがニートの所以だが。」

「今はニート卒業したみたいでなによりだぜ！」

「あら。私ったら疲れてたみたいね。いいわよ、じゃあ代わりの僧侶と魔法使いを紹介しましょうか」

「ええ」

登録の時に断らなかつたのが疲れてるってことなのかね。まあそんな事情はいいや。なんかマティカ少年は固まっているがそれもまあいいや。戦ってくれるなら俺が守るし。

「つーか武道家を盾扱いとか頭おかしいだろ。パラディンとか戦士なら盾扱いどころかそういうスキルを持ってして自ら盾になれるが、武道家ってのは先手取って殴るお仕事だろ。」

ちなみに俺がいる限り盾役を譲るつもりは無い。人間はおとなしく守られとけ。俺がぜーんぶ守つてやるから安心して戦つてくれ。戦士もいいが、パラディンになるのもいいよなあ……。

引きずられている奴らを見送り、今度は目を白黒させて俺を見ていたマティカ。そしてやつと理解してくれたのか、満面の笑みで手を差し出した。分厚いタコだらけの手だった。

期待通り、彼は強いだろうな。

「よろしくお願いします、おにーさん！」

「ええ、よろしくお願いします。申し遅れましたが、俺はアーミアス。しがない旅芸人です」

「旅芸人?! 旅芸人だって? 絶対嘘だ! でもいいや、一緒に黒騎士倒そう!」

「……旅芸人ですよ」

おいなんて今信じなかつたんだ。

「え? おにーさん、天使様、でしょ?」

……キラキラした純粋な目を見ながらとつさに違うなんてウソをついて夢を壊すなんてことはできねえだろ!

「あらやだ。私のいない間に勝手に名簿登録したのは誰なの? ごめんなさいね、さつ

きの人たち、断つてばかりだったのよ。お詫びに腕も評判もお墨付きの二人組を紹介するわね」

ちよ、否定する前に話をぶった切るのやめてくれ！ きらつきらした目でマティカ少年が……ああ……。お、おいリツカたん！ 便乗してマティカに何囁いてるんだ？

その子天使より純粹に人の話を信じるタイプだからやめ、やめてくれ！ お願いします！

「俺はしがない旅芸人です……」

リツカたんには絶対嘘をつけない俺の渾身の声は虚しくかき消されてしまった。

お願いだからウォル口村での無様な姿を広げるのはもうやめてくれ！ リツカたんだから悪いことは言っていないと信じるが、俺の話なんてダサイことしかないんだから、何を話したってダサイだろ！

・
・
・

20話 狂信

.....

「うわああああああああ天使様アアアアアアアアアア!!!」

「?!」

「なんまいだぶ……なんまいだぶ……ありがたや……」

待機室から出てびっくり! 目の前で出迎えてくださったのか、こちらを見ているのは夢にまで見たリアル天使様!!! やはり、やはり存在なさっていたのか!!! 私たちは間違っていないかった! 間違つてない!! 美しい、なんて美しいんだ! 夜空の星星のよ
うな煌めく瞳に映りたい!

唇ピンクううううううっ! 肌白い!!! 髪の毛顔埋めてスーハー……させて!

させて私に! 私に!!!

うわああ私の邪な想いに気付かずきよととなさつてる!! 無垢!! すごい、すごい、あんなに綺麗なのに煩惱の一つも湧いてこない、流星は天使様! 見つめていたいだけ、いつまでもおそばにいたいだけ! やましい気持ちがない! この私にやましい気持ちがないなんてさすがは! 天使様!

蹴られとうございます！

あ……申し遅れました、私、僧侶のガトウーザと申します。幼なじみで妹のような存在を連れてどうしようもなく身勝手な家を出、というかあんな街ごと飛び出してしばらく経ちます。

代々長男を僧侶にする我が家にて例外なく僧侶にされた哀れな者でございます。幼い時から魔法使いに憧れ、幼なじみのメルティーをそれはそれは羨ましく思っております。

ええ、運命と言いますか……メルティーは私が申し訳なくなるほどに敬虔な者でした。魔法使いになるようにと英才教育を受けつつも神、天使にいつも祈りを捧げておりました。そうすれば夢が叶うと。

しかし、私たちは無理やりそれぞれの職業にされてしまいました。親にとつてはそこそこ戦えるように育てて自慢の種にでもしようという魂胆だったので……私たちは手を取り合つて逃げてしまい、すべてをおしまいにしてやりました。そもそも、私たちのことを道具としか思っていなかったですし。

私たちはさまよい、ようやくとこのセントシユタインにたどり着き……そしてそれだけの職業をダーマに行つて変えたいと願いつつも修行を積み、ダーマへ連れて行つてくたださる依頼主を探していたのです。もちろん短期依頼なら今までも受けましたが。

ええ、いやいやなつたとはいえ私たちの腕はまあ評判となりましてね。才能は……悔しいですがあったのでしょう。

日々天使様を信じ、奇跡が訪れると信じてメルティーと頑張っていた甲斐があつたようですね……！

ああ天使様！ その美しいお顔を、その慈悲あふれる眼差しを、溢れ出るオーラを！ もつと私めに！ 私めに！

お名前は？ なんとおつしやるのですか天使様！ いえいえ、分かりますよ、天使様、ご謙遜なさらないで天使様！ 私には貴方様が天使様であるとわかります！ 翼の幻覚が見えますとも、翼がなくなつて貴方様は天使様！ 私には、わかりますとも！

はあ……天使様……。瞬かれるまつ毛が美しい……鼻先の角度の筋の通つた形、頬から首へのラインの優美さ、いかにもさらさらとした灰色の髪の毛は窓からの光に輝き、見開かれた瞳の中には星々が宿っているように複雑な光を宿していて、美しい。存在から、美しいのです、この方は。

こんなにも無礼に迫つてしまっているのに……彼は嫌な顔一つせずにいるのです。

「私、ガトウーザと申します！ どうか宜しく願いますね！」

「私、メルティーといえます！ 天使様、馬車馬のようにこき使ってください、天使様！」

「どうして……」う……」

流石に驚いてしまわれたのか、天使様はなにやら眩かれましたが、すぐに自己紹介なさりました。

「俺はアーミアス。ただの旅芸人です。……あの、目立ちたくないのに騒がないで頂けますか」

「……あ、はい」

困り果てたように目を細めてこちらを見られたらもう、もう私従うしかないじゃないですか!! なんですがあなた! 天使様ですか! 天使様!!

……そういえば天使様には性別、ありませんよね? 契約書には、あれ? 男性? 男性の天使様? こんなに中性的なのに!

「おれ、マティカ。一緒に黒騎士倒そうね!」

「ああアーミアス様……人助けをなさるわけですね……」

「様付けもやめてください……」

「じゃあ、アーミアスさん! 私たち、沢山使ってくださいね!」

メルティーと私は交互に彼に迫れば、おされてしまったように彼は頷きました。……ちよつと無理やりだったかなとは思いますが、この機会は逃してはならないのです!

ああ……ああ。夢にまで見たお方が目の前に……。

「あの……俺は男ですし、そうありがたがるような存在でもありません。そうやってエスコートされるのはやめて欲しいんですが」

困り顔も……いい。素晴らしい。

……

やばい。まじやばい。やばいなんてもんじゃねえかも……。なんで俺身の危険感じてんだ？ いやいや、やばい意味ではない。天使バレはやはり俺は別種族だということもはつきり示してくれているからそういう危険はいつさいねえ。当たり前だ。

なにこれ?! なんなのマジで！ 目の前にいるのは線の細いなよそんな男。聞いたところ僧侶らしい。雰囲気からして手練だ。手練多いなセントシユタイン。人間が沢山いるだけある。

そうじゃねえよ。

反対側の隣にはメルティーという女の子。珍しい紫色の髪の毛をショートカットにした可愛い子だ。その子が手を合わせて一心不乱にお祈りをしている。俺を見つめ、なんか……表情がぶっ飛んでいる。

俺は……天使だからな。こういうことをされる側なもんで、されたことがないってわけじゃない。ただし、こうもはつきりとされたのは翼がもげてからはねーよ。なんでだよ。なんでバレたし。

メルティーはそりやあもう可愛らしい笑顔で俺のことをアーミアスさんといい、兄だかなんだかしらねえがそりやあもう出会った中で一番やばい男とついてくる。……着いてこさせたのは俺だが。そうだ、メルティーみたいにかわいい女の子を仲間にするとかいつがついてくる。有能そうで、しかも心は清いだろうところが断れないのが、まじやべえ。

やばい。ガトウーザは本当にやばい。なにしろこのホコリ男をものすごい勢いで天使と看破しただけではない。凄い勢いで、ものすごい声量で叫んだ。やめて欲しかった。それだけではない。俺のリツカたんペロリズムも真つ青な勢いで近寄り、俺のことリツカたんペロリストっぷりが可愛いと思えるほどに崇拜した。

ウォル口村はいいところだなあ……俺帰りたくなってきた。こいつ怖い。だいたい、ご利益はないから意味は無いことなんだが……。しかし俺にはわかる。こういうタイプから信仰物を取り上げてはならない。

俺にはわかる。暴走する。リツカたん抜きとか死ぬ。そういうものだ。わかる。わかるんだが……。怖い。リツカたんも……。こんな気持ちだったんだろうか……。こんな気持ちなのに信仰心にあついから耐えて……。うつつリツカたん健気……。ごめんねリツカたん……。これからはちよつと控えめになるぜ……。

天使ってのはいくらいかにも軟弱そうなのやつでも天使に見えるらしい。翼が

なくても。こういう一歩間違えたら狂信者なやつに見つかったら……割と怖いな。幸いなのは危害を加えるどころか段差ひとつひとつまで気を使われている、というところだろうか。

ああ神の子よ。正直うざい。

ちらつちらつとこちらを困ったように何うマテイカ。恍惚とした顔のメルテイー。どつちが癒しかつてそりやあマテイカだろう。相変わらず純朴そうな顔をしている。そのままできてくれ。

さつさと王様のところに行くということになっている今、頼みのリツカたんはもちろん宿屋にいるのだからいないし。リツカたんペろりたいのに無理だからマテイカという唯一のまとも枠に縋りたい。

気性つーか、心が悪い奴らではないのははつきりわかっているんだ。だから、引きはがせないのが辛いところだ……。ああ師匠、弟子ここで困ってますよ！

それにしてもだな、都会といえど、というか都会だからかゴミが落ちているのを必死で拾いたいのを抑えつつ、なんとも鬱陶しいのをなんとかあしらう。

よーし……：急ぎじゃなかったら、終わったら大掃除してやろう。ふふん、俺ってな、百年以上天使界の掃き掃除担当のベテランなんだぜ？俺にかかれば広いセントシユタインも綺麗さつぱりにしてやるよ！

・ 目標できたらしよつと心も軽くなつたぜ！多分。
・
・
・

21話 試

. . .

「黒騎士、ぶっ倒しに行くぞー！」

まばゆいばかりの笑顔で拳を突き上げているのはマティカ少年。そしてアーミアスさんの隣で行きますか？ 行きますか？ とせっかく整えてあげたのに髪を振り乱しそわそわして早く自分の力を認めてもらいたいガトウーザ。私？

えっと……恐れながらちよつとお外は怖かったりするので後ろからついていきます。

もちろん後ろ姿もすらりとしていて美しいアーミアス様をしつかり目に収めながら。ガトウーザが視界に入るのは現実には引き戻されるような感じがするのであまりよろしくありません。

私は魔法使いですが、魔法使いなんてなりたくなくなかったのです。唱えれば自在に操れる炎や氷の力。私が欲しかったのは人々のためとなる癒しの力なのに、……私は誰かを癒すことすらできないんですよ。守る力であると理解していても疎ましいものです。

別に魔物さんたちのことは怖くないですよ。むしろ今はさっさとぶっ飛ばしてアー

ミアさんの糧にしたいです。でも……魔物さんたち、燃やされる時、苦しそうでしょう。きつととても痛いはずです。それに魔法が迫ったら怖いでしょう。

願わくば、早いところもつと強力な魔法を唱えて一撃で葬って差し上げなければならぬですよ。そのためには好きでなくても魔法の訓練をしないとけませんね。メラミとか、メラゾーマとか使えたら爽快……じゃなくて苦しみを味あわせることなく死に誘えるかもしれない。

「先に少し力を確認してからにしましょう。互いのことを知らずして強敵には勝てませんよ、マティカ」

「あつ、そっか」

「意欲は素晴らしいですから、その勢いで行きましょう」

「はい！」

なんだかアーミアさんって先生みたいです。先生……というか子供を見る親というか。とつてもマティカさんを見る目は優しく、慈しみまで感じます。アーミアさんは天使様ですから、私たちなんて子供みたいなものでしょうね。特にマティカさん、私たちの中では一番年下ではないでしょうか。だから一番優しい目をしているのかも。

とつても素敵です。天使様に慈しまれる子供。素敵です。食べちゃいたいぐらい素敵ですね。ガトウーザが視界に入っていないければもつと素敵です。信仰は相手に迷惑

をかけてはいけないものです。僧侶とはいかなる存在であるのかまた説教しなくてはいけないようですね。

そんなこんなでセントシユタインの城下町から出た私たち。外に出た途端に私たちの雰囲気は一変しました。

弟か兄かよくわからない存在の幼なじみ、ガトウーザは僧侶ですが、よりにもよって魔法使いになりたい変わつたやつですから、蔓延る魔物さんたちを燃やし尽くしてやろうとばかりの顔つきになっています。槍を構えているものですから、怖いです。串刺しにするつもりですよ。

マテイカさんは腕にもともと装着していた鉄の爪を下ろし、いつでも攻撃できるようにしました。それだけではありません、素朴な、ほつとするような、小さな無邪気な子供のような雰囲気はなりを潜め、目つきを鋭くして辺りを警戒します。襲いかかってくる何かがいれば、飛びかからんという……そういう雰囲気です。しなやかな獣のように油断がありません。

そして、アーミアスさん。彼は帯びていた兵士の剣を引き抜きましたが、構える前に一つ祈りを捧げるがごとく剣に手をかざして目を閉じたのを私は見逃しませんでした。目にするものすべてを大切に思っているかのような優しい目をしたお方ですが、もしかして、魔物さんたちにも慈悲を抱いておられるのでは？

……まさか。

魔物さんに慈悲なんて。魔物さんたちにも悪くない魔物さんはいます。スライムの中には特に悪くないよ！なんて言っているかわい子と故郷の街のはずれでおしやべりに来たことだってあります。でも例外中の例外ですよ。そんな子ならここにはいませんから。

こうやって私たちを見るやいなや襲いかかってくる魔物さんが更生可能な心を持っているかという……私はない、と思います。私たちに来るのは相手^{おもんばか}を慮ることではありません。私たちの、神からいただいた尊い生命を守ることです。そのためには残酷でも殺さなければなりません。

生きとし生けるものはみな、神の子。アーミアさんも神が創りたもうた存在です。特に手塩にかけて創られたのがはつきりわかる最高傑作でしょう。

ですが、魔物さんは違いますよ。魔物さんは私たちの神が創った存在ではありません。邪神の誘惑であり、悪意でしかありません。私たちに出来るのは弔って差し上げることと、悪意から逃れた子たちとおしやべりすることだけです。

「さあ、行きましょう」

決意を宿したアーミアさんの瞳には今も無数の星が浮かんでいます。きらきらと、太陽の光が深く深く澄み切った瞳に反射してそう見えているのです。

この方についていけば、私も、力を求めるガトウーザの有り様もきつと、よくなる。私は、そう確信して……杖を抱え直して領きました。恐怖はもちろんもうありませんでした。

・
・
・

流石に四人で戦えば大して苦戦……いやいや、全く苦戦しねえな。それは想像以上に仲間たちの戦闘能力が高かったってことだろう。

俺が斬りかかろうとした時にはとつくにマテイカが飛び出して何匹か魔物をぶつ飛ばしているし、メルティーの呪文が二発ぐらいは放たれているから相当なもんだ。

旅芸人はバランス型だからすばやさの特化した二人には勝てねえなあ。なんとも頼もしい限りだぜ。だがもちろん、そうしている間にも誰かが怪我しそうなものなら身を呈して守っている。僧侶のガトウーザのホイミはよく効くから傷みも持続しないしい感じだぜ。この中で一番体力があるのは今のところは俺らしいし、適任だしな。

ま、武闘家のマテイカの方が体力がついたってその役を変わる気はねえがな。彼には攻撃を頑張ってもらいたいからな。なんであんなふうに馬鹿にされ、からかわれていた

んだ？こんなに強いのに。よくある嫉妬からの……でもなさそうだった。はあ、人の見る目がない人間たちだ。お馬鹿さんってやつだな。悔い改めてもらわないとな。

一通り連携が取れるかなどを確認し、なんかそこらに散らばっている毒牙の粉を集めてみたりと今日は訓練やらで潰す気だ。さつてと、飛んでくるメラを皮の盾で受け切るのは無理そうだ。帰ったら新しいのを買わないとなあ。

んー、だが気になることがある。ガトウーザが言つてたようにこの二人、互いの職業が逆だったらと思つていられない。そのせいなのか、魔法が制御しきれないねえんだわ。

メルティーはよく暴走させ、ガトウーザはパワーアップさせる。皮肉なものだな、逆にそれで強くなつてんだからよお。才能に溢れた二人はそれでも逆のものを志す。くう、神様も試練がキツイねえ。

俺はよお、天使界に戻れようが舞い戻ってくるし、いつかはダーマにも行くだろう。もしたらもう一度二人には見詰め直してもらわねえとな。なんだかんだ似合つてるぜ？もつたない、つーかほんと、本当はいいかもよ？そういうのを考えるも人生つてやつだぜ。

にしても……マティカは癒しただけじゃなく本当に頼れるし強えなあ。だから反面、ガトウーザがちよつとの怪我ごとに涙目になつてるのがちよつと堪えてきたんだが。

なあなあ、俺がパラディンになって仁王立ちするようになったとして、こいつどんな顔するんだ？

つーかよ、俺のことをちやーんと天使だつて見抜いたならこれぐらい当たり前のことなんだから受け止めるよな。俺のわがままで人間たちを危険な外に連れ出したんだから守るのは当然！ そうだろ？

人間たちの健やかな生活、安寧。それを守るのが天使！ それに誇りを持っていきたくないじゃねえか。なあ、そうだろ？

・
・
・

22話 待機

さてと。いつぞやの防具屋で二つうろこの盾を買い、稽古着上下に軍手に鉄の爪、足はサンダルというラフな格好で歩き回っていたマティカにヘアバンドに皮の靴を買ってやる。

買ってやる、ってムカつくほど偉そうな表現だよな。最初俺はパーティで魔物を倒して得たんだからみんなの金だと思ってたんだが、どうやら契約上、全部俺のものらしい。受け取るどころか猛然と拒否されてしまった。

だから「買ってやる」。マシな言い方をして「買い与える」。……俺としては契約金だけでなく、きつちり四等分して渡したいんだがな。受け取るどころかその契約金すら突っ返されそうになって慌てて断れない装備品を押し付けたってわけだ。契約金は無理やり握らせた。拒否されてたまるか。ちなみにメルティーとガトウーザは一日百ゴールドらしい。安くねえ？

宿代はリツカたんとこで泊まれば一人分三ゴールドで済むが、それでも安くねえ？ マティカは七十ゴールドで契約してたらしいから更新して百ゴールド渡した。

俺の精神的にも、魔物の討伐数的にも一番いい働きしているのはマティカだから

な。事ある事にハアハアしないのがこんなに癒しだとは思わなかった。まじで。ガトウザ怖すぎ。メルティーも俺の死角で何をしているのか全く分からねえ。

そんな嫌な意味で集中をしているガトウザをメルティーがこそこそ杖で叩いて魔力を奪つてたのは見てて面白かったけどな！

あ、なんで装備品かって言うとパーティメンバーは俺の指定する装備品を拒否するとは出来ない。それで渡したやつはな、別にプレゼントでいいんだが、渡してもどれだけ使ってもらっても俺のものということには変わらない規定だとか。酒場雇い……つてしがらみ多すぎじゃね？

とりあえず真っ先に癒しオーラを出してニコニコしていたマテイカに装備を渡したら、やばい顔して見てきたガトウザ。咄嗟に皮の帽子を押し付け、そのガトウザをゴミを見るような目で見ていたメルティーにもうこの盾を渡した。

この二人、ガトウザはメルティーを妹扱いしているのに……メルティーはガトウザをそこまで兄だとは思ってないんだよな……仲いいんだか悪いんだか。本物の兄妹ではないんだろうが、まあいいか。信頼関係はちゃんとしている。

「アーミアスさん、ありがとうございます！へへ、強そうに見える？」

「そうですね、前髪をあげたら視界がすっきりしていいと思いますよ」

「やったあ！ 役立てるよう頑張るよ！」

マテイカつて空から落ちた天使だったんじゃない？ 間違ひなく俺よりは天使だろ？
こんなに純粋に喜んで……武闘家だから装備品をあまり更新できねえのが辛い。

一方ガトウーザは恭しく受け取った帽子を嬉しそうにかぶっている。黙っていれば……黙ってれば僧侶らしいのによ。残念、ともとれる。俺が言うなつて感じだが。この性格のどこが天使なんだろうな？ 生まれを間違えた感じはある。

「明日でしようか、精一杯頑張りますね」

「ええ」

相方と違つておとなしいメルテイもいい子だよなあ。信仰つていうのは大切なことだが、行き過ぎるとなんでも毒になるつてやつなのかね？

「うふふ……アーミアスさんの障害になるものはゼーンぶ壊してしまえばいいんです」

……聞いてないからな。俺は聞いていない。癖つ毛をぴんぴん跳ねさせてるマテイカにヘアバンドを巻き直してやつてるからガトウーザのドン引き顔も見えていないからな。誰だこの二人を歪ませたやつは。親か。

……

「来ませんねー」

月夜の中でも見渡す限りなみなみと水が満たされた湖。そんな美しい景色を一望出来ても今回は仕方ないですね。フィオーネ姫をさらおうとした典型的な悪人を倒すた

めには来てもらわなくては困ります。

湖の方から吹き付ける風にちやりちやりと鳴るアーミアスさんの鎖帷子とばさばさ摩くメルティーのローブの音だけがします。

困ったように見回しているアーミアスさんに話を聞こうにも、さつきから彼は空中を見つめているものだから話しかけられないのが寂しいです。

……きつと天使様には妖精かなにかが見えるんだろうな。見ても私には何も見えませんが、彼ならば見えるんでしょうか。

暇そうに武闘家の少年がシュタイン湖の縁に腰掛けてばしやばしやと足をばたつかせている姿を見、子どもっぽいなと思いつつも私も暇でした。お美しい姿を眺める事は暇どころではないが、それでも戦う心構えをしてきたものだから拍子抜けです。

「ひとつ、話でもしませんか？」

湖の遠くの方を見つめていたメルティーがこちらを向いて明るく言いました。こくりと頷いたアーミアスさんに私には見せないような花の咲いたような笑顔を浮かべます。

メルティーはツンツンしています。私に反抗期なのです。兄なのに！ 血は繋がっていません、兄なのに！

「みなさんの昔の話です。私、アーミアスさんの昔の話をとつても聞きたくて。全部話

せなかつたらまたの機会に話せばいいじゃないですか。私の話は結構ガトウザーと被つてしまうんですが、お話しますよ」

「……そうですね、親睦を深めるためにもいいかもしれません」

「おー、おねーさんいいこと言うなあ」

ぴよんと水辺からあがった武闘家少年が同意し、しかし肩をすくめて空を指さしました。いや。空ではないようです。

「でも残念だけど来ちゃったな」

指先に示されていたのは、黒い馬を伴って岩山を降りてくる黒い姿。邪悪とすら感じられるその姿は不気味でしかありません。ああ、身構えるアーミアさんと比べてしまうと余計に禍々しい。

黒騎士は馬に乗ったままアーミアさんと一言二言会話しました。しかし当然姫を差し出すわけもない私たちにアンデッドとしか言いようもない赤い眼光の顔を晒し、その槍を向けてきました。

アーミアさんは、一緒に戦って分かっていたましたが、やはりとても優しいお方。敵からの攻撃をほぼ代わりに受けてしまわれる。止める事はできない。あの目を見て、あの信念のこもった目を見て私は止められやしないのです。ですから、私は僧侶としての職務を全うしなくてはなりません。

この望みもしなかった力を存分に振るって彼のサポートをし、役に立つことをアピールしなくては！ アーミアスさんは私たちの希望の天使様……そのお傍に置いてもらうことこそが至高です。

と、意気込み鉄の槍を構えた私にさみだれの一撃が命中し、僧侶の癖にアーミアスさんに回復されるという情けないことにもなったのですが。ああ、精進しなくては！

ふわりと舞うように剣を振るわれるお姿を目に焼き付け、足を引つ張らないように……！ それが私に出来ること、天使様の邪魔には決してなるまい！

・
・
・

23話 黒騎士

はあーまじねーわ。マジで俺らがあのべつぴんな姫さん出すと思つてたのか？ っていう。頭の中お幸せなもんだねー、お花畑だねー。怪しいヤツに出すわけねーだろ当たり前だろ。

人間じゃない気配がするからさ、完全に敵認識つてやつ。つーか盛大に呪われた死人の気配だ、とつとと安らかに眠つてもらおうか。それが一番いい、と俺は思うね。まー未練つてやつがあるのは理解できる。愛しい人がなんだつて？ 明らかに人違いじゃね？

だからつてあんなにたくさん人間の人間を怖がらせていいか？ 良くねえよ。……はあ、仕方ねえな。

ついでに俺の仲間達に怪我させんなよ？ イラついてるみたいだし、まあ俺はいいけどな、大事な仲間たちはダメだからな！ どーせそんなの言つても無駄な敵意がバリバリだから言わないが。本職戦士ではないから百パーセントは成功しない、つまり特技ではない微妙に使えない残念なかばい方で俺が何とかするしかねえな。

とか意気込んだのに突然の五月雨の攻撃に対応が間に合わねえ！ 三発受け止める

のに精一杯だった。反則だろ、それは！と当然聞き入れられるはずもないことを思いつつも俺が不甲斐ないばかりに流れ攻撃を受けたガトウーザにホイミ。

そしてその後どうなっているかと振り返った時、ガトウーザが治った傷を抑えた手の間から覗く赤い血に思わずドキリとした。

……人間は、簡単に死んじゃうんだよな。

寿命だってそもそも天と地ほどの差がある人間と天使。それだけではない。人間は翼を持たないから、逃げも遅れる。人間は戦わない者が多いから、そもそもの実力も違う。

俺達のような守護天使はある程度の戦術を学んでから降りてくるが、人間はそうではない。学ぶ場がない時も多い。ガトウーザはその限りではないが、僧侶という脆い後衛職であることには変わりない。傷を受けた時の驚きと痛みの表情が目には焼きついて、離れない。

守らないと、守らないと、俺は天使だから！ 愛しい人間よ、すまないな！ その痛みを与えてしまったことを……今日の前で討つことで報おう！

哀れな黒騎士、死してなお死に気づかず迷う亡霊よ！ 眠れ、俺が眠らせてやる！

ただの量産品の剣を振る。黒騎士の持つ見るからに頑丈そうなランスと剣は正面からぶち当たって甲高い音をあげた。やはりか、力も強い。

でもよお、こいつは師匠より弱いぜ？　うちのハゲで親しみやすくして上級天使でも一等に成績が……じゃないな、歴代二番目の成績を持つお師匠様よりは弱い！　俺は師匠よりも素晴らしい天使になってリツカたんを幸せにせずと平和に安寧な生活をプレゼントする守護天使だからな！　ゆくゆくは人間になってプロポーズしたいが！

だからこの程度のやつに遅れをとって……守護天使が務まるかつつの！　それらよ！

ガキイインツ！　キイインツ！　そんな音がしたら剣が柄からもげそう！　鋳型で量産した剣でよかつたぜ！

何度も何度も激しい音を立てて刃を交える。お前には負けてやらねえと、この貧相な顔に精一杯の覇気つつーか、睨みを乗せて。それに黒騎士は……うっそだろ、怯みやがった！

怯んだだけじゃねえ、俺って一人じゃねーし？　馬に乗っているとはいえ単騎でやってきた黒騎士とはちげーし？　俺との切り結び合いに夢中になっていた黒騎士は後ろから飛びかかって鉄の爪を食らわせんと切り裂いたマテイカには気づいてなかった。詰めが甘いヤツ。

もちろんメルティーが、騎乗からの攻撃に押し負けそうになった時のサポートとしてヒヤドを打ってくれたり、斬り返す時にぎっくり顔やら腕やらを斬つちまったんだがそ

れを治してくれたガトゥーザがいたりチームプレイは結成してすぐの割には良かったぜ。

で、黒騎士は馬から落ち、膝をついた。

おつ、俺たちの勝ちだな？ ……まあ亡霊とはいえちよつとゴコしたぐらいでは消滅しないか。未練を解決してやらねーとな。未練バリバリだろこいつ。あの姫さんとはこいつ、関係なさそうだしな。説明してやらねえとな。

ん？ 根拠はねえが。勘つてやつだよ、一応人間よりは長生きはしてるんでね。勘はそこそこ鋭いつもりだ。

あーあ、剣がすっかりぼろぼろになっちまった。俺の大事なウオル口村で買ったのに。仕方ねえな、確かセントシユタインにはレイピアが売ってた。あれを買うか……。あーあ。量産品でも気に入ってたのに。

……
目の前にいる美貌の少年は、激しい戦いで切り裂かれたらしい服もそのまままで報告にやってきたらしい。貴族や他の王族との付き合いも当然多いセントシユタイン王室に生まれ、現在は国王の私だというのに……流れの旅人でしかない少年の美はともすれば気圧されてしまうほど。

……天使の美貌。そんなありえない考えが頭の中を渦巻く。人外の美と思えば

ストーンと納得できたのだ、彼の星を宿した黒い目の静けさに神秘的な何かを感じつつ。さらりと歩く事に揺れる髪の毛の一本一本すら凡庸な人間には敵うまい。

しかも従えた仲間達もリーダーであろう少年……アーミアスに向ける目は普通ではない。リーダーとして尊敬しているとかいう範疇ではなく……崇拜している、というのが正しいだろう。

そういえば今城下町に駆け巡る噂があったな。ひとつは噂ではなく真実であった黒騎士への恐怖からのこと。もうひとつは……セントシユタインに天使がやってきた、ということ。受難を助けに来てくださったのだと大騒ぎが起きかねないところをなんとか鎮圧したところだった。

天使様がいらっしやったというならば騒いではならないだろうという半ば肯定の方法で。

噂の根源は……彼がそうなのだろうな、と初対面の時も思っていたが……いやはや。惨めではないが、激しい戦闘の跡を残しつつもそれが完成された美のように感じられる姿を見て改めて思うしかない。

さて、……彼は何者であろうか。そんなことはどうでもいい。素性は問わぬと最初から言っている。彼が本物の天使様であるとすればありがたいことではないか。セントシユタインは大地震を受けても、黒騎士の襲来があっても問題なく安泰であると。

「ふむ、黒騎士を倒したのじゃな？」

「はい」

恭しく礼をした姿に目を奪われそうになりながらも話を促す。すると……なんとこの少年は黒騎士にトドメを刺さなかつたばかりか逃がしたと言うではないか。

事情？黒騎士はフィオーネと別の姫を勘違いしていた？ 巫山戯るな、信じれるわけがないだろう。

そう語気を強めて言いたかつた。事実、言おうとした。だが。その前に彼は静かな声でこう言ったのだ。

「ですがそんなことをセントシユタインの国民の方々に伝えても不安は残るでしょうね。ですから、今から黒騎士の手伝いに行つてこようと思つています」

静かでありながら、たくさんの星々の光を宿した瞳はきらきらと輝く。それに魅了されてしまった私たちは、何も言うことが出来ないのだ。

神がその手で丹精込めて創り上げたような美しい顔、耳心地のよいボーイソプラノの声。それに完全に……ああ、既に抗うことさえできずに私は陥落していたのだろう。彼の存在に。敬うべき存在として。

王であっても、私は一人の人間でしかないのだ。

「では、また報告に來ます」

すつと隣に立っていたフィオーネが心地よい魅了から解放されたように玉座の間から出ていくのを目に捉えながらも私は静止の言葉すら告げなかった。ただ肯定の言葉を一つ返し、恭しくも神々しい彼の礼に震える手を押さえつけることしか出来なかったのだ。

仲間でありながらも配下のように付き従っている者達も静かに礼をしてアーミアスに、ついていく。

その時私は、感じたのだ。深い安堵と、焦がれる気持ち。そして、羨ましさを。

彼は天使だ。人間ではありえない。そして……彼はこの国の守護天使ではない。あの瞳を向けられて私は確信してしまった。私たちの守護天使様の気配らしきものを、最近はとんと感じないしそもそもここまで優しいものであったかあやしいのだ。

どこか、別の所の守護天使様なのだ。その場所が、ひどく羨ましかった。彼がセントシユタイン王国の守護天使様でありさえすれば……あの瞳を向けられる安心感も、私たち人間を見る慈愛の眼差しも、一心に受けることができただろうに、と。

翼も光輪もない天使様。だが、それを失っているだけなのだろうと思えばそうなのだろうし、哀れにすら思えた。

そして、彼はそれでもなお人間を救って下さる。ありがたいことだと、私は玉座に座り直した。

・
・
・
・

閑話 翼落天使

. . .

布団の中にちんまりと収まってすやすや寝息を立てるアーミアスくん。当然翼があるからうつ伏せ。その寝顔はとても穏やかで……安らかな眠り。起こすことを誰だつてはばかるような眠りよ。いつもだつたらなんて可愛いのかしらって、そつと抱きしめたくなるような、穏やかな眠りなの。

そんな天使で天使で天使なぶにとしたほつぺたの赤みが今日は弱い。それどころか少し、血の気がなくて、むしろ青白いの。

それは……昨日他ならぬアーミアスくんが自分の手でその背に生えるふわふわの翼を切り取ろうとしたから。

私はね、第一発見者ではないの。最初に発見したのはやっぱりというか、アーミアスくんの師匠であるイザヤールだったから。イザヤールはホイミぐらい使えるんだからあの時点では結構傷は癒されていたみたいで、私が見たのはそこまでひどい光景ではなかったはず。

でも、目に焼き付いているの。

可愛らしく、天使然としていて、庇護の対象そのものだったアーミアスくんの小さな体が……自ら流した深紅の血にまみれ、ぐったりとして……長い天使生の中でも見たこともないほど泣きそうな、必死な顔をしたイザヤールの腕に収まっている姿が。

どうしてアーミアスくんがあんなことをしたかはわからない。聞くより前に今は……オムイ様の決定に、彼の回復を最優先にすると従っているから。癒しの魔法が得意な私は……皮肉にも大好きな見習い天使の顔を存分に眺めることが出来ているの。

アーミアスくんは優しい子。誰よりも天使らしい愛くるしい見た目で、見た目通り人間が大好きでいつでも力になってあげようとするような……天使の中でも珍しい、天使らしい天使。

悪意にも気づかないほど無垢で、悪意に晒されてもそちらに堕ちる事はなく、優しく微笑んでいるようなそんな子。誰よりも努力して……たったの三十歳で人間界に行くことを許された、天使界の長い歴史を塗り替えた子。

私が三十歳の時、まだ師匠の背中にくっついていてことだけしかできなかったのにな。アーミアスくん、どうして……どうして。

とつくに傷の消えた彼の背中。でも傷はなくても、傷跡は残っちゃった。私の實力不足と言いたいところだけど、残念ながらそうじゃない。傷が、深すぎたの。小さく華奢な体には不釣り合いな大きすぎる、鋭すぎる傷は……癒しの力をもつてしても治し切れ

るものではなかったの。

血を丁寧に洗い流され、以前と同様にふわふわの右翼。なのに、彼が傷つけた左翼は……ああ、見るも無残に、ボロボロなの。大きな傷跡は白い翼の中にあっても目立つほど。筆られた羽根のせいで余計痛々しいの。

どうして、どうしてなの、アーミアスくん。

ぼろぼろ涙が零れて、天使の服を濡らしてしまう。駄目ね、私は上級天使なのに。弟子はまだいけないけど、見習いの前ではいつだって規範となる存在として……すまし顔しとかなきやいけないのにな。

アーミアスくんは、それでも幸せそうに眠っている。それは救いつてことで、いいのかしらね。

・
・
・

あの悪夢の日から数日。血を失いすぎたアーミアスが目を覚ましたのはたまたま訪れていた朝早くだった。

目覚めたアーミアスはいつも希望の光に大きな瞳を煌めかせていた姿ではなく、ただ幸せな夢から覚めてしまったというような顔でぼんやりと私を見上げていた。見慣れた星の瞳に光はない。

ぞくりとする。

天使らしい姿をしているアーミアス、天使らしい善なる心を持ち、いつでも努力を怠る事はなく、期待に応え続け、私の言葉に逆らったこともない見習い天使に、私が。

恐る恐るのぞき込んだアーミアスの目にはわかりやすく落胆が浮かんでいた。落胆、落胆を。翼をもげなかったことが、いつでも楽しそうな笑顔を浮かべていたアーミアスにそんな顔をさせるのだ。どうしてアーミアスがそのような行動に走ったのか。どうして……天使としての象徴を捨て去ろうというのか。

そういう心境に至ったきっかけ……考えられる事は、あの日……私は初めてアーミアスを人間界に連れていったことしかない。

人一倍人間への関心も強く、本の中と私の話ぐらいでしか人間を知らないというのにアーミアスは既に正しき道に人間たちを導き、安寧を維持し続けようという意志がはつきりと感じ取れた。だから、異例の年齢で連れていったのだが……早過ぎたのか。

地上でアーミアスは、とても楽しそうだった。初めて見る人間たちを見てきよろきよろと周りを見、転びそうな老人を支え、走り回る小さな子どもと近くで飛びながらアーミアスは笑っていた。天使界で見せる笑顔よりも輝いて。

……だから違う、と私は思う。少なくとも、原因だったとしても……人間を見たというきっかけは悪い理由ではなりえないだろうと。

それどころかアーミアスは、いくつになっても同じ行動に出たと私は言い

きれる。なにしろ、勝手に上級天使の、しかも師匠の私物を持ち出すほどの覚悟だ。天使の理に縛られなかったことから命令に反しているとは露にも思わなかったらしい。

純粹に、普段のアーミアスと同じく……正しいと思つて、最善を行くために、アーミアスは翼をもぎ取ろうとした。

その事実が、エルギオス様がいなくなつてから久しぶりに私の心を抉り取るように突き刺さるのだ。大切な者をまた人間界でなくしてしまうのではないか、と。

馬鹿らしい危惧だ。アーミアスは結局翼をもぎ取る事はなかったし、天使界にいる。まだまだ幼い天使なのだから私の監督なしに人間界に行くことは出来ない。私がそれこそ人間界では四六時中付いてやらねばならなくて当然なのだから、失うはずがない。

……アーミアスは、寝起きでぼんやりとした瞳を私に向けながら……何を考えているのだろう。わからない。私には、わからない。分からないが……少し、不満そうだな。後でじっくり話す必要がありそうだ。

だが幸いにもはつきりしていることは、もうアーミアスがそんな無茶をしないことだろうか。

アーミアスは失血によって意識を失う間際、いつものようにこう言つたからだ。大量の血を流しながら、いつそ静かななんともないような声で。

「この方法は、駄目ですね」

アーミアスは決して、決して、間違っていることをしない。だからこそ正しいと思っただからアーミアスはナイフを手にとったのであり、あの瞬間にアーミアスは間違っていると気づいた。だからナイフをすぐに手放し、私の指示を待った。

だから、もう心配いらぬのだ。

アーミアスは二度と翼を自らの手でもぎ取ろうとするなんてことはしない。ナイフだろうが、他の方法だろうが。それは間違いない、しない。

そうわかりきっているの……どうして、私の胸騒ぎは収まらない？ いつの日かアーミアスが私の手を離れ、一人前の天使となる日が来ると……アーミアスならうまくやっていけるだろうに……そんな気がしないのは、何故だ？

どうして、あの日、翼をもぎ取ろうとしたアーミアスを美しいと思ったのだろう。

どうして、血を流しながら諦めたアーミアスに……どうして、自らの弟子に……きつと翼も光輪もない姿の方が似合っているなんて、思ったのだろうか。

アーミアスの背中には翼がある。天使なのだから当たり前のことだ。アーミアスが天から遣わされた日からずっとある。当たり前のことだ。当然アーミアスには翼と光輪があるべきであり、あつて然るべきで、今もある。昔もある。そしてこれからも。

なのに、私は、どうして……。

・
・
・

ルディアノ編

24話 廃墟城

・・・

空気が激まじんでやがる……瘴気もやばい。……ここマジやばい。

さつきまで俺達はエラファイタ村っていうのどかな場所にいたんだがな。あの黒騎士……名前はレオコーンとかいうらしい……の為にルディアノの手がかりを探そうとしてたつてわけだ。

ファイオーネ姫の言う通り、おばあちゃんたちの童歌に出てきた黒薔薇の騎士の話とか……まあそんなことがどうでもよくなっちまうくらいのものでいいところだと思つてたんだがな。

空気は澄みきつて綺麗で人々は穏やかに平和に過ごし、花びらが舞い散る景色は素晴らしい。ウォル口村ぐらいいいところつて感じた。……守護天使の気配は相変わらずなかったが。おい、こんな素晴らしいところほっぽり出すんじゃねえよ！天使界に帰つたら上級天使だろうと文句言つてやる！ 天使の理ことわり？ 逆らつてはいないから大丈夫だ！

だが水をさされたんだ。しかも手伝つてやつてるつてのによ、張本人の場違い黒騎士野郎に。後で人間たちをびつくりさせないように外でじっくり伝えてやろうとしたらおもつきし村人を脅かしやがつてこの……この野郎。若者だけじゃねえ、たまたま居合わせたおばあちゃんまで怯えてたんだぜ？ 許せるか！ 後でシメる！

あの後あいつが立ち去つてからも泡食つてた哀れな村人たちをご神木の下まで連れていつてやつて落ち着かせてやらなきやあのまましばらく震えていたと思うぜ、かわいそうに。俺たち見てほつとしたようにお礼を言つてたから……まあ、大丈夫だろう。

こういう時子どもと大人の境目と言い張りたい微妙な年齢の外見はいいよな。そうそうに見くびられるほどではないが、警戒されるほどでもない。それもメルティーがとも僧侶つぼくとか、僧侶つぼく落ち着かせてくれたおかげだろう。本職は俺の後ろにいたが。

なあにが天使様は誰にでも手を差しのべる、だ。お前も差し伸べろよ。別にこういうことは天使だからやつてるんじゃないやねえ。その場にいたからやつてるんだ。

にしても黒騎士さんよお……自覚があるのかわからんが、とつくにてめえは死んでいて、人間じゃない。態度からさぞイケメン騎士だったんだろうが、形無しだな。さつさと俺みたいに自分の顔の不出来を自覚して相応の態度にでろよ、こんちくしょうめ。顔、怖えんだよ。雰囲気もかたぎじゃねえし、黒い鎧を着込んだやつつて怖いからな？

理解しろよ？

だからまたあいつがやらかしても困るってわけで名残惜しくも村を出、北を目指して突き進んだってこと。なんか先走って行っちゃったけど。今度は少しは……気持ちがないとなくわかるから止めはしないが。リツカたんがいると思ったら落ち着いていらねえよな、確かに。

北へ行けば行くほど毒の臭いとその他の瘴気がきつくなり、人間よりもそういつたことに弱い、と思われる俺はゲゲホホしないか心配だ。ま、想像よりは大丈夫そうなんだがな。天使の力を失ったついでにそういうのに過剰反応もなくなつたらしい。天使とか清らかじゃないとやばいとか柄じゃねえから助かつたぜ。……だがまあ、サンデーが少しばかり俺たちを心配してくれるぐらいには酷い場所だ……。

なお、健康優良児まつしぐらだと見て取れるマティカ、鼻も良いのか真つ先にこのひでえ臭いに気づいていて、激臭地帯に入る前から既に俺達はバンダナとかで口を覆っている。

サンデーにもやってやろうとしたらダサイって拒否られ、そのまま俺の懐に光になって収まられたが。そっちの方がいいのか？ それなら同じ女の子のメルティーのほうがいい落ち着かないのか？ 妖精だから天使の方がいいのかもな……。

やれやれ、乙女心つてのはわからないな。わからないとリツカたんをおとせないかも

しれないから理解したいんだが……リツカたんのもとで馬車馬のように働くから置いてくれているうへタレなアピールしか俺には出来ないんだよなあ。

それじゃあ、ダメだよなあ……。

魔物も瘴気に耐えられるようにな強くなってきたし……はあ、買い換えたばかりのレイピアでも突き通せない、つまり一撃で倒せない魔物。俺が不甲斐ないばかりに長くくるしめるハメになる。もつと強くなりてえなあ。旅芸人じゃ駄目だろうなあ。

「どうか安らかに」

三回も体にレイピアを突き刺してからやつと絶命した羊型の魔物にそつと手を触れて青い光を空へ見送る。そんなことをもう何回も繰り返してきた。

そしてやつと着いたんだぜ。ルディアノの地に。手酷く滅ぼされたのか、野ざらしになつて少しづつなつていったのか分からないが……俺が見たこともないほど廃墟となつた城に。

黒騎士の嘆きがあまりにも哀れで、俺は思わず神に祈つたぐらいだ。

このレオコーンが、少しでも安らかにこの世を去れるような奇跡がありますように、と。奇跡は奇跡だが……きつと、きつと神なら可能だろう。見てくれているなら。俺は見てくれているとは思ってないが。

なら、見ていて下さるのは星々の方だろうな。星々の加護があらんことを……。

崩れかけの城の内部へと足を踏み入れたおれたち。魔物もたくさん増えてるし、おれの活躍の場もたくさんってことだよな！

念願かなって黒騎士を倒したのはいいけど、黒騎士にも事情があったと知って手伝おうとするアーミアスさんかっこいい！ おれも黒騎士を倒す！ じゃなくて改心させる！ って思っとけば良かったのに敵の事情まで考えられなかった。

ぶつぶつそのことについてすごいとか言ってるガトウーザおにーさんと最初は話してて面白かったけどずーっとその話から動かないから飽きちゃったよ。なんでかっこいいの見たらそのままそればかりなんだろ。今のアーミアスさんの奮闘ぶりかっこよくね？ メルティーおねーさんは領いてくれたのになー。

ホイミスライムっていう、見た目は可愛いのに魔物の回復係だから邪魔になってしまいう奴をごめんって思いながら切り裂き叩きつけつおれたちは進む。見習いピエロの色違いの奴らも結構いて、なんてゆるーか、がいこつ以外はどいつもこいつも結構可愛くて、ちよつと罪悪感。

うー、でもそういうので刃を鈍らせたら死ぬのはこつちだし、そういうのは逆に差別だよな！ うん、全部アーミアスさんに仇なすなら倒さないよ。

アーミアスさんってよく考えてて、ガトウーザおにーさんとアーミアスさんのホイミ

を温存するためにたくさん薬草を持ってきているらしいって、ガトウーザおにーさんが言ってた。だから怪我したら使うのは薬草なんだ。

もしもこの先に黒騎士よりも強い存在がいたら……エラフィタのおつちゃんが怖がってた「魔女」がいたら……ってこと。くうう、アーミアスさんってよく考えてるよなあ！ 尊敬する！

しかもしかも、アーミアスさんっておれたちの中で一番装備を固めてて、守備力や体力が一番あるらしい。だからおれたちが怪我しそうになると代わりに……じこぎせーってやつ？ 怖いし、見ていて痛くなるから、やめて欲しいんだ。すごいって思うけどやめて欲しいんだ。なぜか、ゾクゾクする。

おれがもつと強くなったらそんなことなくなるかな？ 例えば、おれたちに魔物が怪我させられる前に倒すとか、もつと速くなったらできるよね？

よーし、おれ、武闘家としてもつと頑張る！ このツメのスキルを磨いて、得意の身のこなしももつと鍛えて強くなって、アーミアスさんが心配しなくてもキズ一つつかないぐらい強くなるうつと！

へへっ、見ててくださいいね！ この修行着、今度はからかわれてポロポロにするんじゃないなくて戦闘でズタズタになるまで頑張るから！

・
・
・

25話 対峙

なんつーか、ほんとなんつーか。警戒に越したことはないが言うほどでもないな。瘴気も慣れれば大したことないしな。埃が舞ってるから風呂には入りたいが。こういう時頭がホコリ色だと目立たなくていいぜ。ガトウーザは焦げ茶色の頭をしているからフケみたいにな……。

大丈夫だ、俺はお前が悪いわけじゃないのを知っている。その頭はホコリのせいだろうか？ わかっているぜ。わかっているからなんで涙目をやめねえんだ。あん？俺が身代わりになるのが辛い……？ 泣かせるねえ。いいか、ガトウーザ。俺の方が体力があり、死ににくい。だから俺が盾になる。話はこれで終わりだ。回復は頼んだぜ。

城の内部は結構崩れていて道が塞がっていたりもするが迷うほどじゃねーし。つてか、もう親玉っぽいやつのところを俺達伺ってるしな。レオコーンが対峙してるんだが、邪魔するわけにも行かねーだろうって思ってた。窮地に助けに行っても……因縁の相手っぽいしな。

サンディも神妙な顔だぜ。そんでマティカなんて物凄く真剣な顔。見たことねえ顔だ。……うーん、というか俺は仲間たちのことをあんまり知らないが。出会ってすぐだ

ぜ？反対にメルティーなんかはもう突撃したそうだ。ガトウーザが腕掴んで止めてるが、杖でボカスカ叩かれてるな……。仲いいのか悪いのか。

そ、僧侶のMPをやばそうなのヤツが控えている時に奪うのはよせ。……ヘタレでも言えばやめてくれるのはなかなか素直だよな……。

「アーミアスさん、あれ普通の魔物じゃないですよっ」

「……ええ」

切羽詰った顔をしたメルティー。小声で言う姿は……リツカたんのがなかったら素直に脳内悶絶できる可愛さだ。俺は一途であるべきで、浮気しないし、僧侶であり……つまり力で負ける要素が職業的に皆無のガトウーザが引きずられているのをそつと見ながら悶えはしない。メルティーって強い子だな……。

「黒騎士さん、やられてしまいますっ」

「まだ、手を出してはいけませんよ……」

黒騎士の信頼ねえなあ。ま、俺も負けると思うけどな。近接系の黒騎士と如何にも遠距離攻撃が得意な魔女だし。おー、遠目でもおっぱい大きいな。顔が、眼光が怖すぎてお近づきになりたくないが！ 怖くね?! 明らかに頭からバリバリムシヤムシヤされそうな見た目じゃね?!

天使も魔物も人間も見た目で判断しちゃ駄目だが！ 分かっているけど怖えもんは怖

え！

「俺もすぐにも加勢に行きたいですが、駄目ですよ。彼の想いを踏みにじってはなりません」

と、彼の名誉のために言っておこう。さて、俺もメルティールと同じように武器を構えておいた方が良さそうだな。あのおつそろしい目からビームが出ていつ黒騎士が黒焦げになるか分かんねえ。

ていうか、僧侶らしいって売りのメルティール、好戦的じゃね？別に悪いわけじゃねえが。え、あ、人間の言う僧侶らしく、魔に容赦しませんってか？……魔物だ天使だ人間だつて、そんな違いがそこまで大事かよ？

ま、目の前のあいつはマジやべーってか、容赦したらやられそうだからそれでいいだろう。こんなの……人間に比べればかなり長生きしているがよ……初めて見る。悪意はそこまで強くないのに、感情が凝り固まって、尊く光の感情であるはずの愛すらギトギトに汚れちまってよ。

略奪愛つてあるだろ？ あれをもっと酷くして、永い時間呪い続けたつて感じた。あれを改心させるのは無理だな、俺には。師匠なら出来るかもしれないねえけど……。

さてと、レオコーンが呪われちまいそうだな。とつとと深淵にお帰り願おうぜ。てか俺より年上だろうし見た目はまあ若いけどこいつババア……いや、何でもねえ。種族的に

はピチピチギャルな年齢なのかもしれないな。

.....

ふわり、柔らかに舞う髪を思わず目で追う。

一瞬、ほんの一瞬。彼だけに思考が塗りつぶされる。庇う体のしなりから、広げられた白い指のほっそりとしたところ、強ばっているように、痛みか苦痛かに耐えるような背を……。

邪悪としか言いようのない光。雷のように勢いよくそれは、アーミアスさんを貫こうとして。でも、彼は受け止めきつて。

「随分な、呪いですね……」

両腕を体の前で交差させて耐えながら、心なしか苦しげな声。慌てて駆け寄ろうとするマテイカさんを視線だけで背に戻させると、星の瞳はすっかり魔女の方だけを見てしまします。

嗚呼！　せめてあの瞳が私のものにならなくても、あんな魔女なんて見なくて良いのに！　彼が許して下さるならこの世の綺麗なものだけ映していたいというのに！　この戦いが終われば不肖ガトウザ、アーミアスさんに花束でも贈ろうと思います！　青やら白やら！　天使様ですから清らかそのものな清めの水でしゃんとさせたお花がいいでしょうね！

アーミアスさんはあの力を振り払うと……そのことについては何の心配もしていませんでした、なにしろアーミアスさんは天使、魔性の姑息な呪いなんて効くはずがないからです……剣を引き抜かれました。

ああ、あの背に純白の翼があるところにこうやって背を見つめていたかった。マテイカを、メルテイーを、私を、呪いのせいで動けない黒騎士を庇う尊い姿です。ええ、私が精進すればお庇いになられても怪我を負う前に治せるでしょう、その試練なのです。

「くうっ……なぜ効かない！ ならばこの手で葬ってあげるわ！」
「呪いではなく貴女には、安らかな眠りを送りましょう……」

アーミアスさんは天使様ですが、旅芸人というのは間違いではありません。本人の言う通り旅芸人なのです。その仕草は人を惹きつける気品に溢れ、視線を釘付けにします。スーパースターのような豪華な雰囲気ではありません。アーミアスさんには、似合いません。

気品溢れる役者のようであり、それでいて演技ではない。そういうお方なのだ、とやつとわかつてきましたよ。

ガキインツ！ キイン！ 剣が悲鳴をあげました。

妖女イシユタルの短剣とアーミアスさんのレイピアが互いに交差し、激しい金属音が響きます。急いでスカラの詠唱を始めれば、武闘家のマテイカが、目標であった黒騎士

をやすやすと拘束した敵だからか、緊張した面持ちで背後に飛びかかります。ですが……まあ、そんな杜撰な気配の消し方ではアーミアスさんが庇ってしまいうじやないですか。

アーミアスさんに、妖女の攻撃が浴びせられる……今、私、冷静にホイミを唱えているのですが、はらわたは煮えくり返っています。ええ、私が望みどおり魔法使いであるならばメラゾーマでもぶちかましていたでしょう。残念ながら私は僧侶、ザキも唱えられない若輩者。鉄の槍は構えておりますが、とても威力があるとはいえませんが。

だから、何も出来ないのです。

メルティーが狂気の体現者ごとく魔法を唱えているから、なんとか冷静でいられるのですが。ここは心優しい彼女の情に任せるしかないですね。ああ、僧侶になるのがもつたいたいほどの巨大で濃厚な魔力の暴走……。

メルティーがかげがえのない友でなければ、嫉妬に狂っていたかもしれないし、その身を我がものにできれば夢が叶うと、天使様の御心に反する行いをしてしまっていたかもしれません。

ふふ、私の世界はとても優しい。私は道を踏み外す事はありません。特に天使様に出会えた今、どんなことがあっても人道に外れることなんてするわけじゃないですよ。

「……ガトウーザにーちゃんもメルティーねーちゃんも目が怖いよ……」

黙ってください、アーミアスさんがあなたを一番気に入っているのはとても悔しいことなのですよ！ 一番はリツカさんでも、パーティーではあなたが一番！ 妬ましい！ 羨ましい！ いいなあ！

「ひえ……」

そう、それでいいんですよマテイカさん。アーミアスさんが怪我をそれ以上負うことがないように自慢の腕っ節で魔女なんて倒してしまってくださいよ！

・
・
・

閑話 死

「人は天使よりもはるかに短い命だ」

「……はい」

「私達天使は何百代もの人間を見守ってきたのだ。これからも私達は……この者の子孫を見守らねばなるまい」

「……わかっていきます」

真新しい墓の前で膝をつくアーミアス。聡明なこの子は人の寿命も儂さも、美しさも煌めきも、幼くしてすべて知っている。だがそれでも初めて目の当たりにする人の死に堪えないわけではないだろう。

堪えるだろう、悲しいだろう。アーミアスが人間のことをこうも愛しているのは、我が師エルギオスを思い出させるほどのだから。かの大天使のごとく高名な天使として貢献していく事は今の幼い姿からでも想像が簡単だった。

晴れ渡った空であるというのに、吹きすさぶ風に自らで傷つけたポロポロの翼と太陽に透かされ銀色に輝く髪を任せ、アーミアスは祈る。それは神にか、はたまた星々にか。今回ばかりはいいだろう。次からはもう少し早く立ち直ってもらわなければならな

いが。今回は、この子供を一人置いてなくなつた若い女性の死に向き合わなければならぬだろう。人間としても早すぎる死に、閃光の如く生きた美しい魂に思いを馳せても許されるだろう。

白く新しい墓石の前にいる少女とアーミアスの背を見ながら、私は守護天使として生きていく人間にしてやれる事はないかと空へ舞い上がった。

胸を痛める幼き天使には時間が必要だつた。特に、アーミアスが気に入つた少女の姉だつたのだから。

確かにアーミアスはその前にいるのに、どうしてか消えてしまいそうだと私は思った。馬鹿なことを、翼からあんなに出血しても生きていたアーミアスだというのに。

翼を傷つける事はもうないだろうが、またおかしなことをやられては困るな。今夜はラフェットにでも見張りを頼もうか……。

・
・
・

あの日、どこか落ち込んだような、ぼんやりしたような顔で、アーミアスくんは帰つてきたわ。手には私でも稀に見るぐらい強い輝きの星のオーラを手にして。イザヤールは珍しく弟子を気遣うように頭をぼんぼん撫でていて、その星のオーラを受け取つていたの。

自分で手に入れたものだつていうのに見習いでまだ守護天使じゃないからって自分

の手で世界樹に捧げられないのはいつ見てもおかしいわよね。オムイ様に進言してみようかしら。

まあ、この年で星のオーラを手に入れられちゃうアーミアスくんがイレギュラーなのはあるけどね。ホント天使なんだから！

「おかえりアーミアスくん」

「ただいま、かえりました、エレッタ様」

「あらあら丁寧に。気軽にお姉ちゃんって呼んでもいいんだからね？これは命令じゃないって提案よ」

「……えっと」

「おい、私の弟子を困らせるな」

まったく、こんな天使で天使な子に話しかけて何が悪いって言うの。天使にはお姉ちゃんって呼ばれたいに決まってるじゃない。私だってアーミアスくんにししよって可愛い声で呼ばれたかったわよ。頭かたいんだから、イザヤールって。

イザヤールと戯れのように話しながら、私は決して何があつたかは聞かなかつた。聞いちゃだめなのよ、こういうことは。暗黙の了解ってやつなの。

天使、特に見習い天使が地上へ行つて落ち込んでいる時……自分から何か言わない限りは何も触れないっていうのはね。だって大抵は初めてか、初めてじゃないかに問わ

ず、人の死やら不幸に関わっているんだもの。

上級天使が落ち込んでいたら緊急かもしれないから根掘り葉掘り聞くわよ？ でもこの子達の悲しみや悩みは違う。まあ、アーミアスくんだって人間だったらもうかなりいい歳の大人に相当するわよ？

でも天使としてなら赤子よりは自律的に歩いたり飛べたりする分成長したってだけの幼い天使。寿命……ううん、私たちにそれはないわ……老いる時間の違いに打ちのめされている子達にへたに声なんて、かけられない。

「失礼、します……」

ふらふらと外に向かって歩いていったアーミアスくんの髪の毛にいつものキューティクルがないし、沈んだ表情も可愛いのに私ってば……らしくもなく無言で見送るしかなかったの。

あつちには一応、大人の姿の天使がいるから大丈夫、よね。ああ、自分で自分の翼を傷つけたアーミアスくんよ？ 安心できないの……。

アーミアスくんの翼から音もなく抜け落ちた羽根が空を舞っていたのがあんまりにも綺麗だったから、私は小さい時みたいにその羽根をそっと拾い上げて大事に仕舞ったの。幼いからか、私の羽根より柔らかくってね、ふわふわしていて、誰よりも純白のその羽根は……ふふ、密かに人気なのよ。

羽飾りを作っている女の子たちは普通、上級天使とかの自分より大きい天使のものを
使うことが多いから恥ずかしがってなかなかおおっぴらにはしてないけどね。

……思い出すわね、初めて気に入った可愛い子が、おばあちゃんになってとうとう死
んじやった日、私の力不足で魔物によって人間が殺されてしまった日を。

翼も光輪も持たない、生きる時間だって短い人間って、アーミアスクンみたいにそれ
こそ、天使のように清らかでも、無垢でも、純粹でもないのに……あんなに惹かれるの
は何故なんだろうね。

今日は、祈りの部屋で星々へ祈りを捧げましょうか……。

・
・
・

26話 魔女

天使の力はほとんどなくしちまったと思つてたんだがなあ。幽霊は見えるわ、妖精は見えるわ、その上邪悪な呪いが効かないのは残つてる、と？　ならなんで星のオーラが見えないんだろうな？

星のオーラが見えない、翼がないから空を飛ぶ事はできない、光輪がないから人間に姿を認識してもらえない……。女神からの贈り物に違いねえ。俺に不利な要素がない！　あとは寿命だな、これはどうなつてるのか短時間じゃわからない。光輪がないということ人間並になつてりやいいんだが……。なぜか？

リツカたんを見送るのは数多の人間の死を見てきた俺にも耐えれそうにねえからだ。死ぬなら老衰で共に老いたい。リツカたんが選んだ男と添い遂げていてもだ。

それはさておき、イシユダルの呪いが効かないつてのはいいことだ。有利になるならそれでいいしな。これで倒れることを気にせず庇えるつてもんだ。

だから加勢に来てくれたマテイカが怪我しねえうちにぶつ飛ばして成仏してもらわねえと。黒騎士もそうだったがこの魔女もとつくに寿命も超えてるだろ？　人外だからそんな事はねえつて？　それでも……まあ死んでもらうしかないな。生まれ変わった

ら今度は何になるかは知らねえ、でも綺麗な人になって眼福に貢献してもらいたいぜ。

こんなに綺麗な女ひとのにな。出来るものなら人に迷惑をかけないで欲しい、俺から勝手に思うのはそれだけだ。余計なお世話だろうが、誰かに迷惑をかける……っていうかそんなレベルじゃねーぞ。人間一人、寿命の理から外しやがった。その上、今も三人と俺の命まで狙っている。

俺だつて死にたくねーよ。ガトウーザとメルティーをダーマに連れていくんだからな、まだまだ死ぬ訳にはいかねーよ。リツカたんが幸せに過ごしているのを百年近く見守りてえし。それを成し遂げてもないのに死ぬるかつての。

マテイカに飛んだバンパイアエツジを叩き落とし、すかさず飛んできたヒヤドはガトウーザに当たるくらいなら俺の腹に受けた方がマシだ。そして体勢を立て直した時、何を思ったのかイシユダルは何故か豊満な胸に手を当て……。

おい、青少年には刺激がきつすぎだろうが！ それから自分を安売りするな！

「ぽふぽふ」は純粋少年マテイカや敬虔暴走ガトウーザには駄目だから！ラフエツトさんのふにつを真顔でやり過ぎた俺でもグラツと来そうなもんだ、ヒヤドでも受けて頭を冷やせ！

メルティーも察したのか、たまたまなのか、連続でイシユダルにヒヤドが突き刺さる。そこに何もわかっていない顔をした癒しのマテイカが癒し要素の欠片もない強烈な攻

撃を脳天から振り下ろした。

……光景が、悲惨だな。瘴気まじりの気が弱まっていく、その存在が薄らいでいく。ナイフを落とし、赤い目の輝きがだんだん淡くなつていく。どうやら倒せた……みたいだ。

胸が痛い。だが生かしておくわけにはいかない。死にゆく姿ですら魔性の美しさを持つ彼女は、俺たちへの恨みを吐きながらレオコーンに手を伸ばす。

やったことは最悪だが、恋い慕う想いに貴賤は存在しない。愛する人と自分の時間を止めて封印まがいのことをするなんて許されることではないが、好きである想いが尊いことには変わりない。この愛する人が愛する人と引き離されたのは……これまた許される行為ではないが、また別の話だろう。

俺たちは部外者。下手な事は言つていいわけがない。だが同時に俺は天使。迷える者に道を示さなければならぬ。示すことも俺の存在意義だから。

……天使は弱き人間を守る存在らしい。その健やかな生命を守り、幸せに生きる手助けをする。時に脅威から守り、時に来世への誘いをする。

俺はそれが気に入らない。俺は天使だし、間違いない。人間を導く存在であり、助けること自体には不満はない。だが、魔物であれ、魔族であれ、本当は導かねばならないだろう？ 次の生では敵対することもない仲間となるのだから。

俺は至らぬ見習い天使だ、だからせめて終わらせてやり、祈るのみ。それでいいとは……思っていない。ついでに言うならこの考えは吐き気がするほど傲慢だ。願わくばこの魔物の生でも共に歩んでいきたい。救っていききたいんだよ、俺は。

死なせたくない。苦しめたくない。だがそれは、叶わない。

「イシユダル、貴女の魂が……」

じくじくと腹が痛む。氷の傷はなかなか痛まないものだがだんだんと痛みが増していく。血がぼたぼたと垂れているのに気づいたガトウーザが俺を支え、魔力が尽きたのか薬草を使うとするが制止した。そんな事はあとでもできる。

「貴女の魂が、次は愛する者と添い遂げられるよう、祈ります」

「……バカな天使……」

赤い目の魔女は、ふわりと少女のように微笑む。あどけない無邪気な子どものように、優しく。苦しみではなく、ほっとしたように……そう見えたのは俺の都合のいい幻なのだろうか。

そうではないことを俺は祈る。空で見守る星々なら、真実を知っているのか……否かと、思う。

……つてか、みんなポロポロじゃねーか。薬草？俺はいいから早く自分に使えよ。あん？俺が一番重傷？違いねえな、だが気にすることは無いぜ。別に怪我を放置す

るつもりじゃないからな。

ほら、俺にはウオル口村の人間たちがくれた薬草がたくさんあるし。持たせてる分は気にすんなよ。

……うづくまったらレオコーンを見るにまだ一悶着あるかもしれねえしな……。

・

・

・

・

27話 紫転機

. . .

純白でレースのついたウエディングドレスにルディアノの物だったらしい赤い首飾りをつけたフィオーネ姫様と戦のための甲冑姿の黒騎士さんは服装こそちぐはぐで奇妙でありながらも美しく……厳かな王家の婚礼である、と私にもはつきりとわかります。

傍らで見守る私たちは、その哀しい踊りをただ見つめ、徐々に光に包まれて薄れていく黒騎士のレオコーンさんを見守るだけでした。

妖女イシユダルにすら情け深いアーミアスさんは辛そうな顔で見送られ、最期を迎えたイシユダルさんはそれまでの険しい顔つきが嘘だったように安らかな顔で逝きました。そちらも……私の心に来るものがなかった訳ではありません。

ですが、……時を越え、記憶を受け継いだお姫様と騎士さんが再び別れを告げるのだ、と思えば……ええ、俗物的な言い方をすればより美談であるということでしょうか。

私はただの魔法使い、僧侶になりたい魔法使いです。ですが私が仮に念願叶って僧侶になれたとしても清らかな心を持ち合わせてなんかいないでしょう。魔女さんの死よ

りも人間から怪物にされてしまった騎士さんの安らかなる昇天の方に感動してしまうのです。

嗚呼、敬愛する天使様であるアーミアスさんはそんなことを少しも考えていないでしょうに。今もようやくとガトウーザの言葉を受け入れて薬草を使い、未だ血塗れの姿ではありますが傷を塞がれました。しかし、アーミアスさんはかなり失血されているのです。

本来なら早く安全な街に戻り、安静にしていたいただきたいのですが……このような場でそれを言い出すほど私は無粋ではありません。この場を無理をおして見届けるアーミアスさんの思いを無駄にするわけにはいかないでしょう？

しかしながら不安ではあり、気づかれないようにそっとアーミアスさんを見れば、あの大怪我がなかったかのように背筋を伸ばし、真っ直ぐ立っておられます。堂々と、いえ、それでいて見守っているような眼差しで。

二人の哀しい踊りを見つめる黒き瞳には星のような光がいつもと同じく宿っていて……あら、ピンク色の光もちらついているようですが。

……アーミアスさんにはそこに精霊さんか妖精さんかが見えているんでしょうね。うう、視線を奪えるなんて羨ましい。

よくよく耳をすませば、アーミアスさんは呟くようにその存在に向けて話しかけてい

るようでした。いえ、会話でしょうか。

「……………これでよかったです」

瞳に映る煌めきが抗議するかのよう揺らぎました。

「俺に……………もつと力があればよかったです、まだまだ、至らぬことばかりなのです……………」

懺悔する言葉に私は声を大にして反論したくなりました。私たちに怪我をさせまいとあんなに立ち回り、命を狙った魔女さんにすら苦しみを与えぬように送ってやり、この場にいるのも辛いでしょうに見守る……………こんなこと、例えアーミアスさんよりも戦闘力が高いなどの優越がある人間だとしてもできることはありません。

アーミアスさんが天使であるからこのように素晴らしいのだ、ということには嘘ではありませんが……………私にはアーミアスさんであるからこそここで優しいのでは、と思うのです。ええ、出会ったことのある天使様はアーミアスさんしかいませんので分かりませんが。

まさか、アーミアスさんが至らないなんてことはありません。その存在が何を言ったかは分かりませんが、それだけは反論しなくては……………とはいえ私、度胸ありませんし、いきなり口を出すなんて無礼を無視できるほどの鈍感さも持ち合わせておりません。

「……そうでしょうか、サンディ。そう言ってくれるのなら……少し、嬉しいですが」
サンディさん?! 女!? どここの女ですか!?

……失礼、妖精さんでしたらかわいいた女の子の妖精さんとか、人間のイメージですらそんなものですよね。精霊さんでも女の精霊さんに違和感なんてありませんしね。しかし、私が悔しいのはその存在が女であることに加えて……アーミアさんがうつつらと微笑んだことなのです!

それほどまでに気を許している……ということですよ。私たちはまだであつて日が浅いゆえ、そんなに表情を変える姿なんて……苦痛のものしか。うつつらと微笑んでくださるなんて、マティカ少年くらいなものです!

悔しい、悔しいです! 私がもつと強ければ! レオコーンさんもイシユダルさんも一撃で燃やしたり凍らせたりして倒してしまふ事が出来たなら、私を褒めてくれたのでしょうか? このように、笑っていただけただけなのでしょうか!

この憎むべき恐ろしき魔力を、こんなにもつともつと欲しいなんて望むような事はあ
るでしょうか! ありましたね! うう、少し考えてみましょう!

……例えば僧侶になれたらどうでしょう、アーミアさんの傷を癒すことが出来るはずです。ですが! ですが!

そもそも傷を負わせてしまう前に立ち塞がる敵さんたちを私の魔法で粉碎してしま

えばいいのではないでしょうか！

そのためには魔法使いでなくてはなりません。私は体が強くありませんし……。そうだ、賢者になれば最高峰の爆発呪文を操れると聞きます。それを習得できればどんなものでも吹き飛ばし、アーミアスさんが私たちを庇おうとする前に倒せますね！

僧侶への憧れ、夢。それがなんでしょうか！ 何になるんですか！ 今アーミアスさんを守れもしないのに！

私が見据えるのは未来です。私が進んでいくのは過去ではありません、天使様に出会う前の私ではありません！ 最善を選ばなければ！ 私は！ 私は！

……決めました。私は、賢者になってみせますよ。

よくよく考えれば……。賢者だつて人を癒せます。確実に人を蘇らせる魔法や、どんな傷を負つても完璧に治してしまふ究極の回復魔法も使えると聞きます。ならば！ 問題ないですね！ 人を癒せる上に強くなれる。強くなればアーミアスさんに怪我をさせることはありませんし、賢者なら傷跡も残さずに治してしまえるに違いありません！ うふふ……。決めました……。決めましたわ……。ああ、アーミアスさんの存在によつて私が変わっていくのを感じます。うふふ、素敵なことですね。私、私とても幸せです。私、今すぐにも……。貴方様を包み込む服になりたいのです。それは叶うことはありませんが、賢者になれば……。うふふ。

あは……いい思いつきです。うふふ……ふふふふ。

あほ面晒してアーミアスさんの美しい顔を見つめていたガトウーザにいつの間にか手をひかれていました。気づけばセントシユタイン城下町を歩いていて、今から王様に報告に行くのだと伝えられました。

うふふ、失態ですね。アーミアスさんをずっと見つめていたのにはしたくない妄想に夢中になってしまうなんて……。うふふ、でも笑いが止まりません。

私、私って……そうです。僧侶になれなかったのはこういうわけなのです？ 神様。賢者になるために、よりアーミアスさんを守るために攻撃魔法の練習から入ったというわけなんですよ。うふふふふ。

あら、ガトウーザ。どうなさいました？ 何でもない？ そうですか。顔色が悪いです？ うふふ。

ふふ、マテイカさん。どうしたのです？ 今日はお手柄でした。あんな風に前衛で戦うという事はガトウーザにも私にもできません。あの場でアーミアスさんの助けとなり、共に戦えるのは誇りに思うべきですね。え？ 思っている。ならいいのですよ。

私にできないことを他人に求めるって正しいことだと思えます。何故か胸の奥底から深い深い嫉妬のどろどろした感情が沸き上がりますが……この程度を溢れさせるような人間が「賢き者」になんてなれるはずないです。

うふふ、うふふふふ。平常心、平常心です。すべては天使様の……いいえ。アーミア
スさんのために……。この清らかさに、美しさに、慈悲深さに、存在に。既に私、夢中
でして。

・
・
・

28話 貧血気味

・
・
・
良くやった、と言う声すら震える。先ほどファイオーネや兵士の証言から一連の事件が終わったことも、その手柄はもちろん目の前で静かな瞳を向けるアーミアスたちのものであると知っている。

知っているからこそ、傷こそすでに塞いでいたようだが、ひとり血を流した跡の残っているアーミアスの姿が痛々しい。前見た時も服が切り裂かれた姿であったが、鎖帷子を碎かれた戦闘痕は魔女との戦いが如何に激しかったかと……それから彼の仲間たちが苦々しい顔で立っていることからすべて彼が攻撃を庇い、受けてしまったのだということがまざまざと伝わってきた。

彼は天使。優しすぎる天使様なのだろう。しかし仲間達の目を見よ。あれはむしろ自分たちがアーミアスの盾になりたいという、そういう目である。しかし彼に逆らうことも同じくらいできないことであり……ああ苦勞が忍ばれる。

そして、そして、この姿の……なんと美しいことよ。気高き天使像が動き出したよう
な……いや、違う。

それこそ想像しかできぬ天界におわす存在である、と隠しても隠しきれない鳥肌の立った肌でしかと感じることの出来る、圧倒的な美なのだ。幾分か肌は前よりも白く、星の瞳は柔らかい光を宿しながらも事の結末に納得できていないのか鈍く輝き、少しも物怖じすることなく背筋を伸ばして立つ姿は……ただただ惹かれる。

「大儀であった。黒騎士事件を解決するだけでなく危険な魔女まで倒してしまうとは！」

「……ありがとうございます」

揃って一礼する彼ら。しかし……ああ私を見るアーミアスの仲間たちの視線は鋭い。鋭い爪を腰に下げた金髪の少年はにこやかに笑っているがその目は剣呑であり、寄り添い立つ兄妹らしき二人にいたってはそもそも表情から取り繕う気すらないらしい。

王に向かつて無礼な、と言うには……私は既に自分の非を認めてしまっている。天使様は少しもお怒りにならない、そのような素振りすらみせない。それがかえって私には辛いことだった。せめて、助太刀の兵でも送ってあげれば良かったのだ。

しかし私は何もしなかった。そして……人間を守って下さる気高き天使様が不要な傷を多く負った、というわけなのだろう。相手は魔女、魔法の手痛い攻撃を血の汚れを見てわかるように腹に受け、それでもなお守り続けたのか。

「玉座の裏の階段を上った先にはある宝物庫の鍵を開けておいた。中身は褒美として

持つていくが良いぞ」

「ありがとうございます」

「……」

恭しく礼を言つて下さる天使様と後ろで声を出さずに口を動かす仲間。……「大したものが入っていないならどうしてくれよう」と、読み取れる。勘弁して下さい……青い宝箱は何度でも補充するゆえ……。

その後、金のロザリオを勝ち取つたらしい僧侶の青年は小声でアーミアスさんの加護付きだと連呼していたので少しばかり羨ましかった。

あれがあれば悪夢など見ないだろうに……。

……

「……どうしたの、アーミアスッ！」

「あぁリツカ。ただいま戻りました」

ぼろぼろの格好になったアーミアスが帰ってきた。その隣にはアーミアスがどうかなくなってしまふんじゃないかとばかりにハラハラした顔の仲間の青年がついていて、杖を握りしめた女の子は私を見るとほっとした顔をして部屋をお願いします、と言つたの。とても普通の状況じゃなかった。

勿論アーミアスとその仲間の人たちは従業員価格で四人合わせて十二ゴールドで泊

めるつもり、何だけれど。

天使様の世界から落ちてきた、傷だらけのあの時のようにアーミアスの肌は血の気が引いていて、傷はなくても血の跡がべったり残っていて、私に向けて微笑みかける表情は見とれてしまいそうなくらい綺麗なのに……微かに手足が震えているのを私は見逃さなかったの。

肌が白い。いつだって透き通るように白いアーミアスの肌は、今は青白いの。なのに疲れた顔なんて見せないで、黒い瞳はいつも通りに優しさをたたえて、星を宿したようにきらきら光る。

アーミアスは、いつも無茶をする。どこまでも天使様である優しい優しい彼は……私たちが人間に頼まれ事したら断れないし、自分がどんなに怪我をしていて辛くつてもやり遂げてしまう。文句の一つも言わないで、当たり前のことみたいに。

天使様だから？ 天使様だから無理をしちゃうの？ アーミアスに守られるのは嬉しいこと。ありがたいこと。感謝すること。でも、でも！ そんな傷ついた姿なんて見たくない。そんなに怪我するってわかってたなら……何をしても止めたら良かった！

セントシユタインには兵士が沢山いるから、アーミアスがわざわざでなくても解決するって。峠の道の土砂崩れの時みたいにして。言えばよかったんだ。

アーミアスだつて生きているの。いくら守つてくれる強さがあつても、血が通つていて、体温は私たちと変わらずあたたかたかたで、規則的に息をして、美味しそうにご飯も食べるし、それで当然、怪我は痛い。誰よりも優しいアーミアスだから隠しちやつてなかなかわからなくても……実際耐えてしまう強さがあつても。

……ああ、今も守護天使様としてウオル口村で見せていたあの慈愛のこもつた顔つきで私を見て、立つているのも辛いのに、私たちひとりひとりが何か不自由していないかを見ているの。

そしてみんなが健康であるとかわかつたら、私に向けてとろけるような笑顔を浮かべるの。何度見ても胸が高鳴つてしまう、綺麗な微笑みを。大丈夫だと安心させるような。

……騙されないからね。アーミアスに悪気がなくても、アーミアスが無茶するのは私、絶対止めたい。そんな顔色で大丈夫なわけじゃない！

「とりあえずそこに座つて待つて。すぐに部屋を用意するから」

もう見ていられない。ぐいっと酒場の椅子を引いて、アーミアスの日焼けなんてしてない真つ白い手を取つて、座らせる。抵抗もなくアーミアスは座つて、そして休むでなしにほかのみんなも座つたら、とばかりに首をかしげる。

初めてつかんだアーミアスの手はチラッと見た見た目こそ柔らかかな何も傷つけられそうにない手だつたけど、触れば分厚いたこが付いていたの。厚い手のひらの皮は強さ

の印。そして守るための努力の結晶。

ぜんぜん、私の手とは違う。

あの手は、守る手。守るために戦う手。誰よりも儂く守られるべき存在のように美しく整っていて、天使様だからか中性的な顔立ちをされているけど骨もしっかりとしていて……天使様であろうが、アーミアスは……男なんだなあと場違いに認識する手だった。

急いで空き部屋を帳簿で確認して、部屋を三つ用意する。四人ともばらばらの部屋にするには空きが足りない。優しい微笑みを浮かべていたアーミアスがついに限界を迎えたのか不意にぐったりと机に突っ伏してしまったのを視界の端にして、とんでもなく慌てながら……ドアを蹴破る勢いで飛び込んできた男の子と茶髪の青年は同じ部屋に泊まってもらおうと考えて。

男の子は何故か鎖帷子を片手に持っていて……ああ、アーミアスの着替えを買って来たんだ。

鍵を手に、駆け寄る。

「アーミアス……？」

僧侶の青年が杖を片手にアーミアスの背中に手を当てる。ぽわっと灯る回復魔法の光。でもそれはすぐに消えてしまった。彼は悔しそうに唇を噛む。

「……申し訳ありません。魔力は先ほどの戦闘で使い果たしてしまっただけ……」
「ガトウーザ、怪我はないですから、俺は大丈夫です。ちよつと疲れただけです……」
そう言つて立ち上がったアーミアス。また私を見て、本当に大丈夫ですから、と繰り返し言つて。そんなに言われたら大丈夫じゃないって言つてるようなものじゃない！
でも鍵を受け取ったアーミアスは誰の力も借りずに部屋に行つてしまった。男の子から鎖帷子を受け取つてお礼を言つたアーミアスは、そのまま部屋に閉じこもつてしまつて。

夕飯の時間になつても降りてこなくて……私はとても心配だつた。

幸いというか、隣の部屋に泊まつた仲間の青年……ガトウーザというらしい……曰く、倒れるような物音はしていないから寝ているだけだと信じたい、と。

……ねえ、アーミアス。無理はしないで……？

……

……

……

……

閑話 呼込中

よっす、現在呼び込み中だけ。リツカさんの経営する宿に泊まれるとかこの世の史上
だろ？ もう可愛い人間たちを呼び込みまくるしかないよなって思ってたな、気合入れて
看板作って立ってるんだぜ。

勿論戦闘はなし、手伝ってもらうのは申し訳ないから仲間の三人には今日はオフだと
いうことを伝えておいた。給料は出すと言ったら拒否された。……気のいい奴らだ。
明日もちよつと天の方舟が動くかどうか確かめるつもりだし、明後日にルイーダさんの
酒場で集合ってわけだ。

……ガトウーザとメルティは絶対についてくるって言い張ってたし、マティカもい
い笑顔で明日が楽しみだと言ってたし……休みの意味をわかってんのか謎だがな。
明日は何が何でもねじ込んで受け取ってもらえないようだぜ……。

んなことは今はいいんだよ。俺は散り散りに好きなことをしに行つた仲間たちよりリツカたんの笑顔のために今日を消費したいんだからな！

リツカたんが一日寝りやあ貧血ごときすつかり回復、リツカたんの最高に美味しいご飯を食べて元気どころか脚力で天使界に帰れそうなぐらい絶好調な俺を心配してくれたんだ。その顔もめちやくちやべろかつたんだが、べろかつたんだが！ 心配ばかりさせていらねえぜ、情けない！

俺が宿を繁盛させる手伝いしたら多分、喜んでくれるだろ？ やっぱ人間は幸せで笑つてくれた方が一番嬉しいしな！ そのほうがいいだろ？

しかも心配顔のリツカたんは昨日の夜二時までべろつたからしばらく補給しなくてもいい！ そもそもリツカたんって存在するだけでべろべろだし、なんだろうな！ 最高に可愛いぜリツカたん！ だから、心配なんて体に悪そうなことより健やかに微笑んでいて欲しいっていうのが惚れた側の願うこと、だろ？

「旅の宿？ どつちだい嬢ちゃん」

「左手の階段を下りてすぐの大きい建物ですよ。一晚朝夕二食付きです」

「ふうん、行つてみるか……」

……俺は女顔ではない、客観的に見てもそのはずだ。男らしい顔つきではないのは認めていゝる。なよいホコリ男だからな。ひよろくて筋肉もなく、まゆも太くなく、肌も白

く、リツカたんぺろぺろに光る真つ黒の目で、背の丈はそこそこ、全体的に薄い。

服装は利用者が親しみやすいように旅人の服だ。まあ、宿つてのは旅人を呼び込むんだしな、当然のことだろ。制服があれば着たかったんだが、リツカたんは着慣れたあの服を着ておかないとな！

だから制服なんていらねえんだよ！ この美しく最高の世界でオンリーワンなりツカたんまじべろ！ 何、ウエイトレスやウエイターの制服ならリツカたんの宿屋にもある、だど？ 確かに呼び込みはウエイターの仕事の一環としてないわけでもないだろうが……どうだろうか。俺はこれを通したいぜ。

うーん、それにしてもなんでこんな屈辱を受けなければならぬのか。百人に一人くらいなら見間違えをしても幼き人間のすることだから仕方ないと思えるんだがなあ。

あと定期的にセントシユタイン在住のお婆さんたちにお供えされてて完全に今の俺生きてるだけで天使像扱いなんだが、おかしくね？ 呼び込みしてもバレるってどんな天使補正だよ、熨斗つけて返してえ。

つーかさつきから俺は半分くらい「嬢ちゃん」と呼ばれるんだぜ？ 訂正は……：そうだな、世の中にはいろんな顔の好みの人間がいるだろうから夢を壊さないようにしてないんだが。もしかして……間違えている失礼な奴らはサラダに突っ込む薬草に塩を振らないほどの薄味好きなんだろうか……？ ならある程度仕方ない……：のか？

おいおいおい、それならよ、貧相な俺を見て女と思うぐらいならルイーダさんの豊満な胸をみたら鼻血噴水モノじゃねえか？　つまり今の兄ちゃんを天国に招待しちまったのか……俺は……。まったく、いい善行をしたもんだぜ！　存分にノータツチで不埒なことをせずに眼福していつてくれ、連泊で頼む！

宿に入ると桃源郷だしなあ、けしからんぜ！　まず酒場でルイーダさんの妖艶な美女っぷりを見、胸に見とれ、不埒な視線を振り払う仕草に思わずデレデレとするだろ？　それからふと振り返れば銀行受付嬢のレナの颯爽とした街のマドンナっぷりに目尻が下がるだろ？　そんでここで押し寄せてくるペロさはリツカたんだ。

まだまだ二人に比べてみれば年は若い、可愛らしさには関係ねえな。さらさらの青いおかつぱ、くりつとした大きな目、ピンク色の唇は見てるだけでペロいし、昔の病弱さが嘘みたいな健康的な体つきは見守る側として冥利が尽きる。

ささやかな胸元に見とれる危ない奴は俺が守護天使として容赦しねえが、そうすると俺は俺を罰しなきゃなんねえな。だが俺は天使、じゃなかった紳士！　一秒以上見てたことはねえ。セーフだろ？

ついでに言うなら天使界一のリツカたんペロリスト紳士を目指す俺は洗濯物を干すリツカたんに近いことで姿が見られない頃なら容易に見れたばんつの柄も色も形状も知らねえ。思い出す度惜しいことをしたと思うが後悔はしていない。清く正し

くりツカたんをペロらずして紳士ペロリストを名乗れるものか！

リツカたんが健やかに健康に憂いなく過ごし、たまに笑いかけてくれるなら俺……当然ばんつより笑顔の方をとるんだからな！ リツカたんまじペロ！

「入口すぐの左手の階段を下りてゼロ秒、リツカの宿屋をぜひお使い下さい！」

「……なんてゆーか、アーミアスって案外俗者？」

「？」

俺の奮闘ぶりを眺めていたサンデイはぼそつと……俗者？俺ほど天使らしくない天使なんていねえだろ、呼び込みすることぐらい今更なんてことないんだが。なんだ、金儲けの手助けって感じは天使らしくないでも？

昔から見守ってる女の子の手伝いぐらいいいだろ！旅人の服で旅人の宿アピールも健全でさっぱりとしたイメージどおりだし、清潔感があるだろ？ 俺の髪色以外は！

髪色はどうしようもねえから！

「そんなワケないか。オツカレね、アタシはちよつと向こうに行つてくるから」

……なんかよくわからんがいつてらっしやい。それにしても……俺に直接話しかける人間は少ないが宿に向かうやつは始める前よりそこそこ増えたように見えるから成功ってことでいいんだらうか？

にしても、だ。駆け抜ける風が足元をスースーさせるもんだなあ。旅人の服一枚つて

のはリツカたんに着てもらいたいやつであって……俺じゃないんだが。ルイーダさんが言うならまあこれが正しいんだろう……な？

ちなみに男は黙ってフンドシだけ。

・
・
・

29話 停止

ただ睨むだけで魔物が帰っていくから平和だな。

ん、ああ、おはよう神の子。今からちよつくらぶつ壊れて停止中の天の方舟まで行ってみようと思つてな。一応仲間たちは着いてくるとは言っていたが……休みだし……黙つて行つて、放つてひとりでとしたらやつぱりというか、着いてきた。

まあそれはいい。来たところで減るものでもないし。だからといってこの通り戦闘すら起こらないからだのハイキングと化してるんだぜ。それでいいのか？ 着いてくるのは徒労になつてねえか？

朝の空気は露の瑞々しさの中爽やか、草原の風は吸い込むと生気を感じられて清々しいのなんの。天使界は澄み渡っているがこんなに生命の息吹を感じたりしないし、人間界の方が好きになるつてもんだよなあ？

あー、平和だ。しかも歩いているだけでこんなに気持ちがいいなんて、お弁当でも持つてリツカさんと来たかつたぜ。ああ、もちろん二人きりがいい、デートしたい。デートしたいぜ。

そんな俺のちやちな妄想より朝つばらからキビキビ働くりツカたんのいつてらつ

しやいがまだ胸に残っててな、くるものがあるぞ。そう思えば妄想の中のリツカたんよ
り思い出の中のリツカたんが俺の頭を占め始める。

普段通りのエプロン姿で、俺には新妻のように見えるリツカたんが怪我しないでねと
心配そうにしてから笑顔でいってらっしゃい、アーミアス！　って言ってくれたんだぜ
？

リツカたんの圧倒的ペロパワーに打ち抜かれて星になるところだったぜ！　今日も
リツカたん可愛いぺろりん！　今日も俺はリツカたんペロリストとしてどんどん昇進
していくぜ！

リツカたんを原動力にルンルンで歩く俺と対照的に何故か髪の毛や服装がボロって
いるガトウーザと別にボロっていないメルティーは暗いし、マティカは特に何も言わな
いが妙に静かだ。昨日何かあったんだらうか？

「アーミアスさん……っ」

心配したその時、俺の癒しのマティカが堪え切れなくなったように俺に話しかけてき
た。

……なんでそんなに、泣きそうなんだ……なあ、神の子。俺、もしかしてなんかしち
まったのか？　なんでそう、悲しがる、なあ、言ってくれたらそれを排除してやる、だか
ら言ってくれないか。ぎゅっと胸が締め付けられるみたいに悲しくなる。俺が悲しん

でも仕方ないが。

なんてな、こう直接言えたらもつと天使っぽくなれるんだが。言えねえな、ただ俺みたいな見習いに来るのは「何でもしてやること」ではなく「話を聞くこと」だ。ていうか……言ったところで何でもしてやれるほどの力を俺は持っていないんだよ……。無念ながら。出来たらいいのに、すべて叶えることができればいいのに。

座学の成績と愛しかな見習いには無理な話だ……。

「何ですか？」

とりあえず向こうは天使オートバレのせいで俺の正体をすっかり把握している。だからウォル口村の愛しい人間たちと同じように接した方が……いいかもしれないよな。とりあえず今回は。

俺よりも少しばかり背が低いマティカ。流石に屈まないといけないほどじゃないが、とりあえず目を合わせて笑いかける。俺みたいなホコリ男でも無表情で話しかけるよりはまだ笑ってる方が愛想があつていいだろ。笑った方がキモい？ もうそれはどうにもなんねえな。デレッツデレな俺に寛大なリツカたんと同じぐらいマティカも寛大なことを願う。

な、どうしたんだ？

「天使様の世界に帰っちゃったら、いつ帰ってくるんだ……？」

「忘れ物があるだけなのですぐにでも戻ってきますよ」

「天使様にとつてのすぐと、ぼくたちのすぐは一緒なの？」

「ああ……」

なるほどね。すぐ帰るつても相手は自分の祖父よりも生きてそうで年齢も不明。時の流れの感じ方の違いを怖がったつてわけか。可愛いな、本当に人間は可愛いよ。

マテイカつて可愛くないか？ リツカさんの次ぐらいに可愛くないか？ えつやばくね？ 健気じゃね？ 何、こいつは男だ？ だからなんだ、天使に性別はあるがないよなもんだ。単に孫を可愛がるような気持ちを抱いて何が悪い、俺は百歳を超えてるんだから。

「すぐですよ、同じです。どんなにかかつても二日くらいでしょうか。あそこには知り合いもいますからね、話が長引いたらそれくらいはかかつてしまうかも知れませんが。でもそれ以上は俺こそ人間界の方にいたいので飛び降りても帰ってきますよ」

「それは駄目！」

「……ははは、ただの冗談ですから」

半分本気だが。

前はホイミなんてなかったからひたすら怪我がウザかったが、今回はばつちりホイミがあるんだぜ？ だから飛び降りたつていい気がするが……。

あ、駄目だ。前はウォル口村の滝壺にうまいことはまったから生きてたようなもんだよな。あの上空から地面に叩きつけられたり海に飛び込んだら普通にお星様になっちゃうわ。それは困る。絶対にしないと決めた。今決めた。

だいたい俺は死ぬわけにはいかねえって！ 何度も何度もよお！ 今はまだ子供体型のリツカたんがだんだん大人の雰囲気を纏い、だんだんと艶めいていつて俺みたいな万年ガキな見た目のやつと並ぶと親子にしか見えなくなっていくんだぜ？ そうなつてもずつと愛しいに決まってるんだから、ていうか愛おしすぎ、今も目に浮かぶ上に、ペロすぎ！ すべて見届けるまでは死ぬるかよ！

リツカたん、俺がすべての危険を払い除けるからそこで笑っていてくれないか?!

「あの、忘れ物、とは……?」

メルティー、そんなに恐る恐る聞いてくれなくても俺が取りに行きたいのはリツカたん観察日記とリツカたんにもらった花で作ったしおりと少々の持ち物ぐらいだからな？

観察日記はなあ、ほかの人間の分も大量にあるんだが……ていうかウォル口村の人間全員分……とつくに故人になつてるのも多いし、まあ個人情報のかたまり、ほかの天使に読まれたら恥ずかしくて死んでも死にきれなくなっちゃうからついでに持ってきて燃やすか。天使界で燃やすのはなしで。ホコリみたいなやつが狭いあの場所にすすを残して

どうすんだ。……焼き芋でもするかな。

「思い出の品が少し」

「……………！　　そうですか」

おお、言及しないでくれるんだな。ありがとう。もしこれで聞かれてたら俺は罪悪感にやられながらも嘘をつかなければなかつたぜ。人間たちに嘘をつきたくないと常々思ってるつもりだが……今生きているめちやくちや美少女で努力家で健気で優しい女の子のちつちやな頃からの観察記録をつけてるとかそりやあもうやばいと思うからな。やめないが。

天使とか人間とか魔物とか一切関係ねえ。普通にキモいしやばいだろ。やめないが。とってきたらごま粒みたいな字で書いているおかげで辛うじて手帳サイズに収まってるからな、見られないようにずっと懐に入れていよう、そうしよう。

俺は一人心中の中でうなずきながら峠の道で沈黙を続ける天の方舟を見上げた。前と少しも変わりなんてないんだが、俺の気のせいかな？

重々しくそこに横たわっていて、色がくすんだ方舟の扉に手を当てる。すると軽い手応えがして簡単に開いた。

「そこに、お乗り物があるんですか？」

「ええ」

「人間の身では見えない高貴なものなのですね……」

天の方舟ってそんなすごいものなんだろうか？ それこそオムイ様のような万単位で生きている天使すら始まりを知らないという古きはあるが、飛んでいる中に乗ったこともないし……。なんか妙な形してるしな。

ま、俺の審美眼が駄目ならただただ恥ずかしいだけだから曖昧にしておくか。ガトウーザが地面に膝をついて崇め始めたしな……。

ちなみにそのまま中に入ったらなんかちよつとばかり揺れたがただそれだけでほかは何もなかったぜ。

ということ帰る事も出来ずにそのまま黒騎士騒ぎで閉鎖していた関所が開放されたりしいと聞いてそっちに行くかと俺たちは計画をまとめた。

目指すは？ そうだな、まずは異変のせいだなにか起こっていかないのか偵察しながら人助け。ただそれは俺の事情だな。もしダーマ行きの船があるならそっちを優先するが……たしかあっち側はベクセリア方面だよな。ベクセリアは船産業が有名なわけでもないし、大国であるセントシユタインが定期船を出していない時点で諦めた方がいいよな……。

すまん、ガトウーザにメルテイー。しばらくはダーマに連れていくのは無理そうだな。俺は素直で素朴で世間の汚さに染まっていないマテイカの修行に積極的になるか

らちよつと我慢してくれ、な？

………。つまりここ十年ちよつと毎日、雨の日も嵐の日も雷の日も雪の日も嵐の日も暑い日も寒い日も見守ってきたリツカたんとしばらく会えなくなるってこと……。だよな……？ やばい。リツカたん不足で欠乏症になって死ぬかもしれねえ。

やべえ、やばい。よし、ポジティブに考えることにしよう。リツカたん欠乏症になった結果、リツカたんに再びリツカたんペロペロと思いつながら再開した時にはリツカたんの可愛さが何百倍、いや何千倍かに感じられるってわけだよな？

リツカたんの良さが発作になつて逆に幸せ死しちまうな！ それは本望だぜ！ よし、出発は明日にして……。って駄目だと？もう行く？なんでそんなに積極的なんだ……。仕方ないな……。

うう、リツカたん……。

……

……

……

……

ベクセリア編

30話 澱

やばい、関所が、もとい橋を渡るとそこは雪国……じゃねえわ。秋だった。セントシユタインでは青々としていた草もすっかり茶色や黄色に染まり、そこから遊んでるのかこつちを付け狙っているのかそんな魔物たちもなんとなく秋っぽい配色の奴らに変わった。木ももちろん黄色や赤色に変わってるし物寂しさがあるな……。

これ、やべえな、やべえよ！ 知識の上では分かっていたが人間界って場所によって季節があるんだよな！ 動いたら変わるとかやべえ！ 天使界は季節のかけらもねえから珍しくてやべえな、待つてなくても良いんだな！ これだから人間界は最高だぜ。

もちろん普通にただ待つてりやウオル口村にも冬も春も来たが、さつきまで夏の場所になっていたの移動することで秋の場所にいるってのは経験ないんだぜ！

こころなしか気温も少しばかり低……やっべ、俺は天使だから気温の変化なんて大したことねえが人間にはやばくね？ 季節の変わり目には風邪でバタバタ人がベッドの住人になるもんね、ガトウーザとかメルティーとか大丈夫か？ マテイカみたいに元気少年なら大丈夫そうだが……。

……うーん、別段変化はなさそうだから心配いらなかい？　なんとなくさつきより元氣そうにすら見える。人間ってどれぐらいの「変化」に耐えられねえんだらう？

「目的地のベクセリアに誰が行ったこと、ありますか？」

「おれ！　おれある！」

巨大なひとでみてえなもみじこぞうを興味深げに突っついていたマテイカが手を挙げて笑顔。いい笑顔、いい返事だ。

「小さいときに行ったつきりだけど！　高い壁の上にあつて、レンガだらけで、セントシュタインよりもどこか茶色っぽくて、それで」

「具体的にはどうなんです……」

おいおいガトウーザ、人の話は最後まで聞けよ。具体的とかどうせ十分も歩いたら着くんだから二の次だろ。ていうかりツカたんロスで少しずつ不足ダメージを食らってるんだから癒やさせてくれ。

「え?!　えつと……一番町で高いところに大きなお屋敷があつて、セントシュタインみたいに王様がいるわけじゃないけどどこでも偉い人はいるもんだなつて」

「ありがとうございます、それだけ分かれば充分ですよ」

なるほどね、町の長なのか単なる金持ちかは分からないがその「大きなお屋敷」の住人には良くも悪くも注意した方が良さそうだな。人間って権威とか気にするだらう。

郷に入ったら従わないとな。今まではそんなことなかったが物理的に追い出されないとも限らないし……。

俺にとつてはかわいいかわいい人間たち、時には何でそんなことに執着するんだということもあるがそこもちよいとばかり愚かしく健気なところかもしれないねえよな。

にしてもだ……セントシュタインのリッカたんにはなんにも悪いことが起きていないって俺のリッカたんセンサーが言っているから大丈夫なんだが、俺の嫌な予感が鳴り響いているんだが……。ベクセリアに。

なーんか……愛する人間たちにとんでもないことが起きているような、まだ何も見えないのに胸が締め付けられるような？ 気のせいだろうか、気のせいだったらいいなだがなあ。

どうも、ウォル口村で流行り病でも魔物の襲来でもない、たまたまにすぎないのに人が連続でバタバタと死んでいった大昔が思い返される……。

人が死ぬってことは慣れねえよ。特にまだ若い人間が病にやられるってというのはな。そんなことにならなきやいいんだが。

・
・
・

空気がよどみ、さつきまで自然から感じられていた正気が弱々しく変わりました。体にまとわりつくなにかはねつとりと重苦しく、絡み付いて内部に侵入しようとしてくる

かのように……そうですね、例えるならば何かを吸い込んでしまい咳き込みたいような、異物を感じています。

ただ僧侶故にこういったものに過敏になっているのか、と思えばそのようなではありません。皆不快そうに眉をひそめたり恐る恐る息をついていたり違和感を感じているようです。

中でも流石と言いますか、アーミアスさんの様子は顕著です。ひゅつと息を吸い込んだと思うと息を止め、周りをゆっくりと見回し、痛ましげに目を伏せられました。その途端、私たちの周りだけ明らかに視界がよく、明るくなったのです。

そのことについてアーミアスさんは何もおっしゃいませんでしたが、天使様としてのお力で私たちに害がないようにしてくださったのだとわかります、ええもちろん。広い範囲を覆うことは叶わなかったのでしょうか、そのことを気に病んでいられる様子に……私は感謝の言葉をかけようにもかけられなかったのです。

もつと積極的にならないといけませんね……。

「嘆きが、聞こえるようですね」

私たちに向けられたのではない小さな囁き声。それは……私には見えませんが、先日メルティーが存在を確信した妖精らしき存在に向けられたものでしょう。

嘆き。住人の嘆きということでしょうか。はたまた、別の……そう、例えばこの状態

を生み出した元凶とか。まさか、とは思いますがアーミアスさんならありえることでしょう。

「お気づきでしょうが、皆さん」

そしてくるりとアーミアスさんは振り返って私たちを真剣な目で見つめました。そしてまるで乞うかのようにおっしゃいます。そんなふうに言わなくなつて私たちは喜んで着いていくというのに、です。

自惚れるなら、大切に思つてくださつていふことなのです。優しく気高い天使様は私のような人間すら気にかけて下さる……嗚呼、なんて、なんて尊いのでしょうか。「危険です。なるべく俺から離れないでください」

必死にも見えるその瞳に宿る星々ごとき輝きに変わりはありませんでした。ですがそのどんよりとにこり曇つた空とは違う、柔らかな灰色の髪がゆつくりと、ですが確かにじんわりと濡れていくように濃くなつていくのを見たのは私だけではなかったでしょう。

瞬間、私は悟ります。私たちのためにこの瘴気とも言える空気の穢れをこうして代わりに引き受けているのだと。そんなこと、清らかであるべき天使様がいつまでも続けていけば、いいえ少しの間であっても無事で済むのかどうか。

ああ、それでも。ここで起きている異変を彼はなんとかしてしまふまで去ろうとなん

てけつして考えられないのでしょうか。天使様は人間のことを慮ってご自身の安全まで考えてくださらないのでしょうか。

ならば私たちがアーミアスさんを守る番ではありませんか。不本意でありましたが、私は僧侶。その手のことは普通の人間よりも遥かにわかりますし、穢れを祓う術も習得できます。

どうせダーマにはここにいる限りいけないのですから職を利用できるだけ利用しましょう。アーミアスさんの為です。敬愛する天使様のため、そう思えば苦ではありません。むしろもつともつと役に立ちたいのです。当たり前のことでしょう！

ああ美しく麗しい天使様、貴方の濁る姿なんて見たくありません。させたくなんてありません。そういうのは矮小なる私ども人間が引き受けなければなりません！ただでさえ自己犠牲の精神をお持ちであるアーミアスさんです、無理をなさってはいけません！私に実力があれば、ただ微笑んで見守ってくださるだけでいいのに！私に力がないばかりに！

ともかく初めに「おはらい」を応用してアーミアスさんに向かうこの濁った空気を浄化しなくてははいけませんね。上手くいったとしても……私はアーミアスさんほど広い範囲を覆えはしないでしょうが。ええ、街を覆うこの嫌な空気。それを何とかするには元凶から絶たなければなりません。

……激しい戦いが、私には今から予想されますね。

・
・
・
・
・

31話 考察

すっかり翼移動慣れから脱し、地面で駆け回るのが当たり前になっていてだな、すっかり地上の生物の一員みたいにおこがましくも思ってたもんだから特に気にしていなかったんだが、やつば俺つて天使だわと認識する。人間ではないな、この能力を練習も修行もなしで出来るのはよ。

ひたすら濁ったような空気が気色悪いし、長くいたら精神的な意味で気分が悪くなりそうだが、肉体的にはなんともねえんだもんなあ。人間ならこうはいかない、そして他のやつを加護よろしく護れるのも、な。これが守護天使故ゆえにこうなのかは知らねえ。だって俺最近独り立ちしたばかりなんだぜ？

そしてまだ見習いからは脱していないっていうな。師匠からこんなに離れて行動するのも初めてなのを知るわけねえよ。……知ってたら良かったのになあ。

妖女イシユダルの呪いが効かなかったようにこういう呪いに似た澱みもこうして俺には効果がない。とはいえ俺は平気でも仲間たちがダウンしたら困る、ということ意識すれば呪いの余波ぐらいは三人分くらいは防げるんだな。どうやってか？ やり方に関しては何となくだから分かんねえって！

これ以上はどう頑張っても無理だが……。例えばこれは本気で三人のうち誰かが元凶のクソ野郎に全力をもって呪われていたら大した効果はないはずだ。街全体を覆うレベルの、一人あたりには少ししか効果を及ばさないタイプだから俺の殆ど失われた、天使としてカスみたいな力でもなんとかなっているだけだ。

……もし、力を失わずして……つまりリツカさんと話せずして、光輪を失わずしてここにいたら何か変わっただろうか？それでこの街の人間を護れたなら。魔物が増えてくる中ニードは一人で峠の道に向かっただろう。ひよつとしたら黒騎士の騒動で誰かが怪我をしたかもしれない。ああ、考えるだけ無駄なんだがなあ。つい「もし」を考えてしまう。

つつても人間でもこれぐらいは高僧か賢者ならできそうなものだが、俺なんてまだまだただだの見習いのひよっこ天使。まだ五百年も生きていない若輩者。それでこれぐらいできるなら師匠とかならこの街にいながらにして街まるごと浄化できたんだらうな。

師匠！ 可愛くないが弟子、ここで困ってんぞ！ ヘルプ！ 人間たちに救いを！

……こりやあ聞いちやあくれてねえな。少しは弟子を可愛く思ってくれてもいいじゃねえか、ていうか黒騎士と違って俺には手に負えねえだろ。

さて……うざいほどに鼻につく悪臭は病気の原因、つうか災厄そのもの。収穫の季節である秋に感じるはずの生命の息吹たる爽やかさや躍動なんかは可哀想に抑え込めら

れ、その上人々の絶望が澱みを手伝ってしまっている。最悪に近いぜ。

だが幸いにも人々はまだ諦めきつていないわけでもないし、街の人間全員がこのどっから来てるかもわかんねえ厄災にやられていないわけでもないらしい。入り口に絶望しきつた顔の青年が立っていて俺たちに帰るように促したが、そいつの体は健康そのものだったからな。気をしっかり持ってほしい、病気は気から、だからな?!

そこで俺が大丈夫だと示すように微笑むとか気の利いた言葉を言うとかそういうことが出来たらいいんだがそこはリツカたん以外には全然できない俺。原因を祓ってやるとかそういうのもこんな初見段階で約束することも出来ないしな……ぬか喜びとかさせるわけにはいかないだろ?

「この街で何が起きているのでしょうか……」

「……」

メルティーの暗い声にも俺は答えることが出来ない。入口から階段を上った先にあった教会の前には灰色の墓石が立ち並び、墓に向かつて祈りを捧げるシスターの頬は青白い。ウォル口村のシスターの、バラ色の頬とは雲泥の差だ。

ああ……彼女はいつでも幸せそうで。とても敬虔に慕ってくれるものだから俺……村の守護天使の、守護天使になる予定だった俺は絶対にウォル口村もシスターも、そしてもちろん本命のリツカたんも全部全部幸せにしようと思つたもんなんだがなあ?

何故、何故だろう。どうしてここの守護天使はこんなに苦しむ人間たちを救おうとしないんだ？ セントシユタインの騒ぎは、ここまで直接的に不幸になつていなかつたからまだ来てなくてもマシだったかもしれないが……。イシユダルの対処が人間に出来たかともあれだ。

明らかにベクセリアは「違う」だろう！ それともなんだ、応援を呼ぶために一旦天使界に戻つてんのか？ そうだとしてもおかしいだろう、この人間たちの絶望は一日や二日で膨らんだものじゃねえだろ！

この状況はそもそも人間界に来てねえっていうのか？！ 守護天使が、人間たちを幸せにするために生まれ、星のオーラを貰つて世界樹に捧げ、人間たちに感謝してもらつたことによつて自分たちの安寧を得ようとして……はつきり言うて見え透いた見返り求めて行動しているくせに、か？！

俺たちは天使、たとえ俺みたいに俗っぽくて人間が大好きで、好きすぎて頭の中で大変なことになつていても、人間と見た目は区別の付かない翼と光輪を失つた姿になつても、人間として暮らしても多分バレねえ姿になつても……ここはオート天使バレのせいで怪しいもんだが……生まれ持った使命まで放棄するつもりはない。

つーか放棄したらお天道様に見せる顔がねえ。てか好きでやつてんだし。俺が本物の人間になれる未来があつたとしても変わることは無いことだしな！

よし決めた。天使界に戻ったら俺の大切なリツカたんから貰ったものを回収するのと同時にベクセリアの守護天使を探す。天使像にすっかり「現行の守護天使」の名前が書いてあるなんて個人情報もあつたもんじゃねえよなあ？ 乗り込める人間がいなくてことさえ考えなければ。

守護天使が何たるものであるかをしつかり教えてやらねえとな！ 俺より上位の天使だつたらどうするか？ ハン、天使の任務を放棄してるやつが俺より上位？ 天使の理を天使の使命すら守れずに行使できるもんならやつてみるってんだ、千歳ぐらいの年齢差は埋めれる気がするくらいだ。

……実際そうだったら慇懃無礼に言葉を選ぶしかないんだがな。てかそうだと、他の場所の守護天使は申告してきた奴しか俺は知らねえ。守護天使一覧の帳簿を一度見せてもらおうと思つたんだが頭のかたい規則のせいで見せてもらえなかつたからな。

こういう時のために品行方正を心掛けてきた俺が断られるってことはオムイ様ならともあれ誰も見れねえって訳だ。だがそれでも知ってることもある。最年少の守護天使が俺ってことぐらいはな。それから見習いの、つまり子供の姿をした天使で守護天使なのも俺一人ってことは。

ま、年齢イコール見た目でもないが。一応千歳か二千歳の子供の見た目ってのもあるからなあ。

普通は……三百か、四百か？それくらいで大人の見た目になるはずなんだが、例外はあるものらしい。ある程度の年齢と力に比例するからその天使ってよつほど天使らしくねえんだなあ。俗に塗れて墮天の方向にいつてるようにしか思えねえんだが。俗の方はちつとも他人事じやないな、やべえ。

怒り、いやそうじゃないか。呆れだ。渦巻き湧き上がる感情のせいで俺はぐるぐる、ぐるぐると考え込む。

「旅人の方ですか……？」

「ええ」

「そうですか……。この街に降り掛かった災厄は旅の方にも影響があつたそうです。早く立ち去られた方が……ケホツケホツ」

「……………」

咳き込むシスターの背をさする。その体は熱っぽく、彼女も当事者のひとりなんだろ
うな……。俺もガトウーザも、ホイミを使えても病気は治せない。天使の力はもとより
人間に直接なんかをしてやるレベルで関与できるものではなく、せいぜい病気に効く薬草
を探し出して持つてくるぐらいの知識と行動力ぐらいしか持ち合わせていねえんだ。

僧侶も同様、傷や毒、呪い、麻痺、魔法的な睡眠。そういうものは治せるが病気はそ
のどれでもない。たとえ賢者だとしてもそれは変わらない。

魔法的な力では直接的なものも治せても複雑に絡み合った害を正せはしない。自分で作り上げた魔法ではなく先人の知恵を借りて、つまり道具を使っているだけに過ぎないからだ。特定の病気を治すという直接的な魔法を作り出しでもしない限り……治せない。薬だつて病気を治すというよりは症状を抑えて自分の力で治させるものばかりだろう？

彼女に肩を貸し、教会の中にゆつくりと移動させ、寝不足か疲労か、顔色の悪い神父を呼ぶ。慌ただしくシスターを診る神父にもこの病に打つ手がないらしく、教会の奥の部屋に彼女を寝かせることぐらいしかできない。それ以外に出来るのは温かくして水分や栄養をたつぷり摂らせて休ませること、だが……。

この街の様子を見る限りなんとか歩けるシスターは病人の中ではまだましな方だろう。後からかかったか、はたまたまたまか。そして彼女に回復の兆しがもし、ないなら。……嫌な予想はしたくねえなあ。

病に滅びる街。病に滅びる国。そういうものは天使の文献にあるのだから。長い長い人間間を見守り、できる限り幸せに生きる手助けをする中……力及ばずその場の人間が滅んでいくのを止められなかったというのは。

しかしどれにも原因はある。治らない病でないならば治療を続ければいい、諦めずに俺が何人でも看病すればいい。そして治らない病ならば外的要因だ。それを俺が潰せ

ばいい。

そうだな、例えば……呪いによる病、とか。

32話 天使違

蔓延する良くない空気は本当にクソまずいとしか言いようがねえな。今まで味わった中で一番不味かったホコリっぽい床の味より不味いなんて相当だろ。空気に耐えかねたマティカが街の外に飛び出しちまったぐらいだ。不思議なことに街から出たら何ともねえんだぜ？ ま、外に出ても嫌な感じはするけどな。

ちなみに優しいメルティーがマティカについていったんだが、やっぱりこの空気はあんなに清ら……、ガトウーザよりも普通のベクトルで信心深いと普通より効くのか？ 信仰心とこの手の悪って互いにカウンターブローが相場だもんな。

だがそれはともあれ……そうだな、嫌な気配は「街」からするんじゃないやねえな。空気はこの場に漂っているように見えるが、違う。瘴気と言ってもいいほどのこの空気がどこから生み出され、どこから沸き出ているか、分かるほど俺に特殊能力はねえが、「住人」

からどうも気配がするんだよなあ。

でだ。要するに「ベクセリアの人間」が対象の呪いなら旅人まではかからないように思うが、さっきも言ったように空気が相当悪いわけだな。街人を媒介して空気を澱ませ、その場にいる者を無差別に病気にする。そんなところじゃねえのか。胸糞わりい。さてどうするか。そこらのベンチに腰掛け、考える。この手の文献に関しては人間より長い生があるわけだからそこそこ詳しいつもりなんだが、絶対的な記憶力があるわけでもなんでもないから、必死で引つ張り出す。愛しい人間たちの命がかかっていると見えばなんともなるだろ！ 思い出せ、膨大な資料に記された死と嘆きの記憶を。

それにベクセリアとセントシユタインは隣にあるんだぜ？ リツカたんになにかあったらどうするっていうんだ、俺！ リツカたんに降りかかる火の粉はどんな手段を使つても、俺の何を犠牲にしたって全力で振り払わないと気が休まんねえ！

……場を媒介してこうなってるんだから街人全員を別の場所に移せばいいんじゃないやね？

いや、それだと既に病気に人に移動という負担をかけるし、移動したからといって治るわけじゃないだろうしな……。それに可愛く幼い人間たちは合理的に物事を考えることは出来てもそれを実行できるわけでもない。

原因不明の病気が蔓延している街からやって来た人間をあたたく受け入れるマジ

天使な人間はいるだろうが、嫌な顔をしても受け入れるツンデレな人間もいるだろうが、石を投げて追い払う奴もいることだろう。まあその辺りは人間だし……そもそもこの状態を放置している守護天使も悪いからな。

なんで管轄外の、見習いひよっこ天使という街の異物が来ても来ねえんだよ。可愛い人間たちが苦しんでいても天使界に引き籠もってんだよ。俺と同じく地上に羽根なしパラシユートして、しかも落ち方が悪くて別の大陸で足止めされてるとかなのか？それなら同情しかないが。

ベクセリアに行きたくて行きたくて堪らないのに行けないのは……な。神の試練はむごいもんだ。俺みために管轄地域に落とせばいいのによ。

「その……旅人の方」

「はい？」

たしかに俺の存在は不審者に見えねえこともないだろうが、声をわざわざかけられるほど不審だったか……。これからは鉄仮面やプラチナヘッドのように顔を隠す装備で安価なやつを探すしかないのか？うっかり心に根付くりツカたんべろが滲み出てたか？

「……、悪いことは言わないですから、早くここから出ていった方がいいですよ。貴方みたい若い人がまた倒れるのは見ていられないんです。親切心を出したって何も変わ

りはしませんから」

「優しい方、ご忠告痛み入ります。目的を達すればすぐに出ていくつもりですから大丈夫ですよ」

普通に優しい人間だったとか、俺の汚い心が露見するだけじゃねえか！　ますますこの街を見捨てるわけにはいかなかったぜ。借りれるものならなんだって借りたいし、何も足りちやいないが、少しでも現状をマシにしねえとな。

「……誰を連れていかれるつもりですか、天使様」

「俺たちは常に連れていくのではなく、人々の健やかな生を至上とし、長きを生きる者として見守り、陰ながら時折お節介をするのみです……よ」

まったオート天使バレしてるし、しかも無意識に天使たる当たり前のことをわざわざ言う嫌味つたらしいことになっちまったし、やつべえな。もう……なんで天使バレしてるかはどうでも良くなってきたような、いや全っ然良くねえが。

ああもう！　要するにそう天使を勘違いするなっただけなんだが！

死神を見たことはねえから、そういう仕事の存在がいらないとかそんな安易なことは言えねえ。だが少なくとも天使とはそういう存在じゃねえからな。可能か不可能か、だったら天使が人間を殺すことはできる。首をへし折るにしても剣で刺すにしても普通に出来るからな。

それから魂と話すことも出来る。だからってもちろん魂を引つ搦んで無理やり成仏させることは出来ないし、物理的に触れずに、魔法を使わずに人間に干渉することもできない。

見えないだけ、飛べるだけ、長生きするだけ、自分は若干呪いが効きにくくてそれを少し味方に適用することが出来るだけで人間とほぼ一緒だから。呪いのやつも呪いの装備品ぐらいいなら直接的に食らうから無効化できねえしな。そう、天使が選んで殺してみたいない言い方されるとムカつくつてだけだからな！俺は全力で生かしにかかっているのによぉ……。

「失礼、しました。はは、そうですね……守護天使様を、捕まえてわざわざこんな恨み言を言ったつて……」

「俺はここの守護天使ではありませんから」

あ、やべ。走って逃げたいことを口走っちまった。やべ、逃げてえ。こんなの言われたら嫌だよな！ どんな理由で俺の正体を悟ったのかは知らないが、頼れる守護天使……？ がそうじゃないとか嫌だよな！ 嘘は良くないが、誤魔化した方が絶対よかつたよな！ てかどんどん俺から言つてどうする。これからは口にチャックでもつけて黙らなきゃなんねえな。

「……、どちらの天使様か、お聞きしても？」

「清水流るるウォルロより」

もう俺はいたたまれないから行くからな！ 黙礼を一つしてさっさと俺は戦線離脱した。師匠にバレたら普通に殺されると思うんだが、気のせいじゃねえ。さて、原因はどう考えても外だ。怪しいものがないか街のえらいさんにでも聞かか。

・
・
・

濁った空気の中、気を強く保ちながら店番をしていた。今日も客は少なく、道行く人も少ない。見かける人間も疲れたように歩き、目に光を持つ者はいない。

常連の奥さんも流行り病で伏せてしまい、数日に一度の世間話が無いことがこんな店を静かにするのかと思うとひたすら辛かった。まだ死者こそ出ていないものの、治った者すらいなのだ。いつ誰が天使様に連れていかれるかもわからないのに威勢よく商売をする気にもなれなかった。私は丈夫が取り柄だったが、こんな気持ちではいつ病になってもおかしくないだろう。

そんな時、ふと顔を上げると近くのベンチに少年が座っていた。見慣れない姿に旅慣れた服装を見れば駆け出しの冒険者だとすぐに分かる。俯いている様子からここに来たのは無鉄砲ながら後悔しているのだろう。それでも即刻逃げ帰らない辺り、まだこの街の深刻さが理解出来ていないのか。

さて、被害者を少しでも減らすためにも背中を押さなければ。帰りそうにないなら脅

してても若い命を守るべきなのだから。それがベクセリアの人間に許された最期の定めなのだろう。

「その……旅人の方」

「はい？」

今気づいた、とばかりに顔を上げた少年と視線がかち合った。そしてそのままでは伺い知れなかったその美貌を真正面から受けることになる。どちらかといえば美貌よりも滲み出る清浄な気配に心を奪われたのだけだ。

まさに想像していた天使そのものの容姿だったのだ、その少年は。いや、少年だろうか。背格好こそ少年のものだったが、声は高く、性別がまるで分からない。さらりとその艶やかな髪が揺れ、はっと私は我に返った。

「……、悪いことは言わないですから、早くここから出ていった方がいいですよ。貴方みたいに若い人がまた倒れるのは見ていられないんです。親切心を出したって何も変わりはありませんから」

「優しい方、ご忠告痛み入ります。目的を達すればすぐに出ていくつもりですから大丈夫ですよ」

彼はなんてこともないようにそう言う。ああ目的、とは。苦しむ病の者をこれ以上苦しませないということなのだろう。たしかに彼が天国に連れていってくれるのであれ

ば幸せだ。どうして今、病気になっていない私に姿が見えるのかは分からないが、天使様がいるということはそうなのだろう。もしかして、死者にのみ翼と光輪が見えるのだろうか。

ああ、天使様からすれば寛大なご慈悲。苦しむ生を終わらせてくださる優しい行為。しかし、私たち人間はそれでも生きる方を選択してしまうから人間なのです。

「……誰を連れていかれるつもりですか、天使様」

言った瞬間、後悔した。天使様は虚をつかれたようにぱちりと瞬きして心底不思議そうな顔をしたのだ。何故そんなことを言うのか全くわけがわからないというように。

「俺たちは常に連れていくのではなく、人々の健やかな生を至上とし、長きを生きる者として見守り、陰ながら時折お節介をするのみですよ」

天使様はそして痛まじげな顔をした。どうにか救ってやりたい、そんな表情だった。なんてことを。この状態でも守護天使様は諦めてなぞいないのに、私は。

「失礼、しました。はは、そうですね……守護天使様を、捕まえてわざわざこんな恨み言を言ったって……」

言ったって、人間が諦めていたって、貴方様は諦めてなんていないのに、無駄なことでした。その言葉はなんてこともなく天使様が紡いだ言葉の前では口にすら出なかつた。彼からすればなんてこともなかつたのだろう。

「俺はここの守護天使ではありませんから」

薄く安心させるように微笑んだ彼が守護天使様でない。ならばどんな天使様が守護天使様なのだろう。彼が守護天使像の姿でない、ということでは理解はできたが……。つまり、彼は救いに来てくださったが、我らの守護天使様は私たちを見捨てた、ということ……？

まさか。しかし、彼がひとりでいるということはいや、たまたま、ふた手に分かれているだけなのかもしれないのだし、こんなに寛大な天使様にこれ以上当たっても仕方がない。

「……、どちらの天使様か、お聞きしても？」

「清水流るるウォルロより」

ああ、そういうことか。商品の仕入れの時に薄らと聞いた覚えがある。セントシユタインが黒騎士で騒がれている時に同じく騒がれていたことを。街に天使様が現れ、救ってくださいるのだという話を。

ウォルロ村の天使様がどうして他の街に現れて救ってくださいるのかはわからないが、あの大国だけでなくこの街までその手を差し伸べて下さるのか。

背に翼はなく、まっすぐ背筋を伸ばして立ち去った天使様。その姿が、濁ったように淀んだこの空気が立ち込めるこの街で唯一輝いているように見えて、私はようやくと、

救われるのだと悟った。

私はまだ知らなかった。天使様は考えているよりもずっと心優しく、救いを差し伸べたゆえに苦しむのだと。

・
・
・

・
・

・

・

33話 悲哀厄災

. . .

あんまりにも陰気だからって現実逃避はしてねえ。だから別にリツカたんにも赤いミニスカートを履いてデートしてほしいとか考えてねえ。

たまにセントシユタインの女の子が履いていたニーソックスを履いてから上にスカートを履いて……って、下半身装備が被ると履けないのは世の中狂ってやがるとしか言いようがねえ。ワンピースの下にニーソックスとかどうだ。天使が天使界から降り注ぐこと間違いなし、だ。

仕事着のリツカたんはまじべろかわいいが、おしやれ着のリツカたんも心臓を撃ち抜いてくるべろしさのはずだよな？

ていうかさんなリツカたんの笑顔を守るためには目の前のおどろおどろしい遺跡にカチこまなきやならねえってのが気が進まない。崩れかけのキサゴナ遺跡よりは老朽化的な意味ではまだマシか？正直、あんま変わんねえな。走ったりして崩れられたら困るんだが。今回は前と違って一人じゃねえもんで。

俺は多少水や食料がなく、眠れなくても構わないしなんとかなるが人間はダメだろ？

ただでさえ閃光のように儂く美しい命をそんなに簡単に散らすなんてことは俺が許さねえし。

いかにもな雰囲気、いかにもな湿度、いかにもな魔物の気配。どれをとつても最悪だ。最早瘴気に近い不味い空気は長いこと吸えば体調にまで影響しそうじゃねえか。ただでさえかび臭いつてのに。

「明かり、あるのかなあ」

……明かりがある方が怖くね？ とは敢えて言わない。言ったら卒倒しそうな顔色の怖がりなマテイカがマジで卒倒する。意味がわからない方が幸せな時つてあるだろ？ 知らぬが……なんとやら、だ。

にしても封印され、鍵をかけ、出入りできた人間なんていなかったはずなのになんで奥の方から薄明かりが見えるのは本当に何だろうな。魔物も暗いのは不便なのか？

明かり係がいてつけて回ってるのか？ 明かり自体に邪悪なものは感じないのは良かったが。

にしてもガトウーザの震え方が尋常じゃねえな。輪郭が見えねえ。

「……天使様……お守りください、天使さ……嗚呼、アーミアスさん、お救い下さい……」

「その、いかなる時でも平常心を保つことが大切ですよ、ガトウーザ」

「はうっ」

常にリツカたんぺろして平常心からは程遠い俺が言っちゃあお終いだが。

てか僧侶って人ならざるものに他の人間よりも耐性がなきややつてけなくね？ 悪

魔祓いとかあるじゃねえか。だから転職希望なのか？

つたく、涼しい顔をしているのはメルティーぐらいでいつもこいつも顔面蒼白かよ。……俺も多分真つ青だぜ。暗くて良かった、夜目が効かなきや無様な様子は見えな
いだろう。俺は幽霊に遭遇するために夜によくウォル口を彷徨って星のオーラ狩りし
てたから見えるっただけだ。

もちろんお化け、妖怪、怪物とかの類にビビってんじゃねえ。ホントだぜ？ そうい
うのが怖いんじゃねえよ。その手のものとよく一緒に括られる幽霊に至っては見かけ
たら子供が一人で歩いている時みたいにほっとけないぐらいだ。

なんつーか怖いのは、怨念やらの強い負の想いやかび臭さ、つまり太陽という正のエ
ネルギーを受けていない負の地。そういうものが凝り固まると必然的に空気は濁り、人
間たちは具合が悪くなるだろ？

そして運が悪けりや何人か死んでしまったりもする。そういうのをな、天使としては
下っ端ペーパーのなんちやつての俺もそこそこ見てきたから、トラウマっていうか……
まあ良くは思えねえよな。

バクセリアを救うだけじゃなく、俺の勝手に連れてきた三人と嬉々として着いてきた

ルーフィンを無事で返さねえとな。あんなに可愛くて健気な奥さんも待つてる事だし……俺も可愛くて健気な奥さんが欲しいぜ。

そうだな、青いサラサラの髪をしてぱっちりとした目がキュートで真面目で信心深く料理上手な子がいいな。少なくともニートよりは俺の方が働uksi、ニートよりは俺の方がリツカたんのことを知っている。……ストーカーみたいだな、俺。

恐る恐る中に足を踏み入れた瞬間、足を駆け巡る何かがかさかさ奥に消えていく。ゴから始まる奴にしてはでかいし、早いし、なんか色が違うな。敵意はなさそうだがなんだろうか。ちらりと隣を伺うと、動体視力がいいのか目でとらえられたらしいマティカがしばしそいつの背中を見つめ、そして怯えどころか頬をバラ色に染めてこつちを振り返った。

「メタスラー！」

狩りだ！　なんて笑顔のマティカをメルティーが無慈悲にド突いた。あれは鳩尾にきつちり入ったな……。ぐふつと息を漏らし、崩れ落ちそうになる姿が哀れを誘う。しかしそこは武闘家、体は丈夫らしくすぐ復活する。すげえ。

「機会があつたら狩りたいな！」

「ベクセリアの皆さんが元気になった後なら来てもいいかもしれませんね」

「よーし、頑張る！」

強さを求める少年少女にとって垂涎のメタルスライム。哀れだよなあ……ちつこくて素早く、経験にいいからというだけで付け狙われ、ド突き回され、殺されまくって。天使の中にもメタル狩りが好きなやつはいるだろうな。メタルハンターも真つ青なやつらが……。

全ての命は平等に救われ、幸せになるべきだ。魔物として生まれ、本能から他の生物を害するしかない悲しい生き物は俺が次の生こそ幸せになることを願って送ってやる。生きてるだけで命を付け狙われるとかそんなことはあつちやなんねえ。

だから早く終わらせてやる、というのの一つの考え方だろう？ま、俺はメタル狂いじゃないから積極的に狩ろうなんて思わねえけどな。あとで罪悪感がやばい。

おっとマテイカ、飛び出すなんて良くねえよ。その曲がり角のところには「はにわ」みたいな魔物が潜んでたぞ？ 怪我したらどうするんだ。痛いのは良くない。

……さてと。目の前に如何にもな扉がある。その奥から果てしなく嫌な気配もする。神に会ったことはないが、天使である俺にはわかる。負の方向に振り切れた災厄そのものであるってことはな。救いはない。命ではあるが、共存なんてものは不可能。自我は……ここまで強大なものだからあるだろうが。

こんな力、強すぎて自分自身もがき苦しむレベルじゃねえのか？ よく言うだろ、強すぎる力は身を滅ぼす。それにはこう続けるべきじゃねえ？

「強すぎる力は自身を破滅させる上、抑えられない力は自力で終わりを迎えることもできない」とかな。

自殺しようなんて化け物としか言いようのないこいつが思うだろうか。しようと思っても死んだそばからその負の力が負の生命体を産み、体を侵食し、次の自我が生まれる……とかだつたら最悪じゃね？ 外部から殺すか、元通り封印するか、どっちかだ。エネルギーを外部から取り入れずに遺跡がここまで風化するほど長くあつても消滅してない時点で「外部から殺す」なんて不可能だろうがな。ルーフィン、頼むぜ。

封印しても問題は遠い未来への先送りしかねえし、その間も化け物は苦しみ続ける……なんて救われねえが。俺はオムイ様のような悠久如き時を生きた天使でも、師匠のように天使の中でも一目置かれるほど立派な上級天使でもねえからな。

とりあえず、今日の前にいる人間を救うしかできない。こういうことに直面すると人間になりたくてなりたくてたまらないってのになんでも救えるような存在になりたい、なんて叶いもしない高望みしちゃうよな。俺は強欲だ。

メタスラがひゅんひゅんと横切る度にそわそわするマティカを抑え、俺の背中にしがみついて離れないガトウーザを引きずり、前方の魔物を視認するやすぐに焼き尽くすメルティーにビビりつつ。

俺たちは遺跡に施された「仕掛け」とやらを解いていった。なんか近付いて怪しいな

んかを操作するとビームが出るんだよな。魔法、だろうがなんだっていうんだろうか。他にやりようもないからするしかねえが、もしこれで逆に厄災が活性化でもしたらやりきれねえ……。

・

・

・

・

34話 手遅病

「！」

ほこらの封印を解いた先にいたのは……そうですね、ベクセリアの状況などを顧みれば「病魔」というのが正しいでしょうか。そのおぞましい姿は形容しがたく、恐ろしい臭気をまき散らしながらどこか溶けたような体をゆらゆらと揺らしていました。

ええ、矮小な身で、こんなに関近に病魔がいるというのに病気にならず済んでいるのは間違いなく一番前に立ちふさがってこちらをかばってくださる天使様のご加護そのものでしょう。薄暗い中でも、翼のない背中是非常に頼もしくはつきりとして見えました。

「古来よりベクセリアの街を襲い、封印を受けし病魔と見受けました。魔性の者よ、あなたがどのような意味を持って病気をまき散らすのか。また、どうして病魔が生まれ落ちたのか……この身をもつてしても、理解できることはないでしょう」

学者が、病魔がアーミアスさんに釘付けになっっているうちにそれを封印してあったであらう壺の修復にかかりました。

ええ、意思がある者なのかはわかりません。このガトウーザ、天使様のような人なら

ざる者のご意思と同じようにおぞましい存在の思考を理解しようとも思いません。しかし、アーミアスさんは、ええ、平等でした。

きつと病魔の被害者がいなければ、そう、別の道をも模索されたのではないのでしょうか。ですが、今はそうは言っている場合ではありませんでした。今この瞬間にも苦しむ者がいて、もしかしたら死者が出ているかもしれない。それをもちろん分かっているしやるのでしょうか。

彼は高潔です。しかし現実には慈悲深い方にも優しくはない。切り伏せる選択肢以外は病魔は与えず、また、壺の修理をもって封印するほか方法はないのです。

アーミアスさんの剣はどこか悲しく煌めきました。真つすぐで、そして、傷つけるために本来あるのではなく、神聖で、誰かを守るために振るわれる剣。心優しい天使様が、心を痛めて振る剣です。誰も敵対することのない天使様の世界になれば、喜んで剣から手を放すようなアーミアスさんらしい、剣です。

「……斬ります」

星を宿した黒き瞳が、あげられました。

次の瞬間、瞬間移動といってよいほどの速度でメルティーが病魔の手に囚われ……かけました。ええ、天使様がお見過ごしになるはずはないのです。切っ先の鋭い勢いは病魔の腕を一瞬切り落とし、その隙にメルティーごとアーミアスさんは後ろに飛びまし

た。

切り落とされたはずの腕、もちろん腕とはいっても何とも言い難い溶けたような部位の一部ですが、それは見る間に病魔の体にくつつき、再生しているように見えました。ええ、あれは何かを言っています。それは分かります。しかし、この耳にはなにか意味のある言葉には聞こえません。耳障りの悪いひび割れたようなうなり声、といえбайいのでしょうか。聞いているだけで不愉快になります。

存在を目にしているだけで不快で、声まで聞けばこの場から立ち去りたくなる嫌悪がわきでてきます。私はメルティーのように真に清廉潔白人間ではないので。ええ、この臭気を肌で感じながらの三重苦ならば、誰だつてそう思いそうなものです。

しかし、麗しき天使様のかんばせは、歪んでいました。……もちろん、不快にはなく。

そしてその唇から血が滴り落ちるのを見て、慌てて回復呪文を唱えました。

次の瞬間にはおぞましいあの病魔の懐に飛び込んだアーミアさんが深々とその胸元に剣を突き刺していました。病魔が捕らえる前に素早く間合いから抜けた時にはマティカの鋭い蹴りが炸裂し、マティカをかすめて炎や氷が殺到しました。

「魔性よ、あなたは嘆きと苦しみを感じたのでしょうか」

重い一撃を与えながら、しかしこちらをかばい続けているために白い肌に鮮血が散

り。しかしアーミアスさんは一歩も退かずに病魔を見据えていました。

語りかけている声は沈痛といってもよいほど悲壮感が漂っています。あの、病魔の言葉を聞くことが出来たということなのでしょう。そして、心優しいアーミアスさんは心を痛めた？

……ああ、ご試練を。神は試練を与えなさる。

あの病魔側にある事情を、慮つてしまう方にその解決をするようにお導きになるなんて。

・・・

「……危篤の者はいませんか！ 時間がかかりすぎたのです！ 早く、今はもう病魔はいません！ こちらに危篤の者を！」

まだ研究したいというルーフィンとかいう学者はほこらに放置してきた。本人がそうしたいのならそうすりゃいい。奥さんが明らかに危ないっていうのにのんきな奴だと腹が立たないこともなかったが、相手は幼い人間。まだ、分からないんだろうと思つたまでだ。

ああ、昨日まで元気に走り回っていた子供や、元氣そのものの若者が様々な要因で惨たらしく死んでいく。止めることは出来ない、予測もできない。自分の無力だけを痛感するつてやつをな。それを経験していない、俺の望んだ、真に穏やかに生きてきた人間

なのだから。

まあ、しばらくしても戻ってこなかったら迎えに行かなきゃならないが！

今はそれどころじゃないが。パンデルムが最後にあがいて誰かを死へといざなつた可能性が高い。明らかに最後のあがきは、たまにいる愚かしく幼い人間の、……そうだな、俗にいう「悪人」と呼ばれている奴らが最期にすることに似ているように思えた。

「悪人」はまだいい。いや、「悪人」は善良な人間を傷つけるといふ意味でなら少々仕置きが必要な場合もあるんだが、そうなつてしまつた要因をもつと幼い時から取り除いてやるのが出来ればそうはならないことの方が多いはずだ。

だが、「病魔」パンデルム。あいつが生まれた時の原因も、情勢も多分俺が生まれるよりは前だろうから分からねえ。聞こえてきたのは理解不能な叫び、言語的には理解できずが理性を感じさせない言葉の羅列、そしてそれらに混ざつた胸糞の悪い呪詛。

すべての生き物の命が一つ残らず救われることを願う身として考えてはならないことなのだろうが、あれは、違う。

元が例えば罪もない人間で、外部的要因によつてパンデルムに変貌したのだとしても、元の存在にならともかく今の存在には早急に封印される必要があると感じた。封印が原因で、悪逆を尽くした者とはいえ、永遠ともかくはめになるのだ、と理解していても、だ。それに引っかけかりはもちろん感じるが、それ以上に。

ああ、あれこそは、あれこそが。

俺たち天使と対としてよく語られる存在だ。悪魔、悪魔と呼ぶにふさわしい。魔物の悪魔系とは話が違う。そういう外見、特性を持つのみで心を持つ魔物はあれに比べれば人間と同じく愛おしく感じるほどだぜ。

あれは。ベクセリアという都市の人間を、すべて憎む者。そして、そのためにならば、どんなに苦しんでも、どんなに救いを求めていても愉悦しか感じないような装置。呪いそのもの、そうなるべく作られたもの。

ああ、俺は思うさ。あれは、ベクセリアを恨んだ愚かな誰かが作ったものだ。

「……ああ」

そして、俺は間に合わなかった。自宅のベッドに静かに横たわる年若い女性。眠っているかのように、静かに目を閉じている姿。進行が早かったのか見た目はそこまで死を感じさせない。

だが、残念なことに俺は人間じゃない。沢山の死を、見てきた。

死の香りが鼻につく。涙がこぼれそうになって癖で堪えた。つい涙を落して天使の居場所を知らせてはいけなかった。今は、そうではないが、こぼしてはいけない。

俺がこぼしちゃ、ならねえ。

「ただいま、帰ったよ」

幼い人間、愛しい人間、まだ、ひととしても年若いルーフィン。たとえ研究に没頭していたとしても、妻への想いが偽物だったわけではないのは見ていればわかった。ああ、彼こそが最初に涙をこぼすべきなんだ。ここにいてべきでない俺よりも。

どんなに、どんなに想っても、守護天使となったとしても、人の死、それだけはどうか。 やったって、訪れて、そして。

俺はどうにも傲慢な、どうしようもないやつだと実感する。

師匠、師匠なら、彼女に息があるうちに、病魔を消し飛ばすことが出来たのでしょうか。

閑話 原点

ペロい。

その言葉を知ったのは何時だったっけな？ もう覚えてちやいない。記憶力に自信はあるが、いくつの時だったか、という正確なことは覚えていることの方が少ない。この生はわりと長いんでな。まあ、もちろん、一人前の大人とは言い難いが。

天使と人間の体の構造の違いなんて、その道の学者じゃあるまいし詳しくなんて知らないが、多分脳みその出来ってやつはそう変わらないと思う。せいぜい、時間感覚の違いぐらいだろう。

その違いがなきや気はとつくに狂っているのは間違いないだろうが、そうはなっていないからな。で、俺たちも記憶ってやつはいろいろとすつ飛んでいく。あらゆる過去の出来事を記憶している、なんて絵空事……長老ならあり得るかもな。

ただ、都合よくきつちりと覚えていることはある。ペロい。俺にとつて運命の言葉と出会ったことだ。それから、その、言葉を発した人物のこともな。

ん、ああ、言葉の主は人間だった。まさか、天使の訳ないだろ。そんな俗物的すぎることに染まる天使が俺以外のどこに存在するっていうんだ？ なんて俗なことを本当

の意味で天使らしく純真無垢だった時代の俺が聞いたかつて？まず前提として、俺は自称だが人間を天使界で一番愛している天使だぜ？とりあえずどんな言葉も聞くだろ。それだけのことだ。

彼はとても変わった人間だった。他の人間と同様に……今考えてみれば幼く、分別がついていないなとたまに感じることは変わりはないが、俺は尊敬に値すると、幼心にも思つたことを強く覚えてる。

俺にとつて尊敬できる人間は数多く存在するが、……そうだな、ハゲ師匠とは別の意味で今でも「師匠」だと思つていくくらいだから。もちろん、俺が幼い時の話だから故人だが。彼の魂の行き着く先には神のご加護があり、今は穏やかに幸せであることを強く祈っている。

彼は、一途な男だった。すさまじく一途だった。ああ、だが愛する人に死ぬまで想いを告げることはなかったぜ。愛する者には、自分ではない想い人がいることを見抜いて、身を引いた謙虚な人間だったからな。当時の俺はどうして、せめて想いだけでも伝えないのか不思議で仕方がなかった。

だが、今ならわかる。リツカたんにもし、本当に心の底から愛する者が出来て、相手 が誠実で、そのまま順当に結ばればリツカたんが幸せになる。それがもう決まり切つている段階ならば。俺がたとえ生まれた時から人間で、しかも最高に男前な顔つきで、

もつと腕つぶしも強いとしても、当然身を引くだろ？

別に今生の別れでもなく、そして何よりも大切なリツカたんは幸せになるのは分かっているんだぜ？ そりゃあ、身を切り刻まれるほどに悔しいだろうが、俺はリツカたんが幸せになるほうが大切なんだぜ？

もしそんなときに「俺も好きだ」とかふざけたことを抜かせばどうなる？ 幸せ絶頂期で、俺の心のリツカたんアルバムが笑顔で埋め尽くされて、パンパンになったアルバムで俺の心が埋まって、心の中でペロペロするのも追いつかないほど輝く笑顔のリツカたん、ほかならぬ俺が笑顔に影をさす真似をするってことになるだろ？

そんなこと、できるわけがあるか！

人間ならばとつくに死んでいる年齢の俺でやつと理解できることを短く儂く、そして眩い生を送っていた彼は命の途中だというのに気づいていたらしい。

彼は毎日、働きながら同じウォル口村に住んでいるゆえにそこその頻度で顔を合わせる度に、決して既婚者の彼女に不用意に近づくこともなく、そして今まで通りの友人の態度を崩すこともなく接し続けた漢だった。

そして、生涯独身を貫いた彼は家の中では彼女への愛を抑えることはなかった。まあ、不用意に伝えて相手を困らせなきやいだけの話だから、近所迷惑には細心の注意を払って家の中で独り言をつぶやいていた分には何の罪もない、と俺は思う。

……ああ、見ていて、少し、少しばかり……いや、なんでもない。俺は彼を第二の師として認めているが、独り言の癖だけは絶対に真似をしてはならないと心に深く刻み込んでいる。だから俺はなるべく一人の時は口を引き結ぶことを心掛けている。

まあ、軽く説明するとだな。俺が彼の立場だったとしたら、姿の見えない存在に愛を叫ぶその声を聞かれていたと知った瞬間に卒倒するだろうってぐらいだ。

まあ、おかげで俺は「ペロい」という概念にたどり着き、それを理念に今生きている訳だがな！

長年、なぜか彼をそつとしておくように言ってきたハゲ師匠をスルーしてこつそりと師事してきた俺にはわかる！ 今日の彼女のどんな姿がペロかったとか、いつそペロすぎて視界におさめた瞬間愛しさがこみあげてきて表情を無に保っているのが精いっぱいだったとか、心のアルバムが今日で五万冊を超えたとか、そういう話には全て愛が絡んでいるのだと！

もちろんあわよくばという打算が欠片もないわけではないだろう、だが人間を守り、愛おしむことに打算がある天使もそれは同じじゃね？ と俺は気づいたわけだ。つまり、愛だと。そして特別好きになった相手の、好きな部分が好きすぎてどうかなつちまいた部分。それが、言葉じゃ到底言い表すことが出来ない。その、もどかしくも言い表せない部分。それが、それこそが「ペロい」だと！

そしてだ、決して、決して相手に理由もなく触れたり、干渉したり、少しでも悪影響を及ぼすようなことはしないがせめてその心の中だけではその愛おしい存在に触れていたい、そして愛して、この心が求めるままに慈しみ、守りたい！ その心の荒ぶりこそが「ペろペろ」だと！

リツカたんペろペろしたい！ もちろん、本人を舌で舐めるといふことじゃないだろう？ そして、確かにあの最高に可愛くて健気で努力家な姿は天使像に供えられた菓子のように甘そうに見えるが、本当に舐めたら絶対に不快に決まってるだろう？ だから本当の意味では舐めるといふことは絶対に許されないことだ。ありえてはならぬえ。

だが！ 心の中はどうだ？ 心は自由！自由すぎてなんだって許される！ そう、あれだ、もつと分かりやすく、良く聞く似たような言葉で表現すれば「食べたいほどかわいいい」だな。

食べる、ということとは俺にとつてはそんなに重要なことではない。だが俺の愛する人間には極めて重要だ。食べることで人間は、生きとし生ける存在は、健やかに成長できる。それだけじゃない、食べるということは食べたものを自分の血肉にするってことだ。つまりそれはずっと一緒にいられるってわけだ。

きつと、「食べたいほどかわいい」を最初に考えた偉大なる先人は、その対象を愛し、ずっと共に居たかったんだらう。しかしそれは叶わない。双子だとしても、親友だとし

ても叶わない願いだ。だからこそ、あくまでも「ほど」なんだぜ。叶わないことだからな。

好きな相手とずっと一緒にいたい！　なんて、かわいい考えだよな、まったく人間の発想力には目を見張る。ずっと一緒になんていられないと、知識ばかりはあつた故に分かつているものだから幼い俺にはそんな発想はなかった。人間は俺がどつかでドジ踏まない限り先に死んでしまうものだから、見送らなければならぬ。そんな凝り固まつた考えから脱することが出来たのはやっぱり「師匠」のおかげだぜ。

たとえ無理でも。それを願う、ただ願うことは、絶対に悪いことじゃないよな。翼をもいで、人間になりたい。光輪をなくすことができるならば、目を見て、そして話すことが出来る。

ああ叶った。ほら、叶ったぜ。どうだ。そしてリツカたんは今日もぺろい。ああ、ぺろつぺろだ。ぺろぺろしたい。

ずっと、共に生きることが出来るならな、もつといいんだが。天使の力を失つても俺は天使としての行動をやめないように、きつと寿命までは人間のようにはなつていないだろうが、それでも、関係あるか？　リツカたんの眩しい笑顔のもとにいたいって思いつけたいだろうか？

今日も、一日中心の中でぺろぺろした。リツカたんが笑顔を見せてくれたその時は、

ぺろぺろするのも忘れてちつとばかり見惚れていたりもしたが、それはまあ、仕方ない
だろ！

35話 転

「……エリザ、さん」

アーミアスさんの、悲しげな声が静かな路地に響きました。何も無いところを見て、声をかけている。そんな風にも見えましたが、いいえ、いいえ。何も見えていないのは私たちの方なのです。天使様の、天使様たるお力で亡くなられたエリザさんの靈魂を捉えているのでしょうか。

事実、アーミアスさんの瞳には不思議な緑の光が映り込んでいます。ええ、もちろん不遜に瞳をのぞき込むことなんて出来ませんし、きつとそうしても彼女を見ることは出来なんでしょうが、きつと揺らめく光が今の彼女の姿なのです。美しい、夜空に星が浮かんだような不思議なきらめきを持つ漆黒の瞳に……本で見たことがある、冬国のオーロラを思わせる光がまたたいているのです。

サンデイというらしい姿見えぬ女性と会話しているときは、心なしか声を潜めて、こちらを気遣っているような様子があったアーミアスさんでしたが、今は私たちの姿が微塵も目に入っていないようで、はつきりとした声で、そして浮かべる表情は私たちが見たことがない、そう、言うならば普段の割増しで柔らかく見守るような優しい目、とい

うべきでしょう。

ええ……私たちが、いつも目にする姿ではなく。翼と光輪をお持ちになっていた頃の、本来のお勤めをなさっているときの態度なのでしょうね。

それも、天使様が地上をさまよう靈魂をお迎えに来てくださるとき……。不謹慎ですが、本来死してからでしか拝めないお姿を生きてみる事が出来るというのは非常に貴重な経験なのではないでしょうか？

決して邪魔をしないように拝むことにしましょう。これが神々しき偉業、これこそが奇跡。神のお使いがなさる救済なのです……。ああ、神に祈りを捧げ、このめぐりあわせに感謝しなくては。

……感動に打ち震えるわが身ですが、できることならばあんなに人の好い、健気で若い方に向けているのではなかったら良かったのです。

もし、これが、天寿を全うしたご老人であり、その未練の理由も穏やかな微笑ましいものであればよかったのに、と。魔法で、人を傷つけることしかまともにできない私が……人を治す魔法が使える人間ならば。あるいは。こんなことにならなかつたのでしょうか？

いいえ、いいえ、あの病魔と対面したから分かります。僧侶であろうと、賢者であろうと、天使様であろうとも、病魔そのものを封印しなくては、この呪いを打ち破ることは

出来なかった。それほど、邪悪で強力な存在だったのです。悔しいですが。

「ノックを? ……それが、夫婦の合図なのでですね。分かりました」

しばらく「彼女」と話し込んでいたアーミアスさんはゆっくりとこちらを振り返りました。少し、気遣うような表情を浮かべて。

天使様として、というよりも恐れながら、仲間としての態度で。ええ、魔物と対峙したり、先程の姿は紛うことなき天使様。翼がなくとも、光輪がなくとも、その神々しきお姿を見間違えることはありません。美しいので、拝ませていただきましょう。

しかし、このようにアーミアスさんはこちらを仲間としての態度をもつて気遣ってくださる。どこまでお優しいのか。そしてその時は神の使いとしてではなく仲間として接してくださる。やはり……はあ、素晴らしい。なんと慈悲深いのか。尊いのでさらに拝みます。

「戸惑ってしまわれましたか。……恐れますか、それならば、宿にでも……」

「な、何故です! アーミアスさんは天使様のお力を行使しただけではないのですか?」

ガトウーザが何を恐れることがあるというのか、と言わんばかりに答えます。無神経な幼馴染はこちらを気遣ってくださるお優しいアーミアスさんに、そんな当たり前のことを答える無神経さで返すなんて……。

アーミアスさんが美しいあまり膝を地面について見上げる少々変態的ながらも敬虔

な姿でなければ杖で魔力を吸い取っていたところですがアーミアスさんが話しにくそうなので立つてください、今すぐに。

「ええ、……そうです。そう言ってしまうのなら、そうです。もつと、俺が……」

いいえ、とアーミアスさんは言葉を切り、首を振りました。考えても仕方がない、とおっしゃっているような仕草でした。

「おっしゃりたいことがあるのではないのですか。アーミアスさん、私、私……お話を聞くことぐらいは出来ます」

思わずこんな恐れ多い言葉が出ていました。少し俯いたアーミアスさんは、こちらを何故か見ませんでした。そして、そのお言葉は……ご自分に刃を突き立てるような、そんな突き放したような口調で、自分を責めるようでした。

ああ、違うのです。ご自分を責めないで。天使様、天使様は今エリザさんを救おうとしていらっしやるじゃありませんか。貴方様ははすべてをお救いになろうとしてくださる！ しかし、それが叶わないのであればその魂を救おうとしてくださっている！ 神に祈りを捧げようとも、神の御前で救いを得た人間を見たことがありません、ほかの天使様が明確に救いの手をさしべてくださったことはない！

ですが、アーミアスさんは！ そうではないのです！

ええ、ええ、もし、このことを口に出してしまつたら……天へ帰つてしまわれるかも

しれません。そうではない、とおつしやるかもしれない。ですが……少なくともこの私には、貴方様ほど尊い存在を見たことがない！

「こうして死者を導くとき……思うのです。この俺の命は、空の上でただ生きているだけならばほぼ絶えることはないでしょう。人間としての視点なら。」

しかし、生きながらえるだけの力はあることも誰かの命を救うことは……もし、分け与えることが出来るのなら、と思わない日はありません。見送ってきたたくさんの村人たちにも、エリザさんにも……。

いえ、聞かなかったことにしてください。ええ、すべては女神のご加護が私たち神の僕に与える試練、すべては、そのお導きのままに。願わくば、悲しいことだけは、ないのなら、よいのですが」

そう言つて、アーミアスさんは路地の奥の扉を叩きました。独特のリズムで。

・
・
・
・

エリザと同じ、夫婦の合図。

弾かれるように扉を開いた。もうあの笑顔に会える日は来ないというのに。分かつ

ている、分かっていたのに、体は止まらなかつた。自分があの遺跡の調査にかまけている間に、エリザは死んだのだから。

「エリザ！」

「……すみません、俺は、エリザさんでは、ありません」

目の前にいたのはあの旅人の一行。リーダーの少年の顔は光の当たらないここではよく見えない。声色は優しげだったが、憐れまれているようで癪に障った。誰かの差し金で妻を亡くして一層引きこもつた陰気な研究者を引つ張り出して来いと言われたのだろう。そうでなければ、余計なお節介すぎる！

「こんな質の悪い冗談はよしてください！」

路地に僕の大声が反響した。これで帰ってくれ、一人にしてくれ。偏屈でどうにもならないんだと理解しろと。

その瞬間、きらりと目の前の少年の目が光つたような気がした。それに少し、ひるんで扉を閉めるのが遅れた。その光は、幼い時、覚えていないような子供の時に確かに感じていた説明のつかない「何か」の存在によく似ていた。

「ルーフィン先生じゃないか！」

ひるんでいる間に頭上から声が降ってくる。そこにいたのは……見覚えのある、筋骨たくましいこの街の住人の男。彼は不甲斐ない僕に向けて……街を救った礼を言う。

沢山の人が救われたと。

エリザを奪った病は……若いエリザが、死んだくらいだ、きつと多くの人間が苦しんだ病だったのだ。そして僕がそれを取り去ったと。彼はひたすら感謝して、そして元気を出してくれと不器用に言って去っていった。

「僕は、何も知らなかったのかも、しれないですね」

「……知りたいですか？」

「はい。僕を病気だった人たちのもとへ連れて行ってもらえませんか……アーミアスさん」

「もちろんです。……まずは、宿屋に向かいましょう」

路地の影から出たアーミアスさんは、薄く微笑んで了承した。その背にある剣が、思えば熾烈だった戦いの痕跡を示すように傷がついていて……ああ、僕は何を見ていたのだろうか、自嘲した。

36話 帰還

「……もう、十分です。こんなに幼い子供まで病にかかっていたのですね……」

すやすやと眠る子供。健やかに眠る、子供。この子も、僕が町の惨状を見ようとしていない間、苦しんでいた。この子の母親も病氣にかかっていたという。病魔の恐怖に怯えながら一人家族を支え、今は眠る父親の顔は安堵と疲労の両方を見せていた。

彼らの家を出ると、もうすっかり日は暮れていて、街には明かりがともっていた。平和で、平穏な、普段通りの街並みがそこにあった。

そしてこれまで何とも思っていなかったはずなのに……エリザが好きだったこの町が、どうにも愛おしく見えてしょうがなかった。エリザは、病に侵されながら、それを僕に隠して……そして送り出してくれた。この町を救ってくれと信じて。

それに、どうしても、僕を信じ、今、あんなに他人と距離を置いていた僕を氣遣ってくれる町の人達に報いなければならぬと、切に思う。

無言の決意をアーミアスさんにも言わずに、ただそこに立って、いてくれた。何も言わなかったのが救いのようなだった。

「僕は、エリザの愛したこの町で……生きていこうと思います。今度は外に出て、そし

て、町の人たちを僕が目で見、共に過ごします」

「……」

「ありがとうございます。……ここから連れ出してきて」

「それは、……俺のしたことではありません。でも、立ち直れたようになります」

ちらりと虚空に目やったアーミアスさんはすぐに僕のほうに向きなおった。そして少しもの言いたげではあつたけれど、そのまま何も言わずに微笑んだ。

僕はその氣遣いに感謝してこんなことが二度と起こらないように再び古文書の解読に戻る。封印があつたということは、かつてこの町で同じことがあつたということだから。そして滅したのではなく、封印したあの病魔を次の時代までには消し去る方法を見つけなければならぬと決意して。

アーミアスさんたちはその後も少しだけここにいたようだったが、静かに出ていった。出ていく少し前にエリザが笑っていたような、そんな温かい気配が頬を撫でていった。

きつと彼女は、今の僕を見れば……情けない時ですら微笑んでくれたのだ、きつと満面の笑みを浮かべてくれる。そんな確信と、ぽつかりと胸に空いた寂しい穴。

その二つを僕はこれから抱えていく。

・
・
・

「これは……なんでしょう」

「羽根飾りバンド、ですかね、アーミアスさん」

「そのままじゃないですか兄さん。もらった時はそれどころじゃなかったですが、改めてみると……これって使えるんですか？」

セントハイブンに戻る道すがら、町長に貰ったお札とやらをせっつかれて開封してみると中にはいかにも旅芸人が身に着けていそうなシロモノが。

ま、別にそもそも礼が欲しかったわけじゃねえし、いいんじゃない？結構な戦闘があったからか、仲間たちは不満そうだし、サンデイもしよぼい呼ばわりだった。

仲間の賃金はきっちり払えているし、問題ないと思うんだがな？一番の報酬は人間のちの幸せ、あわよくば笑顔。それから安寧、安全、平和。そうだろ？……って、人間のこいつらには伝わりづらいよな。

刹那を生き、眩しい命を燃やす人間たちに俺たちの考えを理解してもらおう必要はねえ。そういうことは俺たちがやるからな。まあ、俺はこれが満足なのさ。俺にとつての幸せとはこのことに違いねえ。

にしても使い道か。羽根飾りバンドっていうくらいなんだから頭につければいいんじゃない？試しにマティカの頭につけようとするどぶんぶんと首を振られた。……そこまでパーティーの癒しに拒否されると傷つくぜ。

メルティーはこういう羽根飾りは好きじゃねえの？ 好みはそれぞれだろうが、経験上こういうやつは女の子が好きなものだろ？ ほら、バンドも可愛らしい色合いだしな。えーつと、ぱっしょん、ぴんく？ 俺には最近の人間の流行りなんて分かんが。

メルティーまで拒否するのかよ……。なに、俺がつける？

……。……。まあいいか。物は悪くはなさそうだ。

「どうですか？」

「う、うーん、変じゃないよ！」

「何を言っているのですか。アーミアスさんにはもともとこんなどこの鳥の羽ともしれないものではなく本物の麗しき翼を持っていらっしやったのです、霞むに決まってるでしょうー！」

「……これは、ちよつと保護の魔法でもかかっているみたいですね。装備としては悪くないですよ」

似合わねえならはつきり言えよ！ 余計傷つくわ！ 男どもの下手くそなフォロー、

ありがとよ！

そつと、いたたまれなくなつて外そうとすると、その俺の腕をメルティーががしつと掴む。

「ベリー・ベリー・キュート！」

「…………？」

「素晴らしく、最高に、可愛らしく、お似合いでございますアーミアスさん！ 久しい陽光にきらめく御髪に生える可憐な花！ 雪のごとく白い肌がバンドの原色によつて映えております！ ああ奇跡！ これぞ神のみわざ！ 世界にありがとうございます！」

「…………あ、この装備品は旅芸人の専用の装備なのです。ですから皆さん俺に装備させたいということですか？」

何も聞こえなかった。聞こえなかったぞ、目の前で目をキラキラさせているメルティーは、何も聞こえなかったと思えば可愛いものだ。

「目をギラギラさせてアーミアスさんに迫るのはやめなさい、メルティー」

ガトウーザが見かねてメルティーを回収した。天使への盲信ぶりが激しいこの二人だが、今回は幸い…………かどうかはわからねえが見解の相違があつたらしい。おかげで興奮気味のメルティーが、珍しくどちらかというと暴走しがちなガトウーザに抑えられるなんていうことになっている。

…………どつちも似たようなものだが。俺をこんなに近くで見たりやこの灰色髪の毛のカラーリング、美男とは言い難い顔、見習い故に小さい体、持ち合わせていないあらゆる力に幻滅してくれても構わないんだが、二人の信仰心は生半可なものじゃないらしい。未だ俺に夢を見ているらしい。

俺は人間たちには……命に関わらず、後悔しないことまでには手を出さないようにしているが、例え二人の目が覚めて後悔する未来が分かっているだけでも目を覚まさせるのはやめておくことにした。

……何言ってもそんなことはねえ、天使様は以下略。いやはや、重症すぎるな。

現実は無慈悲だろ。見ようによつて俺は翼がないからここにいるだけで、ほかの天使は誰一人自分の守護地域を見にも来ないように見えねえか？まあ、純粋なやつは好きだが。

「えーと、えーと、アーミアスさん、似合ってるよ、似合ってるけど、あの、体の装備が戦闘向けだからちよつとちぐはぐかなつて」

「ああ、なるほど！ そういう事でしたか。ありがとうございます、マティカ。このような格好をしたことは初めてで、勝手がわからずにいました」

「ううん、でもね、服を変えたらとつても似合うと思う」

「ありがとうございます、入手できれば旅芸人らしい格好もたまにはいいかもしれませんね」

名乗っている以上はたまにはそれらしく振る舞わねえと「しがなない旅芸人だ」って言い張つても嘘だろ！ って言われて終わりだろうしな。このメンバーでダーマに行つたらさすがに今のままじゃ誤魔化し効かねえだろ。職業を変える神殿はな。

さあ、城が見えてきた。リツカたんのところに向かうか。

いやはや、ベクセリアでは事件以外のことを考える余裕が無かったが、今からはリツカたん補給タイムに充てることができる。

こんなに長い間リツカたんに会えないなんてめったにないことだしな、ここは会えなかった悲しみに浸るよりは長いこと会えなかったゆえに楽しめる変化ってやつを体感して、ペろろう。

心のアルバムが火を噴くぜ！

ドラマ編

37話 帰郷前

アーミアスたちが関所の向こうのベクセリアから帰ってきた昨日のことを思いだしながら、私は宿のロビーの清掃をしていた。

思えば、ウォル口村にいた頃はいつだって白い翼と輪つかを持つていたアーミアスが見守っていてくれたってことだし、この前の黒騎士騒動だって数日しか離れていることはなかった。

でも関所の向こうの町に行っている期間はそれよりずっと長くて、ああいつもそばで見守っていてくれたんだなあって本当に思ったんだ。

帰ってきた彼らは疲れた顔をしていたけれど、アーミアスは私を見るとすぐに疲れを感じさせないで笑って、ただいま帰りました……敬語なのは相変わらずみたいで……つて言ってくれた。それから間髪入れずになにか困ったことがなかったかかって聞くからちよつとこつちも笑つちやつた。

本当に、彼は仕事人だなあつて。それは、彼からすれば当たり前のことかもしれない。もともとの生まれが違うからで、そもそも私たち人間とは違うからかもしれない。

だけど、それでも、神様が心を込めて大切にをつくったような綺麗な外見をしているけれど、私と同じように手があつて、足があつて、息をして、食べ物を食べて、寝て起きるアーミアスが、だんだん言つてて失礼だけど、身近に思えてきて。

身近に感じるからこそ、アーミアスの仲間の人たちと同じように疲れ果ててくたくなんだろうなあ、早く部屋に案内しなきゃなつて思っているのにもと変わらずに人の心配をして聞くんだもの。おかしくつて。そして……この優しい天使様に私はずっと守られていたんだなあつてしみじみ感じて。

もちろん何も困つたことなんてないよつて言つて部屋の鍵を渡したんだけど、それはよかつたと言いながら、アーミアスは、今度は少しだけ空振りしたみたいな顔をするんだもの。

本当に、芯から守護天使様なんだなあ。アーミアスつて。そんな神聖な存在なのに私はいつの間にかおじいちゃんやニードみたいな村で過ごしてきた昔から知っている相手のように感じちゃう。アーミアスから見ればある意味ではそうなんだろうけど、私はあの姿を見れていなかったのに、不思議。

それくらいずっと身近にいてくれてたつてことなのかな。嬉しいな。

「おはようございます、リツカ」

「あ、おはよう！ よく眠れた？」

「ええそれはもう、普段ならもつと早く目覚めるところですがこの時間までぐっすりですよ。温かいベッドをありがとうございます」

「いいえ、それは良かった!」

集中していたからいつの間にか一階に来ていたアーミアスに気づかなかつたけど、彼はその気にせずテーブルに向かった。

この前、掃除をしている私の手伝いをご飯も食わずにしようとしてたから、それは流石に断つたのを覚えていてくれたみたい。従業員価格とはいえ、今のアーミアスはお金を払って宿に泊まっているお客様なんだから、そんなことしなくていいのにな。

「あれ、仲間さんたちは?」

「彼らですか? 実はこれから帰れるかもしれないので、ちよつとお暇を。駄目ならまた考えますが、今度こそなんとか一度戻りたいものです」

「え、だから、その服なんだね」

「はい。肩書きは旅芸人ですのでこれでもそこまで違和感もない……ですよね? 人の感性にはあまり、自信が無いので」

「全然、変とかじゃないよ! 一番その格好が似合ってるから!」

天使様の服を着たアーミアスはそれを聞いてちよつとびつくりしたようだけど、すぐに微笑んだ。もしかしたら、あの服は自分で選んだんじゃないのかも。守護天使様の制

服なのかな？

「それは嬉しい限りです。えっと……リツカ」

「どうしたの？」

アーミアスがちよつと口ごもった珍しい姿に、思わず手が止まっちゃった。

「あ、いえ……すぐに戻ってくるつもりなのですが、それでも、少し寂しくて……」

……今私はとてもすごい光景を見ているのかもしれない。恥ずかしそうに目をそらしているアーミアスなんて絶対ほかじや見れないと思う。だって、いつも、冷静か穩やかかのどつちかで、よく笑うけれど、動揺なんてめつたにないじゃない。

正確な年齢を聞いたことはないけれど、外見こそ同じくらいの年に見えるとはいえものすごく年上の天使様なのに何故か、ちよつと、かわいい。

「私も寂しいよ。でもまた来てくれるなら、待ってるから」

「……！」

まだ給仕の人がご飯を並べる前のテーブルにアーミアスはびたんと突っ伏しちやつた。その、えつと、感極まっているように見える。

私の言葉一つでここまで感動しちゃうなんて、お人好しにも程があるよ！

「……すみません、リツカ。今までそう言ってくださる相手にであつたことがなかったもので。つい……」

「えー！」

「……驚かれますか」

「ううん、きつと、口に出していないだけでアーミアスの帰りを待つてると思うから」

「ええ、それは、そうでしょうとも。少なくとも俺ならそうですからね」

アーミアスはそうは言いつつも、あまり、天界におわす天使様たちに良い感情を抱いていないみだだった。決して険悪な感じではないのだけど、なんだろう。

どんな相手にだって、それこそ信仰する気のないニードにだってあんなに優しく接して怪我までして帰ってくるような彼にしては珍しい。同じ天使様だから、なにかあるのかも知れない。

「ちよつと忘れ物があるだけですからね、強いていえば師と少し話をしたいくらいで大した用はないのです。引き止められても困りますから、実のところ会いたくないのはこちらなのでしよう」

「……故郷、なのにな？」

「俺は地上の方をより愛している、それだけのことですよ。特にリツカ、貴女と話している時間は至福ですから」

恥ずかしげもなくそんなことを言つて、アーミアスはまた、につこり笑つた。ここまですわられてしまうと、天使様であるアーミアスにそんな俗な意図はないと分かっている

のに頬が熱くなってしまったけれど、アーミアスも言葉の意味に気づいて頬を紅潮させてしまったから同じだった。

「リツカ、すみません、失言でした」

「だ、大丈夫、アーミアスがそういう意味で言うはず、ないものね」

「う、そう、だと思えます」

ぽつと頬を染めていると、ルイーダさんが私の仕事の止まった手を見とがめてこつちに来て来てしまった。アーミアスは明らかに慌てて、荷物をまとめて立ち上がる。

やっぱり、こんなアーミアスってレアだよ。疲れてたみたいだし、本調子じゃないんだよな？

「パン、ひとつ貰っていいですか？」

「いいけど……」

「本当にご迷惑をお掛けしました……失言は、忘れてください。では、また」

明るい陽の光の下に駆け出して行った背中を見送る。あの背に翼があるのを見たことはないのに、ああ、飛び立ってしまうなんて、思つて。やっぱり寂しかった。

「……あら、行っちゃった」

「故郷に一度帰るそうです」

「そう。あの坊や……と言つていいかは分からないけれど。彼、ほんと不思議な人ね」

そりゃあうちの村の天使様なんだから人間と同じ枠に当てはめることなんて出来ない、なんて、言いたかったけど言わなかった。アーミアスは事実でも自分の正体を公言するのは嫌みだから。

ルイーダさんなら気づいていると思うけれど。私だって一目でわかったんだから。

そのあと、疲れ果てて昼まで眠っていたらしいアーミアスの仲間たちが見送れなかったことをとても嘆いていて、特に兄妹……なのかな、の二人が悔し泣きに泣いて、でも真面目なのかやけになることもなくひたすら悔しがついて、ちよつとそれが人目を引いていた。

38話 擦違天使

「……動くものですね」

「そりゃそうじゃん、あんなに天使っぽく行動してムリだったらもう二度と動かなかつたと思うし」

未だにリツカたんとの話の余韻で胸がバクバクしていて天の箱舟が動かなかつた動いているとか、それどころじゃねえんだけど、まあ喜ばしいことか。……ん？

つてことは、俺は着実に天使の力を取り戻しているってことになるよな。それは喜ばしくないことだぜ。いや待てよ、下手にリツカたんの成長観察日記を誰かに読まれるよりはマシか。天使の力を失う方法はもう割れているし、少くくは仕方ねえかもな。失う方法はもちろん、超上空からのダイブだ。誰も試していない上に誰にも知られていない。ハイリスク、しかしハイリターン。

リツカたんを狙う天使は俺だけで十分だろうが。敵になりうる存在に塩なんて送つてやるかよ。リツカたんの幼い頃の可愛さを知ってるのは俺と師匠だけでいいし、師匠は……まああの師匠ならだれか一人に入れこんだりはしないだろ。師匠は長老の次ぐらしいすごい天使だからな。師匠が気にするのはどちらかという天使の方で、エルギ

オス様とかラフエツト様とか……あと俺だろう。

そりやあ何度も何度も耳にタコ出来るぐらい一人にばっかり気をかけるなど言われまくったもんだしな。あとは自分で考えて行動する前に確認入れるのかな。この辺りは幼い頃のやらかしのせいだからもうどうにもならねえ。俺は優等生だが問題児なのは間違いねえな。これだけ見られてりや気にかけれられているのは理解出来るさ。

それで気づいちまったんだが……もしも、これから天使界で翼を生やす技術があるとか言われたら、俺は即刻紐なしバンジーを図るに違いねえ。頼むから、そんな前例を聞いたこともない事態に対しての対処法なんて編み出さないでいてくれ。俺はリツカたんと一緒にいたい。できれば一緒に老いたい。無理なのはよくよく、分かっているが。

今はぎりぎりリツカたんと同世代の外見だが、もう一年もすれば俺は間違いなく年下にしが見えなくなるだろう。そうなったら、もう、終わりだな。俺は心の中でむせび泣きながら自動的に見送りモードになり、そして、変わらずペろペろする。

そしてニードに嫌がらせすることもなくなり、リツカたんを守りながら次の世代にターゲットを向ける。ロリコンのようだが、……否定はできないが、これは直面する時間の流れの違いに俺が耐えきれないだけのことだ。

俺が強ければ、それでもリツカたんについてか恋できるように頑張っただろうに、俺は弱い。

「それにしてもアンタ本当にあの子のこと気に入ってるからビックリだわ。あんまり鼻負しちやいけないとか、案外ない感じ?」

「鼻負、ですか。いけませんね。よく師匠から注意を受けたものです。彼女の系譜にはどうにも入れ込んでしまうようでした」

「先祖代々見守つてたとかマジ? 一途にもほどがあるし」

一途、ね。言葉としての耳触りはいいが。

箱舟の、良いとは言い難い乗り心地に揺さぶられる。頭の中は目の前のサンデイとの会話よりリツカたんの言葉で占領されていてやばい。

そういう目で見るはず、ないものね。

そういう。つまり、恋愛的な意味で。

てか、当然っちゃあ当然だが……俺がリツカたんに恋愛的な目で見ることはないつて、深く深く信じられていてシヨックがデカすぎる。事実なんだが……確かに、事実なんだが! それでも突きつけられるとシヨックすぎるだろ。

それにしてもリツカたんのさっきの赤面ペろすぎて天使界に着くまでに星になっちゃうかもしれないねえな……。しかも赤面の原因俺だし。俺が認識されていると言うだけで鼻血が出そうだというのに優しいリツカたんは会話もしてくれる……。

ペロい。やさしさがペロい。あの笑顔が最早ペロいを通り越して神々しい……いや、

それだとおかしいな。正確にはなんというべきだろうか。言葉が見つからねえ。やっぱペロいだな。

それにしても、師匠に会いてえ。ハゲでも頭硬くても師匠が俺のことをツンデレ気味に褒めてくれる瞬間は好きだ。師匠なら、きつと俺が地上でのことを語ればもつとよく行動する方法を教えてくれる。

そうすれば俺はより良い天使になれる。それに褒められる瞬間は結構報われた感じがするもんだ。その辺りの感性は、どうやら神様は人間と天使を同じように創られたらしいな。

テンションが高くなりすぎて一周回り、最早落ち着きを取り戻している俺はこのあと長老にあんなことを言われるとは露にも思わず呑気なものだった。

「……ウオル口村の守護天使アーミアス、ただいま帰還いたしました」

金色に輝く天の箱舟から降り立った、行方知らずとなっていた見習い天使……いいえ、一人前の天使になったばかりの幼子の一人。

アーミアスくん。生きていてくれた。

かつてのように頬はバラ色ではないけれど、血色はよく、血の匂いもしない。でもそ

の背にああ、あの純白の翼はない。頭の上の光輪も見当たらない。

「おお、アーミアス！」

長老がいの一番にアーミアスに駆け寄られ、その細い体を抱きしめた。彼の世代の中では最も真面目で健気な彼だけど、何分翼をもごうとするなんてことや、外見詐欺の姿態に目をつけられたり、妬みの末に一人ぼっちだったりしてそりやあもう、上級天使の中ではアーミアスくんは心配されているんだもの。

ただ、その空気はだんだんなくなってきたけどね。アーミアスくんはそんなことを歯牙にもかけなかった。そして、一番優秀であり続けた。師の期待に応え続け、守護天使となり、星のオーラをかつてのエルギオス様のようにたくさん持ち帰り続けた。

人を愛した。誰よりも、地上を愛した。

そんな相手をいつまでも妬んでばかりもいられないわよね。こつちも負けずに頑張らなきゃ。私たちが何度説教しても聞かなかつたような天使だつて、天使であることは変わらなかつたのだから、そういう風にちよつとは悔い改めたみたい。

でも、ちよつと懸念もあつて。翼も光輪も失つてしまったアーミアスくんが、またかつてのような目に遭わなければいいけれど。きつとまた、気にもかけないんでしょうけれど、それでも、ね。

「ところで、オムイ様。この様子は一体……」

「ああ、荒れ果てているじやろう。あの日、天使界を地上からの黒い雷が貫き、このようになってしまった。その上アーミアス以外はまだ誰も戻らぬ……」

「……この身以外にも地上へ天使が……」

誰にも、会わなかったみたいね。アーミアスくんはゆるゆると首を振ると、ああ、流石に冷静ではいられなかったみたい。

「申し訳ございません、オムイ様。少し、お時間をいただけませんか。師匠と話をし、落ち着きたいのです」

「時間は構わん。しかし、イザヤールは……女神の果実を探して今は地上におる」

「……女神の果実」

「あの日、あの場にいたお主は見たじやろう。果実が地上に散り散りになるのを。女神の果実には今まで何千年ものあいだ、天使が捧げた星のオーラの力が凝縮されておる。それが、七つじや。人間界で何者が手にしても良からぬ事が起きる……」

長老は、アーミアスくんの肩をそつと叩くと周りの者たちにも下がるように仰られた。

アーミアスくんを、今すぐ私も抱きしめたい。もう外見は幼くはないけれど、もう、危うくはないけれど、きつと一人で心細かった幼い天使の心は不安や寂しきでいっぱいだ

ろうから。

その上、自分を一番守ってくれるはずの師匠が地上にいる理由が自分を探している訳じゃないと知ったから。

でも、私は彼の師匠じゃない。真っ先にかわいいかわいい幼いアーミアスくんを案外抜け目のないイザヤールがかつさらっていったから。

しばらく、私はアーミアスくんを見つめていた。お守りのように彼の抜け落ちた羽根を握りしめて。

私は天使の理に従うために体が勝手に動くより前に、そつとその場を立ち去った。

それにしても、あんなに天使の象徴を失い、力をあんなに無くしても、あの星を宿したような黒い瞳の真っ直ぐさはちつとも変わらない。あの日のように、絶望していない。イザヤールのことを知っても、失望のような色は見えたけれど、光は失わなかった。

ああ、強くなったんだ。彼は、強くなったの。

私の中にはいつまでも小さくって可愛いアーミアスくんがいたけれど、それは改めなきやいけないよね。

「うっしょー……」

立ち去る間に、かつてのように、ちよつと舌つ足らずにイザヤールを呼ぶあの声が、風にさらわれたように微かに、でも、確かに聞こえたのだけど、それは。聞こえなかつ

たのよ、私には。聞いていない。それだけは否定しなくちや。

でも、いくら任務とはいえ長老の前で思いつ切りアーミアスクんの搜索はしないと断言したイザヤールは私の手でちよつとどうにかする必要があるわね。アーミアスクんは理に縛られてイザヤールにぼかぼか殴りかかることすらできないし。

39話 涙天使

「ししよー……」

ちっさいガキみてえに、なっさけねえの、俺。師匠はすごい天使なんだ。優秀で、何を優先すべきかきっちり分かつてる天使なんだぜ？俺よりも優先するべきことが見定められる、冷静なハゲなんだ。

女神の果実が人間界に悪影響を及ぼすのがはつきり分かつていて、天使界がこんなに荒れ果てていて、天使が何人も戻らない。

そういう状況で俺みたいな連れ帰ってもなんの役にも立たない奴を探すより、女神の果実を一つでも搜索した方がいいに決まってる。

なのになんで俺はこんなに、悲しいんだろうか。人間が俺たちの力不足で死んでしまった時のような悲しみとは違った、処理しきれないやるせないような気持ち。

感情を処理しきれないのはいつももの事だが、……いいや。俺はリツカの前だって、見てわかるような動揺したのは昨日くらいだ。顔に出て、口に出て、目からも出る。そんなことは今まで無かった。

……思うに、俺は、師匠のことを思った以上に好いているらしい。そして、あの時手

を伸ばしてくれた師匠なら俺を探しているに違いないと心の奥底では信じきっていたらしい。

俺は酷い弟子だ。なんの相談もなく突然ナイフを持ち出したかと思えば失血死しかけて師匠の心臓を止めにかかったり、地上に落ちても喜んだり、今までの生活を心底……そうだ、悲しいことがあっても基本的には楽しんで、満喫して、人間達たちと話すことが出来て良かったと思ってきたのに、師匠はその間も俺を探してくれていて、師匠はきつと俺の帰還を歓迎してくれると、そう思っていたんだな。

俺はすぐに地上に戻る気で、天使界に戻れなくていいとまで思っているのに。なのに、勝手に、そんなことを考えていた。

ああ自分勝手に酷い奴だ。俺は凶体ばかりでかくなっただけのガキに違いない。考えが幼稚で、周りのことを客観視もできなかった。人間ならば、もう俺は百三十と五つの爺さんだが、天使としての俺はまだまだ幼過ぎたらしい。この分だと外見年齢ほども周りが見れているかどうかだって怪しい。

「ししよー……ししよー……どこですか……」

サンディが後ろにいるのは分かっている。そして何も言わないでいてくれることがただただありがたい。オムイ様の計らいで近くにはたつたの一人も天使がないこともだ。こんな、樹の近くの良い場所なのに、俺のような考えなしのために時間も、尊厳

も、与えられた。

それにガキの俺は甘えた。

シヨツクな気持ちを含み、今だけは少しも取り繕わずに、乾燥した地面を濡らした。嗚咽はそれでも嘔み殺し、目からばたばたと涙が落ちるに任せた。顔が歪む。きつとすさまじく醜い顔をしているだろう。視界もぐにやぐにやに歪み、乱れ、また一滴、また一滴と目から液体がこぼれ落ちた。

だが、それでも俺は合理的で冷静で、今やるべき事が分かっている師匠の弟子だ。情けない風体を晒していても、次にやるべき事を考える。今度こそは考えなくてはならぬだろう。

師匠がここにいない今、ペーパーの俺はオムイ様のところへ赴き、指示を仰ぐのみだ。がな。それでも、それ以外を考え、より良い方法を教えてもらわなくとも見つけ、行動しなくてはならない。

やるべき事。……そうだ。女神の果実だ。

人間を脅かすかもしれない高エネルギー体。もし人間にも可視であるならば、そして食べてしまったならば。絶対無事ではいられないものか。あんなもの、人間でない俺だつて食べたなら人間になれるかもしれないような代物だ。

……ちよつと欲しいなんて思っていないからな。

つまり、人間が天使になることも可能なわけだ。天使になれるならばどんな魔物にも、どんな怪物にでもなれるだろう。こんな未熟者がいても天使というのはなかなかどうしてスペックが高いからな。

落ち着いて来た。

泣くのはもうこれまでにしよう。ガキの俺とは決別しなくては。師匠は俺をウォル口村の守護天使として認めた。一人前として認めたようなもんだ。それは俺が一人でも天使としてやっていけるという証明だろう。

だから、師匠は俺を探さない。そもそも俺よりも優先するべき事象があるのだし、迷う必要は無い。師匠のことだからきつと迷わなかったと思うが。……やべ、そう思うとまだ涙がちよちよぎれそうだわ。

師匠のように俺はなりたい。天使として、人間を護り、そして見守り、その健やかな命が次へ渡され、紡がれていくのを永遠と喜びとして続けていくように。

女神の果実が実る時、俺たち天使は救われる。

神の国より来たる天の箱舟がそれを知らせる鍵となる。

そんなことを言われてきたが、知るものか。俺は天使で、救われる側ではないからな。モチベーションの低い天使に喝入れするための文言だろう。

実際果実は実り、それが集った時にどうなるかまでは考えないでおく。きつと、果実

が揃った時こそ師匠は俺と話してくれる。その時こそ、師匠の言葉に従えばいいだけなんだからな。

そして師匠が自分で考えるべきだと言った時、俺は今度はまっすぐ前を見ているはずだ。……多分な。

「目が赤いね、アーミイ」

「その呼び方はもうおやめください」

「えー、アーミアスってまさに神の兵士って感じだからとっても似合ってると思うなっ」
「……」

変態は相手にしないに限るな。スルーしようにも相手の方が上の天使だ。動けずにいると、エレツタ様がさっと現れて不届き者を連れていった。いつ見ても彼女は笑顔が眩しい。にこやかに首根っこを掴み引きずる姿はまさに上級天使の鏡だな。

俺は人間などの地上の世界の生き物には優しいつもりだが、天使にはちつとも優しくないんでな。

ちなみに、不届き者というのは、なんでも幼気なびよびよした天使をこのロリコンダかシヨタコンダか知らないが、その系統の特殊性癖で付き纏い、未遂で済んだがいろいろ

ろとやばかったという話を持っている見た目だけは若い天使のことだ。被害者のことは知らないし、その未遂の内容も知らされなかったが、俺もそんなこと聞きたかねえから置いて。

幼い時はよく遊んでもらったような記憶があるが、天使も上つ面だけじゃわからないところがあるってことだろうな。俺もそうだろう、多分。こんなに口が悪いのはリツカたんにだけはばらさないでいたいからな。

ともかく、それを聞かされてからこいつに対する反応は俺も適当だ。被害者はいい天使になることで忘れてほしいもんだよな。

イエスぺろぺろノータツチも守れない野郎なんて擁護のしようがないしな。

あいつとエレッタ様以外のすれ違う見習いや上級天使たちは俺を見るとさつと目をそらす。そのくせ、すぐに俺をチラチラと伺い始めて正直、少しばかり鬱陶しい。

そんなに天使界に羽根なし輪なし天使が珍しいか。……珍しいわ。

ああもう、その痛ましそうな視線、あの哀れむような目！

実は俺はこの状況を嘆くどころか超、超！ 喜んでいるんだって知ったらどんな顔をするんだろうな？ 愛しのリツカたと会話できてそれだけで空が飛べるほど舞い上がっているんだぜ？

ラフェット様は俺の手をそつと握って生きてたことを喜んでくれたのに、他の奴らは

聞きたいことや言いたいことがあるならばつきり言えつてんだ。

はつきり言ってくれさえすればはつきりと心情を語れるというのに、俺は自分から用もないのに話しかけるほど社交的じゃない。

さて、そんなことよりも。長老の間だ。きつと俺に指針を与えてくださるはず。

「おお、よく来た」

オムイ様が俺を迎え入れてくださった。護衛の天使たちも無感情つて訳じゃないが職務に忠実で、やつかみのない態度で安心した。

「少しは落ち着いたようじゃな」

「はい。……お気遣いありがとうございます」

「うむ。さて……アーミアス、お主の翼と光輪を失い、ここに戻ってきた経緯について話してくれるかの」

「はい、オムイ様」

経緯つてもなあ？ご覧の通り天使界のてっぺんから地上に墜落、ウオル口村の滝壺に運良く落下。善良な村人、特にハイパー優しくて可愛くてペロいリツカたんが俺を自宅で療養させてくれたり、神父が傷を魔法で治療しようとしてくれたりした。

それでもつてすったもんだの末、天の箱舟のバイトの妖精サンデイの助言に従つて星のオーラが出そうな行動を取り続けることによつて天使の力？ が少し復活。天の箱

舟がなんか修復され、俺は帰還、師匠に閑しては遺憾。俺の考えが甘いという意味でな。「オムイ様、ウォル口村では自然と、この姿でも守護天使として認められました。以前と変わらずに職務を全うすればよろしいのでしょうか？」

「その必要はあるまい。もう星のオーラを集める必要がなければ、お主は星のオーラを見ることも出来ないようじゃからな」

俺は別に星のオーラを集めるために人間たちを守護してた訳じゃねーけど。まあ、長老が言いたいのはそれより優先事項があるってことなんだが。

「ともかく、その翼と光輪を失った姿ではこれから差し障る。まずは世界樹に祈りを捧げるのじゃ。奇跡が起こるかもしれない」

「……世界樹に祈りを、ですか？」

「そうじゃ。神は再び翼をささずけてくださるかもしれない。行つてみなさい」

ウツソだろ、ここまで完璧に人間に擬態できているのにまた生えるのかもしれないかよ！ うわ……バンジーしたい。バンジーしたいのに天使の力を失っているくせに天使の理だけはきっちり作用している体が反発できねえ。

「わかりました、オムイ様……」

……クソ……奇跡なんて、人間たちが死ぬ間にだって起きちゃくれないんだ。俺みたいな灰色の天使に起きないことを祈りてえ……。

40話 啓示

「……」

サンデイもどっか行っちゃったし、完全にぼっちだぜ。

ここにそよぐ風には慣れたもの。巨木の葉を揺らす風は、上空なんだから酷く冷たいはずだが、どうにも天使界は居住に適さないほど低温でもない。少し冷たくて身震いする程度だ。なんらかの護りがそこにあるんだろう。おそらく、目の前の木こそがその護りだろう。

片膝をつく。指を組む。そして目を閉じる。神を信じるまでもなく、神の奇跡を体験したこの身の存在こそが神の存在を意味している。

そして与えられた力を失って喜ぶこの愚かな神の子が、今一度奇跡がもたらされることを祈るのだ。正直両親を介さず生まれた奇跡への感謝が、これ以上何かを望んでいいのかという気持ちへ変わっているが。ああ愚か、ああ滑稽。

しかも天使としてまっとうと言いたい願いを持つ俺には祈りの内容への疑問の余地は沢山存在しているし、奇跡なんて起きなければ良いと本当は切に願っていても、理には従うしかないのだ。俺が天使である限り。

ああ思考が溶けるようだ。ほかのことを考えられなくなっていく。体は当然言うことを聞かないし、今俺の後ろに師匠が立っていたとしても身動きひとつ取れないだろう。

……、……奇跡が起きますように。この身に今一度翼と光輪を宿してくださいますように。

反発する意思がますます削がれていく。それ以外考えなくなっていく。祈りなさい、というオムイ様の言葉が頭の中に木霊して、俺はそれ以外できなくなる。

きつとオムイ様はそこまで理の力が働くなんて考えてもいないはずだ。だが誰よりも長く生き、最も天使としての力を持つ長老が、生まれてわずかな時間のみ天使で、今はほぼ力を無くしている俺に命令をすればどうなると思われていたのか。

今俺の意思は関係ないし、挟み込む余地はなくなっている。俺は完全なあやつり人形にもなれる気がする。いや、きつとなれるはずだ。外見の上では完璧に。

しかし、反発する意思のみ持ちあわせている俺は、それ以外を考えないことによつて命令を遂行する。内面まではそうそう変えられるものではないからだ。俺はなんとしてでも人間と過ごしたいように、俺はなんとしてでも理に従わなければならぬからだ。

傷跡こそあつても、痛みも違和感もない平坦な背中に翼が生える奇跡が宿りますように、なんて、本当に思ってもないことだが、それでも祈り続ける。ひたすら、奇跡が起

こるまで。奇跡が起きて、なお、翼が戻らなければ、……いいえ、それは、考えてはならないこと。

神に祈りを捧げよ。その命令に私は従います。

我が身に再び天使の力が宿りますように。

翼をさずけて下さい。光輪をさずけて下さい。再び空を飛び、人間に姿を見られないようになれますように。

人間に気づかれぬよう、守護するのが我が使命。遂行できるように、お力をお授けください。

神の僕たる私が、その手足となつて今一度働けるようにどうか奇跡を。

奇跡を。奇跡を。お授けください。

私の願いは、人間を守護し、見守り、慈しむこと。燦然と輝く魂を救済し、安らかなる果てへと導くこと。憂いを断ち、穏やかな生命を歩めるように手助けすること。

お授けください。私に力を。悩み、苦しむ人々を救済できるように。

「……………うう、頭が……………」

アツタマいってえ！ ガンガンする！ 何でだ！ そりやあ、こんな固いところで睡してたからだ！ 体もあちこちガチガチ！ しぶとい体を持つ天使といえどこれはきつい！ ちよつと身動きしただけであちらそちらがバキバキするわ！

ん？ 爆睡？ ……え？ ……寝てた？ 世界樹の下で？ マジ？ 嘘だろ？

あんなに思考が完全に乗っ取られていたつてのに？ つーか、あれは完全に俺じやなくなつていたというか。いやまあもちろん全てに嘘はついてないし、最後の方は思つてもないことを考えていたわけじゃあねえよ。

だがそれでも前半は翼なんていらねーし輪っかなんて邪魔だし俺じやないつて言つても間違つてはいないだろ。あんなこと考えたこともねーわ。理こえーわ。

天使つてなんなの？ 完全に組織として動くことしかできねえだろ。柔軟な考えも必要だと思わねえの？ 物理的に反対意見を封じられるのつて、怖くね？

てかよ、あんなに真剣に祈つていたのに途中で寝るとか幼いかいいうなまやさしい表現じゃダメだろ。もはや乳幼児か何かなのか、俺は。

あー、本当に体痛いわ。…バッキバキになつちまつた背中に翼はないな、よし。頭痛オンパレードな頭の上に輪っかもねえな。完璧。俺はこれで傍目には神にも見放された天使だな。なんて悲惨なんだ！ 誰も俺が翼を失いたくてたまらなかつたなんて気づかぬえだろ。俺にとっては願いがかなつたことこそが奇跡！ 神に感謝！

そして理に従い、世界樹の下で真摯に祈りを捧げた上にいつの間にか爆睡するなんていう奇跡を体験したからもういいよな。追加で祈ってもまた寝る気がするわ。

夢の中か起き抜けか、夢うつつなふわふわした状態でなんか声を聞いたような気がするが。……なんか女性の声だったか。世界樹の下で眠っていた俺に……声？

……いや、それ、夢じゃねえわ。ガチなやつ。啓示だわ。

確か、えーつと。女神の果実を七つ回収しろつてことだっけか。あと、翼も輪つかも戻すのは無理だと。その代わりにルーラつていう呪文をさずけて下さったような……。

効果は、単純にキメラの翼だが。とても便利だと思うが翼の代わりかつつと……。

まあいい。報告に行かないとな。それからさくつと日記を回収して地上に帰ろう。

……。女神の果実か。探していれば、地上に混沌が起きるのを防げる。ひいては人間たちを守ることも繋がる。願ってもないことだ。なにより地上に行けるしな。

地上に行くように啓示があった俺を天使界に留め置くことは誰にもできないはずだ。俺はここから合法的に出ていける。そしてあの仲間たちとまた少々旅ができるし、リツカたんに会いに行ける。

そして、その上で……師匠にも会えるだろうか。搜索の途中で師匠と鉢合わせしたり、師匠が会いに来てくれたり、するだろうか？ ハゲ師匠に弟子への余分な愛情がないのは分かっているが、本当にすぐそばまで来ているのであれば、流星に会ってくれる

んじゃないだろうか。

師匠は、俺に厳しかったが、欠片も甘やかされているなんて思った日はなかったが、俺に隣人を愛することも、人間の死の受け入れ方も教わった。世界樹の下に遣わされる天使にとつて、師匠とは親みたいなのだろう？

これが恋しいという感情だろうか。ホームシックにはならなかったが、ファーザーシックならぬ、ティーチャーシックつてやつには間違いなくっている。あの俺まで頭髮の未来が不安になるほどツルツルな師匠の厳格な眉毛が懐かしい。

あの顔にも相見えたい……つてか、師匠つてそういえばイケメンだよな……羨ましくなってきたぜ。俺もあれくらいはつきりした顔立ちならちよつとは天使補正込みでもリツカたんに意識されるようになってたりしたんだらうか？なんかムカついてきたぜ。

師匠は仕事か恋人だらうし、まあ会いに来てくれないことに賭けておく。良くても集め終わったあとにひよっこり来そうじゃね？

それか、俺が行く先々で先回りして回収してるとかな。師匠つて真面目だからな、俺に妨害はなくとも回収することに専念して俺に伝えるのはうっかりか確信犯か、忘れてそうないメージだぜ。

41話 白

すんげー俺の部屋の扉がガタガタしている。向こうから犯人の声が聞こえるような気もするが、扉のがたつきがうるさ過ぎて何言ってるんだか全くわからん。

……現状？オムイ様に報告し、俺も女神の果実の搜索が命じられたってところだ。それで自室で日記を抱えて壊れるんじゃないかと思うほど揺さぶられる扉に正直怯えている。いや、そんな可愛いもんじゃねーな。ビビって、正直リツカたんの日記が手元なきや恐怖のあまり壁をどうにか破って逃げ出してたわ。得体がしれねえよ。

にしても、誰だよ。

日記回収したら少なくとも、セントシユタインとベクセリアの守護天使には文句を言に行かなきゃやらねえのに。エラファイタはいいだろ、まだ、文句を言うほど何かがあつたわけじゃねえから。比較的だがな。

守護天使として人間の健やかな生を、外部からの邪悪なる意志によつて阻害されている状況を放置して自分はこのうのと安全な天使界に引きこもつてるとか、許されていいわけあるかよ。

考えてみる、行方不明者が出ていたって別に、関係ねえだろ。帰還者ゼロ？ 異変で

魔物が凶暴化した？

俺からすれば、帰還者ゼロに関しては多少ビビっても仕方ねえと思うが、魔物が凶暴化したから危ない、だから天使界にいて人間界には行かない、それは自分の身を守るだけじゃなく、星のオーラはもう集める必要は無いからだって言うならそいつは守護天使としての資格はねえと思うぜ。

俺達がその魔物から人間を守れた可能性は？ 星のオーラが欲しくて俺たちは本当にやっていったのか？ 俺たちは救われるために善行を重ねていったのか？ そうだって言うなら、おかしくねえ？ 俺たちは人間の守護のために神が創り、天から遣わされる生命と言っているのかもわからない存在、「機構」だけ？

天使が天使としてその体が動くなら人間を慈しみ、魔物を救いへと導き、世界の均衡を保ち、植物と戯れ、そんでたまに好きな子の幸せな顔を覗き見して俺も少し幸せになる……くらいが生きている意味、だろ？

俺たち天使が自分たちのことばかり考えて保身に走つちやあおしまいだろうが。俺たちは、そんなことが許される存在か？ 俺たちは守るために取り残されているだろ、愛する人間たちの生きる時間から。

自分のために生きるなんて、おこがましい。神の僕の中でも明確に使命がわかっている上に、その能力も寿命も、救う対象すら明確な俺たちなのに！

ウォル口で、俺を歓迎してくれた村人たちの目にはあの異変での恐怖があった。セントシユタインで黒騎士騒ぎがあった時、人々には底知れぬ不安があった。ベクセリアでは涙を流す人たちも、救いを求めて苦しむ人々も……愛する者を失った人もいたっていうのに！

それを取り除くために、實際出来るかどうかは俺たちの実力次第だろうが、奔走するのが天使だろうが！ 基本上級天使の守護天使だぜ？ 俺なんかより絶対救えたはずだろうが！

なんで来なかったんだ！ なんでだよ！ 俺じゃあ救えなかった！

でもって、早くそれを言つて、現状をどうにかしたくてもだ、扉を壊れんばかりにガタつかせている相手に対して鍵を開けて招き入れるのは明らかにアウトだろ。

まあ、天使界に抜きん出て悪意を持つ奴なんて居ねえはず……いや、いたわ。危ねえ、あいつの守備範囲、可愛い天使たちから……ただまだ年齢的にも子供で見習いつてだけで俺まで入るってか？ 無節操なところが恐ろしすぎるだろ。貞操は無事でも大切なものを失うところだった。

扉越しにもチリチリこつちまで焼かれるような悪意。ただでさえ灰色の髪の毛が、せつかくベクセリアで染まった分を世界樹の力で浄化できたのにまた戻っちゃう。今度は真つ黒になるかもな。そしたら煤天使を名乗るとして、だ。

扉の向こうに声を掛けて、お引き取り願おう。やべーわ。長老にチクっておこうか。こいつ、反省せずに俺まで狙ってくる変態だと。

てか天使なのに人間やほかの生き物を救うことに執着を向けるよりも同じ天使に対して何らかの感情を抱いているところ、バグじゃね？ せめて俺みたいに特定の間が好きで好きで仕方ないから守護りまくるぐらいにしろよ。たぶん……害はねえし。

「お引き取り下さい」

扉の揺れがぴたつと止まって、……こええわ。こんな激しい音をたててたつてのに俺の声は聞こえてるとかやべーわ。

「いるじゃんアーミー……やだよ、せつかく戻ってきたんだし、僕になら君の翼を戻せるかもしれないし。ほら、開けて」

「……」

なんでこいつを俺は自分より上の天使と認めてんだろうな？ 年齢か？ 体はもちろん勝手に動いて解錠。飛び込んでくるのはあの子どもの姿の天使。俺を動けないようにして命令でベッドに放り込まれる。壁際に追い詰められたわけになるが……これだと退路は。ねえな。

日記はその途中で手から落ち、幸いにも滑ってベッドの下に転がり込んだ。セーフだ、セーフ。これで中身は無事だろう。

……いや、今に限ってはそれよりも、状況だ。すげえまずい気がする。

上から啓示を受けても翼を戻せねえっていうのに、謹慎処分を食らってるような天使に戻せるわけがねえだろ。何をやらかす気だ？

前の被害者は未遂ですんでたから目的がわからねえ……。未遂でよかったな。

うわ笑ってる。こええよ。ストーカー行為をはたらいていたペロリストもびつくりだわ。

……助けて師匠。いや、師匠は来てくれねえんだったわ。しかし、これは地上に墜落した時よりもダイレクトにやべえ気がする。すげえ嫌な予感がするんだが。師匠以外に誰が助けてくれるんだ？ていうか、師匠以外に頼るなんてしちゃ迷惑じゃねえ？

だが今は迷惑どころじゃねえ！誰でもいいから、この天使回収してくれ！俺には逆らえねえよ！

このまま、いきなり背後から心臓に一撃、俺死亡とかねえよな？　な？　流石にねえよな？　俺を星にしないでくれ、まだ未練が！

「動かないで、すぐに終わらせるから」

いや待て、本当に待て。今、何出した。気のせいじゃなきや、それ、刃物だよな。うつ伏せに寝かされた俺にははつきりとは見えねえんだが、それをどうする気なんだ。

つまりそれで俺を切る、んだよな？　状況的に。まずくね？　どこを切られても痛い

だろ。え、そうだよな？

マジで？　ここで俺、星になるのか？　加工肉ごとく切り分けられてしまおうとかねえよな？　せめてちよつと刺すぐらいにしてくれ、頼むから！　殺さないようにしてほしいんだが！

……それすら望みが薄い気がする。誰だよこいつを放ったのは。俺がもし、ミンチになつて死んだら手厚く弔つてほしい。墓はウォルロがいいが、セントシユタインも捨てがたい。いや待て、天使の死体ってどうなるんだ？　死んだ天使の亡骸を見たことがねえんだが。天使は基本寿命ねえし。

死体も残らず天へ登つて星になるとか、ねえよな？　跡形も残らないとかねえよなあ？！

てかここまで危険を感じても、天使の理を破れねえんだな？！　神は俺たちの設計を適当にしたに違いねえ！　そのミスのせいで俺は死ぬ！

天使に来世はあるのだろうか……。あつたらリツカたんの身近なところがいい……。「アーミアス、君は僕の完璧な天使だよ。幼い時も、成長した今も。その姿は似合つてるけど、完璧な天使に翼がないのはおかしいよ。背中を切つたら、きつと出てくるさ。そうしたら元通りだ。自分で傷つけてしまった翼もきつと綺麗になる。僕の気持ちで染まった髪の毛も、きつともつと染まる」

なんか、語り始めた。それで俺も思い出してきた。こいつの被害者って……まだ幼気な天使で、その天使は、何も知らなくて。小さくて、弱くて、それで、たしか……真つ白い髪の毛の、子供だった。つまり、それは。

……白い髪の毛の？

そんなやついたか？ ラヴィエル様？ いや、俺が生まれてからの時期だから年齢が合わねえし、あれは白というよりも銀色の御髪だろ。

見当たらないのは、もしや、こいつが罪を犯して百年経っても許されないのはそいつを殺した、から……なら。

俺も殺される……。なにが？ 何がこいつの琴線に触れている！ 俺なんて取るに足らない灰色の天使だろうが！ いや他のやつに手を出すのもやめろ！

それに俺を狙った理由は何だ？ もしや俺の天使として模範的な行動が逆に嫌だったとかいう、人間っぽい感情なのか？ 俺にはそういうのはわからねえが！ 個人差があつて人間の感情を理解できる部分が違うのか？ こいつは仲間への情や愛は持たねえつていうのか?!

どつちにしろがつしり押さえつけられ、理で縛られてちや逃げようもねえ。刺される覚悟が決まった頃、見計らわれていたのか、背中に容赦のない激痛が走る。翼をもごうとした時の比じゃねえ痛みだった。背中を切り開くのが単純に二回、だぜ？ 正気の沙

汰じゃねえ。流石に痛みで意識が遠のいた。

声すらまともにあげられねえ。痛みは延々と続くかのようだ。傷は熱い。だが、まあ、痛いなりに冷静だった。これくらいの怪我では死ねない、と。更に切り込まれなければ生き残れると。

ま、体がずたずたになるような落下をしても死なねえんだぜ、天使つて。背中刺されても失血死以外じゃ死なねえだろう。それがやべえんだがな。だが刃物の切れ味がよかつたのかあばらを伝って腹側に流れてくる血の量はそこまで多くない。希望が見えてきた。

あとは発見だが……俺の部屋、わりと辺鄙なところにあるんだよなあ。俺の次に隣の部屋の見習い天使が狙われてもまずい。俺がここでこいつが去るまで待った方がいいかもしれない、かもな。

それで、こいつもう天使名乗らせるのやめさせろよな。俺以外に刺されるやつでたらどうするんだよ。繭にでもして封印しとけよ。俺で物証できただろ。幼気な可愛い天使が今度こそ被害にあつてからじゃ遅いからな？

サンデイが俺のところに戻ってきたような気がして、すぐさまどつかにすつ飛んでいつてくれたような気がした。助けを呼んでくれたらしい。多分、それで俺は助かつたのだと思う。

曖昧なのはその時には、命に別状はなくとも、血の失いすぎで気絶した俺にはもうその先の記憶はなかったからだ。

なぜ、俺がねらわれたのか。それは知りたくもなかったが、再犯はないと上級天使に断言されれば俺は逆らえねえ。

背中には元々翼が燃え尽きた痕跡と、落ちた時に出来た傷があったがこれで翼のあった位置に素晴らしくわかりやすい跡が出来上がったことになったが、まあ俺の背中なんて誰も見ねえし。

これで変態は今度こそ外に出れねえし、次の被害者もない。俺の部屋のシーツやマットレスがお釈迦になって、俺がちよつと痛い目にあつたくらいで済んだ。

そういうふうになれば、別に大したことは無かつたんだ。そう、言い聞かせる、自分。

何故だろうか、あいつの前の被害者……白い髪の毛の、小さい天使。俺が知っている相手だった気がする。顔が出てこない、名前も出てこない、ただあの白だけが妙にはつきりと思いつける。

そいつはその白が好きで、自分の白い髪を子供らしく誇りに思つて、嬉しがつていたんだっけ？ 死んでしまったんだらうか、もう外に出たくもなくて会えないのか、思いつかないその相手に祈りを捧げる。

うーん、俺も天使らしく潔白そうな純白の髪をしていれば少しは自信が持てたかもしれねえ。金髪に緑の目もいいと思うが、汚れなき白っていうのもいい。

俺なんてこの事件でさらに髪の毛が埃色っていうか……もはやダークグレーだな。髪の毛染めた？　ってリツカさんに聞かれてそこから会話ができるかもしれないと思えば特に大したことはねえか！

「僕の天使をものにして何が悪いの」

「強いていうならウオル口村の天使ね」

「人間ごときにくれてやるものか」

「あの子の心は常に天使界ではなく、人間界にあるけどね」

睨みつける翼を拘束された天使。墮天していないのが不思議なくらい悪意に満ち溢れ、そしてそんな自分を疑いもしない天使。

どこかの天使は自分が人間を守り、慈しみ、見送ることこそを至上として行動するらしいけれど、あの子と同じでこいつもどこか普通ではなかった。

天使って、人間とは違うし、寿命も生まれも何もかも違うけれど、そんなに高尚な者じゃないの。

サボるやつもいる、適当なやつもいる、人間のことを軽視する天使は多い、使命について曖昧な事しか考えていないやつも、使命に徹するものも、使命とはまったく関係ないことに情熱を注ぐやつもいる。

あの子が使命に情熱を注ぐとしたらこいつは正反対。なるほど、生まれた時期こそまったく違うけれど、二人を足して割れば普通の天使に中和されるかもしれない。

普通の天使はそれなりに人間のことをどこか軽視して、それなりに守り、それなりに理に従って、そして天使界に住んでいる。地上は嫌いじゃないけれど、決して好きじゃない。危険だと思っているもの。

天から遣わされる私たちには、たまに変な個体がいるといえいいのかしら。

変な個体。基本的には優秀な個体を指すけれど。逆もいる。悪意に振り切る天使が。もういつそ墮天してしまえば討伐できるのに。自分のことを正しいと思つて、背いていないと思つていたら案外平気なのね。

いくらアーミアスくんが天使で天使に天使なかわいい幼少期の天使で、成長した今も天使で天使に天使すぎる天使な容姿の上に天使行動に振り切つて翼も輪つかも失つてなお、天使であろうとする天使の中の天使でも、自分のためにただそこで微笑んでいるだけの可愛いお人形してくれるなんて思いこむかな、普通。

普通じゃないんだろうけれど。翼は世界樹の力を持つてしても治せなかったのに運

命の片割れである自分ならあの背中を切り裂けば内側から翼を取り出せる、とか考えつくのは本当に危険ね。

傷、私じゃ治せなかった。傷が深すぎて、塞ぐことしか出来なかった。いつかのように、傷を塞いだあとの私は青白い彼の頬を見つめて、目覚めるように祈ることしかできなかった。

少し、思うのは、彼がもし、女神から使命を承るために生まれたように天使すぎなかったら、こんな目に遭わなかったんじゃないかって。

彼には、冒涇のようだけど。

4 2 話 不願

「ああいうのに狙われているって早く言えし」

いやまさか、外見がそれなりに幼かったら全部範囲に入るなんて思わねえから。

「本当に助かりました……」

「さすがに目の前でリユーケツ沙汰を放置できるほど冷たくナイシ！ てか天使ってみんなアーミアスみたいな真面目ばかりだと思ってたケド？ 案外そうじゃないカンジ？ 揃いも揃って個性強すぎジャン？」

命の恩人であるサンデイに頭は上がらないが、個性に関しては彼女には言われたくねえよ！ てか俺みたいなのペロリストまみれの天使界とかやばいからな。人間界は平和かもしれないが天使界のこの荘厳かつどこか物寂しいような独特の静かな雰囲気が消し飛ばわ！

セントシユタインの守護天使に文句を言おうと探し回っていると見習い天使の中でもさらに小さい天使に怯えられて話しかけることすらできない俺。俺が話しかけるコミュ力すらないんじゃないかと、向こうに思いつきり避けられたってことだからな！

まさかその理由が純粹無垢たちに俺の内面を見透かされてドン引きされたわけじゃ

なく、返り血ならぬ俺の血が、野蛮な趣味を持つてそうなやべーやつを演出していたってことには言われるまで気づかなかった。あまりの無神経さに引かれても仕方ねえ気がしてきたわ。

だが勘弁してくれ、さっきのはあまりにも動揺した。あまりにも普通じゃなかった。冷静じゃられないのも無理はないだろ、流石に！ 鎖帷子に着替えて胸元に日記をインして落ち着こうと思う。リツカたんの思い出が染みる。最高。多分俺の顔だいぶ気持ち悪いことになってるな。

引き締めとくか。

もう事件なんて流石にないだろうが、前の装備品なら汚しても壊しても大して問題もねえし。

それから自力で守護天使を探して少しお話したが、あれは理解してもなんとかはしないタイプのヤツらだった。天使界の未来は暗いかもしれねえ。何せ世代交代が数百年単位だから改善が人間達にとつては遙かな未来になる。

それじゃ手遅れだろうが。今を生きる人間に対して行動しろってんだよ。

「さっきのセントシユタインの守護天使？ 自分より小さいアーミアスに一言も言い返せないのダツサ。あれはGJってカンジ。アーミアス奔走してたし」

「……自分の行動について、俺の被ったことに関して物申した訳ではありません」

「かったいヨネ！」

自分がなぜ生まれたのか胸に手を当てて考えろってだけの話だろうが。痛いのも怖いのも嫌なのはわかるが、それらを人間たちがこうむるほうが最悪だって話だ。簡単なことだ。

まさか、ほかの天使が自分の身の方が人間たちよりも可愛く思っているなんて思っちゃいなかっただが。冗談だろ、今ならまだ冗談だと信じるぜ？

だがあつちが普通の認識で、本気で星のオーラを集めていたのも自分たちの安寧が欲しかったからなら……俺の方が普通でないなら、俺は、天使じゃなくても構わないぜ。

ただ、俺は自分の頭がおかしいとは思いたくねえからたまたまあの天使がそういう奴なんだと思うことにしておくが。

さてと、用は済んだし地上に戻るか。

「少々時間を取られてしまいましたね」

「二日くらいは大したことないんじゃない？」

「それならいいのですが」

「てか、向かつてる先、逆だケド」

え？

逆って、俺普通に地上に行くための穴に足かけてるだけなんだが。

「飛び降りる気とか？」

……あ。

そういえば俺に翼はないんだった。会うやつすれ違うやつ、そして例のあいつまで俺が真つ当な天使であるかのように扱うから俺も普通に天使としてスタンダードな装備を持つてるものかと勝手に、な。百年近くの習慣って怖いぜ。またバンジーするところだった。

道理で視線が背中に突き刺さってたわけだ。俺が足を下ろした瞬間にそれも散ったが。

いやこれは、ほんと、心配というか、迷惑かけてすまねえ……。

サンデイも呆れてものがいえないとやわんばかりの顔をしているが、俺はちよつと笑って流すことにした。自分がアホ過ぎて笑うしかねえ。

これ以上エレッタ様を泣かせたらもう干からびてしまわれる可能性がある。ラフエツト様に心労をかける訳にもいかない。師匠の耳に入っても……いやこれはいいわ。ど、ど、どうせ俺のことなんてもう気にしちゃいねえだろ。いや俺の方こそ、気にしてねえし。

「おかえりなさいっ！」

「……っ、はい、ただいまもどりましたよ、マテイカ」

泣き虫を克服しかけている現職武闘家に思いつきりタツクルをかけられたらアーミアスさんといえど声が詰まりますよ。ベリつと不敬者を引き剥がし、少々疲れた顔のアーミアスさんの私も努めて丁寧におかえりなさいを言いました。

賢者になるという私の選んだ道は例え職業の神がお力を貸してくださるダーマ神殿へ行つたとしても開かれる道ではなく、ほかの賢者の力を借りて修行を積まなければならぬもの。

そう考えていると、私にはだんだんと冷静さが戻ってきてこのような状況なのです。この期に及んでまだどうすればアーミアスさんのお役に立てるかどうかをきちんと図りきれしていないガトウウザなど、いけませんね。話し相手になつていたマテイカが可哀想なくらい同じ話がループして、いかにアーミアスさんが美しく素晴らしいか、それしか話さないのです。

そんなことは分かっていますから。それを踏まえてどう行動するか、それが大切なのでは？ 燃やしてしまいますか？ いえ、流星に兄のような存在を燃やす賢人はいませんからしませんけど。

そういう訳で、限界を迎えていたマテイカがアーミアスさんを見た瞬間に飛びつくの

は仕方が無いことだったのです。それが認められるかは別の話ですが。

「ダーマ神殿へは一足先に行つてまいりました。皆さんの準備が出来ましたら出発できますから」

「私たちはいつでも大丈夫です！ ……が、少々顔色が悪いのでは？ 今日はお休みになつた方がよろしいのでは？」

「向こうでは一日などあつてないようなもの。私事で余計に時間の流れというものが曖昧になっていました。俺が帰つてから少々日がたっているようですから、これ以上お待たせするわけには」

「そういえばアーミアさんが帰られてから一週間前ほど経ちますが。しかし私たちにそこまでのお気遣いをしていただく必要はないと思うのですけれど。」

「アーミアさんの言葉に感動し、涙を流さんばかりの兄さん、いえガトウーザが、僅かに残つた理性をかき集めてまともな事を進言しました。」

「それでは、向こうについてすぐ向こうで宿をとるといふのはどうでしょうか。いろいろ目新しいものもあるでしょうし」

「……妙案ですね」

「何故か宿と聞いた瞬間に表情を微かに曇らせたアーミアさん。しかし反対をなさることはなく。」

「駄目だよ兄ちゃん、そういうんだったら宿屋はセントシュタインで取らなきゃ」
「何故？」

「リツカの宿屋は最高の宿屋だからだよ！　ねえアーミアスさ」

「ええそうですね！　そうですとも、とても良いことを仰りました、マテイカ。あなたの積んだ徳は見習いの身ではありませんがしかと聞き届けましたとも。必ずその善行に對して良い報いがあることでしょう！」

大輪の花が咲き誇るが如く、素晴らしい笑顔を浮かべたアーミアスさんがマテイカに熱烈な抱擁という最高の慈悲に嫉妬したわけではありませんとも。ええ、ありませんとも。

あんなに天国が見えることつてあるのでしょうか。室内故に、どこか灰色のアーミアスさんの髪が黒つぽく見えているというのに太陽の光にすかされて輝くのを幻視し、その上白く眩い翼まであるかのように感じるのは。もちろん、尊い輪も。

ああ天使様の抱擁。ご利益に与りたいとかいう話ではなく、いえ、ありがたい光景を目に出来ただけでも素晴らしいことなのですが。十分に私は幸福であるのですけれど。

あああのかんばせに、笑顔を浮かべるような言葉を私も言いたい。彼にもし、微笑んで頂けるならば、それが最上の幸せ。なぜなら天使様が微笑むということは救いの道が開かれたも同然。

そして何よりも、この自己犠牲の天使様に、少し表情が硬い天使様に、微笑んでいただきたい、なんていう少しのエゴ。そして、あわよくば向けて頂きたいわけです。ええ、私は、そんな人間ですとも。美しいものをこの目で見て、そしてそれを自分に向けられたい。

そうマティカに全力の嫉妬を送っていましたら、宿の主のリツカさんがこちらにいらつしやいました。

すると守護天使をなさっていた時からの馴染みらしいアーミアさんは、今度こそ彼女を見ただけで素晴らしく美しい笑顔を浮かべましたので、私は静かに敗北したのでございませぬ。

ええ、ええ。天使様のご慈悲を人間がはかるなんてきつといけないことなのですが。私だって、あの顔を見たら、天使様が誰を一番に想つていらつしやるのかくらいわかります。でも、でも、それでも私は安心しました。

彼の目に温かな光こそあれ、欲望に燃え上がるものはありません。あれは熱いものではなく、やわらかなもの。天使様はやはり天使様なのです。私の見る目に、そういう意味では狂いはございませぬ。

天使様はやはり穢れなきもの。天使様は美しく、慈悲深く、尊く。しかし生命の営みの輪の中にはきつとないのです。だからこそあんなにも美しい。手が届かないものだ

から美しい。別次元の存在であるからこそ、あんなにも慈悲深い。

私の中の、きつと悪。それが笑います。嫉妬とともに、膨らみます。あんなに彼女は想われているのに、天使様は決して自分のものにしようとしたりしないという確信。そして生きとし生けるものに対しての慈悲深さは、アーミアスさん自身を誰か一人のものにしないという確信も生みます。

アーミアスさんに幻滅したことなんてありません、これからもきつとないでしょう。

そんな日はこないのです。だって彼は天使様！ 私たちの天使様！ ああ……ああ、あの背中に！ 再び翼が宿る日が来ることを願います！

だってそうでしょう、あんなに綺麗な天使様に欠けなんて世界の損失に違いないのです。

4 3 話 信仰心

マテイカはいい子だ。きつと俺の悪い癖である鼻痕癖が出ているがそんなことは今更だろ。

マテイカのお陰でリツカたんを一週間ぶりに存分にペロペロした。リツカたんの成長日記の効力で麻痺していて気づかなかったがリツカたん欠乏症で俺の体は蝕まれ、結構やばかったらしい。もう少し遅ければ俺は手遅れでその辺で野垂れ死にしていた可能性がある。リツカたん欠乏症で。

なにしろリツカたんが普段よりもきらきらして見えたくらいだからな。普段もかわいしいし、普段も最高にペロい健気ない子だけどな！ 割増だぜ？ リツカたんが俺の存在を認識して話しかけてくれる、その事実には俺の方が昇天しちまいそうになつたレベルだ。

昇天させるのは俺の方なだけどな、リツカたんは俺にとつて天使なんだぜ！ 間違いない。

……まあ、リツカたん欠乏症つてのは流石に半分は冗談で。普通に失血がやばかつたらしい。腹が減るわ、ふらふらだわで最悪だった。てか俺天使じゃねえか。なのに人間

並みに食ってどうするんだと思っただぜ。何も残さないのに。まあ血が足りてなかったんだな。

待てよ、リツカさんの監修している料理を……普段より多く食べられたってことだよな？ どうせこうなるならウォル口村でリツカさんの手料理を味わっていた頃に食べたかったぜ。

「ダーマってどんな感じのところだった？」

「白い柱が立ち並ぶ神殿、と言った外観でしたね。高い階段があったので……ちよつと登るのは大変かもしれせん」

「へっちやらだよー」

「ええ、そうでしょう。俺も見習わなければなりませんね」

今回の件でひしひしと感じたが、天使は案外その能力に頼りすぎているんだよな。自然と飛んでいけば大したことはないとか考えそうになっていたが、……俺に邪魔な翼はないんだと、理解しきれていないとかマジか？

空を飛ぶことよりも、人間たちと話せる方がよっぽどいいのによ！

「では、行きましょう。一応俺に掴まってくださいね」

「はいー」

で、俺は授かった力というのは……ただでさえ敬虔すぎるくらい神及び天使に対して

の、いや、天使に対しての幻想を強化するものだということを失念していた。

そびえ立つダーマ神殿の前で、俺はメルティールとガトウーザに拝まれ、マティカに純粹無垢なキラキラした目で見られるハメになるのだった。

とりあえずキメラの翼の安価さと手軽さについて詳しく話したかったのだが、マティカがダーマ神殿に向かって駆け出した方が残念なことに早かった。

「大神官が不在ですか」

「大神官様がいらないならこの混み合いも納得ですね……」

「どれくらい待ったら帰ってくるのかな」

とはいっても、こんなにたくさんの人々が待っているのです。そんなにすぐに帰ってくるのでしょうか。アーミアスさんもご存知でなかった様子で考え込んでしまわれました。

「知識の上ではダーマ神殿の大神官が理由を公表することもなく休むということはダーマ神へ仕える最高地位の神官としてありえない事だと記憶しています。しかしほかの神官の様子から見るとそのような性格の方ではないようですね」

ええ、不真面目な方が神に仕える神官になるだなんてありえないと、我ながら不真面

目な僧侶ではありませんがそれくらいは分かりますとも。

「……ひとつ、心当たりがあります。場所を移しましょう。これからの旅の目的と、大神官の行方両方に関わりがありますから」

少し考えた素振りののち、アーミアスさんはそうおっしゃると宿屋の方へ向かわれま
す。

……もしや、もしかすると。ダーマ神殿にて職業を変えたいという私たちの願いを叶えたのちも私たちをアーミアスさんの旅へ連れて行つて下さる意思があるという事でしょうか？

ああ、私は魔法使いになることが出来ればそれだけで良いと思っていました。しかし今はそもそも存在しないと思っていた信仰心が燃え上がり、慈悲深い天使様の手助けが多少なりとも出来ているのであれば最上の喜び！

俄然やる気が湧いてきましたとも、もちろんアーミアスさんがいらつしやる時点でやる気もマジックパワーも十分ですとも！

と、浮かれているのが分かったのか、表情一つ変えずにメルティーにせつかくすり切りいっぱいあつた魔力を少々奪われたのですが。

「アーミアスさん、もし、その、旅の目的が。天使様としてのご使命であるのですしたら私たちの目的よりも優先していただいた方が宜しいのではないのでしょうか。兄の口なら

塞ぎますが」

「もしそうであったとしても、これまでも危険な旅でありましたのに、俺を助け、共に歩んでくださったのに約束を無碍にすることは決してありませんよ、メルティー」

「そんな、なんて、もつたいないお言葉！」

メルティーに喋るなど厳命されるまでもなくアーミアさんの意向なら従いますけどね！感動に崩れ落ちるかと思いきや、むしろ直立不動になったメルティーは続けて言いました。

「しかし私はもう僧侶になりたいとは思っていません。僧侶よりも、私が目指すべき道が見えたのです。ですから、少なくとも、私のことはどうかお気になさらずに！」

「……えっ？」

今、なんと？ 幼い時から自分の境遇に涙し、その信仰心をどんな立場でも貫いてきたではありませんか。……いやしかし、天使様の御前にして、力を使っていたかどうかの出来る立場。それを考慮すればその方が確かに良いのでしょうか……か。

ええ、転職すれば経験はリセットされますし、きつとメルティーが見つけた目指すべき道はより素晴らしいものなのでしょうから。

……それであれば、私はかたくなに魔法使いとして大成したいと願っているのが少々、問題なのでは？ 今、願いを叶えれば僧侶がいなくなってしまう。アーミア

スさんに不都合なのは？

……、……………。

私が魔法使いになったとして、願いが叶って、夢の通りの力が使えるようになるのは魅力的です。それに魔法使いは無力ではありません。非力な体がもつと非力になりませんが、圧倒的な魔力は魔物を討ち滅ぼす矛となることでしよう。

ええ、お役に立てないわけではありません。

どちらにせよ、大神官様が不在なのです。結論を出すのはあとでも同じでしょう。

「少々、情報収集がてら聞き込みに行ってくださいますが……みなさん。どのようなことがあっても、俺のことは考慮しないでほしいのです。俺はあなたがたの理から外れた存在です。本来視認すらできない、そんな存在です。俺の一番の願い、幸せはあなたがたの幸福。であれば、あなたがたがわがままであったほうが、嬉しいのです」

考えていたのをご覧になっていたのか、アーミアさんは私の方を見て、そう仰りました。

ああ。心は当然、それで決まります。

どんな存在よりも美しく、麗しく、気高く。優しく、慈悲深く、汚れなき存在。使命を遂行するお姿はまさに神々しいとしか言えません。私には想像のつかないほどの年月を、きつとその身を削って人間へ向けてくださる天使様。

そのお役に立てるように進むことこそがお導きなのではないでしょうか。

ええ、それがただの自己満足にすぎなかったとしても、ただ、アーミアスさんは微笑んで許して下さいるとまで感じます。この身、未だ未熟ではありますが、それでもお伝えしたいと心より感じたのです。

彼の歩みを止めることはもちろん致しません。私よりも小さいはずの、広い背中を見送って、私はより良いプランを考えるためにベッドに飛び込もうとして、メルティーに散々、魔力を吸われることになったのです。

聞けばメルティーは攻守を意識して賢者になりたいとか。元気いっぱいにバトルマスターへの夢を語ったマティカは肉弾戦をさらに特化させるつもりでしょう。

……これ、本当に転職しないのが最適解なのですね。メルティーが賢者になるのには時間がかかりそうですが。

ああ。それならば従いましょう。導き出した相応しい道へ。しかしながら私には信仰心は……。

いえ、あるではありませんか。神へではなく、アーミアスさんへの溢れる想いが。とりあえず今日のお祈りは神へすることにいたしますが。

アーミアスさんをこの世に遣わせたことへの感謝を。

しかしながら神は、神は、助けてはくださらない。それを思い知った僧侶に先はある

の
で
し
よ
う
か。

4 4 話 変貌

「そういえば、アーミアスさんは転職をなさるおつもりなのですか？」

「ええ、旅芸人は攻守のバランスに優れています。旅の先はこれから長くなりそうです。なので少しでも耐久力がある方がいいので……戦士になろうと思っています」

「戦士……」

ゆくゆくは俺はパラディンになりたい。博愛はあまりガラじゃねえが。俺の得意技はどうやら鼻唄らしい。聖騎士とか……かっこいい、いや、守れるだろ。身をもって守るなんてモテたり……いやモテるのではないか……モテる必要もないか……。ちよつと、ちよつとだけリツカたんにかっこよく思われたい気持ちがあるのは事実だ。

分かってたがもともと俺にそこまでの戦闘能力はないし、ひよつこ故に天使らしい特殊能力もない。上級天使なら天の雷を操れるらしいが、俺には静電気すら無理だしな。

職業の能力はダーマの神が与えたものだから、神の下にある天使にも有効らしい。ならば存分にその力をお借りしたい。

「ご使命のために選ばれるのですか？」

「大きく見ればそうでしようね」

「なんとご立派な……」

「いいえ、私情と使命が偶然一致しているだけですよ」

結構天使って奴は保身しか考えてないやつも多いしな。だが俺みたいに地上にずっと留まっていたい上に人間になれたら、と思うようなやつは間違いなく少ないのも確かだ。

で、俺はリツカたんのほのぼののハッピーライフをなんとしてでも守りたい。つまり私情。それを達成するためには人間たちには平穩に過ごしてもらうことが一番だ。だろ？

リツカたんが俺を認識してくれるなんていう、今までの人間たちにはありえない奇跡が起きている以上、俺もそれに報いなきやな。

しかし俺たち天使は上の命令には逆らえねえ。何としてでも、俺は地上で動けるように今回の女神の果実回収は成功させて実績を作らねえとな。俺は守護天使だし、早々天使界に引きこもることはなさそうだが。

下手に失敗して某天使のように軟禁処分とか俺は嫌だからな。

「あつ……待つてください」

「……何か？」

塔の前で「お辞儀」をしようとすりや、ガトウーザに縋るように止められた。なんだつ

て言うんだ。

「私に、やらせて、くださいませんか!」

「このメルティーでも構いませんよ!」

「はあ」

そんなに塔に頭下げたいわけなのか。人間、つか子供ってそういうところあるよな。微笑ましい。

「いえ、私に!」

「兄さん大人気ないですよ!」

「おれは誰でもいいと思うけど……」

一番年下のかわいい素直な子に言われてちや世話ねえな。

結局、私は兄さんに負けました。子どもっぽい小競り合いにアーミアスさんは疑問の様子。ですが天使様が頭を下げるのはしなくてもよいなら、しない方がいいのではという勝手な考えの結果ですから解決の方向でなくても良いでしょう。

ええ、アーミアスさんにそんな気持ちがないのでエゴですとも! お話を伺っているだけでも立場が上の方がいらっしやる様子ですがそんなこと関係はありません。実際、

地上で私たちを救ってくださいる天使様と見たこともない天使様。どちらを敬うかは、私
が判断することです。

礼儀正しくないといけない扉、だなんて魔物でも開けられる適当なセキュリティ、罨
かもしれないんですよ！ 頭を下げる以外にもアーミアスさんにはして欲しくないこ
とです、罨だったら！ そう思われた瞬間にアーミアスさんは絶対に譲って下さらない
ような気がしたのでとつと頭を下げた兄さんはある意味正しかったですが。

ああ、微笑ましい子供を見るような慈愛に満ちた穏やかな表情に心が洗われるよう
です……もう子供だなんて歳じやないですが、子供でいいです……。

「昔はこちらで転職の儀式を行っていたそうですが……こうも魔物の巣窟となっていて
は、聖なる息吹も形無しですね……急ぎましょう。大神官が危険な目に遭っているかも
しれません」

「うん！」

私たちを気遣ってくださいながらも、アーミアスさんは駆け出しました。ええ、気遣
いを感じます。振り返ってもくださいますし、そこまで速度もあげられません。

……やっぱり子供扱いなんでしょうか。人よりも永く生きる天使様。きつと老人で
すら赤子と同じような心境なのでしょうね。そうならば私のような新参者は赤子です
か……。

先頭に立つて勇ましく剣を振るわれる姿には見蕩れますが、見蕩れてばかりもいられません。私も、賢者になるまでの修行としてより素晴らしい魔法使いとして精進しなくては！

ええ、ゆくゆくはアーミアスさんがその素晴らしく気高い志をもつて剣を構えた瞬間にはすべてを燃やし尽くせるように！ アーミアスさんが剣を振るうその美しき姿を見るのが叶わなくなる、その世界の損失を受けても彼の身の安全には叶いませんとも。

気合を入れて燃やしていましたら、兄さんは消費を抑えろと言います。確かに、この先大神官様が危険な目にでも遭われていましたら、たくさん燃やさないといいけませんね。戦闘の後、毎回剣をおさめて魔物の魂が今度は我らと歩めるように祈りをささげる慈悲深きアーミアス様を見習って私も祈りを込めて、杖で攻撃をすることにいたしましょう。

ええ、神はいつも私たちを見守ってくださいていますから。祈りを欠かしてはなりません。兄さんのように信仰を捨ててはなりません。しかし、兄さんに信仰を持たせるのもまた困難でしょうからそちらこそ神の御心に任せましょう。

塔に差し込む陽光が、アーミアスさんの髪を銀色の光に変えるのをうっとり見つめて、私はそちらに向かいます。

その御髪を、そしてそのお顔ばかり見ていたら、階段から滑り落ちそうになりましたが、その救いのために差し伸べる手を私のために伸ばされて、安心させるように微笑まれるものですから、私は一層天使様への信仰心を深めるのです。ねーちゃんどんくさいな、だなんてデリカシーのないことを言う少年に魔力がごく少ないことがとても悔やまれることでしたが。

いえ、いえ、いけません。無垢なるものを愛してこそではありませんか。どうやらお優しいアーミアスさんはマティカ少年を無垢の塊のように思われているようですが。実際のところ年相応に無垢で、強かです。少々気が弱いだけ。ええ、ちよつと自分の意に沿わないからといっていちいち目くじらを立ててはいけませんね。

私たちは、それからほどなくして塔の一番上で神聖な空気を放つ部屋へ踏み込みました。ここで転職の儀式を行っていたのでしよう。流石に塔に巢食う魔物たちもここにはいません。静かに先頭を行くアーミアスさんはその部屋の中央に背を向けて立っているご老人、もとい大神官様に近づき、いえ、足を止められました。

前、というよりもアーミアスさんしか見ていない兄さんも止まります。足元しか見ていなかった少年はぶつかったようですがぶつかったのは子供には優しい兄さんなので大丈夫でしょう。

「ダーマより来た旅の者です。貴殿、ダーマ大神官とお見受けいたしますが」

アーミアスさんは、何かに気づかれたようなご様子で、ゆっくりと剣に手をかけました。声は困惑しているようで、清浄な空気の部屋の中、同じく清浄な魔力を持つ大神官様に、どうして警戒されるのでしょうか？ しかし、ぶつぶつと独り言を言っていた大神官様のお姿に異変が生じると私たちはみな武器を構えました。

なにしろ……大神官様はもとの人の好きそうなご老人の姿から、魔物と形容するしかない邪悪な姿へ変貌したのですから。

「……あなたが口にしたという果実は、人の身では耐えきれないものです。お覚悟を！」
邪悪そのものの「ジャダーマ」の発言をお聞きになって戸惑いを捨てたアーミアスさんがいの一に狙われた私をかばって、剣でその魔物の一撃を受け止め……戦闘は始まったのです。

人が、魔物になる。それをこの目で目撃して……私は、アーミアスさんの使命とその重みにやっと気づき……おそれと同時にそれを正す手伝いができることに震え、歓喜したのです。

ええ、神がもし見とがめられるならば、神罰も致し方ないかもしれません。しかしどうやら信じる神は寛容であらせられた。もしかしたら私が僧侶ではないので想いが届いていないのかもかもしれませんが、すくなくとも私は思い切り喜んで、忌み嫌っていたはずの魔法の力を存分に行使したのです。

45話 叱

人間は弱いのではないが、我が身に比べると脆弱である……つてのは、後半だけほかの天使に同意される。俺はこれからも前半も主張していきたいが。

とはいえ体の頑丈さは正直そこまで変わらないと思うが。

ただ、その寿命の短さが、総じて痛みなどの苦痛に慣れる前に死ぬ原因となつてあまり耐えられないんじゃないかねえかつて俺は勝手に思つてる。

だからよ。

人は強いだろ。天使も案外強いぞ。しぶとさにかけてはそこまでやすやすと死ぬ体じゃない。だから、庇つたからつてそこまで危険じゃない。一度や二度はな。

気を遣うんじゃない。別に死にやしない。

「アーミアスさん！」

「俺はいいですから、前を見て！」

こんな重い攻撃、誰が食らつても危険すぎる。それならまだ俺が受けた方がマシつてわけだ。一撃がひどく重いのが、比較的打たれ弱い職業の三人に当たると思えば百年は後悔するに違いねえ。天使として庇つてるわけじゃねえ、単にもうこれは年上の個人とし

て幼き隣人には受けさせるわけにはいかねえ。

優しそうなおじいさんの姿はどこへ消えたのか、女神の果実の力によって変貌した大神官は凶悪な攻撃を存分にふるいやがる。表情からも善良さはなりを潜め、完全に欲望にのまれている。誰しも……人間も、魔物も、天使も持つであろう程度の傲慢な欲望に。だがそれは、人はきつと願いたいのだろう。その程度の、想いにその人そのものがのまれていやがる。

危険だ、想定していたよりもはるかに。女神の果実は七つあったという。つまり蓄えられたうちの七分の一の力が大神官を暴走させた。俺たちは何千年、いや何万年？星のオーラを集めてきただろう。俺が遣わされる前に、どれだけの星のオーラが集められただろう？

俺は長い天使の歴史の最大の功労者である、ハゲ師匠の師匠のエルギオスとかいう天使がどんなペースで星のオーラを集めたのかを知らない。俺は、幼い天使であり、故に浅はかで、理解が及ばない。

わからない、もう何もわからない、ただ、途方でもない星のオーラが集まって……人々の、涙が出そうになるくらい尊い日々を、影から守護する天使が、集めたかけらが、こんな使い方をされるなんて神も想定していないだろうし、もつと、そうだ、誰も苦しめない方法で俺たちを救ってくださいるものだったはずだ。

俺は星のオーラによる、救済を、そこまで快く思っちゃいない。俺たちが神のもとへゆき、救済を受けたあと、守護天使を突然預かり知らぬところで失った人間たちが、不慮の事故で不幸になったら？

俺はナツミさんの系譜がどんなことになっているのか気になって仕方なくなり、いまに流れ星になり、きつとウオルロに落下するだろう。リツカさんが恋しくて、恋しくて、人間になりたい俺は選べるものならそんな方法で天使をやめたくねえ。あ？ リツカさんは今、セントシユタイン在住？ いや、天使界より空の星は上じゃねえか。滝つぼダイブじゃなきや流石に死ねるからな。

大神官の一撃を割り込んで受ける。盾を持つ手はどうに痺れていて感覚も曖昧だ。目の前で鮮血を散らしながら攻防を続ける俺を見るだけで精神衛生上よろしくねえだろうが、そうも言っていられねえし。

一撃。俺は盾で凌ぎきれない。視界が点滅する。だが立っている。

一撃。俺は凌ぐ。だが腕をやられたような気がする。まだ腕が上がる。やれる。

豪速球の魔法が後ろから「ジャダーマ」を襲う。俺の影から飛び出してきたマテイカが頭を狙う。確実に削っている。だが削られてもいる。魔力の残量的には明らかにこちらの方が悪いのははっきりしてやがる。

だがまだ、遅くはねえ。まだのみこまれきつてはいない。まだ救える。まだ間に合

う。目の前で変貌したばかりの人間なら、何とか叩きのめしてどうか女神の果実を奪い取ればまだ戻れる。そう俺は信じる。

幼き人間。お前は何も悪いことをしちやいない。何も知らずに、無邪気に美味しそうな果物にかぶりついたただけだ。だから罪はない。たまたまそれは、人間に、いや、ほんど全ての生物にとって、過ぎたるものであり、過ぎたるものはや毒であるというだけだ。

誤飲したなら下を向かせて背中を思いつきり叩いてやらなきやな。天使として隠れているなら推奨されないが、俺は姿が見えている天使だしな。

ああナツミたん、ナツミたんの子どものげつぶを助けたあの一撃！ もう一回俺にあの一撃をやらせてくれ！

「吐き出さないー！」

俺はジャダーマを子どもだと思いつ込む。本当はじいさんだが、そう思えば背中の骨が心配になってくる。だが幸い、体は頑強そうだ。

バシン、と背中を叩いた。剣の一撃すら効いているようには思えないのに、平手打ちが何になるだろうか。だがみんながやってくれた。十分に動きが鈍くなっている。もう一発。

「べっしなきいー！」

メルティーの炎がジャダーマを焼く。とうとう膝をついたドジっ子を俯かせて、俺は背中を叩く。何度も見てきた誰かの母親の動きを真似して、もちろん幼き者には愛をこめて。

ジャダーマの体から邪悪な力が抜けていく。一際力強く背中を叩くと、すっかり姿は元に戻っていた上に、地面には女神の果実が鎮座していた。

メルティーはぺっしなさい！ を復唱すると何故か崩れ落ちた。

「……………」

「大丈夫ですか？」

俺は女神の果実を後回しにして、ご老人をいたわる。血塗れの手は行儀が悪いが服で拭いて、手を差し出す。いい歳だから真似して教育上悪いなんてことはないだろ。

「ああ……なにがあつたというのかね。ただ私が、私でないものになり、世界を滅ぼしてしまおうとしていたことが臍気ながら思い出される……」

「いえ、誤飲事故です」

「誤飲？」

「はい。それだけですよ。あなたはなにも邪悪ではありません。何も落ち度はないのですよ。」

さて、神殿までお供しましょう」

俺は大神官が肩で息をする仲間たちを訝しげに見たあいだにさつと女神の果実を回収した。甘い匂いが鼻をくすぐる。これがあれば願いが叶う、というわけではなさそうだ。これは小さな隣人にも、幼い俺にも、毒に過ぎない過ぎたるもの。

さつさと残りも集めてオムイ様に渡した方が良さそうだ。

他でもこんな騒ぎになつてなきやいいが……。

「アーミアスさん、その、回復させてください」

「はい、もちろんです。ありがとうございます、ガトウーザ」

「いえ」

リレミトを唱える。途端に周囲は石と水の匂いから草と土の匂いに変わり、石と水だけの方が俺に親しみ深いはずだが、やっぱり俺は人間と魔物たちが闊歩することちの方が好きだとしみじみ思う。

「アーミアスさん！ これで転職、できるようになる？」

「ええ、そうですね？」

「うむ。たくさんの人々を待たせてしまったが、職務はすぐにも再開することになる」
う」

「わーい！ ありがとうおじいちゃん！ おれ、バトルマスターになりたいんだ、もつと、もつと、強くなつて、おれが全部倒すんだ、先に！ そしたらきつと前に進める！」

俺の怪我を気にして言ってくれているんだろうか。なんていい子なんだ。嫉妬を隠そうともしない兄妹は少しは無邪気さを身につけてくれた方がわかりやすく可愛い気がするぜ。余計なお世話か。

「バトルマスターになるためには、少々試練を受ける必要がある。しかしその熱意ならばきつと乗り切ることが出来るはず。精進なされよ」

明るい笑顔のまま領いたマティカ。俺は人間のその、まばゆい生命の光を見ていると、こつちが幸せにさせてもらっているに違いないと心の中で領いていた。

神殿に向かう中にも魔物たちは懲りずに襲ってくる。俺は神殿の前ですら元気よく突撃して来たスライムナイトを撃退したその手で弔う。

ああ願わくば、すべての生命が同じ道を歩めますように。旅芸人が僧侶より祈りを捧げているのは目立つのか、大神官のじいさんは少し考え込んでいるようだった。もちろんガトウーザが神に対してはできた坊主ではないだけだろう。

天使には敬虔がすぎる。加減を考えろ、リアリストめ。神が降臨される日があれば、きつと俺はその手足となる以外のことを考えられなくなるくらい弱い天使なんだぜ？

46話 鮮血

天使様の血も赤い。人間の血もちろん赤い。おれはそれを知ってしまったから、どうしたらそれを見ないようにするか、一生懸命考える。あれを見るたび、おれは怖くて、怖くて、泣きそうになるから。

おれはセントシユタインで一番泣き虫だと、ずつとずつと、言われてきた。泣き虫で、弱虫で、ひとりぼっちで、言い返したつて涙がぼろぼろ落ちていたくらいだから、きつとすつごく泣き虫だった。でも弱虫はさ！ 多分人並みに弱虫だっただけなんだ。泣き虫は、悔しい時だけだった。おれがおにーさん……アーミアさんたちと旅に出てから知ったこと。

おれは、強くなつて、泣き虫が出てこないような人になりたい。だからおれを泣き虫だつて言わない仲間たちが、血を流すところは見たくない。

メルティーはつんとした人だ。僧侶になりたかつたらしいけれど、最近はそうでもないのかな。教会の、おれにご飯をくれたシスターみたいな人で、厳しい人だ。厳しいけど、自分にも厳しくて、そして怖がりな人だ。特別優しい人つてわけじゃないけれど、少なくともおれのことを犬つころだと思つているシスターよりは優しい。想いが強くて、

おれがあんなふうならおれは泣き虫じゃなかったと思う。

アーミアスさんは天使様だから、「敬虔」っていう、メルティーはすごく張り切っていて、ちよつと空回りする。落ち着いた人なのにアーミアスさんの前ではあわてんぼうになつちやつて、失敗しちゃうごとにうつむいて、唇をぐつとかむ。アーミアスさんが気づいたらいけないと思っっているらしくて、彼にはすごく隠しているけど、いつも戦う時以外は後ろから追いかけているおれは、知っている。

メルティーは、ぐずだ泣き虫だと言われ続けて、のけ者にされていたから、祈りの言葉も知らなかったおれに、祈りの言葉を教えてくれたひとだ。手を握って、祈りなさいと静かな声で言ってくれるのが好きだ。おれは祈り方を教えてもらってから、みんなの次のご飯が美味しいように祈ってる。それから、おにーさんについて、目をキラキラさせて話しているのが好きだ。いつもそればかりなんだよ。

でもメルティーはそんなに丈夫じゃないから、戦っていて、血を流していたら、きつとおれは泣き出してしまう。おれはメルティーがけがをしたなって思ったら、泣かないように、泣いて力が出ないなんてないように、前に飛び出して、後ろを振り向かないように、戦うことにしている。

ガトウーザは心配ができない人だ。ほかの人を見れない人だ。その上自分のことも見れない人なんだ。たぶんおれと同じで、教えてもらえなかった人だ。丁寧で、器用で、

きつと大きな家の人なんだろうに、お金持ちの息子も教えてもらえないことがあるんだとおれは初めて知った。まっすぐ前しか見れないんだ。何かを信じたらほかを全部捨てちゃうんだ。

自分を救ってくれる人が目の前に現れて、夢中になってしまったんだ。綺麗な、綺麗な、優しい天使様に夢中になって、ほかの何も見えなくなつて、注意散漫で、よくけがをするひとなんだ。でもそのけがにも言われるまで気づかなくなつて、おれはいつもけがしてよつて嘔く。そしたらありがどうつて言つてくれるけど、ガトウーザの心はおれの方は見ない。

きつと囚われちゃつたんだと思う。ご飯をくれなくなつたシスターが男の人とどつかに行つちやつた時みたいに。シスターがどつかに行つちやつたあと、神父様がご飯をくれて、シスターがおれのママだつたつて教えてくれたけど、ママはおれのところには歸つてきてくれなかつた。

シスターはあの男の人に囚われて、自分のこともおれのことも見れなくなつて、それつきりだ。そのあとおれは教会から追い出されたし、シスターがどうなつたかなんて、分からないから、おれの中ではまだ囚われてるまま。

アーミアスさんにその気はなくても、あの男の人がそのつもりじゃなかつたとしても、囚われた人は夢中になつたつきり。ガトウーザは天使様に夢中になつて、全部差し

出せる人で、妹のことも、考えられなくなつて、そればかりになつて、もう自分のことだつて、分らないんだ。

つまり、年上だけど、年下みたいな人なんだ。おれは、ずっとだれかの弟だつた。可愛がられたりはしない。からかつて、弱くて、泣き虫の弟。きつとガトウーザもそう思つてる。でも、あんな夢を見ているような、子どもみたいなひとが傷ついたら、おれは初めて出来た弟がけがしたつて思うから、きつと心がぎゅつとして痛くなつて、泣きそうになるから、振り返らないようにしている。

戦いが始まつたら、おれは、一番後ろから抜け出してアーミアスさんの後ろにいるんだ。そうしたら、泣かずに済むんだ。普段、二人はおれに興味がなくて、からかつたりしないから悔しくつて泣くこともないんだ。

「マティカはいい子ですね。本当に、二人も見習つてくれたらいいのに」

「アーミアスさん？」

「……二人ももちろん、いい子ですよ。内緒ですからね」

おれをいい子だと言つて、きらきらした、星空みたいな瞳がにっこり笑つてくれる。黒くて、星がいっぱい、夜みたい、みんなが大好きな目で。

アーミアスさんは天使様だ。だから、メルティは、見た目よりもアーミアスさんはずっと年上で、おれたちのことはきつと赤ん坊みたいに見えてるつて言つた。お墓の

中の人よりも歳上なんだって、言ってた。

赤ん坊はなにもできない。だからおれは路地で泣いてる赤ん坊を見つけたら、拾って教会に持って行く。おれはそのまま追い出されて、赤ん坊は中に連れていかれる。おれは何も出来ないけど、大人ならなにかできるらしい。

なら、おれたちは赤ん坊じゃない。アーミアスさんは言うじゃないか、頼りにしてるって。おれたちに。力を貸してくれてありがとうって。赤ん坊にそんなことは言わない。

アーミアスさんも、けがをする。二人と比べられないくらいしょつちゆうけがをする。飛び出しすぎたおれを庇って、避けきれなかったメルティーを守って、夢心地のガトウーザを救う。その度に赤い血が飛び散って、地面に流れて、綺麗な綺麗な天使様は赤くなる。

女の人みたいに白い肌で、天使様の像よりもずっと綺麗な本物の天使様。おれは守られるたびに、もっとおれが強かったらけがするまえに戦いが終わったかなって思うんだ。

おれは武闘家だ。ちよつと間違ったら盗賊になつてたと思う。でも、武闘家なら強くて、盗賊なら器用になるって聞いたから武闘家なんだ。強かったら泣く前に全部終わるじゃないか。泣き虫には向いてないって言われたけれど、今、ちゃんと、戦えている、は

ず。

おれはアーミアスさんがけがをしても泣かない。泣いていたら戦えない。泣くよりも、あの綺麗な赤が飛び散るさまを見て、もつともつと強くならなきゃなつて思うんだ。魔物を殺して、アーミアスさんが祈つて、ガトウーザが傷を治すと、おれはやつと正気に戻る。

天使様、天使様、そう二人は言つて、慕つてる。慕つているのにおれは天使様に抱いちやいけない気持ちを抱いてる。

おれは、多分、あの綺麗な綺麗な赤にうつとりして、あの夜空の黒が大好きで、翼のない背を追いかけていて、なんだか全部素敵だから、少しも欠けちやいけないって思う。なのに、飛び散る血飛沫に見とれて、一生懸命におれたちを守る姿を見ているのが好きで、そうだ、欠けているのが綺麗だなんて思う。

朝早く、陽の光の下のアーミアスさんが髪の毛を銀色に光らせて歩いている時、頭に輪っかがないからこんな綺麗なんだ。夜、街頭に照らされてる時、背中になんにも輝くものがないから、あんなにみんなが見とれるんだ。

別け隔てがないわけじゃないし、アーミアスさんは天使様だけど、神様じゃないから、息をして、一緒にご飯を食べて、たまにちよつと笑う。じつとあの天使様を見ていると、「悪い人」に対してはいたずらっ子でも見てるような顔をしてるし、天使様だと言われて

メルティーやガトウーザみたいな人に会ったとしたら多分ちよつと顔色が青くなっている。

よく見ないと、ただただ綺麗な天使様。でもよく見たら、あああんなに生きてる一人の天使様！

おれは、守りたいあの人が一番綺麗なのは宿屋の女の子と笑っている時だから、アーミアさんですら何かに囚われてしまふんだなあって、分かったんだ。

そしてやつぱり天使様だから、おれの知らないことを知っている。おれをとりあえず戦士にして、おれに「ドラゴン斬り」を教えてくれる。なんでも、テンションを溜めて、スーパーハイテンションになつてからドラゴン斬りでスライムを五匹倒せばいいらしい。

なんでそんなことするの？ って聞いたら、忍耐力を試すためらしい。初めて持った剣を構えて、スライムを見据えて、おれは待つのがそんなに好きじゃないからバトルマスターになれたら全部まとめて吹っ飛ばそうと思った。

でも根気強くやれたなら、あの優しい指で頭を撫でてくれるから、ちよつと頑張ろうかな。心底可愛がつて、いい子つて言ってくれるのは、幸せになれる。

もつと手つ取り早く強くなれたらいいのに。あの果実に頼ったら、化け物になつちゃうから良くないけど、果物を食べるだけで強くなれたらいいのに。

でもちよつと幸せなことに、おれがスライムと格闘し終わつたあと、ずっとラリホーを唱えて逃げないようにしてくれていたガトウザーがアーミアスさんの真似をしておれの頭を撫でてくれたのだけど、なんとなく、ちよつとだけ、おれのことも見えているような気がした。

見事バトルルマスターへの道が開かれた少年を連れて、あの旅人はやってくる。灰色の髪の少年は、女神像さながらに巡礼者に拝まれては困つた顔をする。魔法戦士の青年に随分長いこと勧誘されては断り、老人の拝む姿を制して。

「大神官さま！ おれをバトルルマスターにしてください！」

「もちろんだとも。ところで、そちらの方は転職はよろしいのか？」

騎士然と剣を帯びていても、似合わぬことに彼は旅芸人だった。似合わぬ、とダーマの大神官らしからぬことを考えたが、だからといってどんな職業が似合うのかというところ少し困ってしまう。

「俺ですか。そうですね、ダーマにパラティンの道を開いてくださる方はいないようです。ですから、それならば戦士として修行を積んだ方が今後のためになりそうですね。やはり本職は違いますから」

「本職とは？」

「自己流の『庇う』ではやはり足りませんよ」

灰髪の少年は、まだ子どもから抜け出したばかりの年齢に見えた。しかし、よくよく目を凝らせば、どうして少年に見えたのだろうか、不思議に思える。

彼の目には不思議な雰囲気があった。静かで、全てを慈しむ目だ。人間離れた容姿と、それを合わせて考えれば、あなるほど彼は人間ではなく、天使様であると納得がいく。

であるからこそ、あの黄金の果実の危険さを知っていたのだ。

……それにしてもなぜ旅芸人を選んだのだろうか。

「ではマティカよ。バトルマスターの気持ちになって祈りなさい。アーミアスよ、戦士の気持ちになって祈りなさい」

ダーマの神からの祝福を受け、光に包まれる姿に、なるほど光ごとき翼を幻視しながら地上に遣わされた翼なき天使様の行く末を祈ることにした。

どうにも危ういものを感じながら。相容れない魔物にあればどこまでに祈りを捧げる優しすぎる天使様であるのだから。

ツオ編

47話 墮落浜

「さて今後の方針ですが」

「はい！」

「とりあえず南下しましょう。ツオという漁村があるようですから、船を出してもらえるか聞いて、別の大陸へ向かう予定です」

「ツオでは船、出してたはずです」

メルティーは勤勉だな。

「良かったです。ではその方針でいきましょう」

女神の果実がどこに落下したかわからない以上、しらみ潰しに探すしかないだろう。ということできあたりばったりなわけだが、ゆっくりしているわけにもいかねえ。放置しているあいだに街一つ吹き飛びかねん。

少なくとも人間の一人や二人はあつという間に殺せるエネルギーがある。ダーマの大神官は救えたが、うっかり食ったなら、吐き出させても命の危険があつてもおかしくねえだろ。

なので俺は泣く泣くリツカたんのところに帰らずにダーマで一夜過ごしたからリツカたんチャージが足りねえ。リツカたんの行き届いたベッドじゃなかったからタダ宿だったのになんとなく体の節々が痛てえ。

変な夢を見たからかもしれないねえが、うちのパーティのレベル15以上の魔法使いは妖精の依頼を受ける気がないらしいからもうどうでもいい。悪いが天使の理的にも先約が絶対だ。

というかりツカたんの笑顔をペろペろしていいのでそのへんで行き倒れる危険すらあるから急がねえと。リツカたんの笑顔は最強に可愛いからな、それをチャージしてないんだぜ？ もし行き倒れたときはセントシユティンまで運んでくれりや自動で蘇生するからよろしくな！リツカたんを覗いて全回復してくるからな！

リツカたんの写真すら持つてねえ俺はそろそろリツカたん含むウオル口の住人から浴びせるように持たされた薬草でもペろペろするしかねえのかもしれない。とりあえず俺は決めた。次の女神の果实を見つけたら何がなんでもリツカたんをペろペろしに帰るつてな。

リツカたん！ ああリツカたん！ 俺のオアシス！ 俺の女神！ 神は助けてくれねえけどリツカたんは存在するだけでもうかわいい。ありがとうリツカたん、元気に育つてくれてありがとう！

今は自分の日記を読み返してリツカたんの可愛らしさについて思い返し、再認識することなどとか正気を保っている。リツカたんなら俺に「今日もお疲れ様!」とか「頑張つてね!」とか言ってくれるはずだろ、俺はそれを信じている。だから頑張る。

リツカたんが今日も元気に頑張つてると思うと、俺が情けないわけにはいかねえよな。リツカたんのサイコーな宿を更にパーフェクトにするために宿の周りを掃除して回りにえし、リツカたんのおじいさんが元氣か確かめてえし、ニードがどうしてるかも氣になるが、俺は俺の務めを果たさなきゃならねえ。ままならねえ。分身してえ。

とりあえず……記憶の中のリツカたんぺろぺろ! リツカたん可愛い! リツカたん真面目で健氣で最高に勤勉! あんな可愛くてサイコーに頑張つてる子、俺がなんとしてでもひっそりこっそりサポートして幸せになつてもらうしかねえんだ!

しかも守護天使の翼がもげて輪が飛んでも信仰心が揺るがない敬虔さ! 守護天使が俺のような天使のイメージに反するやつでもあの笑顔が曇らない別け隔てのなさ! 慈愛の女神か! プリティーの女神なのか!

最高! ペろぺろ! リツカたん大好き! ペろぺろ! かわいい!

あのおかつぱを包むバンダナになつてえ。バンダナだとリツカたんの頭しか守れねえからやつぱり守護天使でよかつた。せめて師匠のような男前な顔をして、あんなムキムキ天使なら今頃キヤー! 素敵! くらいは言われてたんだらうか。キヤー!

素敵！ ……言われてみてえな。

チツ、顔の格差。

せめて髪の毛が金髪で目が青い典型的な天使ならそれはそれでワンチャンあったかもしれないねえ。俺みたいに羽根があっても浮いて、無くても人間の中で浮くようなやつは一番中途半端がいけねえ。だというのにオートバレはあるんだからこの世は理不尽だよな。もう拜まれるのは勘弁だ。

だがリツカたんは優しいから俺の顔がどうであれ俺にも優しいんだぜ。ぺろいぜ。嬉しいぜ。なにがあっても守りたいぜ。ああ俺が守護天使でよかった。天使界から一羽ばたきも出ない役職じゃなくてよかった。リツカたんぺろ！ ぺろぺろ！ ……やべえこれは無限ループするわ。

そろそろ脳内も少し真面目になるか。

バトルマスターなりたてのマティカ、戦士なりたての俺。装甲が脆くてさすがに今誰かを庇ったらぶっ飛んじまいそうだ。だがここぞとばかりに魔物を焼き尽くすメルティーが、ぶっ飛ぶ寸前にすっかり回復させてくれるガトウーザが頼もしい。俺が剣を抜いた頃には終わってる時もある。そういうときは全自動祈りマシーンみたいになつてるぜ。

だから経験というものが溜まっていく。見る間にレベルが上がっていくのを感じる。

戦士というのは頑強な職業だ。ホイミは使えないし、魔力も低いが力や体力は旅芸人と比べ物にならないほど高くなる。すぐに元の戦法に戻れることだろう。剣も盾も前のままだ。羽飾りバンドを大手を振って装備できないのもいい。

対してマティカは剣、オノ、ハンマーという新しい武器の選択肢に悩んだらしいが剣を選んだ。なんでも、俺に剣を教わったのが嬉しかったとか。あの程度の握り方の手ほどきぐらいで教えたと言われても、教えたにも入らないと思うんだが、まあいい。得物を揃えればいざという時も使い回しができる。

ただ、素早かった身のこなしがすっかり失われているのが気になるが、打たれ弱かったのがマシになるだろうからなんとかなるだろう。俺ともどもしばらく修行を今まで以上にやろうな。

さて、ツオは船を出しているか。メルティーの知識を疑っているわけじゃねえが、海の調子とか俺にわからねえし。時化てるなら無理、とかぐらいの知識はあるからな。海はそこそこ穏やかに見えるし、大丈夫だとは思うが。

……ツオの民に何もなければいいがな。

このままじゃダメ。村の人はちつとも漁に出ないし、村長さまはそれでいいと思って

るのかな。

あたしはこの村が好き。一生懸命漁をして、魚を食べる時の笑顔。漁のあと、女たちで網を解いて干して、男たちは疲れを癒しながら過ごす昼下がり。

でも、もうそれはないの。お父さんが死んじゃってから、あたしにはぬしさまを呼ぶ力ができた。それのお陰で飢えることはないし、寂しいけれど、一人でも生きていける。でも、こうなってしまうくらいなら、こんな力、ない方が良かったんじゃないかな。

もうここは大好きだったツオじゃない。でも、まだ、大丈夫かも。トトがいてくれるから。トトは、まだ、欲に目が眩んでいないから。

このままじゃダメなの。どうしたらいいのだろう。

今日も、ぬしさまに祈る。ぬしさまが現れて、魚が浜に打ち上げられる。村人はそれに群がって、後でたぶんいくらか私の分を持ってきてくれる。そして明日も頼むよって、そう言っ、あたしは眠れない夜を悩みながら過ごす。

ふと、浜に見慣れない人たちがいることに気づく。服装が村人たちみたいなものじゃなくて、剣とか杖とかを持ってから多分、旅の人。ダーマから来たのかな。もうこの人は危ない船旅なんてしないから、大陸へ船を出すことはないのに。

……でも、外から来た人なら、この今のツオをおかしいって言ってくれるかもしれない。なんだか話し合いをしてるみたいだけど、話しかけてみよう。

「あの、旅人さん……?」

「はい、なんでしよう、お嬢さん」

声をかけると鉄かぶとの人が振り返った。

すぐく、綺麗な人だった。あたしよりちよつと大きい、剣を背負った男の子がなんとなくこの人は渡さないぞつて顔をしてたけど、気持ち、わかるよ。すぐく綺麗なだ。そして優しい声をしてる。

目がね、真つ黒で、吸い込まれるみたい。優しくつて、そう、言うなら、天使様みたいな。でも翼はないし、輪っかもないから、浜の外にはこんな綺麗な人がいるんだなあ。

「あの、夜、私の家に来てくださりませんか。ちよつと聞きたいことがあるんです」

「夜?」

「はい。あたし、これからちよつと用事があつて。忙しいならすみません」

「大丈夫ですよ。大陸に船を出してくれないかももう少し交渉するのでどれだけ早くても出発は明日ですからね」

「大陸に……あたしも、口添えできたらいいんですけど」

「いえ、気持ちだけで。危険な船旅をどうやら今はもうしないようですから、あまり期待もしていません」

その人は微笑んで、ちよつと屈んであたしと目線を合わせてくれた。

「俺はアーミアス。あなたは？」

「オリガといいます。ありがとうございます、アーミアスさん！」

優しい笑顔で返してくれた。そして仲間の人たちを連れてアーミアスさんは村の人に話に行つたみたい。

きつと、断られちゃうんだろうな。ほかの人もそうだったから。

……アーミアスさんならあたしの話、おかしいっていわずに、聞いてくれて、ツオのダメなところ、ダメって言ってくれるかな？

48話 雛鳥親鳥

ノックの音が控えめに響く。あたしが急いで扉を開けると、アーミアスさんと仲間の女の人が並んでいた。紫のショートカットのその人は冷たい眼差しをしていたけれど、あたしを見るとちよつと微笑んでくれた。

二人とも、装備は軽装になってたけど、武器は持っていた。でも全然怖くない。なんだか二人とも修行の旅をしているというよりも護身用のために武器を持つてるって感じだから。

「こんばんは」

「こんばんは、アーミアスさん！ それから……」

「メルティと申します。ええと、オリガさん？」

「はい！」

二人を家に入れた。夜の火に照らされたアーミアスさんの目がキラキラ光っていて、綺麗。かぶとを被っていないとアーミアスさんは間近で見ると案外若い人だなんて思った。でも、それは外見だけで、なんとなく雰囲気はかなり年上の人のような気がするし、掴みどころがない。

昼間俺って言ってたし、男の人だよな？ 声を聞いても、よく分からない。そんな人ここにいなかったから。メルティーさんとも背があんまり変わらないような。

「お邪魔にならないようにお話が済んだら宿に戻りますね、アーミアスさん」

「待ってください、防犯の関係で連れてきているのですが」

「防犯？」

メルティーさんがまったくもって理解できないといった様子で首を傾げて、あたしも首を傾げた。

「なにか良からぬ噂でも経てば面倒ですからね。お気にならさず。俺もすぐに宿に戻りますよ」

「……」

良からぬ噂。なるほど、防犯ってアーミアスさんが男性だから言ってるんだ。……やっぱり男性なのかな。そう知ったって何も危険なようには思わないのだけど、きつと優しい人だからそう配慮してくれてるんだよね。

「ところで話というのはどういうものでしょう？」

「あー！ はい！ あの、昼間、ご覧になったと思うんですが、あたし、お父さんが嵐で帰ってこなくなつてから『ぬしさま』を呼ぶことができるようになったんです」

「ぬしさま。魚を打ち上げていたあの大きな影の持ち主ですか？」

アーミアスさんは少し思うところがあるみたい。目を細めて、笑顔が少し引つ込む。あんな大きな影を見たら最初はびっくりするよね。それにぬしさまは、恵みをもたらしてくださるけれど、でも。

「はい。あたしがあぁやって祈ると、来てくださって、魚とか、昆布とか、海の幸を恵んでくださいます。村のみんなはあたしがお父さんを失ってひとりぼっちになったから、哀れに思つて助けてくれるんだらうつて言います。それからみんな漁をしなくなりました。全部、ぬしさま頼りにしてゐるんです」

「……時に海は危険でしょうからね」

「はい、それは分かっているんです。でも、あたし、それは良くないって思つてゐるんです。今までのツオは、漁のあとの賑わいがありました。みんな頑張つて、そして魚をとつて、暮らしてきたんです。でももう、みんな好き勝手にしてただけで、もう、好きだったツオじゃないようにすら……」

メルティーさんが目を伏せて、それから、あたしの言葉にはつきりと微笑んでくれた。分かってくれた。そう分かつて嬉しくなる。

「こんなのおかしいですよね？」

「……俺の主観で答えてよろしいですか？」

「ええ！」

アーミアスさんはあたしの目を見て、はつきり言ってくれた。

「村人の人々はおかしくありませんし、またオリガさん、あなたもおかしくありません」
村の人はおかしくないのに、あたしもおかしくないの？ どうして？

「……………え？」

「人間というのは、楽な道があればそれに流されてしまいます。ましてや命の危険を冒していたらばなおさらです。しかし、このように墮落し、オリガさんの得た不思議な力に頼り切りになってしまっているということは間違いなくおかしいことです。ですから、そうですね……俺はこの浜の人たちのことをよく知りませんがオリガさんとは言葉を交わしましたから」

アーミアスさんはひととき優しく微笑んだ。

「あなたの気持ちの方を支持したいですね。所詮は部外者の現状も知らない無責任な意見ですが、以前の村を取り戻して活気のある村に戻りたい。そういう心を持ったオリガさんだからぬしさまは力を貸してくださいるのでしようか。」

もう少し出来すぎたことを言いますと、その墮落具合が長く続くとこの村から完全に漁が失われます。するとどうなるか。簡単です。オリガさんがおばあさんになって、いつの日か亡くなったあと、ここは滅ぶのですよ」

だからあなたは正しい、とアーミアスさんは言い切った。はつきりと、未来にここが

滅ぶと言つて。

確かにそうだ。あたしがここにいる限りぬしさまが力を貸してくれる……そう自惚れたとしても、あたしがいなくなつたあとはどうするんだろう。あたしはまだ子どもだし、子どもは漁のやり方をほとんど知らない。漁を知らない人間の孫とかひ孫がどうして漁のやり方を知つてゐるだろう。

「ありがとうございます。勇氣が出ました。明日、村長さまにそう言つてみます」
「……ええ」

アーミアスさんは立ち上がつて、そろそろ失礼しますと言つた。そしてメルティーさんと小屋から出ていこうとしたとき、突然やつてきた村の人が村長さまをお呼びだと。

ちようどいいから、今、言おうかな。

あたしは二人に丁寧にお辞儀して、足取り軽く村長さまのところに向かつた。きつと聡明な方だもの、今は良くても未来がないつてはつきりわかればもうぬしさまを呼ばないでいいつて分かるはず。

こういう力は本当は、ちゃんとしたタイミングで使うべきなんだよね。お父さんが亡くなつた時のような嵐の日に食べ物が無い時とか、ちつとも魚が取れない時とか……。

そういうときにぬしさまを呼ぶなら、いいのかもしれないね。普段から呼んじやダメなんだ。

「やっぱりアーミアさんは正しい方です」

「……そうでしょうか。今のは完全に、ごくごく普通の人間には受け入れられない言葉です。正論かも知れませんが、人間というものは常に正論ばかりでは生きていけない。実際ツオでは漁で死人が出たばかりです。漁をしなくて良いならしたくないと思つて当然のこと」

いいえ、それは分かっているのです。でもアーミアさんは言つてくださった。腐敗の先には破滅があると。天使様は人間を守護し、見守つてくださっているのだから知らないはずはないのです。

ですが、きちんと言つてくださった。それが嬉しくて。

それは私が肯定されたことと同義なのですから。

「私、家で魔法使いの真似事だけやっていけば生きていけたんです」

「真似事ですか？」

「まあせいぜいメラとかが使えればいくらいつてことですよ。昔はそれなりに高名な魔術師の家系でしたが、とつくに墮落しきつて名声だけになっていました。」

私は兄さんがいましたから、それから目覚めることが出来ましたが、親はもうだめで

しようね。金持ち相手に本当に効くかもわからないまじないをして、そして、のうのと生きているんです」

「なるほど……」

私はかつて自らを恥じました。ですから僧侶になつて悔い改めたかつた。しかし今はそうではありません。アーミアスさんの力になることが出来ればそれでいいのです。それこそが懺悔かもしれません。いいえ、それこそがつぐないなのです。

月のあかりがアーミアスさんの髪の毛に反射して、陽の光を浴びた時のように銀色に輝いていて、私はうっとり見つめます。ああ天使様。お導きをくださる天使様。

夜空よりも美しいその瞳を縁取る銀のまつげが、ゆつくりと瞬きました。私はそれを見逃すまいと必死になります。

「確かに未来はないでしょうね。メルティ、あなたは正しいです。とても。そのような定められたような道から向き直ることのできたあなたは強い。俺だってそう生まれついたならそう生きてしまうかもしれません」

「そんなことはありませんよ！」

まさか！ アーミアスさんはわざわざ地上に来て下さっている、そして救いの手を差し伸べて下さっている！ ほかの天使様はどうなのですか！ 明らかに飛びぬけて慈悲深く、徳の高い天使様じゃありませんか！ そんなアーミアスさんが、まさか！

「天使というのは、上の存在に決して逆らえないのですよ。まさしく神の僕です。死ぬと言われたら間違ひなく死ぬでしょう。そう生まれついでいるのです。違う生き方をしようとは普通考えないものなのです。ですからメルティ、あなたは強い」

アーミアスさんはそう言いながらも、祈っても助けてくださらないほかの天使様と違つて直々に人間界に降り、私たち人間を救つてくださっているじゃありませんか。私を導いてくださり、人々のために動いてくださる。ですからその普通には当てはまつていないのです。

しかしアーミアスさんは謙遜がお上手ですから、私はもう何も言いませんでした。

今日の昼間だつて、転職したてで慣れていないというのに何度かマティカをかばつていましたね。だから私は魔力を思う存分解放しましたよ。さつきだつて、迷える少女に適切なお言葉を掛けました。きっと彼女の言葉は村長には受け入れられないでしょう。でも、助けを求められたら助太刀に行くのでしょうか？

ああなんて素晴らしい方。ご自分に厳しい方。

静かな海を見つめながら、アーミアスさんはぽつりと言いました。

「しかし、この村の現状は守護天使としてはある種の理想なのですよ」

「……」

「死の危険なく糧を得ている。魔物が襲つてくることもない。栄養状態がいいですから

病気にもそうそうならないでしょう。悲しい死はあまりありません。人々は穏やかに過ごせます」

「……そうですね」

理想だと語りながらも、アーミアスさんの目は悲しみに染まっています。

「これはいつの時代かわからない話なのですが、完全な守護をおこなった天使がいたのですよ。食べ物も、水も、服も用意して、魔物の退治もすべてやってのけたのです。人々は天使に感謝し、神に敬虔になり、争いもなく幸せになりました。しかし、そこはあつけなく滅びました」

「天使様が、そこを墮落だと断じたのですか？」

「いいえ。何百年もそこにいた天使はどうとうある日、天使界に戻らなければならなくなりました。食べ物も、水も、服も用意できるだけ用意して、結界を厳重に貼って帰ったそうです。ですが、あの理想郷はたったの十年だけ天使界にいただけなのに滅びました」

十年あれば滅ぶのには十分なのですが、アーミアスさんの感覚からすれば十年は瞬きのようなものなのでしょうね。食べ物だってそんなに持ちませんのに。

ええ、墮落し、生きるだけになり、天使様の助けを受けるだけでお導きに従って自らを研鑽しない人間なんて私は滅んでしまえと思います。だってそうでしょう、天使様は

その身を張って私たちを守護してくださいるのに人間はその背に隠れるだけだと思いますか？

美しく優しい天使様の手を煩わせることがなくなるこそ理想なのでは？

「彼ら人間は何も出来なくなっていたのです。結界は無事でしたが、食べ物はどうやって作るかも知らない、井戸が枯れた時どのように新しい井戸を掘ればいいのかも知らない、身にまとっている服が何で出来ているかも知らない彼らはそのまま緩やかに死に絶えていました。」

天使はそれからひっそりと人間を守護することに決めました。特に食べ物については鳥やイノシシを追い払う以上のことはしませんね。天使はあくまで守護者であり、彼らを雛鳥に無理やり仕立て上げる親鳥ではないのですから」

アーミアさんは話しすぎましたと言って、宿屋の扉を開きました。

私は、私はいえ、その慈愛と悲哀の瞳にすっかり心を奪われながら、美しい天使様のかんばせをしつかり目に焼き付けておやすみなさいをやつとのことだけで言っただけです。その悲愴な事実に関心を打たれることすらできないのです。

美しく、慈悲深く、人間を守護し、見守ってくださいる天使様。かの行動は天使の使命なのだとおっしゃいますが、ではなぜ、アーミアさんは地上で仲間の方と出会わないのでしょうか。私たちには見えないかもしれませんが、アーミアさんにそうではないは

ずなのに。少なくとも妖精とは話すのですから天使様同士でも話すのでは？

やはり、ここにいらつしやるアーミアスさんが最も天使として素晴らしいからなのでは？ そのお導きに預かっている今はなんて素晴らしいのでしょうか！

私は確信し、布団を蹴飛ばしているマテイカに布団をかけてから眠りました。兄さんも蹴飛ばしていましたが、分ならず屋なのでお腹にだけかけておきました。

49話 浅知恵

「おはようございます、みなさん。さて、今日はどうしましょうかね」

「船が出ないみたいだから、外で修行しようよ!」

「それについては同意です。完璧なヒーラーになつて見せます!」

ヒーラーつて、あなたは僧侶ですよ兄さん。信仰心がないのもいい加減にしてください。いくら家が完全に教会の悪いところを掃き集めたところだとしても。あなたは慈愛の心を持つて人々を癒し、導き、神の教えに忠実な修行の身であつて……。こほん。

あんな兄さんの言葉にもアーミアスさんは眉一つ動かさずにしてらっしゃる寛大さにもつと感謝したらどうなんですか。つまり私たちが天使様を疎かにされたような気持ち、神を軽く見たその言葉によつてアーミアスさんが味わっているわけですよ。

「私はオリガさんのところに行つてからにすべきだと思ひます。昨日の様子ではきつと、すげなく断られているでしょうから、心配です」

アーミアスさんは頷き、私の案を取りました。ところが彼女にはいませんし、村人いわく、今日は村長直々にぬしさまを呼ばない日にしたらしいのです。ですから浜にもいません。

一日くらいはなんとかなるらしく、話があるということで村人からはのほほんとした答えしかありませんでしたが、まあいいでしょう。

ですが、村長の家にもいませんし。どこで話すというのでしょうか？

すると、オリガさんくらいの年齢の身なりの良い少年が私たちを見てやってきました。

「……旅人さん？ オリガと昨日話してたよね？」

「ええ、そうですが。彼女がどこにいるかご存知ですか？」

「パパが、オリガがもうぬしさまを呼びたくないって言ったら、プライベートビーチに連れて行っちゃったんだ。あのね、なんだか嫌な予感がするんだ。だから、その、見てきてほしいんだ、旅人さん！」

「プライベートビーチに？」

子どもだから信用していい、信用してはならないということはないですが、なんとなく信じてもいい気がします。プライベートビーチということは他人は入ってこれないところでしょうから、なにがあつたとしても助けを求める声は届かないはず。

あの小さい子をそんな目危険な目にあわせるわけにはいきません。久しぶりに私にも情が湧きましたから。

ああ、アーミアスさんについて行って良かった。アーミアスさんなら必ず、必ず彼女

の身を案じる方ですから！

「洞窟の向こうにあるんだけど、洞窟に魔物が出るからオリガ、一人で帰ってこれないよ……」

「分かりました。危険そうですし、みんな連れて帰ってきますよ」

「ありがとう！ あつ、僕はトト！ オリガに言ったら、分かってくれるよ！」

「分かりました、トト。俺はアーミアスといいます。もし誰かにこのことを咎められたのなら旅人が勝手にしたということにしておくのと良いでしょう。では、みなさん、いきましようか」

籠手をはめた手が少年の頭を撫で、少年の手によって村の奥の木の扉の鍵が開かれました。

少し浜を歩いたその先の洞窟は想定よりも深く広く、なるほど戦うことも出来ない少女一人では歩いて帰ることすら困難でしょう。その上外よりも強い魔物までいます。

急いで向かわなければいなくなっているかも知からないのです。魔物はやむを得ない場合以外は倒さず、追い払うように進んでいきましたが、強い魔物というのは早々逃げたりしません。結局戦うはめになり、それによって経験を積むことは出来ましたが、時間はどうしてもかかってしまいます。

内部の複雑な入り組み方にも原因があります。足を取られる深さの水を避けて飛び

石を頼りに進んでいても足場は悪いですし、そんな状況で魔物と戦っているのですから、疲労もします。

しかしアーミアスさんはまるで道が分かっているかのように進まれているので迷うことはありません。

普段は私たちが置いていかれないように五感の足並みを揃えてくださっているのでしょう。しかし天使様として見過ごせない時は存分にその力を発揮してください……こんな時じゃなければ拜んでいるところでしたよ！ ああなんと素晴らしい！

それにしても。会ったこともないツオの村長は、聞いている限り自分の身を可愛く思うという点では普通の人間です。ですから、腕のいい護衛を連れてくるはず。オリガさんは無事なはずです。ええ、現状に流されることなくきちんと声をあげることができる強い子なので、無事ですよ。

それに、村長にとってオリガさんは失いたくない存在でしょうから。ええ、それは喜ばしくなくても、彼女の身を守るなら、それで良いのです。……と、アーミアスさんから言うでしょうね。私ではそんな考えは持てませんよ。

私なら、アーミアスさんを煩わせることになった力がそもそもなければよかったです。思ったでしょう。彼女の心を知るまでは。しかし、私はオリガさんの心を知りました。私は、苦悩する人間に吐き捨てる言葉を持ちません。ですから、ええ、天使様のように

なれなくても、優しくありたいです。彼女には。だからこんなことは思いたくなくなつた。

この先で何が待ち受けているかわからないので作戦が変わりました。魔法を節約するために、私はもはや恐怖も躊躇もなく魔物の頭に向けて杖を振り下ろします。何度も何度も振り下ろします。魔力を奪い、その命まで奪います。

ええもう、何も怖くありません。魔物を哀れには思つても、恐怖によつて疎むことはありません！

私はきちんとしたお導きを受けています。あの手が指し示すその道をゆくことになら疑問を持ちません！ ええ、この道が正しいものであると素晴らしいことに確信でき、正しく努力することの出来る私はなんて幸福なんでしょう！

洞窟を抜け、空が見えるところまで来た。俺の予感はこの先にとんでもない存在がいるんじゃないかって囁くが、引き返すような時間はない。ガトウーザに回復は薬草を中心にするように言つて、メルティーも魔力を節約するようにしてもらい、俺たち転職組はそろそろ發揮できるような力になつた力でなんとか道を切り開く。本領發揮はまだまだ

先そうだが。

さすがに緊急事態だからな、サンデイがこつそり先回りして、道を教えてくれてるんだが、喋ってる余裕もないし黙ってやつてるから俺がなんかすげえ勤が良い奴みたいになつてね？ まあいいか、あとでサンデイには甘いものでもあげよう。妖精が人間や天使と同じものを食べられるかなんて知らないが。

もどかしく白い階段を駆け上がる。するとようやく、目の前が拓けた。

無粋な看板を無視すれば、そこは確かに独り占めしたくなる気持ちも分からないでもない、美しいビーチ。

ここにリツカたんを連れてきてみたい。ロマンチックじゃねえか。吊り橋効果でもなんでもいいから良く思われてえ……。つい思考が逸れるくらい、海と空の対比は綺麗だった。白い砂の地面と、青い空と海。その先は切り立った崖だったが、十分だ。ここで日の出を拝んでみたいぜ。

で、オリガちゃんも村長を発見したから俺たちはこそこ隠れる。護衛のやつら？ とりあえず気づかれなきゃいいだろ。気づいても話が始めれば雇い主の邪魔にならないように騒がないはずだしな。頃合を見計らって全員村に連れ帰るぞ。

後で文句言われてもまあ最悪ツオを追い出されるだけだしな。

とにかくなんか話してるみたいだ。そのために連れてきたんだろうし、流石にそれを

邪魔する気はない。とつとと話してくれ。トトが心配しているはずだ。

美しい空、穏やかな海。だというのに俺はなんとなく、胸が嫌な感じに波打って、居心地が悪かった。嫌な予感というやつだろうか。

50話 愚計

「どうだ、綺麗な場所だろう。ここならゆっくり話せると思つてな」

おっさんといきたいけな少女という組み合わせでなければ俺もゆっくり出来たんだがな。お前、もしかしてペロリスト・邪か？ たまにいるんだよな、偉大なる初代ペロリストのような素晴らしく謙虚な人物と違つて相手を不快にしてまでペロペロする困つたやつが……。

邪悪なペロリストには天罰という名の拳だからな。相手の気持ちがわからない幼き者には夢枕にでも立つ能力が欲しくなってくるぜ。

もちろん夢の中でこんこんと相手の気持ちを考えて行動することによつて互いに平和に過ごせるのだということを説くためにな。もちろん、ペロリズムにも考慮はするぜ？ 頭の中で考える分には自由だとも話すさ。リツカたんを思う存分ペロペロするのが許されるのは俺の心が自由だからさ。

俺の心は天使の理にガツチリ縛られない限り常に天使を辞めたがり、人間たちと同じ時を歩みたがり、リツカたんをなによりも大好きに思つてるんだからな！

てかこいつオリガちゃんの肩をぼんつとしたな。ふむ。こいつは疑惑の判定。

ところでこの肩タッチはどう判断すればいい？ 俺もトト少年の頭を撫でたくらいだしソフトタッチはセーフでいいのか？ それともこいつをしょっぱいたあと俺もシヨタコンとしてしょっぱかれるべきなのか？ 俺の年齢からするとおじいさんに触れてもシヨタコンになるが。それはまあ関係ないか。

とりあえず俺が幼き者へ邪な心を持つているのは確かだしな……。い、いや断じてさつきは健気でかわいいなーと思っただけで、邪な気持ちで撫でたんじゃないからな！
かわいいなーって、それこそが邪な気持ちか！ 別に、頭が触りたかつたわけじゃねえから！ せめて安心してくれよなー、本当に人間はかわいいなーくらいの軽い気持ちだからな！

で、この村長は邪なんじゃないか？ と、疑うのは良くないが、オリガちゃんはずつごく可愛い女の子で、健気で、優しく、特に守りたいような子だ。可愛くて無垢な存在を人間も天使も神も好むからなあ。それが一種の「さが」とはいえ許されることではないだろうが。自己天罰すべきなのかもな。

まあ待て、俺はただの人間大好きな真摯なペロリストでつまり、たとえ姿が見えなくともパンツは覗かない紳士なのでリツカさんに恥ずべきことは何もしていない。ゆえにセーフ。見えたらラッキー、それだけだからな！

よし、俺はまだ地上にいたい。ここはセーフにしておいてやる。タッチについてはオ

リガちゃんが嫌がったらアウトだ。そうだ、相手が嫌そうならアウトでそうじゃなきやセーフなんだ。そうだろ？ さっきのはセーフ、これもとりあえずセーフだ。

「このところ祈つてばかりでお前は疲れてしまったんだろう、うん……仕方ない。浜でお祈りをするのもうやめようか」

お？ こいつ名村長？

「村人にはワシから、お前の力は消えたのだと言っておこう」

「村長さま……」

やべえ俺、完全に先走ったんじゃない？ これは頃合を見計らって連れて帰るよりも、頃合を見計らって隠れて護衛を遠くから見守りながら帰る方が正しい。俺の心が汚れていた。すまねえ。

人間はいつまでも幼い存在ではないと、改めて学ぶことになるとは。俺もまだまだ人間に対して真摯になりきれしていない天使なんだな。人間に俺はいつも学ばせてもらっていたじゃないか。

「それでだなオリガよ。お祈りは浜ではなくここでこっそりしようではないか」

「……」

やつばなし。やつばさっきの撤回。きな臭い。こいつは邪悪なペロリストだ。可愛い子にタッチ罪だ。悔い改めろ。安心しろ、お前も天使から見れば可愛い人間だ。だが

考えてみる、いたいけな少女にとつてお前は欠片も可愛くないおじさんだ。可愛い子に恐怖を与えるような行為はするんじゃないやねえ。

「海の底には珊瑚や真珠、沈んだ船の宝があるだろう？ お前ならそれをぬしさまに持つてきてもらうこともできるのではないか？」

お前は可愛い子にタツチ罪現行犯で天罰だ。拳骨は頭にしておいてやる。

なんで人間とか一部の魔物は光り物が好きなんだ？ あんなもの食えねえじゃねえか。病気が治るわけでもねえし。魚を欲しがるのはわかるが、なんでそんなもの欲しがるんだ？ 貨幣経済は分かかってるぜ。価値があるのも、わかっている。

だがそもそも、なんで欲しいんだ？

俺は誰かの幸せの方がずっと嬉しいし、飢えずに済んだ人間たちの安堵を見ているとこつちまで腹一杯になって満たされる。天使というのは根本的に人間と感性が違うんだろう。それも理解している。だからこそ、愛する人間たちよ、どうしてそんなもの欲しがるんだ。それが知りたい。リツカたんも好きなんだろうか？

その財宝とやらは何かを産むのか？

今回に至っては可愛い子の顔が曇ってるし、嫌がってるじゃねえか。負しか生んでねえ。しかも今、こつそりって言ったな？

今は魚を村全体で分け合っているのに独り占めするってことだろ？ このビーチ

たいに。

背中が煤けちまいそうだぜ。俺の顔がいつにもまして歪んでるがこればかりは許してくれ。俺は、人間を処罰するための存在ではなく、人間の健やかな命を陰ながら守護する機構だ。装置みたいなものだ。

だから、この俺の感情が正しいのか間違っているのかは分からねえ。分からねえけど、今、俺はオリガちゃんを守るべきなんだ。そうだろう、いつだって神も天使も蟲屑三昧だ。いつだって俺は自分の判断で無垢なる者を守ってきた。

オリガちゃんが村長の手を振り払った。有罪確定だ。思いっきり嫌がつてるじゃねえか。ロリへのノータッチを守れ！ その原則を守れない悪い子には天罰だな！

「財宝?! 村長さまは何をおっしゃるのですか!」

「慌てるでない。たまにでいいのだ。お前が気が向いた時だけで」

「……あの手の輩が、あんな口約束を守った試しがない」

「おれもそう思うよ」

ガトウーザとマテイカにはなんか身に覚えがあるみたいだな。メルティーは最初から村長睨んでるしな。

欲望、か。欲と俗に塗れた俺が憤るのは許されるんだろうか。許されなくてもちっとばかり、むかつ腹にくるな。

「そうしてくれば、ワシらは豊かに幸せに暮らすことが出来る」

「豊かで幸せ？」

「そうだ、約束しよう。だからもう、帰ってこない父を待つのはやめなさい。これからはワシがお前の父になるう」

「ちがう……」

サンデイが俺の背中をパンツと叩いた。行けってことか。俺も飛び出してえよ。だ
がまだだ。今は、俺のような存在が口を出していい時じゃない。俺はどうやったって、
彼女たちと同じ目線じゃねえからな。遙か高みから見ているようなものだ。

だから、まだだ。もし、彼女が助けを求めるなら、もう飛び出してやるが。人間の行動
はなるべく邪魔しない。地上の生命の営み、その尊い輪廻から外れている者の鉄則だ。
身に危険が及びそうならその限りじゃないってだけでな。

「やめて！ あなたはあたしのお父さんじゃない！ あたしのお父さんは……」
……待て。

海から、怒り狂った巨大な気配が、しないか？ 邪悪な気配ではないが、こいつはま
ずい。あんな崖っぷちにいると危険だ。地面が揺れる。仲間たちより地面を歩き慣れ
ていない俺は周りが踏ん張って耐えているのにすつ転んだ。反射的に羽ばたいて転ば
ないようにしたつもりだったが、羽ばたく翼は失っていたことも失念していた。

オリガちゃんも村長も海の異変に気づいたらしい。慌てて海を見ている。おい、走れ！ こつちだ！

「アーミアス、行きなさいよ！」

サンデイがなんとか起き上がったもう一度俺の背を叩いた。俺は足をもつれさせながら駆け出す。飛び出してきた巨大なくじららしき存在は怒り狂い、何をしでかすやらわからない。こいつがどんな存在であれ、あの大ききじやあのしかからただけで死ぬ！ 彼女たちが危ねえ！

「おお、ぬしさま！ よくぞいらっしやいました！」

ぼつか野郎！ 今はそれどころじゃねえだろうが！ そいつが「ぬしさま」だろうがなんだろうが殺気は抜群、食い殺す準備は万端に見えねえのか！

俺たちは道をうまいことささぐようにおろおろしていた、村長の護衛には悪いが強引に道を開けさせてもらった。だが、こつちに連れてくるには少しばかり遠い。まだ、届かねえ。目の前の巨大な存在に目を奪われた二人はこつちに気づきそうもねえ。

「ほら早く祈りなさい、財宝を持ってきて頂かないと」

くじらは明らかに村長に向かって吼えた。まづい。今の言葉はどう考えても怒らせてるだろう！ 後ずさりする村長と、呆然とするオリガちゃん。俺の手は届かない。俺に翼があれば、届いたのに。

翼を疎んできた自分が憎い！

そして、目の前でオリガちゃん、呆然として、身動きも取れないまま、丸呑みにされた。

「……………」

反射的に剣を引き抜く。相手が「ぬしさま」と呼ばれるような神聖な存在であつても、これはさすがに守護天使として見過ごせねえ！

腰が抜けた村長？ マティカが後ろに投げ飛ばした。あの程度では酷くても打ち身程度で済む。巻き込まれた方が重傷になるだろうから許せ。

「オリガさんを離しなさい！」

くじらは、いや、「ぬしさま」は現れた俺たちにも村長へ向けたものと同じ憎悪を向け、激しく吼えた。俺は立ち竦みそうになる足をなんとか踏ん張り、剣に炎を宿して斬りかかる。威嚇の一撃は退こうともせず、むしろ殺意によって飛び出してきたことによつて突き刺さつた。

背後から飛び出してきたマティカも同じように火炎斬りを叩き込んだものの、直後、俺たちは激しい水に押し流された。俺は崖の方に引きずり込まれそうになるのに踏ん張る力もなく、ただ地面に剣を突き刺して耐えることしか出来なかつた。「ぬしさま」が呼んだのか。天災を操れるような存在なのか！

本能では引き返せと叫んでいる。俺はそんなビビりよりも胸の内からこみあげる、人間を救うために何としてでも行動しろと訴える声の方に耳を貸す。

この憎悪はなぜ俺たちにも向いているのだろうか。村長の仲間だと思われているのだろうか。オリガちゃんを食べた「ぬしさま」は、何を思っているのだろうか。考える、考える、しかし理解不能。

ただ、分かったのはな。話しても分かつてもしない敵もいるってことだ。俺が何を言おうがこいつは聞きもしないだろうよ。話せるのは袋叩きにしてオリガちゃんを取り戻してからだろうな。

51話 奪

天使だから特別強いとかいうことはない。ただ、天使にはたまに人智を超える力を持つやつもいる。もちろん最初からそうだったわけじゃねえ。外見が若くてもそういう天使は何百年も生きているから、経験の賜物が言うだけのことだ。

俺の年齢から考えてみれば普通の人間に毛が生えた程度だつてことが分かるだろ？ それにウォル口の周辺は魔物が弱くて穏やかな地方だ。わざわざひよっこ天使を強い魔物の巣に放り込むような非天使道的なことをするような師匠じゃねえし。

決して強くない俺は立つ。俺は戦う。それは人間たちの安寧のためであり、俺のためだ。人間たちの幸せは俺の幸せであり、彼、彼女たちの不幸は俺の咎。

そういう風に最初からできてやがる。それを嘆くことはねえ。どう言い繕っても人間の笑顔のためだけに命を投げ出せるし、それが俺にとつても幸せだからだ。人間たちを通さなければ幸せにもなれない輪廻の外の、存在だ。なにせ俺には来世はない。星になるだけ。前世ももちろんないだろう。星屑の記憶から生まれたような、神の下僕が俺たち天使だ。

俺はどうしようもなくそういう風にできてやがるんだ。俺たちは、俺は、生き物とい

うよりも明らかに機構だ。そうだろ？ 命を最優先にしない生き物なんて、子孫を残せない存在なんて、肉と血でできた「からくり」や「しかけ」だ。

間違いなく幾度もかばった体で攻撃を受けたらやばい。そう確信しながら俺が飛び出すのをやめられないのもきつと、俺が人間たちのことを愛しているからではなく、そういう風にしかなれない存在だからだ。

俺が、人一倍、いや天使一倍か、人間のことが大好きな天使だからってだけの理由なら嬉しいんだがな！ 強制されているなら胸糞悪い！ 効率的じゃねえだろ、ここは生き延びさせてくれよ、神よ！ もつと沢山救わせろ！ 俺がもつと丈夫なら話は違ってきたんだぜ？ なぜ俺は弱いんだ、なぜ！

この戦いが終わったらリツカたんのところに帰るんだからな！

というか相手の攻撃力が高すぎて魔法使いや僧侶が被弾してから津波がきたらマジでやばいから！ バトルマスター？ ついでにかばわれとけ！ 回復は全体にできない現状なら一人回復してる方が楽だろ！

メルティーの悲鳴。大丈夫だ、痛みによるものではなく、目の前で俺の腹部がえぐれたからだ。トラウマを植え付けちゃったならすまねえ。ドでかいくじらに腹をついばまれる同年代の外見の野郎なんて見たかないだろうな。その上イケメンならこういう場面でも絵になるらしい。こんなところで格差社会！

俺にもっと太い眉をくれ！ 俺の肌がなまっ白いのが悪い、小麦色の肌になりてえ！ 目力が足りねえんだ、覇気のない目よりも迫力あるつり目になりてえな！ そして何よりホコリと同じ色をした髪の毛が悪い！ 灰色以外なら何だつて良かったのによ！

俺は激痛をもたらす「ぬしさま」に唾を吐きかけてやりたいが、外面が悪いんで堪えながら、必死で睨みつけた。そんなことしたくたつて口から真つ赤なトマトジュースが降り掛かっている気がするが、まあ不可抗力はガラ悪くはないだろう！

「ぬしさま」。ツオに海の恵みをもたらす存在。だが今は間違いなく人間たちの敵だ。まあこいつくじらだし、なんらかの感覚で俺のことを天使とわかつて食つてるならいいが、俺を普通に人間だと思つて食つてるなら災害指定してやる！ 俺よりもすげえ歴戦の上級天使の討伐隊を組む様にオムイ様に進言してやる！

だが今は！ オリガちゃんを返すまでは俺は退かねえからな。腹を食われたまま俺は剣を突き立てた。何、この巨体だ。これぐらいじゃ俺と違って少々痛いだけだろ。死にやしねえ。

抵抗するように津波が押し寄せる。もう足を取られることはない。打ち寄せる波によつてダメージを受けても呼び寄せている存在に思いつき組み付いているからな。

はは、クソ痛てえ。ガトウーザの回復が届くたびに牙が食い込んで腹に大穴が開きやがる。足元を見なくても俺とこいつの血で赤い水たまりが出来ることがわかるぜ。

くじらって臼歯ですり潰すように食べるんじゃないのか？ こいつ肉食の……捕食種の種類なのか？ 随分牙がご立派なことだ。ますますオリガちゃんの無事が気になる。てかせっかく食った朝飯全部食われちゃまったんじゃないか？ 大した量ないけどな。だがかうして俺が抑えている限り仲間たちには遠距離攻撃しかいかねえってことだろ？

なあ？ 人外同士仲良くしようぜ。人間にはそれぞれ手を出さないってことで手を打とうぜ？

ほら見とけ、俺を抜いても三対一だ。分が悪いぞ、早くオリガちゃんを離せ。メルティーからルカニが降り注いでいて不利になっていくぞ？ 俺の攻撃も結構痛くなってきたんじゃないのか？ 俺もそろそろ臍物あたりを攻撃されるのは勘弁だしな。なあ？

鈍い音を立てて「ぬしさま」の顔がマティカに何度も何度もド突かれている。何も剣を捨てて考えなしに特攻しているわけじゃないだろう。あれはあれでなにかの技っぽい。

いいな、あれ。本当にむかつくやつには拳で殴るって決めてるからな。いつかぶん殴ってやりたいほどむかつく野郎が現れたときのためにあれだけは覚えておきてえな。てかあれ、まだ武闘家抜けてねえよな？ 普通に強い技だしまあいいか。マティカの魔力はすべて戦闘力に変換だしな。

人間も天使も基本構造には変わりはない。痛みでハイの俺は疲労も痛みもだんだん慣れてきて、頭が冴え、素晴らしく周りのはつきりゆっくり見えた。

そして剣を突き刺したり殴りつけたりと死ぬ気配なく暴れまくる俺を「ぬしさま」は離れた方がいいとやっと気づいたらしい。ペっと剣ともども吐き捨てられた。俺はいえ、我ながら見事な生命力によって地面に叩きつけられても生き残り、若干遅い解放にむしやくしやししながら、跳ね起きて構えをとる。

傷は駆け寄って来たガトウーザによってじわじわ塞がりつつあるし、まあいけるだろ。腹はとりあえず中身ぶちまけなきやいいんじゃね。世話をかけたガトウーザも後でサンデイと一緒に甘い菓子やるよ。ていうか俺の腹の中身を見るハメになった幼い子にはアフターケアだ。みんな食ってけ。

味はそこそこ保証するぜ？ 何せパンと比べても量も値段も可愛くないやつだからな。セントシユタインで見つけたんだが、あれって多分貴族とかそういうやつが食うんじゃない？ まあいい、俺は人間より食費がかからねえから金は浮いてる。人間が好きそうなた味だったな。あそこまで甘くなくてもいいだろうに。だがだからこそ、詫びにはふさわしい。

俺からわずかに距離を置いて見定めるような「ぬしさま」と睨み合いをしていると、サンデイがすっ飛んできた。俺が解放されるのを待っていたんだな？ 賢明だ。食われ

てる時の俺の抵抗の中じゃ巻き込まれかねないからな。

「ちよつとアーミアス！ 食べられてたケド、ヤバくね？」

「サンデイ。危ないですよ」

「アタシは飛んで逃げれるし！」

「ガトウーザは優秀な人です。もうすつかり塞がってしまいました。ほら、安心なさい」

「アーミアスがやられちゃ、ニンゲン助けたって意味ないじゃん！」

「俺はやられたりしませんよ」

サンデイは優しいな。俺の心配をしてくれるなんて。天使は人間たちのためならきつとその場で朽ちることが出来るのに。……天使界に当てはまりそうにない守護天使がごまんといるのは嘆かわしい。だがこれに限ってはとやかく言えることじゃねえな。命が惜しい天使もいる。俺は惜しくない天使、それだけ。もちろんできるものなら生き残りたいが。

それでも「ぬしさま」から目はそらさない。だというのに気を悪くしないサンデイは本当に優しいな。ガングロギヤルは優しい、覚えた。それともサンデイが優しいのか？

機を逃すな。俺はサンデイが押し寄せる波から遠ざかり、巻き込まないと判断した瞬間、足の力だけで跳ぶように努めて、思いつきり斬りかかった。翼の補助はない。それを理解をすることはまだまだ難しいが、分かってやってるなら出来ないこともない。

会心の一撃だろうか。はつきりした手応えを感じ、俺と負けず劣らずたずたになつて「ぬしさま」はどうとうどうと倒れる。

俺は剣をまだ収めることなかつたし、怖かつたんだろう、俺が生きているか確かめるために後ろからぎゅっと抱きしめてくる小さく幼い子を安心させるために頭を撫でてやることはしなかつた。できなかつた。まだ警戒していた。

横倒しになった「ぬしさま」の口が少し開き、中からは無傷のオリガちゃんが出てきてくれた時は、俺は本当にほっとして、安堵のあまりうっかり俺もオリガちゃんの無事を確認するために抱きしめに行くところだった。

危ねえ。可愛い子にタツチ罪で俺も現行犯逮捕されるところだったぜ。

代わりに、俺は血まみれながらもオリガちゃんが安心できるようになるべく優しく微笑みかけた。くっついていたメルティーは俺がなにかする前にマティカに剥がされた。良くやった、俺がロリコンで逮捕されるのは免れた。

い、いや別に？ 俺は何もやましい事考えてねえけど？ メルティーってクールビューティーだからすげえ信仰心に押され気味とはいえここまで分かりやすいデレは貴重なんだぜ。それを堪能したかったわけじゃねえ。こんな懐かれるなんてもうサイコーじゃねえの？ 人間は誰でも可愛いんだ。

さて。すべての魂は等しく救われるべきである。天使界一人間好きの俺はどうし

たつて人間ばかり鼻肩しちまうが、魔物も人間も本来なら共に歩む隣人であり、友になれた存在。なんの因果かみあっているし、魔物は天使も人間も排除しようとしてくるやつが多いが、関係ねえ。その魂は等しく尊く、共に歩むために生きている。

「ぬしさま」は魔物に属する生き物に見えるが、オリガちゃんの祈りで魚という恵みをツオにもたらしていたくらいだし、心底邪悪な存在でもないだろ。だがこの強さは正直異常だ。なにせ、周りの魔物の強さからしてみれば常軌を逸した存在だ。自然にそんな存在が現れるのか？

まあ現れることは往々にしてあるんだがな。だが今回は疑おう。女神の果実がどこに転がっているのか分かったもんじゃねえんだ、「ぬしさま」に関してもその線を疑っても損はねえ。

てか気づいたんだが、村長が可愛い子にタツチ罪なら「ぬしさま」とかアウトにも程がある。可愛い子を食べちゃいたい気持ちは分かるけどな！ 本当に食うとか、ないわ！ リアルペロリズムを許容するわけにはいかねえわ！

「あたし……なんともない……」

「オリガさん」

「アーミアスさん、わっ、怪我してますよ！」

「今は俺のことはいいですから。離れましょう、とにかく」

オリガちゃんが頷く。すると「ぬしさま」が起き上がって、俺を思いつきり威嚇した。幸いまだまだハイになっている俺は臆することなくオリガちゃんを背後にかばうことに成功した。次食うなら俺にしておけ！

「あなたはオリガさんに恐怖を与えていることを理解しているのですか！」

恐らく、「ぬしさま」というのはオリガちゃんのこと大好きなんだろう。健気で可愛い、一生懸命な子だ。よく理解できる。中途半端な心を持った生命体はそういった無垢な存在に惹かれるものなのだろうか。

分かるが許さない。誰だって巨大なくじらに食べられて気分がいいわけがない！

「大きな生物に食べられて、口の中でいくら怪我していかないからといって恐怖がないとお思いですか！ あなたがオリガさんを大切に思っているなら出直しなさい！」

……なにやら様子が変わった。俺の言葉が響いたようには見えねえけど。言葉が通じるなら苦労はしねえよ。最初から敵だとみなしている相手の言葉をほいほい聞くわけねえし。まあ、言語という意味なら通じているんだだろうが。

オリガちゃんをマティカにでも託してツオまで運んでもらった方がいいだろうか。もう一戦となると流石に底いながらやれそうにねえ。いっそ全員で逃げるのも手か。

だめだ、「ぬしさま」なら、ツオの浜までひと泳ぎ、逃げることは出来ねえ。

閑話 導業

天使様の存在を疑うなんて、この目であの美貌、あの慈悲、あの献身、あの瞳を目にした今、ありえません。それでも、こうして見るとはつきりと、かの方は「ヒトではない」のだなあ、と思うのです。

天使様はヒトではない。天使様は天使様だから。ええ。そうでしょう？　ですから、つまり、彼ら……少なくとも彼は、私を慈しんでくださり、同時に私を通して人間を見る。

それは悲しいほど大きな距離であり、私たちはそれゆえに守られてきたのでしよう。神はどうして天使様を創ったのでしょうか。どうして人間には使命を与えなかったのでしょうか。天使様は、いいえ、アーミアスさんは、今日も私たちにその手を差し伸べ、救いと導きを与え、そして微笑むのです。

その微笑みは父や兄の愛情ではなく、もつと大きな、慈悲です。きつと、愛ですらなく、それは慈悲なのです。

それでも、彼は愛そうとしてくれます。

今日も道を誤りそうな兄の首根っこを掴み、集中力のない少年が迷子にならないように見張る日々。ああどちらが兄で、どちらが姉なのでしょう。年齢は実は同じです。少年は明確に年下ですからまあいいでしょう。

はい、今日も今をときめくメルティーです。

今はときめいていますが、なにぶん今日は、というよりも明日はやることもなく休みなのです。アーミアスさんは私たちには身に余るほど優しい。ですからこうして休みを定期的にくださいます。ルーイダの酒場に登録された人間としても破格の待遇です。

休みだから、何をしてもいいと言われます。一応セントシユタインの中にはいてほしいとは言われましたが、それだけです。

休むことなく私たちを護衛に使ったり、延々とメタル狩りをさせたりする……そんな依頼主もいるらしいのですが、優しさと気遣いに溢れているアーミアスさんは違います。

曰く、この待遇はその分未知数の死闘を経験しなければならぬ可能性もあるからだと思いますが、私はその程度試練でも苦でもないですね。兄さんもそうでしょうし、少年もそう思っています。ですから過ぎたる厚遇なのです。

しかし、確かに皆さんくたびれ果てていますし、アーミアスさんが休まれるなら反対する余地はありません。休んでこそ力を発揮できるのです、そう言われたらもう反論できませんよ。

何をしても良いならば、アーミアスさんの秘められた私生活についてつい、気になつて張り付いても仕方ないのではないのでしょうか。やはり私、聖職者にはなれそうにないですね？

というのは冗談です。半分ほど。ストーリーカーをしたいわけではありません。これは真つ当な、至極もつともな探求でございます。

アーミアスさんが天使様であるということに疑いはございません。しかし、天使様とというのは、具体的にどう人間と違うのでしょうか？ あのかたを見るに、相当何か、根本的なところから違うのでは？

聞きこみ調査の結果、アーミアスさんは大地震の際に天使界からウオル口村に落ちてきて、その際大怪我を負い、翼と光輪を失われたことを知りました。輪がないので私たちにもそのお姿を拝むことが出来るのです。

翼なき天使様、つまり外見は一応、私たちと同じように手足がある姿なのです。

ええもちろん、お顔を拝見しただけで天使様と間違はなくわかるのですが、二本の脚、二本の腕、二つの目、という意味です。その点では人間と変わりがないのです。

であるからして、その普段の生活に、どのような違いがあるのでしょうか？ 具体的には、天使様とはいえ同じくらいの年齢の肉体の持ち主に見えますから、同じように食物を摂取し、眠り、成長するのでしょうか？

しかし、アーミアスさんの言動はたかだか十五、十六、十七程度の人間のものではありません。当然のことですが。恐らく外見に一切の変化がないか、とてもゆつくりと歳を取られるのだと思います。食べ物だつて沢山はお召し上がりにならないし、朝、彼より早く起きられたことはないのです。私は早起きなんですけどね。

つまり、同じような見た目の体を持つているのに食べる量も寝る時間も違う。それはもう、根本的な違いがあるからなのでしょう。例えば、その寿命も……そうですね、そもそも死の概念がないのでは？

いくら「慈悲深い」からといって、死を恐れる生き物が自らの命を張るような真似ができるのでしょうか？ 私はとても怖いのに。これはアーミアスさんが素晴らしいから、と思考停止してはいけないことです。きつと、慈しまれる心を誰よりもお持ちです。でも、私たちは要因を知るべきなのです。

なので、張り付きます。明日の休みをすべて使つて。

ええ、ですから私は強くなるのですよ。強くなつて、きつと、アーミアスさんが私たちを守らなくても安心して穏やかな日々を過ごされるようにしなくては。

今まで散々守護をされてきたのでしようから、人間は報いなければなりません。その為には事実を知らなければならぬのです！ だから秘められた私生活について覗き見をすることはストーカーではないのです！

ええ、兄さんにバレたら同行者が増えるでしょうね、ですから道を誤っているのは私の方なのかもしれませんけどね！

さて理由はもう十分でしょう。私はこの日のためにアーミアスさんの隣の部屋を陣取り、眠気覚まし濃いコーヒーをしこたま用意しました。眠るのは明日の夜です。今日はずっと張り付きましょう。

物音ひとつしない隣の部屋。きつと早々にお休みになられているでしょう。私は魔法の修練のためにいろいろと書き物をしながら、隣の部屋の音に気を配っています。私はずっと張り付きまわりました。

静かです。下の酒場からの喧騒が僅かに聞こえていますが、この宿泊のフロアはとても静かです。勉強も捗りますね。ええ、アーミアスさんもお休みですからきつととても穏やかな時間なのです。

じりじりと揺れるろうそくの火に照らされ、整えられた部屋の中、繰り返して繰り返して魔法をいかにして業火に変えるかをイメージトレーニングし、理論を書き取ります。これをもののできればきつと私は役に立てるでしょう。

私はしばらく、集中しました。

そして、おそらく、アーミアスさんが眠りについてから三時間ほど経つと、ようやくかたん、と小さな音が聞こえました。

私は素早くペンを置くと、くすんだ色のフードの服を被り、身構えます。夜闇に紛れて尾行するためです。

ガチャンと隣の部屋の開く音。階段を降りていく小さな足音を聞いてから私もそつと部屋を抜け出しました。コーヒーをあおるのももちろん忘れません。眠気は既にありませんが念には念を入れましょう。

外は深夜。静まり返るセントシユタインの町並は故郷サンマロウと同じく整然とした美しさを持っています。郷愁めいた感情を覚えながら、月の光に輝く銀の光を追います。アーミアスさんの髪は光に透かされるといつも言い表せないくらいにきらきら輝いていてとても綺麗です。これぞ天使の奇跡なのですね。

そして……着いた先は、墓地でした。

アーミアスさんはウォル口村の守護天使様ですから、見知った人がここに葬られているとは思わないのですが。まあ憶測ですので、翼がある頃にはここに飛んでいらつしやつたのかもしれませんが。

周囲の遮蔽物といえば民家くらいしかありません。窓側でなく、アーミアスさんから

見えず、大通りからも見えにくい位置なんてありませんが、とりあえずアーミアスさんにバレなければよいのです。私は足音を消せるだけ消してこっそり近づき、隠れました。

幸いにもアーミアスさんは目の前の「なにか」との会話に集中なさっていたので気づかれませんでした。

私はその会話を聞こうとしましたが、なにぶん距離があります。これ以上近づいては隠密が得意な盗賊ではない私では、流石に気づかれてしまうでしょう。

しっかりとフードを被り、アーミアスさんからは決して見えないように気をつけながらも目はしっかりと開きます。銀の光に照らされると、月の翼を背中に持っているような、そう幻視してしまうほど神々しいお姿になることを知れたのは素晴らしいことです。ええ、貴重な機会ですから、しっかりと見つめることに専念しました。こんなこと、普段はできませんからね。貴重なチャンスなのです。

ええ私、ストーリーカーではないですから。普段からこんなことをして寝不足になれば、魔法のキレが悪くなってしまうと思います。お役に立てないならば私が同行する意味はないではありませんか。その辺りは心得ておりますとも。

と、アーミアスさんが話すのをやめた途端、緑色の清浄な光があたりに溢れ、「なにか」が解き放たれた、と直感しました。

ええ、これはベクセリアでもあったような光。ここは墓地です。そして天使様なら人間も、死者も同じように見える……と、私たちは思っていました。こうして誰もいないところでの会話を見ると、妖精だけではなく、死者も見えるということがはつきりわかります。

天へ導いてくださったのでしょうか。彷徨える者に、安寧を与えてくださったのでしょうか。道を指し示し、安心して天へ昇っていった幸福な人の感謝の光なのでしょうか。

息をするのも忘れて、その光が闇に溶けていくのを見つめていました。跪き、祈りを捧げる姿を神々しく、眩しく。

ああ、私もああやって溶けるように消えてしまいたい。あの美しく優しい天使様に導かれて、見守られて、罪から解放され、刹那の光となって、そして終われたらどれだけ幸せでしょう。

しばらくそのまま、風の音だけが聞こえていましたが、しばらくして立ち上がり、足取りがどことなく重いアーミアスさんが、私のすぐ横を通り抜けていく時は流石に緊張しました。

せめて、気づかれないようにとさらに小さく縮こまりながらもその月明かりに照らされた横顔を見つめていると、どうしてか泣いているように見えたのです。

いいえ、「よう」ではなく。私は、たしかに、涙のしずくが顎を伝って落ちるのを見たのです。乾いた石畳に音もなく落ちていったしずくは溶けるように消え、誰もいなくなつた墓地には淡い不思議な光だけが残っていました。

その光は小さな羽根のようでした。ええ、きつと、天使様の今は無い翼からこぼれ落ちた涙。私はそれを尊いものだと信じて触れずに、宿に戻りました。

閑話 子天使

宿にもどると酒場の住人が揃いも揃って部屋に引き上げていて、静かな酒場という不思議な光景が見られましたが、そんなことよりもぼつんとテーブルに残り、ぼんやりとした目をして、頬杖をつくアーミアスさんに見つかってしまったことが問題です。

ええ、私、ドアから入った瞬間に見つけられ、にこやかに手招きされてしまつてはもう、逃げも隠れもできませんよ。

てつきり部屋に戻っているとばかり。しかし、恐らく私たちほど眠らない天使様にはもう、朝も同然なのでしょう。眠そうな様子はありません。目元には僅かな赤も残っていませんから、あの涙は幻なのかしらと自分に問い直すことになりました。

「メルティ、夜の散歩ですか？ 今日月が明るくて綺麗ですよね」

普段よりもどこか柔らかい口調のアーミアスさんは私にホットミルクをくださいました。あなたの尾行のために夜更かしをして、そしてバレないように戻ってきたところ、発見されてしまったのだと口が裂けても言えません。

曖昧に頷いて、甘いミルクをいただきました。甘くて美味しい。ですがそこそこきついアルコールの風味もするよな。私は成人ですが、アーミアスさんはよろしいので

しょうか。

いえ、愚問ですよ。それこそ、何倍も年上の方です。

「なんだか不思議な味がしますね。ふわふわして、なんだか……綿のような心地になります。こういう時、雲を例えに使うのでしようが、現実の雲は冷たくて、湿っていて、ちつともふわふわしていませんから、きつと綿の布団が一番ふかふかしているのではありません」

「……」

ふわふわしているのはアーミアスさんでは？ 急に不安に駆られました。こんな……可愛いことを言う人、いえ、天使様でしたか？

思わずお顔を凝視しましたが、幸いほとんど無表情で、私の心臓は守られました。これで笑顔でしたら命が危ないところでした。

「こんな種類のミルクもあるのですね。あまくて、温かくて、綿みたいな心地で、なんだか不思議な香りがあります。ふわふわですね」

「……もしかして、酒をご存知でない？」

まさかと思いがらつい言ってしまった。するとゆるゆると首を振られました。

「酒？ 酒のことは知っていますよ。お酒は、ダメです。ええ。師匠もダメだと言っていました。俺は竜ではありませんから捧げられる理由もありません。ですから嗜んだ

ことはありません。

……これ、入ってるんですか？」

アーミアスさんの顔とカップを見比べました。頬に僅かな赤みすらありません。呂律もきちんと回っています。きつと酔っ払ってはいません。休みの日だからふわふわしているのです。そうに違いありません。

私に特別な知識はありませんが、清らかな天使様をだまして酔わせたとなると、ええ、それもこんな、神がその手で丹精込めて作り上げたような素晴らしく美しい天使様を酔わせたとなると神罰によって街が滅ぶ、くらいの神話くらいなら結構ある気がします。背筋が凍りつきました。

師匠もダメと言っていました。と、おっしゃいましたね？ アーミアスさんのお師匠様。天使の中でもきつとかなり偉い方なのでしょう。ええ、その方が禁じたのですか。私にはちっとも酔いが回りそうにありませんね。そうですか、ダメなのですか。天使様。

アーミアスさんがなんともなくて良かったです。本当に。……酔っていないならセーフですよ、神様。お願いします。まだアーミアスさんの使命をお助けしたと言っているお役に立っていません。

「ええ、かなり、いえ、少し……」

「そうなのです。酒というのはこんな不思議な心地なのです。」

そこで微笑まないでください。いえ、ご褒美には違いありませんが、今はこの国の命運がかかっています。酔っていませんよね？　ね？

「あの、これでセントシユタインの街並みが雷によつて焼かれるということはありませんよね？」

「は？」

「ええと、お酒はダメ、なのですよね？」

アーミアスさんはまず、雷の魔法は使えないと前置きしました。ええそうでしょうとも。アーミアスさんは戦士です。戦士というものは魔法が使えないのです。

……ルーラという不思議な魔法をお使いになつていましたね。どうしましょう。潜在能力はあるのでは？　自覚していないだけで、神罰の雷を落とすことが出来るのでは？

「……子どもが酒を飲んでではならないのと理由は同じですからね。ご心配なさらずとも、俺が酔つ払っていきなり暴れるとかそんなことはありませんよ。俺はこの通りまだ大人ではありませんから、師匠は禁じたのです。」

それに、理性というものは想定しているよりもずっと弱いもの。我慢しているつもりでも溺れ、体を壊す姿を見てきましたから、積極的には飲みたくないということ

ですよ」

そうして、ぐいっと残りを飲み干しました。食べ物を粗末にしない方が大切なようです。この国が減ばないようでした。

もちろんアーミアスさんがそのような意志を持っているとは思っていませんよ。ですが、清らかなる天使様になんてもの飲ませていいのか……という意味です。滅んだ方が人間が悔い改めることができ、もつと良くなれるなら滅ぶしかないのかと、思考が跳躍してしまいましたよ。

アーミアスさんはそれなりに機嫌よく、また頬杖をついて微笑みました。なんだか本当になにふわふわしてますね。

「もう少し、背が欲しいのですけど、これで止まってしまうのですかね……」

それくらいで止まるはずないじゃないですか。それに気づかれないなんて、顔色の変化がないわりには結構回っているのでは？ その口調の本気さに、つい慄いて私はウエイターに水をしこたま持つてくるように言いました。

とうか身長を気にしてるんですね？ 天使様も背が伸びるんですね？ その、大人とも子どもともとれない姿、中性的な顔、声、それらをもつて天使様だと思っていたのですが、単にそれくらい年齢の天使様なのか。私はそんなアーミアスさんに出会えて運が良いのですね。ええ、もつと大人になったアーミアスさんを見ることが出来な

いのは残念ですけど。

「あれ、水ですか？」

「醒ますために必要かと」

運ばれてくる水のわけがわからないのか、明らかに今、笑って誤魔化しましたね？

こんなにアーミアスさんがわかりやすいこと、あるでしょうか。いつも、私たちにはその心を容易には読ませないミステリアスな部分がすっかり形を潜めています。

もうダメです。神罰はおのおの下すべき段階かもしれません。この純真無垢な、可愛らしい天使様になんてことをしくさっているのか！と怒られてしまいます。神はなぜ今、見ていないのですか？セーフなのですか？肅清のタイミングではないのですか？

お酒がダメなんですよ？アーミアスさんのお師匠様がダメだと言っているのですよね？これは危険なのです。

実はダメだということで、アーミアスさんのお師匠様が突然飛んできて、アーミアスさんを天に連れ帰ってしまうかも知れません。人間界は野蛮だとおっしゃるかもしれませんが。

ダメです。そんなのダメです。まだ一緒にいたいのです。天使様の微笑みを受けてなお、こんなに生きた心地がしないなんて初めてです。

私は水が運ばれてくるまでのあいだ、アーミアスさんがこれ以上ふわふわしないように質問をすることになりました。ぼんやりしているからふわふわしているのでは、と思いません。

「ダメ、なのは発育に悪影響であるから、ということなのですか？」

「ええ。もちろん、大人だからといって呑んでくれているようでしたら、それは墮落ですから、それなりの処罰はくだされるでしょうけど。俺もこれがバレたらお説教でしょうね」

「お説教……」

「師匠にお説教させるなんて、何時ぶりでしょうか。師匠が前にお説教をしたのは何だったか……師匠……」

お説教ということは、やっぱり天使様の世界に連れ戻されてしまうということではありませんか！ ダメです！ まだ天に戻らないで欲しいのです！

ですから、アーミアスさんに私は、ウェイターから奪った水の入ったグラスを握らせました。アーミアスさんは酔うとこんなふわふわして、ちよつと泣きそうな顔をする天使様なようです。いけません。それに見とれてしまいそうになりましたが、幸い振り切りました。

人間の不注意で天使様に悪影響があつてはなりません。これが清めの水でないこと

が残念ですがそれも言っていられませんね。ええ、これはダメなことです。

天使様、高潔な天使様。天使様にも秘めたる思いはあるでしょう。しかし、いつも導いてくれる天使様なのです。秘めたる気持ち、それを墮落の毒で吐かせるような、恩を仇で返す真似はしたくありません。そしてまだ一緒にいさせてください。天使様は純真です。ですから、これは事故です。流しましょう、水で。

「お水、いっぱい飲みましょう。たくさん飲めばきつと醒めます。……気づかれなきや、良いのです」

「メルティー……悪い子ですね」

「悪い子？　アーミアスさんに悪い子と言われるなんて光栄の極みですよ。この喜びを噛み締めるためにもアーミアスさんに顔を見られるわけにはいきません。さあ、さあ！」

アーミアスさんは困ったように微笑むと、水を飲みました。まず一杯。

「……ふわふわしますか？」

「まだ少し」

「ダメですよ！　もう一杯ですよ！　誰ですかアーミアスさんに飲ませたのは！　もつともつとお水を飲んでくださいね！」

「もう飲めないですよ……」

あんなに晩御飯が少なかつたというのですか。やはり天使様は沢山召し上がらない。胃が小さいのかもしれない。

しかし、ダメです！ やめないでください！ あと三杯は飲んでくださいね！

「メルティー？」

「ダメです、ダメです、まだ、お空に、帰らないでください！」

「居ていいなら、ずっと地上にいますよ。どうしたのですか？」

「お説教のために、お空に帰るのかと思つたのです！」

まるで駄々っ子のように言うと、くすくすと笑われてしまいました。そして、宥めるように言われました。

「帰りたいとも思いませんよ。大丈夫ですからね」

「本当ですか？」

「ええ。俺はここが好きなんです」

その優しい笑顔を私は信じました。もちろん、疑うなんてあるはずありません。天使様を信じないなんてそれこそ神罰の対象です。アーミアスさんが水を飲むのをじつと見ていると、流石にちよつと顔を背けられました。凝視は恥ずかしいですよね……すみません。

さて。私にはやることができました。アーミアスさんを尾行するよりも大切なこと

かもしれません。

「アーミアスさん……このミルクはどのようにして、ここに来たのでしょうか？」

「さつき、親切な男性がですね、夜遅くに外から戻った俺をみて、眠れないならと下さったのですよ。ええ、よく眠れるように二杯。ですがそんなに飲めませんから、メルティーにも」

「その方はどちら様でしょう？」

アーミアスさんは、年齢だけは見るからに未成年です。そんなもの飲ませようとするのはどういう見ですか。そもそも、天使様であると分からなかったとしても問題があります。

「さあ……この宿泊客のようですが」

「なるほど、ありがとうございます」

しかし、直接手をくだすなんて、他でもないセントシユタインでやってしまったならルイーダの酒場を解雇になってしまいます。よろしくありません。ですから、なんとかしましょう。解雇にならない範囲で。

そのため私は、お先に失礼いたしました。

ええ、その男性が邪な心を持っていないなら何も致しません。ちよつと行き過ぎた親切なだけなのです。それならいいのですよ。

私は杖をさりげなく構えながら階段をゆっくり登っていききました。そして、廊下につくと顔を上げました。あら、いましたね、不埒な輩。アーミアスさんは天使様ですから非常に中性的です。短い言葉を交わしただけでは性別、分からないでしょうね。

そして間違いなく言えるのは、そのお顔の美貌にはだれだつて魅了されてしまうということ。そのまま信仰心が高まれば良いのですが、不埒なことを考える人間は残念な気がします。いましたね。ええ。これからは私がなんと少しでもその火の粉、払ってみせましょう。

不埒な輩は滅んでしまえばよろしいのです。

不自然に廊下にいるお方に近づくと、私は微笑みました。杖には小さな炎が点しています。これくらいなら明かりで済まされません。炎に揺らめく私の顔は、きつと謎めいていて、どこか恐ろしいことでしょう。

「あら、こんばんは」

さて。胡散臭くとも、私は「呪術師」です。「呪術師」、わかりやすく言うならば占い師のようなものでした。本物の呪術師と違って、呪いはできませんが、反対に魔法は使えます。ですが「呪術師」はどっちもできませんから、私には「呪術師」の真似事は余裕です。ええ、嫌というほど見てきましたし。

そして胡散臭くとも本当に家だけは悪名高い、いえ、高名なのです。

どうやってこの方を悔い改めさせるか。簡単です。軽く占って差し上げればよろしい。それだけです。思うに、胡散臭い呪術師である我が家は、胡散臭い呪いによって大成したのではなく、その演技力によって成功したのでしょね。最初は本当の呪術も使えたのでしょけど、それはもう欠片も残っていませんし。

その日、久しぶりに占いをして差し上げたのですが、その結果にご満足されたく、次の日には旅立たれたようです。ええもちろん、ベクセリアに。病魔が去ってから観光客が、減ったようですからね。逃げるついでにお金を落としてらっしやいませ。

そして翌朝、一睡もせずにルーダさんのところに向かった私は、アーミアスさんは未成年ですからお酒はダメですとしっかりとお伝えしました。天使としては未成年なのですよね？ ええ、ふわふわした可愛い天使様よりも、私は凛々しい天使様であつてほしいです。連れ帰られないでほしいので。

閑話 天界日常

じわじわ意識が浮上したのと同時に起き上がる。さつさと起き上がるのが重要だ。翼が邪魔でうつ伏せに寝ていたからか、顔に思いつきり布のあとがついているからな。起きて、身支度をさつさと整えれば、外に出る前に消えているだろ。

身支度といつても俺の部屋には鏡はない。わざわざ自分の気に食わねえところを爽やかな朝から見たくねえだろ。一応くしゃくしゃになった髪を整えるブラシはあるが、鏡を見なくてもしやんとするしな。

もともと髪に癖はあるから多少の寝癖は誤魔化せる、と俺は信じている。誤魔化せていなくても本命のリツカたんは俺のことが見えないうし、ほかの天使に見られても一応整えておけばそこまで心象だつて悪くならないだろ。

タイツを履いて、ひらひらの天使の服を着て、ブーツをしつかり履けばこれで完成。正直パジャマの体を締め付けない白いゆるい服の方が人間にとつて想像する天使に近くねえ？ まあいいか。こんなもの着てちや戦えねえし、空飛んでたら風が吹きこんで寒いわ。

起きるには早く、まだ天使通りも少ないが、これもまあいい。早起きは少なくとも悪

印象ではないからな。

どこまでもこうして他人の目を気にしているのは前科があるからにほかならない。天使の中でも翼をもぎにかかったのは俺しかいねえ。そして失敗したせいでズタボロになっているのもな。これで素行が悪ければ問答無用で問題児だぜ。

神が俺たちを創るってわけだ、神はその点は完璧で、遣わされる中に飛べない片翼の天使なんているはずもなく、俺が一番、悪い意味で目立っている。優等生な天使として早くもつと仕事を任せてもらえるようにならなければ、つまり目をつけられないようにしなければ愛しの人間たちとたくさん時を過ごせねえからこつちも必死だ。

まあ今回の天使界への帰郷で師匠もオムイ様も満足しただろ。俺は地上へすぐにも行きてえ。生存報告は大事だが頻繁に戻るのなんて真つ平御免だ。めんどくせえし。いない間に何かあつたらどうするんだ。

とにかく明日にはもう文句もねえだろ。今日をいい子ちゃんに真面目に過ごすとするか。さてまずは朝飯だ。それが終わったら、花に水をやって、掃除して、時間になったら師匠に教えをこいに行き、星になった天使たちへ祈りを捧げて……あとは見習いの中でも生まれたてのやつらに顔を出しに行くか。見習いは不安も期待もいっぱいだからな、見習いだけで置いとくのも良くないだろ。

そういう抜け毛、いや抜け羽根がそんなに酷いわけじゃねえと思うが、最近ちびっこ

が俺の抜けた羽根で遊んでねえ？ 拾っているのを見たんだが。

別に構わねえけど、そういうのはハゲ師匠のようなご立派な翼の持ち主でやると立派な飾りができるって教えてやらねえとな。見栄えが違うからなそもそも。

……抜け羽根が酷くなれば、そのまま翼がすべて抜け落ちたりしねえかな。切り落とすのが無理ならすべて筆ってしまっても……いや……そもそも軸の骨を筆るだけでどうやって折るんだって話だよな。確証がないのにやらかすのは子どもがすることだ。とりあえず目をつけられないようにしないと。

星星へ祈りを。先達たちへ捧げる祈りを。俺は天使界へいる限り、そこまで忙しくなければ「祈り」を欠かさないようにしている。星となった先達たちへの祈り、世界樹への祈り、人々の幸福への祈り、神への祈り。

この場所は「天の祈り」そのものだ。人間たちの祈りの行く先だ。俺は敬虔でなければならぬ。どこまでも下僕として忠実でなければならぬ。それはもちろん、外面的な問題で、それからそう強いられているからで、そして天使が強いられていることとは本心ということだ。

父へ祈る。創造神へ。俺を遣わせた神へ。ただ俺はどうにも反抗期なので、どうやれ

ば翼と光輪を失うことが出来て、どうやれば人間になれるのかをひたすら問いかけ続ける。

もちろん、神は見ているかもしれないが、返事のない安定の助けてくれないっぷりは裏切らないので今のところ神の助けも天罰も下つてねえ。

そんな一見敬虔な俺を、ラフェット様は褒めてくれる。くすぐつたくて、少し罪悪感があつて、だから決して謙遜しているわけじゃねえけど、こんなに穏やかな良い天使を騙さなきゃならないのは気が引ける。俺は全体的に見れば真面目な天使ではない。

だから、いつそう、少しでも期待通りであるために真面目に人間たちの幸せを祈つた。すべて嘘じやなきや罪悪感はないからな。

ちなみに師匠は、師匠自身があんまり祈る天使じゃねえからなんにも言っちゃくれねえ。あれくらいいハゲになると祈らなくても常に祈りパワーに溢れているのかもな。だから祈らなくてもいいのだ、とか俺は適当に理由を想像する。

だってよ、俺と違って煩惱なきさそうだろ？俺なんてこのまえラフェット様が撫でてくださった時の、おっぱいの一瞬の触れあいを忘れちゃならねえと電波を受信したから忘れてねえんだ。

エレッタ様が抱きしめてくださる時の柔らかさは脳内保存安定だ。むぎゆつと。他にも、詳細は省くが、いろいろむにとしたことがある。これらを忘れないようにして

いる。

俺自体は天使の例外にもれずむきだしおっぱい見ても別に何も思わないようにはなっている……はずなんだが、これは一体どういうことなんだろうか。もしかすると未来の俺からの温かいメッセージかもしれないな、これは。

もちろん、その手のことといえば、大好きなりツカたんが入浴する時は絶対覗いたりしないしむしろ覗くような輩が現れた場合は紳士的に天罰・撃退をするつもりなんだが、見たい気持ちがあくなくないわけじゃないからな、神は天使の設計においては完璧ではない可能性がここでも出てきた。俺が変態だからか？

いや、俺は紳士だから。紳士だから妄想ですらおっぱいを具現化したことにはねえ。本当だ。触れたいわけじゃない。見たい訳でもない。ただ、一つの興味が……いやいや。

分からない。俺が男性型の天使だからなのか？ ペロい。きつと想像をしつかり巡らせて妄想まで漕ぎつければペロリズム高めになるだろ。わかっている。

だが、俺が、俺が女性型の天使だったとしてもきつとりツカたんのことが大好きになつた。だから煩惱は関係ない。

とりあえず、おっぱいはいいもので、ペロいんだ。柔らかいのは幸せなんだぜ。それを覚えていることも、きつとあとから意味がある。だがこれはきつと修行不足だ。師匠

くらいになれば悟りを開いているかもしれないねえだろ。これは未来の自分に期待だな。

もちろん、真相とはいえば「天使」アーミアスがおっぱいに興味がなかったのは事実だったが、「人間」のアーミアスが人並みにおっぱいが好きなのが事実だっただけで、結果的にグランゼニスへの熱い風評被害は過去への思念を飛ばせる程度の俺の執念ってだけのことだったんだが。

真つ赤になつて恥ずかしがるでなく、自ら触れにいくでもなく、ただ何も感じていないようなポーカーフフェイスでおっぱいについて忘れられない、ただの思春期の妄執が天使すら突き動かす煩惱になっただけだ。

もちろん、俺はそれよりもリツカたんをペロるほうが大事だった。

可愛い天使な天使たちの戯れをゆっくりじっくり楽しんでいたのに、イザヤールったら邪魔するなんてひどいじゃない。勢いあまつて、天使たちの邪魔までするなら私、あなたの翼を筆つてまで止めたんだから！

ほらみて、あの天使たちの空間を！ 本当に無垢な可愛い子どもたち！ そしてその子たちに囲まれたアーミアスくん！ こうして見ると昔と変わらさず可愛い！ ちよつと大人っぽくなつたけれど、ああして遊んであげる優しいところはちよつとも変わらない

し！

本当に天使で天使なのよね！

「……私も天使、エレッタも天使だろう」

「馬鹿、嘘えなんだから！」

床、もとい絨毯の上に座ったアーミアスくんにかくさんの子天使たちが集まるの。一人一人優しく頭を撫でてやって、何かを教えているみたい。私が近づいたら上級天使が近くにいるついでで萎縮しちゃう子もいるし、ああいうのは大人がいないから楽しいものなの。だから詳細はわからないのだけど。

でも、まったく見えない訳じゃない。何枚かの羽根を組み合わせているのも見えたから……流行りの、というよりは伝統の羽根遊びじゃないかしら。他に遊べるものもここにはないから。

あんまりあの手の遊びをする子じゃなかったけど、師匠でもない私はアーミアスくんのことをあまり知らないのね。あんなふうにかくさんの天使と一緒に戯れているのも初めて見た。

大きくなっても変わらず可愛い。あのふわふわな頭をたくさん撫でられるイザヤールはいいなあ。この男はめいっぱい褒めるといよりは、褒めるときは静かに称えるつて感じの教育なんだから、きつと頭の触り心地を知らないのよ、勿体ないわね！

「さつき講義のあと私の抜けた羽根を拾って出ていったのだが、まさかそのために……？」

「……」

そのためじゃなかったらなんだって言うつもり！

イザヤールは間違いなく上級天使として実力のある天使。誰からの信頼もあり、その弟子もエルギオス様の再来と誰もが思うような優秀な守護天使になったのだし。

だけど、羽根遊びの羽根の製造元には向いてないと思うの。

遊んで作った飾りを身につけたり、眺めたりしているとやっぱり持ち主のことは思い浮かぶ。

だからみんな憧れの人や上級天使のものをを使うのだけど、このままじゃ無垢な子どもたちが憧れのアーミアスさんと遊んだあと、「これは誰の羽根なんですか？」なんて聞いて、返事が「師匠のイザヤール様のもですよ」だったら震えあがるに決まってる。自分にも他人にも厳しいってもつばらの評判なんだから。

地上にいつまでも留まるアーミアスくんを捕まえて帰ってくるのはもう名物だし。ええ、アーミアスくんは人間大好きだから、毎回目に見えて落ち込んでいるものだから余計イザヤールが怖く見えるのよね。

というかそのせいで叱られないか不安になっちゃうに決まってる。アーミアスく

んが叱られているのはもう、見たことのある子天使ちゃんはいないだろうけど、誰もが想像できるのよね。顔が怖いから。

私の羽根をあげましょう。まだマシでしょう。子天使ちゃんたちが凍りつく前に。

「……顔が怖い、か……」

天使で天使な天使たちのところへ行くと、アーミアスくんはあわてて立ち上がって、私に頭を下げる。真面目なだから。それを真似した子天使ちゃんたちも可愛い。

私はニコニコしながら頭をあげるように言い、羽根をぶちぶちつと筆った。天使たちがかわいいいからちつとも痛くないわ。幸い、まだ糸を通していないみたいだし間に合うよね？

「……エレッツタさま？」

「ごらんしん！」

「いたくないんですか！」

「ふわふわー！」

「はねがいつぱい！」

「ちつとも痛くないよー、怖くないからねー」

目を見開いて固まるアーミアスくと、降り注いだ羽根にふわふわになる子天使ちゃんたち。これなら紛れてどつちがどつちかもわからないでしょう。

「材料の提供、感謝いたします。……エレッツタ様に一肌脱いで頂いたのだから、俺もすこし」

「そういえばアーミアスくん、翼については触れちゃダメだったよね！二度としない
でね！」

ぼろぼろの翼をそれ以上ぼろぼろにするのを許すわけにはいかない！むしろうとするその手を止めると、理を発動させたつもりはないのだけど、生真面目なアーミアスくんはぴたつと止まった。……うっかり理が発動してしまったかもしれない。アーミアスくんは真面目なもの。

「え、ええ、そう仰るのであればもちろん」

「本来なら勝手に抜け落ちた羽根を使うものだからね！でも原材料のことを考える子天使ちゃんがちよつと不憫だっただけだから」

「原材料……ですか」

アーミアスくんはちらりと自分の師匠のことを見て、首をかしげ、でも私の手前だからか曖昧に頷いた。

そう、そうだった、アーミアスくんはいい子なの。優しくて、気遣いができる子。厳しいイザヤールにあれだけ長いことついていて音を上げないなんて、双子のラヴィエルか師匠のエルギオス様くらいのものなのに、ついていく子。

イザヤールのことを心底尊敬しているからハゲのことが頭に浮かんでもなんにも思わないのかも。子天使ちゃんたちが怯えることも分からないのかも。ええ、怯えさせたのは翼を筆る奇行に走った私ですけど！

「じゃあ、そういうことだから……」

「はい、ありがとうございます。あの、これをどうぞ」

私は何かを被せられたみたい。ふんわり笑う天使ちゃん。本当に可愛い！ つて抱きしめたくなるけれどイザヤールの視線が背中に突き刺さっているからやめておく。私はとりあえずお礼を言っただけで立ち去った。

被せられたのは、羽根で出来た素敵なリースだった。人間だけじゃなくて天使にまで天使でどうするのよ！ ねえ、イザヤール、あなたのところの天使は本当に天使！ イザヤールの羽根でしょう、これ！ 天使な天使が手を加えるだけでこんなに天使の羽根になるなんて！ 言っている意味が自分でもわからないけれど本当に！

え、贈り物をされたことがない？ もしかして落ち込んでる？ イザヤール？ 大丈夫？

普通は師匠になにか贈ることはないから、ね？ ごめんなさい、ほら、イザヤールもその剃りあげた頭に被る？

……案子子煩惱、いえ、弟子煩惱なんじゃないかな。もつと褒めてあげればいいのに、

あの笑顔が好きなら。大切なら。

それから、アーミアスくんと遊んでいた子天使ちゃんたちは羽根の飾りを大事につけていたけれど、アーミアスくん自身は身につけてなかった。服装が真面目だから？ あれくらいの飾りすら、真面目に考えて付けないのかな？ と思っていたから私は何にも違和感がなかった。

でも、そうね、誰よりも天使らしく、模範的で、優しいあの子は……翼を疎んでいた。あの出来事を、百年の歳月が癒したとばかり思っていたのは愚かだった。幸せになれたのだから、ええ、終わりがよければ全て良しなのだけど。

5 2 話 魂父子

青い不思議な光が、ぬしさまの頭の近くにともる。アーミアスさんの背中に庇われたまま、その光の正体を見て、あたしは思わずあつと、声をあげそうになった。

「オ리가……」

お父さん！

思わずアーミアスさんの手を振りきって、懐かしい顔を食い入るように見た。本物のお父さんだ、間違いない！ 青い光に包まれて、空中に浮かんだ、その姿は……どう考えたつて幽霊だったけれど、あたしのところに帰ってきてくれたんだ！

「オ리가、欲望に目が眩んだ村の連中にあんな目に遭わされて、怖かったろう」

お父さんはそう言つて、怒りの表情を剥き出しにする。あんな目つて、ぬしさまを呼ぶように言われたこと？ それとも、こつそりこつそりで祈るように言われたこと？

でも、あたし、それについてもっとしつかり言えるんだよ。それがいけないことだつて、分かったから。ちゃんとダメなことは分かっている。

「そちらの方は村人ではないようだな。たしかに、ぬしさまの姿で丸呑みにしたならば、オリガを怖がらせることにほかならない。忠告に感謝してこの姿で話すことにする」

『ぬしさま』の正体はオリガさんの父上だったのですね。娘を想う気持ち、それを否定することはできません」

「……あなたは、私を迎えにきたわけではないのか？」

お迎え？

なんとなく、何かが引つかかる気がして、あたしはアーミアスさんに振り返った。彼はお父さんを見てどこか厳しい表情をしていたけれど、あたしの視線に気づいてすぐに優しい顔になった。

「いいえ。あなたがそこにいたこと、そしてオリガさんと会話できること、その奇跡をただ見守ることのみです。それで未練が果たせるならば」

「……感謝しよう」

アーミアスさんはあたしにどこまでも優しい顔をしていた。透き通った表情で、お父さんとも違う包み込むような優しさを持って。

お父さんはあたしが理解できるように嵐の中、沈む船の中ぬしさまに助けられ、そし

て死んでしまったあと、あたしを見守っていてくれたことを話してくれた。そして。

「オリガ。村を出て私と一緒に住もう。もう寂しい思いはさせない。強欲な連中に食い物にされることもない」

「お父さん……」

「心配はいらない。また二人で暮らそう」

嬉しかった。お父さんはあたしのことを想ってくれていて、すごく感じたから。その手を取りたいと思った。でも、それは、きつと、良くない。それも分かった。

でも、あたしは、迷った。なんとなくアーミアスさんならどつちも正しいって言うてくれるような気がしたけれど、もう頼っちゃいけないって、それもわかった。

「オリガー!!」

叫ぶトトの声を聞いて、青い光に包まれた、死んでしまったお父さんを見て、あたしの頭はさあつと、晴れた。あたしの手は青くない。透けてもいない。お腹がすいて、息をする。それが全てで、それが答えなんだ。

「オリガのお父さん！ 僕はオリガを一人にしないって約束する！ お父さんや村の人がオリガにもうあんなことをさせないって約束する！」

「トト……」

「オリガのお父さんが心配して見に来ちゃうくらい、村は酷かったんだ、でも僕は……オ

リガがいてくれないと、寂しいよ……」

お父さんはしばらく目をつぶった。そして目を開くと優しく笑った。張り詰めていた何かが解けたようなそんな優しい笑い方。

「私は、勘違いしていたのだな。死者が出しゃばってしまったようだ」

空気が緩んだ瞬間、アーミアスさんが地面に膝をついた。あんな怪我をしてたからなんだと思う。苦しそう、なんだけど、なぜか笑ってる。幸せそうに。なんで？ 駆け寄った仲間の人たちに起こされながら、それでもあたしに笑いかけてくれる。

「ああ、心配はいりません。……ほっとして力が抜けた、だけです。俺のことはいいですから、お父上とお別れをきちんとしてみましょう、ね？」

「どう考えてもひどい貧血ですよアーミアスさん……」

「ガトウーザ、今はいいですから」

「はい。ええ、分かっています。私も色々わかってきましたから。とりあえず腰をおろしましょう」

二人に促されて、あたしはお父さんを見た。穏やかな顔をしたお父さんは強くなる光に包まれて、だんだんと薄くなっていく。アーミアスさんの言葉通りお別れなんだとはつきり分かって、ぬしさまの前に駆け寄る。

「オリガ。私はいつも見守っている。姿は見えなくなってもずっと一緒だ」

「うん、うん、お父さん」

「トトと、ツオで笑って過ごせるように祈っているよ……」

光が薄くなって、そして一瞬強く光って。

お父さんは消えてしまった。あとに残ったのはお父さんの漁師のお守りと、金色の果物。果物からはぬしさまから感じたような恐ろしいような、近づいてはいけないような……そしてどこかアーミアスさんみたいな感じがした。

「ここではないどこかから、あたしたちの届かない遠くから、来たんだ。」

「……ありがとう、お父さん」

アーミアスさんは気づくと金髪の男の子に背負われて、ツオに向かって運ばれそうになっていた。でもそれをアーミアスさんは止めていて、あの果実を必要としているのがわかったから、あたしは拾って、渡した。

「アーミアスさん、ありがとうございます。お父さんのこと、あたしの話を聞いてくれたこと、助けてくれたこと。本当にいろいろ。この果実はきつとアーミアスさんのところにあるのが正しいのですよね」

「……ありがとうございます。でも、これはオリガさんのお父さんのものだったのですよ」

「あたし、お父さんのお守りがあるし、トトもいるから、もう大丈夫です。奇跡に頼らな

くたつて生きていかなきゃ、ダメなんです。みんなですうして生きてきた浜の、一番の漁師の娘があたしなんですから！」

「ええ、ええ、そうです」

本当に嬉しそうにアーミアスさんは頷き、そして糸が切れたように眠ってしまった。

メルティーさんが教えてくれたのだけど、ぬしさまとの戦いは本当に激しいものだったらしい。だから、本当はすぐにもツオにもどりたかった。でもアーミアスさんはあつしたちを見守ることを優先したつて。

メルティーさんは優しくつて、あつしたちを怒つたりしなかつた。きちんと前を見るこつとの出来るあなたたちなら大丈夫だとむしろ褒めてくれた。村長様や腰を抜かしてしまつた護衛のこつとは冷たい目をしてみていたけれど、すつかり気落ちして寝込んでしまつた村長様に対しても何も言うこつとなく、ただあつしとトトの頭を撫でてくれた。

みんなは理解してくれつた。護衛の人たちも変なこつとは言わなかつた。トトの話を信じてくれて、あつしたちはまた日々漁をするツオの生活に戻つた。

あつしは村一番の漁師の娘としてこれから少しづつ手伝つていく。おばさんたちに網の干し方を教えて貰つて、干物の作り方を学んで、こつこで生きていく。

あつの天使様のような優しい人の言葉を胸に刻んで、お父さんのお守りをすつかり握つて。

「ガトウーザ、もういいですよ。すっかり治つてますから。傷跡だつてないでしょう？」

顔色が悪いのもちよつと血が足りていないだけなんですよ」

「……はい、そうですよね。あとはゆっくり休むだけですよね」

「はい。……俺はあなたたちに心配をかけてしまったこと、それは申し訳なく思いますが、あの場において庇わないという選択をとることは出来ません。そうしなければ百年でも二百年でも後悔します。ですから、気落ちしないで誇りに思ってください。あなたのおかげで今俺は生きているのです」

透き通るように青白い肌の天使様はそう仰ります。ベッドに全員で押し込んだのもう大丈夫だとも分かっています。

でも。もし私をもつと素晴らしい技能を持つヒーラーなら、もつと負担を減らせたのではないか、と思いますし、そもそももつと私が強ければあの戦闘は早くに終わったのではないかと思えます。

僧侶という職業には忌まわしい思いしかありません。偽りの信仰、腐った教会、金と欲望ばかりの世界。その中枢に生まれた私には。いくら僧侶が回復力は強くとも、私としては戦力としては中途半端に感じるのです。

ですが私がほかの職業になればそれこそみなさん困ってしまいます。なにか新しい道を見つければいいのは分かっているのですが。

とりあえず、これ以上天使様を心配させてはいけけないのは理解できます。メルティーに引っぱたかれる前に私は退散しました。

彼女は最近本当にハキハキするようになりました。昔は怖がりで、自分の力に怯えて、家を憎んで。でも今は違います。前を見るようになりました。それが眩しい。私は前のままです。

明日には故郷の大陸への船を出してくださいさるそうです。それに乗って船着き場へ行き、カラコタを通り抜け、ゆくゆくは故郷サンマロウにたどり着くことでしょう。

どうかそれまでに私が歩むべき道を見つけることが出来れば、良いのですが。私に信仰心はありません。信じているのは天使アーミアスさん、それだけなのです。

やはり直接見て、感じて、助けてくださる存在を信仰してしまうものですよ。神は助けてはくださりません。見えません。感じられません。

私は、僧侶として失格なのです。

しかし、私にも力の息吹を感じる瞬間はあります。この世に循環する何か。偉大で身近な何か。その正体を知ることが出来れば、何か変わるのでしょうか。

美しき天使様、どうかお導き下さい。

船着き場くカラコ夕橋く石の町編

5 3 話 船便

俺の左半身はほぼ乗っ取られた。茶髪の男の仕業だ。もつと言うなら腕をしつかり掴まれている、つか抱きしめられている。暑い。むさ。体重負けはしているが職業柄引きずって進めるのが幸いだ。俺を休ませようとしているようだが余計に疲れていることには気づいていないようだ。まあいいけどな。

昨日のは俺が脆いんじゃない、敵が強かったただけだ。あともう回復したから構うな。いいから構うなって！メルティーとマティカなら可愛いからいいけどガトウーザは同年代の男にくつつかれたとしたらむさ苦しくは感じねえのかよ？

むさ苦しい、少なくとも俺はそう感じる。間違ってもいい匂いはしないし、柔らかくもない。可愛い可愛い人間には違いなくとも、どうせなら可愛い女の子がいい。俺の感性はこの点では普通だと分かってるぞ。

俺だつて男だから、やつぱりこう、ほら、男の胸筋押し当てられるよりは柔らかい方がいろいろいい。ムキムキに抱きしめられているわけではないのが救いかもしれないが、ムキムキだつたらムキムキなりに憧れがあるのでかえってよかつたかもしれん。い

つかムキムキになって師匠みたいななかつこいい顔になりてえ。

てか、くつつくなら誰よりもリツカたんがいいよな！ リツカたん、ペロ！ だが俺が情けなくぶっ倒れたのは見られたくないからこれでいい。脳内のリツカたんペロペロ。アツ……笑ってくれた……ペロペロ！ 全部俺の妄想！ むなしい！

せめて俺の負傷の記憶はウォルロの墜落事故までにしておいて、あとは回復したらリツカたん成分補充しに帰るからな。まず大陸渡つてルーラの行き先登録が先決だな。そしたら俺は帰るぞセントシユタインに。

天使界？ 俺の帰るところはリツカたんのいるところだからな！ ハゲ師匠がいない天使界は……ちよつと寂しいからあまり帰りたくない。

なんだかんだ言っても俺はハゲのことを慕っている弟子だからな。禿げていること以外は全てにおいて尊敬している。禿げていることも普通にスキンヘッドに剃ってるだけだと思う。なんていさぎのよい。痺れるぜ師匠。真似はしない。

飯食つて寝たら昨日の負傷はほぼ治った。ちよつとふらつくのはまあ昨日の今日だしな。とりあえず今日は戦わないことを仲間たちに約束させられたが、まあ妥当だろう。

ところでそろそろガトウーザは離してくれないか？ 人間を振り払うなんてやらな
いが、そろそろ、暑い。やつぱ撤回だ、暑苦しい、離せ！ ……もちろんやんわりとし

か言わないが。キラキラした目で信じきつてる相手をあまり無碍にもできない。

とりあえず漁師に船を出してもらう約束を取り付け、準備までのあいだに装備品を物色することにした。とはいえ新しい大陸の装備品の方が普通に考えたら有用だろうよ。向こうの方が魔物も強いらしいな。

てか……ゴム長靴って装備品でいいのか？ お鍋の蓋のように日用品も防具になるのか。

まあ金に困つてるわけじゃねえし。後衛連中にはみかわしの服を、マティカにはブルーメランパンツを、俺はスライムピアスを買った。マティカのパンツについては俺がショタコンな訳ではなく、弁解の余地がある。守備力＋8。それが全てだ。あと本人に頼まれた。もちろん服の下に履いている。俺も誘われたがそんなピチピチのパンツを履く趣味はねえ。

それだけ履いてあとは露出なんてするわけねえよなあ、……なあ？ 俺が表情筋をフルに使つてにっこり笑うとマティカはいい子だからちやんとズボンを履いた。若い人間の間で露出が流行つていても、腹が冷えるのは良くないと思うぜ。

余談だがピアスを買ったところで品行方正に見せかける俺にピアスの穴が空いていなかったのだから、ブツツと空けた。上級天使にバレてもただの装備品だし、別に特に意味が無いならいいだろ。叱られたら素直に穴埋めるわ。

だが空けた瞬間ガトウーザが卒倒したのでこいつは僧侶のわりには血に弱く、向いていないのは本当なのだろうと俺は正直同情した。適した職業、見つかるといいな。俺もできる限り協力するぜ。

何故か同時にメルティーが発狂したので落ち着けと頭をポンポン撫でていたらマティカも、おれもおれもと擦り寄ってきたので俺の両手はあえなく塞がった。その際ガトウーザはメルティーによってべりつと離された。とりあえず人間たちはかわいいので役得なものには違いねえ。

二人とも可愛いな。ガトウーザも可愛いぜ、一応。ちよつとスキンシップがついていけるレベルではないってだけのことだ。少しばかり控えてくれ。くつついたら天使の加護がうんぬんとかないから。俺なりの加護をかけたつもりだがなんもないだろ？俺はペーペーのびよびよ天使なんだ、所詮はよ。

そうそう、ツオの様子はといえば、オリガちゃんも元気に働いて生き生きしてるみたいだし、やっぱり平和な日常が一番だぜ。

船旅はなかなか珍しい体験だったが、もう少し長かったらかなり酔ってやばい事に

なっていたかもしれない。頭でわかっているつもりでも居心地が悪いあまり空へ逃げようと体が勝手にするんだが、翼はもうないしな。

心配性のガトウーザが俺が落ちるんじゃないかって、がっちり掴んで離さなかったから船から落ちる心配はなかったが、もう少し風に当たらせて欲しかった。善意の暴走つてやつかよ。てかまたお前はくつついていいのか。そろそろ離せよ。怪我する要素なんてないだろうが。

あ？ 船が怖い？ 仕方ねえな。いくらでもくつついていいぞ。

……団子になった。さつきまでマテイカお前はしゃいでただら、メルティーは船の上でもふらつくことなく歩いてたじゃねえか。

くつ……かわいいな畜生！

そんなこんなで俺たちが戯れているあいだに船着き場に着いた。お礼をして、とつとと先に向かおう。地図にカラコタ橋というところが載っていたからな、そこまでは行きたい。

船着き場に着くやいなや兄妹は挙動不審になり、知り合いがいないとみるとあからさまにホツとしたのが気になるが。……うーん、嫌なら別の人を一時的に雇った方がいいか？

「大丈夫です、大丈夫ですから！」

「兄さんの言う通りです、何事もございません！」

「まだ何も言っていないですよ」

まあ大丈夫ならいい。今更他の人を探すのも大変だし、実力者かつ信頼出来る人間を見つけれぬかどうか分からねえ。マテイカと近接二人旅つてのは難しいだろうしな。

とりあえず俺はそろそろガトウザーを振り払い、魔物に見つかからないようにカラコタへ向かうことを宣言した。

が、まあ、新天地の強い魔物たちは俺たちを見逃してはくれず、何回か戦うことになったのだが。許してくれ、不可抗力だ。あと、三人が張り切ったから俺は剣を一度しか振るっていない。氣遣いに涙が出そうだが、別に普通に戦えるから気にしなくていいからな。

そして少々歩いて着いたカラコタ橋というのは、なんつうか、スラムというか。流れの人間たちの街であり、行き場の無い人たちの集まりというか。空気が汚い。汚染されているというよりは普通に汚い。

人々はせかせかと歩き、見るからに力強い人間を恐れるようだ。

俺はウオル口村の守護天使だからな。ほかの町については詳しくはわからない。だがここにもきつと、守護天使がいる……よな？ 最近いねえから「いた」ってことだが、ちよつと判別つかねえな。

まあいい。ちょっと見学したらセントシユタインに戻るか。

そのつもりで橋だけは渡りきってみようとしたのだが、俺はそこで、目を奪われた。反射的に手を差し伸べたくなる存在が、そこにいた。

青い光に包まれた存在。幽霊。それも、俺みたいなのよつこでもひと目でわかるような……永い年月をさ迷った悲しい子、だ。

54話 霊

目を見開いて自分を凝視する彼は、天使様のように見えた。私のことが見えているのかしらとも思った。でも彼は声をかけてこなかったし、視線の先には、行き倒れたような男性が転がっていたのでそちらを見ているのだろうと勝手に納得した。そう思ったかった。

かつてのエルギオスのように、強い意思を持った目をしている。星を宿した目だ。キラキラ光る星ぼしのすぐしたで育ってきたような、目。

ああ、懐かしい。思わずその手を取りたくなる。おかえりなさいって言いたくなる。別人だと分かっているのに、違う気配が確かにするのに、顔だつて全然違うのに……よく似ている。

「……人間を天使と見間違えるなんて」

私を知るエルギオスにも天使様の光輪はなかったけれど、まさか翼すらないこの少年が天使様のはずもない。仲間らしき普通の人間が訝しそうに少年を見ているのだし、人間と行動を共にする天使様なんて……いるはずもない。

私はそう信じ込む。私をはっきり見ている目を見ないふりして、過去の未練を断ち切

るように。私はエルギオスに会わなくちゃいけない。他の存在を気にかける時間ももう、ない。

すれ違う。何もなかったように通り過ぎる。ああ、懐かしい気配がする。

間違いなく、あの少年からは懐かしい天使様の気配がするの。そんなことありえないはずなのに、美しい白い羽根が散る時のような儚さと、私たちをその翼で包み込むように守護してくれる優しさの両方が感じられる。

彼はその場で、しばらく物言いたげな様子で突っ立っていた。そして、ゆっくり振り返って、やっぱり私を、こちらを見て、まだそこに留まっている私のことを意外そうにしていた。

手が伸びる。彼の手はエルギオスの手じゃないのにどうにも重なって仕方ない。

「あの、その娘さん……？」

私は、逃げた。この天使様と話せばエルギオスを止める前に解き放たれて、空へ旅立ってしまうような気がしたから。そんなことあるはずなのに。

とにかく、立ち去らないと。翼も輪つかもない天使様のようなその少年の瞳に囚われるしまう前に。

人間のように振る舞うあの天使様が地上でわざわざ何をしているかなんて簡単に想像がつく。あの異変によってきつと空から落ちてしまった天使様は、かつてのエルギオ

スのように人のために戦おうとしてくれているのでしょうか。

ほかの天使様を私は知らない、それでもあの瞳の優しい光は二人とも似通っていたのだから。

彼の仲間が、かつての私たちのように……裏切りの形を示さなければ、良いのだけど。願わくば、二度と悲劇が起こらないように。

「アーミアスさん？」

「……ああ、行つてしまいましたか」

「一体どうなりました？」

「ああ、特にもう何も無いですよ。ただ女性とすれ違つただけなので」

「い、言い方が怖いよう」

人ならざる者が目の前にいるつてのに、しつかり俺の服の裾は握るつてのに、幽霊は怖いのかマティカは。まあ見えないものつて得体がしれないから怖いよな。見えたらあんなべつびんさんの虜になつちまうかもしれないねえけど。

その手のことを気にしないらしいメルティーはちよつと怯えたような顔をしたガ

トウーザに縋られて迷惑そうな顔をしているし、さっさと戻るか。

セントシユタインでリツカさんの優しさと温もりにも包まれて一晩休んだら次は……
そうだな、カラコタで一応ちよつと聞き込みでもして、それで次の街へ行くか。

幽霊の女の子はもうここには帰ってきそうにないし、この街つてか橋におかしな異変は起きてなさそうだから、一応だ。

てかよ、世界中にバラバラに落ちているはずの女神の果実だぜ？ この大陸には一つもなくたつておかしくねえんだ、のんびりはしていらねえけど、先は長そうだしな。慌てず堅実に進んでいったほうが賢明だろ。

行き倒れつぽいが、もしかしたら本物の追い剥ぎかもしれないから今日はカラコタの住民に話しかけるのはよしておく。

すべての人間が、いや、すべての魂が魔も光も関係なく救われるべきであったとしても、俺が救いたくても、それは仲間の三人の安全を確保してからの話だ。雇い主の俺にはその義務があるし、三人には確かな恩と感情がある。

悪いが俺は、初対面の人間より知り合いの方を取る鼻肩バリバリなひよつこ天使だからな。許さなくていいから、俺を恨んだつていいから、そういうものなんだよ。

じゃあとつととルーラで退散しよう、まず何より先にリツカさんに会いたい！ 先走つて、フライングペロをしてしまおう！ ペロペロ！ まだ上空なのに！ リツカたん

！ 今日も元気か？ 元気だよな？！

やったぜリツカたん！ ただいま！ 今日も健康そうで何よりだぜ！

ところでなんか変な気配しねえ？ え？ 釜？

こいつ喋ってね？

天使？ こいつが？ 何つつたけ、カマエル？

天使か……無機物の天使とかいるのか。初耳だ。俺の身体も自分ではわからないだけで木から出来た人形とか、ガラス玉で目ができているとか言わないよな？ 大丈夫だよな？ 腕つねったら痛かったから大丈夫だよな？

とりあえず、それより俺は天使よりもリツカたんの用意したふかふかベッドに興味があるから今日はもう寝るわ。また今度な。てかお前の主人になった覚えはねえ、懐くな、つい可愛くなっちまうだろうが、情を抱かせるな！

俺がカマエルと揉み合っているあいだ、リツカたんがニコニコしていたのが救いだつた。おかしな心霊現象だとは思わないリツカたんの懐は深く、メルタルが強い。流石だリツカたん！

てかよ、今日もラヴィエル様の視線が痛いんだが。だが、俺は前を通り抜ける時に会釈するのにどめた。

リツカたん含めこの宿屋の人たちに見えない住民がいることを知らせて驚かせるの

は酷だし、彼女はここの守護天使ではないから中途半端に期待を抱かせるのも良くない
だろ。というのが人間たちへの建前だ。

何でここにいるのかちつとも分からねえけど、こっちに用もなさそうで、ただカウン
ターの隅に座っている。師匠の双子だからきつと俺なんかよりとんでもない天使パ
ワーで色々できるんだろうが、頼る時でもないしな。

師匠の居場所を聞きたくて聞きたくて、もし話しかけたでもしたら問い質してしま
いそう。それは迷惑だろうし、不敬でもあるだろうし、ともあれ天使界にハゲ師匠がい
なかつたということが俺への回答で、すべてなんだ。

「あのストロスの杖、いいと思いませんか？ 二人ともに持つていただけたら麻痺を恐
れることはありませんね」

「アーミアスさん、その、装備を更新してくださろうとするのはとても嬉しいのですけど
この前も買っていたいただいたばかりじゃありませんか」

「この前？ そうでしたっけ。防具も武器もあるにこしたことはありません。命に関わ
りますからね、それだけで解決できるならば買っておいの方が良いのではないでしょ
うか。金があつても腹は膨れませんが、武器があれば身を守れます」

アーミアスさんについて最近発見したことがあります。彼の金銭感覚は私たち人間のものとは少し違うということです。

彼は教会の肥太った司祭のように贅沢をしたり、無駄な物を買うことはありません。食べるものも身につけるものも少しの贅を尽くそうとしたりもしません。

しかしながらことに身を守るといふことになるかと財布の紐がとても緩いのです。そしてそれらは自分よりも私たちに向いています。

ああ天使様。私たち人間を守ってくださいさうとするその思い、感服いたします。天使様はやはり救い主。助けてもくれない存在とは違う。

ですがその使い方は少々行き過ぎではないですか、ストロスの杖を二本も買って、ほかの防具まで買おうとして、財布が持たないのでは？ なまじ質素なことに慣れていらつしやるので財布の中身がカラに近くとも気になさることがないというのが裏目に出ています。

このガトウーザ、節制には少々自信があります。少しばかりなら進言してもよろしいですよ？ メルティーも領きましたし。

「アーミアスさん、たくさん購入されるのは……」

「ガトウーザにはこれが似合うそうですね、こちらにすればどれだけ頼もしくなるのでしょうか？」

「このガトウーザ、誠心誠意尽くさせていただきます、ますます頼りにされるようなヒーラーとして……」

「兄さん、まったく頼りになりませんね」

何を言うのです、妹よ。

アーミアスさんに頼られるような存在になれるなんて素晴らしいことではありませんか。徳をダイレクトで積めるのですよ。

私に諫めるなどの不敬な行動はやはりできません！ ええ、すべてのその行動には意味があり、有難くも守護されている我らが口を出すなんてよくありません！

「兄さんは一貫性がありませんね。」

アーミアスさん、そんなに買うとこの先にある町、サンマロウでの買い物ができなくなるかもしれません。サンマロウには靴の専門店もあり、個人にあつた装備を整えるのには最適です。最低限にすべきかと」

「そうですね、忠告感謝します。では……そうですね、減らしましょうか」

聡明なメルティーが間違っているはずもなく、天使アーミアスさんが間違ふことなく有り得るはずもない。何が正しくて、何に従えばいいのか。一貫性のないとはまさに私のことでしょう。

しかしながら、私は、そういう人間なのです。メルティーが間違っていないから、私

はもう口出ししませんし、アーミアスさんは絶対なのでメルティーの言葉を受け入れたことも絶対なのです。

自分の指針がないのです。何も信じられないのです。でも、輝くような存在が近くにいるので、私はそれにすがるしかないのです。年下の、金髪の少年が呆れたように見ているのも、私は反論しないのです。自ら考えることが出来る人間こそが正しいのです。

ですから、ですから、天使様に従うのです。その超越した存在に救いを求めて。

ところで不埒な気配を感じたのですが、ご存知ないですか？ あのような美しき方に醜い私欲を剥き出しにしないで頂けますか？

見ていただけ？ ……私は一応神に仕える者ですから、無益に血を流すのはよしておきましょう。

しかし次はありませんから。血を流さずに腕を失うのは嫌でしょう？

……ごろつきを見送りました。カラコタは相変わらず治安が良くありません。

このようなことに、優しく強くなったメルティーに手を汚させることはありません。無垢な子どもに手をくださせるほど腐った人間ではありません。アーミアスさんの視界に収めることはそれよりもあつてはなりません。

人の欲望を、天使様はきつと私よりご存知でしょう。ですが少しでも、私は見て欲しくない。

自己はなく、エゴがあり、私は臆病で、根無し草。変われる日は来るのでしょうか。ただ、風の声だけが聞こえます。泣き叫ぶ子どものような声で、孤独な老人の死を伝えます。人形の悲哀を教えます。それが本当でも嘘でも、私は聞こえないふりをして、妖精たちの囁きをなかつたことにします。

私にふさわしいことはなんなのでしよう。

55話 誤解

今日もリツカたんぺろぺろ！ 朝の笑顔は目に沁みて、働く姿は眼福、朝の祈りを欠かさない敬虔さは光栄かつ感動！ 可愛い、健気、敬虔！ これが3K、オールウェイズペロい。リツカたんぺろぺろ！ それに加えて健康だから4Kでもいいかもな！

それを見抜ける俺は朝から一流ペロリスト！ ペロい、ぺろつぺろでぺろすぎる！
これは、ぺろい！ だからセントシユタインに戻るのはやめられねえ！

リツカたんに会えない日々とかマジ無理だから！ リツカたんあつてこそ俺だから！ リツカたんの青いおかつぱの切りそろえただいきラインをいつか触れてみたい。

ぺろぺろ！ リツカたん！ だいき！ いちばんすき！

……ふう。んなわけで、リツカたんの最高な居地の宿屋を盛大に惜しみながらチエックアウトし、俺たちはルーラでカラコタ橋まで戻ってきた。出かける時のリツカたんの今日の気をつけてね、を俺は何度も反芻し、リツカたん充電完璧だ。あー、もう今すぐ帰りにえ！リツカたん！

だがそうもいかねえ、リツカたんが働いているのに俺が務めを果たさなくてどうす

る。二度と顔を合わせられなくなるだろうが！

帰れるとなったらすぐ帰りたいくらいだ。この使命をちやつちやと済ませて俺はリツカたんが永久就職するその瞬間まで宿屋で働いていたい。リツカたんが永久就職したら、俺は迷惑のかからないように身の振り方を考え直すが、恐らく見送りモードになつてやっている事は変わらなず彼女の人生を惜しみながら……いやそんなこと考えたくねえし！

リツカたんは、リツカたんは、俺がぺろるんだ！ その為に今すぐ天使やめたい。仮に今すぐ天使やめたとしても、危険物すぎる女神の果実はすべて回収するからやること今と変わらねえけど。変わらねえけど俺が人間なら！ 俺は！ だが人間として生まれていたらリツカたんに会う大昔にくたばつてたはずだから困つたものだけ。

そんでだな、戻つてきたカラコタ橋でちよつくら情報収集しようとも思つたが、あの兄妹が何故かそこかしこに威嚇してたからやめた。本人たちには言わないが、育ちがい部類の彼らにはこの空気が合わないんだろう。

ガラ悪いからな、ここ。さつきと抜けるか。今日は道塞いでるやつもいねえからな。「さてどうしましょうね、この先のサンマロウに向かうか、あちらの山へ回るか……」「ねえねえ、サンマロウってどんどころ？」

「行つたことはないのですが、なんでも、花の都らしいですよ。広大な花畑が有名で……

たしか、近くに遺跡もあるような由緒ある町ですね」

そんであの行動が似てる兄妹の故郷だ。見てりやわかるが、話も聞いたが、いろいろと家とは浅からぬ因縁があるらしい。メルティーは賢者を目指すということでもう吹っ切れているみたいだが、ガトウーザはダメそうだ。とうとう自分のことを僧侶とは呼ばなくなつたからな。

ところで、自称「ヒーラー」はねえだろ。僧侶はたしかに回復のスペシャリストだが、そればかりが役目でもねえ。状態異常を治すこともできれば、槍の名手でもあるし、棍の使い手でもある。まああいつ、杖持ちだけど。

神に仕えることそのものよりも重要なのは気持ちだけ？ 慈愛を持つことそのものが僧侶の意味。だがまあ、ガトウーザは正直向いてねえわ。慈愛を持てるか持てねえかどころじゃねえ。悪感情が強すぎてそれどころじゃねえんだろ。

それはそれ、これはこれと割り切れないのはもう仕方ねえわ。割り切るなんて、少なくとも、未熟ながらあいつの六倍以上生きてる俺には無理だしな。考え方が違うって言えばそれまでだが……。

あいつにはまだ時間が必要だろうが、他に行くところもなければ行くしかねえし。だが、手がかりが何一つないならどこへ行つたつて同じだ。しらみつぶしに探さなきゃならねえって点ではな。

だから俺はせめてできる限りの遠回りをしてやろうと思う。

だつてよ、何か言いたいことでもあるかと顔見ようとしてもロクに目も合わねえし、無理強いも良くねえだろ。顔向けたらメルティーの方が思いつきりこつち見たが、まあそれはいいとしてだ。どつからこんな信仰心がわいてくるのかちつと理解が難しいぜ。

てか、それよか気になるんだが、ガトウーザつてたまに本気で耳聞こえてねえんだよ。俺の呼び掛けは全身全霊で聞いてくれているみてえだが、それ以外はすべて抜けている時がある。戦闘の時はそんなことないんだが、普段がな。そういうときはメルティーが心得たように手を引つ張つてる。そしていつの間にか治つてる。

そういう病気ではない、はずだ。まあ俺の見立てでしかないから……情けないことだが、言いきれねえ。だが、間違ひなく聞こえてねえ時がある。正確には聞こえてねえ、というより聞ける状況じゃねえ、かな。

てかそういうときは周りもほとんど見えてねえらしく、ふつと動きが止まったり自然な方向へ歩き出したりする。だがまあそれは、考え込んだ時のメルティーも同じだな。補い合えていい関係だ。

なんか原因があるんだろうが、現象自体に病的なものは感じないし……なんか、上の空つていうか。顔色が悪い時もあるが、なんか人混みに巻き込まれたみたいなききするんだよ。病気ではない……よな。いや、十分おかしいんだが。

病氣といえはそのちよつと敬虔すぎるところは行き過ぎだけだよ、それを信仰対象の天使の俺が「病的」とか「狂氣的」とは思うのは失礼だしな。

ありがたいものだ。だが、ちつと控えてほしい。

いやそれはもういいんだ、俺が何とかすればいいからな。俺がなんとか出来るならなんとかするさ。なんだつて。

「回り道しましょうか。手がかりもありませんので近いところから探すしかありませんからね」

「山の方に行くの?」

「はい。ええと、地図によるとビタリ山、ですね」

「山かー、おれ山に行くの初めてだよ!」

二人のことはともあれ、隙あらば俺を拜んだり、むやみやたらと引つ付けてくるコンビに挟まれた俺にとつてマティカは癒し。異論は認めない。はしやぐ子どもというのは可愛いものだ。いい年して子どもと張り合い始めるヤツらよりは可愛いだろ、どう考えても。

少なくとも俺に関しては、別け隔てのない天使とかそういう幻想だけは持たれちゃ困る。若い人間たちの夢を壊さないのも大事だが、俺みたいになひよつこは別け隔てるし、鼻屎しまくるし、救いたくたつて救えるだけしか救えないんだつてことを理解してもら

わなきやな。

素直が一番、変な距離はいらねえ。

一応、人として問題がない程度の最低限の礼節だけあればもう何もいらねえ。

俺は人間じゃないけど、まあ俺だつて人の形してるからな。他所で人間と接する時に変な癖がつかないようにしてくれたら何だつていいわ。

とりあえず場所も何も考えずに拝み倒すガトウーザはやめてほしいし、小声かつ早口で何かを唱えるようになにか話しているメルテイーはもつとヤバイ。

何を唱えているのかを聞いた瞬間にうっかり星になつたら笑えねえから、耳をパタンと閉じたつもりで聞こえないふりした。

純粹可愛いマテイカだけは俺の後ろをトコトコ歩いて、魔物に威嚇したりじやれたりしていて本当に文句なしに可愛いから本当にもう俺シヨタコンかもしれない。

この際戦っている時に感じる強烈かつ身の危険があるような視線はもう何も無かつたつてことでいいんだよな。な。マテイカまでなにか抱えてたら俺もうちよつと耐えきれねえし気にしないでおく。

血に反応するのは魔獣かなにかみたいにかみみたいに勇猛すぎるための欠点なのか、バトルマスタアの性なのか、どっちなんだ？

いや、俺何も感じてないからな。マテイカはかわいいな。

56話 茶転機

次なる目的地はビタリ山。故郷とはそれなりに近いところですが、直接訪れるのは初めてです。名前を地図で知っていた程度ですね。メルティーもそれは同じでしょう。

山の麓には小さな小屋が一軒あり、おや人が住んでいるのかと思えば、お留守だとか。訪ねてきた人はいるようですが、どうもまだ戻っていらっしやらない。話を聞くと、どうやら芸術家のおじいさんの一人暮らしのようです。

孤独死、という嫌な予感がしましたが、単に集中して山の上で作品を作られているのかもしれないから考えるのはやめましょう。

そして、彼のことよりも今は優先すべきことがあるのです。

それは、アーミアスさんの崇高なる使命である、世界中のどこかにある女神の果実の探索。残りは五つとなりましたが、依然情報もありません。私としては、このビタリ山で見当たらないようでしたらカラコタ橋まで引き返しまして、情報収集すべきだと思います。

ええ、アーミアスさんには何か私たちには見えない何かをご覧になってからセントシュラインで休養され、その後は橋をただ通り抜けただけでして、あの場所では買い物をし

ただけなのです。

どうやら長居をなさりたくなかったようですが、それはどうしてなのでしょう？ さつさと通り過ぎてしまいました。私たちとしては周囲に気を配るだけでしたから特にいつもと変わらないのですが、ええ。

アーミアスさんを一人にするわけにはいかない、というのは普段でもそうです。しかし、理由がなければ迷惑でしょうから泣く泣くしなだけで。

堂々で行えるという意味では、あの治安はすべてにおいて悪でもないようですね。

……声が聞こえます。私にだけ聞こえる声。それがビタリ山に近づくに連れ、だんだん大きくなっていきます。

幼い頃、このことを声に出せば薄汚い欲望に駆られた人間たちは神託だといい、それを自分たちの都合のいいように言い換え、儲けてきたあの親族たちのことを思い出し、だんだんと気分も悪くなってきました。

しかし、「声」に罪がないのもまた、分かっているのです。この声は子どものように気まぐれで、しかし「自然」です。「善意」も「悪意」もなく、ただあるままにある。

風のように駆け抜けて、叫びます。悲しみを。どこかの悲劇を伝えます、誰かの誕生を喜ぶ嬉声がそれに混じります。渦巻いて、渦巻いて、こんなに大きな声を聞いていれば私はますます何も見えなくなってしまう、すべてを間違えてしまうに違いないので

す。

私の手を引くメルティーが振り返ります。すでに色とりどりの「声」に取り囲まれた私は、それをかろうじて理解しても、妹メルティーの声はもう、聞こえません。姉メルティーは、私の手を強く引きました。

なんとか足を動かすと、「声」は少し散ります。

縦るように手を握ると、誰かの悪心を嫌うような叫びが駆け抜けて、耳がキーンと遠くなり、優しい「声」の囁きが周りの誰も敵ではないと伝えます。

「ガトウーザ」

ああ優しい「声」。この「声」なら聞いていても心が掻き乱されることはないのに。「声」に惑わされることも、利用されることもないだろうに。囁きを聞かないふりして、その声にすぎります。

メルティーの手は、おずおずと離されました。しかし私は怖くなかった。道しるべを失つても、お導きを受けている私には何も怖くありません。

かたかくかたく杖を握りしめつつも、優しい「声」にすぎればなんだってやれる気がします。

「聞こえますか？」

「聞こえますとも！」

視界が少し晴れました。目の前には天使様がいました。天使様の近くにいると、「声」も風も何も聞こえなくなる。だって、天使様は私を救ってください。こうして、遠ざけてくださる。

ああ、優しい「声」は「声」ではなく、アーミアスさんの救いの手でした。

「あそこに少女がいるのが分かりますか？」

「はい、アーミアスさん」

私は見もせずと言いました。見えなくたって分かります。数多の「声」は少女の居場所も叫んでいましたから。

「恐らく呼ばれているのです、ガトウーザ。なにかに呼ばれていませんでしたか？」

俺は人ならざるものを見ることができませんが、『精霊』となると波長が違うのか見ることができません。声も、聞こえません」

「……精霊？」

「たまにいます。人間の中には、『聞こえる』人が。研ぎ澄ませることができればもっているでしょう。もしかしたら俺も。そのような純粋で強力な耳の持ち主は初めて見ますが。さあ、行ってご覧なさい。なにか変わるかもしれません」

いつの間にか山の入口付近にいました。そこで壁にもたれるようにして立っている、毛皮をかぶった同年代の少女のもとへ背中を押された私は、「声」に耳を傾けているらし

い彼女の前に立ちました。

彼女は隣の子どもに話しかけるように言い、私はくすくす笑う声に囲まれながら、子どもに話しかけました。

……犬か狼のように吠えられましたが。完全に威嚇されています。だけでも、彼女には想定内のようなでした。

「お前、都会の人間だな」

「そうですけど……」

「珍しい、強い耳をしている。声、聞こえるか？」

「認識が一致してるなら嫌というほど」

「なるほど、レンジャーになりたいか？」

「レンジャー？」

それは「声」を聞き、自然を駆け抜ける職業。

彼女は薄く微笑んで言いました。

道が一本、私の前に光り輝いて現れたような気がしました。

「お前、素質を持て余す。なるか？」

「それでアーミアスさんのお役に立てるなら……」

「違う。お前、あの天使のこと、ただの『身代わり』に使うだけ。お前が『声』を聞き分

けて、お前がなる」

相変わらず渦巻く「声」は笑いながら私の体の周りをぐるぐる回っていました。この「声」を聞き分けることが出来るなら、ええ、悩まずに済み、私が……風に攫われないでいられるなら。

私は頷いていました。

気づくと、仏頂面のメルティイが私にナイフを握らせようとして装備できずに失敗し、果てしなく嫌そうな顔でメイジキメラを猛毒で倒し続ける作業が始まっていた。

私に課せられたはずの試練なのですが、これは誰が倒してもいいのだとか。ようはその戦闘を共にこなせば良いと。私は皆さんの体力にいつも以上に気を配り、そして「声」は晴れやかに笑って受け止めました。ええ、あんなに自然の多いここを飛び交っていた声だんだん静まってくるように感じたのです。

いいえ、「声」ではありません。精霊、というそうです。世界に宿るその大いなる存在の僅かな一端と、幸か不幸か重なって生まれた私は僅かな一部を聞いてきたとか。

彼らの囁きを見ないようにすることも、聞こうとすることも、少女は教えてくれませんでした。そして、課された試練をこなすと。

「レンジャー、なりたいか？」

「ええ」

私は、やっと自分の道を見つけたのです。

すべてを埋め尽くす「声」から解放されて、取って返したダーマ神殿で職業を変えて、そして、私は初めて明るい視界で近いメルティーを見ました。紫の髪の少女はいつもと変わらずツンとして、ですが、なんとなく安心したようでした。

私を導いてくださったアーミアスさんにもお礼を……と思ったところ、「声」に付随する光という遮蔽物のないありのままの美貌を目に受け、灰色のふわふわの髪と、滑らかな白い肌と、星屑を閉じ込めたような美しい目と形の良い唇をいっぺんに目に収めた私はダーマでけたたましい叫び声をあげることになりました。

もちろんメルティーにしこたま叱られて、アーミアスさんは慌てて。マティカ少年が手で思いつきり口を塞いでくださいましたから、迷惑はそれ以上かけずに済みました。
が。

しかし、私がそれでも興奮収まらずに……とはいえ人生初めての障害物のない視界に収めた麗しくも純粹であり、寛大で偉大な天使様を見た反応ということでは私に否はありませんが……叫ぶので、ダーマからたたき出されました。

いえ、自ら階段を転がりおりました。室内では喜びを表現しきれないと思ったからです。

「ああああうううう麗しのててて天使様アアアアアアアアアア！」

「どうか、どうかお静かに」

「お美しい！ お麗しい！ ああ、てて天使様アアア！ そのような、ああ、そのようなお顔で、そのような、そのような華奢な体でいらつしやつたのですね！ 不肖ガトウーザ、初めてハッキリ見えております！ 『精霊』越してもあのお美しきでしたから、今の私には刺激が強すぎます！ ええ、ありがとうございます！」

吹き出す鼻血も構わず、しかし鼻血には気づきましたのでもちろんアームiasさんから少し距離を取りました。万が一にも天使様を汚さないように、です。

私はまた転げ回って喜びを表現したかった。しかし少しの理性もありましたから、そうせずにただ叫びました。気づくと頭に大きなたんこぶを作つて、粗末な布団に寝かされていましたが。

ええ、何が起きたのかいまいわかりませんが世界の光が減るとこんなに見えるのですね。私の世界は見えずぎていたようです。視界が丁度いいと細部が良く見えますとも。

私はこれで、返し難く、有難い恩を受けました。ですから、勿論これからお仕えさせていただきたいと思えます。形としては雇用ですが、ゆくゆくはもつと親密な……親密な奴隷になりたい。

57話 似非人間

とりあえず俺は、人間たちが進むべきと思つた道が相当他人へ害を及ぼさない限りは応援したいと思つてるから今回のことは喜ばしい。

ガトウーザがより執拗に俺のことをジロジロ見るようになったが、そんなに視力が良くなつたのなら翼もわつかもまない天使のことを敬おうとする己のおかしさに気づいてくれ。それで普通に接してくれ、な？

ほら見ろ、どこからどう見ても、腕は細いし身長は低いし、頼りねえモヤシだろうが。天使が特にムキムキつてイメージはないだろうが、やっぱりより筋肉があつた方が物理的に強いし、精神的にも頼りがいがあつていいだろうが。もつとたくましい方がカッコいいし、モヤシより安心して守護を任せられるだろう？

俺が何をしても感動しているところ悪いが、自分の中の天使のイメージと現実の俺とを照らし合わせて早く目覚めてくれ、頼むから。ホントオート天使バレ機能マジいらねえ。もしかして、もうバレてる人間たちの目が覚めない機能もあるのか？

それでもなきや、さんざん情けない姿を見せてきた俺をまだ信仰しているこいつらが我に返らない理由がわからねえ。リツカたんみたいに信心深くて敬虔ない子つてこ

となのか？ いい子たちなのは……確か、ああ、確かだろうが……。悪い子たちじゃねえんだ。

だが、人間扱いされてえな。ただの人間扱い。気軽に軽口叩いて、笑いあつて、気安く遊んで、馬鹿なこととして、そんで、そんで、恋をして……。せつかく翼も輪つかも無くせたのに、これじゃあただ姿が見えるだけだ。

……「だけ」だあ？ 俺は、ただそれだけを、切望してきたんだろうが、百年も！

随分贅沢になつちまつた。これ以上の高望みはしちゃいけねえ。天使がお役御免になれば俺は地上で過ごしたいという望みを持っているが、それは少なくともたつた数百年では叶うわけがない。人間と魔物が手を取り合っていない時点で。俺が師匠くらいの年齢になつてもまだ厳しいだろ。

俺は天使だ。間違いなく天使だ。根幹から、このいい子たちと違う。守護タイプの男性型の天使として遣わされた存在だ。ほかの生物と違って親すらいない。この世に血の繋がりのある相手はいない。天から遣わされた守護機構だ、それ以上の存在ではない。

血と肉の器の機構だ。「あいするところ」を授けられた魂らしき何かを胸に宿して、輪廻の外から輪廻のうちの人間たちや動物たち、魔物たちを円滑に潤滑させるためにいるはずなんだ。すべての魂に安寧あれと。すべてを救う日が来るまで。星のオーラを集

めることを、俺はそう解釈して生きてきたんだ。

だから、本来、「俺」はなにも望んじやいけねえのに。そもそも「俺」を持たせてもらっている時点でかなり温情だ。そんな「こころ」がない方が神も創りやすいだろうに。「こころ」のない駒の方が楽だろうに。

こうして話せるだけでも良いのに、さらに触れ合えるなんて最高だ。自分の言葉を自分の声でリツカたんに伝えられて、その笑顔は俺を見てくれる。ああもう望むことなんてない！ はずだろうが！

よし、よし、大丈夫だ。驕った天使の行く末はロクなことになりそうにないが、俺はちゃんとここで悔い改めた。ビタリ山を登山しながらで悪いが、真面目に考えた。神に心のうちを白状したわけじゃねえが懺悔した気分だ。

俺は天使だ。天使だから、天使扱いされている。当然だから不満に思うものか。いや、まあ、頭で理論を理解してもささやかな願いを止められないけどな。

欲望を持つ気持ちも天使に授けていった神は俺たちがそのまま墮天していくとは思わなかったのか？ 墮天したらそれはそれで、ただそれまで、みたいな冷たい考えなのか？

まあ墮天なんてしないけど。基本的に天使ってのは善良だから。俺みたいにかわいい子をペロペロしたり、何代にも渡って観察したりするやつなんていねえよ。

ただ、守護はするが無関心だ。天使から見ればどんどん死んで世代が入れ替わっているのに、いちいちそんな短い命に縋ったら頭がおかしくなりそうなんだってよ。

死にゆく人間を悼む気持ちはあるが、それより同胞たる同じ天使のことを考えていた方が楽なんだとよ。だからたった一人の行方不明者に石碑まで建ててるんだ。それが悪いとは思わねえけど。

それにしたってよ、天使なんて不慮の事故でもない限りそうそう死んだりしねえんだし、それを思えば人間の方が大事じゃね？ 俺って頭おかしいのかね？ 今この瞬間に死んだ天使はまずいないが、人間は沢山死んでいる。

まあいいや。天使が墮天しないのもすべて神の思し召し。神の考え、見極めた尺度なんてたかだか下僕に理解できるわけがない。人間たちと違って俺たち天使はどこまでも神の低位互換だしな。

成長することまでは取り上げられなかったが、天に住まう代わりに生物の形だけ与えられた、生まれながらに限界がある、「完成された」存在なんだから。

個人の努力で埋まることもあるにはあるが、その上限はあからさまに定められている。数千年生き、そしてその記憶を保持しているオムイ様が万能ではないことから明らかだ。人間から見れば、そして俺みたいないひよっこ天使から見れば途方でもない年月を生きた大天使だって、分からないことだらけで、どうやったって神になり得ない。

それに俺だって……人間の百三十五歳と比べたらものすごく未熟な精神のはずだ。人間のその年齢の老人は見たことねえけど。

達観なんてしていない。俺自身、そこまで死は恐れていないように思っているが、死を旅のように語った老人のようにはなれない。本当に死にそうな時はどうなることやら分からねえ。みつともなく死にたくねえと喚き散らす気しかしねえ。

そもそも人間たちとは生まれが違うといえればそれまでなんだろうが、それにしたってもう少しずっしりと構えられてもいいような気もする。百年生きた人間の叡智に目を見張るものがあるのに、天使の百歳ぼっち、ただのヒヨコのような見習いから片足抜けたところってのがなあ。

天使界の教育が人間界のそれより劣っているだけならいいんだが。

だけどもあ、だから天使は外的要因がなければ死ななくとも世界に影響がないのかもな。相当「変なの」以外は何百年生きても変わらず穏やかで、どこか純粋で、優しく、どこか生物として欠けているまま、ずーっと生きる。

俺は多分あのシヨタコン野郎と同じで「変なの」だから天使として長生きはできないはずだ。穏やかとは言い難いし、純粋では断じてないし、優しいのは人間にだけ、生物としては欠けているが。それについては、肉体面は平均的な天使だからなあ……。

やべえわ、不慮の事故でさっさと星になりそうだけ。だって俺は天使らしくねえか

ら。欲望まみれで、エゴまるだしで、自分のことばかりだ。天使らしくねえよな。

まあ、生まれたタイミングが良かったのか悪かったのか、そうなる前に救いに与れるかもしれないけどな。俺にとっての救いは人間になることだから女神様、よろしく頼むぜ。

……師匠も分類的にはどっちかつたら「変なの」だよな？ あんな武道家みたいな天使ほかにいねえよ。だけど普通に殺しても死ななそうだよな……。ムキムキだし。

師匠。ホントどこにいるんだろうか。

「アーミアスさん、険しい顔をなさっていらつしやいますが、何かありましたか？」

「……」

「アーミアスさん？」

「あ、ああはい。なんででしょう？」

「いえ、その、険しい顔をなさっていたので……」

「……すみません」

顔に出るとか！ 俺！ ダメじゃねえか！

クソ、まだまだ俺は若輩者だ。まだまだ俺には師匠が必要だ。

ポーカーフェイス！ ポーカーフェイス！ 悟らせるな、幼い子たちに！ そんな人間たちには関係のないことでこんな心配そうな顔させてしまったなんて、不甲斐ない！

メルティーの心底心配そうな顔に申し訳なくなる。マティカも黙って俺を見てるし、あーもう、ダメだな俺は。ガトウーザは……ハアハアしてるから俺は何も見えていない。見ていないんだって。日に日に悪化してねえかお前。

それ直した方がいいぜ。俺だって脳内で気持ち悪い事考えているがそこまであからさまに出したりしねえんだぞ。俺以外にはやるなよ絶対。てか俺にもするなよ。

「皆さんには関係ないことなんです。個人的なことなので」

「そうですか、アーミアスさん。でも、私たちの個人的なところを救ってくれたのはアーミアスさんなので、」

「私たちが遠慮なく解消してください！ 私ならサンドバッグにしてもいいのですよ！」

もしかして、特殊な性癖をお持ちで？

「兄さんは黙って！ すみません愚弟がこんなので！」

矛盾したことを言っているが、妹はまともでよかった。初見で俺に念仏唱えてたからどうなることかと思っただが、本当によかった。

「わ……」

わかるわマティカ。ガトウーザこわ……。

えっ、怖。えっ？ 何がスイッチだったのか。

よし、俺は何も聞いていないし何も見ていない。な、そうだろ。ガトウーザはキラキラした目をして、俺のことを心底心配して、俺のことを思つて自分に出来ることはないかと聞いてくれたんだ。ガトウーザの謎言語を解読したらそういう事だろ？

うんうん、いい子だ。少し大人しくしておこうな。とりあえず頭を撫でたら静かになつた。素直だ。

メルティーとマティカが頭をぐりぐりしてきたから最初からお行儀がいい二人も撫でておいた。そんなんでいいのかよ。もつと……金銭的報酬を求めるとかはねえのかよ？ 頭撫でたらメルティーがすぼーんと腰を抜かしたのでマティカが背負つた。何でだよ。どうしたんだよ。

え？ 俺に撫でられたから、啓示を受けたような思いです？ やべえなそれ。俺も啓示なんてあの一回しか受けたことねえけど、そもそもそんなにありがたいものでもなかったぞ。ルーラマジ便利だけど。メルティーは信心深いんだな。

天使より信心深いのは素晴らしいことだな。俺、信仰心うつすいけど。俺にとつて神は……なんだろう。嫌いではない。俺に親はいないけど、父親という点では神が本当に実の父と言えなくもないし。だが声聞いたことすらねえし。名前しか知らねえし。良も悪いもねえな。啓示の声は父なる神ではないし。

まあ、いいや。さつさと変態言語は忘れよう。俺の精神衛生上流石によろしくない。

そろそろなんか出口も見えてきたし、山頂についたらラボオさんだっけ。山のふもと
でたずね人がいたから名前を聞いておいたんだが、そのじいさんを探すか。

58話 彫刻町

天使様。

ああ天使様。

神と同じく救いに来てくださらなかった、と思つていた過去の私を撲滅したい。こんなに素晴らしい天使様が目の前にいる以上、疑いを持つ過去の自分なんて必要ありません。

アーミアスさんは、山頂の石でできた精巧な町につくと、芸術家のおじいさんを手分けて探すようにおっしゃりました。

私はもちろん二つ返事で探しに回りましたが、灰色の石でできたエラフィタ村のようなこの場所には、特に生命の気配がなく、ええ、見つかったとしてもはや……いえ。不吉なことは考えないと、決めただけではありませんか。

生命なきこの場所におわすアーミアスさんはいつにもまして神秘的で、お美しいのでそうそうに諦めた私はこっそり見ていることにしました。速攻でメルティールから一撃貰いましたが。

レンジャーというのは耐久面において僧侶より優れているようですね。以前よりは

ダメージが減ったように思います。魔力を吸わないように手加減してくれただけかも
しれませんが。

ああそんなことは良いのです。メルティーが私を咎めているのはわかります。わか
りますが、私はもつともつと見つめていたい。あの天使様になら何をされたつて構わな
い。むしろなにかして欲しい。なにか……なにかを。……考えているだけで何故か鼻
血が出てきました。が些細な問題ですよ。

足蹴にされたい。あの優しく慈悲深く、星を宿した美しい目を持つ天使様に冷たくさ
れたい。優しくされたいのももちろんですけど、天使様はお優しいので新鮮な一面が見
たいのです。

お導きを受け、私は自らの道を得ました。この身を捧げても一向に構わないのです
が、さらに欲を言うなら……ということ。はしたないことですが、願うのをやめら
れそうにありません。

もちろん、もちろん！ あえて嫌われるようなことをするつもりはありません。私は
誠心誠意仕えさせていたきたい。真摯に励みますとも。それはそれです。平手打ち
をされたい。あの、白魚のような小さな手で。ええ、それは見た目だけ。実際には硬く
なった剣のタコが出来た、天使様の努力の手で思いつき……アイタツ。

ストロスの杖で思いつき殴られ、たんこぶができました。ダメージ、三十くらい

あつたのではないですか？ 容赦ないですね、私の妹は。

とりあえずホイミ。

「本当にそろそろ真面目になつてくれないと困りますよ」

「メルティ、貴女だけは私のことを理解してくれるはずですよ」

「理解？ 理解ですか。ガトウーザはいろいろな生温いんですよ。全力を尽くしてから妄想の世界に羽ばたくべきです。」

平手打ち程度で満足してしまうようなただの喚くだけで食べることも出来ない豚にはなりたくありません。

私のもつと役立つ家畜になります。私は豚であり、牛であり、馬になります。羊にもなります。それくらい在意気込みを持ってないのでですか？」

メルティはキツパリと言い切りました。ああ、それでこそです。私の半身は言うことが違いますね。

素晴らしい。たしかに叩かれて悦ぶだけの豚ではなんの役にも立てません。もつと有用な存在になり、ぞんざいに扱われたい。いえ、もちろん、どんな扱いだって構わないのですけれど。

アーミアスさんが私を褒めてくださるその瞬間は、そんな邪な欲望をすべて忘れて、ただただ天にも昇るような気持ちですからね。ええ、本心としては「見ていただきたい」

でしょうか。

天に愛された麗しの、幼く整ったあのかんばせに。

「さすが私の妹ですね。志が違います」

「あなたの妹になった覚えはありません。あなたこそ弟なのでは？ 考えが劣っているという点において、私の方が姉にふさわしいのでは？」

「そんなあ……」

近くを散策していたアーミアスさんが静かに頭を抱えました。一体どうしたというのでしょうか。しかし、近づこうとすると、ぴったりアーミアスさんに張り付いても許される羨ましい無表情の少年に遮られてしまったので、どうしようもありません。

幸い、アーミアスさんは体調不良などではない様子。なにかお気づきになったのでしょうか？ 石で彫刻された精巧な木に軽くもたれかかっついていらつしやいます。ああ、顔を覆ってしまわれた。本当にどうなりました？

ええ、何故かお疲れのようですが、怪我や病気ではないことはわかります。何が原因でしょうか。魔物ですか？ 敵襲ですか？ 殺しますか？ 覚えたてですが、弓があるのでお手を煩わせることなく暗殺もできる……ようになります。今はまだ、修行不足なので。

ああこれでは良くない！ 私はお役に立てない！ お役に立って、あの瞳に映りた

い、それだけなのです！ ええ、それだけ！ 私の信仰は、私の全てですよ！

「兄ちゃん、姉ちゃん、ちよつと……」

「なんでしよう」

「なにかご提案があるのですか？」

マテイカ少年は、とんとんと背負った剣の柄を叩いてから言いました。子どもの無表情で無性に怖いですよね。

「今すぐたたつ斬られたくなかつたら黙っておじいさんを探そう？」

「……」

……すべて理解しました。この少年は外見よりも頭が良いようです。私たちはこんなに美しく静かな芸術作品そのものの空間で騒ぎすぎた、ということなのです。ええ、美術館で騒いではいけません。当たり前前の事です。この静粛の中の美を汚すような真似をするなどということですね？ よく分かりました。

ええ、私たちこそが幼すぎました。悔い改めます。

口をつぐんだ私たちを見て、静かになつたことに気づいたらしいアーミアさんは感動したのか賢い少年の頭を沢山撫でました。当然の権利でしょう。

そして……あつ、抱きつかれた！ 羨ましい！ それは羨ましい！ なんて羨ましい！ 子どもを慈しむ兄のように、アーミアさんは自分とさほど変わらない身長のマ

ティカを可愛がっていらっしやいます。もっと身長差があれば抱き上げてくるくる回しそうな勢いです。

アーミアスさんからすれば、私たちはすべからく赤ん坊みたいなものでしょうから、おそらく他意はないのでしょうか。ただ慈しまれているだけなのでしょう。そう信じていますが。ですが、羨ましい。

アーミアスさんの肩越しでこつちを見て、いいだろうと言いたげに無邪気に笑う少年が、アーミアスさんが思っているような純真な少年とは到底思えないのです。ええ、絶対私たちを利用して美味しい思いをしたのでしょうけど、全面的に私たちが悪いのも言えません。

しかし、彼が完全なる善人であるかは疑問があります。あの少年の周りにいる精霊らしき光もなんだか……その、アーミアスさんを取り巻く美しく清浄なものとは正反対に見えるので。

彼ならアーミアスさんの敵が人間であつても叩き斬つてくださるでしょうね。私たちがなにか狂つてそうなつたとしても。頼もしいです。ええ、善性でない、ということはずしも良くないこととは限りません。善性でないからこそ必要悪になれますから。

ですから、私は少年を取り巻く精霊たちのことを口に出したりしません。なぜなら、いくら彼が羨ましかろうと、アーミアスさんのお役に立っているという意味では重要な

人物だからです。私は私欲だけで動いたりしません。

それにそもそも、善人でないから、というのがなんだと言うのでしょうか。それを言うなら私たち、極悪非道な詐欺師の子どもですからね。生まれながらの罪ならば背負いすぎていくらいです。

メルティーがこんなにいい子に育ったのは奇跡みたいなものですよ。すごくいい子なんです。私みたいな人間と過ごしてくれる優しい子。

ここは少年に花を持たせましょうね。でも、いつか挽回しますから。それに家畜は主に逆らったりしないので。ねえメルティー、そうでしょう？

同意のアイコンタクトは、冷たい目をしたメルティーがマティカを睨んでいたことで受け流され、まだまだ妹は子どもっぽく嫉妬をするのだなあと思つたのです。

寛容、寛容ですよ、メルティー。大丈夫です。アーミアさんは素晴らしい天使なので私たちの中の誰かを選んだりしません。この中の誰か一人の天使になることはありません。

だって出会った時からずっとアーミアさんは同じ人を見ているじゃありませんか。考えるだけ仕方がないのです。その慈愛の欠片をお与えいただいて、さらにちよつとぶたれたいぐらいなのです。高望みしません。

羨ましくない訳ではありませんが、アーミアスさんの感情は恋する人間のそれではないような気がするので、焦ったりしません。そもそも独り占めするような感情はないですね。彼の世界に存在していたい。空気のようにさりげなく。

天使様。ああ天使様。お美しく慈悲深い天使様。その尊い行いをこんなに間近で見られる幸運に感謝致します。

かつて翼があつたその背中をじつと見つめ、空から降り注ぐ日光がキラキラとした翼の名残を見せるように輝いたのを目にして満足した私は、ようやく麗しの君から目を離しておじいさんの搜索をしました。

洞窟とか、入れるところもあるんだけどこの石の町の家って大抵、外見は本物そつくりでも入れない。綺麗なドアノブを引つ張つても相手が石の塊ならどうしようもない。

人間そつくりな石像と、家と、動物と、エラファイタ村のの真ん中にあつた大きな桜の木がへし折れる前の姿が本当に生き生きしててすごいね！

これで動く人間がないなんてウソみたい。すごいなあ、本当にすごいなあ。これを作った人はどんな人なんだろう？ 何を思つてやつたんだろう？ エラファイタのこと、すぐく想つていたんだね！

おれなら、セントシユタインの裏路地なんて覚えていたくもないけどなあ。

魔法を使う二人が真面目に探し始めたけど、こつち側に生き物の気配はないよ。村の奥の方ならまだいるかもしれない。そつちまで分からないし。

だから、木の根元を越えて、おれたちは村外れに建っている家の方に向かった。そこにある家を見て、ちよつと首をかしげたアーミアスさんがおもむろにドアに触れた。

あ！ 開いた！

「こちらが二つ目のご自宅なのかも知れませぬね。マテイカ、二人を呼んでくださいますか。突然お邪魔したのですから、揃つてお詫び申し上げます」

「うんー」

おれが教会の近くで探している二人を呼んでくると、アーミアスさんはまだ家の前にいて、何故かキョロキョロしてたけど、結局何も見つからなかつたらしくて、一緒に家に入りましようと言つた。

何故見回していたの？ と聞いたら、誰かが見ているような気がしたつて。ガトウーザ兄ちゃんとメルティー姉ちゃんを思わず見たけど、ブンブンと首を振っていたから嘘じゃないと思う。大丈夫、木の彫刻越しじゃ見えないよ。嘘じゃないのは信じるよ。

え、なら、お化け？ お化けなの？ 怖い！

お化けじゃないにしても、何かがいるつてことだよね？ 探してるおじいさんならい

いけど、そうじゃないなら怖い！

ちよつと涙出て来た……。顔も名前も知ってるメルティー姉ちゃんの怖い顔より怖い……正体不明が一番怖いよね?!

なんなんだろう、アーミアスさんがいるならお化けでも大丈夫だよね？ 幽霊はアーミアスさんが何とかしてくれるし、魔物なら斬ればいいけど、お化けはどうにもならなくて怖いんだ。

相変わらず泣き虫治ってないけど、でも怖いから、えつと、この際ガトウーザ兄ちゃんでもいいや。おれより背が高いから隠れとこ……。

ダメだ！ リツカさんの年齢を数えるな！ 必然的に悲しくなる！ 俺は、俺はリツカさんと同世代の気持ちで生きるフリくらいしてえんだ！ 俺はピチピチ！ まだまだ若い！ まだピチピチでナウなヤングだから！ アゲアゲで行こうぜ！

本当に、天使としてならまだまだ若いからな、セーフセーフ。外見だつてまだまだ……ほら、声変わりも来てねえし。うんうん、大丈夫だ。それで今の流行りはなんだっけ？ せめて若い擬態だけでもさせてくれ。

声変わりもしていないようなガキつて言われちゃおしまいだがな！ ニードは……声変わり……してる、よな。既に俺年下説。

だが待て、まあ落ち着くんだ、俺。個人差という魔法の言葉で二年くらいは持ちこたえられるからな！ 俺の成長は天使として普通だが、まあ、俺が人間ならちよつと遅れて身長伸びるタイプなのかもしれんしな！

リツカさんより頭一つくらい身長あるならカツコいいところ見せられるよな、牛乳か？ 肉か？ 俺がもし、天使の務めを果たし、「救済」されて人間になることが出来たら、リツカさんにカツコいいところ見せるんだからな！

待つててリツカたん！ 俺頑張る！ 最強キートなりツカさんの隣に立つても違和感のないような雰囲気イケメンになるから！ 筋肉つけて、身長伸ばして、このうっすい顔は……どうにもならねえけど、髪の毛染めるくらいならやるからな！ どう頑張

張つても雰囲気イケメン止まりだが、俺頑張つてモヤシ卒業して、たくましい男になるからな！

俺の邪念を感じ取ったのか、隠しきれない世代のズレを嗅ぎつけたのか、住民のスライムが俺たちを訝しげに見上げた。

こいつら何しに来た、といわんばかりに。ホント脳内で幸せ妄想炸裂させて、何しに来たんだろうな。いや、ラボオさん探しに来たんだが、ここがスライムの家ならどうしようもないし、もちろん追出すなんてこともしないし、ただちよつと聞くだけだ。

悪いな、ホント。お騒がせしました。ご迷惑おかけして、申し訳ない。

「すみません、少しお尋ねしたいことが」

スライムって相当小さいやつでもない限り、年齢とか外見だけ見てもわからねえんだよな。それで別に寿命があるとか聞いたこともないから、最弱の一角にして実は何百年も生きている個体も……いるかもだし。

まあほとんどちよつと天邪鬼な口調のやつとか、可愛い子どもみたいなやつとかそんなんばっかりでわかんねえんだけど。なににせよかわいい。攻撃してくるスライムだって、まあ共に歩めないという点では悲しいが、可愛いことには変わりねえし。

それで、このスライムが喋ったら警戒しなくていい。喋るスライムは人間を好き好んで襲ってきたりしない程度には自分の実力がわかっていたり、魔物にしちゃ比較的濃厚

だ。……と、思う。

「……、な、何。おじいちゃんじゃないよね、何しにきたの」

スライム特有の高い子どものような声。ぷるぷるしてて可愛い。

「その、『おじいちゃん』の安否を確認しに来たのですが」

「……」

スライムはへによりと頭の先のとんがったところを曲げた。なんとなく悲しそうだ。

……それはつまり。

どうも様子から見て、この場所を作ったのはラボオさんで間違いないみてえだが、スライムはあとから住み着いたわけでもないらしい。基本的にスライムつてのは善良……というか純粋な奴らだからな。嘘をついているにしてもバレバレってことが多い。

だから、つまり、一緒に過ごして「いた」んだろう。死因が老衰ならまだしもいいんだが……聞き出すのは流石にやめておくか。わざわざ傷をえぐることもない。

仲も良さそうだし、探したらお墓も見つかるだろう。手を合わせたら下山するか。ここには何も無い、と思う。

「ありがとうございます。では、みなさん、」

地面が唐突に揺れた。スライムが飛び上がって、ぴよんぴよんと家の奥の方に跳ねていく。地震の時はむしろ家から飛び出す方が正解だ。しっかりした石でできた建物と

はいえ、どこかが割れて崩れてきたらどうするんだ。

俺はスライムもろとも家の外に飛び出そうと、捕まえた。すると、もがいて抜け出したスライムは、ただただ脅えるように叫んだ。

「またあいつが来る！」

地震じゃないのか、もしかして！ マテイカが怖かったのかぼろぼろ泣きながら俺の腰にしがみついていたのが、原因があるのがわかって涙が引つ込んだらしい。勇ましく剣を抜いて外に飛び出そうとするのを慌てて止める。行くとしても、考えもなく行くんじゃない！

揺れはわりとすぐに収まった。そして家の外からはなにやら心配がする。揺れの元凶であることは間違いないが、そいつが悪か善かなんて分からない。まあそれは、「俺にとつて」とかいう片一方の目線にしかなりようもないからどうでもいいか。

しかしスライムは怯えている。何度か来ているようだが、聞き出すのは無理そうだ。ふるふる震えて可哀想に。

うーん、飛び出したら戦闘にもなりかねん。どうしたものか。去るのを待つべきか。だが迷っているあいだにも、そいつはここに入ってくるかもしれない。戦うにしても狭いところでは危ないだろう。

仕方ない、相手はもちろん見極めたいが、外に出るか。

いや待て、出るとは言ったがマティカ、ガトウザ、性急になるな。聞いた瞬間飛び出そうとするな。俺の後ろから来い。見ていかにも危なそうなら家に引っ込んで態勢を立て直してからでも構わねえ。だがとりあえず俺の背後だ。安全にいけ。

メルティーなんて魔法使いの配置つてものをすっかり理解しているようだぞ。……ん？メルティーも待て、まあ待てよ。相手も見ずに扉を開けた瞬間、先手必勝、魔法をぶつける！はダメだから。

地震の元凶もいるだろうが、扉の前にいるとは限らねえし、関係ない人がいる可能性だってないわけじゃないだろ！

頼りになる仲間たちは頼りになりすぎて少し暴走気味らしい。とりあえず止まれば止まれ。

「いいですか、相手がわからないときは俺の後ろにいてください。相手、位置、状況、何かを見極めたら行動してください、頼みましたよ」

「分かったよ、アーミアスさんの敵を倒せばいいんだね！」

「……ええ、まあ、おおよそ」

「よし、張り切るぞ！」

キラキラした目で言われちゃ、否定しづらい。俺の曖昧な返事でも元氣よく笑うマティカが可愛くて癒しなのも確かだ。

……一番マシだと思うが、マテイカもどつかズレてるよな。俺が言えたものでもないけどこのパーティ大丈夫か？

ともあれ、俺が盾を構えて外に出ると、そこには何も無かったのちよつと拍子抜けした、が。とつきに上から気配を感じて、飛び退くと、俺がいたところに禍々しい力を纏った像が立っていて、俺たちを睨みつけるような表情をしていた。

そいつは石像だった。ここのガーゴイル的な存在だったのかもしれない。しかし、魂のような、魂でないような曖昧な気配をさせ、俺たちに敵意をぶつける危険なものになっていた。

ふと、俺は思う。この像はエラファイタで見かけたものではないな、と。

エラファイタを愛していただろう製作者が、愛と郷愁を込めて作っただろうこの町。そこにはなかったこの像は、きつとこの町に置くためのものではなかったのだろうか。

もし、この像がとびきりの愛をこめて創られていたとしたら、愛する人を模して創られていたら、創られたあとに誰かの想いを受け止めていたとしたら。

こんな紛い物のような、魂のような、「何か」を宿す、そんな存在ではなく、本物の魂を宿す存在になり、もつと恐ろしく見えただろうなあ。

まあいい。俺にとつては魂が曖昧な方が罪悪感がなくていい。ラボオさんの小さい友人があんなに怯えている様子からして、少なくとも意図的な守護像でもなさそうだ。

こいつが女神の果実で仮初めの命を吹き込まれた存在かどうかの区別は付けられねえが、とりあえず倒させてもらおう。

石の巨体の一撃なんて、見るからに重くて痛そうだし、若い人間たちが受けていいものじゃねえからな。きつちり俺に受けさせてもらおうか。

俺は口笛を吹いて挑発し、見事に怒り狂ってきた単純野郎の攻撃に、即刻腕が痺れるほどの衝撃を受け、なるほどスライムが怯えて逃げることなく閉じこもって凌ごうとしたわけだと納得した。

こんなのスライムが食らったらひとたまりもない。盾がへしやげそうだぜ。

60話 像

研ぎ澄ませて。耳を傾けて。石でできたこの町は、風の音しかしないくらい静寂に満ちている。

だから私の耳には聞こえるのです。妖精の声が、精霊の声が。研ぎ澄ませて、研ぎ澄ませて、私は力を乞う。

美しき小さな天使様をお助けする力をお貸してください、と。

私と比較しても頭半分は小さな背はいつだって私の前にあります。私たちをお守りくださる麗しの戦士様は、無機質かつ無慈悲な像の繰り出す重い一撃を何度も受け止め、私ならばとうに逃げ出したくなるような傷を負っては癒され、決して膝をつきませぬ。

しかし、こちらを振り返ることもなさいません。私たちを信頼してくださいっているのです。気高い守護者の期待には応えなくては！

ああ聞こえる、あんなに煩わしかったはずの音が頼もしく。ため息混じりに力を貸してくださいさる妖精の音が。ツンデレですか、それとも……？

妖精達のポルカ。

私の周りを色とりどりの妖精たちが踊り、歌い、力がみるみる溢れるようです。私の「必殺」に呼応するかのようにメルティーもミラクルゾーンを解放しました。魔力を気にしなくても良くなった瞬間、氷の呪文が連続で炸裂しはじめ、なんとも頼もしいですね。

凶悪なまでの破壊力を誇る番人は、私たちの「必殺」など全く気にするそぶりもなく、踏み潰すかのようにこちらを攻撃し、そのたびに地面がグラグラと揺れます。

家も町もすべてを破壊し尽くさん勢いで私たちを排除しようとするのです。明確に殺意が向いているのは私たち「侵入者」たちですが、だんだんなりふり構わずに襲い来るようになっていふことに危機感を覚えます。制御のない人形に力を与えたような……そんな危うさなのです。

私たちは繰り返される攻撃に付随した揺れに必死に踏ん張りますが、そもそも天におわす存在であるアーミアスさんの足元は私たちと比べておぼつかないのも気になります。

ええ、これは不敬であり、天使様に邪魔だてする行為です。許しはしません。天使様の手を煩わせる存在なんて！ そうなってくると、わざわざ転職のために時間をとっていただいた自分をメッタ刺しにしなくてはなりません、ともあれこいつもガレキにしてやりますよ！

そう決意した私を狙う一撃に、滑り込むように割り込んだアーミアさんが吹き飛びました。私は、私は、それがゆっくりと動いているように、見えました。時間がゆっくり動いているような。

私は守られている。ですから、私は、お返しをしなくてはならない。希望と光そのものである彼の矛にならなくては。高潔な天の盾に守られてばかりでは、いけないのです。救ってくださいる存在が目の前にいらっしやるのなら、できうる限りの恩返しが必要ですから！

私は何よりも彼を尊重する。私は、です。私はほかの誰が何を為そうと関係ない。私私の道を往くのです。ですから、私は、私の持てる力をすべて使う。何であっても利用しましょう。

新たな得物である弓を引き絞ります。非力な腕がぎりぎりと、みしみしと軋むのも構わず。レンジャーとしての心得がなんとか使い慣れない弓を使わせます。

ああ、狙え、目を狙えと黒き精霊が囁きます。力を貸してやろうと怪しい光をたたえた精霊が、穏やかな光の妖精たちを押しつけながら私をそそのかすのです。今だけは、助けてもくれない神の力の残滓の存在が、これまであんなに鬱陶しかったというのに、心地よく感じられました。

言われた通りに放つと、見事に像の目に突き刺さりました。私は特に弓を使ったこと

があるわけではないのです。偶然でしょうか？　いいえ、偶然で出来るはずはありません。ですから、これは、精霊の思し召し。

自然と心を通い合わせて、獣とともに生きるのがレンジャーなのでしょう。ですが、私が成り果てようとするのは……きつと、相手が闇だろうと光だろうと関係なく精霊と妖精の声を聴き、それを自分のために利用する邪悪なシャーマンです。

構いませんとも、ええ。灰髪の天使様のお役に立てるなら。ご迷惑はおかけしません。たとえこの身が堕ちたとしてもご迷惑はおかけしません。堕ちるならひとりで静かにしますから。

私は武器を魔法の補助具としてしか用いたことがありません。ですからこんなに腕を酷使したことはありません。回復魔法を唱えることは慣れたことですし、ベホイミだつて容易なことですが、攻撃呪文を唱えた訳でもないのに魔へ対して直接攻撃を仕掛けているなんて、経験したことがないことです。

しかし、想定していたことよりも恐ろしくありませんね。かつて魔法使いになりたかつたように、別段殺生に対して忌避感が強いわけではないですし、相手が魔に属するものならなおさらです。

アーミアスさんの思い切りの良い剣のきらめきを恍惚と見つめつつ、私は腕が明日は使い物にならないだろうかと予想しながらも連撃を続けました。甘言を囁き続ける闇

の精霊の、大いなる力を借りて命中させながら。

対価としてなにか要求されましたらなんとしてでも握り潰して差し上げます。精霊には困っておりませんので、一匹や二匹取り憑くのが減ってもむしろ万々歳ですよ。

愛想をつかされる日がくるならば、それはそれで普通の人間の目を手に入れることができますからそれでも良いです。アーミアスさんのためにキリキリ働いてくださいね。私の力なので遠慮しません。

中級回復呪文は私にとってそう難しいものではありません。ええ、お役に立てて、いますよね?!

陽の光にすかされて、灰色の髪が銀色に輝く美しい奇跡を見つめ、私は充足感に満たされて、幸せでした。

何回腕もげるかと思ったかわかんねえぜ。だが、なんとか助かった。みんな無事だしな。まあ、完全に俺だけダメーシ食らったってわけじゃねえけど、上出来だろう。反撃でちよいと斬りつけることも出来たし。

にしてもだ、なんだよあれ、あの番人は。俺みたいな平凡かへボな戦闘力しかない天使だと盾で受けてるようで受けることが出来てねえ。ハァー、危うく星になるかと思っ

たわ。

ガトウーザがものすごい猛攻と回復を一手に引き受けて張り切ってくれて助かったぜ。今、完全に疲労で地面に倒れ込んでるが。本当にお疲れさん。

周りにあのスライム以外の魔物の気配は……今度こそないし、しばらく休んでいてもらうか。ありがとな。てかよ、なんか下心と欲望丸出しなのに、サンデイ以外の妖精に好かれるなんて器用だなお前。あんなにポルカるレンジャーいないんじゃないかね？

これが生まれ持つての才能ってやつか……。俺もなんかトクベツな才能、欲しかったぜ。天使にも個体差あるし、気づいてないだけで俺だけの特徴とか、なんかねえのかな。

師匠はハゲで親しみ深い才能があるだろ、ラフエツト様は包み込むような優しさという才能が……ん？ どう考えても両方後天的か。だがラヴィエル様の美貌は才能だ。維持は努力だが、天使はそんなに努力しなくなつて容姿に変化がない。

ああ、だが、上級天使はみんな、誰が見てもわかるような輝くような天使っぷり。より天使らしいというのも才能かもな。あんな天使らしさ、なくて良かった。オート天使バレは俺にもあるけど、俺にあるなら誰にでもあるだろ。

「皆さん、ご無事ですか？」

まあピンピンしてるのは見たらわかるが、もしかしたらハイになつてただけでなんかあるかもしれない。

「守ってもらえたから！」

マテイカも攻撃の手を緩めずに頼もしかったぜ。頭を撫でる。

「良かった。あまり俺からは攻められませんでしたから、本当に助かりました」

「なんでもつたいたい言葉！ 私、私、もつと精進いたします！ 全部敵を燃やしますし、爆破しますし、凍らせますね！」

ちよいとテンションが高いが、まあ、いつも通りか。こつちも頭を撫でる。それを見ていたガトウーザがビクンビクンしていて怖い。あれは……羨ましがってんのか？

しゃがんで撫でておく。髪の毛サラサラじゃねーか、羨ましいぜ。俺の髪の毛なんてどう足掻いてもふわふわして落ち着かねえんだ。

それにしても向上心に溢れたメルティーは可愛い。無邪気なマテイカは可愛い。やりきって伸びてるガトウーザも可愛い。プリティーパラダイス、人間可愛い。今日も元気で何よりだ。

さて、すでにここにはなにもない。崩れ、光にのまれて既に石の番人は消失した。

で、俺は幽霊のおじいさんが地下への階段の方へ降りていくのを見逃さなかった。もう今更、危ないものは何も無いだろうし、仲間たちにはここで休んでもらって、彼を天へ導こう。

俺たちの住むところではなく、俺たち天使が成り果てる先でもなく、死者たちの集う、

もつと穏やかで安らかな世界へ。

怖がりだが、幽霊は何故か怖くないらしいマティカが勇ましくついてくるらしいから、ガトウーザのことはメルティーに任せるか。頼んだぜ。

地下特有のひんやりした空気が頬を撫でる。だだっ広いその場所には、一つの棺と、一人のおじいさん……だった幽霊だけがある。

青白い光に包まれた彼は、ぽつりぽつりと最期の贅沢として手に入れた金色の果実……まあ現物見なくても女神の果実だろうと分かるな……を食べ、そしてあの石の番人が願いをいびつに叶えて過剰に侵入者を拒んだことを語ってくれた。

小さな友人を怖がらせるから、助かったと。そう言つて、彼は消えていく。

俺がお節介に手出しする必要もなく、幽霊にまでなっていた彼の未練が何だったのか知ることにも出来ずに。推測はできる。こんなに精緻でそっくりなエラフィタ村を作り上げるんだからな。

だが、見ず知らずの俺が踏み込んでいいことではないだろ。彼にとつての守護天使ですらないのだからな。……彼を守護する天使はエラフィタの天使か？ 出張してくるのか？ それともここにはここ専属でいるのか？ 疑問だ。だが一人で住んでいる人間に守護天使はいないだろうな。

ともあれ。

彼は、小さな友人の安寧に喜んで消えて行く。あのスライムは寂しさを抱えながらきつとこれからもここにいる。

それで良いと思つて、それでいいと天へ昇るなら、それでいい。

俺は、棺の上で静かに金色の輝きを放つ果実をそつと持ち上げた。

きらきらと人を、死者を、死にゆく者を誘惑するその果実はすましてそこにあつた。女神の果実は美しい。奇跡を起こすエネルギー体だ。だが起こつたことはどれも願つた者の密やかな願いをどこか不自然に叶えているような気がしてならない。

しかし、これで「生き返る」ことはできないみたいだ。「命を与える」ことは出来そうなのに。

こんなもので、懸命に生きる幼い者たちを翻弄するなんて絶対に良くねえよ。幼いゆえに純粹で、欲望にのまれるのはどんな存在でも一緒なんだから、幼ければ余計堪えられないことが多いだろう。

はやく、はやく全部回収しないと。回収して師匠に報告できる日を俺は心待ちにしている。……リツカたんのところに戻ることに次ぐらいい。

サンマロウ編

61話 不安

「おかえりなさい、アーミアス！」

「！」

リツカたん！

リツカたんが俺におかえりなさいって！ ぺろ！ リツカたんかわいいぺろぺろ！
青いおかつばは今日もさらさら！ 結んだバンドナは働き者のリツカたんらしさの
あらわれ！ 俺はそんなかわいいリツカたんのエプロンになりたい！ 四六時中ぺろ
ぺろできるからな！

いけねえ、うっかり嬉しさのあまり返事が遅れちゃった。あまりにもペロリティが高
いおかえりなさいだった。

「ただいま戻りました、リツカ。何か変わったことはないですか？ 俺にお手伝い出来
ることは？」

薄味で残念な顔面に満面の笑みでお目汚しすまない。俺が師匠の様なイケメンなら
良かったのだが。それか、武器屋のムキムキの男のような……素晴らしいマツスルボ

デイなら顔にコンプレックスもなかったのだが。

だが、リツカたんを前にした俺に笑顔を止められそうにないし、リツカたんはいい子すぎて不快にも思わないらしい。リツカたんがいい子でよかった！

で、で、俺のやることはなにかないのか？ ちよつと日も空いたからな。リツカたんがなにか不便してないか気になる！ 疲れ？ そんなものはリツカたんのぺろくてキユートな顔と可愛い声聞いたらどつかに消えたわ。

リツカたんぺろぺろ！ うん、顔色いいな、良かったぜ！ 成長して丈夫になったとはいえ、もともとは病弱だったリツカたん、ウォル口から出て大丈夫そうでなによりだぜ！

リツカたんがそこにいて元気で可愛い、それだけで俺はあと何百年か頑張れる。いやもう人間になれるならその寿命そっくりそのまま返すから人間と同じ速度で老いさせろって話だが。

「お手伝いなんて！ いいのよ、疲れてるでしょ、ゆっくり休んでね」
「ええ、では、明日お伺いしますね」

そう言われちやもう甘えるしかねえ。早く休んで何の憂いもなくなったところでなんでも手伝うしかねえ。気を遣わせたくないからな！

だが引かないぞ俺は。リツカたんのお手伝いなんて、なんだろうがペロリズムがすぎ

てペろっペろだ。掃除？ 炊事？ 呼び込み？ 案内？ なんでもやる。リツカたんが好きだから！ まあ、重い男にならない程度にな。

さつそくパーティを一時解散し、腹ペこらしいマテイカにテーブルに引つ張って行かれる。当然のように着いてくる兄妹も。解散した意味はあるのか？

ともあれ、ゆつくり休むために食事もそこそこに俺は部屋に引つ込んだ。人間でいう軽食で腹いっぱいだ。そもそも作りが違うからな。それでも人間並みに食う奴もいるだろうが、個人差だ。俺は小柄だし。

そんなに食わなくてもいい、そんなに寝なくてもいい、もちろん人間と比較してだが、そんな天使でも全くやらなければ繭になって、そんで星になっちゃう。

ゆつくり休む必要はねえ。人間たちの笑顔こそ、俺の原動力だから。

だけでもなによりも俺が尊重したいのはリツカたんの労りの言葉。俺のことを考えて言ってくれた優しい言葉だ。鼻屑上等。

まあ、休むことは一概に眠ることだけじゃねえだろうけど。ともあれ寝たらなんでも良くなることだろう。起きたらきつとさつぱりすべてを吹き飛ばし、また幼い者たちの助けができるだろう。

翼があつた時の癖でうつかりうつ伏せで寝た俺は、くつきり布団のあとを顔につけ、せつかく早々に目覚めたというのに鏡の前で硬直した。

こんな小さい子どものような情けない格好ではリツカたんの前に出られないという理由で、早朝から部屋の中で何も出来ずに硬直するハメになったが……まあ、もうやらずにいいかつての習慣が出るくらいには疲れていたらしい。

それを見破ってくれるなんて！ 流石の慧眼だ、リツカたん！ ぺろぺろ！

父になんて言いました。母になんて言いました。そしてガトウザーの両親には？ 花の溢れる故郷にて、力を高めるための修行に出ると書き置きを残し、誰にも言葉で告げずに飛び出して行った娘のことをどうしようと思っているのしよう。

そんな自分勝手な娘なんて、勘当されるでしょうか？ それならむしろこちらからお願いたいくらいです。干渉されないなら良いのです。それなら憂いなく気持ちよく眠れるでしょう。兄も。

問題は、私たち二人は所詮は親戚ですらなく、他人だということ。私がガトウザーを兄だと思っても、弟だと思っても同じことです。

私たちには、それぞれ血の繋がったきょうだいがいるわけではなく、また、あの人は積み上げて来た偽りの名誉と金を維持する為に、きつと後継者を求めていることで

しよう。

私は……彼らの価値観からしても出来ない娘だった訳ではありません。いつだって、家を飛び出すまで、言いなりでしたから。そうしなければ、生きていけませんでしたから。

ああ。うっかりペテンのボロを出したなどで家が滅んでいたらいいのに。

しかし、いくらそのような事情でサンマロウへ帰郷したくなくとも、私の事情なんて崇高な使命を持つアーミアスさんには関係ありません。そして、私がお供することをやる理由にもなりません。

ええ、父になんと言われても、母になんと嘯かれても、私は胸を張ってこれこそが素晴らしい行いであり、世界で最も名誉なことであるとと言えます。

それでも。憂鬱なのです。不安なのです。

宿屋のフカフカのベッドの上で、私は悶々としていました。耳はもちろん、ぴったりと隣の部屋を伺うべく壁につけていましたが。ええ、お隣は愚兄でも格闘少年でもなく、アーミアスさんの泊まってらっしゃる部屋です。

アーミアスさんは、いつも、少し書き物をしたあとに早々に就寝されます。寝息までは聞こえませんが、もう聞こえるものは何もないのですが。

レンジャーは魔法使いよりも耳がいいのでしょうか？ ガトウーザ兄さんならなに

か聞こえるのでしょうか？ いえ、この特等席を渡すなんてことは出来ませんけど。

少し冷たい壁に寄りかかり、私は膝を抱えます。

口から出まかせな嘘っぱちの占いと、手品程度の魔法。そして演技。それだけしかない薄っぺらな両親をおもつて。それだけで莫大な財産を築いたのはある意味賞賛に値するでしょうが、罪のない人々を騙していることに違いなく、悪人でしょう。

私はあの人たちのようになりたくなかつた。でも、未だに恐れている。

私は、かつてより強くなりました。一介の魔法使いとしても、きつとそんなに劣る訳ではありません。あの人たちより余程戦えます。ですから、今の私が負けるわけがありません。

心も、きつと強くなりました。信念を持つてましたから。

アーミアスさんの手助けになりたいという太い柱を持ち、そのために賢者を目指すこの意思是、以前のように神へ救いを求めたいという安易な考えから、少しでも敬虔な職である僧侶を目指していたようなものでもありません。

ですが、私は魔法使いの身でも敬虔です。そうあり続けます。

本物の神を見たことはありません。見た人を見たこともありません。ですが、私は神のお使いである天使様に従っているのです。彼のお導きのもと、少しでもお役に立てるように尽力するというこの世で最も徳の高い役割にあずかっているのです。

それまで私は兄の手を離しませんでした。それは、精霊に愛されて、目や耳が悪いのと同じことになっていった彼を哀れんでいた訳ではありません。

自分が心細かったからなのです。手を握って欲しかったのです。私の気持ちと同じおもいを抱えていました。いわば同族で、同じように家のことを憂い、あんな詐欺師たちと同じになりたくない願ったもの同士、傷の舐め合い、慰め合いをしていただけなのです。

今は違います。レンジジャーになり、力を制御できるようになった兄はもう私の手がなくても歩けます。いいえ、もつと前から私の手を離していました。そう、アーミアスさんと出会った時から。

ほかの何も見えなくとも、アーミアスさんを見失わない兄は、私の手を必要としなくなりました。そして、私もきつと、兄が支えてくれなくとも歩けるようになっていました。

天使様のお導きのおかげです。

ああ。私にさらなるお導きを。慈悲深く偉大な天使様。美しく誰よりも真摯な天使様。

いえ、いえ、お導きには従いますが、これは私の問題。アーミアスさんのもとの成長した私は、もう甘えることなく解決しなければなりません。

そもそも会わなければそれまでです。私は二度と戻りません。会ったとしても戻りません、もちろん。私には、自分で見つけた道があるのだと言ってやりましょう。

美しき天使様に従う私をきつと彼らは羨むでしょうね。でも、譲りませんし、そもそもお見せするつもりもありません。きつとアーミアスさんに邪な気持ちを抱いて、何をしでかすかも分からない人たちなので。

なんだ、恐れることなんてなかったのです。

私はお導きに従うので、お導きの邪魔をする存在に気をかける必要もないじゃありませんか。胸を張りましょう、堂々としていきましょう。

そして彼らのことなんて気にせず、アーミアスさんのお役に立つことを考えれば良いのです。

さあ、眠りましょう。明日からは忙しくなりそうです。かたん、と隣の部屋から音がしましたが、私は眠ることに集中しました。

アーミアスさんが起きたことも、きつと一番にランプをつけるためにかたんと音がするのだと分かったことも、全てかじりつきたいようなことですが、それよりもお役に立つことの方が大事なのです。

ああ、お着替えのための衣擦れが聞こえるような気がします……。つまり、アーミアスさんは今……。お召しを脱いでいらっしやる？　つまり、つまり、そう、いつもより

セクシーでいらっしやる？

アーミアアスさんがセクシーですって？

天使様に邪なことなんてございません！　どんな格好でも、たとえ全裸でもこの世の何よりも清らかです！

ええ、汚れているのは私の心です！　アーミアアスさんの防御力が下がっていることに興奮するのはどんなときでも私たち人間の方で、アーミアアスさんにとってはなんといいこともないことなのに！　あの白い肌の露出が増えていると思うと胸がときめいて仕方がないのです！

ああ、至福のひととき。ええ、至福です。私は幸福なのです。
なにはともあれ、おやすみなさい。

6 2 話 偽友人

カラコタから川を越え、野を越え。翼があつたらひとつ飛びの距離だが、二本の足で進むには結構遠い。だが大地を踏みしめるといふのは飛ぶより余程いいと俺は思うがな。見下ろすのは性にあわねえ、それだけのことだ。

花の咲き乱れる野をまた越えて、段々とはつきりしてくる道を歩き、美しく完成された街並みに俺たちは辿り着いた。

レンガできちんと舗装されたサンマロウ。セントシユタインもそうだったが、なかなか栄えたところらしい。さて、どうせここの守護天使も職務放棄してらるうが。なにか起きていないか調べるのが先決だ。

俺たちが人間たちを見守り、護ってきたのは星のオーラを集めるのが目的だとしても、俺より年上の天使たちは俺より長いこと人間たちを見守っているんだから……少しは情がわかないものなのかね？

ま、もしかすると、地上に落ちてしまった天使の区分かもしれないからこれ以上考えるのはよすか。だがセントシユタイン、あそこは違うからな。リツカたんになにかあつたらどうするんだよ！

てか俺もウォル口から出てるし！ オムイ様の命令だからって、俺は何より前にウォル口村の守護天使のはずなんだがな！

ああ分裂したい、三つに。ウォル口に一人、旅するのが一人、リツカたんのところに一人。そうすればやりたいこと全部やれるはず。

……駄目だ、俺のことだからリツカたんのところに行ける幸せな俺を取り合うために血みどろの争いをするに違いねえ。

「アーミアス、ねえちよつと」

「なんでしよう？」

呼ばれて振り返る。その先にはサンデイがいるが、傍目から見ると誰もいないので露店のオバチャンが首をかしげた。

……気を使った方がいいんだろうが、恐らく周りにばれない程度に頷くだけでもサンデイは気にしないのだろうが、振り向いちまったものはしょうがない。

というかそろそろ俺はいろいろと諦めてきた。だからか、気が抜けた。誰が呼んだか気にする前に振り返って、これだ。

よく考えれば、サンマロウではオート天使バレしないかもしれない。輪つかを失ってそろそろ久しいと言ってもいいんじゃないか？ なら、天使の力も薄れてね？ いけるかもしれない。それなら諦めるべきではない。

「天使様」じゃリツカたんに意識されないだろう！ 信心深いリツカたんにとっては特
にそうだろう！ だからまずは普通の男にならないと……。

よし、全力で不審にならないようにしよう。

と、決意したところ、デキるメルティがガトウザを引つ張つてきて適当な位置に
配置する。これではばかりなことないですよ！ と言わんばかりに目をキラキラさせて。

一方、使われたガトウザは故郷にいるのが相当嫌らしく、されるがままな上に目が
死んでいる。

続いてマティカが俺の前に立つて、人間たちには見えないサンデイとの会話をさりげ
なく隠そうとしてくれたが……残念ながら背が足りずに隠れていない。

メキメキ伸びる年齢でたくさん食べてたくさん寝て、たくさん運動しときゃきつと師
匠くらいにでかくなれるさ、気にすんなよ。

これだから人間はかわいいな、と頬が緩んだ。

「ココに女神の果実があってもなくてもさ、これ以上どこにも行けなくね？ ほかの大
陸に行く手段を見つけないといけなくね？」

「確かに……船などがあれば良いのですが、定期便などはあるのでしょうか？」

「アタシよりその二人に聞けば？」

「そうですね」

メルティーが船、と聞いて顔を上げた。

「船をお探しですか？ 定期便はありませんし……確か、お屋敷の人なら所有していたはずですが」

「お屋敷とは？」

「ここで一番大きなお屋敷のことですよ。そのマキナお嬢さんとは同世代で……まあ、会ったことはないのですけれど」

「なるほど、その方が船を所有されていると」

まあ、カルパドだろうとエルシオンだろうとグビアナだろうと、果実が全部集まらな
いなら行くことには変わりないだろう。となると、定期便がそのうちのどれかを繋いで
いない限り、船を出してもらっても一時しのぎにしかならないわけだが。

聞くだけでも聞いてみるか。対価がどうなるかわからないが……はて。一番大きい
お屋敷、か。少なくとも裕福な家庭で育つただろうメルティーがそう言うのか。

俺にとつて金銭は大した価値がないが、たくさん必要となると用意するのにどれだけ
かかることやら。それとも、求められるのは労働か？ はたまた、なにかを持ってこい、
とか？

人間たちを人間たちの基準では長らく見てきたが、見てきたただけだ。取引じみたこと
はしたことがないからなあ。どうなるのかまったく検討がつきやしねえ。

てか船って家と同じでひと財産じゃね？ そんなの借りられるのかね。

アテもなにもないわけだから、はてさてメルティーの案内通りに行くしかない。ヒソヒソと死んだ目のガトウーザと元気なメルティーについて噂されているような気もあるが、こっちはこつちで俺が関与していいのかどうか。

どちらかといえば繊細なガトウーザは、耐えるためにかメルティーに手を引かれているが、そこに関しては誰にもなにも言われていないので平常運転のようだが。

仲がいいのは良いことだ。ブツブツとなにか唱えているのが正直怖いが。

無邪気なマティカが綺麗な街並みを見てワクワクしているのを微笑ましく見守ることに注力していいか？ いやいや、幼く苦悩する人間たちから目を逸らそうなんてそんな。

ただちよつと個性が強いだけだからな。

ちよつと耳を傾けると、ガトウーザは延々と闇の精霊に祈りを捧げていたので聞くのをやめた。俺は何も聞いていない。

事情としては家が……えーつと、聖職者だがあまり清らかではないってことだったか？ 安心しろ、天使だつて清らかじゃねえだろ。特に俺。俗の塊。鼻屑まみれで私欲丸出し。

リツカたんをペロペロするのも天使らしくないところのあらわれみたいなものだろ

?

神が直々に遣わせたもうた天使が職務放棄してるんだ、短い生の幼き人間たちが道を誤るのはそこまでおかしなことじゃない。そんな中、行き過ぎだが、敬虔なガトウーザは俺なんかよりずっと徳を積んでる。

俺はそう思うがなあ。

マキナさんというお嬢さんのところに行き、船の話をした途端くれるというものだからビックリしちまった。だが次の瞬間には追い出されたわけだが。

流石に心当たりがない。

メルティーとガトウーザは彼女と付き合いがなく、セントシュタイン出身のマティカも同様。俺も当然初対面で、顔見て出ていけと。

あの勢いで俺の顔があまりにもイケメンからは程遠かったからってことはないだろう。なんだったんだ？

同じく追い出された人たちからいくらか恨み言も言われたが、ともあれ。威嚇する兄妹をとどめるのに必死だった。いや、一番困ったのはほぼ唸ってるマティカを止めることだが。

あのお嬢さんはいつからか病弱だったのがすっかり治ってからたくさんの街の人たちを呼び込み、友達になってくれた相手に贈り物をしてくれるとか。

その一環で、船をくれつつもりでメルティーが言った時は目を剥くかと思つたが、とにかく船を譲ることに不満はないらしい。別の何かが逆鱗に触れたようだが。

謎だが、それより屋敷で自分の親を見かけた兄妹の心も心配だ。まあ、あれだ、完全に全員つてわけでもないだろうが結構な割合で贈り物目当てに甘い言葉を囁いているヤツらの多いこと。

純真な二人にはなかなか辛かつたろう。

実際、追い出された二人の親はこつちへ一直線に向かつてきているのが見える。また一悶着か？ やれやれ、文句を言うなら俺に言えよな、ここに連れて来た雇い主だし。

さて、父親は帰つたらしいが来たのは母親たちか。二人ともそれなりに似ている。二人の仲が良いように母親同士の仲もそれなりがいいのかもしれないな。

二人の共通点は豪華な格好つてことか。まあ着たいもの着たらいいんだが。

「メルティー、帰っていたなら言いなさい！」

「ガトウーザ、探していたんだから！」

「ただいま帰りました、お母様。では失礼します」

「化粧も服装も聖職者とは思えないですね、無知とは恐ろしい。不敬です。では失礼し

ます」

ぐるぐるの獣のように唸っているマティカが俺の手を引っ張る。人間性を取り戻してくれ。

「許しませんよ、貴女は世継ぎ、それもとびつきりの。もう充分遊んだでしょう、さつさと役目を果たしなさい。それに何です？ その連れは。狂犬みたいな少年と……あら」

「あら」

突然怒気が吹っ飛んだらしいマダム二人は釣り上げていた眉を不意に緩ませた。

反対にガトウーザが見るからに突沸し、メルティーは真つ白な顔色でふるふると震え出す。怒っているガトウーザはともかく、メルティーの体調はどうかしたのか？ 会いたくない親にあつてふらつと来たのだろうか。

「メルティー、如何されましたか？ 顔色が……」

「あらあらまあまあ、可愛い子を連れてきているのね。見つけてきたのかしら、運命の人を。貴女は昔から類希なる才能を持っているものね」

可愛い子。おい、メルティーをシヨタコン扱いするなよ。それに確かにマティカは可愛いが、可愛いなんて言われたら傷つくお年頃だ。

二人の関係は俺から見ても清く正しい仲間だ。それ以上でもそれ以下でもなく、ちよつとガトウーザより懐いてるかどうかつてもものだ。

「あら、占いのメロイドギーネ家があの方の正体を見破れないなんて落ちぶれたものね。私どものような脈々と続くハウトウニア家にははつきりと分かります。あのお方が人間ごときに懸想するなんてありえませんか」

「……まあ、その点は認めても良いでしょう。ともかく、メルティー、お手柄ですね」
「ガトウーザ。我らがハウトウニアにさらなる栄光をもたらすその心意気を認めましょう。天使様をお連れしたのですね」

ん？

またオート天使バレしてね？

俺が首をかしげた瞬間、マテイカが俺に突進した。そして勢いそのまま俺を浮かせてどこかへ向かって走る、走る。

俺の思考が追いつく前に街の外まで連れ出され、着いてきていたメルティーがマテイカをベタ褒めするまで全く状況が読み込めなかった。ガトウーザが珍しくマテイカの頭を撫でてちよつと嫌がられているのが微笑ましい。

なるほど。逃げたのか。それを理解してから二人の親からああして逃げるべきだと察することが出来なかったことを詫びた。ああ、人間というのは複雑なのだ。

必ずしも親は子を慈しまない。だから、あの場で状況がわからずぼーつとして悪かった、すまなかったと。

だが、なぜ最初から逃げなかったのか……いや、そうか、マティカが手を引つ張つていたな。鈍くてすまない。

「いいえ、アーミアスさんが謝ることは何もないのです。ですが、顔を覚えられてしまったのは問題ですね」

「兄さん、ここの防具屋にフルフェイスの兜が確かありましたね」

「なるほど、流石我が妹は賢い。隠された美貌というものも……素敵ですね……」

「おれ、お使い行こうか？」

「頼みましたよ！ はい、私の財布から遠慮せずに良いものを選んでくださいね」
「アーミアスさんの頭を守るものですから私も出したいのですが！」

メルティーの財布を持ったマティカの背中は見ると小さくなっていく。

迷惑かけちゃったようだな。二人は家に戻りたくない、そして連れである俺からバレルのも良くない、だから顔を隠して……ということか。認識が甘かった。

まさか……シヨタコンだったとは。望まぬことにならないように俺も気をつけることにしよう。マティカも顔が隠れるような何かをした方がいいんじゃないか？ フードでもかぶるか？

だがまさか、全員が顔を隠せば不審者でしかないだろう。二人が何やら聞き取れない程の早口で語り合っているのを眺めながら、人間の複雑さについて俺は思いを馳せてい

た。

戻ってきたマテイカにプラチナヘッドを渡され、メルティーに代金を支払うことを拒否された俺は甲斐性なしのもやし野郎を早く卒業してあらゆる面で頼りになる男になりたい。

兜をかぶった俺にメルティーが鏡を見せてくれた。いいなこれ。なるほど。頭が見えなきやそれ関連のコンプレックスは気にならなくなるな。

顔も、髪も、全部隠れて銀と金の輝きを持つ兜を被った俺は天使生でもっとも男らしいといえる。もやしな体つきはどうしようもねえけど、それ以外はバツチリだ。

礼を言うと、敬虔なメルティーは過剰な程に喜び、金を出せなかったガトウーザが地団駄踏んで悔しがる。なんつーか、そろそろ天使に夢を見るのもやめてくれ……。

俺よりよほど天使なマテイカだけが癒しだぜ。

63話 山雨風楼

顔を見られたならば、顔を隠し、服装をちよつと変えて他人のふりをして別行動をすれば良い。そう兄妹は結論を出し、俺たちはそれに賛成した。

俺は単独で情報を探し、顔を見られたマテイカも単独行動、どうせ何をしても親にはバレると判断した二人は一緒にいることにしたようだ。

マテイカが顔を隠すのかそうしないのかは個人の裁量だとして。金髪はありふれているし、そんなに目立つ顔立ちではないから大丈夫だとは思うが、顔を見ただけで勘違いするシヨタコン夫人がいる街だし、十分気を付けてほしいものだ。腕は立つことだし、武器も持っているし、そこまで過保護になるのはおかしいか。

船がなければこの大陸から動けず、女神の果実探索が出来なくなるってわけだから、なにかあのマキナお嬢さんの情報がないかをおのおので探すということでは決まりだ。少なくとも、もう一度話を聞いてもらわなくては。その上でダメだつていうならもう他の方法を探すしかないが。

例えば……天の箱舟をどうにかして移動に使えないか、とかな。

さて、まだまともに街を散策していないからな。栄えた街をいろいろ見るのはそれだ

けで面白いもんだ。それに俺はだいたい人間の営みを空から見てきたから、最初から足で回るのとはなかなか新鮮でいいな。花の溢れる整えられた街並みは美しく、道行く人々もだいたい幸せそうな顔をしている。

飢えが見るからに目につくってこともなく、いい街だ。だがそれは、誰かにとつてはそうではない。メルティールとガトウーザはこの街を飛び出したいほど息苦しかったらしい。人の営みは天使のそれと比べ物にならないほど複雑で、繊細だからだ。

俺は人間じゃない。だから理解しきることは難しい。だが目を開いて、見ようとすることは出来る。町を静かに歩きながら、少し困った人に手を差し伸べることが出来る。こつそりと助けるのではなく、実体を持ち人の形をした者として。

てくてく歩きながら、道行く人々にマキナお嬢さんについての話をいろいろ聞くことにした。そしてそれはいつもの聞き込みと違って、俺を人間扱いした返答で、うれしかった。

見るからに旅の者といった服装ではフルフェイスの兜もそこまで目立たないらしい。天使だとはわからないらしい。いつもより視線を感じないのはなんて快適なんだ。……つまり、いつもはオート天使バレが起き続けているってことだよな？ 天使に生まれついたのは、俺にとつては罰ゲームか何かか？

まあ、それはそれ。本当に百三十年前の人間ならリツカたんに出会うことなくた

ばっていたに違いないから結果オーライ。

リツカたんに出会えた天使生は、どんな偉大な天使生よりも最高なんだぜ？

ああ、人間扱いとはこんな素晴らしいものだったのか。誰かとすれ違つてもすれ違いつぱなし。いきなり謎の感動をされることもない。話しかけても普通に素朴な返事がある。俺、普通の人間になりたかつたんだ。擬似的な、勘違いだとしても、俺は。

分析するとだな、首から上のどこからか、天使だと分かるような要素があるつてことになるな。なんか目とか耳から変なガスでも出てるのかね？ 天使成分的な。誰もいないところで意図的になんとかして、出尽くしたら枯渇しねえかな。

「ちよつとすみません」

さて、マキナお嬢さんについては、あの大きなお屋敷に一人で住んでいるつてことと、友だちならば欲しがるものが高価なものでも贈りまくっているつてことぐらいしかまだわからねえ。他にもつと有力な情報はないものか。旅人に聞いても仕方がないから、店の人や明らかな普段着の人間などを選んで声をかける。

「旅の人かい、ようこそサンマロウへ。何か困ったことでもあつたのかな？」

さつきから割と子どもに近い扱いを受けている。いやまあ、マテイカの受けている若い旅人扱いというのはこんなものだろうが。……俺の方が少し、背が高いのだが、似たようなものだろうか。

まあ人間には重要だろう、三十や四十の年齢差なんて俺にとつてはあんまり変わったもんじゃねえし、そんなものか。オムイ様にとつては瞬きみたいなものだしな。

「困ったことというほどではないのですが、お屋敷のマキナお嬢さんについて少し、気になっておりました。その、最近になって、いきなり友人に贈り物をするようになったとか。彼女の過去の知り合いをご存じないですか？」

この言い方だと俺も彼女の恩恵に与りたいようだが、船を借りたいというのはまさにその通りだから、隠し立てはしない。

「おやおや、うわさは旅の人にまで及んでいるのかね。あそこのお嬢さんはね、両親を亡くしてからやつと病弱だった体質が改善されて、それでお友達が欲しくなったらしくてね。いろいろと物で人を寄せているんだよ。」

寄ってくる人間の全員が全員、悪人というわけではないだろうけど、みんなお嬢さんより物目当てらしくってね。最近では花よりも観光の目玉かもしれないよ。だから……まあ、欲を出しすぎない程度には行くのもいいんじゃないかねえ。お嬢さんは喜んでみるみたいだし。

そうそう、昔からの知り合い、もとい使用人はみんな気に入らないって首を切っちゃまったそうだねえ……マキナお嬢さんの昔を知るのは……からくり職人くらいかねえ」「からくり職人、ですか？」

饒舌な花屋のおばさんは、お屋敷の方を向き、屋敷の前で右往左往する人間たちを見て頷きながら、まさに他人事といった様子で言葉を続けた。

「マキナお嬢さんは、ずっと遊び相手だったお人形を作ってくれた職人のことを気に入っていて、いまもたびたびやり取りがあるとか……詳しくは知らないけどね」

「いえ、ありがとうございます」

彼女自身はマキナお嬢さんに擦り寄る人間になるつもりはないが、彼女がいることで街に人が寄せられるなら自分の収益にもなるからそれなりに歓迎してるって感じか。

だから彼女について聞いてもなんとも思わない、と。

まあそうだよな、それが普通の人間だよな。いつそ愛おしい。

さて、そっちでまた情報収集するか。からくり職人の家はまあ、地図でも見ればわかるだろ。

マキナお嬢さんの癩癩を伝えた旅の少年は、他者からの視線を拒絶するように顔を覆う兜をかぶっていたが、決して人を拒むような様子はなく、声色も物腰もやわらかで、たいそうお人よしに見えた。声変わり前の高い声で、俺と自称していなければ性別も分か

らないような若い子だった。

屋敷へ向かいながら、勇ましくも剣を帯びた小柄な背中を眺める。マキナお嬢さんよりはいくらか年下だろうか。

「お嬢さんはどんな方なのですか？ まともに話す前に追い出されてしまったので……」

「優しい子だよ。病弱だったころ、外で遊べなかつたお嬢さんにお嬢さんそつくりの人物を作つたことを大層喜んで、今でも私を屋敷に招いてくれる。その時は気難しいことまでは知らなかつたがね」

何故かひどく驚いた少年は、足元の小さな段差に引つかり、たたらを踏んだがなんとか転ばずに済んだ。

「おや、大丈夫かい」

「はい、大丈夫です、すみません。あの、つかぬ事をお伺いしますが、お嬢さんが黄金の果実を食べたとかいう話を聞いたりはしませんでしたか？」

「黄金の果実……いや、知らない。もしかしたら、彼女をなんとか健康体にするために取り寄せたものの中にあつたのかもしれないがね」

「そう、ですか」

「それを探しているのかね？」

「ええ。それが俺の旅の目的なのです。あんなに大きなお屋敷のお嬢さんなら見たことがあるかと思ひまして……」

少年は言葉を切った。屋敷についたからだろう。

一応、突然の来訪にお嬢さんを驚かせないように声をかけつつ、部屋へ向かつていく。広い屋敷だというのに人気がなくがらんと寂しい様子は、彼女の両親がご存命だった時とは全く違う。

彼女の部屋の応接間には誰もいなかった。部屋に閉じこもっているのだろうか。なんとはなしに部屋のドアに触れると開いているようだった。

立ち去ることもできるのに、未だお嬢さんを心配してそこにいる少年は、どこか不安そうに人気のない屋敷を見回していた。

「どうしたのかね」

「いえ、本当に使用人がいないと思ひまして」

「そうだね、こんな広い屋敷なのにどうやってお嬢さんは維持しているのやら」

扉をノックしても返事はない。話し声や足音は聞こえるだろうに。かつて彼女は病弱だった。もしかしたら倒れているかもしれない。

そう思つたのは私だけではなかった。顔は見えなかったが、少年の兜の奥に瞬く黒い瞳はことさらに不安そうに揺れていた。

「マキナお嬢さん！ 失礼しますよー！」

少女らしい飾り付けの部屋には、主の姿はなく、もぬけの殻で。狼狽していると少年が何やらベッドから手紙を見つけて、そしてその中身を兜からのぞく目で素早くいくらか追うと、手紙はくしやりと握りつぶされた。

思わず少年を見ると、慌てているようだった。そうするつもりはなかったようだ。

「あ、ああ、失礼しました。内容が、あまりにもひどかったもので」

「貸してみなさい」

少年は慌てて手紙のシワを伸ばし、私に差し出した。

「はい。……これは、事件ですね」

少年の言う通り、そこに書かれていたのはマキナお嬢さんを誘拐したことで、身代金の要求だった。

正義感の強そうな少年は、怒りに震える指で他になにか賊の痕跡が残っていないか、と調べるようにベッドのシーツをひっくり返したが、他には何も残っていないかった。

閑話 慕師弟

天使界に、ある一人の天使が降り立った。

辺りがキラキラ輝くほどたくさん星のオーラを纏った天使が、人間界から帰還したので。

かの天使は翼を素早くたたみ、堂々とした足取りで上層を目指す。彼に興味津々の幼い天使たちの視線に気づかず、もはや気安く接することが戸惑われるようになった同年代の天使たちの眼差しに一瞥すら向けずに、ならわし通り、真つ直ぐに長老オムイへ報告しに向かう。

彼は見習い天使アーミアス。齢百ほどの若い天使である。人間でいえば百にもなるならばいつ亡くなつてもおかしくないが、天使としてはまだ子どもだと言つても良い。

だが、彼は普通の見習い天使ではない。師の守護する村を引き継いで守護天使になることは間違いないとまことしやかに囁かれ、そのことは厳格な上級天使である師イザヤールでさえ否定するものではない。

非常に勤勉、真面目な彼の信頼は厚く、職務に背くことは決してなく、学ぶことに常に真摯で、物腰は柔らかく、常に丁寧な口調で態度は穏やか。目上を敬い、幼子たちに

は親切であり、なにより人間を愛し、慈しみ、守護する。

天使の鏡とも言える彼は、もう百年前のように悪意に晒されることは無い。

……極一部の例外はまだいるのだが。

唯一、そんな彼に汚点があるとすれば、邪魔にならないようにしつかり折りたたまれてもなお目立つ片翼の大きな傷だろう。ぼろぼろになり、部分的に皮膚が剥き出しになつている翼は飛翔能力こそ問題ないが、どう見ても欠陥である。

彼のそれについて触れることはタブー視され、誰も表立つて本人に何か言うことはないが、常に噂がつきまとう。

その「事件」があつたとき、まだ幼かつたり、生まれていなかった天使たちは事実を知らないゆえに好き勝手な噂を流すのだ。

いわく、天使の模範であるゆえに悪魔に囚われた時の傷だとか。いわく、例の異端者に傷付けられた跡だとか。いわく、元々彼は翼に傷を持って生まれた天使なのだとか。いわく、いわく、いわく……。

流れる噂に一つたりとも真実に近いものは無い。彼は傷つけられた、あるいはそういうものだったのだ、という噂は果てしない尾ひれとともにいくらでもあつたが、まさか己の手で純白の翼を塗り、切り取ろうとナイフを振り上げ、それにしくじつて無残な有り様にしたとは真実を目にしていなければ思えない。

だが、事実を知る上級天使たちは揃って口をつぐむ。いや、つぐまざるを得ない。師イザヤールは今の彼……見習い天使アーミアスが、再びあのような月に魅入られることはないだろうと考えていたからだ。

イザヤールは上級天使として名高く、また彼の意に沿わないことは大抵彼の旧知であるラフエツト、エレツタ、そして妹であるラヴィエルにも大抵当てはまるため、四人の有力な上級天使相手に下手なことは言えない。また、長老は静観の構えを崩さないのも後押しした。

あの「事件」はアーミアスにとつてはごく幼少期の癩癪のようなもので、記憶ももうおぼろげであってもおかしくない。下手に触れなければ当時、そういう狂った考えに至ったことを思い出したりしないだろうという考えだったのだ。

よもや、その目上の存在に従順な顔の裏で、当時と変わらぬ、いや、むしろ増している人間への想いがあるとは知らず。当時のことをある意味反省しているとはいえ、翼を失うためにいろいろと考えを巡らせることはむしろ以前より頻度が高い。

天使たちは気づかない。いや、気づけない。あの狂った行為が、自分たちが無意識的に見下している人間に、誰よりも天使らしい規範の天使がまさか、なりたいたと、少しでも近づきたいと、心底願ったゆえの行動だとは。

それは、誰よりも無垢ゆえに。

白き天使は、天使の拙い悪意にすら染まった。その純白の髪を掴まれて。星を宿さぬ瞳を濁らせて。嫉妬という、人間じみた感情の真似事の矛先になって。

しかし、その事とは関係なく、彼の中身が外見とは大いに異なることは、神すら知らないことなのだ。

天使は神にとつてはただの間に合わせの道具に過ぎないからだ。その心のうちをわざわざ読み取らなくとも、理に縛られた彼らは、どんなに反抗したい気持ちを持つとうとも上の者に意のままに使われる。

判断材料は普段の態度からのみなのだ。とはいえ、大抵の天使はいかに猫を被つたとしても幼い時の行動までは誤魔化せない。いくら取り繕つたとしても狭い天使界で見破られることがないことはまずありえない。

気づかれないままなのは、誰よりも無垢だったゆえに。

幼い頃の彼の性格は本物だった。無垢で、穏やかで、真面目な彼は目上を敬う態度にも真摯だった。そこに一片たりとも嘘はなく、ただ、その態度のまま中身が成長して、おかしな方向にひん曲がったことに誰も気づかなかつただけなのだ。

ああそれも、無垢だったゆえに。

真つ白な天使が強烈な個性を浴びればそれに染まる。厳格な師のもと、彼はとても真面目だった。異端者の悪意に晒されて、彼は灰に染まる。白を捨てさせられて、だが誰

よりも天使であつたから、本性から逸れることもまたない。

人間への大きな「あい」ゆえに。「あい」という意味において、嘘はなく。生命を慈しむ心は真実で。すべての生命を救えるように真に願う。「あいするところ」を真に持つた天使だつたから。

天使らしい天使は、今日も地上で出会つた人間を慈しみ、守護する。

彼の灰色を疎むのは彼だけ。誰もがその灰髪を悪いものだとは思わない。

彼の本当の中身を知つても、案外受けいられるのかもしれないが、彼は……相当な何かがない限り、丁寧で柔らかな態度を崩すことはないだろう。

彼は作り上げた丁寧で柔らかい態度のまま怒る、喜ぶ、悲しむ。だがどれも天使としての例外にならない。常に丁寧に、いかに激昂しようと敬語すら崩さない。寝ぼけていようが同様で、そこに隙はありはしない。

天使としてはまだ幼くとも、百年という歳月は「うっかり」の余地を作りはしない。

もしも、その心のうちをそのままに吐露することがあるならば。それはもう、彼は天使ではないのだろう。念願叶つて人間にでもならない限り、彼は態度を崩さない。

堂々と闊歩する彼の背からふわりと舞う、抜け落ちた一枚の羽根を。かつての彼のようにな垢な天使はそつと拾いあげた。その色は彼の本当の髪の色のように真つ白だつた。

羽根を見て、その背中を仰ぎ見て、幼い天使は柔らかくも熱い憧れを胸に抱く。

だが、残念なことにすっかり「今の」アーミアスの人格が出来上がっているので、その憧れの先輩天使は歩きながらも今のお気に入りの少女のかわいい寝顔に内心身悶えていたのだが、誰も知る由もなく。

一人静かにペロペロしている変態。心のアルバムを埋め、まだ見ぬ人間たちを愛する。だがどこまでも天使の少年は今日も、無垢な天使だと勘違いされる。

なぜなら。

幼き子らよ、無知なる人間たちよ、どうかその命、安らかなれと。祈りの部屋で誰よりも真摯に一人祈るのもまた、アーミアスなのだから。

真摯な天使で、かつ変態天使なのである。

まだ物知らぬ、もっと若い頃の話なので、女の子のローアングルにはテンションが上がらない程度には健全な天使ではあったのだが。

「さあ、世界樹へ向かうが、準備はいいな？」

「はい、師匠」

「よろしい。見習い天使ゆえに、自分で集めた星のオーラも私の同伴がなければ世界樹の元へ捧げることは許されないが、この調子であればアーミアスを『ウオル口村の守護天使アーミアス』と呼び、一人で世界樹へ赴く日も近いかもしれない。わずか百三歳でここまで良くやることはなかなかないことだ。

「これからも慢心せずに励みなさい」
「もちろんです」

冷静な返事と表情と裏腹に、ほんの少し嬉しそうに瞳を輝かせる弟子。私の弟子となつてから少しの慢心も怠慢もなく励んできたのだから、褒めることくらいはある。

だというのに、何故か通りすがりのエレツタに信じられないと言わんばかりに顔をまじまじと見られた。噂されるような冷血な指導をしているわけではないのだが。

ごくごく普通にこの弟子を伸ばす指導をしているまでのこと。

エレツタは同年代で、また同格である。理の発動することのない対等な関係だ。それはつまり……上級天使の中でも実力者に数えられるだろう。

懲罰の執行天使であり、同時に癒しの天使であるのだから守護天使とはまったくの畑違いであることだし、仕方ないのかもしれないが。今日も脱走した異端者を捕縛して世界樹から引きずり下ろしているのは、ご苦労なことだ。

私の弟子に仇を為すのだから、あの異端者は軟禁処置ではなくもういつそ休眠処置に

ならないものか。繭になっていれば二度と変な気も起こせまい。

とはいえ、懲罰を決めることができるのはオムイ様のみ。私に口出しできるものではなく、執行天使のエレッタも希望程度のことしか進言できない。癒し手として当時の治療を担当した天使としての進言を合わせても、あの気の強いエレッタが「参考にしてくださいませ」と言うことしかできないのだ。

天使の上下関係に不満はないが、弟子の身を案じると不安ではある。

これはまだ子どもの時分の我が弟子を守るのも師の務めである、という神の試練なのかもしれない。出来のいい弟子ではあるが、見習い天使であるうちはよく見てやらねば。

道中、アーミアスと同年代の見習い天使とその師がなにやら話しながら私たちとすれ違つていく。おそらく、世界樹を麓から見ているいろいろと知識を授けたのだろうが。

優越感など、くだらないものである。だが。

一人、飛び抜けて優れているよりも、天使全体が優れていた方が効率もよい。だが、まだまだ子どもらしく幼く、地上も見たことがないようなその天使と、星のオーラを単身身に纏わせて持ち帰る天使。

どちらが優れているのか明白であり、それは私にとつて紛れもなく誇りだった。

真面目すぎるきらいのあるアーミアス。だが、目をきらきらさせて表情を引き結ぶ姿

にもう少し褒めるべきだと考える。調子に乗るような性格ではなく、また褒めてしかるべき実績であるのだから。

ゆえに、私は誰も見ていないことを、何故かよくよく確認してからそのふわふわの髪の毛のうえに手を置いた。

不思議そうに私を見上げるアーミアスに、想像以上に柔らかい触り心地に驚いたことを察されないように、撫でてみた。私とて褒めるために頭を撫でることくらいは知っている。

……師エルギオスは、私の剃りあげた頭をよく気に入っていらつしやつて、よくこうやつて……いや。

髪型は自由である。いくら剃っている方が性に合っていると私が考えていても、アーミアスは別の個人であるのだから。この触り心地がなくなるのはまた、損失だ。

「師匠、どうされましたか」

「いやなに、最近は本当によく頑張っていると思っただけのことだ」

「褒めて……くださっているのですか？」

「そうだが」

ふわり。アーミアスは嬉しそうに微笑む。

表情の少ないアーミアスは、感情が薄い訳では無い。ごく普通のいまだ幼き見習い天

使としての内面も持ち合わせていて、そして公私を混同しない、つまり真面目すぎるだけのことである。感情が豊かすぎることをはしたないと考えているのかもしれない。

そして、その考えには私にも責任があるのだ。私も似たような考えの持ち主であるのだから。

だが、まだまだ未熟で幼い天使であるのだから、年相応に笑って過ごしていても叱責することはしない。むしろ、私は好ましいと感じる。

よく師を慕い、よく指導に従い、よく天使として尽くす。まさにその容姿のとおり、天使の鏡である我が弟子は、だが私の弟子であり見習いであることには代わりない。

私は、そんなアーミアスの師であることを、師エルギオスの弟子であることと同じくらい誇りに思っている。

ゆえに、こうして慕ってくれる弟子を褒めることは私の誉れでもあり、護ってやり、導いてやらねばならぬとますます決意を強めるものなのだ。

64話 訪問

マキナお嬢さんについての進展があつたとかで、マテイカ少年が街の中を駆けずり回って私たちを集めてくれました。急いでメルティールと共にお屋敷に向かい、アーミアスさんの位置を精霊に知らせてもらうと、どうやら、奥にあるお墓にいらつしやるようでした。

屋敷の主以外はいないはずのこの屋敷。そしてお墓。つまり、この先にはあのマキナお嬢さんか、幽霊しかないでしょう。

アーミアスさんは天使様ですから、霊魂と話すことも当然できます。妖精と話すこともなさります。人ならざる守護者は、同じく人ならざる彼らの力を借りつつ、使命をまっとうされているのです。

その邪魔をしないようにそつと、私には虚空にしか見えない場所を見上げているアーミアスさんに近づきました。私には小さな少女の形に見えました。いえ、私に幽霊は見えないのですがね。

ええ、精霊と霊魂は別ですから、全くの「虚空」に見えます。なにかいることは分かるのですがね。それは空中に無数に漂う精霊がちょうど人のかたちにはぼっかりと不在

であるからわかるのです。

見えないことで見えているようなものです。幼い頃、人のかたちをした虚空が恐ろしかったのですが……もしかしたら、その中のいくらかは天使様だったのかもしれないね。

とはいえ、アーミアスさんよりも素晴らしく慈悲に溢れ、美しく、気高く、位の高い天使様なんてこの世にいらつしやらないに違いないのですから、天使様を見逃していたにしても取るに足らないことです。

アーミアスさんにとっての、上の「立場の」天使様はいらつしやるのが既にわかっています。たとえ立場があるからといって、空の彼方におわし、悪く言えばふんぞり返って自らは手を下さない存在がいくら偉いとしてもなんだというのでしょうか。

神を信仰しているとうそぶき、その権威として立つ存在が私欲に肥え太っているように。下々のことに見向きもせず、良い暮らしをし……それでも名君ならば問題ありませんが、遊びに明け暮れるような暴君も、聖職者を騙る豚どもも。

すべて人間ではありませんから、アーミアスさんは心を砕いてしまうでしょう。分け隔てなく人を愛してください、そんな大きな慈悲、善行が表れたお姿に惹かれた身ではありませんが。

日々、与えられるものを享受するだけの者にまで救いの手を差し伸べるだなんて、ど

う考えてもアーミアスさんにとって不必要な慈愛。

先回りして片付けたく思います。私怨にすぎませんけどね。

……それができたら、苦労はないのですけどね。精霊の力を悪用したならば、あるいは、とも。いえ、まずはアーミアスさんの使命のお手伝いからですが！

麗しき天使様、ああ私の道しるべ！ 私を、どうかお導きを！ なんだってお申しつけてくださったらよいのに！ ええ、どんなことでも！ 欲を言うならば、翼をもがれた天使様の、その美しく白い御見足がお疲れになつた時！ 使え慣れぬ足を！ 私を下敷きにすることで！ 少しでも癒されるとか！ そういうことはございませんか？

例えばその華奢な指で、一つ必要のないものをお示しになるのならば！ 私はそれを消すのに！ どんな手段を使つても！

ああ、私になんなりと命令してくださいればよいのに！

ですが、私とて心知らぬ人間ではありません。

人の心を理解しようとしないう豚どもとは違うのです。お優しく、慈悲深く、いつでも正しい我らがアーミアスさんは、過激なことを好まれないに違いない。平和で愛しいな人ということのない、そしてかけがえのない生活を大切にしてください。不和を好まれない。ですから、強硬策はイコール不和であることですので、決して私は進言いたしませんし、そう望まれる日がこないことも、もちろん弁えております。

アーミアスさんの目が届かない場所でこつそりと、麗しのお方の邪魔者を静かに消し去ることぐらいは「致し方なし」ですがね。妹も、少年も、賛同してくださるはず。……アーミアスさんと同じく、純真で潔白そうな少年はどうでしょうか、それは少し、分かりかねますが。

アーミアスさんほどではありませんが、彼のことはよくわかりません。あまり興味もないのですが。とりあえずは、私の味方でなくとも、メルティーの味方でなくとも、アーミアさんの味方であればよいのですから、どうでもいいことかもしれない。

野良猫のようにしなやかに戦い、そして猛犬のようにアーミアスさんをお守りしてくれるならば私が少々噛まれるくらいは問題ないのですから。

「……あなたのお友達を、きつと、人さらいの手から助けましょう」

不思議な緑の光を宿したアーミアスさんの瞳が、「少女」へ向けて優しく微笑まれました。そして、こちらに振り返られました。

まだ、まだ、アーミアスさんのお顔が何者にも遮られずに拝めることに慣れていない私はその麗しき天使様の美貌に心臓を撃ち抜かれましたが、問題ありません。本望です。

口から潰れたカエルのような声が漏れたのは失態ですが、幸いにも誰一人気にかげなかつたようです。特にメルティーの目は、雄弁にもアーミアスさんの前でそのような失

態を演じるとは修行が足りないとおおりのやいばで突き刺してくるようです。

「皆さんには目的地向かいがてら、情報を共有しますね」

少し緊張したような面持ちで、アーミアスさんは足早に街から出ていくようでした。

やべーわ、女神の果実のパワー舐めてたわ。

てかよ、俺って人間の可能性を無限だと思ってるピュア天使なんぞでな？ ……ピュアはないか。人間はなんにでもなれるし、俺たちと違って未来を繋ぐこともできるし、どんな魔にも、どんな聖ひじりにもなれる存在だ。本当なら、守護天使なんて必要ないのかもしれない。

これまでの女神の果実の被害者……ダーマの大神官も、ツオのオリガのお父さんも人間、もしくは人間だった存在だし、ビタリの石像は言うてもマトモな自我なんて無かったら。対話できるほどの知能はない。

だがどうだ、魂のなかつた綿人形に、魂が、そして命が宿つただけでなく、あんなにはつきりした自我を持ち合わせてるんだぜ？ もう神の所業としか言いようがねえわ。いや、神の所業なんだが。女「神」の果実だしな。

ま、人形を作ったからくり職人のおっさんからしたらこらまで作り上げたもの全てに

魂も命も宿っているという気持ちかもしれないけどよ。

それが事実かそうでないかはともかく、これまで魔法のかかった物以外と喋ったことは今までないからな、とりあえず無いものとして扱おうとしてだな。カマエル？

……あー。とりあえず、そうであれと作られたわけでもない物に魂が生まれ、そこで息づいているってことだ。

やっべ、女神の果実を一つでいいから拝借、つか着服したら俺人間になれるんじゃないやね？ 余裕だろ、むしろ。俺には……まあ、石ころよりはマトモな魂と、紙切れよりは人間らしい肉体がある。

それで人間になれるのなら、理で縛られる前に食って願うことが出来るなら、俺は……。

まあよ、人間ってのは天使よりは儂く、天使よりよっぽど素晴らしく生きているもんだ。まがい物の生き物である俺が使命を果たす前に任務放棄してだな、人間たちに危険が及ぶものを回収する前に私欲にうつつを抜かしてだな、それでそんな不誠実な野郎は働きの者で誠実なりツカたんにフラれるに違いないわけだ。

まがい物はどこまで行ってもまがい物、それなら天使として見守ってた方がマシだったと悔やみ苦しみながら星にもなれず、赦されることもなくたった一人で死んでいく。俺たち天使にとって、星にもなれずに死ぬということは喪失だ。俺たちは輪廻に入れな

い。

俺たちに来世はない。俺たちは……赦されなければ、嗚呼、四肢をずたずたに引き裂かれたほうがましだろう。犬の餌になった方が余程死に甲斐があるってもんだ。

わりとひひでえ末路だぜ。そうなるくらいなら、天使として大して飯を食わずとも、眠らずとも生きていける肉体を駆使して人間を一人でも、うっかりミスで死ぬまで救い続けた方がよほどいいってもんだろ。どんな極悪人だろうと、俺たちとは違う輝ける魂を持つ存在を一人救って消えていくことこそ本望。

はー、希望はあるが叶わねえな。どうせ女神の果実を必死に揃えても一言労われて終いだしな。褒美なんてねえよ、天使は無償労働だ。一応の対価は……いつか赦され、星となるか、神の国で安らぎを得るか。どっちでもいいか。どんだけ働きたくねえんだ。生きていることを罰ゲームだと思っただけねえ？

もがき、苦しみ、輝いて、繋ぎ、未来へ歩んでいく人間たちを影ながら護ることを素晴らしいと心底思っているならまた意見も違わねえ？

俺は天的に救済されるなんて真つ平御免だが、天地的にはハッピーエンドだな。俺もきつとそうなるんだろ。星になった天使は見守ることか瞬くことしか出来なくなるだろ。なつたことないから分からないが。

それともう、生き地獄じゃね？ 死んでるけど。そこに救いたい幼き者がいるのに

見てるだけとかもう死にきれねえで降ってくるレベル。俺隕石になるわ。流れ星となつて燃え尽きて、少しでも目を楽しませた方がいいわ。

急募、上司にバレず、不誠実にならず、人間になる方法！ 翼と輪っかはセルフで取り除いておいたぜ！ 背中の子スタスタっぷりは目も当てられねえけど服脱がないから大丈夫だ！ 鏡で見たらもうあれだな、俺の背中は荒地だったわ。

てかよ、あの落下で顔と手が割と無事なのが納得いかねえ。この顔だけ？ 少し傷でもあつた方がワイルドでちつとはカッコよくね？

さて。

どこか間の抜けた誘拐犯どものアジトに堂々と入り、なんともひょうきんな言葉で歓迎されたわけだが。もうすでに気が抜けてこいつらへの怒りはどつかに行っちゃった。

おー、おー、極悪人と言うには随分間の抜けた対応で。俺が悪人だったらどうしてたんだ？ 強盗だったら危険だろ、もう少し用心しろよな。

ま、なんつーか、話の流れでマウリヤは無事だつてわかつたしいいか。だが彼女はアクトタイプで、とつと逃げたみたいだが。人間ではない彼女が、マキナお嬢さんのために人間のフリをしていたからって本性がなかなか変わるはずもなく。

本物のお嬢さんなら逃げたりできねえんだが、それは分からないのだろうよ。俺だつてまだ翼があるような心地ですつ転んだりするからな。階段を越えようと翼を開いた

つもりでなんもなかったりな。

魔物の巣窟に向かつていつちまったのは面倒なことだが、ま、彼女は人形だ。少々の衝撃じゃ死なないだろう。俺の大事な仲間たちに負担がない程度に救出に行くかね。

なあマテイカさんよ。メタルブラザーズを追いかけ回してる場合じゃねえぞ。ガトウーザもセミ取り少年みたいな顔しやがって。落ち着きのあるメルティーを見習えよ、なあ？

あー、信仰心が暴走したメルティーが拝み始めた。どこかに俺の事をそれなりに雑に扱ってくれる人材はいないのか？

……そうか、サンデイか。お前だけだよ……。

65話 進

じめじめとした洞窟。全身に苔の生えたおっさんを斬り捨て、祈りをささげたアーミアスさんは薄暗い辺りを見回した。返り血が一つもなくて、戦士になったのももう慣れたのかなと思う。

おれはまだバトルマスターという職業に慣れてないんだけど、さすがだ。そろそろ慣れなきやいけないのは分かっているんだけど、武闘家になってからも爪を持つ前はずつと素手だったし、素手から爪に慣れるのにもとつても時間がかかったものだから。

たまに、うっかり剣を持つてることを忘れて殴りかかって、刃じゃなくて柄で魔物を攻撃しちゃうことがあるくらい。メルティーがそのたびにちよつと冷たい目で見てくる。ガトウーザみたいにおれにまったく興味がないあまり気づかなかつたらいいのに、気づく程度にはあの女は優しい。

「迷いそうですね……」

「足を取られないように気をつけてください。『マキナお嬢さん』の正体はお話したように人形のマウリヤですから、恐らく人間のように肉体の損傷によつて死に至ることは無いはず。視界が悪く、魔物も強いので、ともかく自分の体の安全を第一に行動してください」

「さーい」

「わかったよ！ アーミアスさんも、気をつけて！」

「ありがとうございます」

メタルスライム三段重ねのメタルブラザーズがちらちら見えて、思わず駆けだしそうになるのをぐつとこらえた。あんなの見てたらうっかりよだれが出ちゃうよ。

ベクセリアの封印の洞窟でメタルスライムに気を取られたことをちゃんと学習して、今度はそういうことにならないようにしないと……行く手をふさぐ敵だけを倒さない。アーミアスさんは、魔物だつてなるべく死なせたくないと思つてるように見える。

そして、殺したときは、深く祈りを捧げて、その死のもつと向こうが苦しくないようにしてくれる。ねえ天使さま、おれが死ぬときもそうしてほしい。独りぼつちは寂しいから。一人じゃなくて、この天使さまに看取られるなら怖いことはない。

でも、「天使さま」じゃなくて、「アーミアスさん」に看取られると思うと、アーミアスさんに悪いって思うけどね。人の死を、おれよりずっと見てきたのだからけど、あんまりきれいなものじゃないし。

みんな、死ぬときは……と思つてる。アーミアスさんはおれたちを守ってくれるけど、その恩をきつと返そうと思つてる。おれは口には出さないけど、あのきょうだいは口にまで出しそうな勢いで。でも、でも、口に出したらこんなに優しいアーミアスさん

は悲しむと思うんだ。まぬけに、でも、誇りをもって死ぬ間際、穢れのない手をおれの血で真っ赤に染めて、看取りながら悲しそうな顔をしてしまう。

アーミアスさんの間反対で、よく映える鮮血はいいけど、悲しいのは良くないから、そんな日が来ないように、強くなりたいな。

だからさ、アーミアスさんに斬り捨てられた魔物は幸運なんだ。本気でその死を、みじめで汚いはずの死を、悲しく思ってくれる人に殺されるって。そんなことめつたにないことだから。

アーミアスさんを傷つけた魔物もある意味じゃ幸運だけど、そこで全部の運を使い果たしたからすぐ死んでほしい。血がパッと飛んだらもう用済みだ。綺麗な綺麗な天使さまをもっともつと魅力的にしたのは認めるけど、それはそれで、ものすごく悪いことであることは間違いないんだし！ おれが好きなことと、アーミアスさんが嫌なことは別の事。

おれたちはアーミアスさんのことがいろんな意味で大事だから、怪我してほしくないっていうのも本当の気持ちだ。

そんなおかしくなっていく思考が、一瞬でパッと吹っ飛んだ。銀色の素早い影を見て。

……あ！ 思わず垂れそうになったよだれを飲み込む。見間違えじゃない、本物の銀

色の影。ほとんどの旅人が躍起になって倒そうとする、みんな大好きなアイツ。つまり、それはメタルブラザーズ。

あああ、あつちにもメタルブラザーズが！ こつちにも一匹！ 全部おれたちに気づいて逃げていく！ すっごく勿体ない！ あいつらを倒したらどんなにすごい経験値がもらえるんだろうね！ ちつとも想像がつかないや！

一匹くらいこつちに来てくれないかな！ あいつらものすごく臆病だけど、ついうっかりしてたとかでさ！

そんな願いは残念なことにかなうことなく……阻む魔物にちよつと手こずっても、苦戦したっていうほど時間をかけることなく順調に洞窟の奥に進んでいく。次の休みをもらったら、ここにきつときてメタルブラザーズをたくさん倒そうって思ったよ。本当はその場にアーミアスさんもいたら心強いし、最高なんだけどそういうわけにはいかない。ほんとに残念だ。

寂しい夜の、街の裏通りみたいな、こんなに暗いところはアーミアスさんは似合わないんだ。せめて夜でも月が明るい日じゃないと、よく見えないじゃあないか。楽しいことをしていても、その相手に似合わないのは良くないと思う。

あつたかい光の中で。やさしい太陽の下で、あるいはきれいな月の下で、手を差し伸べてくれるのがよく似合う。

だけどおれ、多分趣味悪いから綺麗な人の血塗れの姿が好きなんだ。思わず涙が流れるくらい、赤はいい。押されて、転んで、擦りむいた膝から血が流れて、打たれた頬が青と黒まじりになって、おれの天使さまの絵本はいつだって、最初の白いままの姿を思い出せるのに、汚れてしまった。今はもう、なくなってしまうた。

良くて似てる。だから、アーミアスさんの灰色の髪も、もともとは白かったんじゃないかな。それでもなきや、あんなに綺麗なはずがないよ。元々灰色だったなら、魅力的なはずがない。

どんなものだって完璧な形なんてありえないんだ、歪み、汚れて、傷ついて。だからああ天使さま。

あなたはきれいなんだ。白い石でできた、「完璧な」天使像よりも、ずっと。

お星さまみたいに、おれたちを見守ってくれる。あのきらきらした目で、シスターよりも優しく、冬の太陽帰る家のないマティカにとって冬の太陽は命綱よりも温かく。

なんか寒気したけど気のせいだよな。洞窟はマグマでも流れていない限りうす寒いものだしな。天使は風邪をひかないわけじゃねえけど、随分標高の高いところにあるも

のだからあんまり寒くて駄目ってこともないはずだ。

ところで。人形マウリヤよりも、俺は仲間を優先した。正確には、程度がどのくらいかわからない魂を宿した人形よりも、そこに生きている人間を優先した。それは俺が人間の健やかな生を護る守護天使だからということであり、鼻屑多めの若輩者ということでもあり、手を伸ばせる範囲を守るという事でもある。

言い訳は色々できるがはつきり言って俺の力不足でしかない。

だが今すぐ強くなるのは無理だ。なら、できるだけ慎重かつ急いで進まなくちゃな。

魔物もまあまあ強いし、足元はそれなりに悪いし、少し視界は悪いしな。どれも少しずつだ。だからこそ油断大敵っていうか……ただでさえメタルなあいつらがうろうろしてるんだ、一人完全に気を取られてるっていうか……自覚はしてるみたいだが、剣を握りしめてぶるぶる我慢してるマテイカがいる。

我慢してるのは偉いよな。欲望に負けてないところとか、俗に塗れ欲望に流される俺よりよっぽど自制心があるっていうか。いい子過ぎる。

最高にペロいリツカたんを前をしているとき、俺は全く自制できないからな。たまらずリツカたんの前に飛び出していき、何か話すだろうし、そうでなきゃなにか手助けになることをするし、それも我慢できたとしても頭の中でリツカたんペロ！ ペロペロ！ 大好きリツカたん！ ってやりながら心の中のリツカたんアルバムを満たしながら

全く集中力もなく……リツカたんについてだけは普段よりも集中しているが……楽しんで天使生を謳歌していることだろうよ。

つまり手遅れ。我慢なんて何もかけらもしてないわけだ。マティカは偉いなあ。

随分剣も上手くなってきたしな。俺に善し悪しがわかるのかどうかということについては分かるようになってきた、と言うべきか。

「かばう」を覚えたらもう後は用済みだと言わんばかりに、旅芸人の時から変わらず剣技ばかりを磨いてきたからだ。戦士になりたかったのはそれが目的だったわけだしな。

なんのためにルイーダの酒場で人間を雇ったかって話だ。俺が盾で仲間たちが矛だ。効率的に使命を果たすべく。

その甲斐あってかそれなりに剣だけは使い物になってきたような気がするぜ。師匠に見てもらいたいレベルだ。これなら、目標のパラディンになった時にも得物を変えずに済むだろう。得物を変えたら頭の中がごちゃごちゃになることくらい分かっていることだからな。

なにせ、百年くらい使ってきた得物だ。今更ほかの種類に出来るかよ。

洞窟の最深部、と思わしき場所に俺たちは警戒しいしい突入する。マウリヤがいるとしたらもうここしかないのだ。彼女があの人さらいたちから逃れた理由は分かるが、出口と反対方向に向かっていたのは幸運なのか、不幸なのか。まあ、出ようにもあいつら

のアジトがある方向よりない方が行きやすかったのだろうか。

どう考えても危険な方向なんだが。

最深部にはやはりマウリヤが立っていて、何もわかっていない顔して、俺たちの方をゆつくりと振り返った。人形だと知ってもなお、あのからくり職人の腕がいいからなのか、人間そっくりの外見で動き、瞬きまでして見せる彼女。

だが、狂暴と言つて良い魔物の巣窟でただのお嬢さんが無事なはずはない。人形ゆえに魔物に見向きもされなかったのか、人形ゆえに人間よりも身体能力が良く、かいくぐつてこれたのか、真偽は分からないが、とにかく悪く言うならば「異様」なのだった。俺だつたらとつくにズタボロだろうし。こんな可憐な姿のお嬢さんより弱っちいということになるが。天使つて案外頼りないもんだぜ。

66話 相違

巨大な蜘蛛が俺たちを品定めしながら舌なめずりでもしているようだ。実際は、蜘蛛の表情なんてわかりやしないし、分かったとしてもそれは、天使の俺が人間の感情を理解するのに手探りであるように、曖昧なことだろうが。

魔物だろうが、人間だろうが、共に歩むべき尊い魂であることには違いないが、必ずしも対話できるとは言っていない。対話が出来なくとも隣人であることには違いないが、彼らの名前すら知ることすら出来ずに、単なる「美味そうな肉」に見られることもまた仕方の無いことだ。

共に歩むべき命であり、食う食われるの食物連鎖の上下でもあるのだから。

ところでよ、天使の肉って美味しいのか？ 生命力なくて不味そうじゃね？ 栄養もなさそうだし、外見は若くとも基本百年物だし。まあ、食われる必要があるって言うなら、幼く未来ある仲間たちを逃がして俺が食われるつてのは当たり前のことだが、みずみずしくも幼い仲間たちの方が食べごたえがあるつてことで、囿になつてもスルーされたら悲しくね？

連続して嘔吐される、粘つく糸に絡め取られないように駆け回つて逃げる。なんとか

隙を見つけないで、追いつけないが、追いつけなくてはいけませんが、追いつけないこの感じでは、あいつ、空腹なのか？ ならもう、生きるためには倒すしかなくなる。追いつかぬならそうしたいんだが。

執拗に打ち込まれる弾つぽいものはいかにもな色で、毒が入ってそうに見える。当たるとやばそう。

「散らばってください！」

常に寄り添うきようだいたちが弾かれたように左右にばらけた。そのおかげか、二人に向いた粘つく糸は地面に当たっただけで済んだ。マティカは駆け回りながら一撃を入れる隙を見計らっているらしい。闘魂打ちの研ぎ澄まされた魔力が指先を煌めかせる……のはいいが、剣の存在忘れてね？

俺はと言うと同じく駆けずり回りながら攻撃のチャンスを伺っている。マウリヤには、悪いが相手は肉食の魔物。かばっている暇はない。てか、庇うまでもなく奴はマウリヤを眼中に入れていないようだ。嗅覚がどの程度あるのか知らないが、布と綿の体では食欲が湧かないのも当然だな。

吹き飛ばされ、動かないマウリヤを守るのも、こいつを追い払うのも諦め、俺は無事に仲間たちを帰すことを一番にすることに決めた。こいつの毒とか、もしも食らったらキアリーで治せるかもわかんねえし。こいつに噛まれたことがある事例を探すのは難

しそうだ。

劍を腕の回転に合わせて鋭く一撃。いつものように劍を振り抜く間もなく、蜘蛛の牙が眼前すれすれの空気を切り裂いていく。思わず盾を持った方の手で顔をかばいそうになるが、そんなことをしていればねばつく糸の餌食になっていただろう。

隙を見せてはならない。後ろに飛び退く。だが、隙を見せるのが致命的なのは向こうも同じだ。俺に構っている間に背中をメルティに焼かれ、目をガトウザーの弓に狙われ、痛みを怯んだ瞬間にマティカに鬨魂打たれる。

そして俺からターゲットを外した瞬間に俺にもまた斬られる。

完璧なコンビネーションだ。

これがしたかったただけだし？ 俺が囷になって仲間たちにド突いてもらうっていう、きつと師匠にも褒められる完璧な作戦ってただけだし？ 違うけど、そう心の中で調子にでも乗らなくてはちよつと……気弱になりそうなほど外見のインパクトが大きい相手だ。

俺に攻撃を引きつけることを完全にできるわけじゃねえけど、向こうにとってムカつくことをしてりや自ずと俺に向かってくる。例えば目を狙うとか、攻撃を俺に逸らすとか、似たようなやつでは割って入るとかな。

そうすることによって俺の身が危険に晒される分には仲間にあたるより圧倒的にマ

シだしな。どんな状況下でも幼い方が護られるべきだ、そうだろ？

俺は天使、天の使い。生命あふれる地ではなく、風と雲だけが渦巻く天に住まう、守護機構。いつちよ前に呼吸し、食べ、「あいする」が、生みの親はいない子どもも持てない。そんなものは生き物ではないのだから、生きとし生けるものを優先するのは当然で、そんな中で最良の強い俺は言葉を交わし、愛しいと思つた者たちを選んで守る。

こんな生き物未満でも愛しく幼い子らを護れる。

そろそろ板についてきた連携、慣れつつある職業。それらは俺たちの、いや、「俺の」慢心を招いた。

前へ少々出過ぎたか、狙われたマテイカを俺は庇う。しかし、奴の腕は俺と違って沢山ある上に、尻から噴出する毒弾を撃つのに牙も脚も関係の無いことだ。

メルティー！

翼があつたら、飛べるのだから、いつものような安定した「かばう」が間に合つたらう。きつとメルティーのところまで飛んでいって、真正面から受け止めた。それが出来なくて、俺は、護るために横に跳んだ。

盾で受けるでなく、腕で受けるでなく、比較的柔らかい脇腹に毒の弾が直撃した。だが、だけでも、俺は護り切つたのだ。

痛みと、点滅する視界。

毒が身体に回る。

今までも傷を受けていたから、堪え切れなくなり、俺は間抜けにも地面に転がったまま動かない手足に叱責する。この間にも仲間たちが狙われるじゃないか、と。

熱い、寒い、熱い、息苦しい。だからなんだ、俺は幼くない。その程度で、膝をついて、止まっていいわけじゃない。俺は守護天使なんだ。守護天使なのだから、いや、天使だから、いや、本当は理由なんて必要ない、俺はそうあるべきなのだ。

本で読んだ人間たちのなんと色鮮やかで、生き生きとして、魅力的だったことか。実際に見た人間たちのなんて、本よりもよほど、眩しかったことか。初めて言葉を交わした時、俺はどれだけ嬉しかったか。

俺は護るために、いや、俺は大好きな人間たちと過ごす時間がかけがえのないものだど知っているから。短い生の、魅力的な者たち。

毒が体力を奪っていく。関係ない、俺は立ち上がって、剣をとる。油断はもうしない。ガトウザのベホイミが、キアリーがキラキラ光って、俺の傷を塞いでいく。毒を消し去っていく。俺たちを見て獲物を狙う肉食性の生き物の本能を見せ付けてきた巨大な蜘蛛は、俺をターゲットにしたのか、都合よく俺に向かってくる。盾を構えたが、衝撃までは逃がさず後ろに吹っ飛んだ。

その期を逃さない大蜘蛛が、その巨体でのしかかってくる。

頭からバリバリつて雰囲気ではないな。柔らかな脇腹から食われるか？

毒で上手く暴れられないが、剣を振り回して激しく抵抗しつつもそんなことを思う。

いやいやいや、俺旨くねーし。ヒョロいもやしだぜ？ 引き締まった筋肉も脂肪もねえ。無駄に百年もので新鮮とは言いがたい。てかそれ抜きにしても辞めとけ、退いとけ、ほら、後ろによ。

鬼のような形相のマティカが剣振り抜いてるから。とつくに俺の腕力なんてもやしなものを抜いてつた天性のバトルマスターが。残念なことに、俺は蜘蛛と会話することが出来ない。

俺は祈る、それだけだった。蜘蛛は、マティカに体を両断され、魔物特有の黒い光に包まれて消えていった。

マティカは、剣から手をすぐに離して、子どものように俺にすがりついて、泣きだした。いや、子どものように、では無い。マティカはまだ、子どもなのだ。

幼く、愛しき人間は、俺の身を案じてくれていたんだと、俺は理解して、優しさに感動しながら、泣かせてしまったことに胸をちりちり焼かれながら、金髪の頭をぼすぼすなでた。

「し、死んでる……」

化け物に手酷く吹き飛ばされたらしいお嬢さん。誘拐して、身代金を請求して、その後は穩便に帰ってもらったつもりだったのに。お嬢さんを殺す気なんてなかった。そんな度胸はなかった。

地面に叩きつけられたのか、ぐったりと倒れ伏し、ビクともしない姿に歯がカチカチとなる。ここの化け物に同じ目に遭わされたなら、もちろん俺は死ぬだろう。お嬢さんを連れ戻しに来たらしい街の連中も、化け物と戦ってポロポロになっているぐらいだ。

あいつらを置いて逃げよう、と思うのに足がすくんで動けない。まさか、まさか、お嬢さんが死んでしまうとは。

だが、街の連中との戦いで元凶の化け物は倒されたのか姿はない。その点だけは助かった、そう頭の片隅で思いながらも罪悪感が胸に染み付く。

けほ、と一際傷まみれになった少年が咳き込んだ。それ以外、誰も何も言わない。傷まみれの少年にすがりついて泣く子どもかしゃくり上げる声だけが、そこにある。

「ああ、びつくりした」

その場に不釣り合いな、甘やかな少女の声。背後で起き上がる音がする。まさか、お嬢さんは死んでいた。箱入り娘のお嬢さんが、魔物にあんな攻撃をされて生きているな

んで、ありえるか？ 生きていたとしても、もっと、そう、思わず間の抜けたことを言つてしまっただけで、満身創痍のはずだ。

振り返つた先にいたお嬢さんは、傷らしい傷すらなく、攫つた時と同じように何も理解せずに微笑んでいた。

「ひい！ ば、化け物！ ズラかるぞ、こんなところにいるられるか！」

俺は仲間と逃げた。あんな化け物がお嬢さんだったのか？ お嬢さんは化け物が成り代わっていたのか？ どうでもよかつた。病弱で、甘やかされ、なんでも周りに与えるようになった世間知らずの女の子の正体をそれ以上知ろうとは思わなかつた。

化け物から逃れるために、あんな、恐ろしい場所から逃れるために。一心不乱に引き返した俺たちはあの街の連中が化け物を少しでも引き止めてくれることを願いながら逃げた。

67話 宿霊魂

アーミアスさんにお慈悲をいただいているというのに未だ泣き止まない少年の頭を優しく撫でていたアーミアスさんですが……正直、天使様としての使命を全うするためだとしても、あんなに手ひどく傷を負われていては、私どもの心の方が辛くなってきた泣きたくもなるという点では見解が一致しているようですが……あの無礼な誘拐犯の悲鳴に、そうとうびっくりした顔をなされました。

化け物。そう、彼女を罵った言葉に自分の事のように顔を歪め、悲しまれたのです。自分の事のように悲しんでくださる。なんて慈悲深く、なんて優しいのか。

人間だけでなく、魔物の死をも悼み、人形の魂にまで寄り添われるなんて。素晴らしき天使様、いいえ、アーミアスさんだからこそ。

「化け物……知っているわ、絵本に出てくるの。悪者、みんなの嫌われ者……」

お嬢さん、いいえ、人形マウリヤは、ようやつと「まるで人間のように」嘆きました。その嘆きはとて化け物とは思えません、彼女は素直でした。素直すぎました。人間らしからぬ精神を持ち、表情も変えずに、しかし、嘆きました。

ええ、私のように、あるいは妹のように、家の方針に幼い時から反骨精神を持ち、跡

取りであつてもとつと見切りをつけて高飛びするくらいの気概があるようには見えませんので。

見ず知らずの、それも自分を誘拐したような身勝手な男の言葉なんて、何も知らない信者から金を巻き上げる聖職者くらい胡散臭いです。ええ、複製した免罪符の紙つきれになんの意味があるというのです？ 神への祈り？ 神は助けては下さりません。神は見守つておられるのです。祈るならばこの美しき天使様へ！ 今ならそうはいえませんが。

ですが彼女にとつては、心に深くナイフが突き刺さつたようなもの。そして彼女には共に寄り添うメルティーはいない。あんな男の言葉を鵜呑みにして、嘆く。

ざわめく精霊たちが興味深そうに彼女の周りをくるくる回ります。精霊に人間のよ
うな感情は……ないわけではないのですが、薄いので、ただ面白がっているだけでしょう。

ええ、私のような人間に付き纏つて、私のような人間の手助けをするような精霊たち
ですから、薄情でしょう。アーミアスさんのように清く美しく真つ当な心の持ち主なら
ばもつと情に厚い精霊が来るのでしょね。

残念ながら彼らは、溺れるほど惜しみなく私を愛してはくれますが、視界を埋め尽く
してきてまっとうな視野すら、いまだ新鮮という有様ですので、こつちの事情などどう

でもいいでしょう。波長か何かが合っただけではないのですか？

私の周りをくるくる回りながらくすくす笑う彼らには私の考えなど筒抜けです。ですがまあ、どうでもいいことですね。私が何を思っても、彼らは私を見切ってくれはしなかったのですから。

「本当はわかっているの、うまくできないの……みんな、物をあげる時だけ来てくれるの、本当は私はいらないの、マキナのために、友達を作りたかったけど、私、私、化け物だから上手くいかないのね……」

淡い光が、少女の形をとりました。

『違うわ、マウリヤ、あなたは大切な私のお友達』

精霊が私の耳元で囁きました。精霊はともあれ、幽霊を見ることは適わない私に通訳をしてくださっているのです。マウリヤの前に不思議な緑の光が煌めいて、人間の少女の姿……らしく、もやもやと光っています。

レンジャーとなり、力の制御が適ったおかげでしょうか？ アーミアスさんには遠く及ばないでしょうが、私にも僅かながら幽霊の姿を見ることが出来るようになったとは！

お役に立てるでしょうか？ いいえ、霊魂との会話は為せないでしょう。しかし、アーミアスさんと同じ景色を見ることが出来る……そう思えば！ ああ、この眼を愛し

く感じます！

ああ感謝します！ かつては本物の聖職者、本物の聖人を輩出した家系に！ 今後はや堕落しきり、まったく力も信仰もありませんが、我が身に流れるこの血は精霊と波長を合わせたわけです！

ええ、これまでこの目を疎むこともありましたが、今は兜に隠されたアーミアスさんの顔も、メルティーの微笑みも、少年の涙も全部新鮮です。これまでは半透明で光り輝く精霊越しでしか見てこなかったわけですから。

アーミアスさんと出会う、という素晴らしい運命！ そしてそのアーミアスさんのお導きで天職を得！ そして私は美しくも慈悲深く、最も優れた天使様と同じものを見られる！

おつとよだれが。嬉しすぎて。

「あらマキナ！ 御機嫌よう、お久しぶりね。今日は遊べるのかしら。おままごとををする？ それとも……」

『マウリヤ、ごめんなさい。もう遊べないの』

光に包まれた少女は首を振りました。

「マキナ？」

『マウリヤ、私の大切なお友達。もう無理にマキナにならなくていいの』

「……わたしのこと、きらい？ きらいになったから、もうあそべないの……？」

少女は、いえ、マキナお嬢さんの表情までは見えません。人間の感情なんてどうでもいい精霊たちは教えてくれはしないでしよう。私は情に薄く、アーミアスさんやメルティーのように本当の意味で他者へ心を砕くことなどできないからです。

『一人ぼっちだった私を、あなたはこれまで支えてくれた。でも今は、あなたが一人ぼっち』

「なあに？」

『私を幸せにしてくれたあなたを……、私は』

「ええマキナ、わたしはあなたがいてくれるならいつでも幸せよ！」

『ごめんなさい……マウリヤ。もう私の願いに縛られないで。もう自由になっていいの、マウリヤ』

マウリヤの大きな目が、ゆっくりと瞬きしました。

『私はマキナ、あなたはマウリヤなの。』

私は天使様と共に、その御許へ、遠い遠い国へ旅立ちます。だからあなたも、偽物のマキナから、人形の、私のお友達のマウリヤにもどって……。ありがとう、私の、大切なお友達』

もやにつつまれる少女の姿がだんだんと淡くなり、ゆっくりと霧散していきました。

恐らくは未練を失ったことよって言葉通り旅立ったのでしよう。

「マキナ……」

マウリヤは、その場に立ち尽くし、何やら考えていましたが、そのうちアーミアスさんになにやら告げて、帰っていかれました。

アーミアスさんは、ゆっくりと兜を外し、私たちの目を見て帰りましょう、と静かにおっしゃいました。

白磁の肌、星を宿した黒い瞳、薄桃の唇の、尊く美しき天使様。

彼はもちろん私なんぞよりも長く生き、欲望滴るたくさんの人間を見てきてもなお、慈悲深き方。つまり、多くの死を見送り、天使様は魂をあのように見守ってきたのでしよう。

ですが、アーミアスさんの瞳にはわずか、悲しみがありました。

アーミアスさんは慣れていてもおかしくないのです。慣れのままに、また一人見送ったという感想だけを抱いてもおかしくないのです。麗しき天使様。

しかしながら、アーミアスさんは何時だって、死者を見送りどこか悲しそうです。

なればこそ……そんなアーミアスさんだからこそ。私たちに手を差し伸べてくださり、導いてくださり、夜空の星々のように美しい姿であらせらるるのでしよう。天使様、その中でもこうもあたたかく、地に降り立って救いをくださる優しい方。

アーミアスさんは天使様ですが、精霊とは根本的に違うのか、あまり声も聞こえていらつしやりません。私の周りに歌う精霊よりもずっと清らで人情を理解する精霊たちが、歌い、踊りながら「悲しいの？」と問いかけていますが、彼は私たちを安心させるためにうつつすらと笑みのようなものを浮かべただけでした。聞こえているようには見えません。

「俺は、生きとし生けるものすべてに、どのような生を受けたとしても死の救いがあり、ゆえに来世の友であると考えていました。しかしこれからは認識を変えなければなりませんね。」

誰かの想いを受け取った全てのものが、魂を宿し、動くことは出来なくともあのよう
に想うのです。女神の果実がたまたま、彼女を本当に動けるようにしましたが。

実際に魂というものはなんであるか……」

そつとアーミアスさんは胸を抑えました。

「ここにも、あるいは、幼き人間たちのように、魂があるのかもしれないね」

そのように他者の有り様に心を痛めるアーミアスさんに魂がないわけありません！
ですが、儂く、悲しく告げる様子に何も言えませんでした。

死の救い。その言葉の意味を、私は少しだけ、ほんの片鱗だけ理解出来たからです。

その若い姿で、私たちよりずっと長く生きるアーミアスさん。天使様に死はあるので

しょうか？ 天命を全うする、という言葉がありますがアーミアさんは天使。天の使
い。

その天命は？

「アーミアスさんに死の救いはない」、そう読み取った私は、情知らぬ精霊たちの歌を
聞きながら、あまりにも情け深いお姿にじつとみとれるほかありませんでした。

夜の星々の静かな煌めきは、白く輝く兜によつて隠され、その静かな悲しみを覆い隠
したようでした。

68話 順風満帆

さて、今度こそマウリヤと落ち着いて話すかとお屋敷に戻ろうとすると、街の入口で出待ちしていた兄妹の両親、と家族……と使用人だろうか。それなりの人数に阻まれた。

目を釣りあげたメルティーが杖を構え、笑顔で、しかし目が笑っていないガトウーザがそれを手で制した。だが、妖精、というかもはや精霊たちのポルカを発動させつつだ。なんつーかポルカつてるのに見えねえから多分あれは精霊だ。

進行を阻まれたとはいえ、各々の家庭の事情に口を挟む気は無い俺は所在なく引っ込んでいることにする。興味なさげなマティカと一緒に小さくなっているとしよう。できるなら退散した方がいいだろうか？

とりあえず兜は被ったままで。オート天使バレ抑制機能が付いている優れものだから、少なくとも俺が天使であるというだけで話がこじれることは無いだろう。天使がいるからって話がこじれるとは限らないけどな。

仲裁とか頼まれても出来ねえし。天使は見えないで守護するものだから何だ、つまり、コミュニケーションには自信が無い。もちろん、俺はリツカさんと話すことをずっ

と夢見ていたわけだから、並みの天使よりは「人間と話す」ことに自信があるがそれはそれ。

てことで、ちよつとずつさりげなく下がろうとしたが、しかし、回り込まれた。

「随分な挨拶ですね」

「丁寧すぎて反吐が出ますよ!」

「メルティ、はしたないですよ」

「そういうガトウーザはとづくに精霊に『お願い』しているではありませんか」

「ええもちろん、挨拶には挨拶で返さなければ失礼でしょう?」

「それもそうですね、さすがは兄」

「ええそうでしょうとも。丸焼きは芸術的ですが、お目汚しにも程があるでしょう?」

険悪だな。だがまあ、「みんな仲良く」なんて言う気は無い。しかし有耶無耶にしたく

はないようだし、待つてるか。それとなく離脱するのもありかもしれんが、どうにも。

ガツチリ囲まれた。これだとこつそり退散できねえ。

「あのお方を出しなさい、ガトウーザ。我らが教会の力を高め、いつそう我らの……いえ、神々のその偉大さを世に知らしめるために!」

あー、そういう? 神々の偉大さ……なるほどな? まあ俺会ったことねえし逆らえ

ないだけで偉大なる神々よ! とはならねえんだけどな。んー、まあ、幼く愛しい人間

たちの創造主だからそれなりには信仰しているんじゃないやねえかな。誰しも。

はー、ほー、なんだろうか。俺には彼らから信仰心は特に感じられないが。あー、俺の守護してきたウォル口はほかの場所よりも純朴な人間が多いらしい。そう師匠に聞いてきたから「純朴でない」人間はどうなのかはよく知ってはいない。

だがまあ、幼き人間たちだ。幼いんだから目もくらむ。純粹故に歪んでしまう。人間同士ではたまつたもんじやないだろうが、俺からしたらまあ別に……守るべきことには変わりねえし。神への信仰心の有無で護るか護らないかを決めるわけじゃねーし。

俺の偏見によつて決まるんだしな。もちろん人間である限り守るつもりだが、全部が届くわけじゃねえから。一にリツカたん、次に仲間たち、ウォル口村、宿屋の人たち……優先順位は明確だ。俺がまだ見習いであることはつまりはそういうことなのだ。

しかし「あの方」って誰だ？ ガトウーザという後継者に戻ってきて欲しいんじゃないのか？

「悪評高いハウトウニア、そろそろこの街のみならずほかの所でも知られてきたのではないのですか？ 街の教会と断絶してかなり時間が経っているらしいではないですか」

「お黙りなさい、メロイドギーネの娘。あなたがうちの跡取りを誑かさなければもつと素直に差し出したでしょうに！」

「何を言うか、生臭坊主共め！ うちのメルティーの神秘を奪つたのはその息子だろ

う、帰ってこい、メルティー」

メルティーの父だろうか、杖を構えたままの娘に強い口調で言う。紫の髪、涼しい目元、良く似ている。呪い師のような服装すらも。実に似ているが、まあ、うん、そうだな……似てるのに似てないな。

だが、仲間のルーツ見てるの面白いな？ 俺たちにはないし、親とか、そういうの。俺が双子で遣わされたりしたら多少は顔も似てるのがいたのかねえ？ こんな薄い顔の天使が二人もいなくてよかったとも言えるが。

「帰って何をするのです？ 私は見つけたのです。目指すべき道を」

「メルティー、父は寂しく思っている。戻ってこい、なあ、頼むよ」

「生まれた時からあなたの演技を見てきた私が絆されると本気で思ってます？」

「演技だなんて！ 早く帰ってこい、そしてあのてん……」

「そこから先を言うのであれば、『本物の魔法』がその顔を焼きますよ、ええ本気です。私はあなたがたの言う『本物』なのです。奇跡的な、本物の魔法使い。

私はもう、自分の魔法を恐れたりしません。むしろ嬉嬉として振るえます。お退きくださいな」

……えーつと、雇用主として止めた方がいいのか？ だがまあ、家庭内の喧嘩を仲裁する義務はないだろうし……。しかしさすがに怪我をさせるのは問題があるだろう

……。

今にも弓を乱射しそうな顔をしているガトウーザともどもとりあえず回収して、落ちて話す時間は後で設ける。これしかないか。今は頭に血が上ってるんだよな。

時間を置いて落ち着いてもらった方が……いいよな？ 師匠、これで合ってるのか教えてくれよ。

「メルティー、ガトウーザ、そして皆さん」

「はいっ」

「なんででしょうか！」

「話の腰を折って申し訳ありませんが、一旦、時間を頂けませんか。後でありますから、ゆっくりと話せますし、落ち着いた場所にすることも可能ですよ」

「なんて寛大な！ ありがとうございます！ 是非そう致しましょう、ええもちろん、そうするのが正しいのです！ 目的はこの者達との会話ではありませんでしたよね！」

メルティーは立ちっぱなしの上に注目されるのが堪えていたのかすぐに同意してくれた。そして、物言いたげな彼らに至極笑顔で提案した。

「後にしましょう！」

もちろん、その、説明もなしにヒートアップしていた面々が受け入れるはずもなかったが、メルティーは止まらない。そういうなんつうか、情熱的なまでに猪突猛進なところ

ろに「慣れている」ガトウーザが後押しするからだ。

「兄」でもあるガトウーザは暇すぎてその辺にフラフラと歩いていきそうだったマティカの手を兄らしくむんずと掴んで爽やかに言った。

なんだか、顔は全く似てないが兄弟みたいでとても微笑ましい。そういうのに弱いんだ、俺は。

「行きましょう、メルティーが押さえ込んでいるうちに。大丈夫です、マウリヤ……いえ、マキナお嬢さんのお屋敷にまで詰めかけては来ません。格上の相手の家にあんな人数で上がり込めるほどの度胸はないですから」

「ちよつと、離してくれよお……」

「では、アーミアスさん。行きましょう」

マキナお嬢さん、と聞いた瞬間彼らは明らかに口ごもった。俺たちの歩みを妨害することなく、道を開けてまでくれた。なんだか力関係がはつきりしているな。そんなものなのか。

まあ、力関係とかいう話をした場合、愛すべき人間たちよりも俺たち天使の方がよっぽどはつきりしていてなんも言えねえわ。俺はペーペー、師匠は結構強め。

例えば、師匠に剣を向けることができるのは「稽古をつけるために剣を向けることを許す」としてもらわなければならない。だが例えば……誰か上級天使が俺を傷つけたい

なら、あの流血事件のように抵抗はできない。

人間のが平和でいいな。圧倒的に。人間になりてえな。里帰りのごとに大出血とか
なったらもう帰らねえぞ。帰れって言われたらもう喜んで！ とか心にもないこと言
いながら帰らざるを得ない訳だが。世知辛え。

女神の果実を集め終わったら次の使命を賜る前にとつとポイコツトしてえな……
そのためなら天使界から地上へダイブをもう一回してもいい。リツカさんに心配はか
けたくねえけど。

そうだ、一度落ちれば翼と光輪を失った。二度落ちたら天使ってことも失わね？ そ
こまで都合は良くねえか。

静かな屋敷の中に、穏やかな時間が流れていた。かつてのように「お友達」による騒
がしきはなく、しかし寂しげな雰囲気でもなく。

マウリヤは屋敷の人間に「マキナは長い旅に出る」と告げて既に人形の姿に戻ってい
た。マキナの願い通りに、そして、マウリヤの想いの通り、マキナに寄り添って。

もはや人形は喋らず、動かず、俺の手の中に黄金に光る女神の果実が収まる。

ひとりぼっちだった少女の末期の願いを叶えた奇跡そのもの。寄り添う魂なき人形

に命を吹き込んだ奇跡。

だが、悲しいことに、人形は人間にはなれなかった。命を吹き込まれて、話せるようになったても、マウリヤの友はマキナだけだった。

マキナはそれを悲しんで、マウリヤに人形に戻り、もう傷つかないようにと願ったのだろう。友はそもそも人ではなく、自分の願いのために傷つくのを悲しむ、優しい少女。マウリヤの魂が、どうかマキナと寄り添っていますように。あの優しい少女が、友と笑っていられますように。

俺は膝をつき、手を組んで祈り、そして屋敷の中にある人の気配に少し安心する。

マウリヤ、マキナ、二人とも。別にひとりぼっちではなかったのだ。二人を思う人はいらる。それが今はもう、慰めになるかはわからないが。

旅に出たマキナを待つ人がいる。いつか真実を知るのだろうか、それは今でなくてもいいだろう。

そして船。マウリヤは言伝を忘れなかった。俺たちは彼女の好意をありがたく甘えることにして……メルティールとガトウーザはそのまま出発したような顔をしたが、俺はあの幼き人間たちに「後にしよう」と言った。

嘘をつく気は無いし、そもそもここで有耶無耶にして出発しても後々めんどくさいだろう。

そう説得するつもりだったが、思わぬ伏兵がいたのだ。

俺は戦士だ。力が強い職業。しかし上には上がいて、つまるところバトルマスターとレンジャー二人がかりに勝てるほどではない。

優しさである。家庭のいざこざに巻き込むのは忍びないという。俺はその説明にとりあえず納得して、マテイカと船で待つことになった。

しばらくして、晴れやかな顔をした二人が出発しましょうというものだから、もう少しゆつくりとするつもりだったがその通りにすることにした。何があつたのか、どうなつたのかは聞かなかつた。

僧侶であつた時ついぞ型に則つて祈るといふことをしなかつたガトウーザが、慣れきつた所作で十時を切り、メルティーは何度か杖を打ち鳴らした。

そして陸がすっかり見えなくなると、嬉しそうに報告してきたのだ。

「布教完了です、アーミアスさん！」

おう……愛しき子らよ、一体何を？

閑話 祝福呪

『素直になる呪い』

魔物の攻撃から味方を庇った。それは日常だ。だから、誰を庇ったのか、何から庇ったのか、もう定かではないのだが。それはいい。幼く愛しい子らが傷つかずに済んだのだ。俺だつてかすり傷ひとつ負わせずにいられるなんて傲慢になっちゃあいねえが、明らかに普通とは異なる魔力を帯びた一撃をみすみすと浴びせるものか。

しかし、だ。今回、ちよつとばかりだが、打ちどころが悪く、庇った方がいいが無様に気絶したらしい。気づけばリツカたんの宿屋に運び込まれ……内装を見た瞬間にもちらん分かる……ベッドの上におさめられていた。真つ青な顔色のガトウーザがベッドサイドにいて、目覚めた俺の言葉が出る前に「遮つて」、こう申告したのだ。

「アーミアスさんは、呪われてしまいました」

呪い？ 聞き返しそうになる言葉をまたガトウーザは遮った。珍しい。自己主張は……まあ、どう言い繕つても激しいガトウーザだが、言葉を遮るなんてことはしてこなかったのに。それほど焦っているのか。そんな、体が動かないとか痛みがあるとかそういうこともないし、どういう呪いなのか知らないが、気にしなくてもいいのによ。

むしろ予定よりも早くリツカたんのいる宿屋に戻ってこられたんだ。マイナス要素は何もねえ。リツカたんが意識不明で担ぎ込まれてくる見知った顔にびっくりしたかもしれないけど、それは……まあ、リツカたんに恥ずかしいところを見せたっていう失態だよ。

「私も神父も、今すぐに解くことはできません。『おはらい』を持ってしても丸一日、時間がかかかってしまいます……」。

その呪いの名は恐らく、前例からすると『思ったことが口に出る呪い』というのです。ああ自分が恥ずかしいです！ 恩のあるアーミアスさんに、ともすれば辱めを……！うう、幸い、そこまで強い呪いではありませんから、言葉を遮ってしまえばアーミアスさんの『思ったこと』は口には出ないようですね。その点は良かったです！ では、私は！ これにて失礼致します！ 一日、どうかどうか養生なさってくださいね！ ご要件があればいつでも！ 私でも妹でも少年でも呼びつけてくださいれば！ 隣の部屋に誰かいますから！」

早口にまくしたてたガトウーザは勢いよく出ていき、後にはボタンとしまった扉が残される。塵一つない綺麗な、薄暗い一室。音は良く響く。

そこで俺はと言うと、『思ったことが口に出る呪い』についてのやばさについて考え、俺の上品とは言い難い脳内の本来の口調や、リツカたんを常にペろっていることも全部

口から出るのかと思ひ当たり、気が遠くなつてきていた。

ガトウーザは、本当にいい子だ。部屋に來ないほかのみんなもいい子だ。なるほど、なるほどなあ。

しかし、思つたことが口に出る呪い、と言う割には考えても口から何も出ていないではないか。ガトウーザが遮れば言葉が出なかつたし、言つていた通りそんなに強い呪いではないのだろうな。例えば……今言葉が出ないのは、言葉を聞く相手がいないからでは？ やべえよ。

そう思つた瞬間、勝手に口が動く。まさしく、いやそうなのだが、呪いのごとく。

「やば……」

……。

マジで、やべえよ。俺がやばとか口走つたことがあつたか？ この天使生で？ ない。一度もだ。神に誓つてない。絶対になかつた。俺はずつとこの馬鹿みたいに丁寧な言葉で話してきた。

本当に小さい頃から俺は、少しでもいい子に見えるようにあり続けることで、誰よりも早く、誰よりも長く、地上に行きたかつたからだ。ほんの僅かな可能性でも逃したくなかつた。そのために同輩の天使より優秀に見えるようにしてきたからだ。それが、この俺だ。虚飾に彩つた言動。幸い、この最高に「イカす」ほど薄い顔つきで判断される

ほど天使界は顔を重んじていない。もしそうだったら今頃ハゲだがイケメンの師匠が一番偉くなつてゐるに決まつてつからな。

それはさておき……だから、やべえよ。

ザツと血の気が引いていくのがわかる。これは！ 俺の築き上げてきたものを一発で崩す呪いだ。丁寧な態度で、敬語であり続けるのは簡単な理由なのだ。

敬語の真面目ちゃんというのは比較的問題児よりは放任されるうえに信頼性が高い。つまり俺は好き勝手、ウイズ人間たちと。こんな本性バレたら俺のハッピーライフの障害になつてしまふだろ！

恐ろしさのあまりめまいがした。俺がリツカたんの前で思つてること全部言つちまつたら？ あまりのことに嫌われるかもしれない！ 自分で自分を追い詰めているのがわかる。だが、そうだろう？ 出身の村の守護天使が自分のことを大変ペロく思つてました、なんて誰が考えるよ？

リツカたんペロ！ ペロペロ！ ペロ！ よし、口が回らないほど高速でペロペロしたら口からほとばしつたりしないんだな、よし、ペロペロ！ ペロペロ！ リツカたん今日も元気？ リツカたんのお手伝いしたいって俺の体が叫んでやがる、こんなことじゃなきやとつくに部屋から飛び出して！

そうじゃねえ！

言わぬが花、知られていないからこそ自由なのだ！ リツカたんを前に今日も可愛い、大好き、うんとうんと長生きしてくれよ！ あわよくばその人生の間、ずっと一緒にいたいぜ！ 横で見守るだけじゃなくて、俺と過ごしてほしい！ 真面目で働き者のリツカたん、信心深く純粋で、可愛いリツカたん。だれが好きにならないっていうんだ！

俺はリツカたんの！

「そばにいたい」

俺に話しかけてくれて、笑いかけてさえくれる君は、なんて綺麗なんだろうと、思う。だけど、俺は人間じゃねえから、俺と過ごすよりもきつと、同じ人間と過ごした方がリツカたんにとっては幸せなんだろうな……なんて、そんな……もし、口走ったら俺はいろんな意味で星になっちまう。

そうなる前に。なんとかして。神のパワーかなにかで。

「人間になりたい……」

おうよ、全部口から出てるわ。

ということ、うっかりやらかして立ち直れなくなる前に、ガトウーザの優しさに甘えることにした。今日はここに本当に閉じこもっていよう。

布団の中で大人しく寝てりや何も口走ることもないだろうし、一人なら何言ってもバ

レやしない。ああ！ 今ぼつかりは人間たちに姿が見えず、声も聞こえずだったのが懐かしい！ あの姿なら呪いがかかっていようが気兼ねなくリツカさんの隣に居れるのによお！

ま、ないものねだりをしてもしようがねえ。布団を鼻くらいまで被る。薄暗い部屋の中はしんと静かで、ちつとも眠くねえけど頑張ったら眠れる気がしてきた。

目を閉じる。百年以上の習慣のうつ伏せではなく、翼が失ったからこそできる顔向けで。まだ少し慣れないが、なんて息がしやすいんだろうか。神はその点において少々、天使の設計をミスってるよな。

睡眠時間はそんなに長い方じゃないが、出来るだけ長く眠れるように祈って。

よし、おやすみなさい。

とんとんとん。優しいノックの音に意識が引き戻される。窓から差し込む光はまだ強く、そんなに寝ちやいねえつぽい。

「わあ！ 駄目ですよ、リツカさん！ アーミアスさんは今お休みになつてはるはずなんです！」

リツカたん?! リツカたんが来てんの?!

俺は素早くベッドから降り、我ながら惚れ惚れする速度で鏡の前に滑り込んだ。そして髪の毛に変な寝癖がついていないか、顔に布の跡でもついていないか、ともかく身嗜みがおかしくないかを高速チェック。

服を見下ろしたが、こちらは休みの日に着てるような普通の服だ。パジャマなんてものは持ち合わせていないからこれを着せられたんだろう。ナイス俺。鎧から着せ替えてくれたのは誰だろうか、グツジョブ誰か。

さて、身嗜みは問題ない。リツカたんをスマートに出迎えよう。

足音もなく扉に向かった瞬間、メルティーの声で硬直した。

「リツカさん、今アーミアスさんはその、呪いを受けています、もしかしたら人前には出たくないと思っていらっしゃるかもしれませんが」

うっわ、そうだった。『思ったことが口から出る呪い』だったか？

だめだだめだ、リツカたんには俺みたいなやつ欲望の声を聞かせちゃならねえ！ 取り返しのつかないことになる前にベッドに戻るしかねえ！

だがあまりにも焦っていた俺は踵を返してベッドに飛び込むのに間抜けにも足を滑らせてすっ転んだ。派手な音が外にも聞こえたらしい。恥ずかしすぎて布団に頭から突っ込みたくなる。

「だつ、大丈夫なの、アーミアス？ でも人前に出たくないかもしれないって……もし何かあったら言つてね！ お昼食べてないって聞いたから、軽食でも思つたけど、また、後にするね！」

リツカさんに心配されちまつた！ リツカさんが俺のこと心配してる！ 嬉しい！ 恥ずかしい！

これで黙つていられるか！

俺は衝動のままに扉へ向かつた。思えば、リツカさんに何がなんでも幻滅されたくないのにこんな行動に出たのも呪いなのだろうが、その時は頭に血が登りすぎていた。

そして扉を開けて……口からほとぼしる言葉を止めようと理性は働かなかつた。

「リツカ、大丈夫！ ぼくは大丈夫だから……ら……」

目をまん丸にしたリツカさんとメルティー。可愛いなあ、驚いてても可愛いな。ところで可愛い可愛いって思つても口から出ないのは嬉しいんだが、俺が自分のことを子どものように僕なんて言うものだから、顔がどんだん熱くなつていくのが分かるんだが。

ちよつと待つてくれ、もしかして、誤診なのか？ 幼児退行する呪いなのか？ 人間にとつて何代も前、とても昔、子どもの頃。その頃の一人称だぜ？ それとも心の奥底では僕のままなのか？ まさか！ 変えて百年は経つんだぞ！

「アーミアスさん……？」

「ああ、元気そうでよかった！ 気を失ったまま、ガトウザさんに背負われてきた時は本当にびつくりしたの。大丈夫よ、呪いなんてしょ、気を遣わなくていいの、ただお腹がすいてないかなって……差し出がましい事だったかもしれないけど」

「そんなこと……ないよ、ないですよ、嬉しかった、ありがとうございます。今、言葉を上手く制御出来ないみたいで、その、子どものときのようなたどしきでごめんなさい。でも、嬉しかったんだ……気に病まないで」

頬が熱い。だが余計なこととは言っていないはず。言っていないんだがとんでもなく恥ずかしい！ 下手に口調が出るより子どもっぽい分もつと恥ずかしいわ！

リツカたんは笑った。俺の心はそれでぼかぼかする。リツカたんパワー充電！

「ええ、わかったわ。」

アーミアスはどんな時でも変わらないね。ね、今日はゆっくり休んでね」

「うん、ええ、もちろん、明日には治しますとも、リツカ」

治らなきや困る。こんなの毎日とか耐えられるわけがない。星になつちまう。

「そうだ、軽食……サンドイッチを持ってきたんだけど、どうかな？ お腹減ってる？」

「食べます」

「良かった、食欲があるなら大丈夫だね」

リツカたんが作ったかは定かじやないが、リツカたんが手渡してくれるサンドイッチ

を食べることは個人的に天使の理より余程重要なことだからな!

サンドイツチを受け取り、どこかあわあわとしながら俺を心配してくれたメルティート、優しい笑顔を浮かべているリツカたんにお礼を言つて部屋に引つ込む。

扉がしまる。扉の前から人の気配が消える。俺は震える手でサンドイツチを安全な机の上に避難させると、羞恥の頂点に達して布団に倒れ込んだ。

いつだって、嘘なんてついてない。心掛けているのは、癖となっているのは、言葉が丁寧で、穏やかに、それだけだ。だが、今日はそんなにも、どうしていつそ素直に言葉が口ついてしまうのか。幼子のように。そういう呪いなんだろうな。くそつ、恥ずかしい。

幸い、肉体的には何も問題がないし、意思疎通にも最低限問題ない。治ろうが治るまいが明日には発つ。俺は使命を果たさなくてはならない。とつとと終わらせてリツカたんの周りを守っていたい。

「うあー……はずかし」

ただ、今は、布団に頭突つ込んで羞恥にうめいていても、許してくれ。

とんとんとん。控えめなノック。ですが私たち三人には大変大きく響きました。マティカ少年がすつ飛んで扉を開けます。兄は驚きかなにかで胸を抑えて地面に蹲りましたが、まあ大丈夫でしょう。どことなく恍惚としていましたので。

ですが、アーミアスさんに見られて不要なご心配をかけることもありませんから、目につかないようにベッドの下にでも潜り込んで欲しいものです。あら、元気よく起き上がりました。

「アーミアスさんっ」

「はい、ご心配を掛けています。ですが、その、体は元気で……有り体に言いますと、暇なんです。その……えっと……」

珍しく、どこかもじもじと、口ごもったアーミアスさん。ずつとずつと年上のはずなのに、どうしてでしょう、外見相応の少年のように。親しみ深く見えてしまいました。ああ、失礼なことを。

ですが、ですが！ 心に嘘はつけません。お可愛らしい！

「仲間に入れて、もらっても？」

普段、無表情気味のアーミアスさん。優しく微笑むことはありますが、こんな眉を下げた困り顔なんてとってもレアです。

ああ！ まさしく！ 天にも登る心地！ 私、私、今敬愛する天使様のお可愛らしい姿を見ているのですね！

「もちろんですとも！ ねえ姉さん！」

「はい、ガトウーザ！ お茶とお菓子をお出しします！ あの、既に一人部屋に三人もいるわけで、ちよつと狭いかもかもしれませんが！」

「アーミアスさん、こつちに座つて！」

「もう一度『おはらい』を試させてもらいますね」

「はい、よろしくお願ひします」

なんとか恍惚とした表情を消した兄さんが「おはらい」を再度試しましたが、結果は変わらず、もはや解くものは何も無い……つまり時間を置くしかないという結論に至り、もはや僧侶ではないものの修行が足りないかと地面に沈みました。

「気にしないで、大丈夫です。真摯な子よ、大丈夫。その献身の意は伝わっています……嬉しいので。明日には解けているんだよね、確かな腕を持つ君がそう言ってくれるなら、大丈夫」

いつもよりも柔らかな口調のアーミアスさん。私も慰められたいです。贅沢な兄さんはすぐに立ち直りました。

お茶とお菓子を手早く用意し、椅子はひとつしかないものですから、ベッドに三人座

りました。もちろん、本調子ではないアーミアスさんのサイドを固めた形です。

兄さんは裏で繰り広げられたじゃんけんに敗北し、椅子に悲しそうに座りました。そこはそこでアーミアスさんを正面から見ることが出来るのですのでどこに座っても勝ちなのですけどね！ 隣は譲りませんが。

「なんだか楽しいね！」

じゃんけん一抜けのマテイカ少年が左側、つまりアーミアスさんの利き腕と逆の方向で言いました。利き腕側の私はアーミアスさんに邪魔に思われないように、そして悟られることなく過ごす高いスキルが必要になるのです。

「そうですね、なんだか……無垢の子、子どもたちの秘密基地ってこんな感じなのでしょうかね」

「……そうだよ、もっと人が多くて、もっと居心地悪いけど！ 多分こつちのが楽しいよ！」

「なんてつたつて、美味しいおやつと安全が両立してますからね！」

どこか普段よりも柔らかく、幼いようなアーミアスさんと過ごす時間はとても楽しくて。あつという間に夕飯の時間になってしまい、私たちの語らいはそこで一旦終わることになりました。

連れ立って一階に夕食へ向かう時、窓から差し込む月明かりに銀に輝くアーミアスさ

んの御髪にうっとり見とれます。

立ち止まった私に気づき、振り返ったアーミアスさんはお優しくも、微笑んでくださいました。

夜、仕事を終えて、外で星を見ていたら。よく晴れているからかな、静かに誰かがやってくる。振り返らなくてたつて誰かわかるの、こんな星が綺麗な夜に会うのに相應しいひと。ひとじゃなくて、天使様だけ。

ほら、振り返ったら、その通りの人が穏やかに微笑んでそこにいた。

「あら、アーミアス。こんばんは、もうお加減はいいの?」

「こんばんは、リツカ。もう平気、ただ少し、まだ、言葉が拙いかもかもしれませんが……」
「そうなの? 拙いだなんて、思わないけど」

「『思ったことが口に出る呪い』だそうです。今日は誰にも隠し事ができないわけですよ。ちよつと……言葉遣いまで子どもっぽくなってしまうのは、恥ずかしい」

「どこかミステリアスなアーミアスの思ってることが分かっちゃうんだ」

「俺がミステリアス……？ まさか！ リツカ、ぼく……俺の、どの辺りが……いえ、いえ、聞いたら余計落ち込む気がします」

落ち込む気がします、だなんて普段のアーミアスならきつと言わないことだろうなあ。ちよつとあわあわしているアーミアス。綺麗で優しい守護天使様。今日の彼は「呪い」のせいでもつつても近しく感じちゃう。

僕と俺を言い換えるなんて、ちよつと前のニードもそんなところあったじゃない！

アーミアスは天使様、人間とは違う。でも男の子つてことには変わらないのね。そう思うと可愛く思えてしまう。失礼なことだろうけど、アーミアスはきつとそれを許してしまう。

「言わないでおくね」

「……はい」

「ねえ、星が綺麗よ」

からかうなんて大それたことできないから、私は強引に話を変えた。きらめく星々、美しい月。疲れてたけど、この夜空を見るなら寝る時間が少し減っても構わない。

「そうですね……」

「今日は本当によく見えるわ」

「千の時を、万の時を、死後星々となり見守ってくださいっている天使たちも、地上に生き

る神の子らを、よく見ることが出来ているでしょう」

思わず振り返った。星を宿したようにきらきらしているアーミアスの目にも星々が映り込んでいて、優しく彼は微笑んでいた。

アーミアスは天使様。私が産まれる前から、お父さんが産まれる前から、おじいちゃんが産まれる前からずっとウオル口村を見守ってきた人ならざる神の使い。

だけでもとつても親しみ深くて、今日なんて特にそう。触れられるほどそばにいる、誰よりも優しく綺麗な天使様。

なのに、その、『思ったことが口に出る呪い』を受けた彼の口から出たのは、普段きつと彼が優しきでひた隠しにしているはずの、「とても天使様らしい言葉」だった。

私は彼が身近な男の子じゃなくなつて、私と同じくらいの歳に見える容姿のままずっと在り続ける天使様であることを思い出した。

そうよ、そうなの。アーミアスは優しいの。だから、普段は頼まれでもしない限り仰々しいことは言わないわ。天使様、優しい天使様。ほら、現実に、見守り、手を差し伸べてくださる天使様。

地上に落ちてきてもなお、光かげることなき、天使様。落ちる、だなんて天使様にとつてはきつとつても良くないことのはずなのに。

彼はずっと地上にいる。私たちを好いてくれて、守ってくれて、そして、触れられる

ほど近くに来てくださるの。

「だけど、本当なら、触れちやいけない。神の使い、救いの主の、お使い。」

「星は天使の死後の存在です。夜空でああして俺たちを見守っているのですよ。俺が天使として遣わされる前にとつくに星だった天使ももちろんいます。永い時を見守っているのです。でも、……」

「ひゅっ。」

「俺、自信があるんですよ。どんな天使よりも……俺の方が人間が大好きだってね！ それもずっとずっと！」

手の届かぬ天使様、私たちの、守護天使アーミアス様。

彼はあたかもティーンエイジャーのようににつこり笑ったの。

誇るように、自分の方が人間のことが好きだって星々に言っただけ聞かせるように。

「リツカ、今日の星は格別に綺麗です。でも星を見るにはそろそろ風も冷たくなってきましたね。俺はあの星々よりもリツカのこと大切なので忠言させてください。そろそろ、室内に戻りませんか？ 俺の方がリツカを守れるんですよ、見てるだけの奴らより！」

「ふふ……あはは！ アーミアスったら、大真面目にそんなことを言うなんて！ なんだか……とつても……」

「子供っぽいですか？ 今日はそのなんですよ、リツカ。とっても恥ずかしい。でもリツカ、星にリツカの視線を奪われるのはちよつと惜しいんですよ」

「なあにそれ」

月の光に透かされて、アーミアスの髪は煌めく銀に輝く。神々しくつて、本当に綺麗。その顔も、まさしく神様が丁寧に丁寧に、丹精込めてつくりあげた天使様！

だけど、だけど、中身はこんな……触れてもいいみたい、優しくつて、近しく思えてしまう。触れていいの？ 私を誘う手にそつと手を重ねる。

その華奢な容姿からの想像よりもアーミアスの手のひらはずつと分厚かった。

守護天使様、だもんね。守つてくださつてる。こうして。

なんとなくたくましさを感じて、どきどきした。

「そりゃありツカ……あんなに君が熱烈に見るのなら……俺も、星になりたくなるんだ……」

そんなときに、彼は少し頬を染めてこんなことを言うものだから！ 私の頬も釣られて熱くなる。

ロビーに戻ると、おやすみなさい、彼は早口で言う。いい夢を、健やかに。彼は本心からそう言う。いつだってそうだけど、その呪い、ううん、私にとつての祝福は彼の心の壁を取り去つてしまう。

天使様の優しい気遣いをそっと拭いとっていく。
私の胸は、しばらくドキドキしていた。

閑話 休息

旅の途中、夕飯の後の語らい。よくある、いつもの穏やかな時間だが、まだ人間の物差しでも若い少年であるマテイカにとっては眠気の方が上回ることもあることだろう。しばらく前からとうとうと船を漕いでいたが、とうとう机につつぷした。

それを見る仲間たちの目は優しく、だが、ルイーダの酒場の雇われ冒険者の中でも俺の仲間はいっとう真面目だった。

「ああ、眠ってしまいましたね」

「そうですね。しかしながら、まだ若い少年とはいえ、雇われの身であることにもっと自覚を持ってもらわなくては。アーミアスさん、遠慮はいりません。起こしますか、それとも私が運びましょうか」

「大丈夫ですよ、ガトウーザ。俺が部屋まで連れていきますから」

「ああ、そんな！　なんて慈悲深い！」

ガトウーザは相変わらず大袈裟だな。感激のあまり両手を組んでもはや拝みの姿勢だ。

マテイカは俺より少し小柄だし、結構年齢の割に華奢だ。だから比較的簡単に背負う

ことが出来た。寝室に連れていき、寝かせ、布団をかける。

すうすうと穏やかな寝息。力の抜けた寝顔。今日も結構戦ったし、疲れたんだろう。なんとなく、俺はその時リツカたんがどうしているのかと思つた。今穏やかに眠るマティカのように安らかに眠っているだろうか。

毎日あくせく真面目に働き、敬虔に祈りを捧げるリツカたん。

リツカたん労りてえ。

ということでもマティカの疲れを見るに仲間たちには休みが必要だという判断を下し、俺は近々休みの日を作つてリツカたんをどうにかして労わろうと計画した。

えーつと、そういう「労り」つてなんて言うんだつたか？ えーつと……なんだ？

まあいい、それを学ぼう。俺は今まで人間たちに触れることすら心霊現象になつちまうんでまともに出来やしなかつたが今は違う。

こつそり風のように掃除しておいて仕事を減らして休んでもらう、みたいな間接的な事じゃなくて、リツカたんの前にスマートに現れて疲れを癒す男に俺はなるからな。

仲間たちはタフだからほつといても回復するだろうと思つてるんじゃないやねえぞ。俺の全てはリツカたん最優先なだけで……リツカたんの練習台にするほど失礼な天使のつもりはないが、リツカたんに対してぶつつけ本番もどうかと思う。

つまり、それはもう自分を実験台にするしかないな。

とはいえそろそろ夜も遅い。どうせならもう休むべきだ。ガトウーザやメルティーにもおやすみを言つて、考えをめぐらせながら寢室へ向かう。ここはリツカたんの宿屋じゃねえけど、手入れの行き届いた部屋に着いて、何が疲れた者の癒しになるのか考え、考へて。何も考えずにベッドに乗つかった。

そしてふと、靴を脱いだ足が目に入った。歩いて走つて疲れきつた足。

両手でおもむろにふくらはぎを揉む。あー、……これは痛氣持ちいという感覚だ。なんつうか、これ以上ないつてくらい凝つてやがるな。俺は天使だ、なんだかんだ言つてこの百三十年ほど翼に頼つてきたからな、こんな長期間歩くにはまだ慣れていないらしい。

ふむ。リツカたんは働きの者で、ウォル口村にいた頃から父親から継いだ宿屋を一人で切り盛りしていた。俺みたいな軟弱な足じゃねえだろう。リツカたんのおみ足ペロペロ。ペロペロ！ んん、心の中は自由である！ ペロい！ ペロすぎるんだ！ リツカたん！

軟弱じゃなくても立ち仕事だ。疲れは当然あるはず。癒しをリツカたんに。癒しといえはマツサージ。これだ！ んんっペロ！

決して！ 決してリツカたんの足に触れられるから選択したんじゃねえからな！

そのために俺は自分の中にある下心という下心をすべて焼き払つて星にしても……

無理だろうが！ できる限りな！

そもそもリツカたんがそんな怪しい申し出を断ることだって有り得るんだぜ、冷静にならなきゃな！

よし調べる。調べたら俺が試す。

なお、俺は相当なヘタレである。

ヘタレでなければ、もうとつくにハッキリとしたアプローチをしているはずなんだ。

俺が天使とか、リツカたんが人間だとかそんなことは俺にとつてどうでもいいことで、だがリツカたんにとつてはどうでもいいわけではない。……そういう言い訳を沢山考え出すことができるタイプのヘタレだ。

もちろん本人を前にすると照れとあまりのペロさに訳の分からない言動になるところとかもヘタレが過ぎる。それはリツカたんが可愛くて、健気で、真面目で、ペろくて、ペろつペろだからなのだが、本人としては無自覚も良いところで、自覚していなくても当然のことだ。

全部俺が悪い。

ということでも自分の足を犠牲にし、時に両手がつるまで練習したマツサージを持ちかけるのは、いくらリツカたんがお疲れであろうとも「これはイエスペロペロノータツチにおもいつきり反するのでは？」と思えば不可能だ。

下心のある男が、好きな女の子の足に……あるいは肌に……どうにか知恵を搾って合法的に触れようとしたが、どうにも妙案が思い浮かばなかったゆえの浅知恵という感じだ。どう考えてもリツカたん目線じゃ嫌だ。俺はリツカたんとお付き合いをしている仲ではないのだから、そういうことは不快であると考えたほうがいい。

つまり、つまるところ、リツカたん俺は友人とかそういう範疇の仲でしかないんだから。鳥澁がましいのだ、言い出すのも。リツカたんが申し出を聞いて不快に思う可能性が欠片でもあるのなら、もうやめておいた方がいいだろう。

なぜって、そりゃ俺はヘタレだからだ。リツカたんが嫌な思いをするなら俺は今すぐ星になりたい。安全策に走るぜ。ということ、仲間の野郎なら多少は不快に思わないだろう、まだしも同性だしな。マテイカとガトウーザ、どっちがマツサージをご所望だろうか。

俺は狙いを定めつつ、さりげなく、本当に当たり障りなく、ともすれば誰も気づかないくらいさりげなくリツカたんの宿屋にルーラした。我ながらさり気なさすぎて、リツカたんの宿屋にルーラで戻ってまで泊まることが当たり前前すぎて気づきもしないくら

いさり気ないな。

うん、習慣こそ大事なのだ。習慣なら当たり前だから気づかないからな。リツカた人も俺が帰ってくることを習慣に思ってくれていたらいいな。

「あらおかえり、アーミアス！ 今日もお疲れ様！」

おかえりだつて！ 嬉しすぎて口から何かが出ていきそうだけ。リツカたんの笑顔が眩しすぎてペロい。目玉が焼き切れそうなほどの眩さ。ペロペロ！ 目は焼け落ちようが閉じねえからな！ リツカたん今日もかわいいぜ！

「リツカこそ、今日もお疲れ様です」

「ありがとう、アーミアス。じゃあ四人分、部屋を案内するね……あつ！ 今日ね、一人部屋が二つと二人部屋がひとつになっちゃうけど大丈夫？」

「もちろんですとも」

ふむ。繁盛しているのはいいことだ！

メルティーは当然一人部屋として、あとはじゃんけんで決めるか。そう思つて仲間たちを見る。つてなんだ、なんだ野郎ども。仁義なき睨み合いをするとは大人気ない。そんなに一人部屋のがいいのかよ？

たしかに気を抜けるのは一人の方だが。俺とか特に。

ほら、俺はよお、心の中から寝起きの行動まで清らかな天使様じゃねえからよ、うつ

かりヨダレ垂らして寝てるかもしれないねえし、おはようございますの挨拶の後に寝ぼけて「師匠」とか口走るかもしれないねえ。うっかりうっかりしちまうことがあるだろ、いろいろ。そういうのが幼き人間たちにもあることかもしれないねえよな。

……うーん、雇用主と同じ部屋で寝るのはやっぱ嫌かもしれないねえよな。その辺はもちろん、本人の意思を尊重するが。

だからって明らかに一人部屋のが部屋代としても高い以上俺が率先して取っちならそれはそれでどうよ？ その……一人部屋がいいって言ったらよ、俺が雇用主ゆえに反論できないっていう、権力の盾みたいなことになっちゃうしな？

さて、いつまでもリツカたん……カウンター前を占拠してるわけにはいかねえ。リツカたんの手から鍵を受け取り……俺はかなり気持ち悪い天使なので鍵越しに体温を感じとりたかったが無情にも冷たかった……晩飯がてら部屋の分配をする訳だが。

「部屋割りどうしましょうね？ 二人部屋の方の割り振りが……」

「是非とも！ ご一緒したいです！」

「あつずるいぞつ」

「戦いにおいて速度ほど大事なものはありませんよ、戦友よ」

「ぐぬぬ……」

そんな二人とも一人部屋より二人の方がいいのか。案外一人は寂しいとかそういう

うことなのか？ 競って名乗りを上げるほどなのか……それも、謙虚なガトウザーがだぞ？ よし、よしよし。なるほどな。決めたぞ。

「なるほど。ではおふたりが同じ部屋ではどうでしょう？」

「こうだな！ これがいいんだな！ なるほどなるほど。」

マテイカに鍵を渡し、オレは二人同時に願いを叶えられた喜びで思わず笑顔になった。

「では、ゆっくり休んでくださいね。おやすみなさい」

「お……おやすみなさいませ……」

「おやすみ……なさい……」

二人は随分疲れていたのか大変大人しく引つ込んだ。うん、よく休んで欲しい。

手に入れてしまった一人部屋で、習慣になつてきたマッサージの練習をしてから俺も早く休もうと思う。リツカさんに施すのは夢のまた夢かもしれないが、愛すべき人間である仲間たちにはいつか披露できるかもしれないとひとり、夢見て。

図らずもそれなりのマッサージの腕を手にした俺の、手腕の披露の結末は、また、夢の向こう。

強気になれない天使は、普通の人間と同じように愛に振り回されていた。

グビアナ編

69話 傷

波の音を堪能しつつ、出航前に部屋を探索を行っていると、乗船してからずっと黙っていたアーミアスさんがぼそりとこぼしました。

「ところで、船の舵取りができる方は、この中にいるのでしょうか？」

「……」

「……」

「アーミアスさんっ！ おれ、海初めてなんだ！ すっごいね！ 広くてさあ、きれいでさあ！ ワクワクしちゃうね！ どんな魔物がいるのかな！ どんな景色がこれから見えるのかなって！」

「おや、奇遇ですね。俺も海、それも船の上からの眺めは初めてですよ。海を見たこと自体はありますが、それはもう天使界から『見た』というだけのこと。目標地点まで飛んで降りていたので、かなり高所であれば海の青を見ることができましたね……こんな近くで見ると、きらきらしていて、俺もなんだかワクワクしてきますよ」

ね、ね、姉さん。船の舵取り、できますか？

に、に、兄さん。兄さんならできますよね、ほら、精霊パワーで！ なんとかかなりますよね？

互いに目だけで会話。折れたのはそりやあもちろん、兄の私です。互いに兄も姉も「その方が都合がいい時」に名乗る私たちですが、メルティーはやっぱり妹なので。誕生日の話ですよ。同じ年ですけどね。

ああ、私が姉だと睨まれるのが心地いい。今は！ 私が兄なんですよ！

「アーミアスさん、不肖ガトウーザ、操舵をどんな手段を使っても……」

「……サンデイ、本当ですか？ 良かった、天の方舟の運転ができる貴女のレクチャーなら安心ですね」

「……」

「兄さん下がって、兄さんは何も言わなかったし、何も考えてなくて、アーミアスさんとサンデイさんに感謝しているのみです」

「ええもちろんですとも不肖ガトウーザ、情けなくも船の操舵を理解しておりません。アーミアスさんの顔の広さに感服しているだけです」

幸いにも、アーミアスさんは妖精との会話に気を取られて私に気づかなかったので！

特に問題はありません。ええ、精霊たちが私の無様な姿を笑っています。間違ってもアーミアスさんに不都合なことがないように、私は静かに祈りました。

精霊と天使様の関係はよくわかりませんが、今まで一応、それがかわいらしいいたずらの範疇であつても彼に害したことはないのです。今日もそのように安心いたしました。

錨が上がり、船はやがて前に進みます。

心なしか緊張の面持ちのアーミアスさんの丁寧な操舵は、砂漠の国グビアナへ向け、船は大海原へ。

海に近いサンマロウで潮風を浴びて育つてきたとはいえ、こんなに胸を躍らせて船の上で全身いっぱいに浴びる潮風はなんて特別なんでしょう。

砂漠の国グビアナでは今までよりもっと、お役に立てるでしょうか。ええもちろん、一層の努力を致しますとも。はつきり見える世界で、この手で武器を取つて。精霊も妖精も、私のどんな力も、なんだつて利用してやりますとも、我らが麗しき、守護天使アーミアスさんのためならば。

ええ、もちろん彼の為さんとすることはすべて天命。彼の意志こそが正しく、それを手伝うことに喜びを感じるのですから。道をご一緒にすることこそ、お導きですから！ 私は甲板から、操舵のアーミアスさんを見上げました。操舵中、遠くを見透すために兜を外し、その素顔をさらしていらつしやる姿を。眩い太陽に透かされた灰髪を潮風に踊らせて、ああ美貌の君。太陽よりも眩しいですとも！

甲板に膝をついてそうして祈っていますと、海からの魔物の襲来だ、なにをさぼつて

いるのかとメルティーに杖で小突かれたのでした。

熱砂に突入する前に船室にあった余ったベッドのシーツを裂いて作りあげた、急ごしらえのフードをめいめい被り、兜を被り直そうとするアーミアさんが蒸し焼きになる前に兜を奪取しました。サンマロウでは非常に役に立ちましたし、防御力も申し分なさそうですが、グビアナのような砂漠では不適當だと思ひまして。ええ、多少……いえ、過分に、出来すぎたことを申し上げたかもしれませんが、寛大なるアーミアさんは聞き入れてくださいました。

もちろん、忠言は本心からのものにして、事実、金属製の刃物などは見事に立ち塞がった魔物の傷を焼き、陽光を好む精霊たちが楽しげに歌いながら……つまるところ、既に熱々であるというのに、私の放った矢の矢じりを灼熱の地獄に変えておりましたとも。さながらメルティーの火炎の魔法ごとく様相です。そんな金属のものをアーミアさんの頭を覆えばどうなるでしょう！ 石造りのかまどごとく惨事になるのではありませんか?!

その、サンマロウでは私やメルティーの親類の妨害のため、致し方なかったところは

ありましたが、この慈悲深くお美しい天使様の美貌を兜なんぞで覆い隠してしまうのはいささか勿体ない、いえ、世界の損失であると考えているゆえに！ それすらも建前でして、私が見たい！ それだけなのですが！

ええ、何か？ なんにもないでしょう、私たちにとつて重要なことです。メルティーも深く同意してくださるはずですし、幼いマティカだって欠片くらいはまともな美醜感覚を持ち合わせているはずです。

ということであーミアスさんの顔はフードで隠されているだけなので、風でも吹けばいつでも見れることでしょう。私はたいへん幸せです。

体感したことのない眩さの太陽、乾燥した空気が、とてつもない熱風、足を取られる熱い砂の海。環境は最悪ですが私たちを導いてくださる天使様が同行しているので全く問題ありません。

幸い、グビアナ城は迷うことすら不可能なほど大きく、蜃気楼ですらないほどはつきりと海からも遠く視認できていましたので一直線にたどり着くことが出来ました。これも我らが愛しき守護天使様の加護ですね。

これまで訪れた中にも未知なる土地はありましたが……ここまで気候が違うというのは初めてですね。ゆくゆくは雪に埋もれたエルマニオンにも行くのでしょうか？ わかりませんが、年甲斐もなくワクワクしますね。

砂漠特有の魔物が時折、私たちの行く手を遮ります。すると、アーミアスさんは必ず私たちを庇います。どんなにお願い申し上げてもそれだけは譲ってくださいません。人間を守護することが、アーミアスさんが天より遣わされた使命なのだとおっしゃって。

たしかに、守護天使様でいらつしやいます。使命……そうなのでしよう。でも、納得はできません。アーミアスさんは勇敢かつ、外見の儂さよりずっと頑丈なのは一緒に旅してきたのですから存じ上げております。私が起き上がることができなくなるくらいの手痛い一撃を浴びても、膝をつくまでもなく受け切ってしまったわれ、反撃すらなさるでしよう。

だからなんだというのです。敬愛する美しく高潔なる天使様が負傷される……：それも自分たちをかばってのもの……我慢なりませんよ！

ですが、私たち、気づいたんです。アーミアスさんに届く前に魔物を全部殺してしまえばいいんだって。アーミアスさんの手にかかって死ぬ魔物は、この上なく幸運です。アーミアスさんに殺される、ああ、それだけで魔物に生まれたという事実は祝福に変わるでしょう。次の命の安寧を約束されたようなものですから。祈っていただけ、祈りの剣で斬っていただけ。私たちのような、ただの人間に殺された魔物よりずっと赦されたような気がするでしよう？

ですが、私は、私たちはその点、慈悲がありません。アーミアスさんが魔物に狙われるより前に、敵意をあらわにした魔物は殺してしまいます。そうすれば怪我をなさいませんから。

私たちの意図に気づかれたかはわかりません。でも、アーミアスさんは私たちの行動に腕を上げましたね、と褒めてくださることがあったくらいですから、これでいいんです。

ええ、私なら、私がまかり間違つて魔物であるならアーミアスさんの手にかかつて赦されたい。でもね、私はアーミアスさんのお傍に立つことが出来る人間ですから、容赦はしないのです。殺します。この弓で。どんな手段を使つても。私を取り逃がしてもメルティーが、メルティーが焼きそこなつてもマティカが、アーミアスさんに攻撃が届く前に葬るでしょう。

もし……もし、それでもなおアーミアスさんに攻撃がいくなら。私どもの力不足ですから、鍛錬をしなければなりません。つまり、鍛錬の日々は続くということ。残念ながら、丸一日、アーミアスさんに攻撃が一切向かない日はないので。

アーミアスさんの透き通る白い肌に堪えない生傷を、私は自分のふがいなさを心に刻みつけながら、癒します。傷はすっかりと消えてしまいましたが、それでも、私たちは悔しいのです。

魔物は旅に呼応するかのように強くなっていきます。私は、流血しながらも私たちの無事を喜ぶアーミアアさんの美しい微笑みを見ない日が来ることを願っています。

城下町について、人里ゆえに丁寧に魔物から守護された空間に人心地つきながら、私はアーミアアさんに迫ります。これくらい無視してもいいのだとおっしゃるアーミアアさんに食って掛かって不敬ですが、譲ってはなりません。

アーミアアさんの手を取って、擦り傷残らず癒します。

透き通る白い肌は美しく、アーミアアさんの容姿はどんな細部においても神が丹精込めてつくりあげたに違いないのです。でも、私が癒す傷の下に刻まれた傷跡は消すことができないのです。

いつか、尋ねたことがあります。私はアーミアアさんの傷を癒す役割ですから、誰よりも彼のその「古傷」に早く気づきましたから。それでも基本的には戦闘中のこと、つまり厚く重ね着した防具越しですから、詳しくは見たことがないのですけれど。

彼の腕や足に残る傷はなんなのか、と。

彼は困ったように、天そらから落ちてきた時の傷だ、とおっしゃりました。

閑話 汚濁

私は天使だ。人間たちが想像する、守護天使に相違ない。

だけでも、彼らが想像するような清らかさなどないし、慈愛の心を持ち合わせている訳でもない。

私が守護天使をやっているのは、私の師が守護天使だったからで、これまで辞めていないのは守護天使をすることが天使の中では名誉であることであり、また、まだ後継者を見つけていないからだ。

人間たちが祈りを捧げる清らかな守護天使をやっているはずだが、蓋を開ければそれっぽっちの理由である。

人間たちの幸せについてなど、そう願ってはいない。まあ、不幸であるよりはいいに違いないし、不幸ならば星のオーラを得ることが出来ないでこちらとしても困る。だから、幸せであれば互いに都合がいいというだけのこと。

人間たちを魔物から守るのも、日々の細かなことを手助けするのも星のオーラを得るため、それだけなのだ。それ以上になにか理由を見いだせるのか？ 否である。

所詮相手は人間である。私たち天使を見ることも叶わぬ。姿の似つかぬ天使像をあ

りがたがっているだけの存在。私たち天使よりも余程短い人生を、星々の瞬きの間に終える人間たちがいちいち心を砕いてはこちらが参つてしまう。

それでも、私はまだ、まともな天使である。まだしも真面目な天使である。仕事を嫌がり、墮落するのは天使のすることではないのでみなそれなりに、そのプライドを維持するために働くが、私の場合はきちんと毎日守護区域を見回りし、定期的に区域の魔物を減らしているところから成績も良い。天使としてはそれなりに一目置かれていると
いったところだろう。

それについて、私はそれなりに誇りがあるが、単に生まれ持った性質が真面目なだけだろうと思っている。人間の生き死にに天使らしく興味もなく、ただ機械的に星のオーラを集めているだけ。いつの日にかくるらしい救いの日まで、ルーティンを崩すことなく過ごすだけ。

命令があれば弟子をとるだろう、命令があれば守護ではなく、懲罰に司る日も来るかもしれない。だが、何もなければ何も変わらない。魔物に遅れをとるほど私は弱くなく、また天使の私に老衰による死はない。

つまらなく、一定で、どこか虚しく、しかし体はきちんと動く。人間から見れば果てしないほどゆつくりと老い、経験を重ね、透明な日々を過ごすのだ。

私は天使だ。少し真面目な、ごく普通の、ごく平凡な天使である。墮天することも無

く、清らかさを維持しようとしてもしない。

それが普通の天使の姿である。遙かな昔、会ったこともない神に命令されたように動かだけ。ほかの皆も大した誤差はない。大した個性もない。より真面目な天使もいれば、より不真面目な天使もいる。だが、何もなければ普通に動くだろう。

しかし、神が人間や魔物の永遠の平和を創れなかったように、天使には例外が存在してしまふ。

私の知る、「例外の天使」、三人について語ろう。

ここは、そういう場なのだろう？

「違うけど……まあ、とりあえず洗いざらい話すといいわ」

エレツタ、豊かなその髪は魅力的だが栗色は対象外である。つまるところ、この世に祝福されるべきは白、ないしは銀である。そして美しいことである。

穢れなきその色こそが至高であり、人間を見れば分かることだが老いた人間の髪が白いのは世俗の穢れを来世へ向けて削ぎ落としていつているからなのだ。

記憶も人格も曖昧になり、そして死ぬ。

そしてもとより白や銀を持つ者は純粋で美しく、私たちのようなただの天使よりもよほど無垢である。

私はこの天使生においてそれこそが座右の銘、それこそが信念として生きてきたの

だ。

それを持つ者なら愛せる。愛など、墮天の一理由でしかないと思っていたが、なかなかどうして心地よさそうである。

うち二人はある意味祖父と孫のようなもの。偉大なるエルギオス様、さらにその弟子の弟子のアーミアス。

今は悲劇と語られる、天使界に戻ることのないエルギオス様は稀代の守護天使だった。彼がまだ天使界に戻っていた頃は私はまだ幼く、面識はないが語られる彼の成したことはどれもこれもこれも天使としての模範。真に慈悲を持ち、真に天使として働き、そして行方をくらました。

伝説のような存在だが、タブー視されているとはいえず、天使の見解は大抵同じだ。人間に入れ込みすぎたのだろう。どこにいるのかはわからない、利用されたのか、亡くなってしまうたのかも。だがそれだけには違いない。

人間なんていう、短命の種族に心を砕きすぎた天使なのだ。だが金髪だし、年上は範
囲外だし別に天使界の損失ではないな。

とはいえ彼のようなひたむきさはまさに例外の天使といえるだろうか？ もしかした
ら、不敬な言い方をすれば……彼は彼の運命を地上で見つけてしまったのかもしれない
な。

その場合は墮天しているのだろうか……確か墮天の理由は反逆、無所属、愛だったか
？ よく知らない。だが、邪推も不敬だ。辞めておこう。

だがまあ、金髪である。それよりも最近の損失といえば、大事件を除けばラヴィエル
が地上へ行ってしまったことだろうな……。

その弟子の弟子、アーミアス。エルギオスの教えを忠実に受け継いだイザヤールの弟
子。

奴は……奴、なんて言えるのははるかに年下だからにほかならない……まさしく天使
の中の天使である。

馬鹿みたいなことだが、奴は天使だ。恐らくは神の創造した天使の中でも最高傑作の天使、私たちのような天使を天使と言うならば、奴こそが神の使い、代行者だった。

だった、なんて言うのは、惜しくも、非常に惜しくも彼が自我をともに持つ年齢になる前に穢されたからである。

神の代行者は、なにもかも、思想、容姿、能力全てを天使としての最高傑作として備えていたが、ゆえに嫉妬された。同年代の幼く、少しばかり早熟だった天使にその尊く白い髪を嘲られ、容姿をなじられたというではないか。嘆かわしい。

だが奴は悪意なんてものを持たない。本物の天使だからだ。悪意に悪意で返せばいい。同世代の天使どもにからかわれたならやりかえせばいい、あるいは私たちに知らせればいい。

奴は悪意を持ちやしない。悪意を受け止め、その髪がうつすら染まるまで、私達は気づきもしなかった。

だが悪意に多少染まっても、悪意の主は幼い同じ天使。人間よりははるかにちやちな悪意である。軽く世界樹の根で浄化すれば祓える程度のものであった。

アーミアスは三人目の例外に連れられて、世界樹に向かった。

三人目の例外は、外見だけは黒い髪の幼い天使。天使は天使ゆえに、たまに年齢に合わない外見になることがあるが、当然だ。年齢のとおりならば一人残らず老人だし、オ

ムイ様などどうなってしまうのか。

上級天使でありながら幼い姿をしたそいつは悪意を隠すのが上手かった。天使にして悪魔の悪意を持つあいつは、本物の天使に牙を剥く。

ああ、思い出したくもないが。あの日、本物の天使は、穢され喪われたのだ。

我らの、いいや、正直に言おう。私の希望を叶えるかに見えた天使を。

アーミアスは星になったわけではないが、純白の髪を失い、代わりに瞳に星を宿した。その意味は誰にもわからないが、粛々と天使らしく、もつとも天使らしく人々の幸せを見守り、情なく守護するはずだった最高傑作は、執着を覚えた。

人間への執着を。幸せを真に願う心を。一歩間違えれば墮天である。だが、誰もそれを危惧しない。彼ならば大丈夫だと見守るのみ。

それではいけないのだ。本物の天使ならば、人間の死に心を痛めたとしてもそれを引きずりやしない。奴はそうではない。最初に見た死にゆく人間の名をまだ覚えてい

る。だが、悪魔に穢された天使が真に天使の心を持てるだろうか。大多数の天使はその変化を見ても、穢された天使だとしても彼の清らかさを信じてい

る。だが、悪魔に穢された天使には読めない。だから真実はわからない。

私はひとり、勝手に疑っているだけだ。

彼は白ではない。もう、銀ですらもないのだ。

悪意にあてられた天使が、果たして本当に清らかなのか？ 悪意の持ち主のように外見は天使であっても、悪魔的な思想を持っている可能性とてある。何せ白髪ではないのだ。

「そうなの。そういう考えも納得。あいつが本当に余計なことをしたのは事実だし、アーミアスくんの髪は二度と戻らないし、趣向が変わったのも本当」

「エレッタ、あんたは奴を庇うかと思つていたんだが」

「奴なんて言わないの。かわいいかわいい天使の一人なんだから。だけど私、まだあなたの本心をひとつ聞いていないからまだ仕事してるだけ」

「……」

本心？ 私の？

私は取り上げられるのをなんとか免れた、握りしめたままの幼い頃のラヴィエルの姿に目を落とした。かわいい。やはり銀髪である。灰髪は邪道なのだ。白髪は至高。銀髪はかわいい。

穢れなき無垢なこども。しろくまぶしい。それこそが至高なのである。

穢れを許すまじ。私は三人目の例外がそのへんに脱走して抜け出し、二人目の例外に危害を加えるのが気に食わなかったので軽く天罰の雷を落としただけなのだ。

「白髪シヨタ最高だったのに……」

「天使つて正直全員、負けず劣らず変わり者だと思うわ」

せつかく我ら天使の上而降臨するオムイ様という大変なお爺様から、白く可愛くて最高にキュートな子になると思っていたのに、解釈外の灰髪になり、さらに哀れなことにトラウマから同じ天使から完全に興味を失い、人間視点での天使らしく人間のことばっかり考えているではないか。

最初、彼はそりやあもう完璧な天使だった。彼は私たちを愛した。人間を愛した。あまねく全てを愛し、そして、何も愛さなかった。神ごとき慈愛の持ち主で、一人の人間の死など気にもかけなかった。その幼い眼差しで地上を愛しく見つめながら、次の瞬間流星群に大陸が焼き払われようとも表情を変えないような慈悲だった。

ありのままを愛した。つまり、無垢だったのだ。悪くいえば、空っぽだった。少なくとも、私にはそう見えた。そして、ほとんどの天使と同じように同じ天使を同胞として今よりもずっと親しみ深く慕っていたのだ。

今ではどうだ？ 一瞥のみである。慇懃であり、丁寧だが、彼の心は常に地上にある。ああ、白い髪は正義なのだ。白くて可愛い子に顎で使われる方が、しらがのおじいちゃんに使われるより幸せではないか。こんな口に出した瞬間天使の理により丸焦げになりそうだが。

かわいい。あの可愛いにズケズケと触れたあの違法シヨタはとつとと処刑すべきな

のだ。

「冷静に考えて欲しい、エレッタ。私は白く可愛い子に命令されたい。高圧的に、人間のために豚のように働けと命令されるべきなのだ。白い髪の可愛い子に」

「ここが取調室つてこと忘れてないのかしら、私は人間で言う、『お巡りさん』なんだし」
「ああ、年増の栗毛より白く可愛い子に逮捕されたい」

「私への暴言はさておき、それはイザヤールに報告するべきに見えるのだけど」

「私はさすがにイザヤールパパに戦つて勝てる気はしない」

「誰がパパだ」

顔を上げるとそこには目を釣りあげたイザヤール。その足元で何も分かっていない顔の幼きアーミアス。ふわっふわの灰色の髪。これが白かったら神よりもまつりあげたのに。ああ許すまじあの悪魔のペドめ。

あんなにかわいかったのに。すっかり穢されて。救いといえれば、当時の記憶は残っていないことだろうか。ない方がいい。子供には罪はない。

無垢な心に直接欲望を叩きつけられたのだ。上書きされ、塗り潰されたのだ。その醜い執着を人間への深き慈愛へ変換したのはさすが白持ちと言ったところだろうか。

「なにかあったのですか？」

「師弟というのは親子のようにも見える……そういう話だ」

「師匠が父ということですか？」

「そういうことだ」

私は追加の取り調べを数時間受けることになった上に、イザヤールによつてラヴィエルの姿絵を没収されるといふ辱めを受けることになったのだった。

ああ。どうして。世界は不条理である。

歳を重ねる事に天使として完璧な容姿、完璧な勤勉さ、完璧な慈悲を備える美しくもキュートな姿を見る度に、私は悔しくなるのだ。

ああ、私はそれでも、白髪が好きなのだ、と。

しかしながら子供は無垢で無罪だ。しらがのおじいちゃんと灰髪の少年であれば灰髪の少年に命令された方がまだしも幸せになれる。

例外の悪魔が翼を失つて帰還したアーミアスに危害を加えたと聞いて謹慎処分を食らうことを理解していても天罰をぶち当てにいったのはまあ当然のことだろう。

私は普通の天使である。取り立てていうこともない、個性もない、少し真面目な天使であるので、人間に肩入れすることも無く、人間になどなりたいと願うことも無い。

白い髪は無垢な人間の少年が、未熟にも同じ人間を愛するというのなら、私は星になつていつまでも見守っているつもりだ。

天使らしく、星星となつて許されることを許容し、ほかの天使と同じように地上に残

された名誉で、哀れな天使たちを静かに見守るのだ。

「何を見てるの、アーミアス」

「夜空の星々を……今夜はとてもはつきり見えますね」

「ほんとね！」

夜空を見上げ、まるでそのひとつひとつの名前を知っているみたいに、どことなく愛おしそうに見つめる彼に私はなんて言葉を続けたらいいのか分からなかった。それは祈っているみたいだった。

「天使は役目を終えると星になるんです」

やがてぼそりと、アーミアスは言う。

どこか哀しそうに。

星は静かに光っていて、じつと、美しい輝きのまま光を湛えて。

私たちを見守っている。

星は瞬かない。

70話 聖騎士

あつい。やべー。あつい。あたまがゆだる。あちー。

思考回路がどんどんポンコツになっていくのを実感しつつ、おそらく人間より凶太い天使の肉体でこんなにあついなだから愛しい人間たちはどれだけ辛いだろうと思ひ、振り返ってみれば……なんか、わりと元氣そうだな。俺はあつい。やべー。

もうあちーなので、街の散策や情報収集より先にちよつと休憩しよう。そうしよう。天使の使命？ 体が茹だつたらできねー。あちー。

まだ日も高いが宿に行つて、冷たい水でも、いや、もう熱湯じゃなきゃなんでもいい、飲んで、すずもう。やべー。こんな日照りより俺のリツカたんへのあつい想いの方があちーけど。ほんとだぞ。

今だつてかわいくてかわいリツカたんにあいたいけど、こんなへロへロで会うなんてカツコ悪くてできないだろ。だから現地の宿に泊まる。好きな子にはカツコつけて会いたい。そんなお年頃。

街の地図を見てまっすぐに宿に向かう。異国の町を物珍しげにきよろきよろしていたマテイカがさつと寄つてきて、かわいい。暑さにもともしないきようだいが階段の

エスコートをしてくれた。すごい。

こんなあついで、他者に気を回すとかやべーと思う。いいこだな。俺もいいこになりたい。いいこだつたら、こんなにいいこたちといられるんだぜ。やべー。もつといいこになつたら、もつと、共にいいこたちといられるのかもしれない。俺は多分、わるいこだけだな。外面だけ、いいこになろうとしている。

あつくともリツカたんを想う。俺の頭の中のリツカたんはかわいくて、真面目で、かわいくて、大好きだが、驚くなかれ本物もつとすごい。あつさに負けてる場合じゃない。しゃんとしなければ、と思う。思うけどあついでとりあえず冷やさなければならぬ。

しゃんとして、とつとと女神の果実を集めて、師匠に会って、報告して。それで俺はリツカたんを護る天使になりたい。なれるもんなら専属になりたいが、多分俺は、よそ見してほかの人間も見てしまうから、だめなんだ。人間全部かわいく見える。リツカたんだけ見る、リツカたんだけ護る、一途な人間の男が現れたら身を引くんだろうな。

そのための休息だ。いつもより早いぶん早いチエックインだが、大陸を越えての船旅の後、休みもせずに砂漠を越えてきたんだから、みんなも疲れてる、そうだ、きつとそうだ。俺が弱つちいのも多分本当だが、みんなが疲れてないつてのはない。それも本当のはずだ。

……みんなぴんぴんしてる。すごい。やべー。なんなら城下町の散策までやってのけそうな勢いだな。だが俺はもうダメだ。辛うじて表情には出ていないし足ももつれていないが、もうダメだ。エスコートされなかつたら階段を越えられずに顔から地面に突っ込んでいたかもしれない。

高度の高い、空気の薄い、人間界より寒い、天使界が懐かしい。こんなに懐かしく、戻りたいと思うなんてめつたなことじゃない。ただ、俺は寒いほうがいい。あついのはだめだ。頭がぼーつとしてしまう。やべーよ。

砂漠に突入する前、ガトウーザがすばやくもはつきりと兜をとるように言ってきたが、正しすぎて頭が下がる。被りっぱなしだったら俺は一体どうなっていたんだ。蒸され天使の一夜干しか。蒸され天使とかやべーよな。まずそう。煮ても焼いても蒸しても天使ってなんか不味そうだよな。

「お救いするための氷の精霊が寄り付かない熱砂の地獄を滅ぼしてきます！ 滅んだらきつと涼しく……」

「馬鹿なこと言っていないで宿取ってきてください兄さん」

「はー」

あつい。あつい。

正直冷やされてもしばらくしたらまたこうなつちまいそうですでにこわい。

冷えた。しつかり頭冷えた。よく冷えた。万全になった。よし。世界が輝いて見える。眩い世界だ、そりゃあかわいい人間たちが住む世界だからな！

にしてもなっさけねえ俺！ 有能な仲間たち！ 挽回しなくては、情けなくて頼りないやつだと思われたくない。大体あつてるが、ほら、いざというときにだな、こいつを前に置いていて大丈夫か？ と思われたらやばいだろ。安心安全な壁になれないだろ！

俺は壁。防壁。だからパラディンになりたい。仁王立ちして、幼く愛しい人間たちを傷つける者に指一本触れさせない。そのためには「かばう」では役不足だ。「におうだち」が必要なのだ。人を導けるほどの素晴らしい腕前のパラディン……俺はそんな人物を求めていた。パラディンとして、その教えを仰ぎ、俺もパラディンという名の聖騎士に！ になりたいと常々考えていた！

そして、俺は、見つけたのだ。パラディンを。心得がない者に対しても教え導けるほどのパラディンを！ 俺はもう見ただけで分かった。多分。暑さで頭がやられてるん

じゃあない。鎖帷子に槍に盾。その恰好を見て察せないわけがない！俺の思い込みじゃないよな？ と不安になるような弱気な心は多分暑さで蒸発したし、問題ない！

もう教えを乞うしかないよな！ じゃあどうやったら彼女は教えを授けてもらえるか考える。相手はパラディンで、人間で、それで、教えることに意欲的かどうかもわからない。

そうこう考えているうちにもここは城の上だ。室内じゃない。つまり直射日光がえぐい。布で雑に作ったフードがなくては、もう星になっていたかもしれない。元氣いっぱいなマティカは少し離れたところで流れる水をばしやばしやして遊んでいるし、ガトウーザはどっかいったし、メルティーだけが俺の後ろにいる。

うん、仲間が勢ぞろいしてなくて心細いとかじゃないからな。本当に後悔はしたくない。

普段クールなメルティーは、お茶目さも持ち合わせているのでちらりと見ただけで目をきらきらさせて微笑んだ。なんでも任せてくださいとうやうやしく。俺の立場なんでものもはそもそももなかった。仲間たちが頼もしいからな。壁になるくらいしか出来ねえ。

こんなにも頼もしい仲間がいてくれるのに臆している場合か！ 天使の度胸だ！

「もし、聖騎士の方と、お見受けいたします」

「……なにかしら」

いきなり名乗りもせず何やっているんだという話だが。

話しかけた瞬間、水場で遊んでたマテイカが砲弾のようにすつ飛んできて腰に抱きついてきたのが目立って、パラデインの彼女はそっちに目をひかれている。

……まあ、あれだ、マテイカはたぶん、甘えたい盛りの年齢だし仕方ない。いつも警戒味じゃあないか。いわゆる「他人」に。

だがそれも微笑ましい。幼き愛しき人間だから。俺にとつてはメルティーとガトウーザより年下であること以外、「幼い」なんて意味がほほないことだが。人間はすべからく、幼く、愛しく、守護すべき者たちだからだ。

多少人見知りらしいマテイカが猫のように可愛らしい威嚇をしているので、ぼんぼんと背中をたたいて抑える。身のこなし軽やかなバトルマスターは腰をぎゆうと締め上げてくるが苦しくない程度には抑えてくれている。気遣いのできるいい子だからな。

とはいえ、大人なメルティーがさりげなくマテイカを引き剥がした。

「俺はアーミアスと申します。この通り、旅する戦士です。戦士の身ながら、聖騎士となる事がひとつの目標でありました。そして貴女が私が初めてお会いした聖騎士であります」

「これはご丁寧に。あたしはパスリイ。あなた、パラデインになりたいって言うの？」

「はい。教えを乞い、パラディンとしての悟りを開けるのであれば。俺は戦い、仲間たちを護ることこそを至上として旅をしていますので」

「そう。ひとつだけ、訂正をしておくわ。聖騎士パラディンは博愛の騎士でもある。あなたに博愛の心はあつて？」

ああ、いいの、答えなくつても。パラディンになるためにはどちらにせよ精霊を宿さなくてはならないから。あたしにもほら、ラーミーという相棒がいるの。あなたも精霊を宿せばパラディンになれる。

どう？ 試す？」

おお、なんて丁寧な！

俺は感動していた。見ず知らずの旅人である俺を導いてくれるなんて！ パラディンになるやり方を伝授してくれるなんて、なんて、いい人間なんだ。さすがは博愛の騎士！ 俺は博愛とは縁遠い鼻肩多めの天使だが、パラディンになるために必要ならば……頑張つて身につけるしかないな！

俺が是と返事をする前にパズリイから黄色に光るなにか……おそらく精霊が飛び出した。

すると今度は精霊に親しいガトウーザが吹っ飛んできたが。武器こそ構えなかつたものの、素手で構え、何やら威嚇していた。俺が諫める前にメルティーが杖でばかりと

……ぼかりと、ささやかに、だというのに大胆に、そして盛大に魔力を奪いながら諫めていたので何事も無かったが。

「まあパスリイ。あなたがこころよく道を示すなんて珍しい。その……気持ち悪いくらい精霊に愛された精霊使いじゃなくて、戦士の方……に……」

「……ラーミー、どう？ 見てみたいでしょう、このひとに宿る精霊を」

「そうですね！ きつと、きつと……間抜けな精霊が宿るわ。見てみたいわね！」

高飛車な口調の精霊に、あまりに天使信仰に敬虔なあまり俺にまで敬いが止まらないガトウーザが噛み付いてしまう。俺はおろおろするだけのヘタレで、天使信仰に報いるほどの活躍をしていない事実には胃のあたりがキリキリする。

「精霊なら私ともうたくさん見えますとも、ええ、ラーミー。珍しく個体名とひとりの主人を認める精霊よ！ アーミアスさんに宿る精霊がいるかもしれないなんて！ 羨ましい、なんて羨ましい。今から精霊の手を取って、肉体を捨てて、私が宿りましょうか！ ええだめですとも、私はアーミアスさんのお手伝いをするために、崇高なる使命を少しでもお助けするんですからね！ 不敬者のあなたには暗黒の精霊をけしかけてやりましょうか！ 砂漠のそこかしこに蔓延る火の精霊で丸焼きにしてやりましょうか！

あ痛ああつ！ メルティーなにをするんですか！」

「アーミアスさんの邪魔をするんじゃないやありませんよ！」

多分ガトウーザの熱に浮かされた目を見るに、この灼熱すぎる暑さのせいだろう。メルティー、それはシヨック療法なのかしらないが優しく冷やしてやって欲しいな……。鬼気迫る様子に口を挟めない。俺も暑さにぼーっとしている間に話が進んでしまう。

「愚兄が大変、大変失礼しました！ お二方！ ですが……えーっと、パスリイさん？ アーミアスさんを侮辱するのは許しませんので！ 今のはまだ宿つてもない精霊のことですから罪はありませんが！」

そう言つてメルティーは俺の後ろにガトウーザを引つ張つていったようだ。

起きたことを気にしていないパスリイは寛大だな。俺も気にしないことにする。ガトウーザの悲鳴じみた声とともに耳元で聞き慣れない笑い声が聞こえて、俺のフードを風がふっ飛ばそうとするのを抑えつつも。これがガトウーザが言う精霊なんだろうか。

ばしやばしやと暑さに浮かされたガトウーザはメルティーに水をぶっかけられていくようだ、やはり熱中症かなにかで暑いんだろう。すっかり休ませないとな。

「……もういいかしら。方法は砂漠の魔物を戦士の十八番、『かばう』で仲間を十回かばうこと。そうすれば博愛の騎士には精霊が宿る。」

楽しみにしてるわね、あなたに宿る精霊」

まさしく博愛の騎士は微笑んで、俺は道を示されたことに喜んで、パーティの末っ子

が「道」の内容に盛大に顔をしかめていたことには気づかず。

俺は自身の転職以外に理由もないのに魔物と戦うのはいかなものかと考え込みながら、優しい優しい人間の葛藤に鈍感だったのだ。

71話 加虐趣味

「……すごく、すごくあついね、目の前がまっかつかになりそう」

「そうですね、マティカ。」

ですがアーミアスさんの周りだけは非常に涼やかに感じます。ええ、彼こそが本当にまぶしいので。目もくらむようなので。砂漠の暑さなんて大した問題にもなりません。

もちろん、適切な水分補給、休息はきちんとしていきますから万が一にもアーミアスさんに必要なご心配をかけることもありません。体調は万全、視界は極めて、極めて！
良好。

ええ、ご覧ください、兄さんなんてあまりのまぶしさのあまり目がつぶれかけ、不気味に笑っています。現状を顧みていついかなる時にも真つ当に、真摯に、神のしもべとして行動してもらいたいものです。ああ、神のお使いのしもべとして、が正確でしたか」

「そういう難しい話してるんじゃないよお……」

「あら、そうですね。マティカのように純粹に考えることもまた、とても大切ですね」

メルティーは優しいお姉さんだけど、あんまりおれと話をするのは好きじゃないみた

い。これ以上話す気はないって言ったりしなかったけど、そんな感じだ。まくしたてるだけまくしたてて、それでおしまい。

でもね、おれのことかどうでもいいとか嫌いとかそういう理由というよりも、それより大事なことがあるからなんだ。ガトウーザと話すほうが大事で、アーミアスさんのことを考えていたり見てるほうが大事で、アーミアスさんのために何かすることが一番大事だ。

今、グビアナのお城の上にいるパラディンのあの女の人が言った、パラディンになるためにセイレイを宿す方法を、アーミアスさんは一生懸命にやっている。

それは、この砂漠で、戦ってるとき、魔物の攻撃を、おれたちに向いたのを、「かばう」で守る。

すぐく、それはよくあること。よくある光景、いつもの風景。アーミアスさんはいつもすぐく、おれたちのことを小さな子どもか、すぐ死んじやう存在だと思ってる。アーミアスさんは天使だから、おれたちはすぐ死んじやうのかもしれない。アーミアスさんはずっと年上だから、おれたちは赤ん坊のようなものかもしれない。

でもおれ、おれは、小さくて、メルティーやガトウーザみたいに大人じゃないけど、本物の赤ん坊じゃない。怪我なんて少しくらいへっちゃらだ。小さいころから喧嘩して傷まみれになって、ひとりぼっちでびーびー泣いてたんだし、仲間もいるのに、治せる

人がいるのに、怪我しても怖くなんてない。痛くて泣いてしまうかもしれないけど、それはおれが泣き虫すぎるだけで、別に本当にその怪我が問題ってことじゃないんだ。

おれ、おれは、アーミアスさんが怪我したほうが怖い。アーミアスさんが魔物の攻撃を受けて頬を切ったときに赤い血が飛ぶのが怖い。それをすごく綺麗だと思う自分も怖いし、きつと俺はアーミアスさんが攻撃を代わりに受けるなんて二度とないほうがいいって思ってる。アーミアスさんが怪我するのを見ているのが、おれは好きだから、そんなこと起きないほうがいいと思ってる。

あつたまおかしいんだ。おれって。だんだんわかってきた。でもおかしすぎて治らないのもわかった。どうやって治すの？ 綺麗だと思うきもちを。そんな、きもちわるいきもちを持って、おれはぼんやりじりじり焼かれてた。あつい。あつい。まっかつかだ。飛び散る血が。乾いた砂にしみこんで、おれは、見ないようにその血を踏む。

アーミアスさんが無事に「かぼう」をしなきやだから、魔物を先に殺しちやだめだから。セイレイを宿すために必要なことを、アーミアスさんが頑張ってるのに邪魔したら、この戦いが長引いちやう。こんなに暑いのはアーミアスさんも得意じゃないみたいで、グビアナについたばかりなんてゆだったみたいに真っ赤な顔をしてたもの。あついのは何だつて本当によくない。早く終わらせなきや。

だからおれ、邪魔しない。ぎゅつと手と、剣を握って、魔物を攻撃しないで待ってる。

泣きそうだ。涙は熱い風に飛ばされて、すぐに乾いて、もしおれがグビアナ育ちなら泣き虫じゃなかったのに。泣いてない。

小さい子を守るのって、わかるんだ。おれにも。多分、そういう、気持ちなんだろうな。だからやめてくれてって言えないんだ。本当におれってアーミアスさんからしたら弱っちいんだ。だから強くならないといけない。

だって、アーミアスさんは魔物に攻撃されても、痛いつて言わないんだ。おれの目の前で、体を張って攻撃を受けて、血が飛んだり、体を揺らしたりしても、痛そうな顔をしていないし、何も言わない。じっと、おれたちなんて見ずに魔物を見て、何かを話しかけているみたい。痛くないはずないんだ。痛みを感じないひとじゃないって、知ってるのに。

アーミアスさんはおれたちに笑いかけるし、宿屋のあの子に笑顔だし、知らない相手にも優しく笑いかけることだってあるけれど、いつだってなんだか、そう、穏やかだ。おれたちを見て笑っている。

人がいる街を見て幸せそうで、魔物を見たって同じ。そう、魔物が襲ってきたらおれたちを子ども扱いするのだけだ。襲ってこなかったら、こつちを見向きもしなかったら剣を抜こうともしないんだ。

おれは、この、優しいひとが好きだから、傷ついて欲しくない。おれの中の何かを無

視して、それは本当だから、おれ、本当は、アーミアスさんがパラディンになるのは反対なんだ。

言えないけど、言えないけど！ だってアーミアスさんはおれたちの事を思つてやつてる。おれたちは本当にアーミアスさんより年下で、護るべき存在に見えている！ おれのちつぽけな人生よりずっと長くそうしてきた天使だもの。

二人はどう思っているんだろう。隠しもしない、好意を全面に押し出す二人は。二人だつてアーミアスさんが怪我する度、この世の終わりみたいな顔をするんだもの。何も思っていないはずはないけど。

「……少年」

「なに」

「次にアーミアスさんが攻撃を受けられたら、あの魔物を素早く倒してくださいますか？ もちろん、このガトウーザ！ 持てる力を使えるだけ使つて素早く倒すつもりではありませんがバトルマスターほどの威力はないのです。ええ、素早く。次で終わりですから」

「わかったよ」

「結構。物わかりが良くて助かります」

ガトウーザが魔物に悟られないように弓をちよつと構えた。多分、あの矢より早くは

動けない。でも、仕留め損ねたら殺れる。間違はなくおれは殺れる。

武闘家だったころに学んだように、テンションを溜めて溜めてまっけたんだもの。

アーミアスさんが飛び出す。砂漠のクイナがアーミアスさんの盾に弾かれる。最後の撃を無事に受けたのを見届けた瞬間、ガトウーザの矢とメルティの魔法が飛んでいく。

おれも、できる限りのスピードで剣を振り下ろした。

後には焦げ跡が少し。それだけ。思いつきり動いたからかな、おれの中にあるあつさも、少し引いたみたいだ。

魔物はいいいね。血が飛び散っても、ほとんど蒸発するみたいに消えてしまうから。もちろん全部じゃないけど、ほとんどは消えるから。興奮も一緒に引いていく。

「さあ！ グビアナに戻りましょうアーミアスさん！」

「ここは暑い！ とても暑い！ よくありませんね！」
「行こうよ！」

さあさあ！ とみんなで手を引いてお城の方に向かおうとすると、おれたちのあんまりにも素早い「掃除」に目を丸くしていたアーミアスさんは、ちよつと手で制して、先にいつも通り魔物へお祈りして、それで、ルーラでひとつ飛びしてくれた。

ちよつとだけ休んで、それでお城に向かう。

アーミアスさんはこれでパラディンになってしまふ。メルティーに聞いたけど、パラディンには「かぼう」よりすごい「におうだち」って技があつて、それを使うと攻撃だろうと呪文だろうと全部、味方を守れてしまふんだって。

アーミアスさんは、イオとかの呪文は全部受け止められない。その度すごく悲しそうだから、それが無くなるのはいいのかもしれない。

でも。嫌だ。アーミアスさんが怪我するのが増えるつてことかもしれないから。

本当に？ おれは、本当に嫌なんだろうか？

攻撃を受け止める度に飛び散る、赤い血が綺麗で。どきどきして。触れなくなつて、そう、あの血を流す天使さまを自分の手でどうこうできたらつて思つたら、もつとどきどきして、そわそわしてしまう。

なにかできたら？ きつと、とても綺麗なんだろう。それを見るのが、本当は好きなんじゃないの？

好きなのは本当。そこは嘘ついたつて、嘘になつてくれない。

でも、でも、おれはなにもしない。しない。しないつたら！ これじゃあまるで、泣き虫マティカをいじめて遊ぶやつらと一緒にじゃないか！ 泣き虫、弱虫、親なし、意気

地無しって！ おれはいつつも泣いて、見返したくて特訓して、馬鹿にされて、それで泣いてた。悔しかったじゃないか。だからアーミアスさん選ばれて嬉しかったんじゃないの？

嬉しかったのに。

あの真つ白い肌の上に真つ赤な血が！ 胸がどきどきする。

おれの中の、おれの頭のおかしい心がささやく。それが綺麗だつて。もつと見てたいだろうって。おかしいおれ。絶対におかしい。

おれはぐるぐる悩んで、でも、こんなの誰にも言えなくつて、黙つてた。

いつの間にかお城の屋上に着いていて、アーミアスさんがパラダインの女の人のところに行くのを見たくなくて、その辺をぐるぐる歩き回っていたら、宝箱を見つけたから、鍵も何も無いところにドーンと置いてあるものだから、旅人への贈り物なのかな、中身を貰つていいのかなつて考えることに集中して、それ以上危ないことを考えるのはやめた。

閑話 幼天使

俺はずつとずつと人間になりたかつた。いつからそう俺が思うようになったのか、正確な時期は覚えていない。ともかく、愛しい愛しい人間たちと共に歩みたかつたからだ。

俺は天使なのに。人間たち地上の生命と相反する、輝きのない、非生物的な存在なのに。

ああ、あの命あふれる緑の台地を。翼に頼ることなく己の足だけで踏みしめて、思いつき駆けて、風の中を歩めたら。空を知らずに。走れば邪魔になる翼を持たずに！ あのいとしい少女たちの系譜と、笑い合えるならば……。俺も、一緒に老いることが出来たならば！

ああ、いとしい人間たちと触れ合い、会話し、心を通じ合わせることが出来るのなら、俺は。天使として、姿見えぬ守護者としてではなく、ただの「アーミアス」として言葉を送られるなら。

俺は、かの幼き者たちを、この目で初めて見た時から、そう願っていた。

母親の胎内から生まれでた訳では無い、天使に親は存在しない。万物の父たる創造神

の偉大なる力から機械的に「遣わされた」のみである、「天使」という名の「機構」であるというのに、だ。

俺はまず、本物の人間たちを見て、好きになって、そのどうしようもない「違い」にいてもたってもいられなくなって、短気にも、邪魔な己の翼をもぎ取ろうとして、失敗した。

その後は、中途半端に確信できる考えもなく手を出すから失敗したのだと思って、人間たちのことをさらに学ぶかたわら、今度は光輪を砕く方法を画策していた。しかしまあ、天使が遣わされてから長い長い時間の中でも人間になろうとする天使とかいう酔狂なのはいなかったらしい。成功例を学ぶことはなく、失敗の代償の方が大きいとれるものしか思いつかず。

それでも焦がれるように人になりたかった。俺はまだ知らねえ、天使界から無抵抗に墮ちさえすれば、願い通りに翼を失い、光輪を砕き、人間たちと言葉を交わせるようになるのだと。そして……そうなったとしても、俺が天使であるという事実は、どうしようもなく変えられないことを。

性根から、ああ根本から、忌まわしいことに最初から。俺はいくら似せても、人間のようには在れないのだ。

だが、だが、それを知っていたとしても、俺は願ったろう。

人に近づくことを。人の子が無邪気に欲しがる翼よりも欲しかったんだ。

可愛い可愛いあの子たちと話すことができるなら。何を差し出しても良かった。

いつからかは分からねえ。俺は強く強く人間たちに惹かれ、求めていた。

瞬間間生きる者たちへ。鈍く、長く、使命を遂行するだけの生物もどきの見る夢だった。

眩しい太陽の下、生命あふれる大地で、笑顔で駆ける姿を見て……俺は心底羨ましくてしようがなかったのか。

それとも、それとも、「あの」瞬間こそが、初めて見たときこそが初恋だったのか……。

天使が人を好きになる。それは墮天することほとんど同義かもしれないが、実際のところ、そうはならなかったし、つまり恋することすら出来なかったという証明なのだが。

俺は今日も、愛しい人間たちへ、触れることも出来ない。自己満足なら出来る。向こうは風の囁きだと思えないだろう。それは、果たして俺が悪戯な風ではない証明になるだろうか？

あいしていた。それは、間違いなく。届かぬ想いは、共に歩みたかった人間の人生よりも長く続いた。

老い、この世から去っていく愛おしい人間たち。俺はただ祈り、魂が安らかであるこ

とを願うことくらいしか出来なかった。愛おしい人間たちは、たまに肉体を捨てて初めて俺と会話してくれたが、それはつまりこの世に未練があつて幽霊になつてしまつたということ。

俺はあいする人間たちの憂いをたつ。せつかく話せた人間たちをこの世から解き放つ。それこそが使命であるからだ。もつと話していたくても、未練を持ち、さまよう人間たちの苦悩を解き放つ方が大事だつたのだ。

そうして、俺は、天使だつた。

どこにいるの。天使さま。

人間の、敏感な子どもたちの疑問の声を真隣で聞きながら、俺は優しく頭を撫でたが、子どもたちは風に髪の毛をかき混ぜられたようにしか感じないのだ。

ぼくは、天使と、呼ばれていたから。

でも、人間になりたかつた。

「おはようございます、ししよー」

「ああ、おはよう」

早朝、高度のある天使界にて。ひんやりとした中、身だしなみを整えた我が弟子が部屋に入ってきた。ここはアーミアスにとつての教室である。上級天使がよく過ごしている空き部屋だが、礼儀正しく素行のいいアーミアスがいる分には誰も咎めないだろう。

多少、舌つ足らずなのは相応に幼いので仕方の無い事だ。

片手には彼愛用の小さなノートがあり、おそらく今日もその几帳面な字がその中に増えるのだ。

勤勉なアーミアス。我が愛弟子である。

「本日も、よろしく願います」

年齢を差し引いたとしても丁寧すぎるほどだ。その上にさらに丁寧に頭を下げると、未だ幼い彼の体には大きすぎる椅子の上に座った。よく出来た弟子であり、よく気が回るが幼い。こつちが心配になってくるほどであるが、そつなくこなすアーミアスにそれを指摘して困らせるのもまた良くない。

私たち「大人」がよく見てやるべきなのだ。その健やかな成長を見守り、必要に応じて手助けするべきだ。

つまり、アーミアスが幼くとも、習熟段階に達しているのなら本来もつと年上の天使が行う学習を前倒しにするというわけだ。もちろん、細心の注意を払って。

「うむ。アーミアス。今日はノートとペンは片付けてきなさい。落とすといけないから、荷物は特になくてよろしい。服装はそのままで、部屋に置いてきたらまたここに戻ってきなさい。本日は守護天使になるための実地訓練を行うのでな」

「じつちくんれん……ですか？」

「そうだ。オムイ様のところにご挨拶をしてから行うので、急がずに準備をしてきなさい。前もつての連絡が出来なかったが、これはようやく許可がとれたという訳なのだ」

「はい、ししよー。……あの」

「なんだ？」

「それは、どのような実地、訓練なのでしょうか……」

不安そうなアーミアス。そのあたりは年相応である。
しかし、私はある種、意地悪な大人らしい。アーミアスの反応がみたくてわざわざ言わなかったようなものなのだ。

真面目な彼の驚く顔が見たかった。

「下界へ行く訓練だ。前から許可は降りていたが、本日ということになった」

「え……！」

静かな黒い瞳に途端、光がさす。きらきらと、瞳に宿る星々が輝きを増していく。白い頬に赤みがさして、子どもらしい無邪気な笑顔に変わる。

「もちろん一人前と認められるまでは私が付き添う。さあ、準備なさい」

「はい！ いますぐ！ いえ！ まちがいなく！」

飛び上がるほど喜んで、珍しいほどの笑顔でアーミアスは部屋から飛び出していった。やはりまだ幼い見習い天使。喜ぶ姿は可愛いものである。

「あらあらあら、何かしら、あなたの弟子があんなに喜んでるなんて珍しいことじゃない」

「ラフエツトか。本日、実地訓練として人間界に行くという話をしたのだよ」

「やつと許可が降りたのね。あんなに真面目に頑張っているんだもの、それが実ったら嬉しさも大きいわよね」

「ねえ今！ アーミアスくんが可愛かったのだけど！」

「今度は……エレッタか。いつもそう言うな」

「だって可愛いじゃない！ ピンクのほっぺに目をキラキラさせて！ ねえラフエツト、そう思うでしょう？」

「そうね。あの子が笑顔なのはとても素敵なことだわ。エレッタ、アーミアスくんは今日初めて人間界に行くらしいのよ。ずっと楽しみにしていたものね。嬉しいでしょう

ね」

「なんだって！ それはめでたいこと！ 是非お見送りしたいわ！」

みるみる部屋の中の天使の数が増えていく。大人の天使が三人もいれば多少の狭さを感じるほどだ。アーミアスが戻ってきた時に興奮する上級天使どもに怯えなければ良いのだが。私は、自分に多少の威圧感が、ことに見習い天使に対してあることを理解している。アーミアスはとても聡明で、怯えたりするようなことはないが……。

二人は柔らかない雰囲気の天使だが、上級天使だ。天使には理がある以上、威圧感があってもおかしくない。

しかし、この二人は同時に、自分の弟子でもないのにアーミアスのことをよく気にかけてくれる存在。一種の関門である初人間界の訪問の見送りにこれ以上ふさわしい天使もいないだろう。堪えてもらうか。

やいのやいの言い合う二人の声を聞きながら、アーミアスの成長に思いを馳せる。

私とアーミアスの出会いは……正確には、忌まわしい事件のあとだ。それ以前は私が一方的に存在を知っていたくらいだろう。

言葉を交わしたのは彼が灰にそまったあとだ。間違はなく天使であり、墮天しているわけでもない奴から発せられたことが違和感があるほどの、強烈な悪意にあてられたあとだ。

一時は無垢な子が一体どうなるものかと注意深く見守っていたが、いざ弟子としてみれば大変勤勉で意欲もあり、何事にも手を抜かず真摯に励む良い天使だ。私は弟子を誇りに思う。

たった、神の手により遣わされてから三十年と少しの経験で、人間界へ降り、守護天使となるべく第一歩を踏み出す優秀なこの子を。その努力に敬意を。

控えめなノックとともにアーミアスが部屋に帰ってきた。すぐさま二人の女天使に褒められ、素直に頬を少し染めた愛弟子に私も褒めたいが、ここは努めて厳格に振る舞うべきか。それとも便乗して……こういう時、私は己の性格が恨めしい。他者の前で素直に褒めるのが少し、気はずかしいのだ。

「さあアーミアス。初めて地上に赴く天使としてオムイ様の元へ挨拶に行くとしよう」
「頑張つてね」

二人の友は先に一階で待っているらしい。

私は、アーミアスの小さい手をいつものように掴もうとしたが、地上に赴くことが許されるような、一人前ではないが相応に認められた天使をいつまでも子ども扱いしているかのように少し迷った。

しかし、何もアーミアスがたった三十かそこらの、天使としてはようやく幼児の域を抜けたばかりの幼い子どもであることが変わるわけではないのだからと言いつつ、そ

の手を引いた。

私の足よりも背が低いほど小さな天使だ。飛翔能力も相応である。訓練はしてきたが、実際の空を飛んだことはない。場合によっては抱えて飛ばねばならないかもしれない、とその小さな手を握って思うのだ。

とはいえ、今日のことは人間のことに大変関心を持ち、人間界にいち早く降り立つことを許可されたアーミアスにとって素晴らしい経験となるだろう。

「いつてらっしやいー！」

「いい経験を積んできてね！」

ラフェットさまとエレッタさま、それから一階にいた何人かの天使にお見送りされて、つめたい雲におおわれた空にぴよーんと飛び込んだ。空つて、足元にあるのはぼく……おれにとっては普通のことだけど、人間たちにはそうじゃないらしいんだ！

しばらくしろい雲の中をつつきって降りていくんだ。翼はちいさくたたんで、おちるままにする。ひゅーって耳元で風がうたう。ぼくは、ししよーに言われた通りに舌を噛まないように気をつけて、口をぎゅつととじた。目は開けてるけど、水がとびこんでき

たからたまらずとじちやった。

しばらくそのままにしていると、ぱっと周りが明るくなったから目をあける。

すると、下のほうにちいさく、下界がみえた！ 今度は羽ばたきながらゆつくり降りていく。するとだんだん緑と、青と、茶色と、灰色の地面が近づいていく。

ご本で知ってたけれど、天使界の何倍あるんだらう！ とてもひろい！

「アーミアス、あの緑豊かな土地がわかるか？」

「はい、ししよー！ あそこがウオル口村ですか？」

「そうだ。私の担当区域だ。そしてアーミアスが一人前になれば守護天使を継ぐ土地になる」

緑がいっぱいだと、すこしの青にしか見えなかったウオル口村はどんどんどんどんちかづけば、川があることがわかった。川と、滝と、緑と、たくさんの、別々にあるおうち。天使界みたいになんてかたまりの建物があるわけじゃなくて、地面に別々に建ってるんだ！ 本当だったなんて！ ああこれこそ、人間たちの住む「村」だ！ もちろん本物で、ご本のさし絵じゃない！

なら、本物の人間たちも住んでいるんでしょ！

おおきくくるくる回るようにししよーが降りていく。ぼく……俺も、真似して回るように降りていく。

そして、川の近くに着地。ううん、足はついてないけど、地面の近くをふわふわ飛ぶ。「さて、我が弟子アーミアスよ。初めて地上に降りてみて何か問題はなかったか？」

「なにもありません、ししよー！」

「うむ。では、行きは問題ないわけだな。帰りにまた聞くとしよう。いや、不安そうな顔をしないでよろしい。前例がないのだ。ここまで幼い身で降りたというのは」

「大丈夫です、ししよー！」

ししよーは頷いて、俺を滝のそばの守護天使像の前へつれていってくださった。ししよーにちつとも似てない像だ。だけど、守護天使イザヤールってきちんとししよーの名前が書いてある。

「守護天使のいる人間たちの村、町、城などにはこうして守護天使像があり、守護天使の名前が刻まれている。住人の信仰心が薄いとこでは像の手入れが甘く、朽ちているところもあるが、ウォル口村は皆、大変信心深く、きちんとした手入れがなされている」
「それはすばらしいことです！」

ところで、どうしてこの像は、ししよーの像なのにししよーに似ていないのですか？
「像はししよーより、腕とか特にほそくて、なんとなく頼りないし、そんなに強そうじゃない。使っているのはしろくてとつてもきれいな石だけど、本物のししよーの方がずつとかっこいいな！ もっと強そうにしたらいいのにな。ししよーみたいにかっこいい

天使の方がまさに本物の守護天使！　って感じ、しないのかな？

これだと人間のための聖書の中の天使みたい。あんな天使、本当はいないのに。あんなひらひらしたしろい服を着て、ほそい腕で、優しく笑っているだけの天使。弓を持っている天使はいるかなあ。

俺はね、安心させるために笑うのはいいと思うけど、剣を持って、誰よりも先に前にいって、人間たちを守るような守護天使になりたいな。

ふわふわなだけの天使なんてかつこよくない。

「守護天使像は代々、刻まれている名前が変わるのみで最初から像の姿は変化していないのだよ。初代守護天使の記録は天使としてもかなり古い記録であり、名前はもしかすると帳面に残っているかもしれないが、顔はもはや分からないので想像でしかない。定かではないが、最初の守護天使の顔なのかもしれないな」

「そうなんですね……」

もし、本当に最初の守護天使の姿だったら悪いこと考えちゃったかな……。でも、絶対、俺のししよーの方がかつこいいからね！　俺のししよーが一番！　すごいんだ。

同じくらいの年の見習いぴよぴよ天使だって、俺のししよーより「怖い」天使なんていないって言うよ。「怖い」なんて、ぼく……じゃなくて、俺にはそんなことないけど、つまりかつこよすぎて怖いんだね！

怖いくらいかっこいいって、かっこいい！俺もそうなりたいな！

「ではこれからウオル口村を見て回るが……私は先に村の周りを見てくるとしよう。魔物が村になにか悪さをしようと企んでいないかを確かめなくてはならないからな。

アーミアスはまだ戦闘訓練が十分ではないので、村の外にはくれぐれも出ないようにして、見て回っていなさい。

これまで学んだとおり、人間たちには私たち天使の姿は見えない。たとえ目の前で扉を開けたとしても、風かなにかの仕業だと思ってしまう。気づかれることはない。彼らの生活を妨げない範囲で好きに回るように。もし、誰かが困っていたら出来る範囲で助けてももちろん構わない。

それから……今は昼なので見えないが、夜になれば人間の幽霊が見えるかもしれない。彼らは生きていた頃と違い、私たちを見ることが出来るが、幽霊になっている人間は己の死に気づいていないか、この世に未練があるのかのどちらかだ。その未練を解きほぐし、解き放つことも守護天使の使命のひとつだが……まだ荷が重いだらうから、もし見つけるようなことがあれば呼びなさい。

なにか質問はあるか？」

「ありません」

「うむ。それでこそ我が弟子だ。それではあとでな」

「はい、ししよー！」

危ないから外へ出てはいけない。それをしっかりおぼえる。天使のことわりがあるから絶対に破れないことだけど、ちゃんと約束をおぼえることが大事だっておもうんだ。

ししよーは自分の剣を持つてるけど、俺は持つてないし、使えないから危ないんだね。剣の訓練はもつと大きくなつてからじゃないとダメなんだつて。同じ見習い天使でも、もつとお兄さんなら自分の剣を持つてるけど、俺は持つてない。

ししよーになぜですかつて聞くと、ちいさいうちから訓練するとおおきくなれないからなんだつて。ちいさいうちからやると体がうまくおおきくならないかもしれないからつて。人間だつたらそうらしいんだ。天使ならそうなるかわからないけど、ちいさいうちから剣のお稽古をしたことがないからしないんだつて。

俺、ししよーみたいに身長が高くて、ムキムキで、眉毛の太いイケメンになりたいからもちろん、ししよーの言葉にはちゃんと従つてる。かつこいいからやつてみたいけど、かつこよくなるためには仕方ないことなんだね！

ひくくひくく飛びながら、人間の村、ううん、ししよーの守つているウォル口村をゆつくり見て回つた。綺麗な水が流れる滝がすごくいいところ。天使界よりも綺麗かもしれない。清く、すごく澄んでいてすごくいい気分。

人間たちのおうちを見て回る。お年より、大人、男、女、子ども。男の子、女の子、飼犬。いっぱい住んでる。もしかして、犬には天使が見えるのかな？ 何となく見られている気がするけど、犬とはおしやべりできないなあ。

大きな怪我をしている人はいないし、今まで学んできた人間にとつての厄災である、「病氣」とかもなさそう。さすがししょー！　すぐく人間たちが幸せに穏やかに暮らしてらるって俺でもわかるんだもの！

いいところだなあ。それに、天使界よりずっと太陽から遠いのになんてあつたかいところなんだろう。高いところは寒いって、本当なんだなあ。

まぶしい緑の植物は、ぼくが水やりしているお花たちよりずっといきいきしてる。あつたかくて、ぼかぼかして、翼があつて、輪っかがあることしか外見は変わらないのに、天使よりずっとずっと表情豊かな人間たちがいっぱいいる。

困ってる人はいないかな。こんなに平和ならそうそうないと思うけど。

ぼくは、きよろきよろしてたけど、やっぱりすごく穏やかでなんにもなかった。それはとってもいいことだけど、初めて人間界にきて、はりきってたから、ちよつとだけつまらなかった。

「いーいー、ナツミ、走らないで！」

「お母さん、お母さん、こっちこっち！」

楽しそうな声が聞こえて、ふよふよそつちに飛んでみる。そこはちよつとした原っぱで、青い髪の女の子とその「母親」らしい女の人が草の上にシートを広げてご飯を食べていたみたい。

女の子が滝つぼのへりにお花が咲いているのを見つけたみたい。そつちに向かつて走って行って、それで、あつ！

あのままじゃ、つんのめつて、水に落ちちやう！

ぼくは急いで飛んで行って、落ちる寸前に女の子を捕まえた。ぼくよりほんの少しだけ年下に見える、本当はずつと年下の女の子。間に合った。

ふわふわしてて、あつかくて、小さな体をそつと地面に戻す。女の子はびっくりしちやつたのか、それとも落ちそうになって怖かったのか、とても大人しかった。

ぼくは、ぼくはといえば、その子が天使界にいるどんな天使よりも、可愛いつて思つたんだ。

すぐ可愛い子だった。一瞬だけだったけど、さらさらした青い髪と、くりくりした目と、ばら色のほつぺたの小さなその子がすぐに好きになった。人間つてとつてもいいものなんだつて。

「ナツミー！」

「お母さん……」

「危ないじゃないの、踏みとどまらなかったら治ったばかりなのにまた風邪ひいちゃうところよ」

「ふみとど……まっつてない……今ね、お母さん、誰かが受け止めてくれたみたいだよ」

「誰かが？」

「今ね、優しく、ふわって！」

座り込んだその子の前に、水面のぎりぎりに飛んで、目を合わせようとしてみた。触れることができたんだから、頑張ったら、すこしくらいは見えないかなって。

もちろん、無理だっつてわかってたけど。

可愛くって、元気で、ぼくの胸の中もぼかぼかした。太陽よりもずっとずっとあつたかい。

「不思議な風かしら……いいえ、それはきつと守護天使様のおかげよ、ナツミ」

「しゅごてんしさまっ？」

「まだナツミはちいさいからよくわからないかもしれないけど、ウォル口村にもね、守護天使様がいらつしやって、私たちを見守ってくださっているの。そして、こうしてたまに助けてくださるのよ」

「じゃあいま、落ちなかったのはしゅごてんしさまが受け止めてくれたの？」

「そうよ。そういう時はね、いつも見守ってください、ありがとうございますっってお祈りするのよ」

「するー！」

女の子……ナツミちゃんがお祈りすると、緑色のきらきらしたものが現れて、ぼくの方にふわふわ飛んできた。これが、星のオーラ。本物をししよーに見せてもらったこともあるから間違いないや！

あつたかいそれを手で包み込む。

祈りのポーズをやめたナツミちゃんの頭をそつと撫でてみる。なんの反応もなく、ただすこしだけ首をすくめた。俺はくすぐったい風でしかないんだなあ。

もう、この子には俺のことはわからないみたい。さつきもあんな、人間から見たら不思議な動きをしたからわかっただけ。

人間。年下の可愛い子。この子を守れるのが守護天使かあ。

守護天使って、とってもいいものだ！

ぼくは、ニコニコ笑ってナツミちゃんに話しかけた。

「また、今度会おうね！ ぼく、強くなつて君を守るよ！」

もちろん、返事はない。

分かつてたけど、今度は胸に突き刺さるみたいに悲しさが襲つてきて、人間と一度で

もいからおしやべり出来たらなあつて。悲しかった。

村にはまだまだ人がいる。別のところも見てこよくなつて思つて、村の他のところにふよふよ飛んでみたけど、行くさきぎきでナツミちゃんを見かけた。人気者なんだ。そうだね、ナツミちゃんがいるだけで胸がほかほかするんだもの。

いろんな村人とおしやべりしてるナツミちゃん。楽しそうで、うれしそうで、笑つて、幸せそう。ナツミちゃんが幸せでほくも嬉しい。

だけど、ほくだけしやべれない。あの子とおしやべりしたいのに！

夢中だった。もう、すぐに夢中になった。だけど、ほくはおしやべりできない。ナツミちゃんとしやべっている神父さんとおしやべりしたくてもできない。ナツミちゃんの「母親」と話すことも出来ない。

見てるだけ。見守つてるだけ。ほくからは触れるけど、向こうにはわからなくて、ぼくの言葉は絶対に届かない！

我慢できない。もう耐えられなかった。何がいけないのか考えた。ぼくが天使だから？ それはわかつてた。お話で聞くよりも、ご本で読むよりも、実際の人間たちはとつても魅力的で、「天使」であることが嫌になつちやつた。

ぼくも人間として生まれていたら良かったのになあって思ったんだ！ ああ、神様！でも、ぼくは、ぼくは、いてもたってもいられなくなつて、どうやったら人間になれるのかを考え始めていた。神様にお願ひして、天使として頑張りなさいって「ことわり」で言われたらどうしようもなくなつちやうんだもの！

一生懸命、考えた。人間と天使なんて、ほとんど外見が変わらない。翼があつて、わつかがあつて、それだけ。それだけの違いなのにおしやべりできないんだ。

翼が憎かつた。飛んでも、ナツミちゃんと話せない。ぼくはこんなにいっぱいお話ししたいことがあるのに、ねえ、おしやべりしてもいい？ って聞くことすら出来ないんだ。

悲しくて、悲しくて、ぼくは一生懸命、一生懸命考えた。

どうしたらいいのかなつて。翼が邪魔だつた。ふわふわにした翼を引つ張つてみたら、ぶちぶち何本が羽根が抜けたけど、それだけ。それだけじゃあ何も変わらないよ。自分で見ても何が変わったのか、ちつとも分からないんだもの。

時間はすぎて、気づけば夕方になつて、ししよーが迎えに来る少し前に思いついたんだ。翼をどうにかする方法。俺は自分の剣を持つてないけどししよーは持つてゐるって。

ししよーが剣を装備してない時はあんまりないけど、ししよーの部屋にはナイフがあるのを思い出した。

ね、翼があるのが悪いんだ。こんなものちぎれてしまえばいいんだ。なら、切り取つ

てしまえ。

ぼくは、じゃあ明日って挨拶し合う人間たちの笑顔を見た。
胸がぼかぼかした。俺もその中に入りたかった。

そして、俺は決心した。

閑話 擦違

多分、私は勘違いをしてしまっているから。

その、優しい優しいひとが、天使様なんだって理解しなきゃいけない。

それでも勘違いしてしまいそうになって、それで、私は「二人」のアーミアスを見るの。

彼はアーミアス。よく泊まりに戻ってきてくれて、ウォル口村という共通の話題もあつて、彼はとつても聞き上手で、お話しだつて声は穏やかで、落ち着いたそれは聞いていてすごく好き。

同年代に見えて、そうじゃなくて、身近に感じて、そうじゃなくて、私はどこか勘違いしてしまいそう。

優しく、穏やかで、心地のいいひと。天使のような微笑みの、……もちろん彼は、「ような」じゃなくて本物の天使だけど。誰よりも、綺麗な男の子。

「あら、おかえり！　アーミアス！」

「ただいま戻りました、リツカ。今日も四人泊まります」

「わかったわ。アーミアスがいるんだから従業員価格でいいからね」

疲れているはずなのに、いつも通り綺麗に微笑むアーミアスは、今の私にとっては何分、失礼だけど「友だち」とか「村に良くしてくれた旅の人」とかそういうひとに見えてしまう。

三人の仲間の人たちと一緒にカウンターに来て、ほかの旅の人と同じように鎧を着ていて、剣を背負っていて、まるで普通の人間みたいに振舞おうとしてくれる。私たちが親しみ深いように、気後れしないでいられるように。

でも、その清らかな空気は誤魔化せなくて。でも、精一杯そうしてくれている。

ちよつと静かになっていた宿のほかのお客様は……常連さんはいつも通りだけどね……アーミアスたち一行が二階に上がってから、口々にうわさをしはじめるの。

あの人綺麗ね、まるで天使様みたいね、夕飯の時に声をかけてみようかなって。アーミアスの周りにはいつも仲間の人がいるから、本当に話しかけるのに成功しているのを見たことがないけど。あんなに仲良しなのに、割ってはいえるのには勇気がいるもの。

仲間の人たちとご飯を食べて、一階で休んでいる姿。そういう、旅の人をやってて、どこか友だちみたいに錯覚してしまうアーミアスにはちよつと隙があつて、まるでただの

同年代の男の子なんじゃないかって、一瞬思ってしまった時がある。

私がぼうつと見てたら、にっこり笑いかけてくれる。

もう一人の……ううん、もちろんアーミアスはひとりしかいなくて、同一なのは分かっているんだけど、もう一人のアーミアスは言うなら、「天使様」としてのアーミアス。私、アーミアスが訪れる前のセントシユタインを一瞬しか知らないけど、随分犯罪率が下がったんだって。かつては牢屋にいたこともあるお客様の話聞いたことがあるけど、到底犯罪なんてしそうでないように見える、穏やかな顔をしたそのお客様は、一度だけアーミアスとお話したことがあるんだって。

その時は、本当に偶然で、別に犯罪の現場を見られた訳でもないし、自分の前科を旅人であるアーミアスが知っているはずもないけど、あの目で見られて、静かで、穏やかで、不思議な空気の中でお話ししたら、まるで自分の中の「毒」が抜かれてしまったみたいに思ったとか。

自分を一人の人間だと尊重してくれて、当たり前前に接してもらるのは久しぶりだったんだって。そんなの当たり前じゃないですか。そう言いたかったけど、悲しいけど、

そうじゃなかったんだって。そうじゃなかったのは自分のせいだった、とも。

隣で聞いていたルーイダさんも、彼は少し前は悪い意味で有名な人間だったって言ったもの。でも、今のあなたならルーイダの酒場に登録して、人に紹介することだってできるとも。

彼ははずつと嬉しそうだった。自分が変わったことに？ 当たり前前に接してもらえたことに？ 私には、わからなかったけれど。

ああ、アーミアスのあの目。アーミアスの瞳は夜空。星がたくさん煌めいていて、いつも穏やかで、吸い込まれるようで、自分がちっぽけに思えてしまう。でも、あの目は私たちに、人間に、溢れんばかりに愛してくれていることを教えてくれるの。

私たち人間をととても大切に思ってくれているとありありと分かるから、アーミアスと話したその日は特に、明日も私たちの天使様に恥じないように頑張ろうって思えるものね。

あのお客様は前科者と知っても他の客と差別しないこの宿もいい宿だ、そしてあのひと、つまりアーミアスもよく泊まっているなら間違いない、次の宿王は私に違いない、なんて陽気に笑って言ったくさるものだから、困ってしまった。

まだまだ私は未熟なのに。でも、そう思っていただけるのは嬉しい。私、もつと頑張らなくちゃ。期待に添えるように！

でも差別しないこと……それは難しい事じゃないの。そういうことは、小さい頃から守護天使アーミナス様の優しさに触れているからかもしれない。

どの人もかけがえのないお客様で、違ひなんてない。誰だって泊まっていただけだし、いい時間を過ごして欲しい。

それは、天使様の、どんな人間にだって分け隔てなく見守ってくださった姿を……見えてなくても、感じていたからかもしれない。私の中にも天使様が生きてみたい。

夜、私がちよつと遅い夕食をとるとき、いつもじゃないけどお茶をしているアーミナスがいると、きまつて一緒に食べてもいい？ って聞いてしまう。優しいアーミナスは一度だつて断つたことはないあら、私はいつも甘えてしまう。

天使様だからか、あんまりたくさんのご飯を食べないアーミナスは代わりなのかな、けつこうお茶をするのが好きみたい。大した量が食べられないので食事によつてリツカのある酒場兼食堂兼ロビーに居座れない。そのためお茶をすることで居座っている。お茶をしているとリツカが結構な頻度で一緒にご飯を食べてくれるので、嬉しくなつて繰り返す下心の塊

いろいろなお客様とお話しするのは好きだし、アーミアスの仲間の人たちとも楽しくお話しするし、もちろんこの宿屋の従業員の人たちともいっぱい話すのも好き。でも、やっぱり一番楽しいのはアーミアスとお話ししているときかなって思ってるの。

私はけっして、彼の特別ではなくて、ただの人間の私がそうなるはずもなく、ただこの尊い天使様が守護天使様をしている村の住民だから、気遣ってくださっているだけ。

今でも、アーミアスはお休みの日の午前にはウォル口村に行つて、見回りとかをしていて、その日の午後の少し暇になったときとか、やるにお茶をしているときとかに教えてくれる。みんなの様子を、みんなが元気にやつてるかとか。天使様としていろいろお忙しいのに、心の底から幸せそうにみんなのことを話すの。

それから、それから、いろいろお話した後には決まっつてこう言うの。

「リツカの歩む道に神のご加護がありますように」光あれ！　よりはマイルドな挨拶だと思つて使っているだけであり、アーミアスとしては「じゃあまた今度！」とフランクに言うのが気恥ずかしかっただけである

つて。そのたびに。アーミアスは私のお友だちじゃなくて、天使アーミアス様なんだつて思い出す。神様から遣わされた、尊い天使様だつて。

アーミアスは、私に、とっても良くしてくれる。私は勘違いしそうになつて、アーミ

アスは神様の御遣いなんだから、本当に勘違いしているだけなのに。

同じくらいの歳に見える男の子。笑顔がきれいで、優しく、……私に特別親切だと勘違いしてしまいそうになる。でも、思い違いなの。だって彼は誰にだって優しいし、誰にだって親切で、誰にだって、安心させるように、きれいに微笑む。天使様だもの。私たち人間をいつも護ってくださる守護天使様なんだもの！

私はここで本当にうまくやっているのかなって、不安な日、あのきらきらした夜空のような目に大丈夫だって言ってもらえたら、どれだけ安心できているのか、アーミアスは知らないよね。

ルイーダさんは、きまって悶々と考え込んでいる私に「お似合いに見えるのに何を難しく考えているの」なんて茶化すけど。

アーミアスは天使様で、私はただの人間で、ずっと私が小さいときから見守っている相手に何をおもうつていうんだろう。

「彼女は今日も勤勉で、優しく、俺の挨拶にも、

『アーミアスにも神の御加護がありますように……なんて、アーミアスに言う必要はなかったかもしれないけど、私も祈ってるね!』

とかわいく返してくれる本物の天使でした。リツカが天使でなければ誰が天使だと言うのでしょうか。間違いなく、あの微笑みに救われる日々です。ペロペロしたい。

今日も、リツカの薔薇色の頬に見とれる日でした。彼女に健やかな日々が続きますように……と」

大真面目な顔をして、低俗な部類の文章で日記を書くのはアーミアス。小心者なのでロウソクの灯りを最大限落として日記を書いているのだ。

部屋の中には他に誰もいないし、カーテンをしっかりと引いているのでロウソク程度の光では外に漏れたりしないことも承知しておきながらも、コソコソしているのである。

すっかりインクが乾いたことを確認すると日記を閉じ、胸元に日記を抱いてベッドに転がった。隣の部屋には仲間たちが宿泊しているので音を立てることなくゴロンゴロンするという技量を発揮しながら。

声を上げては誰かの睡眠の迷惑になるかもしれない。それを承知している彼はぎゅつと目を閉じ、口を開くことなく悶えていた。ゴロンゴロンと。

彼の内面を知らないなら、それは日々の反省の結果によるものと思うかもしれない。自分の至らなさを思ったのか、と同じ天使なら考えたかもしれない。狂信者ならなん

らの崇高なる儀式なのかとも解釈するだろう。

実のところは、もちろん、意中の相手に対して今日も何も変わることもなく接したことに對するもの。

想い人は今日も変わらず。自分も変わらず。彼女が健やかなのはいい事だ、関係性が悪い方向に転じなかつたこともいい事だ。だけでも、それは自分が何も進展させなかつたという意味でもある。

自分のヘタレさに、そしてなんとなく言葉のチョイスが悪いのではないか？ と考えつつも真の答えには行き着かずに。

アーミアスはベッドでゴロンゴロンしていた。

7 2 話 騎

きらきらした鍵を掴む。別になんも言われない。何も起こらない。誰かが咎めてくることは無い。鍵を元の場所に戻す。それも何も起きない。もう一回鍵を掴んで、手に持ったまま太陽の下に出た。なんも起きない。怒られない。奪われない。咎められない。なら、貰っていいのかな。

なんだか綺麗だし。魔法とか詳しくないおれでもなんとなく不思議な力を感じるんだ。何かの役に立つかもしれないし。

ポケットにねじ込む。あとでアーミアスさんに見せたらなんて言うだろう？

やっぱり、アーミアスさんとパラディンの女の人の方が気になるから、おそろおそろそっちの方に行ったらなにか、お話をしているみたいだった。

屋上で流れてる水の音がなんとなく大きく聞こえたような気がして、一步一步近づいていく。

ぱしやんと、どこかにぶつかっただのかな、跳ね返った水が飛び散っていく。パラディンの人をガトウーザがものすごい目で睨んでる。メルティーは日陰まで下がってきて、暑そうに汗を拭いた。メルティーは不思議なくらい興味がなさそうだった。

「意外な精霊ね。あなたは仲良くするでしょうけど」

「ええ、俺を認めてくださるならば。俺がパラディンになれるのであれば」

「パラディンの素質は博愛。そして自己犠牲。それをあなたは見せたからこそ、精霊は宿ったの。その……少し、間抜けな精霊に見えるけどね」

言いくそそうに、口ごもるみたいに言ってるけど……間抜けな精霊？ 精霊に間抜けとか間抜けじゃないとかあるのかな？

水がぼしゅん、とうるさい。

精霊を見ようと思つて二人の周りを目を凝らしてその辺を見てみたけど、でも、おれには何にも見えなかつたし、聞こえもしなかつた。ガトウーザみたいに特別「目がいい」わけじゃないもの。

そういうのは、やつぱりガトウーザが詳しいんだらうけど、目をそらさずにすぐく睨んでいてあんまり話しかけたくない。

ぼしゅん、ぼしゅんと水が跳ねる。ああうるさいな、と思つてみてみれば、なんにもないのに水が跳ねてた。ね、なんにもないのに。誰も触っていないのに。精霊か、妖精か、分からないけど。

精霊の話をしているからかな？ 見えない何かが遊んでるみたい。ガトウーザかなあ。

「俺は、彼のひたむきなところを好ましく思いますので」

ガトウーザが突然崩れ落ちた。熱中症かなと思つて日陰に引き摺つてくるとなぜか冷やす前からずぶ濡れだった。

「ご指導、ありがとうございます」

「いいえ、パラディンのレベル十五を越えたならまた来なさい。その時は勝負しましょう。今度は同じパラディンとしてね！」

これで、アーミアスさんはパラディンかあ。仲間を守る騎士様。なら、ますます魔物が動く前に全部倒しちやいたい。もっと強くなつて。そしたら、きつと、安心できるから。

パラディンのチェインメールの女の人。パラディンの人。なんとなく、似たような鎖帷子を着たアーミアスさんを想像する。そういえば、初めて会つた時も鎖帷子を買おうとしてたんだっけ？ あああ、よく似合つちやう。そう思つて、どれだけおれがどう思おうとも、アーミアスさんの後姿が見慣れているんだなあつて。

いつか、アーミアスさんが戦わなくてもいい日がくれればいい。

チェインメールに埃が被つて、アーミアスさんの剣は錆び付いて。おれはたまに彼のところに遊びに行く。すると優しい笑顔を浮かべたアーミアスさんは、幸せな日々を送りながらおれの来訪を歓迎する。

おれの母親と違って、一途な大切な人と、誰かを大切にできるアーミアスさんが寄り添うんだ。

赤い血なんて流れない。ひとりに凍える子どもはいない。どうしようもない空腹の夜はない。

そうなれば。おれの狂った胸のときめきも、氷のように溶けるはず。

あの白い首筋に、尖らせた爪を立てて絞めたなら。そんな甘い夢を見る日はない。そんな物騒なことを考える人間は平和になれば、凍え死ぬように、いなくなる、よね？

早速ダーマで転職して防具やら武器やらを少々見直しておく。実にこれまで得物といえど剣一辺倒、つまり師匠の教えの発展系しか使う気がなかったから、俺の得物は剣のままだが。

最初からゆくゆくはパラディンになりたいとか考えていたからな、その職にどう足掻いても真摯ではない俺がこれまでにまともに使った「その職らしいこと」といえば戦士

の「かばう」くらいだし。

これからはパラディン固有の博愛スキルと盾スキルも磨かなくてはならない。これ以上転職する気もないしな。武器はもう、ずっと剣でいいだろう。ぶつちやけ俺が剣をふるうことなんてマテイカの三分の一以下だろうが。

とつとと「仁王立ち」を覚えて、仲間たちへの全ての攻撃をシャットアウトだ。それにはしばらくかかるだろうが、俺は努力を惜しむつもりはない。

「さて、次は『女神の果実』のことについてです。『黄金に光る果実』を知らないか、見たことはないか……手分けして聞き込みをお願いしますね。実物はご存知の通りですから、聞き方はなんでも構いません。情報は、どんなに些細なものでも構いません。

ええと、それでは城下町の方を二人、城の方を二人で分けまして……」

「アーミアスさんはお城の方をお願いします！」

「城下町はこのガトウーザとマテイカが参ります！ いいですよ、少年！」

「う、うん……」

口々にそう言われる。兄妹が率先して分かれるのは珍しいが、メルティーも異論なく、むしろ元氣よく頷いている。マテイカは流されたようだが。行きたいほうに行つていいんだぞ。

「グビアナ城はなんというか、いけませんね！ このガトウーザ、妹と姉妹であればと悔

やんだのは初めてですよ！ 非常にけしからんですね」

「兄さん！ 清らかなる天使様に向かつてなんとという世俗的な物言いですか！ ただ単に、遙かなる空におわす尊き方にこの暑さはひどすぎるだけでしよう！ お城の中であれば水も引かれていて、日光も遮られ、少しは涼しい。それ以上に何かあるでしょうか！ ありませんね！」

「しかし少々女官が多すぎると兄は思います」

「そうですか。そうですよね。兄さんが単に初心すぎる、それ以上に何かあるわけもないのでした」

「生粋の教会育ちですからね」

「そういうことにおきましよう」

芝居のように次々と言葉が交わされる。つまり、二人は暑さでへろへろになった俺を見て心配してくれているってわけか。なんて気遣いのできる……とはいえ外は暑いだろうに。ガトウーザとマティカこそ暑さで倒れたらどうするんだ！

「ご心配なく、城の中では精霊をおいそれとけしかけてはなんらかの攻撃を疑われましようが、街中であれば少しはごまかしがききます。ええきつと。」

少年と私は水の精霊や風の精霊をお願い申し上げて大変涼しく過ごしますので大丈夫です。ええ、きつとグビアナの真ん中でエルマニオン地方にいる気分を味わえること

でしょう」

「えるまにおん？」

「雪国の一地方ですよ。砂漠のグビアナ、吹雪のエルマニオンです。エルシオン学園の近郊ですね」

「えるしおんがくえん……？」

「ええ、まあ、学校です。寄宿舎学校です。名門私立のね」

「きしゆく……？」

「わかりやすく言うならば寮です」

「りようつて？」

「……私は今、セントシユタインの教会に失望しています。誰しにも開き、教えを説き、学びを与える気はなかったというわけですか。これだから教会は……」

まあでも、わざわざ教えられでもない限り知らないだろそんな言葉。エルシオン学園はセントシユタインからすごく遠いしな。

マテイカを見る。まだ幼い少年と云っていい。もちろん、旅人をしていておかしい年齢かと言われると、ルイーダの酒場に登録可能な十六歳を超えているのでおかしくはないのだが、成人済の姉弟が隣にいて、百歳を超える天使から見れば幼い子どもだ。

トントン拍子に残りの女神の果実が見つからない限り、エルシオン学園にもきつと聞

き込みに行くだろう。その時、初めて寮生活をする同じくらいの年齢の子どもたちを見て、マティカも学び舎に入りたいとか、思うのだろうか？

エルシオン学園では様々な戦闘技術をも学ぶと聞く。俺のように、いくら師匠から指導を受けてきたとはいえ皆伝したとは到底言えない剣士から学ぶよりもベテラン講師から学びたいと思うかもしれない。俺は剣スキルを極めたが、師匠の元で極めたわけじゃないからな、我流が過分に混じっている。純粹に王道で正統な剣術を学びたいかもしれない。

もちろん、剣でなくても新しい武器に興味があるかもしれないし。斧とか、ハンマーとか、格闘技も。バトルマスターとして高みに至りたいなら、俺の元にいるのはもはや足踏みだろう。

俺は全ての幼き神の子らの幸せを願っている。そうだ、マティカも、メルティーも、ガトウーザも、旅をしてくれるのは得難き幸せだ。いつか、別れは来る。別れ、笑顔で送り出す日が。

三人とも若い。まだまだ元気だ。だけど、別の別れも……。

ああ人間になりたい。人間になって、それで、それならばごく普通の別れも、俺の方が普通に先に死ぬかもしれないしそこまで寂しくないかもしれないのによ。

「ともかくお任せ下さい！ 如何に砂漠の太陽が強くとも吹雪にして差し上げます！」

「ほどほどに、体調には気をつけて」

「もちろんですとも！ ああなんて私めを気遣ってくださる優しい言葉でしょう！」

まあ、今は大丈夫かな。ともかく情報を集めなくちゃな。もしかしたらここにはなくて、エルシオンにはあるのかもしれない。早く七つ集めなくては。きつと師匠も気を揉んでいるはずだ。

メルティーを伴って城に入る。黄金の果実のことを聞き周りながら、色んなところで「ワガママな女王様」の話を聞く。

女王様、ねえ。

身分の高い人間。黄金の果実を手に入れられて、献上されるかもしれない人間。

話を聞きに行く必要があるかもしれない。

メルティーも同意見なのか、涼しい目元を凜々しくさせて、杖をぐつと握りしめていた。

73話 捕獲

さて、城の侍女やら兵士やらに話を聞いておおよその情報は集まった。「黄金の果実」を持つていそうな人物がひとり、見つかった。サンマロウからそう時間をあけずに次の女神の果実のありそうなところを発見した。その点においては俺は幸運だな。

だが不運なことに、相手がグビアナ女王、ユリシス女王だったつてのがなあ。

もちろん、この国で一番偉い彼女に、ただの旅人が謁見を申し出て簡単に叶うかわからねえし、叶ったところで俺の言いたいこととは「黄金の果実の果実を持つてますね？ 実俺は俺たち、それを探してるんで、ください」だ。

どう考えてもふざけてるとしか言えねえな。そんな話、まともに聞いてもらえらるとは限らない。しかも話を聞いて貰えたところで、望み通りの返答になるかどうかなんてもつとわからねえ。

何故なら、俺は「黄金の果実」より人間たちにとって価値がありそうなものを持ち合わせていないのだから、向こうの善性やら思惑やらに運良く沿わなきゃどうやっても譲っちゃもらえないだろう。

俺だって、できることなら正当な対価を渡して穏便に交換したいが。仮に金払って何

とかなるなら稼ごうと思うが。今回、金銭的な話では向こうは一国の主で、俺はしがない旅人だ。到底どうにかなるとは思えない。俺の持ち物で人間的に高価だと言えるものはなにかあるか？ あるわけない。俺たち天使にとつて大事なものは、人間にとつて一切価値なんてない。

なんせ星のオーラは人間に見えないんだからな。俺にも見えねえけどよ！

まあ、星のオーラよりも俺の脳みそに刻み込まれた愛しい人間たちの成長記録のほうによつほど価値があるんだけどな！ だがこつちは取り出して見せられないときた！ まったく困ったもんだぜ！

その中でもお宝中のお宝、この世で最もペロペロいリツカたんのキュートな成長日記はもちろんプライバシーの問題があるから永遠に門外不出だしな！ ノートに書いてる分なんて生易しい、本当のリツカたん成長日記は俺の頭の中にしかもはやない！ 文字なんてものは完璧に記録できないからな！

ともあれ。

あー、要求された物によつては一旦天使界に戻つて誰かの知恵を借りるつてことは出来るか。それくらいしかどうにもなんねえし……それにしたつて、そもそも相手がある程度交渉に応じてくれなきゃ意味は無いけどな。

とりあえず玉座の間に向かつてみるか。さつきもちらつと通り抜けたわけだが、その

時は彼女は沐浴で不在だったし、そろそろ戻っていてもおかしくはないだろう。だめなら大臣らしき人物にどうにかなんとか取り次いでもらうとして……。

「あら、なにか少し、騒がしいですね、アーミアスさん」

「そうですね。先にちよつと見に行きましようか」

階段を登る前に静かなはずの城内に場違いな騒がしさを感じて俺たちは見回した。侍女がひとり、あつちこつちを忙しなく見回している。下のほうを見て、呼びかけるように声をあげて、明らかに何かを探しているような。

「あの失礼、どうかありませんか?」

「ああどうしよう……」

「あの?」

相当彼女は焦っているらしく、声をかけて二度目でやつとこちらを向いた。幼き人間の中でも年若い、おそらくはまだ新人の域を出ないような子だった。マティカよりは年上だろうが、メルティーよりは年下だろう。

「ああ、旅の方ですか。どうぞお気になさらず……」

「気になってしまいますよ、そちらこそお気になさらずに。困った時は……そう、お互い様です。何を探しているんですか?」

メルティーの穏やかな言葉に彼女は少し落ち着いたようだった。

「ああ、私、私、ユリシス様の大切なアノンちゃんを逃がしてしまっただんです……」

「アノンちゃん……失礼、女王のペットかなにかなのですか？」

「ええ、ユリシス様の唯一の家族と言っていていくらい仲の良い……小さな金色のトカゲなんです。リボンを巻いた……」

「それは大変でしょう。俺たちも探すのを手伝います」

彼女はこつちを見た。俺は強烈に嫌な予感を覚え、それが的中するまでの時間の猶予が一瞬しか無かったことを悔やんだ。

嫌な予感。つまり、うぬぼれでもなんでもない、やつかいな天使の権能。勝手に命名したのは「オート天使バレ」。天使の能力を失って星のオーラが見えなくなるならこつちもきれいさっぱりなくなつてりやよかつたのに。

「ああ！　ありがとうございませす！　旅の方、あなたはまるで、」

俺はぐつと奥歯を噛んだ。

「天使様のようですね！」

ああ。何がいけないのか。砂漠のど真ん中でも屋内ならばプラチナの兜をしつかり被つておくべきなんだろうな？　俺の首から上のどこからオート天使バレ成分が出ているのかわかんねえけど、一回バラして調べるべきか。それともオート天使バレ経験者であるメルティーとかにあとでこつそりどういふところで俺のことを天使だと、ぴんと

来てしまったのかしつかり聞いておくべきなのか……。

「なんてこと！ 天使様に天使様のよう、なんて……」

咄嗟に暴走しそうなメルティーを止めた。侍女に向かっていきそうに、俺の前に立った彼女の腕をぐいっと引つつかむなんてわりと乱暴だが、ここで騒いで「気難しい女王」の耳に城内でうるさい旅人の話が入ってしまう、というのは勘弁願いたかった。本当にすまねえ。

メルティーはとてもいい子で賢い子だから、すぐに意図を察して口を閉じてくれた。

「では、ええ、そういうことで。早くアノンちゃんが見つかるように祈っています。俺たちは……そうですね、もしかしたら見落としがあるかもしれません。城の外を見てきます」

不審な行動を誤魔化すためにメルティーの腕をつかんだまま引いてそのまま城から出た。

城の外周、日陰に入ってからやっと、つかんだままだったメルティーの腕を離した。

「大変申し訳ございません。メルティー、痛くはありませんでしたか」

「いいえ！ いいえ！ そんな、痛くありません！ こちらこそ大変申し訳申し訳ありませんでした！ アーミアスさんの意図を理解できないなんて私は……」

「どうかお気になさらずに。城内で騒ぐわけにはいけません。それだけのことです。メル

ティー。

今はええと、アノンちゃんを見つけるほうが優先です。見つけることができれば、あの侍女も安心でしょうし、大切な家族の行方が知れなければ女王も不安でしょう。それに、打算的ではありませんが、女神の果実を持つ女王に謁見することも叶うかもしれませんから」

メルティーは杖を……恐るべき力で……しっかりと固められている土の地面にぶつ刺すと、地面に片膝をついて祈り始めた。動きがもう、見事にガトウーザと一緒にだ……。

「ああ！　なんて寛大なアーミアスさん！　私は一層精進致しますー！」

メルティーにはじつくりオート天使バレはどうやって感じ取ったのか聞きたいが、今は小さなトカゲを探す方が先だ。家族の行方がしれないならどんなに気難しい女王でも不安だろう。はやく元の場所に戻してやらないとな。

そのへん暑い上に乾燥していてかなわないが、小さいトカゲくらいが隠れられそうな場所くらいはある。そのへんに潜り込んでいるならば見て回ってもなかなか見つからないかもしれない。

小動物の捜索は……正直なところ守護天使として人間に見えない前提だった故にあんまりない。失せもの探しは割と得意なんだが、生き物を気づかれずにそつと返すとい

うのは至難の業だし。

だが今は違う。素直に探せる。つまり、音を立てることが許される。

俺の声も、俺の動作も、気のせいやラップ音扱いではないのだし。

最初はトカゲの名前を呼んでみようと思つて、はたと思ひ当たる。ここは城の外だ。あの侍女にとっては今回の件は「失態」だろう。それをわざわざ宣伝するような行動は避けたい。健気に職務に従事する幼き人間が可愛いのは当然のことだな！

一生懸命に働く人間……尊い。ペロさまで感じそうだ。いいや！俺にとつての唯一ペロ神体はリツカたんだけだな！それはそれとして俺は人間大好き天使だからな！

ともあれ、動物つてのは基本的に音に敏感だ。びつくりしたら姿を見せるかもしれない。俺の脳裏には原っぱで茂みにがさつと足を踏み入れてバツタをびよんぴよんさせる遊びをしていた子どもがいた。あんな感じに。

パン、と手を鳴らしてみた。

メルティーがビクつとした。だが何も出てきやしない。ここはハズレか。

場所を移動し、またパンパンと手を鳴らす。メルティーがとことこついてきて何事かと俺の手元を覗いた。

そんな俺たちの足元を小さなりボンを巻いた金色のトカゲが駆け抜けていく。

「あつー！」

「見つけましたね！」

てかすばやい。上に小さい。たしかに人間たちがかわいらしいと思いきや、そんなフォルムだ。捕まえにくそうだが幸いここには二人いる。挟み撃ちすればなんとか捕まえられるか！

逃げるトカゲにメルティーが手を伸ばす。怖がるように方向転換して走っていく。だがその先には俺がいるわけだ。潰さないように気をつけつつもするっと抜けられてはかなわないので注意しいしい両手で掴んだ。

「さあ、急いで戻りましょう」

人間の体の構造ならば学んできたが、トカゲにとって何が良くて何が悪いのかは知らない。彼……彼女……彼、か？ 彼にとって悪い結果にならないうちに家族の元に返さなくては。

布で包んだ方が良かったか、それともこのままがいいのか。何も分からないのでとつとで行こう。リボンを巻いた可愛らしいトカゲはなんとも恨めしく俺を見上げていた。

俺は、そのトカゲがしつかと掴んでいた黄金の果実に気づいていたが、女王の家族から許可もなしにもぎ取る訳にもいかなかった。

74話 無理解

階段を上る前にあの侍女を見つけた。泣きそうな顔をした彼女に捕まえたトカゲを見せると、ほつとようやく肩の力を抜いたようだ。

「旅の方、ああ、ありがとうございます！ これでユリス様もきつとご安心されます！
ああ！ 申し遅れました。私はジューラと申します。名乗りもせず探すのを手伝っていたら……大変失礼しました」

「いえいえ、お気になさらずに。アノンちゃんは……貴方にお渡しすれば良いでしょうか？」

「……私はこの通り、アノンちゃんを逃がしてしまいましたから。そのまま大臣の元にお届けください……。もちろんお取次ぎします。こちらへどうぞ」

そう言い、すっかり自信を失った顔をして、俯いちゃった。

俺はユリス女王の人となりを俺の目で判断したわけじゃねえから何とも言えねえけど。こんなに主君のことを思いやれるなんていい家臣なんだろうとは思うんだが。健気で働きの女の子はすべからうかわい。こんなに他者のことを思いやれる人間は尊いものだ。

多少の失敗は俺が手伝ってなんとかやりてえ。やっべ、こんないい子を見てたら俺の天使リツカたんに会いたくなくてきたぜ。

ジーラからはそこはかとなくリツカたんみを感じる……。ペロリテイの高さが将来を期待させる素晴らしいポテンシャル。いい子だ。

「メルテイー、町にいるガトウーザとマテイカを呼んできてくれませんか。大臣と話している時間もあるでしょうから間に合うでしょう」

「はいー、わかりましたー」

優雅に頭を下げたメルテイーが足早に出ていった。

うまくいけば謁見出来るかもしれないなら呼んでおいてだな。ダメならダメでそれまでだが。……ここに女神の果実があるのがわかってる以上、引き下がれないからな。なにがなんでも謁見してもらえなきや非合法的で人間たちにも俺たちにも優しくない方法をとることになっちまうが。

俺はそんなことしたくねえ。だがそうは理が許さねえ。天使の理をだましましたししながら天使界にもどり、人間たちに姿が見えない健全で一般的な天使に救援要請して盗み取ってもらおうとか、やっちまうだろうから。まあそれは時間的猶予があればやることだが……今晚、いや今すぐ黄金の果実は食べるから！とか言われた場合は一体どうすればいいんだろうな？

そんな最悪のパターンを考えておく。ジーラに連れられて玉座のほうに向かいつつ、グビアナの近衛兵たちをちらりと見る。甲冑姿の女兵士。しっかりと鍛えられているようで、一糸乱れぬ構えに伸びた背筋。職務に忠実なのは好ましいことだ。いい子たちだなあ……。

そうじゃねえ。つまり怪しいことは見過ごさず、しかも強そうってことだ。駄目じゃねえか。一方、俺はただの駆け出しパラディン。旅芸人や戦士の時はひたすら剣スキルしか上げてなかったから、経験してきたノウハウは「かばう」以外はほぼ皆無。

パラディンのくせに剣を使うってことは意表を突くのに役立つかもしれないが、そもそも剣を帯びている俺がパラディンだってことのほうが意表をついている。そう、盾持ちだし戦士かな？ と思ったら練度の低いパラディンだった。うわざっこ。俺捕縛。はい終わり。って感じだろ。

ああ、黄金の果実をここでかすめ取れたらいいんだが。おそらく不機嫌な女王が、いくら愛しの家族が帰還したからって完全に不安から解消されるわけでもねえし、黄金の果実をなくしたってジーラが罪に問われたらと思うとどうにもできねえよなあ。

きちんと女王の目の前で返したうえで、頼んで、交渉して、駄目なら手段を問わずに奪い取る。うう、ほかに思いつかない……。

あー、仲間たちの手は絶対に汚させないのはもちろん大前提で。罪に問われるのも、

白い目で見られるのも俺だけでいい。天使が人間界の安寧を守るために女神の果実を集めてるんだからな。人間に犯罪行為を頼んじや本末転倒になっちまう。……ぶっちゃけ違法行為の理由を説明したら手段を問わなそうな仲間たちではあるんだが……たまたまそういう仲間たちってだけで、やらせる気はない。これからもだ。

だが、なんにせよ、無理だ。手伝ってもらったとしても正面突破なんて無理で……だが女神の果実を放置するのはいろんな意味でもっと無理だな。

すべてがただの杞憂で済めばいいんだが。

いざとなったらこの身を犠牲にしても果実を……手にさえできればこっちのものだよな。サンデイに託して届けてもらうとかできねえかな？ 彼女は相変わらずパイトのテンチョーとやらを探して基本的に別行動だから今すぐ伝えるってのは無理なんだが……。呼ばば来るだろうか？ 呼んだこともないんだけどな。

まともな策が浮かぶ前に取り次ぎは終わってしまった。しつかと捕まえていたアノンちゃんを専用のクッションに降ろす。彼女……彼？ 彼はかなり不満げに見えた。可愛がられてるみたいだがそれはそれとして外に出たいのかね？ そのへんは家族間のコミュニケーションを上手いことはかってほしいものだが、トカゲの言葉はちと天使には専門外なものですまねえ。

大臣はアノンちゃんを見てそれはそれは安心したようだ。

「旅の方、本当にありがとうございます。女王も安心されることでしょ」

「いえ。それは構わないのです。ところで、一つ頼みたいことがあるのですが」

「あなたは恩人です。何なりとは言えませんが、かなえられる範囲であればお聞きいたします」

「では女王ユリシス様に謁見させていただけないでしょうか。このアノンちゃんが……しつかりと握りしめている黄金の果実。俺はこれを求めて旅をしているのです。であれば、女王に求めるのが正道でしょう」

怪訝な顔をされたが、いい。大臣は謁見をかなえてくれることを約束してくれた。女神の果実を譲れるかどうかは女王の心次第と釘も刺されたが……仕方ねえ。

女王が帰ってくるまで俺は城の一階で仲間たちを待つていることにした。

「アーミアスさん、ただいま戻りました」

「はい。おかえりなさい。女王との謁見が叶うそうですよ。待っていますよ」

パラディンに転職なさり、新調した魔法の武器が大変よく似合っているらしい。静謐なる騎士……そしてまばゆい天使のかんばせ。メルティーの話では女神の果

実は女王の家族のトカゲが持っているのを確認したとか。私めが女王なら天使さまが望むものならばなんでも差し上げてしまえばいいですね。

ええ、はい。天使さまが望まれているのに断るなんて道理は地獄の果てでも通用しないことでしょう。この世に価値観は数あれど。とはいえ、相容れない価値観の持ち主というのはいつの世、どこにでも存在するのですからアーミアさんの手に女神の果実をそろえきるまでは油断せずに。

聞けば、女王はかなりわがままな方だとか。美しさをも讃えられておりましたが、こゝと美しさという点に関しては本物の、天上の美が地上におわす以上、本当に些細なことです。人間の範疇の美しさが、聖書や壁画、石像として称えられた天使さまにかなうはずありません。しかも本物の天使さまは人間の想像よりも美しいのですから。

気になるのはわがままな方であるということ。あの女神の果実というのは……私にはよくわかりませんが、おいしそうなんですかね？ 今までの被害者たちは結構な確率で食べていたような気がします。そして高価そうに見えますし。なんせ黄金の輝きですから、成金どもなら目の色を変えそうですね。私欲に私腹を肥やす連中がいかにも好きそうな感じですよ。

私は「天使さまのおわす世界からアーミアさんと共に地上に落ちてしまった神の恩寵」だと分かっていますから神聖な気配や強大な力こそ感じとれてもそれまでなんです

けどね。精霊たちがざわめいて、決して口にするな、なにも願うなと口をそろえて警告しますし。人間ごとき、地上の生命ごときの手には余るものなのでしょうね。

「女王が戻られました。こちらへどうぞ」

「はい。ではみなさん、粗相のないようになさってくださいね」

アーミアスさんがおっしゃるならば清貧な神父のような顔をして大人しくしておりますとも。

「女王陛下、ご機嫌麗しゆう」

アーミアスさんが笑つ……いえ、もちろんリツカさんに見せるほど明るいものではありませんが。ちよつと微笑まれるだけで私どもはうれしいのに。社交辞令、社交辞令です。アーミアスさんが社交辞令できないはずはありません。それだけのことです。

「ユリシス女王様、この者がアノンちゃんを見つけた旅人のアーミアスとその一行でございます」

アーミアスさんが目的のためとはいえ、微笑んで挨拶なさったので私は頭を下げながらもアーミアスさんから目が離せません。メルティーもマテイカもです。私どもはある種の護衛として雇われているので当然のことですね。依頼主を守ろうとしているのであって、それ以上の何かではない。つまり、問題ありません。

このガトウーザ、すっかりよそ行きの笑顔がどっかに吹っ飛んでいきましたが問題あ

りません。なにせレンジャーですので、僧侶ではありませんので、清貧な神父のような顔をするなんて無理があります。突然暴れださない程度のレンジャーとしてここにおります。

「ふうん……」

女王はいかにも興味なさげ、と。こちらを見もしません。

「この者たちは黄金の果実を得るために旅をしているとか。アノンちゃんが持ち出していた黄金の果実をぜひ譲ってほしいとのことですが、女王様」

女王はちらりとトカゲを見ました。果実をしっかりと隠そうとする様子を見て、本当に興味のない様子でジーラが持ち出したのではなかったのね、とつぶやきました。

ジーラさんは大変真面目な方ですし、そんなことをなさるとは思えないのですが。すっかり目が曇っておられるのか。私は先ほどまで城下町で聞き込みを行っておりまして。グビアナは砂漠の国。水が大変貴重です。であるというのに、女王は貴重な水を沐浴に大量に使い、無駄にしていると思えないという不満が多く聞きました。

民に目を向けず、豪遊し、……利権に目がくらんでいないのは彼女がすでに最高権力者だからにほかなりません。

「そう。わたくしに黄金の果実を譲れとおっしゃりたいのね。そんなことを許すはずないでしょう。黄金の果実はこのあとスライスして沐浴場に浮かべると決めたのだもの」

ユリシス女王は興味なさそうにようやくこちらを見ました。正確には、アーミアスさんを見ました。

玉座から降り、アノンちゃんと黄金の果実を抱き上げた彼女は眉を上げました。

「……あなたが見つけたの？」

「俺と、こちらのメルティーが見つけれ、捕まえたのは俺ですが」

「あら、あなた男なのね」

「ええ、それが、なにか？」

アーミアスさんの口調は優しいのでどんな言葉遣いでも心地よく響きます。

「女なら沐浴場に招待くらいはしてあげようかと思っただけ。あなたの探している黄金の果実が有効活用されるのを目の前で見るくらいは許してあげてもよくってよ。でもあなた、男なら駄目ね。」

「さあアノンちゃん。お外に行つて汚れちゃったかもしれないわ。一緒にお風呂に入りましょうね」

好意を踏みにじり、あまつさえ目の前で探し物を破壊する様子を見せつけるのがいいことだと言わんばかりに。天罰が下ればいいのですが！ 私が天罰となつて下ればいいのでしょうか！ 雷の精霊をけしかけてみましょうか！ もちろん、アーミアスさんが望めばの話ですが！

唇を噛み、何も言えない様子のアーミアスさん。さすがに想定外だったのでしよう。女王はそして、侍女を連れ立って沐浴場に行ってしまったのです。

振り返り、俯いたアーミアスさんは、小さな声で止めないといけません、とおっしゃりました。どうなるかわかりません、と。

止めないと。でも、どうやって？

「気は進みませんが……沐浴場に押し入るしかありませんね。女神の果実を何かの拍子でだれかが口にしたり、なにかを願ってしまった、惨劇が起こる前に。一階の入り口は兵士がいるでしょうから……ほかにどこか」

どこか。アーミアスさんが願っているのです。私も願います。精霊に、解決策はないかと、尋ねます。口を開く必要はありません。私の心のうちは常に読まれているので。『屋上からなら入れるけど、飛び込んでいくのかな、守護天使』

『そうそう、水を引きこんでいるところから流れに乗っていけばいいんじゃない？ 守護天使なら多少の高さから落ちても大丈夫』

『ガトウーザは人間だから一緒にいったらダメだよ』

『風の精霊が受け止めたらいんじゃない？』

『ほかの人間、守護天使が飛び込んだらびつくりするんだからその時に正面突破すればいい』

『邪魔な人間を燃やせばいいんじゃないかな』

『ガトウーザ、やってあげようか?』

『ガトウーザをくれるなら全部やってあげる。精霊の目をちようだい。ちよつと貸してくれるだけでもいいんだよ。そしたら』

『全部助けてあげる』

『ちよつとだけ貸してくれるだけでいいんだよ。目を失うこともない』

レンジャーになった私には過度な誘惑を払いのけることができました。以前の私ならどこでうなずいていたかわかったものではありません。メルティーが手を引つ張つてくれなくてもどこかに迷い込んでしまうこともありません。

貸したら、貸している間しばらく目が見えません。あんまり耳を貸すものではありません。

「アーミアスさん……どうやら屋上の水場が沐浴場につながっているようです」
「……なるほど」

「あの高さから飛び込んでも、アーミアスさんならきつと無事です。私たちは騒ぎになれば一階から突入できるはずですよ。そう精霊たちが言っています」

「ありがとうございます。時間がありません。決行しましょう」

そうして、私たちは二手に分かれました。

心配しなくても空から落ちて生きてたんですよ、とアーミアスさんは微笑みました。

75話 遠水近火

果物ナイフがきらきらと輝く黄金の果実を薄く切り取る。優雅な手つきの従順な侍女は女王様によく見えるようにそれをひとつ、ひとつと水面に浮かべていく。

あんなに美味しそうな果物をただ食べるのではなくて、肌の潤いの為にたった一回の沐浴に使うだなんて、相変わらず女王様は贅沢三昧なお方。

でもそれだから今回、彼女にかしずく私たちにも多少は恩恵があるってもの。ワガママ放題の女王様に仕えているんだからそれくらい之恩恵がなくちゃ。

せつせと動き回る侍女なんてまるで目に入らないで、アノンちゃんが気持ちよさそうに泳いでいるのを目を細めて眺めている女王様。普段から人間に対してもそういう態度を見せるなら少しは可愛げもあるのに、口を開けばワガママばかり。贅沢三昧。

若くして先王を亡くして家族を失い、ひとりになった女王様を同情していた人間も愛想が尽きるってものよ。……ジューラは全然変わらないけれど。

だけど、馬鹿なくらい真つすぐなあの子と違って、従順に気に入られるようにしていれば、グビアナで食うに困ることもないでしょうし、あの子みたいにどんくさくなければうまくやれるはず。

ただ少しの忍耐と、贅沢を見せつけられながらワガママな理不尽にさえ耐えられるなら。それだけのこと。先王の時代はそんなことを考える必要はなかったのだけど。

「アノンちゃん、黄金の果実はとても綺麗でいい香りね」

そつと愛しげに小さなアノンちゃんに話しかける様子は年相応なのに。

ワガママな女王様について考えていても仕方がない。それよりも手を動かさなくっちゃ。果実が沐浴場にきれいに散らばるようにそつと水をかきまぜないと。決して目立ってはいけない。気難しい女王様には私の名前だつて知られないほうがいい。私は女王の侍女の一人。それだけでいい。

そういえばそのアノンちゃん、黄金の果実を持つて城の外に行つていたけど、そんなにこれを食べたかつたのかしら。確かにとつてもキラキラして綺麗だし、美味しそうといえば美味しそうだけど……見ている分には綺麗だけど、なんだかキラキラしすぎて怖いようにも思う。この世のものじゃないみたい。トカゲの目には私よりご馳走に見えるのかしら。

そんなことを考えていると、どこからか、この優雅な沐浴場にふさわしくない騒がしい声が聞こえてきた。叫び声とも言いきり争いともつかない声。

いったいどこから聞こえるつていうの？ 石を積まれた壁は分厚く、入口の扉は部外者の立ち入れぬように閉ざされ、外には不届き者が出ないように複数の兵士が見張りに

ついているはず。だからいままでこんなことなかったのに。女王様も不審に思われたのか苛立たしそうに周りを見渡す。

「……なにか騒がしいようね？」

イライラと女王様が言ったその瞬間。

影がさす。

ザパン、と派手な水しぶきを立てて上から降ってきた何か。落下してからも派手に水が吹き上がるほどの大きな衝撃。……上から？ まさか、上からなんて！ 確かに城の屋上の水場と沐浴場はつながっているけれど、あんな高さからなにかが落下したっていうことに？ なんて危険な……！

着地した「それ」はおもむろにゆらり、と立ち上がる。見れば、「それ」は人間。私は沐浴場を侵入者の血で汚してしまえば女王様の機嫌を損ねる！ ということに思い当って、慌てて「それ」を見たものの、奇跡的に血を流してはいない様子だった。

沐浴場が汚れなくてよかった、といったん安堵したものの、その性別不詳の侵入者はびしょぬれになりながらもよどみない足どりで女王様につかつかと歩み寄ったものだからたまらない。あんな高さから落下したのにまったく怯んだ様子もないのも、つまり相応に鍛えているということか、前々からあの高さから落ちる準備をしていたということ。

ああ、これ以上女王様の機嫌を損ねたら何人かの首が飛んでしまう。だけど、止めようと思ったのに、侵入者の顔を見た瞬間に固まってしまった。彼、彼女、顔を見ただけでは性別のわからないその綺麗なひとは、それはもう、大変な気迫で話すものだから。落ちるときに怪我をしないようにか、侵入者は随分な布の軽装で、布や髪が張り付いているのを邪魔そうにぐいと払って。

「大変なご無礼を働いていることは承知の上です、ユリシス女王。沐浴中に俺のような者が乱入してくるのは悪夢ごときことでしよう。俺も女性の沐浴中、このような強硬手段に出ることは恥ずべきことだと考えます。

しかしながら、緊急を要する事態であることも事実。端的に申し上げますと、『黄金の果実』を使用するのを防ぎに来ました。食すること、何かを願うこと、力を得ようとすること。全て危険です」

「あなた……随分大胆な手段をとったものね。そこまでして黄金の果実が欲しかったなんて。でも残念、もう果実はスライスして浮かべちゃったもの」

「……嗚呼」

スライスされた果実を見た彼……のはず……の目が大きく見開かれる。まだ少年と言っても過言でもない彼は慌てて目の前の果実に手を伸ばそうとして……。

びたりと手を止めた。彼の視線を辿るとアノンちゃんがスライスされた果実をばく

んと飲み込んだらしい。

「待つ……！」

「きやあああああ！ アノンちゃんが！」

視界を埋め尽くす白い閃光。女王様の悲鳴。何かの衝撃で水がざばんと吹き上がり、何かに吹き飛ばされ、大きな影が女王様へ向かう。どおん、と重い地響き。

光が晴れたところにはそこには金色の大きなトカゲ、いいえもはや巨大なドラゴンがいて、首にあの、アノンちゃんのピンクのリボンを巻いた姿で女王様を巨大な手で引っ掴んだ。

「黄金の果実は使用した存在を変化させます！」

降ってきた少年は叫ぶ。その瞬間、入口の扉が破られ、二本の剣を背負った金髪の少年が弓矢のように素早い身のこなしで飛び込んできた。続いて女の声が呪文を唱えているのが聞こえる。

「メルティー！ 呪文は女王に当たります！ 待つて！」

「アーミアスさん、剣を！」

「アノンちゃんは女王に危害を与えようと……？ すみません、まだ判断できませんが！」

金髪の少年が剣を差し出す。応えて剣は抜かれ、そして侵入者はアノンちゃんに斬り

かかろうとして……。

ドラゴンは大きく跳んだ。井戸へ巨体を器用に曲げて、素早く。女王様を攫って。

剣を抜いた少年は勢いそのまま井戸へ駆け寄り、追いかけてようと飛び込もうとするのを遅れてやってきた男に必死に止められていた。

黄金の果実は、食べた者を化け物に変える悪魔の果実だった……？ 一番近くでアノンちゃんを見ていた私は震えるばかりで、攫われた女王をいい気味だ、もう帰ってこないればいいのにと噂する他の侍女の声はどこか遠くに聞こえているみたいだった。

「女王様の悲鳴が聞こえたのですが、これは、なにがあつたのですか……？」

「ジーラさん」

俺は突入のために外していた防具をガトウザに預けていたので急いで着込んでいた。着ていた服はぐしょ濡れでもものすごく動きにくかつたので人目はあつて申し訳ないが脱ぎ捨て、適当な予備の服を鎧の下に着込む。脱いだ時に傷跡まみれの背中を見られた瞬間ガトウザやメルティの瞳孔がくわっと開いたが今は緊急事態。だから何も言つてこないようだ。

背中。背中といえば翼を失ってズタズタのところをやべー天使による追い打ちをくらった場所だ。ものすごく見た目は見苦しいが、だからってただそれだけなんだが、天使信仰に篤く熱狂的な信者的には見過ごせないのかもしれない。あとでなんと言われても俺が翼を失った時についたとしか答えられないのが情けないところだが、別にもうなんともないし……。追撃の話は恥ずかしいからやめておこう。醜聞すぎる。

なお、相変わらずマテイカはいい子なので無表情だ。俺はなんにも見ていない。口がどうしてどうしてと動いているような気がするがどうしてもこうしてもない。

ま、天使の始末を天使の間でつけられなかった情けなさはあるけどな。俺はまだまだ見習い天使の範疇だから逆らえなかつてところもなかなか情けない。師匠くらい強ければ追撃は受けずに済んだからな。

「黄金の果実は、使用した存在を変貌させてきました。アノンちゃんも同じように。金色のドラゴンに姿を変えたアノンちゃんは女王様を連れて地下水路へ姿をくらませたのです」

「なんてこと……女王様は、父君を亡くし、ひとりぼっちで、誰も信じられなくなつて、それでも唯一心を開いていたアノンちゃんにも……」

「追いかけます。黄金の果実を取り戻さなくてはなりませんし、地下水路では女王様も危険でしょう。それに黄金の果実を使用した者は……正直なところ、半数以上が好戦的

でした。今のアノンちゃんは危険です」

「お願いします！　女王様が立ち直れなくなってしまう！」

ジーラはいい子だ。ワガママなユリシス女王を心底思っている。美しい主従というべきだ。なんだ、女王はひとりぼっちなんかじゃない。あのアノンちゃんが何を思つて女王を連れ去つたのかはわからないが……。

「ええ、必ずや」

メルティーが差し出してくれたプラチナの兜を被る。地下ならば恐らく外のように暑さでどうこうなることは無いだろう。アノンちゃんはみるからにパワータイプだから防具はきちんとしておきたい。戦いにならなきやいいんだが、悲鳴をあげた女王を迷うことなく連れ去つたところといい、あまり期待はできないか。

ともかく、これ以上何かが起こる前に。女王が無事であるよう祈りながら井戸のへりへ足をかけた。

閑話 成天使

(前略) 本日はよく晴れていましたが、少々風が強すぎたようでたくさん村人の洗濯物が吹き飛ぶ騒動となり、私はどうやって気づかれずに高い木の上に引つかかったシャツを投げ落とすのかを考えて……(中略)

おお神よ、感謝いたします天使が文面に記す定型文。アーミアスが特別敬虔だというわけではない。今日もリツカは元気に健やかで、毎日のように勤勉に働き、非常に敬虔で、祖父と二人で幸せに暮らしています。

一方、リツカより余程長く生きているはずなのにまだまだ未熟な私は、どうしてもリツカを気にかけてばかりです。いつか師匠に認められ、ウォル口村の次期守護天使になる身としては鼻負は良くないことはわかっているのですが、それでも大事なリツカの周りにいることをやめられないのです。

守護天使は愛しく幼い住人に対して平等でなくてはなりません。罪深い私はそんなことが出来ないのです。しかし、この日々を幸福だと感じています。

ですが罪深い私は願っています。愛しい人間たちと言葉を交わせたなら。もしも見守るだけでなく、リツカと笑い会うことが出来たら。私がもし、(紙に裏うつりするほど

で見ていることが、だがな！ セルフ天罰いつとくか！

おお神よ！ 天罰はリツカたんと同じ人間にするといいことで手打ちになりませんか！ 翼を捧げます！ 光輪を砕きます！ それでいかがでしょう！ 俺にとつてはご褒美にしかならないのが明け透けすぎなんだよなあ！

リツカたんの几帳面にきつちりとバンダナをしているのがペロい！ バンダナの下
のサラサラまつすぐな青い髪がペロい！ くりくりの目がペロい！ 真つ白なエプロンがペロくつてペろつペろ！ ……いけない、意識がリツカたん百パーセントになるところだった。それはそれで本望だが、それではいけないな。

ともかく、俺は朝から大好きなりツカたんに挨拶できたことでペロリズムが高まり、急性ペロ不足にならずに済み、嬉しくつて嬉しくつて、そのままリツカたんの宿屋や家の周りの枯葉とか枝とかのゴミを吹き飛ばしに行った。

そうだ、吹き飛ばす。そう、今の俺は風。そういうことにしよう。風だから人間の目の前で動かしても問題ない。やりやすいように箒を持つと多分浮いて見えるからダメなんだが……ダメなはずなんだが……待てよ？

今身に着けている俺の服とか剣とかは見えてないよな。失せ物探して物を持つても浮いてる！ つて騒ぎになったことはないし。だが……やっぱバレル気がするんだよな。俺の天使力が不足しているせいかな？ それとも、天使界から箒を持ち込めばある

いは？ 師匠に聞かなくては！

なにはともあれ、今日もウォル口村は平和だ。村の外を空から巡回し、危険そうな魔物が増えすぎていないかを確かめ、続いて村中を巡回し、誰かが困っていないかを探す。病気が流行る兆候がないか、争い事が起きそうになっていないか、はたまた失せ物に困っている人間や、日頃の何かに悩んでいる人間がいなかったかを探し回る。俺が助けられるのはほんのささやかなことだが。まあ、困ったことなんてないことが一番で、今日は特別なものもなく俺は満足だ。

気づけば午後になり、ひと休憩をするために教会の屋根に降り立って腰掛け、そこからリツカたんの宿屋を眺める。小さな村だからそこまで客がひっきりなしに訪れるつてわけにはいかないが、手入れの行き届いたいい宿屋だ。ぶっちゃけ世界一だよな……。ほかはあまりよく知らないが！

世界一キュートな看板娘であり、サイコーの宿の主のリツカたんは今日も真面目に働いている。それがあまりにもかわい。つまりペロ。なんて真面目なんだ！ リツカたんのペロリズムが高いあまり発作が起きそうになるぜ。ペロ。

しつかりと落とさないように仕舞っていた日記を取り出し、今日のリツカたん観察記録兼日記をつけ、もう一度村をぐるっと回ってから俺は名残惜しく師匠の迎えを待った。俺の翼は見習い相応に小さいから、一人で天使界に戻るのには全然できないわけじゃ

ないがちょっとばかり疲れるからな。上級天使の起こした上向きの風に乗って飛び上がれば簡単だ。だから、師匠はそのほうがいいと思ひ込んでいて、迎えに来る。夕方くらいにだいたいくるから、それを待つことになっている。

一人で好きな時に帰ってこいって言われたらまあ帰らないけどな！ バレてんのか？

天使界にはなんたつて、幼く健気な可愛い人間たちも、ペロペロいリツカたんもいないんだからな！ もはや天使界とはなんのために存在してるのか俺には理解できない。別に地上に住んでも天使的にはなんにも問題なくね？ 世界樹に星のオーラ捧げる時だけ帰ればよくね？ 人間たちに近い場所に住んでる方がもつと守護天使できなくね？ 世界樹に新たな天使が遣わされるのを確かめるために何人かだけ置いときやそれでよくね？

できるものならリツカたんの家から飛行一分の距離に住みてえな！ むしろリツカたんのエプロンのポケットの中に住みてえな！ だめか。だめだな。邪悪なペロリストとして摘発されてしまう。イエスペロ！ ノータッチ！ 心の中は自由だが、實際行動するのはただけねえ！ 破るやつは邪悪なペロリストであり、天罰の執行対象だ。

ならリツカたんの家の後ろにテント張りたい……目立つか？ 目立つな。なんなら野ざらしでもいいぞ。リツカたん俺の距離は物理的にも遠すぎる！

そんな叶いもしないことを考えながら、空を見上げると大きな翼を広げた天使の影。師匠だ。師匠は教会の屋根に腰かけているという、見ようによらなくても罰当たりな俺を見ても眉一つ動かさずに見習い天使アーミアスよ、帰るぞ、と言った。

「おやすみなさい、師匠」

「師匠！ 本日の座学、よろしくお願いいたします！」

「おはようございます、師匠」

「師匠、天使界から何か物を持ち込んだ分には人間に見えないでしょうか？ 何を、ですか？ その……箒を。毎日守護地域の掃除までしなくていいと？ そんな！ 俺は好きでやりたいのですが……」

「師匠、差し支えなければウォル口村に一年ほど滞在したいのですが……差し支えますか……では一週間、いえ三日は、……はい、もちろん、俺は見習いなので、師匠の教えの通りに毎日帰還します」

「師匠、劍の稽古をお願いします！」

「師匠！」

毎日目はまぐるしい。やるべきことは多く、また物事は降ってわいてくる。特に弟子をとつてからはそれが顕著である。我が弟子、見習い天使アーミアスは非常に真面目で勤勉で、守護天使としての知識欲にも学びにも貪欲だ。多少、人間への感情が強すぎるきらいがあり、行き過ぎているところは否めないが見習い天使が張り切っているのは微笑ましいことでもある。そういうことは成長とともに自らで見極めていくことであるので注意は控えている。

その努力ゆえに最年少で地上へ行くことが許され、見習い天使の身で守護天使に就任することもほとんど確定事項のアーミアス。実際、今も守護天使としての仕事はすでにアーミアスに移行している。そう、すべては私の裁量次第。オムイ様の許可も周囲の評価もすでにあり、ただ私がアーミアスにウオル口村の守護天使を名乗ることを許すとさえいえばそれで引継ぎは完了する。そうすれば私は本格的に師エルギオスを探すことができるし、アーミアスはより一層励むことだろう。

許可を与えていないのはひとえにまだ、いささか早すぎるのではないかと……ラフエツトやエレッタには散々心配しすぎだと言われてしまったが……私が考えているからに過ぎない。

アーミアスは非常によくやっている。天使らしく、いや並の天使以上に人間を愛し、護るべきだと考えて慈しみ、人間について学び、日々剣の稽古に打ち込む。勤勉であり、村を見て回ることを苦にも考えていないようである。その身を投げうつほどに職務に打ち込み、まだ若いゆえか、多少臍盾をしてみようとすることはあるもの、すべからく村人を守護するという精神は十分である。

ただ、若すぎるだけ。ただ、私が過剰に不安がっているだけ。わかっではいた。アーミアスは、私の弟子は他の正式かつ見習いでない守護天使と比較してさえ、よくできている。職務を引き継ぎ、立派に守護天使として働き、星のオーラをいつそう集めるだろうと。

ただ私が、愛弟子をある種の一人前であると認めたくない偏屈なのかもしれない。師弟関係を解消するわけでもなんでもなく、認めたとしても上級天使と見習い天使という意味合いでの師弟関係は続く。そろそろ認めてやろうと、私は考えていた。

「見習い天使アーミアスよ」

ウォル口村の守護天使として認めたらば、その時はウォル口村の守護天使アーミアスと呼ばねばならないな、とふと思った。教会の屋根に大人しく腰かけて私を待っていたアーミアスを見て、私は不意に同じようにして師エルギオスを待っていた幼い日の自分を思い出す。

同じように、私も見習い時代があり。同じように、いつか師に認められるのを夢見て。それが叶った日の喜び。認められた嬉しさは昨日のように思い出せる。幼き日の私と同じように師を慕い、励むアーミアスにふと微笑みが浮かびそうになって私はつい口元を引き締めた。

「帰るわ」

認めよう、愛弟子アーミアス。私はひとつ決意した。どこで告げるのが適切だろうか。ウォル口村の守護天使となるのだから、ウォル口村で告げるべきだろうか。それともアーミアスがオムイ様に報告することを考えれば天使界で告げるべきだろうか。

明日はお祝いになるだろう。慎ましく、小さなものだ。天使の清貧な食事に変化はあるまい。纏うものにも、何も変化はなく、あるのはひとつの称号の変化と人間への認知。それだけである。だが、我が愛弟子にとって忘れられない日になるだろう。

今日、私はウォル口村の守護天使として正式に任命されました。師匠イザヤールは私を認めてくださり、より励むようにと仰りました。

俺は日記にそれだけ書いて、日記帳を閉じた。続きはあとでも書ける。俺は舞い上がってしまいそうになるのを堪えながら、ウォル口村の上空をぐるんと回るように飛んだ。ああどこに！ リツカたんはどこに！ いた！

祖父と仲良く自宅へ歩く姿を見つけ、俺はそつと近くに舞い降りた。天使は通常、地上で足をつけて歩きはしないが、少しでも目線を合わせたい俺にはそういうならわし未満の曖昧な暗黙の了解なんてどうでもいいことだ。ともかく、俺は足跡をつけないことだけ気をつけて、リツカの隣に立った。

翼がなければ、光輪がなければ、背格好も同じくらいで、同年代に見えるのに……なんて、くだらない考えを振り払う。日に日に大きくなり、大人の姿に近づいていくリツカたん。

「リツカ！」

今日もリツカたんには俺の言葉は届かない。相変わらず人間たちは俺のことは見えやしないし。ただ、これまでと違って守護天使に対して祈る時、リツカたんは俺の名前を呼ぶんだぜ！ 守護天使イザヤール様、と言っていた認識は大いなる力で書き換えられ、今までの代替わりでもそうだったように次期守護天使の名前を認識する！ これの

おかげでリツカたんが俺の名前を呼んでくれる！

「俺は今日、ウォル口村の守護天使になりました。リツカ、今までもこれからも、まだ俺は未熟な見習い天使の身ではありますが、より一層努力します。リツカを守れるように、リツカが健やかに過ごせるように……」

リツカたんに触れることは許されませんが、俺はかたく誓った。その働きの手が働く以外に使われぬように、防げる悲しみに見舞われないように。

「今日もいい日ね、おじいちゃん」

「そうじゃな」

「いい天気で、とつてもいい気持ち！」

すぐそばにいるのに俺のことは見えない。俺は悲しくて、だけでも、だからリツカたんのことを守れるんだと思ひ直す。俺が人間ならこんな素敵な女の子に出会う前に寿命でとつくに死んでるんだぜ？ もったいねえ！

「いつも俺は貴女のそばに……」

見えない誓い。届かない言葉。俺はそれでも願ってた。愛しい人間と話してみたいと。言葉を交わし、その尊い命に触れてみたいと。

俺は叶うことを知らない。まさか天使界から落ちるといふ力技で叶えられることを知らない。だからまだ、少し悲観的で、終生叶えられることがない望みに諦めて、だけ

ど諦めたくなくて、せめて毎日天使への祈りを欠かさない敬虔なりツカたんから、今日の天使の祈りで俺の名前が呼ばれるのをずっと待っていた。

76話 懇願

「これはなかなか……入り組んでいますね……」

「はい。いつも以上に気を引き締めなければ」

「うす暗いね、アーミアスさん」

外にいただけで乾いていく砂漠のど真ん中だし、井戸の下に地下水路がある……つてのは別に想像できないわけじゃねえが。こんなに広いとはな。でかいあまりに無理やり水路を越えてよじ登ったり飛び降りたりするのは危険すぎるから素直に水路に沿って動かないと足を滑らせて落ちたりすれば危険だ。

しかも地下水路は魔物の住処でもあるらしい。そこかしこにあるひんやりとした暗がり。そこに光る無数の眼。お前たちの住処にずかずかと足を踏み入れたのはこつちだから出て行けと襲われても文句は言えねえけど、今は従えねえし、こつちにこなければいいな……。いちいち相手にしている時間もないはずだ。

これだけの空間ならぶつからずに飛べるだろうから、翼があれば探索が楽だったろう。ないものねだりをしてもしようがないが、たまにそういうことは思ってしまうよな。いや、たまにつて頻度かよ？ ああ……翼があつても人間たちと話せるなら良かった

たかもな。俺には無理だが、もつと翼の大きい上級天使なら人間を抱えて空を飛べたかもしれない。旅を思えば便利だな。いや！ この姿ならオート天使バレーさえないければ人間のフリしてその辺の町で人間たちと暮らせるかもしれないんだぜ？ ゆっくり老いるのはそのへんを転々と移動さえすれば……なんかむなしくなってきた。

ともかく、俺たちには翼はなくとも立派に二本の足があるので歩いて移動するわけだ。まあ暗いし、魔物がいるから大きな音を立てるわけにもいかない。これじゃあツオでの洞窟のようにサンデイに先を行つてもらおうように頼み込んで道案内を頼むのも危険すぎて無理だしな。てか今サンデイいねえし。どっかに行つてみたいだし。グビアナで彼女の探し物が見つければいいんだが。

とにかく変身したアノンちゃんは見上げるほどにデカかったから、足跡でも残つてないか目を凝らすも、夜目が特別効くわけでもない一般天使な身体能力の俺には全然あるのかないのかすら判別できねえ。

幸い、特別足場が悪いわけでも無いければ、この水路は昔使われていたものなのか、今は水に満たされていて進めないわけでもない。注意すれば問題なさそうだ。

「このフロアにはいないようです、アーミアスさん。あれほどの大きさの魔物と無防備な女王の気配であれば、音が響きやすいこの構造で私たちに察知できないはずがありません」

「兄さんの言う通りです。アーミアスさん、進むにあたって明かりは必要でしょうか？」
「火をつけたら魔物が寄ってくるかも」

「その通りですね。ですが足元の危険もあります。どうしましょうか？」

「そうですね、もつと暗い場所まで行くようなことがあればお願いします。今は少しでも戦闘を避けましょう」

小声で話し、なるべく足音を立てないようにして進む。確かに無数の魔物の気配はあるものの、明らかに非戦闘要員で気配を隠すことができそうにない女王はいなさそうだ。……彼女が気絶していなければの話だが。

とりあえず下層を目指そう。女王の気配がわからなくてもアノンちゃんらしき気配がないならいいってことだろ、多分。

入り組んだ水路はそもそも歩くための場所じやないから分かりにくい、点検のためか梯子がついている箇所もあるし、階段もある。やれなくはないだろう。剣を構え、足音をなるべく殺しながら俺たちは奥へ奥へと進んでいった。

みんな、冷静なつもりです。兄さんは珍しく呪文を唱える時以外はだんまりですし、剣を強く握ったまま俯いている少年もそう。私だって、冬の冷たい水のように黙っています。放置されて、波一つ立たないカップの中の水のように、さざなみをたてないように。

私は静かにしています。私は冷静に進んでいます。私はいつだって、先頭をゆくアーミアさんの背を追いながら、着実に歩いています。

ですが、脳裏に、網膜に、はつきりと焼き付いている光景を、反芻するのをやめられないのです。

まばゆいばかりにしろく、ほっそりとしたアーミアさんの背を見たことを。濡れた衣類が邪魔だという理由だけでアーミアさんは脱ぎ捨て、躊躇なく背を晒しました。ええ、事実として、アーミアさんにとつてはそれは大したことではなかったのかも知れないのです。しかし、私たちには、忘れられない、たいへん重大なことでした。

顔や腕と同じように透き通るほど白い背中に刻まれていた、目立つ二本の大きな傷。そこはかつてアーミアさんが翼のある天使さまだったころ、おそらくは翼が生えていた場所だったのでしよう。神聖なる背に不遜な誰かがよく切れるナイフを力ずくで突

き立て、無理やり皮膚と肉を引き裂いたような大きな傷跡は生々しく、とうにふさがっているというのに痛々しいものでした。

まるで翼を失った背中を無理やりひらき、新しい翼を取り出そうとしたかのような、不自然な傷跡でした。ええ、背中ですから腕を回しても届きはしませんから、アーミアスさんが、少なくともご自身でやられたものではありません。どういった経緯であったとしても、アーミアスさんは誰かに背に刃を突き立てられ、真紅の血を流され、痛みを感じられたという点では違いありません。

しかしその傷は、跡こそ生々しく残ってはいりましたが、しっかりと治療した跡がありました。熟練の回復師の治療痕であったからこそ、傷跡に沈着した色はなかったのです。そんな熟練の腕をもつても大きすぎる傷は塞ぎきれず、肌はなめらかなになることもできず、肉が盛り上がった傷跡は痛々しくはありましたが、いつそ不自然な程に白い肌の色をしていました。

しかもアーミアスさんにあった傷跡はそれだけではありませんでした。次に目を引いたのは背中、いえ、腕にまで及び、体の全面を覆うただれた傷跡でした。そういえばアーミアスさんはごく普通に顔や手といった部分の肌は露出していますが、腕や足などを出しているのは見た事がありません。もちろん、アーミアスさんは聖騎士たるパラディンで、その前は鎧を身につける戦士でありましたし、そもそも旅人は魔物との戦闘

と隣り合わせですからそれは不審なことではありません。

ですが、ただれたような広範囲のその傷にはうつすらと色がありました。通常、皮膚の変色がある傷は時間をかけて自然治癒させたのか、魔法による回復が余程下手だったのか、単純に治療が遅れたのか。引き裂かれた傷跡の見事な治療痕を思えば天使さまの世界、あるいはアーミアスさんを治療した方は並の人間よりもはるかに優れた回復魔法使いでいらつしやるのでしょうか、背中や腕まで及ぶ大きな傷を負った時、アーミアスさんはすぐに適切な治療を受けることが出来なかつたという事実が読み取れます。

いつ負われた傷なのか。私は回復魔法のスペシャリストではありません。どちらの傷が古いのかは付き方から分かりますが……ただれた傷の方です……魔法で治癒した傷が何年前のものかだなんて、わかりはしません。だけど、だけど、いつだつて先頭に経ち、私たちに攻撃が及ばぬように立ち塞がるアーミアスさんにあんな傷を負った過去があつたということは、重大なことなのです。

アーミアスさんは天使さまであり、慈悲深く、人間を愛してくださいさつても。自己犠牲の精神を持つていらつしやつても。間違いなく、傷を負います。痛みを感じられます。傷つきます。ひどいダメージを受ければきつと、死んでしまう。実は天使さまが不死だとしても、傷に苦しまれることには違いありません。

これは好奇心でしょうか。ただ知りましたがっているだけなのでしょうか。アーミアス

さんは聞かれることを良しとしてくださるでしょうか。アーミアスさん。優しき天使さま。

私はお役に立ちたいのです。アーミアスさんのお役に立つということは、その崇高なる使命を果たす際にお手伝い差し上げるといふことだけではなく、アーミアスさんに一つ苦痛になることがないように……という願いです。まだ、私は、私たちは未熟ですべては叶えられはしませんが、私、きつと賢者になつて、アーミアスさんの前に立ちふさがるすべてを吹き飛ばして差し上げたいのです。

今の私にできることは敵対行動をとり、私たちの前に立ちふさがつた魔物が何か騒ぎ立てる前に燃やし殺すことだけです。私は黙々と呪文を唱えながら、それでもすべての魔物の焼け焦げた跡に膝をつき、魂の安らぎを祈つてくださるアーミアスさんの慈悲深き姿を見ながら、杖に寄りかかりました。

ああ。無垢なる天使さま。ああ。私を導いてくださる美しき天使さま！

私は不遜な想像をしました。翼を失つた天使さまの背から翼を引きずり出そうとする同じ美しい天使さまの姿を。あるいは、アーミアスさんを見て天使さまであると気づいた人間がアーミアスさんから翼を奪おうと傷をつける様子を。何が真実であるのかはわからず、ただの、ひどい、不遜な妄想です。

アーミアスさんを傷つけるもの。それすなわち大罪人。滅せられるべき存在です。

ああ、だけど、その現場に居合わせてさえいればその大罪人に向けて業火の魔法を唱えることができたのに。

「ああ神よ。お慈悲を。魔物であったあなたがたの来世が、我らとともに歩むものでありますように。次に会ったときは友として手を取り合うことができますように」

ああアーミアスさん。ああ天使さま。あなたを傷つけるものすべてを焼き焦がすことができますように。力を得たいのです。それを叶えるために。

77話 恋

ひとまず魔物の襲来が落ち着き、周囲の安全を確認し、小休憩がてらしばらくぶりに剣を収められたアーミアスさんは口を開きました。袋から聖水を取り出して皆にふりかけながら。聖水を。ええ、一瓶の聖水を。天使さまが行ったならもはや祝福では……？ 守護天使さま直々の祝福なのでは……？

……いえ、わかっているんです。これが町の道具屋で買ったただの聖水だということも、効用が魔物避けだということも。アーミアスさんに他意がないことも。しかしアーミアスさん手ずから撒いた聖水を浴びているのですよ、私たち！ これはもはや祝福なのでは！ もしかして、これは洗礼なのでは？

本物の、慈悲深く美しい守護天使様による聖水の下賜ですよ！ 祝福なのでは！ 洗礼なのでは！ 少年はぴんときていないようですが兄さんは魂が召されそうな顔をして喜んでいきます。僧侶だった時より信仰心に満ち溢れた顔をしていますね！ わかりますよ！

不肖メルティー、やる気チャージ完了です。必殺チャージもこの分ですと、速攻でしよう。お任せください！ ミラクルゾーンしますよ！ やる気があれば魔力なんて

どこからでも湧いてくるのです！ そしたらヒヤダルコ連発してやりますよ！

ところで……教会で人間の神父やシスターが祈った水よりアーミアスさんが祈った清らかな水の方が効果があるのでは？ アーミアスさんは戦闘後に必ず祈っていらつしやいますが、もはやその手に握られた剣は聖剣ではありませんか？ いえ！ もちろんアーミアスさんの天使さはどこを探してもこれ以上の天使さまはいらつしやらない、とほかの天使さまを知りもしないのに確信しておりますが！

「これから戦闘になる可能性が非常に高いでしょうから、先に打ち合わせをしておきましょう。最も重要視するのは女王の安全確保。彼女が戦闘に巻き込まれることのないように配慮しなくてはままなりません。隙を見て俺が助けますから、援護をお願いします。場合によってそのまま逃げることも考えていますが、恐らくは追いつかれてしまうでしょうから、最終手段ですね。安全な場所まで移動させ、そして俺も戦闘に復帰します」

「わかったよ！ ……それで、アノンちゃんは思いつきりやつつけてもいいの？」

「女神の果実であれだけ姿が変わっているので戦闘力が上がっていることは間違いありませんし、言葉が通じるか、そして話を聞いてくださるかはわかりませんから……おそらく命を奪わないように気をつけて攻撃することになるでしょう。女王にとって大事な存在でしょうから、出来れば元の姿に戻して返して差し上げたいですね」

「それでは焼いてはいけませんか？ 凍らせるのはいかがでしょう」

例えば殺さないように、と想定すると、とても手加減できるような相手には見えませんが。アーミアスさんも同じ意見のようです。

「あの巨体を魔法で一撃でというわけにはいかないでしょうし、手加減も難しいでしょうね。トドメにならないければ問題ないかと……俺は人命を優先します。存分に戦ってください。これまでの例で言えば耐久力も並ではないでしょうから」

「わかりました。みなさん怪我などないですか？ 今のうちに治せるものは治し……そうだアーミアスさん、あんなに高いところから飛び込んだのです、遅くなりましたがお体に問題はございませんか？」

「ありませんよ。大丈夫です。高さをわかって飛び込みましたから身構えることが出来たので」

兄さんの探りにも特に反応なさらず。構えベホイミは霧散しました。明らかに落下した時のダメージよりも傷跡の心配なのがありありと透けて見えました。がアーミアスさんは無反応です。

というよりもアーミアスさんにとってはやはり傷跡を気になさっていることではないのでしょうか……傷自体は完全にふさがっていますからね。アーミアスさんなら、既にふさがっているのに気にすることがあるのか？ と首をかしげかねません。少なく

とも今のアーミアスさんがお元気なのでそれを素直に受け止めます。ええ、あんな高さから飛び込んでも平気とは、流石です。同じ経験を積んだパラディンであつてもできない芸当です。

「みなさんは大丈夫ですか？　大丈夫そうですね。……それでは下へ参りましょう」

アーミアスさんは周囲の暗さから一旦外し、袋に仕舞っていた兜を取りだし、被りました。そしてバイザーをぱちんと下ろし、その美しいかんばせを覆い隠してしまわれ、先頭を歩きました。

おそらく地下水路の最下層につき、女王と元凶のトカゲを発見……したのはいいのですけど！　なにやら話しているような声が聞こえるので皆で隠れながら聞いていますが、なかなかよくわかりません！　メルティールが話を聞いているうちに杖を握りしめながら首をかしげ、少年は最初から理解を放棄したようです。

ええと、どう表現すべきなのか。座学はそう苦手ではなかったのですが、どうも感情の機微については苦手としておりまして……？　言葉の通りなら色恋のたぐいでしょ。トカゲが人間を、というのが不思議なところですがそういうこともあるのでしょ

う。いえ、目の前にあるので疑っても仕方ないのですが。

「……」

「なあユリシスはん。わてと一緒にこれからスイートな人生を……」

「……?」

アーミアスさんがぼそり、と小声で言いました。

「……アノンちゃん、女王を口説いていらつしやる?」

「トカゲが人間を? 好きなのに怖がらせてたらダメじゃないの?」

フルフェイスの下のアーミアスさんの表情は分かりません。が、静かな声で答えてく
ださいました。

「自覚がないのかもしれませんが……いえ、とにかく合図したら突入します。もともと
小さいトカゲがああサイズになっているのですから、力加減ができずに大惨事になるか
もしれません」

「そうだね、なんか、ぎゅって、ハグでもしそうな勢い……」

「いけませんね、俺には最悪の予想ができてしまうのですが……」

「おれも潰れちゃうと思うな!」

「突入します!」

女王が深紅に染まる嫌な想像をしたのか顔色を悪くした少年が矢のように素早く飛

び出し牽制します。怯え震える女王にはアーミアスさんが向かいます。

助けて、と小さい声で女王が言ったのを目の前のトカゲは聞いていないようでしたがアーミアスさんには聞こえているのです。私は援護のために死角に留まり、メルティーは魔力を集中させながらいつでも呪文を放てるように暗がりの方へ駆けていきました。

「なんや?」

間に割って入ったアーミアスさんに気づいたトカゲは威嚇するように鋭い爪を持った両腕を振って見せました。ちよつとでも触れたら危ないので私は矢を構えてアーミアスさんに害をなそうものならその腕射抜く所存ですが! 刺さるかちよつと分かりませんが!

トカゲを通り越して金色の大きなドラゴンという様相、人語を解する知能、かなり危険な相手でしょう。

「おまん……長年想い続けたユリシスはんと一緒にならうつちゆうわての夢を邪魔しに来たんか?」

「黄金の果実で変身したあなたを放置することは出来ないのですよ」

アーミアスさんはさりげなく女王の肩に左手を置きました。隙を見て腰を抜かしその女王をひよいと抱えて下がるおつもりようです。

「黄金の果実? もう食ってしまおうたわ! わてはあの果実に人間にしてくれって頼ん

だんや、そしたらほら、二本足で立つてな、しゃべれるようになってな、力も強うなつてな！ どや、イケメンやで！ これでユリシスはんを寂しくさせることもないわ！ やっぱりちっこいトカゲやったらお喋りもできへんし……同じ人間やったらこんなに見えることはないわ！」

「人間になりたかったと？ 願ったのですか？」

「せや、城の中でユリシスはんはひとりぼっち！ 親父はん亡くしてひとりぼっちなのにみーんなユリシスはんの悪口ばかり言いおつてからに、寂しい気持ちを理解せんと、ならわてだけでも味方にならなあかんのや！ だから人間になつたんや！ わてが人間ならユリシスはんは寂しくないんや、わてがトカゲやと所詮はトカゲ！ 話は聞けても答えることは出来へんのや……」

分かったやろ、別に城の人間になにかしようっちゅうわけやない、ただユリシスはんとスイートな人生を送つて、ユリシスはんには笑顔で日々を過ごしてもらおうっちゅうだけのことや、邪魔しんでな！」

「動機は理解しましたよ、アノンちゃん……言わんとすることはとても理解出来ました。しかし女神の果実を取り返さないわけにはいかないのです。申し訳ありません……本当に……」

さつと女王を抱えて飛び退いたアーミアスさん、気づいて腕を伸ばすトカゲの爪を剣

で受止めた少年。私は鱗に覆われた額目掛けて矢を放ち、こともなげに叩き落とされたのを見ながらアーミアアさんの指示を聞きました。

物陰に女王を下ろし、こちらに剣を振り抜きながら駆けてくる勇ましい姿であるのに、どうにも悲しそうな声だと感じながら。

「攻撃してください！」

人間に恋したトカゲは、女王を取り戻さんと周囲を揺さぶるような大きな声で吼えました。空気を震わす咆哮をもともせず、アーミアアさんは剣を振りかぶりました。

78話 和解

再三繰り返してきた気もするが、俺には「特別な才能」ってのはない。人間から見れば神祕の力に分類されかねない、幽霊が見える力は天使としての標準的な力であり、天使なら全員見えるのだから普通だし、その他のちよつとした能力……心ばかりの悪意を吸い寄せるとか、呪いを吸い寄せるとか、妖魔の呪いが効かないとか、落下したときのダメージで死んだりしないとかも天使由来だ。師匠なら完全上位互換でなんでも出来るだろうし。俺の特殊能力ではない。

上級天使のように聖なる雷も呼べない。俺は嬉しかったが、能力としては翼がないから飛ぶことも出来ない。星のオーラすら見えない。それでいて剣の才能や魔法の才能があるかというとは並だ。

本当に、俺って並なのだ。人間から見たら俺の剣は多少上手く見えるだろうが、それでも百年以上毎日振るってきたと考えるとどうだ？ 時間の割には達人級ではない。かといつてずぶの素人ではない。才能がなさすぎる訳でもない。ただ振り慣れただけ、稽古の期間を考えてみれば、並の腕だ。

俺は小柄だから、縦にも横にも自分よりはるかに大きいトカゲの攻撃を素直に受け止

めたら潰れるか吹き飛ぶ。かといって凄まじく重いその攻撃を受け止められるほどの頑強さもない。体格も才能の一つだし、将来有望そうな仲間たちのような才覚があればまた違ったのかもかもしれないが……前に出て攻撃を引き受けるとはいえ、俺が死んだら次の盾がなくなってしまう。味方に当てないために俺が前に出ているというのに受け止められるわけでもなく、相殺するわけでもなく、避けるという悪手に出る羽目になった。

要修行だ。背後でマティカは避けたんならいいが。強くない振り返るなんてできなくて、だけど元気に俺の頭上をマティカの剣が通っていったし元氣そうだ。武闘家だったのにはバトルマスターとして板についてきているマティカは剣の才能に溢れているな。こんなに短期間で慣れるなんて素晴らしい。自分の腕はともかく見る目はあつたらしい。

元のアノンちゃんを思えば、戦闘したことがある……のか？ 女王のペットだぞ。なさそうだ。実際、攻撃は俺の剣を叩き落とそうとしたり、頭を狙ってきたりと分かりやすい。分かりやすい弱点しか狙ってこないし、攻撃は体重相応に重いが洗練されているわけではない。殴ってきたかと思えば突然口から火を吹いたり油断はできないが。戦っていて自分が人間になったわけではないと気づいてもいいんじゃないかな……。

姿かたちが人間に似ていても、俺は人間じゃねえ。翼がなくても、光輪がなくても、人間にはなれねえ。それっぽくはなれたが結局オート天使バレなんてして顔をすっかり

隠さなければあんまり意味もない。どっかに行方をくらまして人間としてひっそり過ごす、なんてのもできねえ。

アノンちゃんは人間になって寂しがりやな女王と幸せになりたかったみたいだが……ん？ トカゲが人間になりたいと願ってもドラゴンもどきにしかねないのか？ 喋ることはできても、それだけってことか？ 女神の果実で俺は人間になれないのか……？ どうせ俺のものにはならないし、使っていい訳もないのに衝撃的じゃねえか。なんて。戦闘中に考えたって仕方ないだろう。

何も殺さなくていい。ぶん殴って一回冷静にさえなつてもらえれば、言葉は通じる、願っても世界滅亡とか言つてねえし、望みはある。

ただ、今の自分を理解して欲しい。確実にダメだ、とは言えないが、その姿で女王を本当に幸せに出来るのかどうかを。その、相手の状態すら理解できない夢中な状態で穏やかに暮らせるのかどうかを。寂しがり屋の女王だが、でも、ひとりぼっちではないのだということ。

女王の身を案じていた人間がいる。女王をこんなにも想っている「家族」がいる。姿を変える覚悟があつて、元の環境を捨て去つてもよくて、二人だけになつても構わなくて、相手のことを想いやつて救い上げたいと願う存在が。親を失い、ひとりぼっちで寂しくて、でもちよつと顔を上げたらひとりじゃないのだと。言葉を得たなら言つてや

ればいい。きつと届くとオレは信じている。

さあ目を覚まして。小さな魂よ。幼く、優しく、相手を想いやれる、いとしい光の子よ。

目を覚まして、なんてやさしげなこと言いながら剣でぶん殴ってるわけだが。それ以外に、もつと穏やかな方法は無いのかよ!? 俺のなけなしの天使パワーをオート天使バレなんて無駄なところにリソースを割かずに、なんかありがたい光のパワーで冷静じゃない生きとし生けるものに「ちよつと一旦冷静になつて話聞いてくれるか? そつちの言い分も聞くからさ」を出来るようにしてくれよ! 戦いなんて本当はないほうがいいに決まつてる。血なんて流れないほうがいいに決まつているんだ、食事のための戦い以外は、本当は無意味なんだからよ。

俺の振り抜いた剣が、マテイカの鋭い一撃が、メルティーの氷の魔法が、ガトウーザの矢が、アノンちゃんに殺到して、痛みか、はたまた何かに気づいたのか、不意に彼は振り上げていた鋭い爪の生えた腕をおろした。

その瞬間、横から小柄な少女が俺たちの間に割って入って俺は大いに慌てた。あぶねえ!

「待つてくださいい！ アノンちゃんを殺さないで！」

「ジーラ……？」

危険なのはわかっていた。アノンちゃんは容赦なく旅人さんたちに攻撃していたし、力の加減も知らないようだったから。でも、暴れるアノンちゃんをこのまま殺してしまつたら……女王様は二度と心を開く相手がいなくなつて、本当のひとりぼっちになつてしまう！ 二度と心を開くことができなくなつてしまうかもしれない！

「アノンちゃんは女王様の家族なんです、お願いです、旅人さんたち……アーミアスさん！ ユリシス様の心を開く先がなくなつたら、今度こそひとりぼっちになつてしまう……！」

「ええ、アノンちゃんはとりあえず落ち着いてくれましたから、殺したりなんてしませんよ。大丈夫です。ほら、もう襲い掛かつては来ませんから」

かぶとを被つていて表情はわからないけれど、彼は笑った気がした。剣を取めた彼はガントレットをはめた手でそつとアノンちゃんを示した。すつかり好戦的な様子を失つたアノンちゃんは、私たちを見て、息を切らしたままの私を見て、それから少し離

れたところに退避して、座り込んでいるユリシスさまを見て、頭をかいた。恥ずかしそうに。

「なんや、なんや。わてピエロやないか。ユリシスはんのことを想つて危険なところに飛び込んでくれる人間はん、おるやないか。ジーラはんがこんな……口から火イ吐く人間やない危ない存在のところまで来てくれるんやったら、わてえらい勘違いしてたんやなあ」

「アノンちゃん……？」

「なあ、わて人間になれなかつたんやな。戦つとる最中に気づいたんや。人間は火イ吹いたりせえへん。こんなでつかい爪生えてへん。こんなに背エもデカくもないわ。ユリシスはんの隣に立てるようなシユツとした服も着とらんし、こんなすっぱだからユリシスはんさらつて、そんなえらい騒ぎ起こして……しかも勘違いでやらかしてるなんて恥ずかしいわあ。」

ユリシスはん。わてがこんなことしなくてもユリシスはんのことを想つてくれるひとはちゃんとおつたんやなあ、でしやばつてもうたわ。堪忍なあ……所詮は、トカゲの浅知恵やつたんやなあ」

私は座り込んでいたユリシス様を助け起こした。アノンちゃんは目を細めて私たちを眺め、大人しく恥じ入っていた。体を縮こめて、少しでも威圧的にならないようにし

てくれた。

「大丈夫やったんや。ああよかった……すまんなあ。旅人はんにも世話かけてもうた。城のみんなも怖かったやろなあ。もう小さいトカゲに戻るわ。たとえ喋れなくても、ユリスはんのそばにいれるんは小さくてキュートな姿な方やもんな。こんなでつかい人間モドキじゃなくても、ユリスはんは一人やないから、トカゲがでしゃばってもしょうがないんや。ほなまた……」

魔法が解ける。私はそう思った。アノンちゃんの体を包み隠す、もうもうと立ち込める煙。それが収まると、そこにはスライスされていたはずなのにすっかり元の形を取り戻している黄金の果実……確かに見た目はキラキラしていて、新鮮で、なんとなくおいしそうにも見えるけど、危険なものだと分かっているのに逆に不気味に見える……と、元の小さな姿に戻った金色のトカゲのアノンちゃんがいた。

「アノンちゃん……ジーラ。ああ、わたし、ひとりぼっちなんかじゃなかったのね」

アノンちゃんを拾い上げ、微笑んだ女王様。いつもの気を張っている姿ではなく、先王様がご存命の時のようにあどけなく、美しく。

「帰りましょう。そしてみんな、ありがとう。気づかせてくれて。」

それから旅の方。随分無礼を働いてしまいました。もちろんその黄金の果実は差し上げます。それから……城に来てください。今度は歓迎いたします。わたし、すっかり

目が覚めたみたいですから」

アーミアアスさんはゆっくりと黄金の果実を拾い上げて嚴重にしまい込むと、ユリシス様に向き直り、どこか嬉しそうにうなずいてくださった。

79話 過凶行

さて、地下水路から帰還し、戦いを終えた直後の姿ながらグビアナ城内にて。私たち、豊潤な水のある沐浴場からいまや使用されていない地下水路、そしてその先の洞窟で行って戦ったので泥水まみれなのですが、そのままの姿で玉座の間に躊躇なく招き入れられました。

そして今度はアーミアスさんが受けるに相応しい歓待を受けました。ええ、最初からこの素晴らしく慈悲深い天使さまを歓迎していればよかったものを。後から言っても仕方がないですが。

「改めて。みなさん、ありがとうございます。おかげでアノンちゃんも、わたしも無事です。し、騒動で怪我人も出なかつたと報告を受けました。

それに……わたしはひとりぼっちではなかつたとこの騒動を通して知ることになりました。アノンちゃんも、ジューラも。あんなワガママなわたしを見ながらも……見捨てないでいてくれた、わたしを想ってくれた周囲に気付かされました」

「得難い周囲の想いにそうして気づくことが出来る人間は稀有です。ユリシス女王の行先も、グビアナの将来も明るいでしょう」

「アーミアスさん、ありがとうございます。どうか、みなさん。何か困ったことがあれば申し付けてください。グビアナはあなたがたをいつでも歓迎します」

「でしたら、俺の目的は黄金に光る果実をあつめること。もし噂を耳に挟んだら少し、耳を傾けていただけると幸いです。黄金の果実がもたらす災厄はあの通りですから。生きとし生けるものにとって過ぎたるものなのです」

「……わかりましたわ。ええ身をもつて知りました。不謹慎ながら、アノンちゃんの言葉を聞くことができたのは嬉しかったですが……」

「ええ、もし黄金の果実に『正しい使い方』があるのだとすれば……本来言葉を交わせぬ相手との意思疎通もそのひとつなのでしょう」

そして、思い出したようにアーミアスさんはかぶとを外しました。天使さまという上位存在でありながら人間に礼を尽くすアーミアスさんらしい行動で、これから灼熱の外に行くのでどちらにせよ城内で外すことになったのでしょうか……これではアーミアスさんのことをグビアナの人間が気に入ってしまうかもしれないじゃあないですか。

アーミアスさんの行いすべては、それはそれは天使らしく、誰にでも救いの手を差し伸べてくださるので……フルフェイスヘルムですこしも顔が見えなくても結果は変わらないといえそうですね！ 人間なんてほとんど愚か者しかいないので見てくれが良ければさらに好感度が上がってしまいます！

現に、アーミアスさんのやや幼くも、神さまが丹精込めて創りあげたとわかる、輝くばかりに美しいかんばせに周囲の目は釘付けです。いけません。これはダメです。アーミアスさんは……アーミアスさんは、決して私たちのものじゃありませんけど、あなたたちにはあげませんよ！

「ユリシス女王、ならびにグビアナ王国に神の御加護があらんことを。」

それでは、みなさん、行きましようか」

「あらお待ちになつて。そのような姿で急いで出発なさらなくとも。あなたがたは恩人です。傷はもう治されたようですけど、せめて戦いの疲れを癒し、汚れを洗い流してからでも良いではありませんか。恩人に恩を報いることも出来なければわたしは変われただなんて思えません」

「……」

アーミアスさんは前衛ですから、先陣切つていちばん傷を負い、いちばん疲労していらつしやるはずですが……私たちの方をちらりと見ました。

盾も持たずに……持てず、というのが正しいですが……巨大なトカゲに攻撃を仕掛けていたマティカ少年は頭からつま先までどろどろ。後衛の兄さんと私は汚れこそ大したことではありませんが多少は魔力不足の疲労が顔に出ている自覚はありました。

ルイーダの酒場で雇った仲間に対する待遇とは思えないほどの厚遇をくださるアー

ミアさんですから、申し出があれば断ることはなさらないのです。とはいえ、女王の沐浴場を使用するのは即決で辞退されていました。

贅沢にも水をふんだんに使用させてもらって汚れを落とし、宿に案内され、ようやく一息ついて。

アーミアさんが部屋に戻られたあと、私たちは集まっていました。正直なところ疲労感も眠気もありますが、そんなことより大事なことです。話に夢中になりすぎ、明日に響かないように気をつける必要はありますが、それにしたって魔法の聖水でも使えば最低限の仕事はできるはず……いえ、疲労をアーミアさんに見抜かれてしまえば要らぬ心配をかけてしまいますから、適度な自制はしますが！

ともあれ、私たちが休むのを先送りにしてまで集まった議題はもちろん……。

「アーミアさんの傷の話ですが、兄さん？」

「ええメルティー。実のところ、アーミアさんに古傷があるのは知っていました。範囲が広い。ただれは腕にも及んでいますので……私は知っていました」

「でしようね」

「その時、傷について聞いたのです。アーミアスさんは仰いました。それから落ちてきた時の傷だと。そら、というのは天界のことでしょう。しかし、直接広範囲の傷を目の当たりにしたことはなかったものであれほどまでとは……翼なき天使さまであるアーミアスさんですが、かつては純白の、輝くばかりの翼をお持ちだった。天界から落ち、翼を失い……傷を負われた」

少年が叫びました。

「ねえ！ それって、空から落ちたから、怪我で翼がもげたってこと？ 落ちたから、翼がなくなつたんなら、じゃああの二本ある縦の傷はなんだって言うんだよ。あんなの、絶対に誰かがやらなきやつかない傷だ。翼の位置に刃物の傷だよ、ねえ、ガトウーザなら見たらわかつてんだよね」

「もちろんですとも。あの傷、あの深さ、あの背中という位置。まかり間違つても自分で傷つけられるものではないです。しかも全身に及ぶ火傷の上にあつた。これは予想にすぎませんが、……翼を失ったことと、全身火傷になつたことと、背中を傷つけられたこと。これが別のタイミングでアーミアスさんを襲つたということですよ。ああいえ、天界はおそらく人の目には見えませんが……空の彼方にあるのでしよう。そこから落ちればもしかして、流れ星のように燃えるかも……」

「兄さん、たしか今年……流れ星、ありましたよね？」

「ありましたね……大地震の日でしたっけ。落ちた方向までは覚えていませんが、セントシユタインからはかなりはつきりと見えました。目撃情報を洗えばすぐ分かることでしょう。セントシユタインを拠点にしているアーミアスさんですから、聞き込みの機会はあまるはず」

地震の後の、綺麗な流れ星。少しの間酒場でも話題になっていたので、あれが天界から落ちてきたアーミアスさんだったとしたら。

時に摩擦により、物体が高温に達することは理解できます。木を擦り合わせることで、も上手い人間なら火さえ起こせるでしょう。流れ星の着地点が時に焼け跡になっているという話も知っています。しかし、地上からあれだけハッキリとした光が見えるなんて……本当なら、火だるまででしょう。どんな壮絶な灼熱地獄だったのでしょうか。

しかし、そちらよりも。

「新しい方の、人為的としか言いようがない背中傷……アーミアスさんに直接聞くのは不埒でしょうね。特に古傷の痛みがある動きをされていませんし、聞く動機としては薄いです」

「ただの好奇心で聞いて良い内容ではないことくらいには私にも分かります」

「聞かれたくないことくらい、誰にだってあるって分かっているけど……」

仮にアーミアスさんが傷について何ら思っていないとしても。痛みを感じられたことは間違いないのです。あの白い肌にも、あの優しき天使さまが傷をつけられ、苦しんだ過去には違いなく。

「何にせよ、犯人を許してはおけませんね。賢者になれば過去を見ることができればいいのですが」

「犯人がわかることはなさそうですが……備える分には損しないはず。私は毒矢でも用意しておきます。別の機会に役に立つこともあるでしょう」

「じゃあおれはぶつた斬る練習をするよ」

なんて、私たちは犯人がアーミアスさんと同じ天使さまによる凶行だとは知らずに話し合っていたのです。

カルバド編

80話 流星天使

部屋に備え付けられた鏡で身だしなみを確認する。気に食わねえなにもかもを変え
ることはできなくとも、気を遣えば清潔感くらいは何とかできるもんだ。耳の近くで跳
ねていた毛先をそつと抑えておく。

ま、そもそもの髪の色に清潔感がないからどうしても限界はあるが。だがこういうの
は気持ちが大それた。

あー、明日目を覚ましたら突然師匠のように濃い眉毛が似合う男前な顔になって、師
匠のように見るからに筋肉質でイケメンな肉体を手に入れ、黒でも金でも茶でも白でも
いいからこんなきつたねえ灰色ではないはつきりした髪色になってねえかなあ！ そ
したらなんとかして小麦色に肌を焼くぜ！ 完璧なイケメンの出来上がりだ！

ワイルドな容姿って憧れるよな！ 力強い筋肉！ こんがり焼けた肌！ 清潔感あ
る髪！ そして男前なはつきりとした顔立ち！ 今の俺は真反対だからな、憧れるぜ！
あと師匠並みに身長も欲しいぜ！ 天使が欲望まみれで笑えるぜ！

リツカたんが人の外面の良さで簡単になびくような女の子だとは微塵も思っちゃい

ないが、それでも容姿がいいにこしたことがないだろ！　かわいいリツカたんの隣に立っていてキマるのはやっぱりイケメンだし、リツカたんが世界一可愛い以上俺もイケメンになる義務があるに違いない。しかも純情なリツカたんが一瞬でも俺のことをかっこいいと思ってくれたら……もうそれだけで星になっちまうぜ。今すぐにも師匠みたいなイケメンになりてえよ！　俺なら断固として髪は剃らないけどな！

ツルツパゲときたねえ灰髪、どつちがマシなのか……。まだ自分で剃っているハゲかもしれないけど。だがちつとばかしハゲは好みが分かれるだろ……。

ふざけたことを考えるのはそれまでにして、部屋を出た。ご丁寧にもユリシス女王は俺たちに一人一部屋用意してくれたから、リツカたんの素敵な宿屋じゃなくても快適だったぜ。

部屋の外にはすでに仲間たちが勢揃いしていた。うわ、バカなこと考えてモタモタしていてすまねえ。とつとと出てくるんだった！

「みなさんおはようございます」

「おはようございます、アーミアスさん！　聞き及んでいた通り、砂漠の夜は大変涼しかったですね！」

「そうですね。みなさん、寒暖差が激しかったですがお加減は大丈夫ですか？」

「元氣いっぱいだよ！」

「澆刺としております！」

「力なら有り余っております！　ですからなんなりと！　なんでもお申し付けください！」

「元気なのが一番ですね」

みんなが元気つてのは大変結構、良いことだ。

だがそれじゃあ休むためにわざわざセントシユタインに戻って、リツカたんの顔を見るためだけに宿に泊まる理由がねえ……雇い主だから何をやろうが俺の勝手っちゃ勝手かもしれないが、休息が必要なさそうなのに酒場に登録された仲間を遊ばせておくのってどうなんだ？　やる気もみなぎっている様子だしよ。そろそろリツカたん不足のあまりペロ不足だが……俺の心の中にいるリツカたんではなく本物のリツカたんを見て内心ペロッペロしたいところだが……迷いどころだな。俺の中のペロリストの元気がない。こころなしか髪の毛まで萎びているような気がする。リツカたんに会いたい。

だが俺の問題だし。仲間たちには知ったこっちゃねえだろ。

早く女神の果実を見つけなくていいのか？　また大惨事が起きているかもしれないし、今度は騒動に間に合わないかもしれないのか？　心の中の理性がそう囁く。心の中のペロリストがやだやだリツカたんのところに戻るんだ！　リツカたんぺろぺろ！

リツカたんにただいまって言いたい！ と騒ぎ立てる。

うるせえ！ 私欲を優先しようとするな！

じゃあ……あとで戻るにしても、このまま船でヤハーン湿地に向かい、カルバド大草原の方へ行き、カルバドの集落の方へ行つていつでもルーラで行けるようにしてからセントシユタインに戻るか。それともヤハーン湿地からはエルマニオンの方へ行つてエルシオン学園をルーラ登録してセントシユタインに戻るか。なんにせよなんの進展なしに戻るの……なんとなくはばかられる。

「アーミアスさん、今回もいったんセントシユタインに戻られるのですか？」

おつとガトウーザ！ お前つてやつは！ もしかして俺の心が読めるのか?! そいつはあまりにも俺に都合が良さすぎやしないか！ 頷くだけでリツカたんをペロれるようにしてくれるのか?!

「いつも戻られていたのでそうかと思つたのですが」

「兄の発言が差し出がましいものでしたらすみません！ しかしいつもの流れでしたらそうだったと思つておりました！」

メルティーまで！ 俺の欲望まみれの心なんて読まれて困ることしかないが、想いを汲み取るその気遣い、染み渡るぜ！

「リツカ姉ちゃんどこ行くの？」

もちろんだとも！

純粹無垢なマティカにもなにもかも筒抜けかよ！ ポーカーフェイスなんてとつくに崩れているんだろうな、リツカたん不足がバレてんじやねーか！ リツカたん吸いたい。リツカたんの近くで守護天使したい！

……まあそうだよな！ ほぼ毎回、ことあるごとにセントシユタインに戻ってんだからもはや理由とか言い訳にしか見えないよな！ ルーティンにしていた俺、ナイス！ それでも一応、当たり前前みたいな顔をして頷く。見た目はともかく最年長者だし……なければしのプライドで。

もう無駄だけだよ！ わかってっけどよ！ それでもよ！

「ええ、一回戻ります。その……」

なんて言い訳しよう。こんだけお膳立てされてもこのザマかよ！

「あの、アーミアスさん、すみません。それでしたら、半日でかまわないのでセントシユタインで用事が出来たんです。戻られるようならお暇を少し頂いても？」

「私も。数時間でも構いませんので……」

言い訳さえいらなくてか。聞かなくてもわかるってか！ いいから行ってこいつてか！ こつちのことは気にすんなって？ なんて俺の気持ちを理解してくれているいい子たちなんだろう！ やっぱり人間は最高だ！

「もちろんです。みなさん、今日は一日休みにしましょう」

「ありがとうございます！」

機転が。仲間の機転が最高だぜ。リツカたんに会える！ よつしや、じゃあルーラだ

！

リツカたん！ ただいま!!

アーミアスさんと一時別れるのはとても寂しいですが、取り急ぎ聞き込みがしたかったので仕方ありません。天使様について勝手に探ることは……メルティーならばあるいは罪悪感を覚えるかもしれないですが、私はアーミアスさんについて新たに知ることが出来る！ と嬉々としているのです。いえ、流星に内容が内容ですから完全に嬉しくてしょうがないというわけでもないのですが。

旅の宿の周辺をうろついている流浪の精霊たちに知っていることはないか聞いてみようかと思いましたが、例え初対面だろうが、執拗に私の目を狙ってくるのでやめてお

きます。目が見えなくなれば弓を引けませんから。戦えない、弓が引けないなら私の利用価値が下がります。アーミアスさんの役に立てる自分でありたいのです。

まあでも、アーミアスさんに宿ったあの……多少……変わった精霊のような相手ならば聞いても良さそうですがね。変わった精霊ではありましたが、精霊にしては非常に素朴で、ことあるごとに対価をがめつく要求してこないのはもつと珍しい。聖騎士に宿る精霊は聖騎士と同じく博愛基質なのでしょうか？

さて、聞き込みをするなら二手に別れるとしましょう。どうせマティカ少年は戦力外です。なぜなら。

「少年は酒場にいた方がいいですね」

「なんで？ 二人よりもおれの方がセントシユタインの知り合い多いよ？」

「だからですよ。昔の知り合いに会うかもしれないんですよ」

「構うもんか。おれは前より強くなっただから、もう何言われても泣かないし！ もし何かやられてもちゃんとやり返せるんだよ！」

「やり返すのはアーミアスさんに迷惑がかかります」

「あ、そうか……それは、そうだけど！」

「少年、メルティーはあなたにアーミアスさんの護衛を任せると言っているんです」

人の感情の機微に特別疎い自覚はありますが、妹であるメルティーの考えていること

なら分かります。

聖職者の家に生まれた私よりもずっと神に敬虔なメルティーは、同じように私よりもずっと優しい。ほぼストリートチルドレンとして育ったマティカをかつての古巣に近づけたくはないのでしょうか。マティカ少年の利発さの割にはセントシユタインにいる時は宿屋の周りから離れないことも、……私でさえ知っています。

とはいえ、宿屋の周辺にいれば安全です。

「護衛？ それも……アーミアスさんの邪魔になっちゃうよ……」

「邪魔になるほど近づかなくていいんです。ちよつと離れたところに座ってたまに見るくらいでいいんですよ。アーミアスさんは一人でもお強いのでただの保険ですよ。ほら、飲み物代はいりますか？」

「ガトウーザ、子ども扱いまでしなくていいってば！ 行ってくるー！」

駆け出していった金髪の後ろ姿を見送ると、メルティーが振り返りました。

「ガトウーザ、珍しいですね」

「そうですか？」

「そうですよ」

「メルティーの考えていることくらいは人でなしの私にも分かります。早く聞き込みがしたいですからね」

「そうではなくて。ですが、喜ばしい変化だと私は思いますよ」

「さて。私はあの少年の末路がどうなろうと一向に構わないのですが」

「嘘おっしやい。まあいいです。聞き込みしましょう」

そうして二手に分かれた私たちは、想定していた通りに「流れ星」の日が大地震の日と同じであり……さらに落ちた方角もウォル口村であったと知ることになりました。

81話 確率論

よい休暇だった。

リツカたんとお話している間こそ、幸せいっぱいでもさしく「天にもものぼるような心地」だ。俺は「地に墜落する心地」の方がよっぽど好みだけだな。地面にめり込んで、天使界への帰還を拒否する構えでいきたいよな。俺は常に人間たちと共にありたい！

いってらっしゃい、頑張つてねと最高にペロい言葉をかけて手を振って見送つてくれたリツカたんには後ろ髪引かれつつ。リツカたんペロい。リツカたん尊い。リツカたんが応援してくれたんだ、頑張れないわけがないな！ 頑張るか！

だから、これ以上ゆっくりしてちや残りの女神の果実が何かやかすかもしれねえと頭を切り替える。もう既に何か惨事が起きてるかも……と過度に不安がるのはやめておく。そこまで考えても仕方ないしな。

さて。仲間たちがくれたありがたいリツカたんペロみ成分補充期間に今後のことを考えていたが、カルバドの方から見て回ることにした。この前まで灼熱のグビアナ砂漠にいたんだから、いきなり吹雪吹き荒れるエルマニオン地方に行ったら寒暖差で体ぶつ壊しちまわないかと心配になってきたからな……。

砂漠で一番へばつてたの俺なんだけどな！ 情けねえ！ 恥ずかしいなちくしょう

！
とはいえ寒い方は暑いよりは慣れているから大丈夫だとは思うんだが……俺より仲間たちの方が恐らく肉体的に余程頑丈とはいえ、念には念を入れておく。女神の果実に ついての情報が無いのはどっちも同じなんだからどっちから行つたつて一緒だろ？

大雑把でいいからどのあたりにあるのかくらい分からないのかねえ。

もしかしたら、カルバドにもエルマニオンにも女神の果実がなく……あの異変の日に 残りの果実は海に落下していて、途方でもない投網作業が待ち構えているかもしれねえ けど、それこそそんなことは考えないでおく。

もしそうなくても俺はいいさ、何年だつて、何十年だつて、百年かかつたつて上級天 使の言いつけならやれるし、同じことを何年やろうが別に構いやしねえ。ほつといて人 間たちに何か悪影響がある方が嫌だしな。

そうだつたら悪夢なのは優しくも正義感に溢れる信心深い仲間たちに契約解除を言 い渡さなきゃならないのが嫌だと思つた。そりゃ人手が多い方が見つかるのは早いだ ろうけど、広大な海を全部さらうとなると何年かかるか分かりやしねえんだし、まだ人 間としても若い仲間たちをそんな気の遠くなる作業をしてくれと頼む訳にもいかねえ から、そうなつたら天使界から天使を何人か無理やりにも連れてきて一緒にやらせる

さ。みんなに別れを告げてからな。

あと二つの女神の果実を見つけるのは俺にとっては逆らいようのない使命だが、人間たちにとっては関係ないことだ。永遠のような徒労なんて感じさせるものか。

今はまだ、戦いや世界を回ることでも成長にもなるだろうから、俺は甘えさせてもらっているけどよ。本当なら俺ひとりでなんとかすべきなんだよな。なまじ見習いひよつこ天使ゆえに戦闘力的になんとも出来ねえので甘えているんだよな。師匠並みだったらひとりでも良かったんだが。ハゲ師匠はどこにいるんだか。

師匠を見つけたら「女神の果実は海に落ちたのかもしれないよ！」とか大真面目な顔して言ってみるかな。陸地と海の比率を考えたなら残りが全部海の方がむしろ自然だろう。全部海より面積の狭い陸にあると考える方がおかしいよな……見つけ次第、師匠にも海さらいをしてもらうか。俺もやるからよ。まったくため息が出るぜ。使命だろうがなんだだろうが面倒には違いないだろ！

ま、それは残りの地方でも見つからなかったら話だ。まだ諦めはしない。

さて、灼熱の砂漠を突っ切って、船へ。暑い暑い砂漠とはこれでおさらばして海へ漕ぎ出す。地図や太陽で方向を見つつ、遠く見える大陸へ一直線だ。サンマロウ地方とグビアナ砂漠ほどは離れていないし、最初から見えているのはありがたい。海での戦いは誰かうつかり海に落ちないか不安になってくるし、とつと大陸へ着岸しなきゃな。

大陸についたら目指すはヤハーン湿地だ。そこからやや北西を目指せばカルバド大草原に着くはず。天使界で学んできた人間の情報が古くなきや、カルバド草原のどこかに遊牧民がいるはずだ。こつちもまあ、広いし見つけるのは骨が折れそうだが……海をまるつとさらうよりはマシだよな。

遊牧民たちが旅人を歓迎してくれるかは話は別だが……守護天使像もその「遊牧」という特性上なさそうだし、それでも守護天使はいるはずだと思いたいが、像がないならオート天使バレはしないかもしれねえよな。ちよつぴり期待しておく。

「おおー、新天地だ！ すつごくじめじめするね、アーミアスさん！」

「そうですね。俺も自分の足でこの地を踏むのは初めてです。この辺りはヤハーン湿地というそうですよ。ここから北西に進めばカルバド大草原、東の方から橋を渡ればアシユバル地方やエルマニオン海岸です」

「……うーん、知らない地名がいっぱい。覚えられるかなあ」

「実際に目にしてみれば大丈夫ですよ。これまで訪れた場所なら地名を覚えているでしょう?」

「うん! えっとね、セントシユタインから……エラファイタでしょ、ルディアノでしょ、ベクセリアでしょ、ダーマでしょ、ツオでしょ、船に乗って……カラコタでしょ、石のエラファイタに、サンマロウに、この前のグビアナ! いっぱい覚えてるよ!」

「素晴らしい。エルシオンの教師なら、マテイカの地理にきつと満点をくれますね」

「あ、エルシオンはキシユクの、リヨウの、学校だよね!」

「よく覚えていましたね。流星ですよ」

「相変わらずマテイカは癒しだな。これから色んなことを経験するといい。兄妹もこの地方に来るのは初めてらしく、周囲をきよろきよろと見回したり、これまでの地方とはまた違った植生を観察したりとマテイカのように分かりやすくはしゃいでいるわけではないが物珍しそうだ。

「気温は砂漠のように極端ではありませんが、湿度が極めて高く、それによって視界も悪いですね。太陽まで霞んでるように見えます」

「この深い緑の植生。初めて見ます。それに、ここは水辺ではないのに水の精霊が非常に多い。反面、火の精霊はほとんど見られませんか。霧の影響ですかね」

「安直に考えるならそうですね。霧によって私の炎の魔法が鈍らなければ良いのです

が」

「それについては問題ないかと。延焼時間には影響があるかもしれませんが、魔物を焼く威力が減衰する程でしたら上陸した瞬間に私たちはびしょ濡れでしょう。長く滞在すれば話は別でしょうが」

「それもそうですね、兄さん」

なんか頭の良さそうな会話をしているな。確かにここじや長い間火が持ちそうになる。どうか比較的乾燥しているはずの草原まで抜きたいものだ。この湿地帯でキャンプするのは居心地が悪そうだ。朝になったらガトウザーの言うように鎧の下の服までびちやびちやになっているかもしれないねえ。

気温は高くないからプラチナヘルムを被っているが、息苦しいのも問題だ。砂漠よりはもちろんマシンだが……天使でも呼吸は必要だ。飯や睡眠と違ってこっちは完全に「人並み」に必要なのは何故なのか。俺たち天使は翼と光輪以外の外見は人間に寄せているから、人間たちより呼吸が少ないのは見た目で違うから、とかか？ 何だっけいいが。

まあ、我慢はできるさ。ほかの三人は開放的な頭装備だから問題ないだろう。その分防御が不安になるが、俺が仲間たちに飛来する攻撃をすべて防げばいいだけのことだしな。

視界が悪く、足元も湿っていてやや悪い。あんまりペースをあげると危険だろうか

ら、俺はあまり走らないように、と駆けていくマティカをとめた。体にキノコとカビが生える前にとつとここを抜きたい気持ちはわかるぜ……。

「あそこになんかあるよ!」

「本当ですね。かなり遠くに……集落でしょうか……向かいましょう、上手くいけば夜までにはたどり着くかもしれません」

「分かりました! 見える魔物を全部蹴散らして進みますね!」

「索敵はお任せ下さい! アーミアスさんのお手を煩わせる前に弓の餌食にしてやりますよ!」

魔物の強さは……砂漠の方と大幅に異なっているわけではないようです。つまり簡単に蹴散らせるほど弱くもなく、過度に強くもなく。少年が見つけた集落らしき場所に夜までに辿り着けるかは怪しいでしょう。

魔物たちはアーミアスさんを見ても不敬にも向かってきません。これって私たちが弱いせいですよ……。

魔物との戦いは命の危険なくいなせる程度であったのが幸いでしたが、想像通り遠くに見えていた集落にたどり着く前にあつという間に夜のとばりが周囲を覆いました。

「夜だと魔物が強いです。無理に進むのはやめて今日は野宿にしましょう」

聖水のビンを取り出したアーミアスさんが仰つたので、私たちは素直に従いました。星を見て方向を見極めて進むかどうかアーミアスさんは迷われていましたが……集落に着いたからといって休める場所があるかどうかはわからない、とも仰いました。

「聞いた話ではありませんが、カルバドの遊牧民は温和な性格をしているようです。しかしそれでも定住しない彼らに旅人が宿を借りられるかどうかについてはあまり樂觀的には考えないようにします。……でも、明日にはみなさんをしっかりとした屋根のあるところで眠っていただきたいところですが」

聖水に守られた焚き火を囲んで、満天の星空を眺めて。アーミアスさんがそこにいて、兄さんも少年もそこにいて、私にはそれで十分なのですが、アーミアスさんはお優しいのでそれでは不足だと思われているのでしょうか。

眠らなければ、そう思いながら星を眺めているとひとつ、星が流れて。

あつと声をあげようとして、思わずアーミアスさんの方を見ようとすると……もうすつかり朝だったのです。流れた星は夢だったのでしようか、流れ星になって天から落ちてきたアーミアスさんについて調べていたからなのでしょうか。

空にはもう星はありませんでした。

82話 靴下

遠目に見えていたカルバドの集落がだんだんと近づいてくる。空を飛ばば速攻着いただろうが、魔物と戦う必要に駆られつつも仲間たちと一歩一歩大地を踏みしめて近づいていくのはいいもんだ。なんとはなしにしみじみする。

俺の優秀な仲間たちは今日も火力高めで危なげない。パラディンというのは重装備も相まってすつきまじく足が遅い職だが、それを加味してもマティカもメルティーもガトウーザも、殺意が高いというか仕事熱心というか。舞い散る炎、かつとぶ矢、引き裂く刃が道を切り開く。頼もしいもんで、俺は全自動魔物の来世お祈り機構か何かになりかねない。もちろん、最前衛で魔物の攻撃がかわいい仲間たちに当たらないようにはしているが、俺に攻撃が来る前に片をつけようと努力しているのが分かる。

いやはや人間の成長つてのは早いもんだ。まぶしくつてしょうがねえ。きつと人間つていうのは、天使という自分では決して輝けない月を照らす太陽なんだ。俺も頑張つて強くならなきゃな！ みんなに頑張ってもらつてばっかりじゃダメだ！

「みなさんのおかげでもうすぐ到着ですね。予定より早く着きそうです」

「着いたら、いつもみたいにぴかぴかの実の聞き込みするの？」

「ええ。その時は二手に分かれましようか。とはいえ誰も土地勘がある訳ではないので今回は四人で聞いて回っても構わないですが……」

「こうして見たところ、あまり大きな集落ではないようです。今回は全員で聞いて回りませんか？」

まあそれもそうか。あの兄妹はサンマロウからセントシユティンまで二人旅してたくらいしつかりしてるが、だからって毎回放任しなくてもいいよな。逆にマティカだつて一人で行動くらいできるが、俺たちと一緒にいるのを好んでるのはもちろんわかる。

等しく幼く可愛い人間たちだが、毎回過保護にするのも成長の阻害になるかもな。なんて、俺なんかがそんなこと心配しなくたって十分すぎるほどみんな成長していつてるけどよ！ あーもう、人間が好きだ！

過保護がなんだってんだ！ と胸の中で思うくらいは自由にしたいくげだな！ 全人類の面倒を見られるなら見たんだが……。天使の腕が二本しかねえのは神の過ちだろうな。片手に剣を持って、もう片方の手で盾を握っておしまいじゃねえか！

「そうですね。では買物も兼ねて回りましよう」

装備も新調したいしな。新しい武器や防具を揃えられるならそうしよう。備えあれば憂いなしってやつだ。それに誰だつて商品を買った客にはただの冷やかしより口が軽

くなるってmondし、女神の果実の情報を得られる可能性を少しでも増やしておきてえ。

ということであれは普通の旅人らしく集落にゆつくりと足を踏み入れた。

「ここってすつごく風がきもちいいね！　アーミアスさんもかぶと取ろうよお、きつと涼しいよ？」

「いえ……俺は遠慮しておきます」

「えー」

「暑くないんですよ」

嘘はついてねえ。暑くもねえし息苦しくもねえ。それは確かだ。

だが本当の理由は別にある。顔出したらどうなる？　オート天使バレするんだもんだよ！　俺は学んだぜ、これをしつかり被つてたら天使だつてバレないってことをな！

しかもこの大草原はマティカの言う通り涼しい。あの砂漠と違ってどこで被つても命の危険はない。なら飯の時以外はせめて隠すぜ！　頭をしつかり隠すだけで普通の旅人として扱われることは素晴らしい。まるで人間になれたみたいだよお、楽しい。幸

せを感じるんだ。

しかもこの白銀色に輝くヘルムは俺のきつたねえ色の髪の毛まで覆い隠してくれるスグレモノだ。コンプレックスまでどうにかしまうのかよ！ すぎえや！ さらにいえば仲間が贈ってくれたんだ。愛着もすごい。もう外す手はない。可愛い人間が俺のために用意してくれた。そう思い返せば思い返すほどさらに愛おしくなっていくってものだ。顔見えねえし、これ被ってたら多少イケメンに見えねえかな。

もつとガツツリ全身甲冑系で固めたら全身筋肉質なイケメンパラダインに一瞬くらいは見えんじゃね？ 顔が見えていないのにイケメンとは？ という感じだがな、雰囲気イケメンというものも存在する。もし見えたところで残念ながら俺の背はイケメンというほど高くないし、体格がひよろひよろもやしなので本当にただの雰囲気だけだな！

まあ、マティカが言うようにかぶとを取った方が自然なのは間違いないねえ。ぶっちゃけ集落の中でもしっぴかりかぶとを被っているなんてかなり浮いてるのは事実だ。仲間たちはみんな顔を出しているのに一人だけ顔を隠しているなんて、怪しいよな。「なにかやましい事でもあるのか？」とでも聞かれたら大人しく取るか……。

あちらこちらと聞き込みをしながら今日の宿を予約し……ルーラ登録したとはいえ、あまりに短期間でセントシユタインに戻るのはリツカたんに「こいつ、ちゃんと仕事し

ているのか？」と思われる可能性を考慮した結果の完璧な考えによるものだ……カルバド特有の建物、ゲルというんだっけか？ それともパオだっけか？ なんとかというまいるいテントでやっている店で全員分の装備品を検討しながら頭の中で情報を整理していく。

ここまで「黄金の果実」の情報はなかったし、今のところすぐさま魔物がどうのという話もなかった。特別ほかの町と変わった点といえば……なんでもシャルマナという美女が族長のところにいるとか、その美女は呪術がたいそう得意で、美しい見た目だけでなくその神通力あらたかな能力も族長も気に入ったとか、そんな族長の息子は勇敢な族長と比べても残念な程にへたれだとか。田舎らしいといえばそうだが、族長の息子のプライバシーは旅人にまで筒抜けなのか？

いいじゃねえかへたれでも。へたれじゃねえんだ、慎重な性格なんだろ。

あとは……そう高齢でもない族長の妻はすでに亡くなっているとか。後妻にする予定なのかねえ、シャルマナという女は。今のところその魂らしい姿がさまよっているということはないが、夜にもう一度集落を一回りできたら確信できるってところか。

亡くなる時、未練は多かれ少なかれ大抵の人間にはあるものだろう。特に寿命以外で亡くなった場合にはな。だが全部の人間が幽霊になるわけじゃない。肉体を失ってなお、生者と決して話せないのにそれでもさまよう彼らを見るのはなんとも言い難い気分

になる。俺たちの力不足を目の当たりにすると……歯がゆいもんだ、見かけなきやいいんだが。

こんなもんか。あとは族長とシャルマナ、あと族長の息子に会って情報収集は完了だな。会えたらいいが……女王に会うよりはハードルが低いと思いたい……。

「アーミアスさん、こちらの鎖帷子のシリーズはパラディンの装備だそうです。前衛のアーミアスさんが一番防具を固めるべきですのでいかがでしょう？」

「私はあの弓が欲しいので購入してきます。あ！ 私が欲しいので自分で出しますとも！ メルティー、ここは任せましたよ！」

「へえ、鎖帷子のフードと靴下なんてあるんだなあ……あのパラディンのねーちゃんも着てたやつかあ」

「お気遣いありがとうございます。ええと、しかしフードの方はこのかぶとがありますし。今は新調しなくてもいいですよ。」

もし、店の方。足の鎖帷子の方を少し試着させていただけませんか？」

頭はどこまで隠せばオート天使バレの効果があるのか検証できてねえんだ。だからしばらくは現状維持で。

そんでなんだ、チェインニーソ？ 鎖帷子のニーソックス……か？ そんなものもあるのか。人間界は広いな。なんで生足が出る構造なんだろうな。全部覆わせてくれよ。

動きやすいのは間違いないが、なぜだか今装備しているものよりは防御力に優れているようだ。謎すぎる。ニーソつて言うくらいならメルティールとかの方が似合うだろうにパラディン限定装備かよ。

……あのワンピースの下にニーソックスを履いたりリツカたんをつい想像してプラチナヘッドの下の俺の鼻が鼻血を出しそうになりながらも仲間たちの気遣いの塊を汚す訳にもいかないので堪える。ニーソリツカたん!!! ぺろすぎて現実に存在したら俺は星になるぜ!!!

いくらなんでもこれを履いてくださいと頼む訳にも買っていく訳にもいかねえよな!!! ドが付く変態の行為だよなそんなのな!!! でも見てえよ!!! スカートに隠されてるつてのにどうやって俺はニーソツクスって知るんだろうな!!! 知るようなラツキーな風が吹いて俺が無礼を働いた結果なら謝礼しながら両目を扶るが!!! ぺろすぎる。うっかり羽根なし天使・邪になるところだぜ。そのまま爆散! 星になるところでもあるぜ。リツカたんぺろぺろ。

ほら、俺のニーソ姿なんてもはやただの凶器だからな、せめてそう思っただけで現実逃避しつつチェインニーソを購入した。ガトウーザにぬくもりのシャブカという頭を覆う装備やらメルティールやマティカに戦闘用の緑色のタイツを買ったりもした。俺もそっちにしたかったがチェインニーソの方が防御力がちよつと高いらしい。だから素肌が出

ているのに何でだ？

さて、じゃあ次は中央のテントに行くか。お目通り叶えばいいが。

83話 奇

これで聞き込みが済んでいないのは小高いところにある、おおよそ最も大きなテントだけになりました。その集落の族長のものらしきテントの警備は特に厳重ではありませんでしたし、入って話を聞くのはそう難しいものではないはずで、集落の人間は明らかによそ者の格好をしている私たちをやや珍しそうには見ましたが、それまで。

武装も解いていませんが、旅の人間と分かっていればそれを見咎められることもありませんでした。周囲はすべて魔物の住処ですしね。

そういえば、他の大陸からは基本的には海路しかないとはいえ、ここはかの有名なエルシオン学園と陸続きですし、まったく隔絶された土地というわけでもないのが当然とは言えますが。思えばこれまではわりと「都会」と言って差し支えない地域に訪れることが多かったように思います。エラフィタ村などは田舎でしたが大都會のセントシユタインまでもものすごく遠いわけではありませんでしたし。

ですが、またグビアナのように目的の人物に会うだけでアーミアスさんの手を煩わせることがなさそうに良かったです。それに気候もあちらよりいいです。天使さまの世界は空の遙か彼方にあるので、きっとこの大草原のように風通しが良いのでしょう。

アーミアスさんはテントに入る前に少し裏手に回って身だしなみを確認してから向かわれるようでした。皆まねして慣れない草原を走り回って草まみれになった足をめいめい丁寧にはたきます。

「さて、ここでは流石にかぶとは取りますか……」

「アーミアスさん、そのプラチナヘッドを気に入ってくださいで大変私どもとしても嬉しいのですが、そこまで無理に被って下さらなくてもいいのですよ……?」

私は名残惜しそうにかぶとに手をかけた姿を見てつい、差し出がましいことを言ってしまうしました。アーミアスさんは大変に優しいので私どもの贈り物を義理堅く身につけようとなさっているのかと思っただけからです。

しかし。

「あー……」

がぼつとひとおもいにかぶとを脱いだアーミアスさんは珍しく、少し目を泳がせました。

そのふわふわの髪が陽の光に透けて、あたかも星屑のようにきらきら輝くの目に奪われます。夜のとぼりのように黒々とした瞳にはきらめく無数の星が宿り、昼間だというのにアーミアスさんの周囲だけ、美しい満天の星を抱く夜空を彷彿とさせるのです。

この美貌は、この世界の中で恐らく最も星に近いところからいらつしやったからで

しょうか。神々しい美貌は相変わらずで……しかし祈っても救ってはくれず、腐敗した聖職者にさえ天罰を与えることのない神をアーミアスさんに対する誉め言葉に使うのは相当無礼でしょうから別の語彙を探さなければなりませんね。ともあれ、アーミアスさんは今日も儂くも美しいのであります。ああ、私たちを導いてくださる天使さま！「もちろん、もちろん、このかぶとのことは装備品の中で最も気に入っています。これからもそうそうその事実が覆ることはないでしょう。防御力にも優れていますしね。見た目も綺麗ですし。しかしながら……俺がこれを好んで身につけるのは必ずしもそれが理由ではないのです……」

「そうですねですか？」

ガトウーザ兄さんが君主に付き従う騎士さながらに恭しく、アーミアスさんのかぶとを有無を言わず受け取って装備袋にしまい込み、首を傾げます。お手を煩わせることのないように行動するのは大変によろしいことですね。私も何かできるかアーミアスさんの姿を凝視しましたが最早特になんか残念です。

もちろん、アーミアスさんご自分でなんだってやれる方なのでしつかりと見ていなかった私の怠慢です。反省しなくては。

「えー……ううん、なんと云ったら誤解がないのか分かりませんが。その、このかぶとは頭を隠すのにちょうどいいではありませんか」

「はあ……フルフェイスですし、かぶれば頭は隠れますが……」

「ええ。その点が最も気に入っています」

「頭を隠すのが？　なんで？」

「それはもうもちろん、……俺のくだらない自己満足のためですよ」

マテイカ少年が押し黙りました。なんとなく聞いてはいけないような雰囲気を感じ取ったのでしょうか。最も慈悲深き天使であるアーミアスさんの自己満足とは……詳しく聞いてみたいような気もしますが、わざわざ「自己満足」だなんて悪いように取れる言葉を使ってお話してくださいだったので、暗に詮索するなど仰っているのでしょうか。

私どもは少々踏み込みすぎてしまったのかもしれないかもしれませんが、アーミアスさんの機嫌を損ねた様子はありませんでした。いつだって愚かな人間の言動を赦すことに慣れていらっしやるからかもしれません。むしろいつも通りの優しげな口調はことさら穏やかでした。もちろん皮肉めいた風もなく。

誰よりも眩い美しさをお持ちなのに、アーミアスさんは私たちの方を眩しげに眺めておいででした。心の底から私たちを愛してくださいなさっている。それを実感しながら、歓喜の中に後ろめたさを感じます。

だって、私はまだ、ぜんぜんアーミアスさんのお役に立っていません。賢者になることも叶わず、アーミアスさんを完全に守りきることもできず、アーミアスさんの尊いお

役目をお助けすることだってこんなに拙いのです。もつと私に力があれば良かったのですが、つけるほかないのです。

「かつては……翼を持つていた頃は、こうしてみなさん人と会話することさえ出来ませんでしたから、今は十分恵まれています。こちらの姿が見えないというのはとても歯がゆいことでしたよ。そして俺は『それ以上』を望んでいるだけなんです。だからこのかぶとはとてもとても気に入っているのですよ。

……さあ、いつまでも油を売っていても仕方ありませんね。そろそろ行きましようか」

この草原はグビアナより空は広く。遮るものが何も無い日の光を浴びて、この世のものではない、神のつくりあげた美しいかんばせがわずかばかり微笑んで、優しく促しました。

私たちは迂闊にも、私たちをこんなにも愛してくださる天使様の永きの孤独に触れたようで、その罪深さに身震いするしかありませんでした。

「俺たちはしががない旅の者です。族長殿と是非お話がしたいのですが、構いませんか？」
三人の仲間……いや態度からすれば従者と言うべきか……を引き連れた少年がパオの入口付近で集落の人間に話しかけている声が聞こえたので奥に来てもらった。どこぞの格式張った大国でもあるまいし、緊急事態でもない時に礼儀正しい旅の人間と話すことが出来ないほどカルバドは狭量な民族ではない。

しかしながら、いざ近くに呼んでみれば何が「しががない旅の者」だ。明らかにただの旅人ではない様子だった。

先頭にいる灰色の髪をした少年をパーテイリーダーと考えた時、リーダーの背後に付き従っている男女は大変な手練に見えた。

大きな杖を持った魔法使いらしき短髪の女は一瞬たりとも周囲への警戒を怠らず、もし何者かが行に危害を加えたならば何かしらの攻撃的な魔法を放ってみせるだろう。それくらいのことには魔法について門外漢でもすぐに分かるほどだった。そのうえ彼女の目つきは酷く冷たく、仲間以外をなんとも思っていない様子にはつきりと分かる。なお、ちらちらとリーダーを見る目は心酔気味。杖を持っていない方の手は常に手遊びのようにくるくると目まぐるしく何か魔術めいた記号を空中に描き、現れ消えていく光る文字は無為に消えていつているのか、はたまたなにか魔法が静かに進行しているのか。単独でも近寄りが見たい女だった。

女と対になるようにリーダーの背後に付き従う男は対照的に不気味だった。彼は大弓を背負い、四人の中では一番軽装である。見た目だけならばレンジャーだと考えられるが、あのようなレンジャーがいるものか。自然と調和し、動物たちと心を通わせ、大いなる妖精に語り掛ける……そんなレンジャーが真つ当なレンジャーだとしたらこの男は自然の摂理をねじまげ、動物を意のままに操り、妖精すら道具として使役する邪法使いにさえ見える。醸し出す雰囲気だけでも相当なものだったが、男はずっと笑顔を浮かべていた。リーダーを見て心底楽しげに笑い、仲間の女ともう一人の少年をどこか満足気に眺め、時折虚空を見て笑みを深める。狂気すら感じるが……その瞳はどうにも、不釣り合いに理性的だった。

幸いにも、リーダーの少年にぴったりくつついた一番年若い少年はまともそうだった。リーダーと同じように剣を装備し、盾すら持たない左手でリーダーの鎧のインナーを掴みながら怖々と周囲を見回している。しかしながら、明らかに異様な男女の様子は慣れきっているのか何のリアクションもなかった。怯える姿にリーダーは気づいていいのかぼんぼんと頭を撫でた。人見知りなのだろうか。少年はこわごと、しかし興味深そうにそこらを眺めていたが、こちらを見るとすつと表情をなくした。

「アーミアスさん、あの女の人がシャルマナさんかなあ？」

「マテイカ、直接聞かなければ無礼ですよ。憶測で物を語るべきではありません」

「うん。こんにちば、不思議な人！ おれはマティカつて言うの！」

マティカというらしい少年はにこやかにシャルマナに話しかけたが、すぐにはつと我に返つたようにリーダーに譲つた。

「ごめんなさいアーミアスさん、アーミアスさんがお話を聞いてからだよね」

「いいえ。謝る必要はありませんとも。マティカが話すことを遮る権利など俺にありませんからね。」

しかし族長殿にお時間を取らせてしまうのは申し訳ないというもの。手短に。俺はアーミアスという旅人です。これまで世界中を旅してきました。あなたがカルバドの族長ですか？」

アーミアスと名乗つたリーダーの少年は美しかった。シャルマナが人が丹精込めて育て上げられた美しい花束ならば、少年はカルバドの空を彩る満天の星空だった。人ならざる者による最高傑作の造形と言わざるを得ない、その不思議な少年はこちらを優しげに見やり、優美に微笑んだ。

「探し物をしているのです。そしてこれは掛け値なしの警告でもあります……」

身じろぎひとつせずにシャルマナが、よろけるように一步後ろに後ずさつたのをその時はただ不思議に思うのみだった。

84話 演技

なにか、違和感がつのる。しかしそれは不信感ではない。目の前の旅の少年はどこからどう見てもまっとうな人物だろうと思えたし、虚言で集落を脅かすような不審人物だとは考えないが……何か、別の違和感がある。

どうにもちぐはぐななにかがある。喉まで出かかった違和感が、確かにある。

「俺たちの旅の目的は世界中に散らばった『黄金に光る果実』を求めることです。『黄金の果実』とは……一見すれば美しく輝く美味しそうな果実です。が、それは罠であります。今まで口にしてきた人間や、果実の神々しい外見に縋って願った存在は歪んだ形で願いを叶えられ……膨大な力に体が耐えられず、姿が魔物のようになったり、性格が凶暴化したりするなど、不幸になってしまっています。

例えば人々を善く導きたいと心底願っている敬虔な人間でさえも果実を食べただけで邪悪な意思に取り憑かれ周囲の存在を攻撃したり、人間の手のひらサイズの生き物がたったひと口黄金の果実を口にしただけでドラゴンさながらに姿が巨大化、凶暴化したり……そのように危険なものであります。

良き隣人たちがそうとも知らずに不幸になるのを避けたいのです。ここに黄金の果

実があつたならば食はず、願わず。どこかで見かけることがあればこれを念頭に置いて近寄らず。俺は危険な黄金の果実を回収することを目的としています。それが、それ以前にまづはご自衛願いたく」

美しい少年の言葉は、どこに根拠がなくとも不思議と聞き入りたくなるような、説得力が伴つたもののように思えた。彼は非常に真摯に語つたし、真面目な光を宿した目に曇りなどなかった。

話自体は突飛だ。とはいへ、わざわざそのような虚言を流布して回る意味があるだろうか。「黄金の果実」など聞いたことがなかったが、注意喚起ならばまあそうか。回収したいということ……彼の元いた場所にはそれがあつたのだろうか。だが、どちらにせよカルバドに存在しない以上はあいわかつたと返事する以外のことではできない。

その「黄金の果実」は少年の言葉通りならば高価に見える外見をしているようだが、いくら見た目が良いものでもいつまでも青果を飾っていることなど出来るはずもないし、いくら見た目が良くとも金銭的価値はどうだろうか。少年が見つけた頃には腐り落ちているのが関の山ではないだろうか？

さらに言葉通り口にすれば不幸に見舞われるとなれば……その見た目で周囲を騙す災厄の種、といったところか。

少年たちが「黄金の果実」を集めて利益を得ている集団である可能性も考慮したかつ

たが……いかんせん探し物が「果実」である。日持ちするものではないのにそれを慣れた旅人らしい彼らが不安定なそれを収入源とするだろうか？ こちらら遊牧の民である。生活の不安定さについての不安についてはよくよく身に染みている。不安定さに絶るなど、選びたくはない選択だ。

であれば、彼らはそれ以外の理由で警告して回っているのだろう。例えば……その果実を生み出した場所の者である、など。不祥事を揉み消すため、あるいは不祥事を未然に防ぐ為ならばその行動は矛盾も不自然さも無い。

人が異様に良い、ということを除けば。しかし、そのような埒外の「善人」を演じているようにも思えなかった。

「なるほど。忠告感謝する。しかしだ、今のところ『黄金の果実』の話は聞いたことが無い。もちろんすべてのカルバドの民の見聞きした物を把握しているわけではないから、現実とは言えないが……」

「いえ十分です。全員ではないのは重々承知ですが、すでに聞き込みと注意喚起はさせてもらいましたから」

「そうか……して、旅の方」

美貌の少年はこちらから何かを問われるとは思っていなかったのか、不意をつかれたように瞬きした。が、すぐに微笑んで首を傾げる。

ようやく「違和感」の答えを見つけた。

どう見ても彼ははずっと年下の子どもに見えたが、何故か遙か年長者を相手にしているような……不思議な感覚がまとわりついているのだ。小柄な体躯の少年だということに、彼の目を見ていると妙に緊張する。そのちぐはぐさはどこからきているのか。いくら若くして旅をしているゆえに大人びているといっても限度があるだろう。

一種の貫禄がこちらを射抜く。穏やかで、優しげで、それでいて強いまなざし。がたん、と後ろで誰かがつまずいたような音がした。ナムジンだろうか。

「なんででしょうか？ 俺にお答えできることならいいのですが」

彼が気遣わしげにこちらを見上げた時だった。

外が妙に騒がしい。人の声が大きい……いや……これは悲鳴だ！

「何事か！」

「族長！ 魔物が入ってきて暴れだしたべ！」

すっかりと魔物よけはしていたはずだが、どこか手薄になっていたのか？！ 慌てて外に飛び出すと彼らも一緒に飛び出した。それどころかリーダーの少年は仲間に指示を出そうとしながら、本人もすばやく剣を抜く。

戦いに手慣れている、そう思った。魔物のすみかを潜り抜けてここまで来た旅人にして、戦い慣れている。三人の護衛はいるが、自分も戦うのか。

少年の正体がますますわからない。

逃げ惑う集落の人間と勇ましい旅人の姿をどこか他人事のように私は眺めていた。思考が停止している、と冷静な私がようやくやく囁く。そうだ、魔物を倒さなければ。私が出るよりも跡を継ぐ息子に対処させねば……シャルマナは強いが、だからといっていつでも甘やかしてはいけないだろう。

臆病なナムジンをも優しく見守る彼女は好ましいが、次期族長となるならばナムジンもまた強くならねば。

「あれは……マンドリルです！」

「アーミアスさん、マンドリルはご存知の通りかなり凶暴な魔物です！ このままでは人的被害が！」

「攻撃しますか?!」

「おれはいつでもいけるよ！」

「待ちなさい、今攻撃するのは……流れ弾の方がかえって危険かもしれません！ あくまで脅かし、追い払う方向で！」

流れるような指示を聞きつつ、飛び出していく少年の背が小さくなっていく。旅の間に集落の防衛を任せるわけにはいかない、とようやく私は理性を取り戻した。

同時に、猶予も理解する。あの少年たちは腕がたつようだ。ならば最悪の事態にはな

らないだろう。であれば息子の成長を促す余裕がある。

「ナムジンよ！ あの次期族長としてあの魔物を倒してみせなさい！」

「……ボクが?! そんな！ ボクに、魔物を倒すなんて恐ろしいこと、できるわけがない！」

なんと情けないことか。ナムジンは集落の危機だというのに涙目で一目散にテントの奥へ逃げ込んでしまったではないか。しかし息子を叱りつける時間はない。今は魔物をどうにかしなくては。

「まったく……！」

「いいではないか。ほほほ、まだまだナムジンには可愛いところがあるんじゃない」

シャルマナは泰然と笑っている。彼女の視線の先では旅人が魔物の元にたどり着き……。

魔物は、あの美しい少年を見るや、慌てたように逃げ出したのだ。

「ほう……？」

シャルマナが少年を見て意味ありげに眉をあげた。

85話 希望的

逃げてつたマンドリルを見送って、アーミアスさんはほつと息を吐いた。それを聞いて、メルティーもガトウーザも武器をすぐに下ろして走ってきた。おれは最後まで剣を構えてたけど、もうなんにもなかった。

「逃げてくれて助かりました。仮に手負いとなれば何をするか分かりませんし。あのマンドリルに多勢に無勢を理解する知性があつたことは大変幸運なことですね」

「それもこれもアーミアスさんが素晴らしいからです！ 平伏します！」

「アーミアスさんの高い実力あるからこそですね！ 祈ります！」

「ええと、俺の戦闘能力についてはどの程度かご存知のほうですが。どうかその、変な動きはその、控えてください」

「変な動きなどしていませんよ。ただ感動の涙が止まらないだけです」

「これは我が信仰心を具現化した、敬虔者の祈りです。日課のようなものです」

「……」

じゃあどうして、あのマンドリルは人間の住んでいるところに入ってきたんだらう？ 逃げれるくらい頭がいいのに、ゼーンぶ敵しかいないところにわざわざ来るかな？

一匹で？ なんのために？

とつても不思議だったけど、どうしてなんて分からなくておれは何も言わなかった。アーミアスさんも何か考えているみたい。あのマルドリル、ぜんぜん攻撃してこなかったもん。

何か欲しいものでもあったのかな。この集落にしかないおいしいものが欲しかったとか？ わからないや。目的はあつたはずだよな？

「まあとりあえずはよしとしましょう。手分けしてカルバドの集落の方々に怪我がないか確かめましょうか」

「はーいー」

おれはそんなに頭良くないから、考えたつてわかるわけないや。大事なことからきつと頭のいい誰かが気づいて教えてくれる。すっかり他人まかせな考えだけど、だつてただでさえ頭の良くないおれが頭を使つたつて、いっぺんにいろいろ考えることなんてできないから「できること」さえできなくなつてしまっただけなもの。おれ以外はみんな、うんと頭がいいんだもの。

考えるよりも、あつちへこつちへ駆けずり回つてケガ人を探すのはおれにも「できること」だから、やらなくつちや。

でもすぐにわかつた。びつくりして転んじやつた人がいたくらいで集落の人たちは

みんな大丈夫だったってこと。それを一番偉い人……さつき話した人……に報告した
アーミアスさんのことをすぐに気に入ったみたいだった。

「いやはやあの旅人たちときたら迅速で素晴らしい対応だ、シャルマナ。そなたはどう
思う？」

「言うまでもなく。ほほほ……彼らがこのカルバドの住民であつたらと思うほどよ」

アーミアスさんが天使さまつてこと、すぐにわかる人とそうじゃないひとがいるけど
この偉い人はわからないみたいだった。シャルマナさんはどうだろう？　なんとなく、
わかっているのかもしれない。でもイマイチ、どつちかわからなかった。

シャルマナさんはなんだか「違う」んだ。なんだろう。「何」とは、分からないけれど。
きれいな女の人だけど、雨の夜の夜みたいに冷たい目の色をしている。まるで教会から
はき出される時の箒のチクチクした痛みと、ありついた砂交じりの古いパンの味。

ううん、シャルマナさんがそういうことをする冷たい人だとは思わないけど、シャル
マナさんを見ているとなんでか昔を思い出した。泣き虫、ひとりぼっち、親なし、捨て
子。

思い出すだけでマヌケな泣き虫に戻ってしまいそう。おれはアーミアスさんの服の
裾をぎゅつとつかんだ。するとぼんぼんと頭を撫でられる。アーミアスさんは優しい。

そのまま外で立ち話もなんだとテントの方にまた案内された。外国の、お茶？　らし

い知らない味の飲み物を出されて、みんな一息つくと偉い人は大きなため息をついた。「まったく、あなたがたにひきかえ我が息子は。全く嘆かわしい……」

テントの奥の方で頭を抱えてうずくまっていたお兄さんが恐る恐る立ちあがった。黒い髪の毛を後ろで三つ編みにして、帽子をかぶっている。カルバドの他の人たちよりは服が綺麗だなあ。あつ、偉い人の息子だからか。

おれよりはなんこかお兄さんだけど、メルティーやガトウーザよりは年下に見える。アーミアスさんよりは年下だと思ふ。誰だつてそうだもの。見た目だけなら……同じくらいかも。

「もう魔物はいませんか……?」

「いませんよ。こちらに危害を加えることなく、敵となる相手の数を恐れたのか逃げていきましたから。俺たちは居合わせただけです」

「そう、ですか。じゃあ、ボクはこれで……」

それでどっかに行っちゃった。気まづかったのかな。戦うのが怖いなんてそんなに珍しいことでもないし、それにいきなりのことだったんだからそんなに怒らないでもいいのね。外だったらいつでも覚悟があるけど、ここは普通、安全地帯じゃないか。不意打ちのことにそんなに怒るなんて怖いよ。

なんとなく、シンパシーを感じて、勝手におれが言い訳していた。ちよつと分かる気

がしたから。

「なんだかこの偉い人はアーミアスさんに何か頼みたそうにしてたけど、メルティーとガトウーザがとつても睨んでいたら出来なかつたみたい。アーミアスさんは優しいから、頼みつて大抵聞いてしまえばいいよ。誰かが今すぐ危ないとかじゃないければ、なんでもかんでも頼まれたくはないよね。」

「アーミアスさんにはもうやることがあるんだもの。」

偉い人のテントから出て、アーミアスさんは周囲を見回した。太陽はまだ頭の上。さつきよりちよつと暑いけど、涼しい空気がさあつと吹いている。

「さて、まだ日が高いですね。みなさんに余力があれば今日のところはさらにこの地方を探索したいところですが。……お元気そうですね。」

「では、何か心当たりはありますか？」

「はい！ 遊牧民はその名の通り固定の拠点を持たないはず。しかもここまで大きな民族なら狩りのために各地に拠点を作るかと。ここがメインの居住拠点だとすればサブの拠点もあるはずですよ。そちらには会ってない方もいるでしょうし、追加の聞き込みはいかがでしょうか？」

「見識がありますね、メルティー。そうしますか。先ほどの聞き込みで北の方に別拠点があると小耳にはさみましたね。」

「行こう行こう！」

「ええ。」

おや、おかえりなさいサンデー、あなたの探し物は見つかりましたか？ ……そうですね。じゃあ一緒に行きましょう」

みんなで北へ向かう。おれには見えていない妖精さんもいるけれど。

戦いに夢中になって、おれはすっかりそれまで考えていたことを頭の中からどこかによった。

何度目の当たりにしても、人間の思考はあんまり理解できない。やっぱりどうしたって天使と人間は感性が違うから仕方ないのか。そもそもの「違い」を見せつけられていくように悲しいが……。

俺としては、愛しい子らが他の人間に「臆病」と呼ばれる性質メヂでもいいと思うんだが、より長く生き残れそうでお。だが、なぜか一般的な人間は「勇敢」な人間の方を良くとする。「勇敢」な人間とかよ、「臆病」な人間よりすぐ死んじまうが？ 死んじまうく

らいなら「臆病」なくらいでいいよな？　これが考え方の違いってやつだ。

人間の考えもわかる。「勇敢」な人間は他の人間を守る場合もあるし、新しい何かを見つけてくることもあるし、「勇敢」な人間がいたからこそ今、世界中に人間がいるんだらうよ。

だから「勇敢」つてのが悪いわけじゃないけどよ。「勇敢」な人間だって同じように可愛いけどよ！　いいじゃないか魔物と戦いたくなくなつて。

いや考えても仕方ないか。

てか、ここまで幸運にもサクサク女神の果実を見つけてきたけどよ、どこかで見かけたとかいう噂のひとつもないつてことは今回こそそう思う考えていたみてえにこのだっぴろい草原のどこかに落ちてるとかそんなことはねえよな？　カルバドの別の拠点とやらにも黄金の果実の噂ひとつなかったら俺は草原を駆け巡るしかないように思えてくる。先に魔物が拾って食ったらめっちゃ危ないしな……手遅れじゃなかったらいいが。あーやだやだ。考えるだけでおぞましい手間だ。

女神の果実を検知できる魔法でもありやいいのに。確かめるすべがなくて辛い。見つかっていないほかの果実もそうなるつてそうマジで怖い。普通に海に落ちていて魚が食つてたらどうしようか。ぬしさまみたいに運良く見つけられたらいいが、そうはうまくいきそうにない。リツカたん助けて！　俺、過労で星になつちまう！

前途多難、どう考えてもペーペー天使ひとりに任せる仕事量じゃないだろ。せめてほかの天使にも同じ使命を課して区域を分担させて欲しかった。単純に天使手が足りねえよ、どう考えても圧倒的に足りねえよ。なあ?!

だからこそ、師匠が俺に下った命令を聞いてひっそり手伝ってくれていると信じてぞ。師匠はマジで合理的だから、ひよっこぴよぴよ天使にはこの命令がどれだけ荷が重いと分かってオムイ様を見事に説得し、自分も華麗に女神の果実探しに参加してくださっているに違いねえぜ。そこらへんの天使とはひと味もふた味も違う素晴らしいハゲだからな!

無理くりポジティブに自分を励ましていると、遠くになにやら人工物が見えてきた。テントっぽいな、あれか。

「あー! あそこに馬が見える! 人がいるみたいだね、アーミアスさん!」

「目がいいですねマティカ。もぬけの殻でなくて助かりました。それでは聞き込みと参りましょうか」

せめて誰か、少しくらい情報を持ってくれよ。頼むからさ。

86話 疑惑確信

カルバドの別集落に到着しますと、集落の狩人らしき人間二人に羽交い絞めにされたナムジンさんがいらっしやりました。相当に嫌がっているようで、自分よりも年上の男二人を振り払おうともがいています。

嫌がっているのなら止めた方が良いでしょうね。ですが事情も分からないのに部外者が口を出しているのかどうか。判断付きかねて。私は思わずアーミアスさんを見ました。かぶとを被ったアーミアスさんの表情はうかがえませんでしたが。

「あの人、確かナムジンさんというカルバド族長の息子ですね。ご自分から魔物と戦う前線近くに来るような性格には見えませんでした……」

「族長の差し金かもしれないかもしれませんよメルティー。……やはりそのようです。あの後、無理やり連れてこられたようですね。おや振り払った。なかなか活きの良いお方だ」

「精霊がいうならそうでしょう。お話を改めて聞いたら良いのですが……あら、出て行ってしまいました。魔物がたくさんいる外に行くとは。アーミアスさん、追いかけますか？」

あれだけ魔物に怯えていたのです、戦いの経験も少なそうでしたし危険でしょう。優

しいアーミアスさんならきつと彼を助けるよう言うはずだと思つて振り返ると、やはり彼を目で追っているらしいアーミアスさんは走り始めていました。

「ええ。メルティー、目視できる間だけでも彼に害を及ぼしそうな魔物を遠距離から牽制してください。行きましよう」

「分かりました！」

「ガトウーザは彼を害しそうな魔物との戦闘になった場合、初めに狙撃をお願いしますね」

「承りました！」

呼び止めても初対面も同然です。そうアーミアスさんも思われたのでしようか。声をかけることなく、しかし特別気配を消すこともなく追いかけていきます。幸か不幸か私たちに行動は気付かれていないようでした。

彼はさらに北へ進んでいき、そのまま橋を渡っていききました。魔物は幸いにも彼を襲おうとはせず、そのまま橋を渡つて左の方へ駆けていくところで視界から消えてしまいました。視界を遮るものはあまりないのですが、そう派手な色の服を着ていらつしやる訳でもありませんし、その足さばきは巧みなものでした。

……実は実力者なのでは？

「足が早い……精霊によるとこの先に洞窟があるようですね。彼はそこに向かっている

ようです。ただ、目で追えている訳ではありませんが……」

「ナムジンさんは精霊を撒いたのですか？」

「はい。とんでもない人間ですね……」

アーミアスさんがガトウーザの方を見、そしておもむろに、高らかに拍手しました。

「これだから！ 同じ人の理の外にいる者なら分かりませんか？ 人間というのはこれ

だから最高なんですよサンデイ！」

そのかんばせが見えなくても、声色は心底楽しそうでいらつしやいました。

「特定の精霊以外はどうかやら見えないのですが、精霊の皆様方も同意していただけるのではないのでしょうか？ ああ人間ってこんなにも素晴らしい、と！ ああ、サンデイはどう思います？」

そのまま機嫌良さげに彼はずんずんとナムジンさんの消えた方向へ歩いていかれたので、ぼかんと口を開けて呆気に取られていた私たちは、慌てて走って追いかけたのでした。

この麗しの天使さまはいつでも慈悲深く私たちを導いてくださるし、私たち人間のことをこうして心底好きでいらつしやる。私たち人間はいつだって愚かしく、いつだって神の御心に背くことを平気でするような罪深き生き物でありますが。

しかし、もしも神に背き裏切ることがあったとしても、他の数多の天使さまを裏切る

ことがあっても、アーミアスさんだけは裏切りたくないものです。だって。あらゆるアーミアスさんへの敬愛を無視しても、人情として好いてくださる相手のことは大事にしたいものでしょう？

その小柄な、しかし誰よりも広い背を追いながら。私はそう誓いつつ。

「……」

青く、淡く、空気に透けて輝く姿は生身じゃねえ。魂だけになったいわゆる幽霊という存在だ。この世に未練を残した生きとし生けるものの影。そこにいたのは女だった。この時代の死者にしてはまだ若かったが、……いや。過ぎたことを嘆いても目の前の魂を慰めることなんてできやしない。死というものは誰にでも平等に訪れる。それが早いか遅いかは俺たち天使にとっては大した違いじゃない。

とはいえ、まだ年若い……つっても彼女の見た目ではなく俺との年齢比的な意味で……姿の靈魂を見かけるとやるせない気持ちになるもんだ。

俺たち天使は彼ら彼女らに向き合い、その未練に寄り添い、そつと背中を押さなくて

はならない。ある時はただ己の死に気づいてもらうだけでいいし、ある時は少し力を貸して未練を解消するときもある。またある時はただ静かに話を聞く。そして、この大地から旅立っていく姿を、靈魂を見ることを神より赦された天使だけが見守る。

それは俺たちに課せられた使命であり、人間を護ることと同じくらい重要なことだ。

……そういや、前にカラコタ橋ですれ違った少女の幽霊は、あの後天に召されたのかどうか少し気になった。

「アーミアスさん？」

訝しげに、そして心配そうにメルティーが俺に声をかけてきた。

はた目にはいきなり俺が固まったようにしか見えねえよな。心配かけて悪いが、この女の幽霊と会話できるのは天使だけ。いや、幽霊と同じく人の目には映らない存在である妖精や精霊にも見えるんだろうが、彼らがわざわざその気まぐれな風みたいな気遣いを見せて人間の幽霊をどうにかしてやろうと思うことはあんなまねえだろ。

事実、いかにも清纯そうな天使どもだって、幽霊の対処に関しては基本的には「上からの命令だから」動くわけで、そして「より多くの星のオーラが貰えるから」って理由でやっているだけにすぎない。……俺だって。人間たちのことは心底好きだし、何より護ってやりたい可愛い存在だが、やっぱり俺はただの天使で、命令に従っているだけなんだよな。

利害の一致ってやつで俺は幸運だ。まあでも、幽霊は多少ほっといても死なないが、生きてる人間は死ぬから幽霊を相手にするのが消極的になるのは分からんでもない。俺だつて死にそんな人間がいたら幽霊放置するわ。

さて、逃げられたり怯えられたりすることはなさそうだが、繊細な人間の魂を下手に刺激しても仕方がない。どうにかしないと。「未練」はやっぱり、残しちまった者に対してか？

「自分が死んでいるという自覚はなさっているようですね、かつて愛しき人間だった貴女。迷える貴女は……ナムジンさんのお母さまでしょうか」

顔立ちが似ているのは間違いない。その雰囲気も。ナムジンがさつき言っていたようにマンドリルのポギーは亡き母と助けたみたいだし、ふたりの友情を眺めに来た幽霊なんて他にいないだろ。

実はナムジンが有能な少年で、周囲を騙し通してヘタレを演じつつ父に取り入った得体のしれない女の正体を暴き、カルバドの将来を案じていたという素晴らしい行動について改めて賛辞を贈りたいところではあるが。

生きている人間と同じように、すでに死んでいる人間だつて俺は導きたい。その短くもまばゆい人生を終えてなお、行くべきところへ行けない者を正しく神のおわす場所へ導かなくてはならない。

だからちよつとだけ、ナムジンの方の手伝いをしたいという感情はそこにおいておいて。

彼女はしばらく困ったような、悲痛な顔をしていたが。

「私はパール。勇敢なるカルバドの族長であるラボルジュの妻にして、あなたの言うようにナムジンの母です。このままではあの子がシャルマナに殺されてしまう。どうか……どうか、ご助力頂けませんか、天使さま」

……死んでたら顔見えなくてもバレンのな、天使つて。まあいい、この場合は話が早いってことで。

「もちろんですよ。守護天使の名においてあなたの未練を晴らしましょう」

「ああありがとうございます……ここから東の岩山のふもとに、魔物に滅ぼされたカズチャ村という場所があります。そこにはアバキ草という特別な力を持った薬草が生えているのです。それをナムジンに渡してください。あの子なら正しく使えるはず」

「滅んだ村……」

「ええ、そこは。私の故郷でしたの……」

それだけ言い終えて、彼女の姿は消えていた。召されたってわけじゃないだろう。心配でたまらなくてナムジンを追ったのかもしれないねえ。

とりあえず指針は決まったな。幽霊まで警戒しているってことはシャルマナは黒な

んだらう……人目につかないところで何かやらかしたのか、それを見ていたのかまではわからないが。

情報共有したら早速向かうか。シャルマナにナムジンが殺されてしまう、なんて物騒な話だ。日が傾き始めた事だし本当なら明日にしたいところだがそうも言っていられねえな。みんなには悪いが闘志はバッチリあるらしい。目をキラキラさせた三人が俺の言葉をいまかいまかと待っている。

そんなに素直でよくここまで無事に育つたな！ 可愛い奴らめ。

87話 鎮魂歌

草原をぬけ、妙に暗い山岳部を分け入り、獣道になりかかっている街道に行く。周囲は魔物の気配こそ濃厚だが、人の気配はとんとない。カズチャ村というのは魔物の襲撃で今は亡く、再興していないのはつまり今も魔物の危険が去っていないという証左でもある。

魔物側にどんな思惑があつたのか分からないが、せめて村の人間たちの魂が慰められていたらいい、と思う。当時の守護天使は滅びゆく村をどう思ったのだろう。

状況から推測するに、カズチャ村が滅んだのはナムジンの母パルが嫁いでからだろう。パルはナムジンの母親だからどれだけ多く見積つても二、三十年くらい前の出来事、ということになる。俺の時間感覚が天使然としてズレてなきやな。

つまり、当時の俺もウォル口村の守護天使であり、見習いだつた。俺は自分の村でいっぱいいっぱいだと周囲に思われていただろうし、自分の担当区域が魔物の毒牙にかろうとしているとしても……俺が上級天使でも戦力になるのかも分からない見習い天使より師匠のような実力者に助太刀を頼む。

ひよっこに下手に別所の危機なんて伝えて突っ走られたくないし、俺から他の見習い

たちに話が漏れて不安が蔓延しても困る。だから、俺が知らなかったのは理にかなって
いる。
だが。

マジで、当時の天使界に特別な空気はなかった。村ひとつ滅ぼされたのにもう少し
剣呑としていいんじゃないか？ 内々に済ませたのか？ 結果滅んだのか？ カ
ズチャ村の守護天使はどうなった？ ココ最近どこかの守護天使が死んだとか聞い
ちやいねえけど。

なんて、今更ほじくり返したってどうにもならないことだが。近年、人間の村落が滅
んだなんて……俺が天に遣わされる前じゃねーんだぞ。なんで俺は、知らなかったの
か。

「随分、毒沼が増えてきましたね」

「魔物の様相もなんだか草原の方とは違いますね、兄さん」

「カズチャ村は魔物の襲撃で滅んだ村。今も村の内部には魔物が多く潜んでいるでしょ
うし、魔物よけのなくなった人間の村など格好の根城でしょう。みなさん気を引き締め
ていきましょう」

「うん、気をつける」

オムイ様は偉大な方だし、師匠は言わずもがなだし、ラフェット様やほかの上級天使

もみんなその役職に恥じない立派な方なのを知っている。

不信心、など。持つはずもねえ。人間に対する感情の強さなんて俺ごときじゃ敵わないくらいあるに違いねえし、人間大好きアピールをしているひよっこ天使に人間の村がひとつ滅んだなんてわざわざ教えていいことなんてねえし、ウォル口村は平和だったし。

ぐるぐる考え込んでも仕方ない。

向かって来る魔物のみを撃破し、そしてようやく。たどり着いた村の入口。生き残りがいたのか、それとも全てが滅んだあとにカルバドの人間がやったのか分からねえが、そこには結界が貼ってあった。

「魔法でこじ開けましょうか？」

「叩けば壊せるかもしれません」

「斬ろうか？　できるかな」

「ええと」

なんでお前たちはそんなにやる気なんだよ。まずは穏便にだな。

『旅の方。今お開けいたします』

誰かが先走る前にバルが開けてくれた。武器を構えていた物騒な奴らは結界が無くなったのを見て俺の事を見てきたが違い。天使に結界を破る特殊能力なんてねえよ。

出来るやつもいるかもしれねえけど、それは人間と同じで訓練の結果だぞ。

「今のは俺ではなくて、パルさんの力ですよ」

「そうなのですね！ 死者の協力まで仰げるとは流石はアーミアスさん！」

「まったくです！」

天使信者どもには曖昧に頷いておき、とりあえず中の気配を伺ってみる。

明らかに魔物がいるな。素人ではないが凄腕って訳でもない俺でもわかるんだから
沢山いるんだろう。

「外より警戒した方がいいかもしれませんね。それでは皆さん、アバキ草らしきものを
見かけたらすぐに報告してください」

「うん！」

どんな見た目なのか想像もつかないが。見たらわかるものであることを祈ろう。

荒れ果てた集落、我が物顔でかつての人間の家を根城にする魔物たち。

俺は成立理由からして人間寄りの存在だから、どうにも悲しくなっちゃう。襲撃に参

加していない二世以降の魔物からしたら襲撃者は俺たちの方なのにな。だが、どれだけの人間が死んだのか想像もつかない以上同情するわけにもいかねえ。向かってくるならば天に送って来世に期待するしかねえ。

家に入った途端こちらに殺意を向けてきた魔物を斬り捨てつつもそう思う。

「まったくキリがありませんね」

「いくら焼き払ってもここを魔物から解放するのは難しそうです……」

「そこまでは望みません。目的を達成すればすぐに離脱しましょう」

「アーミアスさん！ こっちからもっと奥に行けるみたい！」

正義感バツチリの兄妹とやる気満々のマティカ。長い目で見れば時間に余裕がある俺はともかく、若い人間たちがそんなこと気負わなくてもいいのにな。全部解決したら天の方舟に乗って神の国に行くなんて寝言言つてねえで徒党を組んでどこをどうにかしようぜ。……きつと、ナムジン以外にもあの集落にはこの血を引く人間がいるだろうからな。

幸い、ここは魔物の根城になっているとは言ってもボス的な存在が束ねているわけではないようで、統率もなければ特別な攻撃を仕掛けてくる気配もない。

なるべくすり抜けるように奥へ奥へ向かい、そして程なくして周囲とは気配の違う横穴を発見した。

「ここが最深部のようですね。どこか不思議な……神聖な気配を感じます」
「魔物もいなそうだね」

とはいえ警戒しない訳にもいかんだろ。剣を構えつつ突入すると、そこには。

『あれ、お兄ちゃんだあれ？』

『おや旅人さんかい？ 魔物の襲撃があつたつてのに訪れるなんて運が悪いね。でもここまで来れば安心だよ』

『そうだべ、ここはアバキ草が護ってくれるからな！』

『おびたほしい、折り重なる骨が、』

『怨念はないのに、たくさんの、気配が、子ども骨も！』

『みんな、みんな、ここで死んじゃったってこと？』

俺には骨は見えない。死体の山なんて見えない。ただ、そこにいたのは、そうだ。この規模の集落として平均的な数の人間の幽霊たち。自分の死すら理解出来ず、ここで魔物が過ぎ去るのを待ち続けて死んでしまったたくさんの亡霊たち。淡く青く輝く魂たちははつきりとその姿を映し出し、死に気づく気配のなさを示しているかのようだ。

「失礼、俺は旅の者なのですが。ここにはアバキ草という神聖なものがあるそうですね。ご利益に与りたく、一度拝んでみたいのですが。それはどちらに？」

『奥にあるよ、お兄さん』

『アバキ草が護ってくれるからな!』

『心配しないで、大丈夫よ。すぐにカルバドが助けてくれる』

『パルがすぐにカルバドを説得してくれるべ』

『カルバドに助けを呼びに行った若いのは無事だといけれど』

『お兄さん、都会の人？ 肌が真つ白くて、日焼けしてなくて、いいなあ。なんだかお兄さんの傍は落ち着くなあ』

たくさんの幽霊たちが口々に言う。無垢な目で、俺の事を見ている。

三人の生者たちのことに気づきもしないで、まっすぐと俺だけを。

きつと本当は理解しているんだろう。だから三人の言葉は耳に入らないし、見えねえし、天使である俺のことを本能的に理解してしまっている。あくまで推測だが、悲しいことに否定できねえ。

「アバキ草は奥にあるそうです」

『んだんだ。お兄さんも見ていくべ』

『ちつとくらい触っても平気だからなー!』

彼らの楔になっている、なまってしまっている、アバキ草を摘み取つてしまえば、あるいは。

アバキ草の護りのお陰でここには魔物が入って来れなかった。だが、きつと、助けは

来なくて。彼らは苦しんで死んだかもしれないし、アバキ草が慈悲をかけたかもしれないし、もしかしたら、もしかしたら、護りきれなかったこの守護天使がせめて慈悲をかけたかもしれねえ。

そんなものは、後から来た責任のない俺が勝手に言ってるだけだけどな。

「アーミアスさん、」

「こちらです。着いてきてください」

ピツタリと俺の俺の後ろにくっつけて三人を誘う。きつとこの人間たちは道ずれになんてしないだろうけどな。それでも、きつとここまでの死者を目の当たりにするのは初めてだろう。

奥にあったのは、明らかな魔力を感じる葉草だった。目のような特徴的な花を咲かせた……不思議なそれ。光も当たらぬこんな場所で不気味な程にしつかりと存在している。

だが、きつと。それは祈りで成立しているのかもしれない。霊体のエネルギーには事欠かんだらう。

それを俺は摘み取る。迷わずに手を伸ばし、根元からブチリともぎ取った。そうしなくてはならなかったからだ。

そうしなくては、ならないからだ。

『てんしさま』

子どものような声を聞いて、俺は振り返りたかったが、そんな資格はない。

『ありがとう。パルによろしくね』

パルも、もはや、葬られたあとだということのに、それも知らない。知れない。こうも長く魂だった死者はもう現世で起きた新しい出来事を理解できないだろう。

だから、きつとこれでよかった。

ひとつずつ消えていく気配を感じる。あるべき場所に召されていく魂たち。ようやく進めるようになった魂たち。

俺たちはリレミトで即座に脱出した。

88話 作戦

「……彼らは、恐らくアバキ草の神秘の力で現世に繋ぎ止められていました。俺が最後の花を摘んだことでカズチャ村の住人たちの魂が召されたのは気配でわかりましたので。彼らをきちんと弔う時間がないことは悔しいですが、今は一刻を争います。このままナムジンと合流しカルバドに戻って、シャルマナの正体を暴かなくてはなりません」

「ええ、感傷に浸るのはあと、ということですね」
気丈な言葉だった。でも、間違いなくこの場でいちばん悲しそうなのはアーミアスさんだった。

こみあげる悲哀が、魔物への憤りが、そして恐らくご自分への怒りを必死に押し殺して、気丈に振舞っておられた。

優しい優しい、この世界で最も慈悲深い天使様。兄と少年と私の道しるべ。ああ、その心が常に穏やかである世界であればいいのに。

「あの地震の日から魔物が活発化し、各地の封印が解け物騒になってきたようですが、それ以前からこのような悲劇が起きていたことを知らなかったなんて、守護天使として恥ずべきことなのです……」

独り言のようにそうごちて、地図を広げ、カルバドの集落よりは北に位置している小さな拠点……アームィアさんは聞き込みでその場所を知っていたのか、既に地図に書き込まれていた……を指さされた。

「いくら親子に渡つて友好関係があるとはいえ、あの若いマンドリルが魔物の身であることには変わりありませんから比較的目立ちにくい狩人のパオの方にいらつしやるはずです。休憩もなく強行突破が続いて大変申し訳ありません。この埋め合わせはこの後必ず」

「いいの！ ぼくたち分かつてるから。ね、いこ？ ぼくたち、アームィアさんが守りながら戦つてくれたから全然元気！ 全然怪我してないし、怪我してもすぐ治してくれるしー！」

「そうですとも！ お望みとあらば視界に入った魔物を全て矢で狩り尽くしてみせましょう！ いえいえ、もちろん！ 慈悲深きアームィアさんは敵対行動を見せない魔物であれば見逃されるでしょうから、私の大口叩きに過ぎませんけどー！」

どうやら私も含めてみんな励ますことというのが苦手らしく、だけれども。

アームィアさんには意図が伝わっていて、ほんのちよっぴりだけ、優しい顔をしてくれた。

「なんて頼もしいんでしょう。俺は仲間にも恵まれました」

そして、あとは口も聞かずにみんなで魔物を避けながら走って、走って、急いで、あの悲しい場所から優しい天使様が早く遠ざかれるように走って、無我夢中で進み続けたのでした。

「ああありがとうございます……！」

「確かにお届けいたしました」

小柄な旅人の少年は、歳の頃は自分と同じように見えた。もしかすると年下かもしれない、だけでもその様子からは旅慣れていて。だからその重装備具合を見るとどうしてなかなか頼れそうに思えた。それに三人も仲間を連れている。いずれも善良そうで、草原の魔物たちにもものともしない手練で、それはなんて羨ましいことか。

周囲をあざむくためにうつけ者の演技をすることを選んだのは自分だけでも、……狙い通り味方の油断を誘うことはできても真に信頼出来る人間を見出すことなく切り捨てた選択肢ともいえるから。いいや、ぼくにはポギーがいる。ひとりぼっちではないから、だからこそやっていられるのだけけれど。

「それではこの後はどのようにすれば？」

「？」

「俺にはアバキ草の使い方は分かりません。ですから実行部隊はできませんが、シャルマナの正体を暴いても大人しく集落から去るとは限らないでしょう？ 荒事など何もないことを願いますが、それはあまりにも楽観しているとしか思えませんし。なにか作戦があるのなら従います」

「ありがたいお申し出ですが、どうしてそこまでしてくださいとうと？」

「ある方によろしく頼まれましたので」

「しかし」

頼まれた？ 誰に？ 考えられるとしたら父に？ まさかそんなはずはない。

「まあいいじゃありませんか。使えるものは使っておくべきですし。そうだ、歳上には甘えるものです。それにここまで関わっておいてはいさようならというのも心にしこりが残りますので」

「もう！ アーミアスさんのお優しい言葉に甘えるべきですよ！ 人生に二度とあるかもしれない幸運なのですから！」

「せつかく手を差し伸べてくださったのですから早く感涙しながら取りなさい！」

「えつと、えつと、これまでもこんな旅だったから、気にしなくていいんだよって言いたい。そういうことだよねアーミアスさん」

「ええその通りです」

すごい勢いで押し切られてしまった。しかもポギーもなんだか彼らの味方についている気がする。

本人たちが乗り気でもこれはカルバドの問題だ。そしてシャルマナは少なくとも大手を振って悪を成したわけでもない。表向きは族長に気に入られた魔法使いの女。それだけでしかないのだから、それでも少しの罪悪感めいた気持ちが付き纏った。ただし、ウジウジするのは演技だけがいい。

「それでは、これからアバキ草を煎じてきますので、族長のテントの付近にいていただきます。シャルマナは滅多なことではあの付近から離れませんから」

「分かりました」

彼らは頷いて集落の方へ向かう。そうと決まれば急いで用意しなくては。

……：：：：そういえば、「歳上には甘えるものです」？ 誰かから年齢を聞いたのか？ それとも見てわかったのか、見た目より歳を重ねられているのか。確かに彼の仲間のうちのふたりは見るからに大人だったけれど、彼らは大袈裟なまでに丁寧なアームミアスさんに付き従っている。従者というにしても仰々しい。なにか故郷の立場があるのかもしれない。なかったし、単純にふたりより歳上なのだとか？ まさか、流石にそれはないと思うけれど。彼はどう見たって成長期に差し掛かった少年らしく見えた。

なんにせよ、人は見かけによらないものだ、という言葉は心の中にしまい込んだ。

「あの、彼女の目的はなんだと思いますか？　聞き込みでは前触れもなく現れてそのまま……とのことでしたが」

「さて、俺にはわかりません。例えばあの山の魔物の仲間だということなら恐ろしいことですが、どうやらあそこは特定の実行犯がいたような事件ではなさそうでしたから。今日まであの聖域があったのがその証拠でしょう。どう考えても魔物にとって危険なものであるのに」

「ただ、群れをなして襲われた。不運にも狙われてしまった。増援はなかったか、間に合わなかったか。そういうことですか？」

「ええ、そして統率したのもせいぜいが魔物の群れのリーダーくらいのものだと推測しますが。その方が恐ろしいですね。明確な首謀者がいる方がよほど悲劇の再現性を減らせると思いますか？

……それもこれも彼女をうがった見方なら良いですね」

なるべく主語ナシで話しながらその時を待っていた。何もせずに旅の者がたむろし

ているのは目立つし、四人並んで目に付いたものをスケッチなんてしてみながらよ。なんか……青春つぼくてたまんねえな！

いや、実際は何を書いたっていいわけだし、話し相手のガトウーザなんて話に夢中のあまり鉛筆をぐるぐる回して黒いモヤモヤした球みたいなものを生成しているくらいだが。真つ白な紙を眺めている四人衆にならなければよかったし、まあいいか。

俺も絵心ナシだし、なにか目に付いたものを描こうにも……本当は日々を懸命に生きるカルバドの集落の人間たちの姿を描いてみたいものだが許可なく勝手に描くのもどうかと思うし。ナムジン早く来ねえかなあ。

ペンのおもむくまま動かしていると、なんとなく名状しがたいふにやふにやの線たちがリツカさんの綺麗な目に見えてきた。まずい。リツカさんについて考えるのは俺にとつて平常、この世の摂理とか当たり前のペロリズムだが物体で残すのは日記だけで留めたい。じゃねーとバレルリスクがあがつちまう！ 天使とかいう基本目に見えないプライバシー無視野郎に付き纏われ守護されてたとかリツカさん視点では恐怖しかないんだからせめて隠すべきだ。リツカさんの肖像画を人間の巨匠に大金積んで頼み込み、俺しか見えない空間に飾りたいしそれより本人をペロペロしていたい！

なんて考えていると本当にリツカさんを描きそうだ。あわててそこに存在しないヒツジのようなものを描き足して、グリグリと塗り込むと今度は真つ黒のヒツジになっち

まう。天使の色彩感覚が怪しまれる前にやめた方がいいかもしんねえ。

グルグル毛玉を塗りつぶし続けるガトウーザ、複雑な魔法陣を熱心に書き込むメルティー、一生懸命に近くに生えている小さな草花を写生する真面目なマティカ。誰も景色を見ちやいねえ！

変な一行が怪しまれる前にナムジンたちが姿を現したのは幸運だった。